
いんふいにっと・すとらとす

渡った先は岸の向こう・・・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いんふいにっど・すとりとす

【Nコード】

N3497S

【作者名】

渡った先は岸の向こう・・・

【あらすじ】

このお話は、オリ主（憑依や天性じゃないよ）がみよんなことで未確認不明IS《H-1》を見つけてしまった物語。

IS学園の中、色々なしがらみの中で生活しなければいけないからさあ大変！

笑いあり、涙あり、怒りありの物語。

なお、この物語においてオリ主が原作ヒロインと結ばれる予定はありませんのであしからず。様々な所でフラグを立てているように見えて、違う種類のフラグです。死亡フラグは叩き折るもの（キリッ

2011／12／23―――

奴ら、亡国機関の人間だ

なんだ、やっぱりヒーローじゃないか

それは災難だな

殲滅者

まさか18話が消えるなんて、考えもしませんでしたな

私は日本国春篠宮家長女、春篠宮いずる

貴様は私の物だ

分かった風な口を利くな

頭冷やせ

だってこれじゃ、まるで―――

2011／12／24――

次回、いんふいにと・すとらとす

事件その20 「錬金術師に弟子入りしてたらさあ大変」

2011／12／24――

パンドラの箱が微かに開く

事件その1 「二度目の一年生になったからさあ大変」 (前書き)

この作品は作者の固有結界・・・
臆せず来るなら準備をしてください。

さあ、読者よ。ツツコミの準備は準備は十分か？

事件その1 「二度目の一年生になったからさあ大変」

——とある小隊長の報告書より抜粋

10月21日、0928に開始された正体不明の地震の調査結果。

富士山中において発見された未確認研究施設にて出血していた少年1人とISを発見。

少年は調査の結果、政府機関の研究施設にて臨時アルバイトをしていた学生で、氏名は犀川一真。

一般家庭の長男で、周りからは少し変わっている以外には普通の少年だという。

特に秀でた物はなく、学力も偏差値56と普通、運動神経も平均並みである。

政府の援助を受け青森の公立高校に在学しており、静岡には学校側の研修でやってきたもよう。

在学学科は量子機器機械工学科を専攻。

富士には登山目的で訪れたと研究施設の職員から多数の証言を得ており、未確認研究施設には遭難した折に偶然行き着いた可能性が高い。また本人もそれを証言している。

ISに関しては現在調査中。

少年の胸に食い込むように刺さっており、重要な器官と癒着してしまったため手術により摘出をするまでは確認が不可能である。

確認できる限りナンバリングはなく、ロストナンバーか新たなISの可能性が高いと研究施設は報告している。

少年を殺害し、ISを摘出する案も出たが、文部省の言葉により却下。

摘出可能になるまでは政府機関の監視の下で少年と共に監視を行う。

少年の証言ではISはカプセルに安置されており、少年がカプセルに触れたと同時に発光、以後彼は意識を失ったもよう。

少年が研究施設内にて確認した時間から、少年とISの接触が正体不明の地震の原因と考えられる。

1月15日、1200。

少年がIS適合者との報告あり。

また摘出されたISは少年以外には反応を示さないため、上層部の意向により彼を現時点でIS、《ハスラーワン》の操者と任命する。

今年度からはIS学園にてデータの収集を開始する。

普通の生活がしたただけだ。

誰かのせいばかりする姉と誰かに依存する弟から逃げるために俺は量子機器機械工学科に入った。

将来はISの整備技師になり、一般的な生活を、誰にも頼らない自分を夢見ていたんだ。

特別になんか興味ない。

一番になりたくない。

ただ自分が求める自分になればいい、そう願っていた。

だが、自分は特別になってしまった。

未発表だが、世界で初めての男でのIS適合者らしい。

世間では二人目らしいが、どうやら僅差らしい。

その僅差が、最悪だ。

たった3日程度で世界で初めてになってしまった。

出来れば二人目で、しかも練習機で適合出来れば自慢程度に納めれたのに、俺は未確認ISにのみ適合してしまった。

しかもそのISは日本政府が躍起になっても解けないプロテクトを張っており、さらには自立AIを内蔵していたからさあ大変。

俺は一夜で普通から特別になってしまった。

『マスターカズマ、予定時間ヨリ15分遅レティマス』

「今って何時？」

『0748。始業式開始マデ残り7分』

（終わったな・・・こんな広い敷地から目的地まで7分なんて無理だ）

結局、職員に見つけてもらうまでふらつくしかなかった。

サーカスの熊や動物園のパンダはいつもこんな生活をしているのかと一真は吐き気を我慢しながら席に着いていた。

副担任に連れてきてもらったクラスは自分を除いて全て女子。

世界初の男性IS適合者はここから2クラス先にいるらしく、こういった視線を分ける相手がいない。

さらに一真は本来高校二年、問題なく通っていれば三年生だ。間違っても一年生ではない。

年下しかいない三組での居心地は悪かった。

「次、犀川一真」

「はいっ！」

男子校の癖で声を張ってしまった。こちらを見る視線がさらに強まってしまい思わず赤面してしまう。

だが担任には好印象なのか頷いてくれるのはありがたい。

「犀川一真です。皆さんとは2つ年が違いますが、三年間よろしく
お願いしましゅ」

嚙んでしまった。

「「「・・・」」」

沈黙が痛い。

（死にたい）

二度目の高校デビューは無様に始まった。

年下の女子に囲まれている上に、男子が俺1人という紅一点な

状況が唯一の言い訳材料だが無様には違いない。

「きゃ~~~~年上~~~~っ！」

「しかも眼鏡のインテリクール系でドジ属性！」

「三組で良かった！」

拝啓。

高槻二佐ならびに斎藤整備技師長、お元気でしょうか？

貴方達には大変お世話になり、また恩も感じておりますが、今だけは恨みます。

「これで、これで灰色の青春とはおさらばよ！」

「一組だけ良い思いはさせないわ！」

「えへへへ、お兄様あゝ」

こんな人外魔境に俺を放り込んだことを今だけは恨みます。

年頃の女子特有の甘ったるい匂いに酔いながらのSHRは何とか終わりを迎えた。

これから毎日あの多種多様の匂いの中に居続けなければならないと思うと鬱になる。

現在地は屋上。

階段付近では女子達が隠れもせずはこちらを見つめている。

最悪の気分だ。

「ん・・・」

携帯が震える。

開けば一通のメールが届いていた。

——気分が悪いなら保健室に行くことを勧めます。

差出人はハスラーワン。

人前で喋る事を禁じているため意志疎通は基本的にメールか、ISを纏った時の情報処理でしか許されていない。

理由はAIを搭載したISが現状ハスラーワンただ一機しかないためだ。

「・・・(カチカチカチ)」

——匂いに酔っただけだ。問題ない。

——しかし心拍数、血圧、体温全て平常値より上にあります。

「あんたもこの生徒か？」

——男子校にいたからな。こんな花園みたいな場所は休まる暇がない

——ならば教員に相談してみるのがよいかと。

——女子しかいないので心細いですってか？

「聞ってるか？」

——マスターは現在多大なストレスを蓄めています。それを考えれば打開策は早めに打つべきかと。

——情けないが、ストレスには勝てないし・・・仕方ない、か。

「おい！」

「ん、ああ悪い」

メールに集中し過ぎたために反応が遅れた。

自分に声をかけていたのは学園唯一の正規IS適合者、織斑一夏だ。

「あんた、三組の」

「犀川一真だ」

「俺は織斑一夏。そんでこっちが」

「篠乃之箒です先輩」

一夏の一步後ろにいた少女、箒は礼儀正しく頭を下げる。

「先輩？」

「犀川先輩は17、私達より年上よ」

「す、すいませんいきなりタメ口なんか」

「気にしないでいいよ。学年は一緒だし、同じ境遇だ。まあ三年間よろしく」

「「はい！」」

携帯を開き手早くメールを打つ。

打ち終わるのを待っていた二人に謝り、俺達は自己紹介をしながらかクラスへと向かった。

——打開策はまだいいかもしれない

「では、ここまでで質問は？」

ディスプレイに映る専門用語に関することをノートに取りつつ捕捉すべき場所をテキストから探す。

テキストには様々なメモや赤線が引かれ、時にはポストイットで後の復習に役立つようにする。

（P I Cは浮遊と加減速を可能にするシステムだ。新しい物にA I Cがあったな・・・

パッシブならば自らにかかる情報から逆算し浮遊や加減速するのに対し、アクティブは自らが動くようにしなければならない。

パッシブのメリットは燃費の良さ、アクティブは情報処理の早さか。逆にデメリットだとパッシブは情報処理に遅れがちで無駄が見え、アクティブは操縦者のイメージ頼りになる。

でもだったら・・・どちらも乗せれば、いやでも量子データの容量が・・・）

「何を悩んでいる犀川」

ノートと睨めっこしていた一真を見兼ねた担任が声をかける。

思考を一時中断した一真が顔を上げれば興味深そうに副担任がノートを覗き込み、担任は眉間に皺寄せながらこちらを睨んでいた。

ちなみ副担任が一真のノートを覗き込んでいる理由だが、様々な計算式や文字が書き殴られているためだ。

ほうほうへえと声を上げる副担任を視界に納めながら担任を見る。

「いえ、現在の内容とは関係ないことです」

「ならこれから関係するんだな？」

「私的な疑問ですのではないと思います」

「ほう、興味がわいた。聞かせろ」

「授業後に聞きます」

「今話せ」

担任は腕を組みながら顎をしゃくる。

話さない限り俺は座れないのか、目立つのは嫌いなんだが。

「・・・えーと、関係ないことで申し訳ありませんが質問です。
PICの役目は浮遊や加減速を演算しISの飛行、操縦者へのG軽減に使用されています。発展したシステムにAIICがあり、双方の
パッシブイナードキアンセラ
アクティブイナードキアンセラ
違いはワンクッション置くかどうかです」

一様間違いがあると怖いため顔色を伺う。

「確かに間違いない。

しかしよくAIICを知ってるな」

「知り合いの伝で。

ここでさらに双方の違いは燃費の良さの変わりに情報処理が遅く、
操縦者のイメージ次第では燃費が良く処理も早い」

「ああ。だがAIICは慣れなければまともに使い熟せないシステム
だ」

「そこで単純に考えればどちらも乗せてしまえば早いのでは、と」

「ほう・・・単純だが最もだ」

「PICには常時かかる重力を担当させ、加減速はAIICをしよう
すれば操縦者は情報処理の負担が減る」

「確かに前例が無いこともないが、続きを聞こうか」

「問題点は多々あります。

1つ、量子データを食う。こうなると専用機で無いかぎりは搭載するのは難しい。

2つ、操縦者はそれ以外乗れなくなるのでは。まず慣れたISに搭せれば下手すれば搭乗者が怪我をする。

3つ、専用OSを組みなおさなければいけない。それによりデータに余裕がなければいけない。

まだありますが大きい問題は以上です」

クックツと笑う担任とニコニコ笑う副担任を見ながら早く答えやがれと悪態つく。

周りの視線が痛過ぎる。

「さっきもいったが前例はあった。だがお前が言ったとおり問題点が大き過ぎた。

ハッキリ言おう。未だ完璧な成功例はないだ。

まず、エネルギー効率は理想的になったらしいが操縦者が使いきれなかったらしい。これはお前が言ったとおりだ。

次に、武装が減った。一番マシな物でも刀とライフル、ミサイル数発程度のみしか持てなかったらしい。

最後に、これを忘れていたようだから付け加えよう。コストがバカにならないそうだ。最安値で三千万、最高値は二億になったそうだ」

なるほどと頷きながら俺は着席する。

「私からも質問だ犀川。お前、なぜそんなことを考えた？」

「いえ、なんとなく思いついただけです」

一日の授業を終え、俺は一夏と寮内で別れた。

宛てがわれた部屋は三階の一番奥だ。

一夏と同じ部屋だとばかり考えていたが、どうやら一人一部屋当てられたらしい。

『才疲レサマデス マスター』

「余り喋るな。どこに眼や耳があるかわからん」

『部屋ニハ眼や耳が存在スルノデスカ？』

「例えだ、例え。俺みたいなケースなら監視があってもおかしくないだろ・・・あの実験所のようにな」

鞆から携帯用のUSB電送ケーブルを取出し設置する。

立ち上がったPCは目まぐるしくOSを書き換えていき、俺が部屋着に着替える頃には再起動を終わらせていた。

『これから三年間よろしくお願いします』

滑らかな電子音声に簡単に応えながら段ボールに詰められていたバスタオルを取り出す。

無地の物と流行のキャラ物があつたので無地のバスタオルを出す。

「俺はシャワーに入る。その間は自由にネットを使って時間を潰してくれ」

『了解しました』

ネットの画面が複数開き様々な種類のページが開いては閉じるという作業を見た一真はバスルームへ入る。

（疲れた・・・）

ビクリとするほど熱いシャワーを浴びながら今日一日を振り替

える。

勉強を教えてと話し掛ける子の相手をし、何かにつけて俺の所に駆け込む一夏に笑い掛け、また話し掛けてくる子に愛想を振りまく。

以前いた場所で世話焼きな性格だと笑われては意地になっていたが、今日一日だけで否定出来なくなった。

頬が軽く引き連っているのがわかった。

鏡を見ると見慣れた青年のような自分が引きつった笑みを張り付けている。

「筋肉痛か？」

表情筋が筋肉痛になるのかを知る良い機会かもしれないが、内心の自分は顔を顰めて溜め息をついている。

「何か面白そうな情報はあったかい、ハスラーワン」

『マスターの喜びそうな物はわかりません』

「ならお前が調べた情報を聞かせてくれないか？」

『了解しました』

ハスラーワンから何の役にもたない情報からどこかの国の内政状況、ゴシップ記事やISの情報等・・・

（たかが15分でよくそこまで調べたもんだ）

『以上です』

「お前が気になった情報はあったかい？」

『特にありません』

ハスラーワンの無味蛋白な回答に苦笑しながら適当に会話をし
ていく。

ハスラーワンは会話を続ける事をまだ知らず、大抵が一問一答
になる。

「それでお前は」

「た、助けてくれ一真あああっ！」

「・・・（ガチャ）」

廊下から悲鳴が聞こえてきた。

ベットから立ち上がった一真は素早く扉の鍵を締め、電気を消す。

「開けてくれ、居るんだろ一真！（ドンドンドン）」

『良いのですか？』

「世の中には居留守って物があるんだよハスラーワン」

『居留守。居留守は、何らかの来訪者に対して対応を拒否することだが、当人がそこに居ることを知らせず、相手に不在であるかのような印象を与える行為のことである。』

「居留守」と表現する場合には往々にして、どうやら当人は居るように感じられるのだが、その当人が出てこない場合を指す傾向があり、その場合には「出向いてきた相手（来訪者）への失礼な対応」（マナー違反）とみなされるなど、否定的なニュアンスがある。

しかし「欲しくもない商品売りに来たセールスマン」など望まない来訪者への不快感の表明を含む対応として居留守が選択される場合もある。

ただ、借金の返済で支払督促を無視すると民事上の係争関係に陥るなど、「居留守を使うべきかどうか」も程度問題である』

「説明ありがとう。」

後こういう場合、遠回しな表現として触らぬ神に祟りなしってのがある」

ハスラーワンが諺について検索している間に下着一枚は寒いため段ボールから適当な衣服を探す。

段ボールの中には何故か女性物の衣類と下着があったが、黙って段ボールの底に詰める。

「頼む！頼むよ一真あ！（ドドン、ドン、ドドン）」

ドンドンと叩かれるたびに扉が軋むのが聞こえる。

適当に引っ張りだしたズボンに足を通す。

途中本が落ちたが、暗くてわからないため適当に机に投げ置く。

「喋るなよハスラーワン」

『了解しました』

「頼む！ほ、箒が来ちまう！（ドドスコスコスコ）」

「煩い」

聞くに堪えなくなった一真は鍵を開けると一夏を素早く部屋に引き摺り込む。

一瞬だったが部屋の周りには女子がいたが、部屋内は暗いからよく見えなかっただろう。

鍵を締めてからベットに座り髪を拭き直す。

「た、助かったあゝ」

「ったく、夜中に何騒いでるんだ？」

「いや実は」

続きを聞く前に何かが扉を突き破る音が室内に響いた。

続いて金属がひしゃげる音が鳴ったと思うと室内が明るくなる。

電気はつけてないため大半が廊下の明かりだ。

見ればそこには般若が立っていた。

「いゝちゝかゝ」

腹に響くような声を聞いた一夏が俺の後ろに回り込む。

直接肌を触られているため何とも気持ち悪い高温を感じながらも俺は般若になっている筈を見つめる。

「覚悟し……ろ……」

電気を付けて初めて一真に気が付く筈。

筈の対応は何とも少女らしく、半裸の男を見て顔を赤らめた。

「さ、犀川先輩?!」

一真は立ち上がると黙って筈へ近付く。

顔をさらに赤らめた筈が木刀を突き付けて何か言うが、一真はそれを無視した。

身を固め、眼をきつく閉じた筈の横を通り過ぎた一真はそのまま廊下に倒れている自室の扉を持ち上げた。

半裸の一真に廊下の少女達は騒ぎますが、やはり本人には何も聞こえてないらしい。

「・・・ノブが壊れてる。

しかも蝶番まで歪んでる・・・最悪だ」

仕方なく扉を立て掛けながら室内に入った一真は筈の首根っこを掴むと無理矢理一夏の隣に座らせる。

「説明しろ」

一真の怒りを感じ取った2人は静かに状況を説明していく。

「くだらんことで巻き込みやがって・・・」

「く、くだらない?! 男女が同じ部屋になるのがくだらないってな
んですか!」

「黙れ」

「ひう」

「ま、まあまあ落ち着こうぜ一真」

「あ” あ?」

「なんでもありません」

「箒が頭に血が上ったことは理解出来る。女の子がバスタオル一枚とは言え裸を見られたんだ、仕方ない」

「先輩・・・」

「たが俺の部屋の扉を破った事は仕方なくない」

「うう」

「一夏だって非が無いとは言え許される事じゃないのは分かるな？」

「ああ」

「ならまずやるべき事をしろ」

一真に施された一夏は落ち込む箒に対して深々と頭を下げる。

「ごめん箒！俺の不注意とは言え裸見ちゃった」

「・・・私こそいきなり襲い掛かってごめん」

「許してくれるのか？」

「うん」

良い雰囲気を作りながら一真は引っ張りだしたタンクトップを着る。

ついでに専門誌を取り出すと適当に机の上に広げる。

「問題が解決したなら後は部屋で色々話せ」

「悪いな一真。なんか迷惑かけちゃった」

「すみませんでした先輩」

「気にすんな」

頭を下げる二人に一真は素っ気なかった。

「でもよ」

「気にすんなって言ってんだ。気にすんな」

「・・・」

「今夜はまあ仕方なかったんだよ。ここの大家、いや寮監には俺が適当に言っというてやるから安心しろ」

「ありがとうございます」

「いいよ・・・」

笑う一真に2人も笑い返した。

今日のNG

《災難に災難に災難》

「まったく、初日から寮を破壊したのはお前が初めてだよ犀川」

「すみません織斑先生」

「しかしまた派手に壊したな」

「ちょっと災難に災難が重なってしまいました」

苦笑して誤魔化す一真を見た千冬は笑いながら工具を渡す。

「詳しくは聞かんが、余り周りに迷惑をかけないように」

「はい」

扉を修理する一真を見ながら千冬はテーブルに広げられたテキストの山に感心した。

（やはり学生は予習復習が大事だな）

手持ち無沙汰だった千冬は適当に一冊を手取る。

「っんな？！／／／」

その一冊がまずかった。

偶然にもそれは一真が着替えた際にしっかりと確認せずにおいた本である。

「あー、罅入ってるよ」

金槌で蝶番を整える一真に対し御冬は本を穴が開くほどに凝視する。

「犀川」

「はい？」

「これはなんだああああ！」

「ぐほっ」

御冬の怒号と共に殴り飛ばされた一真は訳も分からず壁にぶつかる。

そして頭を強く打って呻く一真を室内に引き摺り込む。

「神聖な学舎の寮、しかもほぼ女子を占める寮にこんな物を持ち込むとは何事か！」

「うぐう」

「が、学生にとって予習復習は大事だし褒められる行為だが・・・こ、こんな物まで予習する必要はなからう！／／／」

首を掴まれた一真は息が出来ずに何度も彼女の手をたたく。

「げほっげほっ」

「お前が年頃だというのはわかるが、その・・・なんだ／／／」

「一体何なんです」

最後まで言い終える前に一真は彼女の持つ本に目が行く。

魅惑の女教師 艶姿百景

そんな題名と共に綺麗な女性のヌードが映る本が目に入った。

「エロ本？なんで？」

「き、貴様とて男だ！そういうのに興味を持つなどは言わんが・・・
ええい！／＼／」

顔を真っ赤にした千冬は戸惑う一真を殴り飛ばす。

「兎に角！これは没収だ！」

早足で部屋を出ていった御冬は一真直していた扉を乱暴に押しあけるとそのまま自室へと向かったのだった。

織斑御冬、I S 一筋故に免疫のない彼女はそれから悶々とした夜を過ごすことになる。

ちなみにその拍子で蝶番は完全に割れてしまい、その夜は扉もない部屋で一真は寝ることになる。

「・・・ぐす」

さらに付け足すならば、一真はとある2人が来るまで一部の生徒から変態扱いされるのだった。

事件その1 「二度目の一年生になったからさあ大変」(後書き)

とある舞台裏の卓袱台周り。

ここでは一夏、箒、一真が各々お茶を飲みながらくつろいでいた。

箒

「そういえば、A I Cが少し違いますよね、この話だと」

一夏

「そうなのか？俺、まだテキスト読み切っていないからわかんねえよ」

一真

「原作では、A I Cはあくまで慣性停止結界としてしか用いてないな。だが、この話ではA I CもP I Cのように扱われている。それがよくわからないんだろ？」

箒

「はい」

一真

「ずずう……。一夏も語学のために聞いとけよ。」

まず、I C、つまりイナーシャルキャンセラーって日本語でなんて言うかわかるか？」

箒

「慣性中和装置です」

一真

「なら慣性中和装置って具体的に何だと思う？」

一夏

「俺に聞くな。俺は知らないんだぞ」

一真

「はあ、中学生の理科で習うような話だぞ。慣性中和装置、読んで字の通り慣性を中和する装置だが、この装置はISの浮遊や加減速に使われている」

一夏

「よく、わからないんだよな。どうして浮遊したり加減速が出来たりするのか」

箒

「私も理論までは・・・」

一真

「ボリボリ……。難しく考え過ぎだ。まず慣性の法則がわかれば後は大丈夫だ。まあ等速直線運動がわからないってんなら別だがな。慣性中和装置はこの等速直線運動を手伝う働きがある。例えば下にかかるベクトル、重力に対し中和制御をすれば浮くし、前方からかかる空気圧などの力を中和すれば永久にその速度で進んでいられる。原則は自分にかかる力を中和すればいい。単純だろ？」

一夏

「なるほどな。それじゃAICとPICの違いってなんだ？」

一真

「ムシャムシャ……。アクティブかパッシブかの違いだ。PICってのはパッシブ、つまり自分にかかる力を逆算、操縦者の

イメージに合わせ働くんだった。発展形のAICはアクティブ、自分でのように飛びたい、浮いていたい、減速したいというイメージによって直接作用する装置だ。

単純に言う、機械任せか操縦者任せかだ。AICの慣性停止結果ってのはアクティブ、つまり操縦者のイメージを直接作用させることができるから可能な現象だ。もちろんそれ相応の演算や集中力もいるがな、慣れてない奴が使うとまず落ちる。浮遊と慣性停止を同時進行で行うのは相当な訓練か才能がいるってことだな」

箒

「それは私達でも可能でしょうか？」

一真

「出来るが、オススメはしないぞ。使い方を間違えれば人を殺すからな」

一夏

「嘘だよな？だって絶対防御があるんだぜ？」

一真

「絶対防御はあくまで外からかかる力に対して発動する機能だ。力が0でしかない慣性停止には機能しない。

慣性停止ってのは物体の動きを停止させるってことだ。つまりその気になれば原子レベルで加減速も可能になる。それは空気を停止させ、相手を酸欠にしたりも可能だ。もちろん、そんなの生身の人間がしたら脳のシナプスが切れて廃人確定だがな」

箒

「・・・恐ろしいですね」

一真

「理論上でしかない。使用には高度な演算能力のあるPCとそれを行く人間が必要だ。まず今の世の中ではお目にかかれないさ、お前たちはな」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

箒

「そういえば、先輩は誰とカップリングになるんですか？」

一真

「少なくとも、今のところ一夏ラブズとはないな」

一夏

「なんだよその一夏ラブズって？」

一真

「一夏が好きな女の子達のこと。
ちなみに、今のところはほう「わーわーわーわー！」・・・」

一夏

「どうしたんだよいきなり叫んだりして？」

箒

「なんでもない！なんでもないぞ！ははは・・・はあ」

一真

「とにかく、今のところ俺のカップリングはない。告られても全て断るつもりだからな」

一夏

「なんでさ？」

一真

「俺自身が自分のことで手一杯だからだ。それにそれを種に脅されることもある。だから断るという流れだな」

箒

「大変なんですね」

一真

「大変なんですよ・・・」

今日の舞台裏はここまで。

事件その2 「変態扱いされてさあ大変」 (前書き)

この作品はこまけえこたあいんだよ、出来ております

事件その2 「変態扱いされてさあ大変」

居心地の悪い朝食から数時間後の休み時間。

「助けてくれ一真!」

「それで、今度はどーした一夏」

駆け込んできた一夏に対し一真は不機嫌そうに聞く。

「PICって何だよ!AICって何処の組織だよ!」

「煩い」

「痛っ!」

騒ぎ立てる一夏を机に押し付け眠い頭を無理矢理起こす。

「マニュアルは見なかったのか？」

「間違って捨てちゃった・・・後で千冬姉の所に取りに行かねえといけななんだよ」

「ならついでに教えてもらえよ」

「千冬姉はダメだ。千冬姉だと甘えるな！つつってまた殴られる」

「・・・」

「一週間で覚えなきゃいけねえんだ！頼む、このとおり！」

拝み倒す一夏に負けた。

ガリガリと頭を搔きながらそれを請ける。

「だけでもまずはマニュアルに目を通してからな。それで分からなかった場所だけ教えてやる」

「あ、ありがとう！」

一真の手をブンブン振り回した一夏はそのまま上機嫌にクラスを後にする。

（面倒だ）

「あの、犀川さん」

「ん？」

振り返るとそこには数人の少女がいた。

「私達もいいかな？」

「君達も一夏と同じなの？」

「流石に織斑君ほどじゃないよ。ただよく分からない箇所があって」

（先生に聞けばいいのに）

「それにかずーって元々三沢高校にいつて聞いたよー」

（かずーってなんだよ、かずーって）

「三沢高校って確かアメリカ軍の下でIS技師育成もしてるだよね。つまり私達よりは詳しいはず！」

（・・・なんで知ってるんだよ）

内気な少女に抜けた少女、さらには快活な三人組を一真は眼球を揉み解しながら答える。

「・・・後にして。今眠くてイライラしてるから」

「ご、ごめんなさい」

「謝ることじゃないさ。昼休みでいい？」

「うん！」

「ありがとう！」

「お願いー」

（本当に世話焼きな質なのか）

三人組に手を振って席に戻す。

「なになに抜け駆けー？」

「積極的じゃない！」

クラスが騒がしくなる中、一真はウトウトしながら次の授業の

準備をするのだった。

「助けてくれ一真あ！」

「・・・煩い」

「いっでえ！」

次の休み時間に一夏はまたやってきた。

そしてまた机に叩きつけられた。

「今度は何だ？」

「代表候補生ってなに？！」

「それは私が説明致しま——」

「代表候補生ってのは各国の代表になる可能性のある奴ら」

「ちょっと！私を無視して——」

「ちなみに代表候補生ってのはその国選りすぐりのIS操縦者で、大抵が国や企業をスポンサーにつけてる。つまり専用機持ちって事だな」

「そ、その通りです！この——」

「まあ、あくまで候補だ。

元代表兼世界最強の姉がいるお前には実感の薄い話かもしれんがな」

「んなっ?!」

「エリートってことか？」

「エリートだな」

「凄いのか？」

「凄いな」

「常識なのか？」

「常識だな」

「雲の上の住人なんだな」

「天上の住人であるお前ら姉弟に比べれば霞むがな」

感心したり、驚いたり、落ち込んだりする一夏を見ながら貰ったジュースにストローを差し込む。

「むき〜〜っ！」

「ところでこの娘は？」

「あ、俺のクラスメートでセシリア・オルコットだ」

「へえ、始めまして」

「馬鹿にしていますの！」

バン、と机を叩くセシリアを見ながらジュースを飲み込む。

何とも言えない味だ。

（・・・おでん練乳。なんじゃこりゃ？）

「いいですか！私に話し掛けられるだけでも光栄ですのに」

「やるよ一夏」

「お、サンキュー」

「聞いてますの！」

「聞いてます聞いてます」

「むきくくもう本当にむきくくっ！」

「つぶほ、なんだこれ?!」

「きゃっ、汚いですわ！」

蒸せる一夏に顔を顰めながら一真は目を擦る。

三時現目だというのに眠気はまだ抜け切らなかった。

鐘がなったため2人はクラスに帰る。

残ったのはおでん練乳と一夏が噴き出した跡だった。

「・・・飲むか？」

「え、いやその・・・」

「聞いてみただけだよ。」

くくくはあ」

手近にいた顔見知りにおでん練乳を押し付けようとしたが、彼女は顔を赤くしながら口籠もるだけであった。

覚悟を決めた一真はおでん練乳と噴き出した跡を片付けた。

一真は授業を終えるとすぐに前の扉の影に陣取る。

周りのクラスメートは彼が気になるのかチラチラと見ている。

廊下を走る足音を聞くと彼は手首を2、3回スナップさせる。

「ヘルプミーカズ」

「死ね」

クラスに踏み込んできた一夏にブローを放つ。

「ジョナサアアアン」

倒れこむ一夏を椅子に座りながら見下す。

「煩い」

「だって頼れるの、お前ぐらいしかないし・・・」

「少しは自分で解決しようつつう気概を見せろ。男だろ？」

「面目ない」

「・・・んで、勉強、わからない単語、次は何だ？」

「模擬戦をすることになりました」

「・・・あ？」

「模擬戦だよ」

意味が分からないという一真に一夏は繰り返す。

「なんでよ？」

I S 初心者、それも男であるお前がなんでまたいきなり」

「場の流、れ？」

「説明になってない。

お願い篠乃之さん」

「くだらない挑発にのった結果です」

一夏と共にやってきた篠乃之は完結に答えてくれた。

実に分かりやすい男の子な理由だ。

「自業自得でいいんだな？」

「でもよ！あそこまで馬鹿にされちゃ黙ってられるか！」

「じゃあどう馬鹿にされたんだよ？」

「日本なんて文化の遅れた国だーんて言われた」

「誰に？」

「セシリアに」

まさかそこまで高飛車な発言する候補生がいるとは一真も思わなかった。

だがそれでセシリアの株が下がることはなく、逆に一真は心許しても良いと思えた。

「否定出来ないだろうが」

「んな？！悔しくねえのかよ一真！」

「日本の文化なんざ戦争に負けてから無くなっていっただろうが。大量生産大量消費で儲けることを知った日本は物を大事にしなくなった。」

勿論それは悪い事じゃない。日本は大量生産をすることで貪欲に知識を吸収、今では世界有数の技術国だ。犠牲として文化が薄れていったがな。

物を大事にする、それはな高品質って裏返しもあるんだよ。大量生産大量消費で出来た物は大多数のために作られるから劣悪品が多い」

「でもイギリスだって大して御国自慢ないじゃんか。飯はマズいしよ」

「イギリスは文化の国だ。」

ロンドンの時計塔を始め、様々な文化財がある。

現在も昔ながらの製法で商品は作られてるから品質はよく、手作りだから長持ちする。

日本みたいに流行り廃りが余り大きくないからあっちの人間はブランドで物を買わない。安くて良い物を知っていてそれを買う。確かに料理はマズいかもしれないが、それでも立派な国だぞ」

「ちくしょう、一真はセシリアの肩を持つのかよ」

拗ねる一夏に笑いかける。

「持たないよ。持つ理由がない。」

一夏、日本は文化は消えてるがそれでもいい国なのは確かだぞ。四季折々で桜や虫の音、紅葉や雪を見ながら酒を飲む。

寿司や刺身があるから食品の鮮度は高く、また旨い料理はたくさんある。

城や刀、仏閣は日本の文化の中でもポピュラーで外人にも人気だ。どこに不満があんだよ？」

（先輩・・・飲酒は二十歳からです）

「オルコットさんが日本を乏したのは知らないからだろ。お前がイギリスを知らなかったように」

「・・・そうだな」

「ならお前がこれからすることはわかるな？」

「ああ！セシリアに少しずつ日本を知ってもらおうことだ！」

「あんまり邪険にするなよ。彼女だって知らない土地で友人も少ないんだからな」

「ありがと一真！俺、頑張ってみるよ！」

笑顔でクラスを出ていく一夏を見送りながら一真は貰ったジュースの蓋を開ける。

「お兄さんみたいですネ」

「勘弁してくれよ篠乃之。俺は兄貴としては最悪な部類だ」

顔を顰めながらジュースを飲む一真を箒は微笑みながら見ていた。

周りの生徒も一真を見直す。

中には薄ら顔を赤くする者もいた。

（本当にお兄ちゃんみたいだな・・・）

（くうく！あんな風に支えてくれたら私なら落ちてるぜ！）

（あれが日本の伝統にあるツンデレさんなんですねー）

（・・・椰子の実サイダー美味しいな）

クラスに和やかな空気が流れる。

「一真あ！本題忘れてた！」

「っち！」

駆け込んできた一夏に対し一真は大きな舌打ちをして顔を顰めた。

（（（最悪だ～～っ！）））

昼食の誘いを受けた一真はカツ丼定食をもそもそ食べながら話を聞いていた。

「へーオルコットさんと決闘するんだー大変だねー」

（カツ丼美味い）

「だから使い方覚えないとヤバいんだよ」

「・・・（パクパクモソモソ）」

「でもいっちーって一週間以内に教科書全部覚えなきゃいけないん

じゃなかった？やばくね？」

「言うな！もう一真に嫌というほど言われたんだ！」

「犀川君黙ってるけど大丈夫？」

「・・・基本的に食事中は喋らないだけだ。心配してくれてありがたい」とう

和気藹々と話し合う三人組と一夏に対し、一真と箒は黙々と食べ続ける。

（あー居辛え）

一夏達は特に気にもせず他愛ない話をしている中で一真はピリピリした空気に緊張している。

原因は箒だ。

（邪推するなら嫉妬、それ以外は知らねえが居辛いことこの上ない）

いっそ2人つきりにしてやろうかとも考えたが、途中で面倒くさがりやめる。

(箒の問題だしな)

「君、一年の織斑一夏君と犀川一真君よね？」

「え、ええ」

「始めまして」

「さっき話が聞こえたんだけど、私が教えてあげよっか？」

「え、いいんで」

「結構です」

箒の凜とした声が少女の誘いを断る。

断られた側、この場合は一夏は戸惑いながら箒を見ていた。

一真は相変わらずカツ丼をもそもそと食べている。

「でも私、3年だから教えるには最適だと思うけどな」

「結構です。私、篠乃之束の妹ですから」

「う、そ、そう・・・」

少女は咳払いをすると一夏から一真に向き直る。

「貴方はどう？」

「……（もそもそ
んー今の所は必要ない、かな」

「私とはタメだし、やりやすいと思うよ」

「それでも必要ないかな。座学ならありがたいけど」

「そっか……」

「あーでも声かけてくれてありがとう」

落ち込む少女を見て罪悪感を感じた一真は一言感謝を述べる。

それだけで少女は晴れやかな顔になると小さく手を振りながら帰っていった。

「優しいんだね」

「……（もそもそ」

一夏が練習をしている間、一真は部屋に戻ると手早く着替えを済ませた。

扉の修理がまだなのか代わりに暖簾のような布が張り付けてあったため人目を探す事もせずに済む。

携帯のバイブレーションに急ぎメールを確認する。

——外出デスカ？

歩きながらメールを確実に打てる自信がない一真は電話を受けているような真似事をする。

勿論ハスラーワンにはその旨をメールで伝えてある。

「あーもしもし」

『聞コエマス マスター』

「ああ、これから外の本屋に行くよ」

『何故デスカ？』

「いやーやっぱり知らない土地だしさ、興味あるじゃんか♪」

『シカシ 過度ノ外出ハ控エルヨウ言明サレテイマス』

「別に寮生活だからって外出を禁じられてる訳じゃないさ。門限である6・30を守れば上も理解してくれるさ」

ハスラーワンはまだ未成熟、碎けて言うのと融通の聞かないアホだ。

もし今のハスラーワンに打ち間違えた文を見せると理解出来ずに勝手に調べ続ける。

最悪はそれを覚えて日常生活で使用する。

「それよりお前はどうかんだ？」

『ドウナンダ、トハ？』

「調子だよ調子」

『システムオールグリーン イツデモ戦闘可能デス』

「・・・。

元気なのはわかった。まさかそういう言い回しするとは思わなかったよ」

『申し訳アリマセン』

「いいのいいの」

擦れ違う少女達に適当に対処しながら一真は学園を離れた。

部屋に戻ると既に小グループの少女と一夏がいた。

「何故いるし」

「箒がシャワーでトイレ使いたかったんで」

「なら居続ける理由を言え」

「私達は、その約束の分からない場所を聞きに・・・」

「あーはいはい。確かにしたね、そんな約束」

「かずーこそ今まで何してたのさ？」

「本屋とTUTAYAに行ってた。

漫画とファッション雑誌が見たかったからな」

「実家から持ってこなかったのかー？」

指差された段ボールに視線が集中する。

「あれは支給品で、実家からは身一つで来てるんだよ。ちなみに私物の類はない」

中身を漁ろうとする少女を引き止めながら買ってきた本と借り

てきたDVDを適当な場所に置く。

「支給品？」

「そう、支給品」

「実家から送ってもらった物じゃなくてか？」

（正直自分の事を話すのは苦手だし、スルーだなスルー）

一真は上着を椅子に掛けると冷蔵庫から飲み物を取り出す。

「それに身一つってどういう事だ？」

聞き続ける一真に辟易しながら一真は渋々話す。

「お前と違って俺はバックに何もなければならぬ。軍のお偉いさんから誘いに乗ったんだよ」

「え、バックって俺にそんなもの無いぜ」

「織斑先生の事だよ。あの人は伊達に世界最強じゃない。あの人は多分そこいらの企業に声かければある程度の融通は聞くとするぞ」

「千冬姉ってそんなに凄いのか？」

自分の姉の凄さに驚く一夏を見ながら一真は一気にペットボトルの中身を飲む。

（それに比べてうちのは・・・）

眉を顰める一真に少女の1人が心配そうに見上げる。

「さて、勉強を始め」

「うっわ、エロいなこの本?!」

「何をしてる。つか何してんだよ!」

勝手に段ボールを漁っていた少女が見ていたのはエロ本であった。

昨夜千冬により没収された一冊だけでなかったらしい。

「これ本当に支給品なんだよな?」

「殴られたくなかったその顔やめろ一夏。お前らもだ」

ドン引きする一同にショックを受けた一真は証拠だといわんばかり荷物に張りついてた伝票を投げつける。

そこには可愛い字で高槻とかかっていた。

「住所は間違いなく軍のだ。その人もそこにいる」

「しかし、本当に色んな物入ってるねー」

「すっげーこれもしかしてミリ飯？」

「可愛いバスタオルだね、犀川君」

「漁るなアホ共！」

「なんで女性物の下着が・・・」

「やめてくれ！」

その夜は後から来た箒とセシリアも合わせて荷物整理となった。

「先輩、不潔です！」

「わ、私に近づかないでくださいこの野蛮人！」

（ああ、これでまた俺の評判下がるわ）

蛇足だが、ハスラーワンが俺を変態だという物だと覚えたのはどうでも良いことだろう。

近々行われるクラス対抗戦の代表を決める話がH Rで行われた。

なんでも勝てばそのクラスの成績が上がるらしく、クラスの間は勝った後のことを楽しそうに話していた。

しかし一真は冷めていた。

ここで成績が上がっても大学受験に役立つわけでも、また企業の採用試験に有利なわけでもない。

いや、周りの少女達には役立つだろうが一真には縁のあまりない話である。

既にバックに軍と政府と研究機関のいる一真にはテストパイロット、悪意ある人間からはモルモットとしての就職先が待っている。

やる気はおろか、少女達の輪の中に入るのは失礼な気がしてならなかった。

「はいはいーい！私はかずーを推薦しまーす！」

「はあっ?!」

突然のことに叫んでしまう。

周りのクラスメートが驚き一真を見る。

しまった、と振り返った体を戻すと頭を抱えた。

（なんで俺に振るんだよ面倒臭え！）

「まあ、意見は採用するが理由はなんだ？」

「いやー実は昨日かずーから軍に所属してるって聞いたんですよ！それに一組と四組しか専用機持ちっていないじゃないですか。だったらウチも専用機で挑むべきと！」

「だそうだが？」

「なら俺は彼女を推薦し、俺は辞退します」

えー！とクラス中で声が上がる。

「なんでー」

「犀川君ならいけるよ！」

（他人事だと思いやがって）

「いーじゃんいーじゃん！かずーのカッコいい場面見せてよー！」

「確かな軍に所属してるが、俺は実験のために所属してるだけだ。
お前が考えてるようなヒーロー像は忘れる。

それに実力なんて素人同然、下手したら平均以下だったのに他の代
表候補生と戦えってか」

「え、もしかして専用機ないの？」

「とにかく簡単には受けられない」

「ねえねえ、専用機ないの？」

「・・・」

周りのクラスメートが注目する中で一真は静かに座る。

そんな一真を見た担任は溜め息をつく。

「安心しろ。犀川は専用機を持っている」

おー！というクラスの騒めきよりも一真は担任を睨んでしまう。

「一応提出された書類には目を通してはいるからな、誤魔化しは許さ
ん」

「ですが・・・」

「女々しいぞ、犀川。それに我関せずは見過ごせんからな」

「犀川君もクラスの一員なんですから。もう少し輪の中に入りまし
ようよ」

担任と副担任の言葉に折れる。

「・・・立候補がないならば」

「だそうだが？」

担任の呼び掛けに応える生徒はおらず、一真は腹を決める準備
を始める。

「決定だな」

「・・・負けても責任は取らないぞ」

「えー！やるからには勝とうぜかずー！」

「他人事だと思いやがって！」

「期待してるわダーリン♪」

「うっぜえ！後、お前好みじゃねえから！」

「そんな！昨日あんなに熱い夜を過ごした私を捨てるの？！」

「人の荷物漁って熱くなっただけだろうが！」

それにお前らのせいでさらに周りの眼が冷たいんだがどうしてくれるんだよ！」

「男の子なら持ってて当然で行こう！」

「開き直れねえよ！結構傷ついてんだよ！責任取れよ！こう見えてガラスハートなんだよ！」

「そんな・・・こんな大勢の前で告白なんて大胆だわ」

「なにそれ恐えよ！」

一真と女子生徒のコントによりクラスは笑いに包まれる。

「とにかく！やりはしますが、こつちも事情があるため話の種か賭け程度にしてくれ！」

「頑張ってね犀川君」

「へいへい頑張ります。頑張りますよー・・・」

「勝ったら私をやろう！」

「うっしやあ！全力で負けに行く！」

「なんだとー！」

「先生」

「犀川か、何のようだ。さっきの文句なら聞かんぞ」

休憩時間に入ると一真はまず担任に声をかけた。

「軍から提出された資料を見せてくれませんか？」

「どうしたんだいきなり？」

「恥ずかしながら自分のISのスペック知らないもんで」

「なんだそれは？」

「言ったでしょう。俺はあくまで実験で軍にいただけで、専用機も仕方なく与えられただけです。」

さっきは渋りましたが、やるからにはやります。そのためにスペックだけでも知らないイメージが固まらないんですよ」

これは嘘である。

ハスラーワンのスペックなら当機に聞けば一番早いのは一真もわかる。

だが、一真が知りたいのは証されているスペックだ。

つまり一真はここでハスラーワンのリミットを決めるつもりで聞いた。

「・・・まあいい。待っている」

担任は端末を操作しながら一真の履歴書を探す。

見つけた資料だが、本人に開示出来る全てを送信する。

受け取ったデータを確認した一真は頭を下げて感謝を述べる。

「そう言えば、なんで俺の歳や前の高校を知ってる奴がいるかわかりますか？」

「んー、多分だが他のクラスから仕入れたんじゃないか？
ちなみに私は言っていないぞ。それでも本人の了承無しでそういう事は言わん主義だからな」

「そうですか、ありがとうございます」

前々から考えていた疑問は解決したが、問題の解決策は全く無かった。

こうなるとプライバシーの侵害ギリギリまで情報が出ていそうな気になるが、被害妄想かもしれないためやめる。

「しかしお前はあれだ、もう少し協調性を持ったらどうだ？」

「努力はします」

「その歳で人見知り・・・いや、まあ仕方ないか。ほぼ男子校だったようだしな。

それでも少しは壁を取り除け。あんまり壁を作りすぎると居心地が悪くなるだけだぞ」

「・・・」

「履歴書には社会性があり、大人びていて面倒見のいい良い子と書かれていたんだがな」

「はぁ?!」

担任の口から出たとんでもない言葉に慌てて履歴書を流し読む。

確かに担任の言った言葉は一字一句間違っただけではなかった。

（斎藤技師く！あんの嫁ぎ遅れがあ！）

「まあ初めての環境で慣れないのはわかるが、少しは歩みよれ」

「はい」

「お前は顔は悪くないんだから女の一人でも作れ」

「からかわないでください」

一真はハスラーワンのスペックを確認しながらアリーナの隅に座っていた。

軍から出された資料は確りし過ぎていて読み取るのに苦労した。途中からはハスラーワンに協力してもらいスペックを確認していく。

ちなみに目の前のアリーナでは一夏とセシリアが模擬戦を行っている。

（えっと、スペックは・・・）

最高速度は時速398km。

瞬間最高速度は500km。

22.7mmマシンガン。マガジンが4。

肩には大型バズーカとミサイル。

片腕に高周波振動剣《H V V》。

装甲は高硬度で既存のI Sを凌ぐ。

シールドエネルギーは2000。

搭載している慣性中和装置はA I C。

「・・・胃が痛くなってきた」

資料の中のハスラーワンの能力値はそれだけ高いものであった。

日本の打金のコンマ数倍の出力など聞かされていない。

下手したら代表が持つI Sよりもスペックが高い。

ちなみに一夏はセシリアの良的になっており、見るからにシールドエネルギーが削れていっていくのがわかる。

しかも武器の1つも出していない。

見るからに劣勢だ。

——ストレスによる胃痛かと思われます

「ちょっと待てよ、なんだよこの俺T u e e機体。お前こんなハイスペックだったのか？」

——提出された資料はあくまで下方修正されています。確かなスペックを今から表示しますか？

「俺は無双する気なんてない。あれが許されるのは二次元と妄想とそういう小説だけだ。」

スペックはそれでリミットを付けよう。後は俺が付け焼き刃で訓練するしかないな」

——努力という不確定要素は判断材料になりません。

「人間には必要なだよ、不確定要素は」

——理解しかねます

「人間は思考が単純だからな。一度勢いが出れば何でも出来る」

——そのような不確かな戦力を戦場に持ち込むのは危険です

ハスラーワンの言うことは確かに最もだが、それではハスラーワンの為にならない。

否定し、違う解答を提示してさらに求めて褒める。

思考を複雑化させるべきだ。

武器を取り出した一夏がブレードを振りかぶりながら突撃していく姿を見ながら一真は溜息を吐く。

「しかしデチューンされた状態を基本スペックにされてお前は気分悪くないのか？」

「――私には理解不能な思考回路です。私はあくまでマスターの為にあるのですから、私自身どう評価されようとかまいません。」

「まあ、おいおい解ればいいさ」

小さく回避する一夏を見て一真はまた溜息をついた。

「ハスラーワン、一夏のISに繋いでくれ。ボイスチェンジャーとジャミングもな」

『了解しました』

『誰だよこんな時に！っち、近付けねえ！』

通信により聞こえてくる声には余裕が感じられない。

顔を見ればわかるが、どうやら小さく回避していたのは攻撃を目で追っていたためのようだ。

「アドバイスしてやる。敵を中心に大きく旋回しながら避ける。決して綺麗な円は描くな、蛇行するように避ける」

『はあっ?! いきなりなんだよお前!』

「特に虐待計回りがいい。奴はライフルで狙う際に片目をつぶっているからな。

後は苦言だ。お前も男なら良い所を見せろ」

『あら、私を相手にしながら話し合いなんて随分余』

「応援くらいはしてやるよ」

『ちよっ、待ってく』

『私を無視しな』

『貴方、どうして白式に通信』

通信を切ると2人は様々なリアクションを取る。

一夏はセシリアではなく通信を送った相手を探し、セシリアは無視されたのが悔しいのか何か叫んでいる。

(さて、行くか)

模擬戦の結果から興味を無くした一真は席を立つ。

後ろでは一真のアドバイスを従い旋回運動を行っている一夏がいた。

これで少しは良い戦いをすると思はる。一真は思ふ。

一真が帰ると部屋にはさらに荷物が増えていた。

追加で増えた段ボール2つを開けると中には基本的な工具とI
Sに使用する専用工具が入っていた。

他には厚い便箋とCD-ROMがあった。

————一真君へ

お元気ですか？

一真君が居なくなつてからの研究所はなんだとても寂しいと斎藤

技師が嘆いています。

私もなんだか貴方がいない研究所は静過ぎる気がします。

IS学園にいきなり入学させられて戸惑っているかもしれないが、これも君が望んだ未来の為ですから頑張ってください。

君の立場は確かに危うい位置にいますが、高松長官や犀川所長に気に入られている貴方ならそう悪い扱いはありません。

それにIS学園にはどこの国も組織も介入出来ない決まりがあるため貴方は安心して学園生活を楽しんでください。

君は人を惹き付ける魅力がありますから友達には困らないでしょうね。

ただ同時に敵も作りやすいので相手と対話することを恐がらないでね。

手紙の最後に研究所からの指令と注意事項を記入します。

とても重要な内容ですので読み終わったら焼却処分かシュレッダーにかけてください。

後、もう1つの段ボールには君の私物と生活必需品が入っています。

指令 犀川少尉

IS学園での私生活、及び成績を報告せよ。

報告先は高槻二佐。

またそれとは別に特機の性能報告、及び成長を報告。些細な変化も逃さぬこと。

また特機は外部へのデータを可能な限り少なくするため整備は自ら行うこと。

専用整備技師は追って現地へ送る。

最後に、貴官には自動データ収集用の装置を授与する。

データは定期的にやってくる軍関係者に渡すこと。
以上。

「ふーん。これがねえ」

小さなアタッシュケースには腕時計と数個の指輪が安置されている。

日本らしい指輪をつけ、腕時計をつけると複数のディスプレイが一真の前に現れ、何かを立ち上げ始めていく。

——データ送信を確認。受け入れますか？

「ああ・・・いや待て」

一真はデータの受信に対して突然怖くなる。

（下手に開けてウイルスだったら？ いや、下手をしたら盗聴や盗撮の類だったらどうする？

・・・高槻さんに確認取るべきか。間違ったら、俺が終わる）

数分間で考えを纏める。

「まずウィルスを検出。その後に高槻二佐に確認。全て確認してから受信をしろ」

――復唱。ウィルス検出後に高槻二佐に連絡します。

数度の呼び出し音と共に軍の誰かが出る。

聞き覚えのある太い声だ。

「陸軍静岡ＩＳ研究部所属犀川一真少尉です。当研究所におられる高槻二佐に繋げて下さい」

『犀川二佐は現在自室にありますが、急用ですか？』

「はい。当官から指令書とそれに必要なデータ収集媒体が届いたた

め念の為に確認をお願いします」

『了解しました。』

では復唱します。指令書とそれに関する機器装置に関する確認のため高槻二佐と連絡をお求めになる。間違いは？』

「ありません」

『それじゃあ連絡入れてやるから待ってろよ坊主』

先程と違う態度に頬が緩む。

電話先の男性には何度も励まして貰い、一真は彼に対し親しい感情を持っている。

「ありがとうございます」

『かーっ。固い。固すぎるぞ坊主。男で固い必要があるのは腹と息子だけだぞ』

「電話だと緊張してしましまして・・・」

『まあ上官に電話するってなあ緊張するが、お前さんは正規じゃねえし高槻二佐とは仲良いんだからもっと楽にしねえか』

「す、すいません」

『まあお前さんが元気そうで何よりだよ！』

お、繋がったな。代わるぞ』

『もしもし、犀川君？』

「夜分遅くに申し訳ありません、高槻二佐」

『似合わないわよ、それ。いつもみたいに名前で呼びそうになりながら後付けで階級付けたほうがらしいわ』

クスクスと笑う女性の声で一真はスツと体から力を抜く。

ストン、と椅子に座りハスラーワンに周りに誰もいないかを再確認させる。

「それで要件ですが」

『確かに私が送ったわ。ハスラーワンから送られた画像と型式も一致してるし、問題ないわよ』

「そうですか・・・」

ハスラーワン。データを受信してくれ」

『了解。データを受信シマス』

『それで、二度目の一年生はどう？友達はもう出来た？』

「わかりません。まだ俺の中ではクラスメート、もしくは知り合いという枠組みで整理出来てないんです」

『相変わらずガードが堅いのね』

「そうですかね？」

『まあ、急がば回れ。焦りすぎも良くないでしょうし、まあ頑張りなさいな』

「はい」

心許せる相手と話す一真はとても幼い笑顔であった。

本人も知らず知らずに年相応に過ごそうとした反動なのだろう。

彼にしては珍しく饒舌であった。

『そうそう。実家の御両親だけど、心配してたわよ』

「そうですか」

『御両親に何か伝える？』

「心配しないでくれ、後ありがとうと伝えてください」

『わかったわ・・・帰りたくない？』

「特には。帰っても問題ばかり起りますから・・・」

一真は不快そうに顔を顰めた。

『・・・そう。』

あ、そうだ。たまにはテレビ電話で連絡頂戴ね。研究所の人達が寂しがってるから』

「はい」

『何か伝えることある?』

「お世話になりました、と。斎藤技師には嫁ぎ遅れと」

『えーと、彼女が何かしたの?』

「エロ本に女性物の衣類。あれのせいで俺は社会的に死にそうになりました」

『でも男の子には必要だからって言ってたけど・・・もしかして私のじゃダメだった? リクエストあるなら出来る限り協力を』

「いりません! 必要ありません! 遊ばれてるって気付いてください! それになんで高槻さんの下着を送るんですか?! 普通あぁいった類は新品でしょう!」

『えっとね、誰かが穿いていたのだからいいんだって言ってたよ。それも脱ぎたてならなおのことって。』

流石にそれは汚いから洗ったの送ったけど、やっぱり嫌だった?』

「高槻さん・・・俺から見ても貴女は十分に綺麗だし、魅力的です。でもそういうのは常識的にありえないので気を付けてください。後、斎藤技師に追加で伝えてください。そのまま独女のアラフォーまで行ってしまう、と」

その後、一真は高槻から執拗に自分の下着は嫌なのかを問われる事になる。

そしてそれを聞いた一夏達から距離を取られて首を傾げるのだった。

寮内の廊下を一夏と箒は並んで歩いていた。

目的地は一真の部屋だ。

セシリアとの模擬戦に負けた悔しさから少しでもISに関する知識をつけようと一真の部屋に訪れている最中である。

箒は便宜上勉強を教えて貰いにと。

「なんだ、あれ？」

「さあ」

一真の部屋の前には4人の少女達と千冬、山田がいた。

一真のクラスメートの3人に珍しくセシリアに先生2人が雁首揃えて布に耳を向ける姿は異様だ。

「なにやってんだお前ら？」

「あ、いっちょーとしののんか。今面白いから混ざりなよ♪」

「はあ？」

手を拱く少女に対し一夏は意味が分からないという顔をして耳を傾ける。

「一体どういことですか先生？」

「まさか奴はここまで」

「犀川君・・・そんなアブノーマルな性癖があったなんて」

「不潔ですわ不潔ですわ不潔ですわ」

先生達とセシリアは箒の問いに対し何も返さない。

仕方なく彼女も罪悪感を感じながらも耳を傾けた。

「だからあ！脱ぎたての下着を送られても困るんです！」

「「は？」」

「俺が一人暮らししか実家暮らしなら笑ってすましますが、寮暮らしに下着を送るなんてタイミング悪いじゃないですか！」

「え？・・・え？」

「先輩？」

「別に俺は高槻さんを嫌ってません。

けど、俺達は恋仲じゃない。下着を受け取るような間柄じゃないでしょう。変な間違いを持續けなください。
え？私のを捨てるのかって？捨てますよ、当たり前でしょう！」

部屋から聞こえてくる声は誰かと会話しているものだった。

そつと中を覗くとこちらに背を向ける一真が椅子に座っていた。

「だーかーらー！俺達は所詮他人ですよ？なのに・・・一緒に寝たって、あんなのがどう関係するっていうんですか？」

「え、なに・・・これ？」

「さっきからこんな会話ばっかなんだよー。」

私が推測するに、かずーが話してるのは前の恋人。そして今恋人から寄りを戻そうと頼まれてるんじゃない、そう推測するぜい」

「・・・寝たってまさか」

「捨てるって、先輩最低です」

（・・・なんか話が捻曲がってますねー。困った物ですー）

（あれ？下着の話じゃないの？あれ？）

3人の少女と山田を抜かした一同の目は冷めていく。

それは一真を侮蔑しているのだと3人は思った。

「俺は貴方のを必要じゃないですから送らないでください。
え・・・斎藤さんの？なんで斎藤さんが出てくるんですか？」

「なんか違う人の名前出たねえ。もしかして二股だったとか？」

ニシシと笑う少女の言葉に5人の顔に衝撃が走る。

「ま、まさか二股してバレたから捨てたのか？」

「そ、それは・・・まさか犀川君がそこまで」

一夏と山田がひそひそと話すとさらに残りの少女達に衝撃が走る。

「斎藤さんとは確かに付き合っていましたよ。確かに流れて泊まった
り、一緒に寝た事もありますますがそれが何か？」

「ひ、開き直りましたわ！」

「・・・先輩がここまで屑だったなんて」

セシリアと箒が怒りを滲ませながら一真の背中を睨む。

「斎藤さん達は遊びで付き合ってただけです」

「遊びだと・・・！」

（あつれゝ？なーんかヤバくね？）

（犀川君も災難ですねー）

（なんでこうなったのかな？）

一真が電話を無理矢理切るまでの十数分間、彼の株は大暴落し続けたのだった。

事件その2 「変態扱いされてさあ大変」 (後書き)

一夏

「なあ、三沢高校って一真の元居た高校なんだよな。どんな場所なんだ？」

一真

「普通の高校、以上」

箒

「説明になってません先輩」

一真

「・・・三沢高校ってのは日本で数あるISに関する学科を取り入れている高校だ。三沢のほかに、沖縄、佐世保、岩国、横須賀、横田が有名だな。ここでは普通の工業系の他にISに関する科が存在する」

ISの量子回路や電気信号、プログラムを習うIS電気通信科。

ISに使用する部品の製造に関する技術を学ぶIS機械科。

ISの整備を担う人材を育てるIS機械工学科。

一真

「メインの学科は以上になる。

このほかにも色々種類はあるが、まあ蛇足程度でしかない。ちなみに、日本事態もそういったことは押しているんだ。高専や大学、専

門なんかはよく話に出てくるな」

一夏

「なんか凄いいんだな・・・ちなみに、俺は普通科を受けたな」

一真

「俺は機械工学科だ。あそこは就職先に事欠かないからな」

一真

「俺も俺も。やっぱり就職先がしっかりしてないとな」

主人公&ヒロイン 休憩中・・・

箒

「そういえば、前の話で先輩が世界初の適正者という文章がありました。そのあとだったかに世間で二番目とあります。これは間違いですか？」

一夏

「え、そうなのか？ 気付かなかった・・・」

箒

「お前はもう少し確認をしっかりしろ」

一夏

「面目ない」

一真

「ああ、間違いではないぞ。男でのIS適合者は俺が世界初だ」

一夏

「じゃあ、世間で二番目ってなんだよ？ やっぱり間違いなんじゃないのか？」

一真

「間違いじゃない。それで正しいんだ。俺は世界で初、世間で二番目の男性IS適合者になる。これに間違いはない」

一夏&箒

「意味がわからない」

一真

「ただの言葉遊びだ。深く考えるな。」

まず、世界で初というのは俺が一夏よりも何カ月も前に見つかったからだ。事故だったんだがな・・・まあ、諦めよう。とにかく俺が世界で初めて男でISの適正者になった。しかし日本はその情報を開示しなかった。つまり世間という一般市民を対象にした世界に俺は存在しないことになる。

次に、世間で二番目というのは俺の情報が一夏の後に開示されたからだ。理由としては俺のDNAや脳波、身体構造なんかのデータを独占するためだな。そのため俺の情報は日本では極秘事項だったんだが、情報漏洩により世界に洩れた。もちろん、この時も世界はそれを黙認した。理由としては、俺を誘拐した際に面倒が付きまとうからだ。顔も知られていないガキ一人を誘拐するのは簡単だ。だが、顔が割れてしまえば攫った際にすぐばれる。そうならないため

に世界は黙っていた。そして一夏、お前が出てきた」

一夏

「受験の時だな」

一真

「ああ。あの時、一般的な情報として男でのIS適合者が現れるという情報が出回った。そして日本はそれに続けるように俺の情報を開示し、世界中の動きを牽制した。ちなみに、名前も顔も住所さえも全て出してないけどな」

一夏

「俺、全部出されたぞ」

一真

「俺はH-1の適正者だからな。あんまり大々的には情報を開示して注目を集めたくなかったんだ。お前は俺の隠れ蓑として使われたんだよ」

箒

「汚いですね」

一真

「俺としてはありがたいよ。それでも一夏が出てくる前はとてもじゃないが普通の生活が出来なかったからな。今でこそ沈静化しているが、向こうからのアクションはまだ続いている。もし名前や顔が出れば企業なんかも出てくる・・・それは俺も面倒なんだ」

一夏

「大変なんだな」

一真

「ああ。それでも誘拐がなくなっただけマシってものだ」

箒

「あの、一夏は大丈夫なんでしょうか？」

一真

「問題ないだろ。一夏は千冬さんの弟だ。あの人はドイツの他にも色々コネがあるから、簡単には手が出せないんだ。出せば千冬さんに恩を売るために周りが攻撃してくる。一種の膠着状態が続いてるってことだな」

主人公&ヒロイン お茶菓子をボリボリ・・・

一夏

「そーいや、一真のIS、H-1ってその携帯か？」

一真

「秘密」

箒

「違うんですか？」

一真

「秘密」

一夏

「意地悪いぞ、一真」

一真

「極秘事項ですから。知りたきゃ少将クラスになってから出直してこい」

一夏

「・・・」

箒

「・・・話は変わりますが、ACもクロスしてるんですよ、この世界では」

一真

「機体はあまり出てこないけどな」

箒

「企業は存在するんですか？」

一真

「存在するよ。有沢だけだがな」

時間により今日の舞台裏はここまで。

事件その3 「人間のクズ扱いにされてさあ大変」 (前書き)

この小説は悪夢と妄想と外宇宙の神々の悪意とムチムチニャルさんの悪戯によるSAN値を削るような内容になっております。

チャー研MADが見れないような方はお戻りすることオススメします。

事件その3 「人間のクズ扱いにされてさあ大変」

クラスに着いた生徒に対して向けられるべき言葉はおはようだ。

「裁きの時間ですわ！」

決して罰せられる間際の言葉出はないはずだ。

「・・・ああ？」

扉の前で待っていただろうセシリアは指を指していた。

顔は怒りに歪んでおり、それが唯事ではないと何となく察せられる。

「人間の屑とも言える貴方を、私自ら罰しますわ！」

（俺、何かしたか？）

自分の高説に酔い始めるセシリアの横を通り過ぎ、席についた一真は頼杖をつきながら昨夜以前の記憶を遡る。

「貴方のような屑がいることを知りながら放置するなど、たとえば日本の天皇が許しても私は許しませんわ！」

（・・・もしかして無視したこと怒ってるのか？）

「高貴なる私が貴方のような下賤な屑と口を利くだけでも生理的に受け付けませんが・・・私はイギリス代表候補！」

（見るからにプライド高そうだからなあ）

「文化と礼節を重んじるイギリスは貴方のような屑を許しませんことよ！」

女王陛下に代わり、私自ら裁きを与えます」

（眠い・・・）

「聞いていますの！」

バン、と机を叩かれた事で体がビクリと反応する。

「俺、オルコットさんに何かしたか？」

「私にはしておりません」

「じゃあ何で俺は罰せられるんだ？」

「自分の胸に手を当て！主に誓って貴方は罰せられる謂われないと申しますの！」

言われた通りに胸に手をあて、罰せられるような事を思い出す。
だが、出て来るのは

「・・・少なくとも罰せられるような覚えはない」

一真のその一言でセシリアの手が動いた。

パン、と渴いた音がクラスに響く。それだけでクラスは人がいないのではと思わせる程に静まった。

「この手は何ですか？」

セシリアは自分の顔に近づいた手を睨み付ける。それは一真の手だ。

セシリアに叩かれたと理解する前に一真の手は動いていた。辛うじてその手は止まるが、それでも凍り付いたクラスの空気は変わ

らない。逆にさらに凍り付いてしまう。

「…………ふう。

叩かれた事に関して聞くけど、俺は本当にこれに値するようなことしたのか？」

そういつて指差す頬は真赤に腫れている。

「それでも足りないくらいです。貴方は2人の女性を傷つけ、そして責任を放棄した……今すぐこの学園から叩き出したいくらいですわ」

「…………よく意味が理解出来ねえんだけど、2人の女性ってはお前と誰だ？」

「私ではありませんわ。高槻さんと斎藤さん……理解しましたか？」

「いや、さらに意味が分からなくなった。なんでそこであの人達の名前が出るんだ？」

「…………あくまで白を切るなら他の方にも聞いたらどうですか？
ねえ、一夏さんに篠ノ之さん？」

クラスの外に居ただろう2人を見た一真はその目に驚いた。

冷たく、怒りを感じさせる目だ。

今朝方に声をかけた時の嫌がる顔じゃなく、明確な嫌悪と侮蔑の顔を2人は浮かべている。

「見損なったよ、一真」

（説明してくれよ）

「・・・」

「篠ノ之さんも同意」

「私に話し掛けるな。虫酸が走る」

（・・・やべえ、涙出てきそう）

2人からの明確な拒絶は一真の心を深く傷付けた。

顔にこそ余り出ていないが、彼の目は少しずつ潤んでいく。

「今日の放課後、アリーナで待ってますわ。そこで貴方を裁きます。まさか専用機を持ちながら素人とは言いませんよね？」

（素人です、とは言わせてくれない空気）

「信じてたのに・・・失望したよ一真」

「・・・」

吐き捨てる一夏と見下す箒を連れてクラスを後にしたセシリア達を見ながら一真はツーっと流れた涙を拭う。

（やっぱり結構キツいな、こういうの。
しかしまたなんでこんなことになった？）

解消されない疑問に一真はモヤモヤした気持ちのまま授業を受けた。

一現目、二現目共にクラスの空気は最悪だった。あんな事があった後だからと一真は思ったが、それが三現目の休み時間までとなると我慢の限界を迎えた。

逃げるようにクラスを出ていく一真を見ていたクラスメート達は様々な思いであった。

心配する者、不審がる者、邪推する者、見下す者、好奇心を持つ者・・・それらの視線が視界に入った一真は唇を噛み締めながら屋上へ逃げるように走った。

「あークソ、泣きそうだ」

一真は自らが言った言葉を実践するようにフェンスに寄り掛かりながら膝で涙を拭う。

「――大丈夫ですかマスター？」

「大丈夫、じゃない。精神的に結構キツイよ」

「――肉体的に問題はありませんか？」

「人間はな、精神の状態が肉体に作用する生き物なんだよ」

「――非効率です。」

「俺も、そう、思う・・・」

俯いていた一真は足下に影さしているのに気が付いた。

顔を上げるとそこにはクラスメート3人がいた。

「・・・あー、何か俺に言いに来たのならまたにしてくれ。見ての通り結構参ってるんだ」

「違うの。私達、ちょっと犀川君に確認したいことがあって」

「確認？なんの？」

「犀川君、昨日部屋で電話してたよね。時間的には九時過ぎかな」

「・・・どこまで聞いてた？」

「なんか下着がどうのって話から最後まで」

それを聞いた一真は安心した。

もし最初から聞かれていたら機密漏洩による罰則が適用されかねない。

「それでね、その犀川君がその捨てるってのは、下着なんだよね？」

「確かに下着は捨てるって言ったね。まあ明日速達で送り返すけど」

「それでさ、かずーって高槻さんと斎藤さんとはどんな関係なのさ？寝たってマジ？」

「あーだからアイツら2人の名前出したのか・・・
ちなみに寝たときかれたら寝たよ。あの人達の部屋と格納庫で」

「ええ?! マジかよかずー!」

3人が驚くのを見て一真は顔を顰める。

「仕方なかったんだよ。連日連夜の実験で、その中に体力測定や模擬戦も含まれてたんだ。落ち着いた頃からは斎藤さんに頼んでISの整備教えてもらってたんだから。疲れ切ってその場に寝たり、運ばれたりしたのがそんなに悪いことかよ?」

「え? 疲れ切って、え?」

「なんだよ。倒れた俺を高槻さんが自室に運んで寝かせてくれたり、斎藤さんとストーブ囲んで寝た事の何が悪いんだよ?」

その言葉に3人の顔色が変わるのを一真は見逃さない。

訳も分からない現状、例えそれが気のせいでも一真は過敏に反応してしまう。

「全て話せ。お前らがなんで昨夜の事を知ってるのか、なんでそれに反応したのかを」

一真が本当の意味でキレた瞬間である。

一真は屋上で頭を抱えながら買ってこさせたカツサンドを食べ続ける。

昼食時のこの時間に食堂に言っても周りの視線が面倒なため彼は屋上で食べている。

ちなみに周りには仲良し3人組がいた。

「いやー、かずーって怒ると相当怖いね」

「ああ？」

「ご、ごめんなさい」

気軽に言うクラスメートを睨み付けながら一真は痙攣する眉間を揉み解す。

「盗み聞きするだけならまだしも、話を誇張させた上にとんでもない勘違いを産みやがって・・・」

「悪かったって言ってんじゃーん」

「その口、布団針で縫われたくなかったら暫く黙れ」

「怖っ。真顔で目が座ってるから余計に怖っ！」

「大丈夫なんですかー？」

「大丈夫なわけないだろ。隠す意味もないから言うが、泣いてたんだぞ。かなり精神的に参ってるんだよ」

「いえ、模擬戦の話ですよー」

「・・・」

「セシリアさんって代表候補だけど、犀川さんはどうなんです？」

「どうなんですか。力量は大丈夫。」

「一真の顔色は悪くなり、頭はさらに痛む。」

「・・・頭が痛い。休む訳にはいかないし、参ったな」

「専用機はあるんですよね？」

「あるにはあるが、実戦なんて初めてだ」

「軍ではなかったのー？」

「あそこは実験オンリー。勝たず負けずで俺の実力を引き出す目的だったからISでの実戦は素人以下だ」

「装着と歩行と飛行が出来れば大丈夫ですよー」

「一夏は大丈夫そうじゃなかったがな」

「織斑君は二回しかIS装着してないから、仕方ないよ」

「・・・あれ、もしかして年上としての沽券に関わる？」

一真は金槌で殴られ続けるような痛みを感じたのだった。

アリーナに到着した一真は嫌な顔隠さずにカタパルトの上にいた。

ディスプレイには既に準備を整えたセシリアが映っている。

後に退けないこの状況、手足が知らず知らず震える。

「・・・逃げたい」

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！」

「よく知ってるな、お前。それって俺らの親世代のアニメだぞ」

「アニメは日本の文化だ！当然の嗜みだ！」

「あーなんかお前の将来が心配になってきた」

「オタク仲間のかずーがいれば問題ない！」

「否定はしないけどな」

「犀川、準備を始めろ」

カタパルトの準備が済んだことを知らせる担任の声に一真は息を深く吸い、吐く。

震えはまだ止まらなかった。

「さ、犀川さんのI Sスーツって変わってるんですね！」

「・・・実験段階の試作品だからね」

「全身を覆うタイプって初めて見たー」

全身をピッチリと覆うISスーツが珍しいのかカタパルト内の視線が一真に集中する。

恥ずかしげに少し身を振らせたを見て誰かが笑い、一真も笑う。

震えは、まだ止まらない。

「ハスラーワン、テストモード起動」

一真の命令を受け付けたハスラーワンはISを一瞬で装着させる。

全身を覆う正にロボットのようなボディーマーは紺色の光を放つ。

暗視ゴーグルを取り付けたようなヘッドギアで各部を視認にする一真を周りはジッと見つめる。

「それがお前のISか」

「ええ」

「全身装甲みたい」

「ああ、しかもかなりスマートだぜアレ」

「なんかどこのISにも似てませんねー」

モノアイから取り入れられる情報とハスラーワンから送られる情報を確認しながら機体制限を確認していく。

【オニキスの制限を確認。

全体出力を70％に制限。エネルギー兵器を実弾兵器に変更・・・終了。

続いてOSの書き換え開始・・・終了。

システムオールグリーン・・・テストモード開始します】

頭に流れてくる声に頷く。

カタパルトに乗った一真はもう一度息を吸い、吐いた。

震えは、止む気配を見せなかった。

「犀川一真、これより模擬戦を開始します」

「男らしい姿を期待している」

担任の声を合図にカタパルトが一真を射出する。

宙に放り出された一真は機体制御をしながらゆっくりと地面に

降り立つ。

それは誰もが眉を寄せるような行動であった。

『何故飛行しませんの？』

「宙空状態から始まるルールはないし、いいだろ」

『まさか飛行が出来ない、なんて申しませんよね』

「そのまさかを申します」

『・・・呆れましたわ。一夏さんは二回目で飛行を可能にしたというのに』

（肩部ミサイルのロックをニュートラルのまま射出準備開始。開始後即座に二発発射、爆発は1.5秒後に設定）

【了解しました】

『まさか専用機を持ちながら飛行出来ないなんて・・・情けないと思わないんですの！』

（さらに移動後に四発の追尾ミサイル五秒毎に通過場所に放置。起動開始時間はそれぞれ二十秒～五十秒後から、ランダムに起動）

【了解しました】

一真に対して様々な野次を飛ばすセシリアに対し、彼は準備を始めていく。

これは実験だ。これは実験の延長だ。

そう自己催眠を掛けなければ腰が抜けそうなのだ。

余裕も、油断もない。

震えは、酷くなっていく。

『賭けをしましょう』

「賭け？」

『もし、私が勝ったならば貴方には即刻この学園を去って貰います』

「あー俺は構わないが、軍が許さないぞ」

『それは貴方の問題であって私の問題ではありませんわ』

「なんという俺様思考・・・」

一真はセシリアを見上げながら苦笑する。

彼の中では彼女達に対して恐怖も戸惑いもない。授業中にさんざん整理したのだ。あるのは呆れと微笑ましさ、それにちよつとの恐怖である。

震えは、また少し治まった。

「なら、俺が勝つたら言う事聞いてくれるんだよね？」

『私に、イギリス代表候補であるセシリア・オルコットに勝てると思っ
ているのですか？』

「勝つだけさ。俺も頭に来てるからな・・・」

一真は片方の八重歯を見せる笑いをしながら指差す。

「説教だ」

『は？』

「お前と一夏と箒、さらにあっちにいる三人合わせて説教してやるよ。」

後、織斑先生と山田先生に一言言わせてもらう」

「「『んなっ?!』」」

『私もですか?!』

『っざけんな!なんでアタシらも賭けの対象になってんだよ!アタシらかずーを応援してんだぜ!』

「喧しい！元はといえばお前らが発端だろうが！」

『信じてたのに、裏切ったな！アタシらの気持ちを裏切ったな！』

「いつ！誰が！何処で許したなんて言った！」

『カツサンド買ってきたじゃんか！黙ってパシられてやったじゃんか！』

「焼そばパンとフルーツ牛乳とジャンプ買って来いと言ったのに、カツサンドと青汁と銀河鉄道の夜持ってきたやがったくせによく言えたな！」

『だって焼そばパンもジャンプも外のコンビニじゃないと売ってないじゃんか！』

「だから罰なんだよ！」

『かずー言ってたじゃん！ジャンプは立読みで済ましてるって！』

「だからどうした？」

『今日はマガジンの発売日だよ！』

「じゃあなんで銀河鉄道の夜なんだよ！宮沢健児がどう関係すんだよ！いい加減にしねえと銀河鉄道の夜の書き取りさせるぞ！」

アリーナに響く言い争いにより場の緊張が解れる。

三組ではよくあることだが、他のクラスではこんなことはないため中には大声で笑う者もいる。

しかし、少なくとも五人は違った。

「アイツ・・・ふざけてんのか？」

「・・・最低だな」

一夏と箒は目の前の茶番劇に顔を顰める。

「はわわ、どうでしょう?!
連絡もまだついてないのに!」

「ふん。よく吠えたものだ」

山田と千冬はディスプレイ越しの一真を見て反応を示す。

『・・・ふざけてますの?』

「言ったら、こっちも頭にきてるんだよ」

『私をバカにしたこと・・・後悔させて上げますわ!』

顔を真っ赤にするセシリアを見ながら一真もさらに口角を上げる。

「来なよ令嬢。フロイラインたまには田舎者と一緒に泥臭くなろうぜ」

『それでは、模擬戦開始！』

千冬の開始の合図が終わった瞬間、一真の肩に装備されたミサイルが射出された。

「え？」

通常のミサイルよりも異常な速度のそれはセシリアの回避行動も、撃ち落とすことも許さず着弾した。

爆炎がセシリアを包んだと同時に一真は動く。

「っ！」

右手に装備されたマシンガンはセシリアの姿を確認せずにバラ撒かれる。

最初こそミサイルの着弾で硬直してしまったセシリアだったが、

爆炎を突き破って着弾し続ける弾丸に気付くとすぐさま回避行動を取る。

着弾場所から一真の位置を特定するも、彼はその場に止まることなくマシンガンを打ち続ける。

バラ撒かれた弾丸は百発百中とはいかず、大半はセシリアの回避行動によって避けられた。

「っ、お返しですわ！」

すぐさまエネルギーライフルを構え、撃つも一真には当たりはしない。当り前だ。彼は動き続けているのだから。

反時計回りに旋回する一真は前に後ろに、時には反対方向に飛んではセシリアに照準を合わせる隙を殺し続ける。時にはランダムな高さを飛び、照準の範囲を二次元から三次元に狂わせた。その間もセシリアのシールドエネルギーは秒刻みで削り続けた。

「ちょちょこと！」

苛立ったセシリアがブルーティーズを射出する。それで場の流れが変わると一夏を含め周り考えたが、一真はそんなことを許さない。

《警告。ミサイルロックオン確認》

「なっ、なんで?!」

一真を囲むように移動するブルーティアーズを見ながらセシリアは突然のロックオン警報に驚く。

真後ろからロックされたこと、視界内にはまだ一真がいるのだ。

「っっ!」

無理に体を捻りミサイルをギリギリで避け、通り過ぎたミサイルを撃ち落とす。そして急ぎブルーティアーズを操作しようとする意識を集中し始めたが、またロックオン警報が鳴り響く。

場所は一真が移動し終わった地点からだ。

「なんなんですよ!」

焦りながらも真っ直ぐ進んでくるミサイルに照準を合わせ、打ち落とす。

「いったい何が起こってんだ!なんで誰もいない場所からミサイルが?!」

「・・・考えた物だな。犀川の奴、移動しながらミサイルをあちこちに落とし続けている」

「・・・本当だ」

「奴は時限式でミサイルが起動するようにしているのだろう。器用な事をする」

千冬の言葉を確かめるため、ディスプレイに表示される一夏と箒は確かに一真がミサイルを落としているのを見た。

「犀川め、最初のミサイルとマシンガンでオルコットの動揺を誘ったな。しかもすぐにミサイルを起動しなかったのはオルコットにブルーティアーズを使わせるためか？」

「え、でもよ、そうしたら一真が不利にならねえか？」

「馬鹿者。それが狙いだ。」

その節穴でよく見てみる。奴は既に二機落としている。それに、またミサイルを設置しているぞ」

一夏も知っていることだが、ブルーティアーズはその特性上操作中は使用者は棒立ちになってしまう。

高い空間認識能力に加え、X・Y・Zに動かし続け、さらには攻撃命令をそれぞれに出す。一般人でも一機を操る事は出来なくもない。例えるならラジコンの様なものだ。しかし自身の移動、浮遊、相手を意識すると途端に何も出来なくなる。それが戦闘中なら

ば使い物になるわけがない。

それだけ、セシリアには素質があるのだ。

「オルコットは確かに優秀だし、天才と言えなくもない。まあ、私程ではないがな。

射撃能力は高く、回避行動もあり、ミサイルをライフルで撃ち抜くことが出来る。さらにはブルーティアーズの四機同時操作だ。しかし、同時に天才が故に簡単なミスに気が付かない」

「簡単なミス？」

「ブルーティアーズを四機同時に使用することです篠ノ之さん。

戦闘中は何らかのイレギュラーに即座に対応出来るよう常に余裕を持たなくてははいけません。ですが、オルコットさんは自分が動けない事を知りながら四機同時に展開しています。ですからこうして犀川君の罠にはまってしまったんです」

「でも、もしセシリアがブルーティアーズを出さなかったらどうしてたんだ。そんな賭けを普通初っぱなからするもんか？」

「奴としては別にいつでもよかったに違いない。その間は旋回行動を取りつつマシンガンを放ち続ける。それだけでもオルコットにはキツイ筈だ」

「・・・あの人の掌の上にいるんですね」

「ああ。だが、奴とて完璧ではないようだな」

千冬の一言でディスプレイを見る。

相変わらずミサイルに翻弄されるセシリアと、移動し続けながらマシンガンを放ち続ける一真。表示されるシールドエネルギーは二倍以上の差が開いており、このままではセシリアが負けるのは明白であった。

（マシンガンのマガジンはいくつある！）

【2です】

（ミサイルの残機は！）

【残り6】

（まだ終わらないのか?! このままじゃ弾切れ――）

「」「あっ!」「」

マシンガンを放ち続けていた一真の体が不自然に傾く。まるで出来の悪いCGのような違和感を感じさせる動きだ。

一真はそのまま慣性の法則に従い地面に激突、土煙を上げながら転がり続ける。

その姿を見ていた生徒は一真の痛恨のミスに声を上げる。しかも彼はすぐに体勢を立て直さなかった。いや、直せなかった。

旋回運動をし続け、さらには上下左右前後に小刻みに動き、上下を逆転するような回避も取り、そしてその度に襲うGに曝され続けた一真は酔っていた。そのため十数秒ほど立つことが出来ないのだ。

「・・・うつ、うえ・・・ぶふ、うつ」

胃がせり上がる感覚に気持ち悪くなった一真は口に手を当て我慢する。

「御間抜けさんですこと！」

その隙を見逃さなかったセシリアはミサイルを迎撃し終えるとすぐさま照準を合わせ、撃ち抜く。

二発ほど当たった一真は無理な体勢のままに前方へ飛び、スライディングするように着地すると回避運動を始める。

流れは、セシリアに傾いた。

「一真の奴、いきなり止まったぞ」

「それに何か様子がおかしい。さっきと違い動きにキレがない」

管制室で見ていた一夏達は突然変わった一真の動きに戸惑う。

他のギャラリーも同様だ。唯一セシリアだけがそれに気付かない。

「・・・酔ったな」

「は？」

「酔った、と言っている」

千冬の呆れた声に一夏と箒は戸惑う。

「酔ったって・・・もしかしてISにですか？」

「え、もしかして乗り物酔いみたいなの？」

「稀にあるんだ、そういう事が。特に奴のような動きをすればな」
「でも俺は平気だったぜ？」

「織斑君の場合、犀川君のように最初から動いていませんでしたよね。犀川君は最初からオルコットさんを見ながら周り、さらにはあんな三次元の動きを取り入れてるんです。さらに所々でブルーティアーズを避けるために逆立ち状態になったり、その状態のまま避けたり・・・酔ったとしても不思議ではありません」

「勿論そんな事は多くない。大抵はPICやAICにより緩和されるからだ。

奴が酔った原因を推測するとしたら酔いやすい体質か、もしくはICの性能が低いからだ」

千冬の推測は正しい。一真は今も体にGを受けている。左右に動くとシェイクされたような気分にもなっているし、上下左右に動きながらも感覚的に変わらない視覚は3D酔いを誘発させもした。

シールドエネルギーも既に1000を切っており、焦りから動きに無駄が増え、その度に吐き気が酷くなる。

「さあ、これで終いですことよ！」

セシリアからのミサイルのロックオンを確認した一真はこのまま負けても良いかな、と諦め始める。吐き気は酷くなり、頭はグワングワンと痛む。アラーム音とて妙に遠くに感じる。これはもう末期だ、そう諦めかけていた。

———そんな時だ。

『負けんなかずに！』

喧しい声が鼓膜を叩く。

遠くに感じさせない程の大音量。その声により一真の意識は一瞬で明細を取り戻す。

『犀川さんがいなくなったら寂しいよ』

『まだまだ勉強教えて貰わないと困りますしねー』

『私達馬鹿出しね!』

『私はそこまでじゃ・・・』

『私達は平気だよー』

『お前ら!それは無いと思うんですよ!』

ビリビリと空気が振動する程の大音量だ。生徒の中には耳を塞いでいるものもある。セシリアもまた耳を塞ぎはしなかったが、追撃の機会を逃してしまい棒立ちしてしまう。

『あーもう。ほらほらほら!こーんな、きゃわいい女の子に応援されてんのに、なーに吐きそうな面してんのよ!』

外部スピーカーまで使った直接の声援だ。他の生徒達とは違い、生の、一真の意志を知る者達の声だった。

それは親友とも言っている少女達の言葉だった。

（・・・無茶言いやがって）

一真は目前にまで迫るミサイルを見ながら笑う。

妙にそれがゆっくりに感じることに余計に笑いを誘った。これが世に言う走馬灯の始まりなのだろうと自嘲してしまふ。

『いいのか？私らが赤点取りまくって留年してもいいのか？！』

（いや、知らねえし）

『こんな世界有数の花園を諦めていいのかよ！諦めたらそこで試合終了ですよ！』

（花園って・・・しかもまた古いアニメネタを）

『このまま誤解されたまま行っちゃっていいのかよ！根性見せろよ、根性を！』

（根性って好きじゃないんだが）

『それとも負け犬なかずーは慰めて欲しいのかにゃーん？』

（うっぜえ！これ以上なくウゼえ！今すぐ殴りに行きてえ！）

『よしよしよし。勝ったら私をやるって話だったが、負けたら私の胸で泣かせてやろう！このDカップの胸で！

カムホームルーザー♪晩御飯は優しい優しいアタシの愛よん♪』

ぶ
ち
ん
！

一真の中で何かがキレた。

それと同時に何もかもがどうでも良くなる。たとえそれが自分の体裁でもだ。

それからの一真の動きは筆舌に尽くす程に凄まじく、迫るミサイルに対しA I Cによる急停止をかけ、さらに直撃するミサイルを手で優しく逸らし、通り過ぎた後にマシンガンで打ち落とす。

「嘘っ?!」

ミサイルを手でいなす。そんな馬鹿な事があるわけも、実行に移すわけもない。相手は時速数百キロオーバーの爆発物なのだ・・・

少しでも信管に衝撃を与えれば爆発するそれを、人間が行えるわけがない。たとえ超高性能のハイパーセンサーを積んでいても千冬クラスの超人でも無い限りは自殺ものの曲芸だ。

「ああ、もうさ・・・本当に何なんだ？なんでこんな事になってんだ？」

そんな超人的な行いをした一真は反動のように出て来た鼻血を拭い、せり上がってくる吐捨物を吐き捨てて頭をガリガリと掻く。

周りは目の前で見せ付けられた奇跡的な技に言葉も出ない。

「勝手な勘違いで殴られるわ、勝手に勘違いした奴からは殴られるわ、失望されるわ、拒絶されるわ、しかも勝手な噂で社会的に殺されそうになるわ・・・」

溜め込んでいたものを静かに吐き出す。

妙に落ち着き払った一真の姿は周りに不気味な印象与えた。

「終いには負け犬ときた・・・」

一真は笑うように口角を上げる。

「いい加減にしろよ、
クソガキ共」

一真の姿を見たことで何人かの生徒が恐がる。それはセシリアも例外ではない。

大半の生徒は免疫がないため強い怒りに対し怯えてしまう。特にセシリアが怯えた。

怒りの矛先の1人で、目の前にいるせいだ。縁が無かったわけでもないが、やはり目の前でこうも明確な怒りを向けられては体が硬直してしまう。

（リモート設定のミサイル全てを起動。背後の二機はアイツに、残りは奴の足下を中心に起爆させろ）

【了解】

（後にリミット解除）

【軍から提示されたデータを越えます】

（知るか。いいから解除しろ）

【了解】

ハスラーワンからの命令を受けたミサイルはセシリアに向かい飛翔、怯えていたセシリアを現実に取り戻し、そして迎撃された。

「同じ手はくいませんわ」

セシリアはすぐに回避行動に移るが、警戒していたマシンガンは放たれず代わりに足下で大きな爆発が立て続けに起こる。

「きゃっ」

爆炎と土煙によりアリーナの地上部分の大半は見えなくなってしまふ。さらに逃げ場の無くなった爆風の余波がセシリアを巻き上げた。また一真の姿も消えていた。

【警告。敵機接——】

「え？」

「歯あ、食い縛れ」

「ぎゃあっ?!」

接敵の警告が鳴り止むより早く、セシリアの足下から爆炎を吹き飛ばした一真が現れた。

彼はセシリアの首を掴むと彼女ごとブースターを最大まで噴かせた。

「なんだよあのスピード!瞬間加速なのか?!」

「いや、それにしても早すぎる!」

「機体スペックを超えているぞ。どうなっている?!」

管制室にいた3人は突如消えて一真が、次の瞬間にはセシリアを掴みアリーナ上部シールドに叩きつける姿に声を荒げる。周りもトラックの激突したかのような音で上を向く。

目にも止まらぬ早さで現れた一真は既にセシリアをシールドに叩きつけ、押さえながらマシンガンを放つ。咳き込む彼女にマシンガンの残弾を叩き込んだ一真は反撃に移ろうとする彼女の足を掴み、

振り回した。

「おらああああ！」

「きやああああ！」

ハンマー投げの様にセシリアを振り回す。ブースターも使用した回転による遠心力は例え専用機のPICとは言え慣性処理を処理し切れず、なすがままに体を振り回される。

「吹き飛ばせ！」

「きやあああああ？！」

出鱈目に回転するセシリア。

そんな彼女に対し一真は容赦しない。

「嘘だろ?!」

「やめて！」

管制室で一夏と箒の悲鳴が響き渡る。

セシリアの意識は既がない。投げ飛ばされた時に意識を失ったた

めだ。

それ知らない一真は肩に備え付けられたバズーカを構え、照準を付ける。

【シールドエネルギー0。

これより先の戦闘不可能。

全ての武装をロックします】

「試合終了！」

しかし、それより先にハスラーワンにより示された残存エネルギー0の報告と千冬の試合終了の合図が重なった。

その後の顛末だが、模擬戦終了後、一真は気絶していたセシリアを抱き上げて彼女側の管制室へ運んだ。

出迎えに来た一夏、箒からの罵言舌倒に対し一真は何も言わずその場を去った。

そして向かった先は、トイレである。

最初、一夏も筈も千冬さえも一真の凶行に目を剥いていた。何せ、ISを装着したままトイレに駆け込んだのだから。

急ぎ一真の後を追った千冬と一夏が見たのは便器にもたれかかりながら吐き続ける彼の姿だった。

吐いて、吐いて、さらに吐いて。落ち着いた頃に声をかけようとしてもまた吐いてしまった。

漸く落ち着いた折に千冬が声をかけるが、一真は気絶していた。

そしてセシリアと一真は共にIS学園に建てられている病院の病室で寝ていた。

「あ……うあ……」

「あ、気付きましたよ皆さん！」

「う……ああ？」

一真が目を覚ます。

まず一真の目に入っただのはぼんやりとした大勢の顔であった。

それから蛍光灯に照らされた白い天井である。

「犀川、私が誰かわかるか？」

「織斑、先生？」

「そうだ。起きられるか？」

少しずつハッキリとしてきた一真は一度周りにいる人間を確認する。

一夏、箒、セシリア、千冬、山田、そしてクラスメート3人だ。

確認し終えた一真は起き上がろうと腕と腹筋に力を込めた。

「っ?!」

「さ、犀川君?!」

「犀川！」

「か、一真?!」

起き上がろうと力を込めた瞬間に体中に鋭いような、鈍いような言葉に出来ない激痛が走る。

激痛により目を剥き出し、息を止めたまま固まる一真に病室内の人間は声を上げる。

「ギャアアアアアアアアッ！
くくくつ、ぐつ、あ・・・ああ！ああ・・・いい、あが、ふう
あ！」

悲鳴を上げた一真は緊張した筋肉によってさらなる激痛に見舞われる。

悲鳴を我慢しても痛みを我慢仕切れず、悲鳴にもならない呻き声を上げた。

みつともなく涙を流し、鼻水や涎も出てしまう。

「無理をするな犀川！」

「う・・・うう、あうああ・・・」

呻く一真の顔を真耶が拭く。

周りの人間は皆心配そうに彼の顔を覗き込む。

「す・・・すいません・・・」

「謝るな馬鹿者。全く、そんなになるまで肉体を酷使しよって」

「大丈夫なのかよ？」

「指先を動かすだけで泣きたくなるような痛みが走る」

「なんでそこまでしたんです、先輩？」

「さあ・・・頭に血が上ってたからな。正直どこかのアホの煽りが起爆剤になったけど」

「そりゃきつと素敵に無敵にきゃわゆい美少女に違いはないな！」

「だよな。素敵に無敵にきゃわゆい美少女だ・・・お礼は口を布団針で縫ってさらに美人にしてやらんとな？」

「はっはっはっ。私じゃないよ」

リクライニングにより起こしてもらった一真は眼鏡を掛けさせてもらおうと改めて全員の顔を確認する。

「そういえば模擬戦の結果は俺の負けですかね？」

「ああ。僅差とはいえだがお前のエネルギー切れが早かった」

「そう、ですか・・・参ったな。また軍に逆戻りか」

溜息をつく一真を見て一夏達はセシリアを見る。

「・・・まるで私1人が悪いみたいに見ないでください。一夏さんや篠ノ之さんだって共犯みたいなものなんですからね」

「いやあ、悪いなオルコット。退学に関してだが、せめて体が動くようになるまで待ってくれ・・・。今から退学準備始めるのは見ての通りキツいんだわ」

わざと明るく振る舞う一真を見たセシリアは顔を歪め、そっぽを向く。

その姿が妙に子供っぽく見えた一真は笑いながら謝る。

「そんなの無しですわ無し」

「んー。いいのか？俺みたいな屑とは一緒に居たくないだろう？」

「私達の勘違いで貴方に退学してもらっては、まるで私達がイジメをしたようじゃありませんこと？」

「勘違い、ねえ」

勘違い言葉に対し一真は一夏、箒を見る。

2人の表情は苦笑と申し訳なさそうな顔をしていた。

「悪い一真！」

「すみませんでした犀川先輩！」

「あー、話したのか？」

「うんにゃ。山田先生が確認しただけだよん」

「はい。どうしても信じられなかったので勝手ながら高槻さんに連絡を取ったんです。結果は私達の勘違いでした」

「すみません、と言う山田の対応にむず痒い気持ちになった一真は助け船を求める。」

「いやー、勘違いが解けてよかったね。私は嬉しくて嬉しくて慰めなくなるよ♪」

「ああ・・・。俺も嬉しさのあまり勘違いを煽った真犯人にお礼がしたい気分だ」

「なんでさ？」

「そいつのおかげでまたコイツらと仲良くなれたからな」

「おお！それは良かった！」

「ああ。是非会ってお礼に抱き締めたいくらいだ」

「それなら楽しみにしてるぞかずーっ」

「よしきた。その背骨がへし折るくらい抱き締めてやるから遺言書いとけよ」

「おっと、これはつまり一緒の墓に入ってやるというプロポーズかい？」

「うっぜえ」

2人の掛け合いで病室は笑顔になった。

今日のNG

《ナイトメア・ナイト》

（眠れませんわ・・・）

全く眠気がやってこないセシリアは寝つけないまま数時間ベッドの上で寝返りを打ち続けていた。

（あれから6時間も気絶していたせいかもしれませんわね）

現在真夜中の十二時。

院内は既に消灯しており原則出入りは禁止されている。

誰かと話せばまだ暇を潰せるかもしれないが、そんな相手はいない。

（・・・起きてるんでしょうか？）

「う・・・ん・・・っう」

（声は、聞こえますわね）

セシリアは試しに声をかけてみようか迷う。

「・・・っう」

「ひっ?!」

反射的にシーツを被る。

恐いのだ。

あの模擬戦からだろうか、一真が怖くなったのだ。

気付いたときには首を掴まれ、シールドに押し付けられていた。

いくら絶対防御と銘打たれた生命補助があっても、あくまで物理的にしか役に立たない。

強い怒りや不気味に笑う姿からは守ってくれない。

「あー・・・いてえ」

（な、何を恐がっているのです！貴女はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補なのですや！）

「ん・・・マジかよ」

（大丈夫、貴女なら出来ますわ！）

「仕方ない、か」

（ほら、勇気を御出しなさいな・・・）

自分を鼓舞したセシリアはシートの中で深呼吸をする。

キッと目に力を入れた。

「起きていま——」

シートから頭を出したセシリアが見たものは、巨大な影であった。カーテン越しに映る影は巨大で、太い足に長い腕、鋭利な爪に頭に生えた一本角が妙に印象的であった。

（あ、あああ、悪魔?!）

「う・・・うあ・・・ひぐっ」

その影は固まったセシリアの前で呻く一真にもたれかかる。

覗き込んでいたかと思うと影は一真を抱き上げる。

（あ、悪魔が犀川さんを?!）

「ぎい・・・ぎゃあ、ああ・・・」

まるで頭から食べているようにセシリアには映った。

一真の姿が無くなるのに数秒もいらなかった。

セシリアはただただ震えながら影を見上げる。

「あ・・・ああ・・・」

影が、セシリアの方へ振り向いた。

ギラギラと光る真つ赤な眼と視線があつたのを最後にセシリアは気を失った。

その数分後だろう。

ISでトイレから帰ってきた一真が千冬に怒鳴られたのは。

事件その3 「人間のクズ扱いにされてさあ大変」(後書き)

一真

「もきゅもきゅもきゅ・・・」

箒

「犀川先輩。珈琲が入りました」

一真

「もきゅもきゅふもっふ☆もきゅもきゅ・・・ありがとう」

箒

「いえいえ」

一夏

「そういやさ、一真のISの名前って何なんだ？H・1の他にオニキスって出て来たぞ」

一真

「ずずうー・・・。H・1ってのはあくまでAIの名称だ。ISの名前で言うならオニキス。シリーズ名ならナインボールになる」

一夏

「へえ、ってことは一真は最低でも4、5回も移行シフトするのか」

一真

「しないぞ」

一夏&箒

「は・・・？」

一真

「H・1は「禁則事項です♪」だから、「困ったものです☆」。つまり俺の場合は「ただの人間に興味は（ry）なんだ」

一夏

「なるほどなー」

箒

「・・・あれ、そうすると先輩は今、最弱状態のオニキスで入院したことになりますよ？」

一夏

「確かに。実は一真って虚弱だったりする？」

一真

「んなわけあるか。設定上はお前より高いっつーの。俺が入院したのはH・1が「W A W A W A忘れ（ry）」だからで、俺以外が乗れても結果は変わらない。あくまで被害の大きさの違いだけだ」

箒

「・・・もしかして、先輩の最後って――」

一真

「言うな。悪いが、それ以上は本当に禁則事項だ」

一夏

「マルチエンディングとかってオチはないのか？」

一真

「あるんじゃないか？たぶんだが……。今のところ、このまま行けば当然の既決にしかないな。終わりにも複数あって、バッド、グッド、トゥルーもある。まあ、人生なんてみんなそんなものだな」

主人公&ヒロイン 食事中・・・

セシリア

「こんにちわー・・・」

一夏

「よう、セシリア」

箒

「いらっしやい」

一真

「なに食う？」

セシリア

「なんか、和やかな場所ですわね。こういうのも和というのでしょ

うか？」

一真

「まあ、和になるかもな。だが洋とも言える。つまりは世界共通の感覚だ。イギリスにもティータイムがあるだろ？」

セシリア

「え、ええ。確かにそうなんですが・・・私、こういった経験が無いんです。母は早くに無くしましたし、父も・・・」

一夏&箒

「・・・(ジーツ)」

一真

「目潰しされたくなくやめろ。お前らの弱みバラすぞ。とりあえず。セシリア」

セシリア

「はい、なんででしょう？」

一真

「この場にいる誰もが同じ境遇だ。一夏は両親がいないし、箒は両親と別居、俺なんか家族とは一生会えないんだから」

セシリア

「そうなんですの？」

一真

「そうなんですの」

セシリア

「・・・真似しないでくださいまし」

一真

「わかりましたですの（キリ）」

セシリア

「むきくくっ！」

一夏

「あははは・・・。」

そ、そういや作中で一真が3D酔いしてたけどさ、ありえるのか？」

箒

「あ、私も気になります」

セシリア

「・・・私ですわ」

一真

「答えてあげますの！」

セシリア

「むきくっ、もう本当にむきくくくくっ！」

一真

「可愛いな、本当に。」

さて、まずは3D酔いと乗り物酔いの違いは分かるか？」

一夏

「違って、同じじゃないのか？乗物で酔うか、映像で酔うかとか・・・」

一真

「まあ、及第点はやろう。どっちも症状は変わらない。だが原因は違うな。」

まず、乗物酔いの原因は加速度による三半規管への刺激からくる平行情感の狂いが原因だ。

次に、3D酔いは映像から来る物だ。詳しくは三半規管での感覚と実際に知覚している映像のズレが原因だ。ようはストレスと考えていいぞ。

ちなみに、宇宙酔いもあるな。今回の俺はこの全てにかかっている」

一夏

「・・・マジで？」

セシリア

「そんな状態で戦っていたんですの？」

一真

「そうなんですの」

セシリア

「・・・信じられません」

一真

「信じてくださいですの（ニヤニヤ）」

セシリア

「む~~~~~~~~き~~~~~~~~っ！」

一真

(やっべえ、楽しい上に可愛いから癖になりそ)

箒

「生活悪いですよ」

一真

「わかっていま——おーけー、わかったから刀をしまえ」

箒

「・・・しかし、乗り物酔いはわかりましたが、3D酔いや宇宙酔いになった理由がわかりません」

一真

「もちやもちや・・・もちや？」

3D酔いになった理由は簡単だ。俺が逆立ち状態でセシリアやブルーティアーズを視覚してたからだ」

一夏

「は？・・・つまり何か？お前は背後にあったブルーティアーズも見えていたってか？」

一真

「可能、不可能で言うなら可能だぞ。元々ハイパーセンサーはそういうもんだ。意識すれば背後を向きながら射撃出来るし、ジャグリングも可能だ。だから酔った」

一夏&一夏ラバーズ

「・・・」

一真

「ありえないって顔するな。出来ない方がおかしいんだからな。さらに補足すると、俺は低空移動しながら回避行動を取ってた。つまりずっと無重力状態で戦ってたんだ。重力によって平行感覚を保つ三半規管が麻痺してもおかしくない。つまり乗り物酔いが二重で襲ってきたってことだな」

一夏&一夏ラバーズ

「.....」

一真

「むきゅむきやむきゅ・・・（ニヤニヤ」

一夏&一夏ラバーズ

「.....?」

一真

「むきゅむきやむきゅ・・・（ちよいちよい」

一夏

「上?上に何があんだよ?」

一夏ラバーズ

「~~~~~っ?!／／／」

今回の舞台裏はここまで。

事件その4 「セカンド幼馴染みがフラグを建てたからさあ大変」 (前書き)

この小説は青少年の甘酸っぱい青春に、血と涙と【こっから先は一方通行だアアア!】によりベクトルクツキングされた結果です。

背後から声をかけられた際に「俺あ、トイレに行くにもビクビクする臆病者でね」と軽口を叩ける左腕にサイコガンを装備してから読むことをオススメします。

事件その4 「セカンド幼馴染みがフラグを建てたからさあ大変」

模擬戦から二週間が経った。

当初は松葉杖を突きながらの登校に周りの視線が集まった。退院後も筋肉痛を引き摺っていた一真は周りよりゆっくりクラスへ向かう日が続いたが、それも三日すぎれば筋肉痛は引き快活に生活することが出来た。若さとは素晴らしい。

だが、登校当日は酷かった。クラスに到着した一真を出迎えたのは沈黙と畏怖の視線だったからだ。

（仕方ないと言えば仕方ないよ、な）

模擬戦の内容は録画していた物があつたためそれで確認は出来た。観覧した結果は無様。客観的に見てもアレは戦いとは言えず、むしろ暴力という名が相応しい程に酷い光景であった。

（あれじゃあ恐がられても仕方ないよな）

席に着いた一真は鞆から漫画を取り出すと読み始める。

一真の中では模擬戦の結果は他人事でしかなかった。そうなるかわかっていて行ったのだ、周りの感情等は成るようにしかならない。

キレた際の自分があのようになるのは分かっていた。しかし、『果たしてあそこまでする必要があったのか』を考えると否定せざるを得ない。その証拠に装備されていたグレネードは使用していなかった。

ならばセシリアをすぐに投げ飛ばし、撃ってしまえば簡単に終わったはずなのに、一真はわざわざマシンガンを放った。

（まるで八つ当たりだ）

あの時の自分は憂さ晴らしをしていたのだと一真は分析した。そうでもなければ一番簡単な方法を見殺してまであんな手段は選ばない。

（筋肉痛で寝不足だし、報告すれば怒られたり泣かれたり笑われたり、オルコットからはグチグチ言われたり、クラスメートから恐れられる・・・何がしたかったんだよ。

つかなんでオルコットの奴はあそこまで怒ってたんだ？）

自分の行動の結果に溜息が漏れた一真は漫画を読むのを止めて眠り始める。嫌なことばかり続いたため彼はすぐに寝つき、寝息を立てながらS H Rまで過ごすのだった。

その日の一時現目が始まる迄の間、一真は暇を持て余し眠っていた。

（話し掛ける奴もないしな）

我ながら暗い考えだと一真は思うが、弱っているせいだと結論を付けると意識をまた手放し始める。次に起きるのは一時現目が開始される頃だ。

「なーに不照寢してんのさかずーっ！」

そうなる筈だった。

ガガンっ、と一真の頭が机のディスプレイにぶつかり、さらに縁に

ぶつかった。

「~~~~っ?!」

回復したとはいえ重度の筋肉痛に鞭打つように背中を叩かれ、さらには額と頭をぶつけてしまい痛みで悶えてしまう。

「こーんな爽やかな朝に、しかも女の子に囲まれて、さらには美少女に声かけられるなんて世界中の男共から嫉妬の嵐間違いないね!」

「だ、大丈夫犀川さん?」

「いてえ・・・無茶苦茶、いてえ」

「男の子なら痩せ我慢だよかずー!」

「死人に鞭打つってこういうことですかねー?」

顔を傾けて確認する。いつもの仲良し三人組だ。

暑苦しい笑みを浮かべる少女と心配そうに見つめる少女、朗らかに笑いながら毒吐く少女。一真の数少ない友人達である。

「なにしゃがる・・・」

「こーんなギャルゲ的生活を一分一秒無駄にするダーリンのために

行動したまでさ!」

「・・・ほう、つまりお前は俺のハニーになるのか?」

「そ、そうなるなっ!」

一真は痛む体を無理に動かしながら少女を見つめ微笑むと少女は赤くなり声を張り上げながら胸を張る。

2人の友人は困惑気味に一真と友人を見比べ、周りの生徒は驚きや絶望した表情になる。何せ一真が誰かに好意を向けている動きなどなかったのに、今の一真からは何か特別な感情を感じるからである。

「そうだ」

「な、なんだ?」

「いや、約束を思い出してな」

「約束?」

松葉杖無しで立ち上がった一真はフラフラしながら少女の前に立ち、その肩を掴む。

「ひゃっ」

「・・・負けたら、慰めてくれるんだろ？」

「え、あ、まあな！」

「なら、慰めてくれよ」

「「きゃあ~~~~！／／／」」

周りの視線も気にせず一真は少女を抱き締めた。周りから上がる歓声も耳に入らないと言わんばかりに一真はぎゅっと少女を抱き締める。抱き締められた少女は自分のキャラも忘れ、年相応に顔を真赤にしながらあたふたしだす。

「ちよっ、か、かかか一真／／／」

「・・・」

「すこ、少し痛いん、ですが／／／」

（あれ？・・・あれ？）

（あらまー、悪い顔ですねー）

周りからは一真の顔が見えていない。見えたのは近くにいた2人だけである。

今の一真が模擬戦で浮かべた笑みをしているのが見えたのはこの

2人しかいなかった。

「え、ちょ、え・・・？」

「・・・」

ゆっくりと一真の体が傾いていく。その度に周りの歓声と少女の戸惑いと一真の笑みが大きくなっていった。

「こ、こんな大勢の前なんて——ていうか痛い！背骨がすんごい痛い?!」

一真の体は少女を押し倒すのではなく、まるで覆いかぶさるように倒れていく。

一度、また一度倒れていく行くごとに少女の顔は赤から青に変わっていく。

「あのう、かずーさん？背骨が有り得ないくらい痛いので離して貰えませんか？」

「却下・・・それに言ったよな。お礼をしなきゃって」

息がかかる程に近い一真の顔を見た少女は顔を完全に青くした。彼

の顔がとても加虐的であったのだ。

「まさか?!」

「よくもあの時はコケにしてくれたなクソガキ」

「あだだだだっ」

さらに一真は体を畳み込む。それに比例して少女の悲鳴は酷くなっていた。

「ぎゃー! 折れる、折れるうつ!」

相撲技に鯖折りというものがある。相手の廻しに回した手で相手を引き付け、上からのしかかる事で相手の膝を土俵に着ける技だ。

この技の特徴の一つにかけられた相手は膝を痛めやすいというものがある。これは梃子の原理により作用点が膝になるためだ。

今だと肩胛骨が支点になるため、腰が作用点になる。

「あだだだだっ! ギブ、ギブギブ!」

「耳元で騒ぐな煩い」

「ぎゃー！折れる折れる折れるー！」

ギリギリと着実に体を折り込む一真は涙目で藻掻く少女を見て折り込むのを止める。

（そろそろ許してやる・・・か・・・）

「か、かずーっ！お願い許して！謝るから許してー！」

「・・・」

「犀川君・・・そろそろ許してあげー——なんで泣いてるの？」

「あはー。もしかして筋肉痛のせいで背筋を伸ばせないんじゃないんですかー？」

「嘘だと言ってよバアアニイイイ？！」

「・・・いてえ、うるせえ」

その後、彼らは後から来た一夏達が来るまで抱き合ってるのだった。

それからさらに数時間後の話だ。

「セカンド幼なじみ、ね」

一夏に紹介された少女、鳳凰鈴の第一印象は小さいであった。

身長も勿論あるが、女性的に未熟な体や言動がさらにそう思わせる。

（正直、小学生かと思ったわー）

それだけ鈴という少女は小さかった。

「ふーん。アンタが噂の・・・一夏と違って大したことなさそうね」

（しかし、裏表のない子なこと）

「しかも我が三組のクラス代表さ！畏れ入ったか！」

「あー、うん。少し黙れ」

「入学そうそう転校生さんかあ」

「また賑やかになりますねー」

誰もが一真に視線を向けてしまう。

「・・・見るな。俺は被害者だ」

「まだ何も言ってますんよー？」

「・・・」

「楽しみですねー。ふふ」

（やだ。なにこの子恐い）

「しかし、鈴がクラスに来たときは本当に驚いたな」

「ふふん。サプライズだったからね」

一夏と鈴が楽しそうに話す。その横では箒とセシリアが眉間に皺寄せながら悔しがっていた。

「話に入れないのが悔しいのか、それとも単に横から一夏を取られたのが悔しいのか」

「ライバル出現だね」

「私は横取りで悔しいにカレーパンだ！」

「なら私は両方に定食ですねー」

「え、えと、私も賭けなきゃいけないの、かな？」

「気にするな。バカ共の戯れだ」

「「その四人煩い！」」

「怒られちゃった」

「怒られちゃいましたねー」

「恐いよパパン！」

「ぎゃー！抱き付くな！体重をかけるな！痛いんだよバカたれえ！」

「あーもうウルサイ！」

楽しい一夏との再会を邪魔する一真達に鈴は怒鳴り声を上げる。だが反応は無く、怯えるまで行かなくても一瞬だけは静まると考えた鈴音は啞然とした。

つい先日一真の本気の怒気を目の当りにした五人はしれっとした顔でじゃれ合っている。これに黙ってしまったのは鈴であった。

「あー、そうだ。まだ紹介してなかったな。」

「ファースト幼なじみの篠ノ之箒に、クラスメートのセシリア・オルコットだ」

「初めまして。ファースト幼なじみの篠ノ之箒だ」

「一夏さんの親友、セシリア・オルコットですわ」

（女って恐いな）

（いやー修羅場だね修羅場ー）

（青春してるな、いっちー！）

（こ、恐いよ）

表面上は笑顔で挨拶しているが、一步引いてみるとそれは互いに牽制している様がよくわかる。どうやら鈴も一夏に好意を向けているようだ。

「小学校までの幼なじみに、負けたイギリス代表ね。覚えてたわ」

模擬戦のVTR見たけど、確実にアンタが負けてたじゃない」

「ぐっ・・・」

（え、嘘やめて。挑発に俺を使わないでよチミっこ！）

（はっはっは。流石はかずーっ！私達の期待は決して裏切らない！）

（そこに痺れます憧れちゃいますー）

（っざけんな！）

「なっ！私の方が付き合いは長いぞ！」

「ま、負けてなどおりませんわ！」

一真の心配した通りプライドの高いセシリアは鈴の挑発にすぐのつた。

（逃げるなら、いやもう遅いんだぜ！）

（なんで一世代前のネタを知ってるのか小一時間聞きたいな、そろそろ）

（女子の嗜みですからー）

（が、頑張って犀川さん！）

（やべえ、この優しさに惚れそう・・・）

「負けよ負け。模擬戦見たけど、確実にアンタが負けてたじゃない」

「ぐっ・・・」

「初会から手玉に取られた上に、勝ちだって相手のミスに救われただけでしょ？」

（やめて！フラグの回収率はもう完璧よ！）

（誰か助けて・・・っーか楽しそうだな、おい）

「まあ、所詮はイギリス」

「鈴、言い過ぎだ」

その場は一夏が治めたが、誰も納得した表情を浮かべはしなかった。

「特訓ですわ！」

「お、おう」

「なんだその不拔けた返事は！」

お前には何がなんでもクラス代表戦を優勝してもらう。いいな！」

鈴を交えての昼食から時間を進めて放課後のアリーナ。ここにはあの場にいたメンバー（鈴を除く）全員が集まっていた。

「僕、ポンポンと全身筋肉痛が痛いから抜けますねー」

「却下ですわ」

「」

「貴方も鈴さんと当たった場合に備えて特訓ですわ。私を追い詰めたのですから、圧勝してもらわなくては困ります」

「え、なにそれ？俺聞いてない！」

「Wは面白かったな。二人で一人というコンセプトは新鮮で斬新だった！」

「なんで百年前の特撮も詳しいんだよ？」

「嗜みですよー」

「もうやだこの娘達」

そんなわけで特訓開始となる。

だが、一真が特訓を開始したのはクラス対抗戦の1週間と少し前からである。

理由は筋肉痛の完治もあったが、H・1《ハスラーワン》の整備が最大の理由だ。

ISには基本的に自動修復機能が備わっている。自動修復機能と仰々しい名前ではあるが、修復可能なのはあくまで応急措置の範囲のみ。腕が無くなったり、ブースターが破壊されたり、回路がズタズタになれば人の手が必要になるし、大破などすれば新しいボディフレームが必要にもなる。コアが壊れれば直すことなど不可能。開発者でも連れてこない限りはまず無理だろう。つまり、自動修復機能など気休めにしかないのだ。

そして、H・1には自動修復機能がない。それが意味するのは、欠陥品か未完成の2つである。

理由はわかっていない。だがH・1はそのような機能がないのは変わらない。そうなると整備は自ずと人がすることになる。しかもH・1は未確認のコアを搭載し、ボディフレームも既存の物から逸脱している。もしこれが試験機、つまり設計者から開発者が確認されているなら問題ないが、H・1は全てが未確認。しかも、世界水準から見ても高過ぎるのだ。

日本としてはH・1の全てを独占したい。もし全てを解析出来れば日本の量産機である打金は飛躍的に発展する。そのため、整備は

IS学園の者でなく日本政府直属の者がやらなくてはならない。つまり、現状では一真だけで整備しなければならないのだ。

勿論、本来なら専任の整備技師が整備しなければいけないのだが、担当者が着任する前に一真がH・1にダメージを負わせてしまった。これは罰でもある。

「・・・ダメ、理解仕切れない。知恵熱出そう」

『しかし、マスターのおかげでフレームの修復率は92.8%を越えました。本格戦闘、テスト共に問題ありません』

「・・・この三日で直せたのは1.23%か」

『素人ならば逆に下がります。マスターは有能です』

「ありがとう」

三日間の整備でH・1はすらすらと会話出来るまで成長した。しかも励ますという行為まで見せている。

前までの片言ロボ語を知っている一真としては凄まじい成長具合である。

「図面を書いてて思ったけどよ、お前のフレームって使い捨てにしか感じないんだが？」

『一度使用しきった兵器は基本的に破棄すべきです。故に、一度大きな負荷を負った部位は新たに取り換える事をオススメします』

「贅沢いうなワンマン機のくせに。下手すれば打金の腕を使うことになるんだぞ」

『あのような脆弱な機体では性能を引き出せないため却下を要請します』

「ならせめてオニキス図面くれ」

『プロテクトにより図面の提出は不可です』

「解けよ。俺の為に今すぐ」

『不可能です。私にはそのような命令は全て却下、及び排除するようプログラミングされています』

一真を見下ろしながら『実行しますか?』と脅すH・1に呆れながら一真はやれやれと手書きの図面に眼を落とす。

「一から直すのがこんなに辛いなんてな」

『分解のみならばマスターのみ許されております』

「知ってますー。身を持って知ってますー」

数ヶ月前にH・1の図面を取ろうとした技術者が大怪我を負った。

原因はH・1だ。

どうやら情報漏洩に対する防護プログラムが発動したらしく、一真が身を挺するまで暴れ続けたことがある。それ以降、整備以外は全て一真が行うようになった。

「学校の製図がこんなに簡単だとは思わなかった・・・ちくしょう」

『マスターは有能です』

「そう連呼されると嫌味にしか聞こえなくなるからやめろ」

『了解しました』

今日も誰もいないガレージで一真はH・1の整備に勤しむのだった。

一真が本格的に訓練を始めたのがクラス対抗戦まで1週間を切った頃からだ。それ以前は整備と図面制作の片手間にやっていたのだ。

さて、その間に起こったことを整理してみよう・・・

一夏が箒の裸を見て一真の部屋に逃げ込み、直された扉はまた破壊されてしまったのが一週間前である。

翌日は一夏に頼まれ箒の機嫌を治したのだが、その夜に解放された浴場でセシリアの裸を目撃し、箒に追い回された挙げ句に一真を巻き込んだ。新調の扉は、在任1日目で役目を終えた。

その二日後、鈴と喧嘩をした。内容はどうやら昔の約束の意味を取り違えたためらしい。それからは何かと一真を巻き込む口喧嘩に発展していた。

その翌日にはH・1の起動テストを始めようとしたがアリーナで箒の胸にダイビングしている一夏を目撃、日を改めると共に自室でなくガレージで一日を過ごした。

「しかし、あそこまでやってるのに誰からも嫌われないのは一夏の魅力故かね？」

『解答出来ません』

「俺がやったらまた社会的に殺されそうになるのにな」

『大半は意見を聞かない者からの誤解です。マスターの行いに非はありません』

「・・・あれがギャルゲで御約束のラッキースケベなのか」

『マスターは健全であるべきです』

「恋愛に興味はないよ」

『マスターは男色でしたか』

「ねえわ。絶対ねえわぁ」

『そうなのですか？』

「好きな人間と一緒に居続けたいと思わないだけなの、わかる？」

『種としては歪な考えです』

「結婚願望あるから大丈夫。
恋愛と愛は違うんだよ」

『私には理解出来ません』

「よく言われるのは、恋愛は自分が幸せになりたいから。愛は相手を幸せにしたいからだ」と

『マスターは尽くすタイプですか』

「さてね。付き合ったことないからわからん」

現在一真は学園の外周を走り続けている。以前の模擬戦でブラツクアウト、及び極度の筋肉痛に陥った一真に対して上官である高槻が彼に基礎トレーニングを厳命したのだ。

一真も突然の視界喪失と悲鳴も上げられない痛みに怯え、最初こそやる気を見せていた。そんな一真に喜んだ上官が提示したトレーニング内容を紹介しよう。

ランニング1500m×5セット。

シャトルラン×10セット。

腕立て、腹筋、背筋それぞれ100回×5セット。

ISの起動訓練。

『これを毎日やってね♪』

（え、え？毎日・・・え？）

（一般の高校生にいきなりそこまでさせるとは）

（一真君がやっと真面目に向き合ってくれた♪向き合ってくれた♪）

上官の笑顔に一真は顔を青くした。

後ろにいた専属技師もいつものように一真をからかうことはせず、ただただ同情するような視線を向けていた。

（・・・サボろう。大丈夫、徐々に慣れていくだけだ・・・最終的にメニューをこなせば大丈夫・・・）

（サボるつもりか、犀川。まあ、アイツが思い付かなければ言うやるつもりだったが・・・手間が省けた）

勿論一真は打開策としてサボるという案を考えた。

いくらやる気があるとはいえ、体力がそこまであるわけではないのだ。

『一真君の肉体はこの前送った情報収集端末で管理するから安心して！』

『は・・・え、管理・・・は？』

『この前送った装置はH-1のデータだけじゃなく、一真君の身体情報も送ってくれるの。だから、君がそのメニューに物足りなくなっても大丈夫！私がすぐに考えてあげるから！』

（なん・・・だと・・・それって、つまりは首輪じゃねえか?!）

（・・・無自覚のSは怖いな。善かれと思いながらいたいけない青年を苛めるのだからな）

（あー、遅しくなる一真君が楽しみだなあ♪）

そんなわけで今日は特訓を始めて三日目。模擬戦以降の筋肉痛とは比べるまでもないが、軽い筋肉痛の中で一真は走り続けている。

「止めたい・・・だが止めたら泣かれる・・・怒られる・・・泣きたい」

ダラダラ文句を言う自分に嫌気を感じた一真は黙って目的地へ足を向ける。目的地であるアリーナには今日も一夏達がいた。

「お疲れ様です先輩」

「頑張ってるな一真」

「スポーツドリンクですが、どうぞ」

「サンキュー」

セシリアから受け取ったスポーツドリンクを飲みながら一真は

荒い息を吐く。

「しかし、よくそんなメニューこなせるよな」

「少しは見習ってほしいものだな」

「確かに。どこかの誰かにも一真さんのように直向きに励んで欲しいものですね」

箒とセシリアの言葉に刺があるのには理由がある。

鈴だ。

最近の一夏は鈴が怒っている理由でもある約束について夢中になるあまり特訓にも集中しきれていない。つまりは自分達を見たくないから拗ねているのだ。

「こんな可愛い子に気にしてもらえるなんて、羨ましいねえ」

「からかうなよ」

「はあ、たまにわざと鈍感を装ってるんじゃない、お前？」

「一真だって可愛い子に気にしてもらってるじゃないか！

ほら、三組の子とか一組の子とかさ」

「あれはあくまで相談に乗ってるだけだ。ただお節介を焼いてるだ

けだから邪推するな」

「お前の方が鈍感なんじゃないのか？」

「鈍感じゃないが、気にし無さすぎてる自覚はあるから大丈夫だ」

（どっちもどっちだ）

（自覚していない分だけ一夏さんの方が酷いですわね）

シャトルランの準備をしてもらう間、一真は一夏の手伝いの下でストレッチを始める。

「間に合うのか？」

「俺はどこぞのナノマシン集合体兵器じゃないから間に合うわけもない。やつこさんは傷付けば傷付いただけ強くなるが、俺は弱くなる一方だ」

「隼人の心境の変化には胸が熱くなったぜ。特にアル達を助ける所なんか涙でてきた！」

箒とセシリアの視線に耐えきれなかった一真は息を整えもせず
に走りだした。

（俺は悪くない・・・俺は、悪く・・・ない？）

視界の端で二対一の形で特訓を始める一夏達を見ながら一真は重くなる足を叩いて気合いを捻出するのだった。

訓練も終わり、男子組は現在集団浴場にやってきた。

「かあゝゝゝっ、生き返る！」

湯船が大きく波打つ程に勢いよく飛び込んだ一夏は満面の笑みで手足を延ばす。

熱い湯によって体の疲れが融け出るような快感に酔いながら、一夏は隣で身動き一つ取らない一真を揺すって起こす。彼は鼻の頭が沈むまで動いていなかった。

「寝るな。溺れるぞ」

「・・・ああ、悪い」

「本当にどうしたんだよ。なんからしくないじゃねえか」

「・・・ちょっとな」

うとうとしだす一真を見ながら一夏は今なら聞けなかったことを聞けるような気がした。

「そーいやさ、前に言ってたよな。俺とお前は違う・・・俺には千冬姉がいるけど、一真には何にもないって」

「・・・ああ」

「何が、違うんだ？」

俺とお前の何が違うってんだ？」

「・・・だりい・・・」

ほぼ寝始める一真の顔が若干だが渋くなる。

「なあ、教えてくれよ」

「・・・お前は織斑先生がいたから保護という形で落ち着けた・・・俺と違い、世界屈指・・・ISと一番長く付き合いのある姉がいたから保護になったんだ・・・」

とても小さな声で一真は話し始める。

「そんなもの、なかった。普通の家庭・・・普通の家族、普通の日常・・・一夜で世界初の男でのIS適合者になった。地獄だった。一般家庭の高校生を拉致するくらい国家組織なら簡単だ。それで世界の男性IS適合者の実験材料が手に入るなら、どこの国もすぐに取り掛かる。もう二回拉致された。・・・ス、カウトと脅迫も合わせれば数十になる」

ポツリ、ポツリと一真は喋りだす。半分寝呆けている一真の声は所々で聞き取れないが、大体の内容は把握出来た。

「運が無かった・・・俺は、進んで実験材料になる以外は選択肢はなかった」

「嘘だろ？」

「それだけの価値はある」

一真はそれ以降何も語らず、返さずにただ眠りについた。それから暫くは無言で過ごした。頭がボーッとするまで湯船に

浸かっていた一夏は気分を変えようと体を洗おうと湯船から出る。

そして、一夏が体を頭を洗い始めた頃だろう。ガラガラガラ、と扉を開く音が浴場に響いた。

「「え……？」」

「ん……もう出るのか一真？」

「な……んで……！」

「どうして、ですの……！」

「ん？……ん？」

一真の様子がおかしいと感じた一夏はシャンプーを流し、髪の水気を振り払う。それから見たものは、豊かな乳房と張りのある肌であった。

「なんで貴様がいるのだ一夏……っ！」

「一夏さんのヘンタイ……っ！」

「なんでいるんだよ……っ?!」

そこにはバスタオルで体を隠した箒とセシリアがいた。2人共

急ぎ大事な部分をタオルで隠し、顔を朱に染める。一夏はわけもわからず互いを指差して叫ぶのだった。

「もう男子の入浴時間は過ぎてるぞ！」

「いや、女子だって過ぎてるじゃねえか！」

「こ、こっちを見ないでください一夏さん！」

「わ、悪い?!」

「Z z z . . . (主人公熟睡中)」

騒ぎ続ける3人を余所に一真は寢息をたて続ける。巧い具合に湯煙と光の屈折に隠された一真は箒達に見つかると事なく安眠し続けることができ、それと同時に巻き込まれる事なく疲れを癒していた。

「貴様、ま、まさかわかっていたのか . . . ?」

「そ、そうなのですか？」

「んなわけあるか！わかってたらすぐに出ていったっつーの！」

「 . . . 」

「な、なんだよ . . . 」

「愚鈍だ愚鈍だとは思っていたが」

「まだ、そう見られてはいないとは分かっていたが」

「・・・うぜえ」

一夏の言葉は2人の逆鱗を逆撫でし、一真はそんな3人の騒ぎに少しずつ起き始める。

「ちょうどいい・・・ここで引導を渡してくれる!」

「乙女を傷付けた罰、万死に値しますことよ!」

「ええ~~~~っ?」

「・・・うる、さい」

箒は木刀を取出し、セシリアは腕部のみISを展開する。

「つかなんで木刀持ってんだよ!」

「嗜みだ」

「侍かお前っ?!」

「黙れ!」

「あつぶね！」

（逆上せてきた・・・気持ち悪い）

箒の一撃は一夏の腰掛けていた椅子を粉碎し、乾いた音をたてながらタイルとぶつかり合う。避けていなかった間違はなく頭が割れていた。

「殺す気か！」

「避けるな！」

「無理に決まって――」

「せいっ！」

「うおい?!」

「っち、避けましたね」

「避けますことよ！」

セシリアの鉄拳を避けた一夏は冷汗で体を冷やしながらタイルをみる。無残に碎けたタイル。避けなかった自分の末路と重なった一夏はやっと事の重大さを思い知る。

（早く寝ないと・・・）

「な、生身にI S使うか普通？！」

「乙女の純心、傷付けた罪は万死に値しますわ」

「んな理不尽な！」

（疲れた・・・眠い・・・煩い・・・）

逃げ惑う一夏を追う二人の背後を足を引きずるように通りながら一真は誰にも気取られずに脱衣場に辿り着く。もそもそと着替え、帰路につく。途中、何度か意識を手放したが、それは通りがかった知り合いやH・1の助けによりなんとかあった。

その後の事だが、一真が自室に到着した頃には既に集団浴場は半壊にまで陥っていた。さらに逃げていた一夏は、激しい動きによりタオルがはだけた筈とセシリアの裸をしっかりと見るのであった。

その翌日。気分のいい快晴の下、一真はいつものように登校した。

クラスに着き、読みかけの雑誌でも読もうかと広げた一真だったが、声も掛けずに近づいた箒達に気が付いた。

「先輩・・・」

「犀川さん」

三人は酷い隈を目の下に作っており、それを見た一真は大変驚く。また、違う意味で一夏には驚くことになり、目の下の隈は共通しているが赤く腫れた頬と目の青痣、さらには引っ掻き傷もあるのだ。喧嘩をしてもここまで酷くはないだろう。

「お前らどうした?!」

「・・・昨日、あの後にな」

「昨日?あの後?・・・また、何かしたのかお前ら?」

一夏なら仕方ない、そういつて呆れる一真の言葉に周りはずまらないと言わんばかりに溜め息を吐く。特に2人の少女は見るからに絶望したと言わんばかりに一真を見つめていた。

「何見てんだそこのアホとバカ」

「KF・・・じゃないだど?」

「絶望しましたー。ここまで持ち上げて落とす犀川さんに絶望しましたー」

「おーけー、おーけー。とりあえずお前は拳骨な。それとKFってなんだ？」

「「一真、不幸になる」」

「よろしい。ならば戦争だ」

「落ち着こう、ね、犀川さん」

引きつった笑みを浮かべる一真を少女が宥めた事でことなきに終わる。だが、陰悪な空気は変わらない。変わったのは一真の中での少女に対する好感度くらいだ。

「・・・白を切るんですか？」

セシリアの目が据わる。

「うわあ、なんかすんげーデジャブだけど・・・敢えて聞こう。序でに言わせてもらうが、それでも僕はやってない！」

「なにになに？ “やっぱり” また何かしたのかかずー？」

「ダメですよ、犯罪はー。“学ばない” んですかー」

「ふ、2人共、まずは話を聞こうよ」

「んじゃ、理由を聞こうか。」

後、その2人は話があるから覚悟しろ」

「・・・昨夜、貴方は一夏さんと共に浴場にいましたね？」

「裸の付き合いがかずー？」

「お前が言うとか嫌だな。」

確か、確か、確か・・・入っていたような記憶はある」

「っ！・・・ふう。」

つまり、貴方もあの場に居たのですね？」

「ああ。だが逆上してきたから上がったけどな」

「つまり、居たことは否定しないのですね？」

「んで、今度は何だ？」

どっしり構う一真に対し2人はわなわなと震えだす。

「っ、つまり・・・貴方は、私共のはだ、裸を・・・?!」

「裸・・・ああ、そういうことね」

納得したというような一真に対し箒の反応は早く、何処からか取り出した木刀を振り上げて下ろした。

ガギン、という金属音がクラス中に響き渡る。一真が部分展開した頭部と木刀がぶつかる音である。

（・・・恐かった。本当に恐かった）

「・・・」

「目が据わってるってレベルじゃないぞ。大丈夫か篠ノ之？」

「見られた・・・見られた見られた見られた見られた見られた」

「・・・え、マジ恐いんだが？」

ブツブツと呟き続ける箒を見た一真は恐怖する。明らかに彼女は正気でなく、何かに取り付かれたという言葉がぴったりであった。

「んー、つまりお前らは俺が浴場で裸を見た事を咎めに来たのか？」

一真の言葉にクラス中、外にいた野次馬が騒つく。そして箒とセシリアから何とも言い難い何かが噴き出す。

「ならやっぱり俺は無罪だな」

「言い訳など見苦しい・・・潔く、死ね」

「はいはい、落ち着こうなー。次も防げる自信ないから」

木刀を振り上げる箒を羽交い締めにし、目の前の危険を取り除く。

一応ISを装着していた一真は自分の判断が正しい事に自画自賛する。なにせ、羽交い締めにした瞬間に木刀の柄で眼球を叩いてきたからだ。下手をすれば失明も考えられる。

「まず、昨夜の俺は完全に風呂場で寝ていた。さらには寝呆けていたから何時着替えたのかも覚えていない」

「信じるとでも？」

「証人ならその三人だ」

一真に促されて三人は昨夜の彼の行動について語る。

まず、廊下を歩いていた彼を目撃。突然座りだし、寝始める彼を起こすが完全に寝呆けており、三人が自室まで運んだ。つまり、昨夜の一真にとって何時からが夢の中で、何処からが現実なのか第三者の証言が無いかぎり分からないのである。

「あの時は大変だった・・・かずーがいきなり抱き付いて私を、あそこまで激しく貪るなんて・・・」

「絶対無いわー。寝呆けても絶対無いわー。まだこっちなら理解出来るが、お前はないわー」

「わわわ私い?!」

「私を犯した責任、とってもらうわよ!」

「ん?殺すの間違いじゃないのか?バラバラにしなきゃいけないのか・・・汚れていい服あったかな?」

「わー、レイプ魔の上に殺人鬼なんて外道ですー鬼畜ですー人間の底辺ですー」

「・・・ぐす。」

とにかくっ!昨夜は確か八時半過ぎに入った覚えがある。つまり、女子の入浴時間は過ぎていたはずだ・・・俺らが責められる謂われはないはず」

「「うぐう・・・」」

「たとえば、俺らが男子の入浴時間を過ぎてまで入っていたとしても女子が入っていいというわけではない。違うか?」

「それは・・・ですが!」

「さらに、俺達の衣服は籠に入れた状態で椅子の上に置いていた。つまり、必ず見える位置に俺らの衣服はあったんだ・・・それに気付かなかったのならお前達の落ち度、違うか？
はい、論破ー。証明により無罪放免。さあ、帰りな」

ぐうの音も許さない一真は一気に畳み掛けた。シッシツと犬を払うように2人を帰らせようとしたが、2人は帰る事を拒んだ。

「なら・・・なら、この怒りはどうすればいいんですか?!」

誤解は解いた。彼女達の落度で、此方には罪がない。だというのに自分の無実を証明し終えた一真は焦る。

なにせ、箒とセシリアが泣きだしたからだ。そうなると周りは彼女達に付き、一真は間違はなく悪役となってしまう。

「え・・・え、え?!」

な、泣くなよ!俺は見えてないんだから問題ないだろ?!」

「ひっく・・・ひっく」

「うう、えぐ・・・」

「いやー、これはかずーが悪いわ。理屈は解るんだけど、女としてはねえ」

「女の敵ですー。万死ですー。この蛆蟲がー」

（・・・ええ~~~~っ?!

俺、悪くないよね!何も悪くないよね?!なのになんでだよちくし
よう!)

泣き止まない2人を前に一真は責めるような視線に泣きそうに
なる。

「だぁーっ!解りました、解りましたよ!ようはケジメつけれ
ばいいんだな!それで納得するんだな?!」

「ケジメ・・・って、ひっく、なんで、うう・・・」

「うわあああん」

「いいからこっちこいガキが!」

泣き喚く2人を引き寄せ、肩を抱くように耳を近付ける。最初
こそ拒んでいた2人だが、離そうとしない、逆に力を強める一真に
次第に力を緩めていく。

「いいか、よく聞け。お前達は間違はなく一夏に裸を見られた・・・
間違いないな?」

一真の問いに2人はコクリと頷く。

「つまり、お前達は今、一夏に責任を取らせる口実が出来たわけだ。わかるか？」

「・・・どういふことですか？」

「今のお前達は、言ってしまうえば一夏の将来の嫁になれるんだよ」

「「・・・ええ？！」」

「日本において、男が女を傷つけた場合、責任の取り方としてそいつを嫁にするというやり方がある。ならお前達が一夏を婿にしても問題は無い！」

「「・・・」」

「さあ、後は大丈夫だな？」

「犀川さん！ありがとうございます！
私、この御恩は一生忘れませんわ！」

「犀川先輩！やはり私達の事を分かってくれるのは貴方しかいなかった！」

先程と打って変わる2人に周りは戸惑った。一真が彼女達に重大な何かを気付かせたのだろう。

それからの事になるが、一夏は2人から様々な形でアプローチを受けることになるのだが・・・一真がそれを助けることはこの先一生なかったらしい。

「た、助けて一真!」

「待たぬか一夏!」

「お背中お流ししますわ!」

「なに盛ってんのよバカ一夏!」

「元気だねー」

事件その4 「セカンド幼馴染みがフラグを建てたからさあ大変」(後書き)

一真

「モグモグバキッベキッモグ・・・」

一夏

(あれ、租借音にはあるまじき音が・・・)

セシリア

「そういえば犀川さん」

一真

「モグモグモグユーアショッ・・・。なんだ？」

一夏

(なんか叫んだ！叫んだよな、今さ？！)

セシリア

「一真さんのISはH・1、つまりはナインボールなんですよね？」

一真

「そうですの」

セシリア

「ゲームではナインボールは無人機、それも人間が乗ることが出来ない機体ですわよね？」

一真

「ですよ！」

セシリア

「一真さんは平気なのですか？」

一真

「・・・平気なわけないだろ。

ナインボール、ここでは上位機体であるセラフを例にするが、アレ、短距離間での速度がマッハ2だぞ。そんなのに人間が乗ってみろ・・・死にはしなくても一瞬で後遺症持ちになっちまう」

箒

「だ、大丈夫なんですか先輩?!」

一真

「全力で使わなければ問題ない。使ったら全身筋肉痛か重体で入院生活の始まりだぞ」

箒

「よ、良かった・・・」

一真

「いやあ、篠ノ之は可愛いなあ。そう思わないか一夏？」

一夏

「・・・・・・・・ん？」

一真

「なんで耳掃除してんだ？」

一夏

「いや、ちょっと空耳が酷くて・・・」

一真

「やってもらえばいいだろ、耳掃除」

一夏ラブーズ

「っ?!」

一夏

「誰にだよ?まさか、お前が――」

一夏ラブーズ

「私がやってやろう!／私がしてさしあげますわ!」

一夏

「え?」

一真

「・・・(ニヤニヤ)」

主人公&ヒロイン 暴走中・・・

一夏ラブーズ

「・・・(にへら)」

一夏

「酷い目に遭った」

一真

「こんな美少女2人に膝枕してもらったのか？どうだった、やわらかかったか？」

一夏

「緊張してそれどころじゃなかったっての！」

一真

「青春だねー。甘酸っぱいねー」

一夏

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そういやさ、一真ってナインボールに乗れるってことは強化人間なのか？」

一真

「人間だっつーの。借金そこまで作ってられるか」

一夏

「あれ、んじやなんでナインボールに乗れるわけ？」

一真

「乗るだけなら他の奴だって乗れる・・・って前にこんな話したよな？」

一夏

「したな」

一真

「んじゃ、話でも変えますか・・・ナインボールの性能にでも触れますか」

セシリア

「あ、それは是非聞きたいですわ」

一真

「はいはい。それじゃあ、基準にする機体でも決めないとな・・・打金にするか。よく出るし。そんじゃあ復習だ、ツンデレサムライ娘」

箒

「~~~~♪え、ああ、打金ですか？

打金。日本の量産型ISPAACの1つで日本では主に練習機として広まっています。

装備は近接戦闘用剣『真打ち』のみ。

性能としては世界水準より低いですが、初心者にも扱いやすく基礎を学ぶには丁度良いため戦闘用でなく訓練用として使われています」

一真

「・・・・・・・・うん。ありがとう篠ノ之さん。

（恐え・・・なんか恐え）

打金の基本性能は以下の通りだ。

最大速度..240km

瞬間最高速度…278 km

エネルギー量…1800

一真

「これを基準に進めていくぞー」

一夏十一夏ラバーズ

「はい」

一真

「まずはH・1の現状、ナインボール・オニキスについて説明しようか。

オニキスの基本性能は以下の通りだ。ちなみに、武装は省くぞー」

一夏&一夏ラバーズ

「はい」

最高速度…458 km (398 km)

瞬間最高速度…750 km (500 km)

エネルギー量…2600 (2000)

慣性中和装置…AIC

O A…未確認

一夏

「先生！シールドエネルギー量がピンと来ません！」

一真

「白式のシールドエネルギーは3500だ」

一夏

「結構エネルギー量が無いんだな」

一真

「白式みたいにエネルギーをバカスカ使わないからな。

ちなみに、セシリアのブルティアーズよりも遅いぞ。しかもハイパーセンサーの性能も落ちる」

箒

「そうなのか？」

セシリア

「え、ええ。

おほん。ブルティアーズの最高速度は512kmです。既存ISの中では最速ですわね・・・ですが、最高速度が750kmなんて聞いたことありませんわ」

一真

「最高速度〓OBだからなあ・・・使えるかどうかは別になるが」

箒

「しかし第三世代、しかもエネルギー兵装があるにしてはエネルギー量が少なくありませんか？」

一真

「エネルギー兵装（以後、EN兵装）を使用してもこれで足りるんだ、オニキスは。」

まず、オニキスのEN兵装であるパルスマシガンは一発で厚さ1000の壁を貫通し、レーザーグレネードは二階建ての建築物を一撃で吹き飛ばす事が可能だ。既存ISに対してバカスカ撃つことなんてまず無いからこれで十分なんだよ」

一夏

「耳が！耳が痛い！」

一真

「セシリア戦・・・」

一夏

「ぐ！」

一真

「鈴音戦&敵襲」

一夏

「があっ！」

セシリア

「や、やめてください犀川さん！」

一真

「ボーディビツヒ戦&VTS暴走」

一夏

「うああっ！」

箒

「お願いします！やめて、やめてください先輩！」

一真

「……………銀の福音」

一夏

「ぐあああああっ！」

一夏ラブズ

「一夏あああっ！／＼一夏さああああんっ！」

一真

「ああ、楽しい」

主人公&ヒロイン お茶菓子咀嚼中……

一真

「ボリ、ボリ、ボリ・・・ずずうー」

セシリア

「そういえば、この作品でのE N兵装とはどの程度の威力なのでしょう？」

箒

「あ、私も気になります」

一夏

「俺の零落白夜もE N兵装になるのか？」

一真

「E N兵装ね・・・。まず、基本的にI Sの兵装はリミッターが設けられてる。理由は人を殺さないためだ」

一夏

「まあ、当然だな・・・あれ、もしかして雪片二型って結構ヤバイ？」

一真

「急所にジャストミートすれば間違いなく入院コースです主人公」

一夏

「・・・なんか、悪いなセシリア」

セシリア

「いえ、私も初めて知りましたわ・・・」

箒

「そうなのか？ てっきり分かっているものだ・・・」

一真

「雪片二型はエネルギー系を無効化するからな・・・まずシールドは役に立たない。次にISの装甲だが、EN兵装だから防げてもち気持ち程度、さらに下にある絶対防御はシールドだ。分かるな？」

一夏

「どどどどうしよう箒、セシリア?! お、俺の白式って雪片二型しかないぞ!」

箒

「落ち着け一夏!」

セシリア

「そうですわ!」

一真

「落ち着いてくださいまし一夏さん! 大丈夫に決まっていますわ! (キラ)」

セシリア

「むっき~~~~っ！」

一真

「危ないですよ！」

セシリア

「その喋り方をやめてくださいますし！」

一真

「だが断る・・・ですよ！」

一夏

「一真あー！俺、俺え！」

一真

「ば、バカ！やめろ離せ！」

セシリア

「天誅！」

一真

「イゝエエエア！」

主人公&ヒロイン 説教中・・・

一真

「あー、説明続けるか。

まずEN兵装だが、時間がないからまた今度な」

今回の舞台裏はここまで。

事件その5 「親方!空からSLBがっ!になったからさあ大変」(前書き)

この小説は、妄想とノリにより出来ております。

「分の悪い賭けは嫌いじゃない・・・」、そんな漢気溢れる方以外はまず顔の半分だけ白くし、口紅も半分塗ってから「おのれ、覚えておれ!」と男爵ごっこしながら見てください。

事件その5 「親方！空からSLBがっ！になったからさあ大変」

クラス対抗戦当日。対戦表が発表された翌日の事である。

「さあさあさあ！やってきました、参りましたあ。一学年クラス対抗戦第一回戦！」

わあーっ、とアリーナ中が沸き上がる中で選手待機場所兼司会進行席である第二管制室ではマイクを掴みながら熱弁する少女がいた。

その脇では真耶と千冬が計器の確認をしており、その背後には箒とセシリアが腕を組みながらディスプレイに映る一夏を睨み付けている。ちなみに、ディスプレイ越しに睨まれている一夏は視線を逸らしている。

そして司会席には三組の仲良し三人組と、布団ごと簀巻きにさ

れた一真が寝息をたてていた。

「朝だっちゃダーリン！」

「・・・きめえ」

「ウチ、傷付いたっちゃ！」

「あだだだだだ！」

無理矢理揺すり起こされた一真はボソリと本心を漏らす。その一言で頭にきた少女はポケットからスタンガンを取り出すと迷いなく一真に使用した。彼の首筋からはブスブスと薄い煙が上がっていた。

「テ、ンメエ！無防備な人間に高圧スタン使うとかありえねえぞ！」

「乙女の怒りによるトールハンマーだっちゃ」

「それスタンガン。トールって髭面ガチムチなオッサン。あとお前はただのクソアマ」

「・・・愛情表現三倍だっちゃ」

「なあにが愛情——あばばばb b b b！」

本日二度目の高圧スタンガンを受けた一真は白目を剥きながら床に倒れてしまう。そんな彼を足蹴にしながら少女は西部ガンマンのようにフツとスタンガンの煙を吹き飛ばした。

「ゲストである犀川一真氏が急遽体調不良で倒れたため、緊急ゲストとして・・・あー、しののんとセシリーでいいか。

緊急ゲストとして織斑一夏氏のファースト幼なじみである篠ノ乃箒氏と、模擬戦で唯一織斑選手と戟を交えたセシリア・オルコット氏を迎えたいと思います！」

「犀川さんは?! 大丈夫なの?!」

「なんか泡拭いてますねー。ばっちいですー」

「山田先生。保健の先生を今すぐ呼んでください」

「あわわ、大変ですーっ?!」

「カオスだ・・・」

「カオスですわ・・・」

「では、選手の準備が整うまで彼女達について紹介をしていききたいと思います!」

少女の無理矢理な司会進行により対抗戦は選手の紹介へ進む。

「まずは先々週に電撃転入を果たした中国代表候補、凰鈴音選手！鈴音選手は専用IS・甲龍を持つ代表候補。第三世代型でスペック上はセシリア氏のブルーティアーズと肩を並べておりますが、如何ですか？」

「へ・・・えと、はい。確かに総合的には同性能、若干ブルーティアーズが優っていますわ」

「ほうほう。ちなみにどこあたりですか？」

「最高速度、後はセンサーの性能、さらには見た目の美しさや操縦者の有能——」

「ガアアアアッ！」

「きゃっ?!」

「復活早いですねー」

【暫くお待ちください】

「・・・えー、大変おまたへひまひた。ゲストの犀川様が御目覚めになられたのでかいへつおねはいひまふ」

「なんのだ、クソ女」

「鈴音選手にふいへへふ」

「ああ？あのチミっこの？

・・・めんどくさい。紹介してやれ一夏」

『俺がか?!』

復活した一真は不機嫌さを隠しもせず好き勝手していた。

一応制止する者もいたが、一真の睨みにより半泣きしてしまう。

「・・・犀川、軍に報告されなければ自重しろ」

「っち・・・」

小さく舌打ちした一真を千冬は見逃す。本来なら手が出てもいいのだが、彼を同情して見逃した。

「あー、と。ざっと見て甲龍は近中型のISだな・・・特に中距離を意識してるように感じる。それにパワータイプだ。既存のPACではミズチとタメは張れる高出力だ」

「どういった所が意識してるんのか？」

「まず、近接武装は双天月牙と呼ばれる青竜刀のみ。それに間接系が頑丈だから近接では分が悪いかもな。下手に組み合わせPICに負荷掛けるからエネルギーの損失にもなる。

中距離に関しては衝撃砲しかないのが特徴か・・・スペック上ならまだ武装は二〜三持てそうだな」

選手側には見えないよう機体スペックがアリーナの大ディスプレイに映される。

今回のクラス対抗戦、ただの実力検査以外に生徒に客観的にISの動きを知ってもらう意味もあるのだが、今回から整備技師を目指した一真が在校しており、軍からは彼の知識は高卒から大学二年までの知識があると太鼓判を押されている。その知識を振るってより深くISについて知ってもらうという動きも今回の対抗戦にはあるのだ。

「まず、ISは様々な武装を装備するにあたりデータ容量が深く関

係してくる・・・なんでだ侍娘」

「サム———?!」

「早くしろ」

「・・・量子化にあたりISに記憶、量子化、復元させるからです」

「正解。

篠ノ乃が言ったように、ISは量子化のためデータ容量を喰う。勿論拡張も可能だが、拡張領域が必要になる」

「あれ、だったら何で鈴音選手は容量を遊ばせてるのさかずー?」

「さあな。チミっここに聞け。

考えられるのは上から余計な事はするなど言われているか、武装がないのか、もしくは容量に遊びを作る事で処理速度を上げているかの三点だ」

解説を聞いていた生徒から感嘆の言葉が上がる。中には考え付いていたのを自慢したり、メモを取って後々に役立てようとする者もいた。

「まあ、性格を見るに忘れてるか、使いこなせないんじゃないか?」

『ぬうううわんですってー!ー!ー!ー!』

「煩い。黙って試合の準備してろチミっこ」

『ふざけんじゃ——（ブツリ）』

余りにも喧しい叫び声にスピーカーを切った一真は涼しい顔で解説を続ける。

「さて、続けるか」

「あの、犀川さん・・・」

「なんだ？」

「容量に空きがあるなら武器を入れられるだけ入れた方が有利にならないかな？」

「ならない」

誰もが当り前だと考えそうな事を一真はキツパリと否定する。

「ええ?!」

「な、なんでだよかずー! 武装が増えればその分だけ作戦の幅が増えるじゃんか!」

「あー、煩い。少し黙れ。」

まず、代表候補以外が武装増やしても使い切れない。今、誰かが打

金をカスタムしても代表候補からすればただの的でしかない」

「なんでですかー？」

「後は織斑先生に聞け。少し疲れた」

「ほう、教師に尻拭いさせるとはいい度胸だな犀川」

説明責任を途中放棄した一真を睨み付けていた千冬だったが、周りからの期待の視線に負けて解説を始める。

「まず、初心者に銃を使わせるのは危険過ぎる。誤射の可能性も含め、パニックになった者がまず頼るのは分かりやすい力である銃だからだ」

千冬の説明に周りの生徒は真剣に耳を傾けた。その間、真耶は一夏と鈴音の準備の進展具合を確認する。両者共に機体の最終調整に入っていた。

「しかしそれ以外にも理由はある。

まずは弾速や放物線の描き方、自然界から受ける影響、銃の癖や部隊での運用など多岐に渡る。素人が持って一定以上の成果を上げるが、相手が格上ならまず逆効果だ」

説明を終えた千冬は一真に拳骨を与える。マイク越しでも分か

る重い音に幾人かの生徒と一夏が思わず頭を押さえてしまう。

「ゲストが呻いている間、代わりに私がゲストから聞いたことを説明させて頂きます。

データ要領を空ける利点ですが、実力者になればなるほど利点は大きくなるそうです。理由としてコマ単位での処理量上がり反応速度が上がるとのこと・・・

個人的にバスロットを使用するという案を上げましたが、バスロットはあくまで増設する容量のため処理速度が落ちてしまうそうです。

犀川氏としては操縦者に高速処理と並列処理の高さがあれば幾らでも積み込んでも問題ないそうです。

以上、容量に関する解説でした。

さて、今回の戦いですが一番の見処は・・・近接特化機体と凡庸機体の戦いです！

えーゲストによると近接特化の一夏氏からは相手との距離の詰め方や間合いの取り方が学べ、鈴音氏は近中距離での闘い方が学べるため大半は此方を参考にするべきとのことでした。

・・・・・・かずー、頭大丈夫？割れてない？悪くない？」

「とてつもなく痛い・・・恩師である鉄拳を思い出したくらいだ」

見兼ねた真耶は呻く一真に氷嚢を渡す。

「早く続けねば第二、第三の鉄拳が落ちるが・・・いいのか？」

「PTAってIS学園に影響力あるんだろうか？」

「ないな」

「さて、解説だったか・・・話すことある？正直すべて話したような気がするけど。」

「まだ選手は準備できてないの？」

ディスプレイに映される鈴音は問題ない。だが、未だにカタパルトデッキに一夏はいる。見ればいつの間にかいなくなっていた箒とセシリアに激励されているようであった。

「鈴音選手は終わってるね。」

「一夏選手は・・・イチャラブしております隊長！」

「青春してるねー。」

「まあ、若いんだからすぐ終わるだろう。」

「さて、その間に場の繋ぎはないものか・・・」

「御便りコーナー！」

「突然だな」

「ペンネーム、夜も眠れない乙女さんから！」

「不眠症かよ。まあ相談なら気軽にしてくれれば教師も聞いてくれるんじゃないか？」

「最近ダーリンが冷たいっちゃ。ラムの愛を受けても気付いてくれ

ないっちゃ・・・どうすれば愛されるか教えて欲しいっちゃ」

「鯖折りと定食1週間、選ばせてやるから選べ脳内お花畑」

「定食1週間でF A」

「朝昼夕で1週間だな。わかった」

「かずーが紐になったよみんな！

やべー、これからどんな命令して過ごすか楽しみ！涎が止まりませんなフヒヒヒ」

「やべー、こんな墓穴掘られるなんて考えてなかった」

一夏の準備が完了したことで試合は開始する。

空中で睨み合う一夏と鈴音は互いに開始の合図を待っていた。

一夏は鈴音の視線や仕草に注意しながら何度も初撃のシミュレーションを行い、鈴音はどう彼を苛めるかを考えては口元をニヤつかせる。

「謝るなら手加減してあげなるけど、どうする？」

「いらねえよ・・・全力で来い」

「へえ、自信はあるんだ。でもね・・・」

『開始！』

「私はイギリス代表候補とは違うわよ！」

開始の合図と共に背中の双天月牙を抜き、連結させてブースターを吹かしながら突撃する。

「・・・やっぱりな」

「え?!」

大きく振り抜く鈴音に対し、一夏が取った行動は急下降だった。

鈴音に向かうように下降した事で双天月牙の刃先は一夏のヘッドギアを擦り、最小限のダメージで初撃を過ごす事ができた。

鈴音からすれば余裕と傲慢から一夏の動きを予測もせず、先制は貰ったという甘えた考えにより数秒間という僅かな間、彼女は見失うという失態を曝してしまう。

「うおーっ！」

「ひゃっ」

一夏は鈴音の初撃を回避後、イグニッション・ブーストを使用し背後を取る。そしてガラ空きの背後を斬り付けるのではなく、身体ごとぶつかりにいく。

驚いた鈴音は姿勢制御も出来ず自由落下を始め、一夏もそれを追う形でブースターを最大まで吹かす。

体勢を整える鈴音に対し、一夏は整え終える前に雪片二型を一线。慣性に逆らわず独楽のように回転しさらに鈴音を蹴り飛ばす。

「お前の入れ知恵か？」

「教えてくれと頼まれたので」

「中々にセコいやり方じゃないか」

「敵と真正面から打ち合って勝つのが許されるのは中学生までで、高校に上がったんなら小細工やフェイントは必要だと思いますが？」

「ふむ、通りだな。」

剣道等の武道のみならず、勝負事には必ず騙し合いが発生する。小手先を狙って相手の動きを封じることまた必要なのは確かだ」

「でも男らしくないな」

「篠ノ乃さーん、それは暗に一夏が凰にボコられてもいいという発言ですか？」

「犀川さんの言葉も最もですが、紳士として・・・ましてやブシドー精神で有名な日本人としては情けないですわ」

「戦いで策を弄するのは常識でしょ。無策で勝てない相手なんだから仕方ない。」

あ、あと付け加えるならオルコットの闘い方はどっちかと言えば俺みたいに相手の行動を許さず、蹴り倒すのが一番だ。まあ記憶の片隅にでも置いておくといい」

「むー・・・あんな闘い方嫌ですわ」

「あくまで一例だ。」

あと、そういった可愛い仕草はまず一夏に見せてやれよ」

一真の言葉に納得いかないセシリアはむくれながら彼を睨み付ける。そんなセシリアの幼さを感じる表情に癒されながら一真は外部スピーカーが入ったままなのに気が付く。

「・・・私の知らない間に随分好かれてるみたいね」

スピーカーから聞こえてくる会話を聞いていたのは何も観客達だけではなく、選手にもしつかりと聞こえていた。

途中までは斬り付け、蹴り飛ばし、また斬り付けていた一夏だったが、無理矢理に振るわれた双天月牙によりそのサイクルは切られてしまう。しかも切られただけではなく、明らかに最初と比べると様子がおかしい。

「少し躰が必要みたいね」

特に目が据わっている。

鈴音は双天月牙を一夏に向けて投げる。

「なっ?! 戻ってきやがった!」

注視していた一夏は難なく避けるが、ブーメランのように戻ってくる双天月牙に驚いてしまい体勢が崩れてしまう。

「なにボサツとしてんのよこのバカ!」

「え、うわぁーっ?!」

甲龍の両肩に装備された衝撃砲。それが自分に向いており、砲音が聞こえた瞬間に一夏は見えない衝撃によって地面に叩き落とされる。

「ぐ……痛っ、なんだよ今の？」

衝撃と落下により平行感覚が軽く麻痺した一夏は数度頭を振って無理矢理に回復する。

「ほらほら！まだまだ行くわよスケコマシ！」

「うわぁ、ちょっ！やばっ？！」

回復してまだ間もない一夏に対し、鈴音は手加減も容赦もなく衝撃砲を撃ち続ける。一夏も回避し続けるがかなり危なげで、何度か擦っては飛行姿勢が崩れる姿に誰もが息を呑む。

「なんだよアレ！何を射ってるんだ！」

「この！こんの！」

見えない衝撃を勘だけで一夏は避け続ける。場の流れは完全に鈴音が掴んでいた。

「「「「「・・・」」」」」

「え、俺のせいなの？」

管制室にいる女子達の避難の眼差しに一真はタジタジになる。

「鈴音さん、明らかに手加減無しで撃ち続けてますが大丈夫でし
うか？」

「問題ない。凰とてシールドエネルギーが切れても攻撃を続けはし
ないだろう」

教師陣は特に気にもしないのか一夏と鈴音のISの状態を見な
がらもしものことを考える。

「この！この！あたりなさいよ！」

「当たったらマズいだろうが！」

「うっさいバカ一夏！いいから当たりなさいよーっ！」

連続して着弾する衝撃による土煙は一夏だけでなく鈴音の視界
を劣悪な環境に仕立てていく。

鈴音も冷静な状態であったならこの状況を良しとせず様子を見るか、近接に切り換えただろう。だが頭に血が上り切った彼女は年相応の少女のように駄々を捏ねるが如く衝撃砲を撃ち続けた。

この状況は、一夏にとって現状打破の待ちでもある。近づくなければいけない一夏にとって視界を悪くする土煙は味方でしかない。

相手が動きを止める、もしくは見失ったタイミングで一氣に近づけば逆転もあり得る。

「くっ、エネルギーが！」

しかし一夏にはそんな考えが思いつく程の冷静さはなかった。

（チクシヨ、このままじゃジリ貧だ！

鈴の奴、バカスカ撃ちやがって！）

実戦経験が無い一夏にとって目の前の危機は余りにも大きく映ってしまふ。

シールドエネルギーは既に600を切り、近づこうにも衝撃砲の弾幕により近付けない。近づくにはあの弾幕を攻略するしかない。

見えない衝撃と当たれば大きなダメージを受けるという事実、さらにはまだ余力があるという現状が一夏の後ろ髪を引く。

「あの、衝撃砲とは実際どのような兵装なんですか？」

「あー、見えない弾を打ち出す大砲みたいなもんじゃないのか？」

「みたいとは、また適当ですわね」

「カタログ見たことないんだから仕方ないだろ。」

まあ、知識だけならちよつとはあるが、それも人づての上にいる覚えだからな」

管制室から衝撃砲の雨に曝され続ける一夏を見下ろしながら一真は頬杖を付きながらメモを取り続ける。

「衝撃砲については私が説明します。

まず、衝撃砲の特徴として弾丸が見えないというものがあります。ですが、一番は砲身が見えない事ですわね」

「それは脅威ですわね・・・」

「砲身が見えないのか？」

説明を受けたセシリアと少女は固唾を飲むが、箒達は何故脅威足りえるかを理解できない。

真耶に詳しく聞けなかった箒達は一番聞きやすい一真に助けを求

めるような視線を向けた。

最初こそ無視していた一真だったが、あからさまに残念そうな顔をする筈に折れる。

「・・・おい」

「はい？」

一真の呼掛けに応えた筈は彼の手にもず注目した。

指に引つ掛けられた輪ゴム。子供などがよくやるゴム銃だ。

そのゴム銃の銃頭、つまりは人差し指は筈に向けられており、筈がゴム銃に気が付いた事を確認してゴムを弾いた。

「わっ?!」

あ、危ないじゃないですか!」

咄嗟に避けた筈に対し一真は千冬に入れてもらったコーヒーを飲む。何故か塩っぱかった。

「ゴムの弾道や飛ぶタイミングってのは指の向きや動きで大体分かる。これは銃にも言えることだろうな。

けど、衝撃砲には弾道を読むための砲身はない。さらには相手はノーモーションで撃つからタイミングも取り辛い」

「きゃっ?!」

パチン、と箒の額に輪ゴムがぶつかる。

「こんな風にな」

コーヒークップで隠すように引っ掛けられた輪ゴムを見ながら
箒は一真を睨む。

一真は気にもせずに輪ゴムを弾いて種明かしをする。

「今の感覚を一夏は最初に味わい、次からは・・・」

「きゃっ」

また箒の額に輪ゴムがぶつかる。今度は椅子の背もたれに引っ掛けられていたらしい。

「こんな恐怖を味わってるんだ。

見えない、わからない、理解できないの三拍子だ。博打好きな一夏もビビって攻め込めないんだろうよ」

「・・・器用ですわね」

「整備できる場所が全て目視出来るとは限らないからな。指先だけの感覚なら誰にも負けないよう鍛えたからな」

一真の言葉を証明するように一夏は何度も攻めようとしているが、一瞬の躊躇いを見せてから慌てて回避している。

（ちつくしょう・・・前に出られない）

一夏は先程の痛みを思い出しては体が緊張していることに気が付く。

（・・・ちくしょう）

仕方ない、と慰める自分がいることに無性に悔しくなる。

（なにびびってんだよ、ちくしょう！）

逃げ続けていた一夏の顔が変わる。その顔を見た箒、セシリア、鈴音はドキリとする。

いつもは頼りなさげな一夏だが、ここぞというときは男らしくなる。

（こんな場所で、こんな場所で負けてられないんだよ・・・）

一夏は逃げる事から見る事に集中し始める。回避もパターンにならないように時折蛇行したり、上下運動を取り入れる。

（負けるわけにはいかない。負けられないだろうが。俺が負けたら・・・）

一夏はチラリと管制室を見る。そこには腕を組んだ千冬が眉を顰めながら一夏の戦いを見守っていた。

（負けたら、千冬姉の名前に傷を付けちゃう・・・）

そんな一夏を一真は眉根を寄せながら見ていた。

携帯のコール音が鳴る。一真の携帯だ。

皆に謝罪した一真は一度管制室から出ていく。その間にも一夏は勝つための方法を探し続けていた。

ただ観察する。

衝撃がどこから出ているのかは、わかった。

タイミングも、わかった。

しかしただ1つわからなかった。

（いつ飛び込めばいいんだよ、クソ！）

チャンスの来るタイミングだけ、わからないでいた。

撃たれた衝撃砲は二桁を越えた。

二機ある衝撃砲はそれぞれタイミングをずらしているため迂闊に飛び込めば勝つ事は不可能に等しい。

（負けられないんだ・・・負けるわけにはいかねえだろ・・・負けは許さねえぞ織斑一夏！）

焦り始める。

衝撃がどこかを掠めるたびに負けるというイメージが強く一夏を襲う。

弱気になる自分を怒鳴りとばしながら一夏は現状を耐えた。

（クソ、クソクソクソ！

一真はこんな気持ちで戦ってたのかよ、ちくしょう！）

攻め続ける側と攻め続けられる側という違いはあったが、耐えるという条件は両者に共通していた。

一度でも攻めを止めれば技量の差から負けるしかなかった一真と、一度でも失敗れば弾幕の前に負けるしかない一夏。慣れていないこの緊張は一夏の意志を無視して彼にダメージを与えていく。

（吐き気がしてきた・・・腹も痛い。何より頭がボーッとしてきやがった）

日常では感じるこない強いストレスに段々と参ってくる。

ここまで頑張れば・・・

そういつて楽な方へ逃げようとする自分の声が大きくなっていく。

代表候補が相手なんだし・・・

まだISに乗って一月じゃんか・・・

結局、俺は千冬姉みたいにはなれない・・・

（うっせえ！言い訳すんなよ俺！情けねえぞ！
勝つんだよ。でも、だって関係ない！勝つんだ！）

弱気な自分に向かって叫ぶ。それでも、止んだのは一瞬だけであった。

弱い自分は悲鳴のように楽になる言い訳を、楽になる方法を叫び始める。

負けたくない、負けたくない、負けたくないと言を塞ぐ代わりに心の中で叫び続ける。

（何か、何か、何かないのかよ！）

弱い自分に負けそうになる一夏はそれから逃げるための方法を必死に探す。

（一真なら、一真ならどうするんだ？）

自分の中で明確にイメージ出来る強者を思い浮べる。

千冬でも、セシリアでもない。一夏をまず思い浮べたのは圧倒的な力量も、技量も、性能も使用せずに自らの策略と作戦で相手を追い詰めた一真だった。

千冬は英雄視が強過ぎるためイメージ仕切れず、セシリアは近接がないためイメージしても役に立たない。

だから一真なのだろう。

一真は自分と同じ立ち位置に近く、強者を追い詰める事をしてのけた。また一夏が初めて生でのISの戦闘を見た相手でもあった。

(・・・)

負けよう・・・

こんな苦しい思いしてまで張る意地じゃないだろ・・・

千冬姉だって許してくれる・・・

(・・・)

自分の声を無視し、必死にイメージを思い浮べる。薄らとだが見え始めた紺の背中に目を細め、その動向を窺う。

イメージの中の一真はマシンガンを使い今よりも濃い土煙を巻き上げていた。

通常なら相手でなく地面に銃器を向けて放つ一真に困惑していただろう。だが、一夏は疑問を持つことなく半透明な背中を見続ける。

巻き上がった土煙と、柔らかくなった土を巻き上げる衝撃によりアリーナの下部は一時的に視界0の悪環境になる。その中を突っ切り、鈴音の真下から飛び出す一真を見ていた一夏は前方不注意によりアリーナのシールドに激突する。

「あは、ドジったわね一夏！」

数秒間の停止。

致命的なミスだ。

だが一夏は慌てずにシールドを蹴り、爆発する衝撃に揉まれながら地面に着地、超低空飛行を始める。

武器も満足に持てないのか引き摺るように地面を引っ掻きながらフラフラと飛行を続ける。

「あは、もうダメみたいね一夏！」

鈴音の衝撃砲が一夏に狙いを定め、放つ。

空気を叩くような渴いた音が響く。

フラフラと飛行していた一夏へ翔る。

「あははは、沈んじゃえ！」

「一夏！」

「一夏さん！」

見えない衝撃が地面を爆破した。

もうもうと立ち上がる土煙の中で誰もが一夏が倒れている姿を
思い浮べた。

「え・・・？」

「無事、なのか？」

「一夏機、ダメージ軽微で戦闘続行可能です！」

「嘘っ?!」

「・・・はあ、悪影響を受けおって」

土煙の中を一夏は飛び続けた。

フラフラ、フラフラと右へ左へ飛行する一夏は頭に手を当てな
がら土煙の薄い場所へ向かう。

「っつ、マグレは二度も続かないんだから！」

一発、二発、三発、五発、七発、九発。

衝撃が連射される。

一度、二度、三度、四度、五度、六度。

一夏は衝撃に煽られながら避け続けた。

その度にアリーナに土煙が立ちこめ、一夏の影は既に消え失せていた。

『あ？ 射撃武器の避け方？』

『ああ、白式って射撃武器が無いだろ。だからせめて射撃武器に対する対策は必要と思ってさ……』

『もしかして俺対策か？』

『ちげーよ！』

『くく、冗談だ。』

でも避け方っていつでもな……そうだな』

（一真が言ってた通りだ……小さく蛇行してたら避けやすくなっ
た）

一夏は最悪な視界の中で感覚とレーダーを頼りに目的地へ飛行する。

（負けられない、よな・・・）

到着と同時に直上へ上昇する。

イグニッション・ブーストの使用、さらには三世代型ISの中でも上位の最高速度は亜音速に迫る速度を叩きだす。

土煙を巻き上げ、突き抜けた一夏は視界に収めた鈴音へ突撃をかける。

「千冬姉達の為にも負けられないんだよおおお！」

「つく、くううっ！」

「意地があるんだよ、男の子にはなああああ！」

鏑競り合いに引き摺りこんだことだ一夏は後の事を考えるのをやめた。

（ここで、決める！）

一夏は雪片二型を発動させ、エネルギー過多ともいえる量を流し続ける。

鏢競り合いによる火花により2人の顔がフラッシュを焚かれたように明滅し、エネルギーがどんどん消費されていく。

（嘘でしょ・・・私が、一夏に?!）

（勝つ、勝つ、勝つ。勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ・・・勝つ!）

ギギギツ、と少しずつ雪片二型が双天月牙に食い込んでいくのを両者は見つめあう。

そして・・・

「そこから逃げろ!今すぐにだ!」

一真の悲鳴に似た叫びがアリーナに響いた。

事件その5 「親方!空からSLBがっ!になったからさあ大変」(後書き)

一真

「むぐむぐむぐ・・・ずずっ」

セシリア

「よく食べますわね」

一真

「育ち盛りだからな・・・むぐむぐむぐ」

一夏

「そういや、話の中で一真の特徴ってないよな」

箒

「・・・思い返してみれば」

セシリア

「出て来た特徴といえば・・・」

・眼鏡

・インテリ系

・年上

セシリア

「この程度ですわね」

一夏

「他にあるとすれば、身長は高いな・・・どれくらいあるんだ？」

一真

「180付近だな」

一夏

「マジかよ、羨ましい」

一真

「不便も多いぞ。ズボンは長さで選べばウエスト余るし、靴はサイズがないなんてたまにあるし、何より天井が低く感じる」

箒

「後は、目がキツいな。切れ目だが、細いわけではない」

一夏

「怒った時とか髭はえてると野性味があるのに、無いと知的に見えるな」

セシリア

「他には少し浅黒い肌ですわね、それに肌が薄いのか血管がよく見えます・・・今日は調子悪いんですか？」

一真

「なんで？」

セシリア

「いえ、手の甲が白いので」

一夏&箒

「確かに・・・」

一真

「H・1の整備で徹夜で・・・さらに過度の訓練で疲れてる」

一夏

「少し寝たらどうだ？」

一真

「・・・・・・・・なら、御言葉に甘えて」

主人公&ヒロイン 小声で談話中・・・

一真

「・・・くう（ZZZ）」

一夏

「そういや、EN兵装の話ってどうする？」

箒

「先輩が起きるまでは無理じゃないのか？」

セシリア

「詳しい話になればそれが最善ですわね・・・

話は変わりますが、犀川さんはいったい誰とお付き合いするんです
ようか？」

箒

「それは前に答えが出たはずだ。先輩は誰とも付き合わない、そう
結論ついているではないか。何をいまさら」

セシリア

「ですが、それはあくまで予定。話とて当初のプロットからズレて
ますし・・・もしかしたら、と」

一夏

「でも、そうなると思えるのって仲良し三人組——」

少女A

「呼んだかいいっちー！」

一夏&一夏ラブーズ

「おわ?!／きゃっ?!」

少女A

「最高の反応、ゴチです！」

少女B

「どーもー」

少女C

「お邪魔します」

一夏

「ビックリしたぞ、本当に」

少女A

「ハッハッハ、ビックリさせたんだから当たり前さっ！
それよりいっちー。これをどう思う？」

一夏

「名前だな」

箒

「ああ、名前だな」

セシリア

「どこからどう見ても名前ですわね」

少女A

「いや、ありえねーだろ普通！」

少女A？少女Aえ？！つまり私の氏名は山田少女Aってか！」

一夏&一夏ラブーズ

「・・・あ」

少女A

「これは名前じゃなく記号！つまり私らは名無しなの！」

少女B

「当初はチョイ役で端役だったんですけどー、結構出ちゃってるので名前が欲しいんで簀よー」

少女C

「でも、名前が増えても読者の方が迷惑なんじゃ・・・」

少女A

「知るか！私達は名前を要求する！名無しの準レギュラーなんて認められるか！」

一夏

「でも名前が欲しいって言われてもな・・・」

箒

「うむ。私達が勝手に決めるわけにもいかんしな」

少女A

「つまりかずーを起こせばいいんだな！よし来た！」

一夏

「あ、やめろ今は！」

少女A

「とっと起きろダーリン！」

一真

「みぎゃああ？！」

少女A

「さあさああ！私に愛の籠もった名前を——」

一真

「なにしゃがるクソガキいいい！」

主人公&ヒロイン、準ヒロイン 暴徒鎮圧中・・・

一真

「・・・で、なんだ？」

一夏

（無茶苦茶不機嫌だ・・・）

箒

（顔が整ってるせいか怖い）

セシリア

（ジャパニーズマフィアのようなですわ・・・）

少女A

「かずー先生・・・名前が、欲しいです・・・」

一真

「労力を考えると却下」

少女A

「ちょっ！なんでさかずー！」

一真

「メリットとデメリットを考えた結果。

さあ、分かったら帰れ。そして俺は寝る」

一夏&一夏ラブーズ&仲良し三人組

（暴君過ぎる！）

一夏

「一真、あのさ・・・俺からも頼むよ」

少女A

「流石はいつちー！心もイケメン過ぎる！」

一真

「面倒だから嫌」

一夏

「嫌って・・・可哀想じゃねえか」

少女A

「そうだそうだー可哀想だー！」

一真

「なら山田花子、佐々木春菜、佐藤みゆきで」

一同

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女A

「ふっつー！余りに普通過ぎてツツコミが止まるわ！」

一真

「普通最高。それじゃおやすみ」

少女A

「なにか、なにかあるだろ！諦めるなよ！最後まで頑張れよ！」

一真

「・・・だってさ、名前決めたとして差し換える手間が酷い。もう9話まで出来てるんだぞ？」

山田花子候補（笑）

「だからって山田花子——なんか名前入ってるし！」

一真

「おめでとうハナちゃん」

山田花子改めハナちゃん候補（笑）

「嫌だー！そんな絶滅危惧種な名前嫌だー！」

一真

「ならアンケートで来たら考えてやるよ。来たら、な」

ハナちゃん（爆笑）

「頼むよみんな！私達に素敵な名前を頼むよ！」

主人公&ヒロイン&仲良し三人 談笑中・・・

一夏

「そうだよEN兵装！」

一真

「主語述語が抜けてるぞ。意図は汲んでやるが、社会でやってけないぞ」

一夏

「今回まで引っ張ったんだから話さないとマズいだろ！」

一真

「ええ、面倒だから誰か頼む」

一同

「却下」

一真

「孤立無縁だねえ・・・」

はいはい。それじゃ解説始めますか。

まずはEN兵装、名前につくエネルギーについてだが・・・セシリア、エネルギーとはなんだ？」

セシリア

「えっと、何かするために必要になる力ですわ。例えば押したり、引いたりする際に発生する力をエネルギーといいます」

一真

「高一なりたてなら十分過ぎる答えありがとう。」

さて、これから話すのは高一半ばに習う内容だから覚えとけよー。まず、エネルギーってのは何かに対しての仕事量のことだ。例えばこの湯飲み。これを持ち上げると俺の手には持ち上げようとする運動エネルギーが、湯飲みは位置が変わることで位置エネルギーが働く。このようにエネルギーってのは移動するし、移動した先で違う

エネルギーに変換される。発電機がわかりやすいな。あれは運動エネルギーを電気エネルギーに変えるからな。
分らないところは・・・よし、端から聞いてやる。言え」

少女A

「何もかもわかりません」

一真

「そうか。次」

少女B

「エネルギーってのは必ず等しくなるんですかー？」

一真

「なる。エネルギー保存の法則ってのがあるぞ」

少女B

「じゃあ、斜めにボールを置いたら動きますよね？あれは何故ですか？力、働いてませんよねー？」

一真

「重力だって力、運動エネルギーだ。次」

少女C

「無重力だと位置エネルギーってあるんですか？」

一真

「ある。無重力下では下にかかり続ける運動エネルギーが無くなっただけで動かしたり止める際にはエネルギーが必要になり、エネルギーは移動するから必ず発生するし保持される。次」

一夏&箒

「・・・」

一真

「次」

セシリア

「あの、でしたら光や熱はどうなるのですか？あれは何かをしていませんわ」

一真

「熱だってエネルギーだが、あれは何かを介さずにエネルギーを交換することが可能だ。さて、話を戻すぞ。」

EN兵装っていうのは熱エネルギーと光エネルギーによる武装だ。だからまず衝撃なんて有り得ない、つまりセシリアのライフルやブルーティアーズの攻撃で衝撃を受けるわけが無い」

一同

「・・・え？」

一真

「またEN兵装で地面は爆発しないし、水中で使えば自分の前方に大量の水蒸気を発生させるだけで相手には満足に届かない。なににより生身で使えば持ち手が炭化する可能性もあるから普通は兵装としては向かない」

一夏

「いや、いやいやいや！待てよ、それは待てよ！」

一真

「事実だ。ビームも、レーザーも光でしかない。光には殺傷能力などない。殺傷能力があるのは副産物として発生する熱だ」

セシリア

「・・・・・・・・・・」

ハナちゃん（決定）

「セシリアがあまりのショックで天にい！あと決定すんな！」

箒

「ああー！戻ってこい、戻ってこいセシリア！」

一真

「さらに言えば一夏の雪片二型ってのがよく分からない。エネルギー系の兵装を無効化するってあるが、何を無効にしてるんだ？熱か？光か？エネルギーの移動なんてありえないし、マジわからんな」

一夏

「やめて！それ以上、ロボット物の禁忌に近付くのはやめて！」

一真

「つか、光を切るってかなり無——」

千冬

「すまないがコイツは借りていくぞ」

一同（一真除く）　ガクブル中・・・

一真

「さっきまでの話は全て独自解釈であり、実在の人物や組織には何の関わりもなかった。だから突っ込むなよ、トラウマになったから・・・ああ、説明に戻るか。

前の話はこの世界のE N兵装の威力だったな。ナインボールのパルスライフル一発がセシリアのブルーティアーズが8発分となりますお客様」

一同

「高っ！」

一真

「リアルチート兼違法改造、舐めるなよ。

ちなみにプラズマグレネードは32発分です」

一同

「なにそれ?!」

一真

「流石ナインボール、チートだ。流石としか言い様が無い」

箒

「そういえば、EN兵装というのはエネルギーの移動により対象にダメージを負わせる事が目的の兵装ですね？」

一真

「ああ。だから火炎放射機も広義的にはEN兵装とも言える。なにより作中で何度も熱量兵装と言ってるしな」

一夏

「じゃあ電気はどうなんだ？」

一真

「使い方によるな。例えば電気を使用したりニアレールガンなら物量、電気ショックなら電導、電磁波なら周波と多岐に分かれる」

少女C（名前募集中）

「なら衝撃砲は空気圧になるの？」

一真

「あれは空気圧による衝撃だから空力だな。真空を作って攻撃する兵装もこれに当たる」

一夏

「ミサイルとかも爆発の衝撃を利用するから空力なのか？」

一真

「あれは物量とも言えるし、熱源とも言えるな。ミサイルを爆発させるのは爆発と熱、さらには散らばる破片によって対象にダメージを与えるのが目的だ。もしミサイルがなければその辺の岩を焼いて

落とせば代わりくらいにはなるが、落ちている間に冷えるし、速度も重力加速度と初速を合わせた程度にしかない。それに重量もあるから積載的に大きく劣る」

少女B

「なんか一杯あって覚え切れませんねー」

箒

「確かにな」

一真

「一般的には物量兵装とEN兵装で通ってるから気にするな」

一夏

「頭、痛くなってきた」

今回の舞台裏はここまで・・・

事件その6 「無茶ぶりされて死にかけたからさあ大変」 (前書き)

この小説は夢と希望と童心で産まれた作品です。

どんな作品を読んでも「戯言だね」「いいや、傑作だ」とシニカルに笑うくらいの心構えで読まなければ真夜中に双子の僧が夢に出ます。

それが嫌な方はヨーグルト味の飴を食べながら前向きにムーンウォークしながら生きましょう。

事件その6 「無茶ぶりされて死にかけたからさあ大変」

白い部屋、清潔感を感じさせる室内に一真は立たされていた。

円卓の真中に立たされた一真は痛々しい包帯を軍服の裾から覗かせながら険しい視線に耐えていた。

「君は、この短期間でよくここまでU・1を傷付ける事が出来たな。歴戦の兵のようだ、感心するよ」

「・・・」

「下半身各関節に酷い磨耗、上半身に至ってはフレームの歪みや亀裂もあるな。」

ブースターは・・・ほう、溶融し、スラックスが多量に付着しているのか」

「さらには先の戦闘での両腕部小破とは、恐れ入りますな」

一真は冷めた表情で男達の話をも右から左へ聞き流す。勿論、気になる箇所があれば記憶に留めるつもりではあるが、今迄の話で一真のフィルターに引っ掛かった話はなかった。

「犀川少尉、貴方はIS学園の民間人を守ったのだからもう少し楽になりなさい」

周りの悪意に曝され続ける一真を見兼ねた高槻が静かに言葉を掛ける。

最端に席していた高槻からは一真が後ろ手で組んでいた手が真っ白になるまで力を込めている様がよく見えていた。

（自らの株を上げるために利用しておきながら・・・これじゃ一真君が憐れだわ）

一真は顔の筋肉に力を入れないよう集中していた。

男達からは他人事のようにしか感じていない少年に見えるかもしれないが、高槻等、極々少数の高官から見れば酷く大人びた姿勢に見えてしまう。だからだろう。最初こそ遠回りで、厭味たらしく喋っていた男達は段々と怒りを顕にしてい

「犀川一真・・・君をIS学園に入学させたのはU・1を破壊させるためじゃないんだぞ。」

君に下された命令はあくまでU・1のデータ集め及びAIを成長させるためだ！貴重なAIを搭載させたISを破壊させるためではない！」

ドン、とテーブルが叩かれる。その怒りに任せた行動は年齢や役職不相応に感じられ、まるでいい大人の醜態である。

常識的、良識的な人間にとっては蔑むべき行為も、一真にはそれで十分効果的だった。

男の発言。それを火蓋に周りの者も続き始める。

「U・1はあらゆる面で未知のISだ。高硬度のフレームに高い出力を誇るブースター、小型で連射の可能な熱量兵器に群を抜いた動力部。
世界に2人しかいないIS操縦者より、U・1には価値があるんだぞ」

「・・・」

「何か言ったらどうだね」

「・・・理解しています」

「ならば！ならば何故ここまでU・1にダメージを負わせたんだ！

U・1のフレームの基礎素材さえ解析出来ない今、自動修復機能のないU・1を直すのは不可能なんだぞ！」

「・・・修復の努力はしております」

「っは、あの無様な修復で努力とはな。やはり何も出来ない子供にU・1を任せたのが間違いだったようだな高槻中将？」

「私は彼が最適と考えています。今もその考えは変わっておりません」

「その結果がこれでもかね？」

円卓の上に投げ出された報告書にはU・1、H・1の被害報告が記載されていた。

各部小破、パーツがないため修理は不可能。掻い摘んで言えばこの二点だ。他にも一真の状態、IS学園の被害状況、その際に彼が取った行動など様々な事が記載されている。それらは間違いなく人に褒められてもおかしくない結果であったにも関わらず一真は責め立てられていた。

たった二点。小破と修理不可能を種に男達は一真を責め、さらには高槻を乏しめる。

「彼が隔離されたアリーナの出口を作ったおかげで学園側の生徒は皆無事、中国代表候補と織斑一夏は犀川少尉の判断により無傷。他にも先の2人を助けだすためアリーナの障壁を突破し、学園の3年

や教師人の突入口を開く。それから突入口に対しISの放った熱量兵器から身を挺して防ぎ現場にいた十六名の生徒並びに四名の教師を守り、装着していた二十のISを無傷で守り切った。

全て1人で、しかも作戦も無く、さらには性能や武装を隠しながら行った。申し訳ありませんが、貴官は何が問題だと言うのですか？」

「U・1の小破だ中将！話を逸らさないでもらいたいな！」

「小破程度で済んだのも一重に彼の優秀さからでしょう。大破、もしくはコアの喪失に比べれば対した被害ではないと当官は考えますが？」

「身内鼯鼠で話すな中将。世界で唯一のU・1の小破とその程度の成果が釣り合うと考えているのか！」

男は唾を飛ばしながら怒鳴り続けた。

「U・1には日本の未来が掛かっているのだ！」

既存のIS以上の性能、世界初のAI搭載機、そして未だ解析されていない合金！

これらを日本が独占すればアメリカやヨーロッパ等よりも前へ進め、シェアも占める事が可能だ！それをたかが二十人の無事を比較するなど―――」

「発言は慎んだら如何かな？」

こことて何処に目や耳があるかわからない。今の発言が世に広まれば貴方だけの責任問題ではすまないんですよ？」

「ぐっ・・・つく」

（まったく、これだから金で伸し上がった世代は嫌だね）

若い初老に入っただけの男性が戒めるように男を睨む。

冷静になれば自分が言っていた事も理解出来たのか怒りを我慢しながら席につく。ただし、席についても一真や高槻を睨む事は止めはしなかった。

「犀川少尉によって日本は各国に恩を売ることが出来た。それは政治的にも、軍事的にもメリットのある結果ではないでしょうか？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

（黙るか・・・金稼ぎを考えてるって考えが邪推ならいいんだが）

男の言葉に円卓に席する者達は近場の高官達と目配せばかりしていた。

それは流れを切られたためなのか、それとも他の考えがあるのかは一真にはわからない。彼はただただ責め続けられるのに耐えるだけで精一杯なのだ。

「状況も理解出来ましたし、これからの事について話をしましょう。我々として会議だけが仕事ではないのですから」

会議が終わったのはあれから1時間半のことだった。

これからの一真の行動指針を決める話し合いは彼からH・1を取り上げて適正な人間に与えるか、このまま彼にH・1を任せながら支援する。この2つに分かれた。

会議は叫び声も飛び交う程に論争が続いた。一真よりも優秀な人間は他にもいる、だが彼にもH・1を手放せない理由がある。

だが、しかし、その結果、それでも・・・

発言権のない一真がその場に居続けるのは非常に辛い物があつた。なにせ、何か気に喰わないことがある度に彼や高槻を乏しめ、蔑む

言葉が出るからだ。全て自分のせいだと思える彼にとってそれは苛めにも等しい物であった。

「大丈夫、一真君？」

「・・・はい」

軍の休憩室、設置されたベンチに一真と高槻は座っていた。彼は会議が終わった後、高槻が手続きを終えるまで組んだ手をジッと見つめていた。その表情は感情と言うものが無く、焦点も合っているのか定かではない。

一真はただ耐えていた。少しでも緊張を緩めれば泣きそうになっていたためだ。

自分が出来得る限りの事は尽くし、結果も導いた。しかしそれを周りは認めず、彼や高槻を非難した。

悔しくて、悔しくて、悔しくて、泣くことさえ悔しくて、一真はどうすればいいのかも分からずにただ手を見つめようとしていた。

「少し休んだら学園に送ってあげる」

「御手数お掛けします、高槻中将」

「・・・飲み物、買ってくるわね」

1人になった一真はクラス対抗戦の日に起こった事件を思い出す。

クラス対抗戦の最中、アリーナに所属不明のI Sが突如乱入した。

H・1によって誰よりも早く襲撃に気が付いた一真は戦闘を続けていた2人に警告、2人は一真の声に遅れて鳴り響く警告音に反応したおかげで無傷でいられた。

I Sの戦闘に耐えるよう設計されたアリーナのシールドを破った熱量兵器、それはセシリアの持つライフルの数十倍以上の威力が無ければ不可能である。

誰もがそれを理解するのに一秒、二秒、三秒と時間を浪費していく。思考が感情に追い付いた生徒達がまずしたこと、それは逃げる事であった。

悲鳴が飛びかう中で千冬と真耶は客席の防護壁を展開させ生徒への被害を防ぐ。次いで外への救援と避難経路の確保に移る。

「嘘っ?! システムに繋がらない?!」

「うち、外部への連絡回線もダメか」

「携帯はどうなんです?」

「・・・ダメだな。圏外、妨害されている」

「ISの通信は?」

「あ、はい」

一真はまず通信手段を探した。アリーナに侵入してきたISはこの場にいる人間には重すぎる。無力化には実力者、せめて3年の代表候補、もしくは2年の代表候補数名が必要だった。

「・・・ダメです。ジャミングが酷くてとてもじゃありませんが通信など」

（通信、か。H-1ならもしかして・・・いや、楽観的だ。ならせめて外への避難経路を作るべきか。作るだけなら命令違反にもならないだろうし）

一真はH・1の使用可能な武装で避難経路、つまりはアリーナの内壁と外壁を突破できるかを考える。

一真が避難経路の確保に悩んでいる間も状況は刻々と進み、アリーナ内では一夏と鈴音が共闘して敵機の相手をしていた。彼らは真耶やセシリアの退去の声を無視し、増援が来るまでの時間稼ぎをするところらの言葉も聞かずに敵機の攻撃を避け続ける。

「どうするのさ、かずー？」

（ここで戦力の小出しは余りしたくないが、だがこんな閉鎖された空間で多人数で戦闘するのはマズいよな？）

「かずーも出た方がよくない？」

（2人に任せるか・・・ここで動けるのはセシリアと俺だけ。セシリアじゃ安全に避難経路を確保できるかどうか・・・なによりあんなバカみたいなIS相手に立ち回れる気がしない）

「かずー？」

「なあ、アリーナの内壁ってどれぐらい強度があるかわかるか？」

「え・・・えと、それって今答えないとダメ？」

「だいたいいい。なるべく大きめで頼む」

一真は少女に頼み一緒に壁を調べ始める。コンコン、ドンドンと壁を叩き反響音で厚さを予想する。

「んー・・・こっちの壁はざっと550〜600かな？」

「こっちの扉は25だ。材質は合金か・・・シールドは張ってないみたいだな」

扉と壁を調べ終えた一真は次にどうやって避難経路まで辿り着くかを考え始める。通路には生徒が犇めきあっているはずだ。そんな中でISで行くのは無理がある。

可、不可を問わずに一真は思い付く限りの方法を考え、組合せ、取り消し、また考えた。そして大雑把な方向性を見出だし、いざ行動に移そうとしたその時だ。

P i P i P i P i P i ———

コール音に室内が一気にシン・・・とした。誰もが目を剥き、音源を見る。そして音源の持ち主もまた大きく目を剥きながら自身のポケットを見つめていた。

沈黙が数秒続いた後、千冬がカツカツカツとヒールを鳴らしながら近づく。携帯の持ち主はまだ思考が復活していない。

「どういことだ、犀川」

「・・・」

「なぜ貴様の携帯が鳴っている？」

胸ぐらを掴み上げられても一真の意識は携帯に釘付けであった。それに苛立ったのか千冬の眉間に深い皺が出来る。

「織斑先生、落ち着いてください」

「安心していい、山田先生。私は冷静だ」

「・・・」

「まずは携帯を出せ。話はそれからだ」

千冬に従い携帯を取り出した一真はコールを掛けてきた相手を

確認し、慌てて応答を取ろうとするが、それよりも先に千冬が携帯を奪うのが早かった。

「もしもし」

「誰だね。犀川一真ではないな？」

高圧的な男の声が電話口から漏れる。一真はその声に聞き覚えがあった。

陸上自衛隊西日本部隊総隊長、古泉総次郎大将である。

「織斑千冬、教師だ」

「犀川一真に代わりたまえ」

「その前に緊急事態でな。切らせてもらうぞ」

「その話で連絡を取ったのだ。早く犀川一真に代わりたまえ」

「ならば話が早いな。至急救援を頼む」

「まずは犀川一真に代わりたまえ」

携帯を耳から離れた千冬はマイクを指で押さえ付けながら「老害め」と毒づく。

千冬から携帯を受け取った一真は耳にあてようとするが、横から千冬によって全員に聞こえるようにさせられた。勿論、聞かれたらマズいと考えた一真はやめるよう言おうとした。だが、有無を言わせない千冬の表情に気圧され、一真は仕方なくそのまま応答をする。

「犀川一真少尉、代わりました」

「命令だ」

電話口に出た一真に対し、総次郎は強い口調で短く告げた。

「今日1038にてIS学園に侵入したISにより多数の生徒がアリーナに隔離された。君にはその救護、並びにISの無力化を命じる」

「了解しました。

復唱します。1052よりIS学園の生徒を救出、後にISの無力化。

これより任務に当たります」

「くれぐれも民間人、特に代表候補に怪我をさせないよう任務に当たりたまえ」

「「「「っ?!」「」「」」

箒達、軍務に全く関わりのない者達を抜かした全員が驚く。総次郎は、一真に、現地の人間からの協力は認めないと言われたのである。

真っ先に反論したのは千冬だった。

「当然、軍からの救援もあるのだろうか？」

「・・・何故一般人が聞いているかは軍法会議で聞けど、犀川一真。さて、先程の質問だが、救援は早くても一時間後になる。以上だ」

「貴様！」

「我々の顔に泥を塗らないでくれよ」

千冬の怒号を無視して電話は切られた。残ったのはやり場のない怒りと絶望感であった。特に一真の顔は真っ青である。

（救援が一時間後？つまり一時間もアレと戦えってのか？）

「犀川」

（違う。あれは1人でこなせてことだ・・・あんな化け物に1人で・・・無理だろ、そんなの！）

「犀川！」

（制限を解いても無理に決まってる・・・アイツらはそんなに俺を殺したいのかよ?!）

「しっかりしろ犀川！」

パン、と千冬の手が一真の頬を叩く。それで目の焦点が合い始めた一真は何があったのかを周りに確認を取る。

「いいから落ち着け」

「え、あ、えと・・・はい」

「これから私達がお前のサポートにあたる。だから安心しろ。お前は1人じゃない」

「しかし」

「軍や関係者には全てお前が解決したと報告してやる。だから余り背負い込み過ぎるな」

「・・・すいません。自分の力が及ばないばかりに」

「常識的に考えるならあの男が狂ってるだけだ。余り自分を卑下にするな」

千冬の言葉に一真の顔に生氣が戻りはじめた。それから目を瞑り、十数秒の間、弱音や言い訳を言い続ける。

「・・・一夏達と通信は出来ますか？」

「残念ですが不可能です。全ての通信機器はジャミングを受けて満足に使えません」

「わかりました。

ならアリーナ全体の図面を探して下さい。平面図のみでも結構です。それと、一夏と凰に敵と水平に戦わないよう注意を。最低でも15。以上角度を取り、アリーナの通路に攻撃が届かないよう厳命してください」

「わかりました」

「織斑先生には先に外に出てもらいます。それから外に出てきた生徒の誘導と他の教師への声掛けをお願いします。

他の3人も先生の後に続いて避難してくれ」

「わかった」

「オルコット、篠ノ之には悪いがここで待機だ。一夏達が倒れたらセシリアが殿を取りながら二人を山田先生と一緒に運びだしてくれ」

「はい」

「了解しましたわ。・・・でも、倒してしまっても構わないのでしよう？」

「むしろ倒して下さい。俺が死なないためにも」

一真の冗談で管制室が笑いに包まれた。それだけで一真の不安は少し薄れ、やる気が出来た隙間を埋めていった。

「それでは・・・行きます」

開始と同時にH・1を展開させた一真は扉を押し開けると真耶が見付けてきた図面に従い壁に穴を開けた。

人の居ないことを確認したとはいえ、室内でのグレネード使用には不安も合った。だが他の箇所が倒壊する不安は、最先端技術により建てられた壁が見事に払拭してくれた。むしろ余りの頑丈さに

一真は呆れてしまう。

「オニキスのグレネードで亀裂だけか。頑丈過ぎるだろ」

『ブレードの使用を推奨します』

「初めて使うが、いけるのか？」

『問題ありません』

「なら遠慮なく！」

左腕を振るい収納型のブレードを展開させる。さらにエネルギーを流すことでブレードが甲高い音を発て始める。

高周波振動を利用した実体剣は一真の腕に殺しきれない振動を伝え続け、痙攣しているように手先を震えさせた。

壁に突き刺すと接触面から削るような音を立てながら手首を揺らす。それを押さえ付けながら大きく円を描くようにブレードを動かし続ける。刃先が入り込む度に嫌な軋み音が発ち、十数秒後には丸い穴が開いた。

切り取った壁を蹴りつけ、外へ急ぎ飛翔。外には異変に気付いた生徒や教師がいたが、一真には気にする時間もなく、急ぎ近場の扉へ向かう。

体を押し潰すようなGに耐えながら最初のポイントである扉の

前に立ち赤外線センサー等を使用した。内部には大勢の生徒が扉の前に押し合っており、とても出はないが扉を切り裂くことはまだ出来なかった。

『どうします？』

「無理矢理開けるだけだ」

天井付近にブレードを差し込みゲートのロック部を切断。そして両脇を押さえていたロックを切断し、ゲートに指を食い込ませ、ギィギィと金属をひしゃげながら扉を開け放つ。

泣きそうな生徒や恐がる生徒達の視線に顔を歪めながら次のポイントへ急ぐ。後ろでは外に出れることに対して喜ぶ生徒達がいた。

道中で人のいない場所に穴を開けては人を呼び、穴を開けては人を助けた。

一真を見た彼女らの顔は全て困惑と恐怖を感じさせた。不器用で、頭の悪い自分の手段で彼女達に嫌な思いをさせていると一真は思い詰めるが、すぐに頭を切り替えて次に急ぐ。

最後の一ヶ所、それはアリーナ外で待機していた生徒達のいるゲート前だ。

誰もが突然現れた一真に武器を向けた。そして何名かが彼が誰か気付くと周りに味方だと叫ぶ。そして落ち着いた頃に代表として教師の一人が一真に声をかけた。

「君は中に居る筈だが、どうしてここに？ あれは君がしたのかね？」

「アリーナ内に隔離された生徒は助けだしました。貴方達には当官と共に中に取り残された一夏と凰を助けだす手伝いをしてもらいたいのですが」

「・・・わかった」

教師は一真の言葉に頷く。本当ならまだ聞きたいことが分かっていないのだが、優先順位的には一真の言うことが第一だと考え、彼に従う。

「しかしどうするんだね？」

「ゲートの厚さや材質、特徴、中身の機構はわかりますか？」

「すまないが分からない」

「少し時間を下さい」

教師達の顔を気にせず一真はH・1にアリーナの図面を表示させる。しかし通路や部屋の広さや長さは記入されていても、目の前のゲートの厚みまでは記載されていなかった。

（壁より厚いな・・・ざっと1.5倍だとするなら1000近くか。スライド式ならロックは両端だが、届かない。なによりエネルギーシールドのせいで刃がはいるかも不確かだ）

図面を睨みながら一真は扉を破壊する方法を考える。

ブレードの長さや強度からすれば間違いなくゲートの破壊より先にブレードが折れてしまう。グレネードは先程試した結果から目の前のゲートには何の意味も無い。現状、一真や現場にいる人間の手で目の前のゲートを破壊するのは不可能であった。

（エネルギーシールドさえ無ければな・・・）

管制室から入っても結局はシールドがあるし、何より移動するにしても正反対だ。それにあちら側だと一般生徒に被害が出る）

一真は眉間が痛くなる程に眉根を寄せながら図面を睨み続ける。そんな時だ。偶然図面の端に2ページという表記を見付け、藁にも縋る思いでページを送る。

空調図面、冷却水図面、エア配管図面、機械室配置図、そして電気図面と軒並み図面が揃っていた。

（・・・いけるか？）

一真は図面の中から平面図を呼び出し急ぎある部屋を探した。

（あった！）

目的の部屋を見つけた一真は口元を上げながら図面から目を離し、待機していた教師達に視線を向ける。

「誰か！この部屋に行ってゲートのブレーカーを落としてきてくれ！」

「え、ブレーカー、ですか？」

「ああ。ゲートに関するブレーカー全てだ！」

「でも、そんなことで・・・」

「システム取られてようが動力は電気だ！電気を切っちゃえば後は鉄の塊動かすだけだろうが！」

「「「は、はい！」」」

一真の怒声に図面データを受け取った数人の生徒が機械室へ向かう。その後ろ姿を見送りながら一真はさらに通信で隣接する部屋のブレーカー全て落とすよう命じる。

空いた時間を使い、一真は図面を見ながら他の侵入経路がないかを調べる。空調ダクト、配管図面、何でもいいから情報が欲しかった。

た。

「こんなことでゲートが動くの・・・？」

「さあ」

「なっ、手遅れになったらどうするつもりなんです？！」

「だったら何か他に手を考えてくれよ。扉が破壊出来ない今、どうやって向こうに行くんだ？」

「そんなの、貴方が中から出てきた場所から入れば――」

「ワラワラと狭い通路を通っている間に狙い撃ちの可能性があるし、俺が壁をぶち抜いたせいで防火シャッターやゲートが作動してる中でか？」

何より、あっちは校舎があるんだ。下手に撃たれたら校舎や外に避難した生徒に被害が出る・・・怪我で済まないんだぞ」

「そ、それは・・・」

「なにより、俺はアンタも守らないといけないんだ。危険な事はさせられない」

「え・・・ええ？！／／／」

『ブレーカー落しました！』

機械室からの通信を聞いた一真は出力の高いIS数機以外で突入と牽制射撃を行う班に分かれるよう指示する。

周りは最初こそ戸惑うか、反感を持ったが教師やチームリーダーに諭され班分けを済ませて位置につく。一真も既に扉指を食い込ませ、いつでも開けるように準備する。

そして一真の合図と共に扉に力をかけた。ミシリミシリと軋む扉を誰もが固唾を飲んで見つめる。一真も食い込ませた指をさらに食い込ませ、出力を全開にまで上げた。

H-1に機体の負荷を管制させずとも両腕部や胸から聞こえる不快音で分かる。フレームが、間接が悲鳴を上げているのがよく分かった。

ギィ・・・

しかし、それに見合った成果もあった。ゲートが極々僅かだが、動いた。

金属の軋む音は壁の向こう、ゲート収納スペースから聞こえた。それは間違いなくゲートが両側へ力がかかっている証拠である。

誰かが声を上げて喜ぶ中、一真達はさらに出力を上げてゲートを決じ開けていく。疑いの心は逆転し、期待へ変わった瞬間だ。

ミシリ、ミシリと嫌な音が響く中で誰もが無言で時を待つ。喜びの声も、歓声もない。誰もがこれからの戦場に緊張感を持つ。後少しで戦闘が開始されるからだ。

ギギイ・・・ミシミシ、バキッ・・・

何かが折れた音共に堅牢なゲートが嘘のように動いていく。

ブースターが轟々と酸素を消費させながらゲートを奥へ押し続け、数秒と経たずゲートは一人分の隙間を開けた。そこには一真達によって切り倒される瞬間の敵機がいた。

両腕が脚部より太く、余計な武装のない機体を見た一真はなんとなくゴリラのような感想を感じた。そして、それはきっと連装ビーム兵装のせいだと結論づける。

(・・・は?)

敵機が倒れながらこちらを向く。それと同時に腕が一真へ上がつていくのをしっかりと見てしまう。

思考が真っ白になる。

アリーナのシールド、絶対防御にも勝るそれを突破した凶器が自らに向いている。何も考えられなくなる。ただ一つ、殺されるイメージと何故かアリーナの図面の数々が思い浮かんだ。

「・・・」

敵機の銃口が発光する。エネルギーをチャージしている証拠だ。

一真は無意識に手を上げた。周りは彼が敵機を目の前にしながら先制の機会を逃すのか理解出来なかった。

口が勝手に動くが、何を口走っているのか分からなかった。だが、周りが逃げている事から大体を察する事は出来た。

（・・・死ぬ・・・冷却水配管・・・呆気ない・・・ドレン配管・・・冷水配管・・・ごめん・・・）

一秒に満たない時間。一真の指はマシンガンのトリガーを引いた。

連続する発砲音の後、一真は大量の水を被った。それはゲート内を押し流す勢いで出口を求める。津波のように押し寄せる水の中にいた生徒達は足を取られるか、すぐさま飛行する。

轟音と眩しい光を感じた。その時には既にすぶ濡れになり、腕を無意識に交差していた。きっと、生きたいという意志からだろう。

爆音が連続し、着弾した熱線と施設の一部が爆発した。黒い煙と白い煙が立ち上がり、ゲート付近は何も見えなくなってしまう。

一夏達は一真が熱線に吞まれたのを呆然と見つめていた。

「一真 ああああ！」

「嘘、でしょ・・・？」

「そんな、先輩っ！」

「犀川さん！」

「犀川君！犀川君返事をしてください犀川君！」

誰もが一真の生存を望み、彼の死を否定した。だが現実は無情で、起こったことしか人間に見せはしない。

「てんめええええええ！」

怒りに任せて一夏は敵機へ突撃する。雪片二型を振り上げ、その体を真つ二つにしようとした。

だが、それは数百の弾丸により止められてしまう。黒煙を吹き飛ばし、白煙に穴を開けたそれは敵機の腕を吹き飛ばし、頭部をグチャグチャにするまで放たれた。

煙を上げる敵機にアリーナ内の人間は言葉を無くし、立ち尽くす。

「・・・」

地面に倒れた敵機に彼は無情に砲弾を放った。

離れていた一夏達の体勢を崩すほどの爆発は敵機をバラバラにした。間違いなくオーバーキルの一撃に一夏達はそれを成した人物を見て声を上げる。

「一真！」

その後、意識を手放した一真は保健室へ運ばれた。体中のあちこちに内出血があり、両腕は血が出るほどの火傷を負っていたのだ。本来ならまだ安静にしているべきである。

また襲撃事件から二日も経っていない。報告書とて先方から体に鞭打ってでも作れと言われ徹夜で仕上げたのだ。学園の関係者から無理をするなど言われたのを無視して作った報告書がまさかこのような結果になるとは思いもしなかった。労りの言葉など、高槻と斎藤以外誰も掛けはしなかった。

自惚れかもしれないが、自分はよくやった。そう自分を慰めなければ正直自棄になりそうなのだ。

落ち込み続ける一真は目の前に誰かがやってきたのを察して顔を上げる。そこには、会議の中で自分達に味方してくれた男、冬月十三だった。

慌てて敬礼しようとする一真を制し、十三は彼に座るよう笑いかける。

「元氣か、少年？」

「・・・はい。心遣い感謝します冬月大将」

「堅い。堅いぞ少年。お前くらいの歳なら生意気言うくらいはしろ」

「は、はあ」

「・・・気にすることなんてないぞ」

人の良さそうな男臭い笑みを浮かべた十三に肩を叩かれた一真はどう反応すればいいのか戸惑う。下手に碎けてしまうと今後それで統一してしまいそうで、その線引きがまだよくわからない。

「お前さんは立派な事をしたんだ。下じゃなく上を向け。お前さんの無理で若い奴等の未来を守れたんだ、胸を張らないと失礼ってもんじゃないか」

（そんなこと言われてもな・・・）

「納得出来ないみたいだな。頭が堅いと言うか、陰気と言うか・・・」

励ましているのに暗い顔をする一真に十三は呆れ半分苛立ち半分だった。真面目、と言えば其れ迄だが、せめて調子に乗るくらいはして欲しいと思った。

未だに成人をしていない少年なのに無理難題を押し付けられ、人的被害もなく解決したのだ。それも1人で。間違いなく勲章物の成果を一真は自慢することはおろか、誇りもしない。まるで上の反応を重視しているようだ。

「坊主」

「なんでしょう？」

「結果と過程、お前はどっちが大事だと思う？」

「それはやっぱり結果、じゃないでしょうか？」

「自信はねえのか？」

「・・・はい」

「そんじゃあ言ってやる。過程が大事だ」

「・・・」

「結果も過程も後か先かの問題だ。何かしてれば結果なんぞ出るが、過程を無視すれば結果もそうなる。」

今回、お前さんは命令に対し結果を出した。それはお前さんがまず人命第一に行動したからよ」

「・・・」

「考えてみる。お前さんは生徒より先に敵機を倒しても良かったじゃないか。なのにお前さんはまず生徒を逃がした。さらには逃げた先に攻撃が行かぬよう突入経路も考えた。それはお前さんが過程を大事にしたからだ。」

いいか。後に繋がらない結果なんぞ失敗と同じよ。後に繋げるには過程を大事にしなければいけない。お前さんはそれを無意識にやっ

てのけた・・・自信を持ちな、坊主。この俺が保証してやる」

泣きそうになるのを必死で我慢した。

誰も認めてくれなかった。

誰も誉めてくれなかった。

誰も自分を年相応に扱ってくれなかった。

だから、十三の言葉は一真に良く響いた。

何も言えなくなる一真に対し十三は笑いながら頭を撫でる。まるで我が子を撫でるような手は彼にとってとても印象的であった。

「背伸びし過ぎなんだよ、お前さんは」

ガキはガキらしくしてろ、その言葉がとても印象的だった。

事件その6 「無茶ぶりされて死にかけたからさあ大変」 (後書き)

一真

「ガツガツガツ・・・ぎゅ、ぎゅ、むきゅ」

一同

「・・・」

一真

「ガツガツガツガツガツ・・・ずずずう」

セシリア

「今日はいつにもまして食べますわね」

一夏

「カツ丼4杯食ってるぞ・・・大丈夫なのかよ？」

箒

「仕方あるまい。あんな事があったのだからな」

少女C

「犀川さん、可哀想」

一真

「同情するな。同情されてもなんにもならん」

一夏

「でもさ」

一真

「それよりもゲスト呼べよ、ゲスト」

箒

「そうだな。流石にこれ以上別室待機させるわけにもいかんからな」

鈴音

「もう来てるわよ」

セシリア

「いらっしやい、凰さん。お茶でいいですか？」

鈴音

「ありがとう。あ、あと鈴でいいわよ」

少女C

「初めまして……」

鈴音

「こちらこそ。それにしても、アンタって待遇悪すぎない？あれじやパシリっていうより奴隷じゃない」

一真

「俺にも立場があるからな。断れないんだよ」

鈴音

「だからってアレはないでしょ、アレは」

一夏

「確かに。俺達二人が相手にするはずのISを一人ってのはな」

一真

「軍では上の命令は絶対だ。逆らえば軍法会議に掛けられるし、下手したら世話になってた高槻さん達にまで迷惑かけるからな・・・まあ、他にも理由はあるが聞くな」

セシリア

「どうぞ、鈴さん。」

もしかしてそれが従っている理由ですか？」

一真

「イエス」

箒

「断れないんですか？あまりに非人道的過ぎます」

一夏

「いくら軍でも良い悪いがあるだろ」

一真

「それら全て引っ括めても逆らえない理由があるんだよ・・・これ以上は話せないから違う話に行くぞ」

少女C

「・・・あの、犀川さんが使っていた武器で初めて出てきたのって何ですか・・・？」

一真

「HVMのことか？」

少女C

「えいちぶいえむ・・・？」

一真

「ハイ・バイブレーション・メッサー、略してHVM。高周波ナイフが分かりやすいか」

一夏

「なんだよ、その高周波ナイフって？」

箒

「字面的には振動が関わっているようだが」

鈴音

「・・・そんな兵装あったっけ？」

セシリア

「イギリスにはありませんでしたわ」

一真

「そりゃ作ったのが俺だからな」

一同

「はぁ?!」

一真

「俺がまだ友人もできなかった時だ・・・暇潰しに色々と作ってたんだ。

研究所にいたから様々な材料があつてな、最初はそれらを組み合わせでは崩してた。そしたら研究所の人間が俺に設備を使う許可をくれたんだ。

その時かな・・・HVMの雛型を作ったのが始まりだ。あっちも好奇心で話し掛けてきてくれて、研究者と作り上げたのが今のHVMだ」

鈴音

「アンタ、自分が何言ってるかわかってる?」

一真

「たかがガキの遊びだ。そこまで重大性はない」

鈴音

「なにバカ言ってるのよ!素人、しかも学生が兵器を作ったのよ?重大に決まってるじゃない!」

セシリア

「そ、そうですわ!しかも厚さ1mはあろう壁を十数秒で切り裂く実体剣なんてそうありませんのよ!」

一真

「まさにリサイクルの極地！（キリ）」

鈴音

「ふーざーけーるーなー！」

一夏

「なあ、話についてけないんだが」

セシリア

「いいですか、現在ISは各国で今も研究されています。勿論、その中には兵装の開発も含まれており、兵装1つ作るのにチームを組まなければいけないほど難しいんです。

ですが、一真さんは遊んでいたら出来たと言うのですよ？これは各国の開発チームに喧嘩を売っているのと同義ですわ！」

一夏

「・・・」

箒

「・・・」

少女C

「犀川さんって凄いんだね・・・」

一真

「だいたい、金属の塊が振動してるだけなのに大袈裟なんだよ。携帯やローターなんか一世代も前から振動してるじゃねえか」

鈴音

「1mの壁をバターみたいに切ったのよ?! アンタ、本当にどうかしてんじゃないの!」

一真

「こんな欠陥品を凄いつて言う奴の気が知れねえ・・・」

鈴音

「うっし、アンタ、そこに座り直しなさい。その頭、殴って正常に戻してあげる」

一真

「いくら丈夫な俺だって、コンクリを破砕するような衝撃には勝てないぞ。つーか殺す気か中国娘」

鈴音

「アンタみたいなHENTAI、生かしておいたら世の為人の為にならないわ・・・」

一真

「ほう、いいのか、そんなこと言ってる?」

鈴音

「命乞いなんて聞く耳——」「お前が約束ドタキャンされた際のケア、俺がする予定なのか?」——なん・・・ですって・・・?!」

一真

「誰かさんが、誰かさんに約束ドタキャンされたのを見兼ねた俺が誰かさんに無理やり代わりの約束を交わせる話もあったが・・・」

残念。ここで俺が果てればそれもギャグ話になっちまうな」

鈴音

「ちょ、ま、待ちなさいよ！」

一真

「せーっかく、出番の少ないヒロインの見せ場だったのに・・・セカン党も可哀相に」

鈴音

「だから待ちなさいって言ってんのよ！」

一夏

「あ、殴った」

箒

「殴ったな」

セシリア

「手を上げましたわ」

少女C

「犀川さんの後ろの壁、粉々だね・・・」

一真

（・・・避けなかったら死んでたな）

鈴音

「い、今謝るなら許してやってもいいけど？」

一真

「謝るのはいいけど、代わりに約束の話はギャグになるわよ」

鈴音

「はあ?! 私が、寛大な心で、チャンスを、あげたってのに、何よその態度!」

一真

「勘違いしないでくれる。私の方が寛大な心でチャンスを恵んであげてるのよ?」

鈴音

「な、なんですってー!」

一真

「勘違いしないでよね! べ、別にアンタの為に止めたわけじゃないのよ? ただ、ただそうなるかもって話してるだけなんだから!」

一夏

「あれ、ツンデレなのか?」

箒

「あんな脅しをするツンデレのどこに萌えろと言うのだ、貴様は」

セシリア

「なんでしよう・・・他人がされているのを見るとかなりシユールですわね」

少女C

「犀川さん、楽しそう・・・」

一夏

「人はアレを悪趣味って言うんだがな」

鈴音

「いい加減に、しなさいよアンタ・・・私にだって我慢の限界が・・・」

一真

「なら約束不意にするわけ？」

私は別に構わないわよ。誰かが報われなくても、最終的に笑いに終わるだけだし」

鈴音

「う・・・うう・・・」

一同

「泣いちゃった」

一真

「・・・やり過ぎちゃった」

主人公&ヒロインズ 裁判中・・・有罪ですの！

一真

「ごめんなさい」

鈴音

「ぐずっ、別に、私も悪かったしいわよ、もう」

少女C

「犀川さん。女の子は繊細なんですからもっと丁寧に扱ってくださいね・・・」

一真

（繊細な女の子は扉を叩き切ったり、ISで壁を粉碎したり、勝手な勘違いで人を殴るのだろうか？）

ヒロインズ

「なにか？／なんですか？／なによ？」

一真

「逆になんだよ？」

一夏

「同じ轍を踏むなんて・・・」

「そういや、一真って軍ではどれぐらいの地位にいるんだ？」

一真

「下っばでパシリで奴隷で捨て駒」

一真

「自分で言うか、普通？」

でも少尉ってエリート仲間じゃないのか？」

一真

「戦果のない尉官など飾りです。偉い人達にはわからんです。だから学歴しかないエリートは信じません。

まあ、ガチで答えるなら俺は軍人じゃないから尉官も何も関係ないよ。元々は俺の立ち位置を決めることによる牽制程度だしな」

セシリア

「努力もせず尉官につくなんて・・・幸運じゃありませんの？」

一真

「実力のない頭デッカチの大半は口だけだ。能力は現場で叩き上げられなきゃ意味が無い。一流大学を卒業したから有能ってのは間違いだよ」

一夏

「でも政治家の大半は一流大学卒業じゃないか」

一真

「実らない木なんてただの飾りか防風林だ。

それに大企業の立役者の大半は中途や高卒、三流大学なんて珍しくないぞ」

箒

「努力なんでしょうか？」

一真

「さてね」

主人公&ヒロインズ 談笑中・・・

少女C

「そういえば、犀川さんって所属不明機に打たれましたけど・・・
凄く被害が少なかったですよね・・・？」

一夏

「あ、俺もそれは気になるな」

鈴音

「主人公補正とか、ギャグ補正なんて無しよ」

一真

「おいチミツ子、お前は俺を何だと思ってやがる？
さて無事だった理由だが、所属不明機の熱量兵装がレーザーに近い
ビーム兵器だからだ」

セシリア

「ビーム兵器は以前否定されてませんでしたか？」

一真

「触れるな。」

まずレーザーってのは収束した光だ。まあ、もっと詳しく言うなら周波数を揃えた光の束だな。

光は空気中では減衰し、水中なら屈折までする。水蒸気の中なんて減衰し、さらには周りの水蒸気で熱を奪われるから意味を成さなくなる。つまり、大量の水を被り続けていた俺が火傷程度で済んだのは理由はここにある」

少女C

「あれ、でも聞いてると本当なら火傷もしないんじゃないじゃ・・・」

一真

「それは俺が最初から水中にいた場合だ。水が落ちる早さと光速だ・・・腕が吹き飛ばなかっただけでも奇跡なんだぞ。火傷だって機体が熱せられたからであって、直接的被害はない。」

ちなみに、レーザーには衝撃というものはないのは話したな？」

セシリア

「自分で言っておきながら・・・」

確かに、説明はお聞きしましたわ」

一真

「直接的な衝撃はないが、間接的な衝撃は存在するからな。水なら水蒸気爆発に似た爆発。人体なら皮膚や血液が瞬時に蒸発して爆発したように見える。レーザーとビームの違いだな。」

レーザーは熱を、ビームは熱と衝撃を伴う。ちなみに無重力状態で

は物量兵器は使わないように」

一夏

「なんでだよ？」

一真

「等速直線運動により永久に速度が落ちないからだ。

お前、音速を超えるような宇宙ゴミ（スペースデブリ）にぶつかりたいか？」

一夏

「笑えねーよ」

主人公&ヒロインズ 間食中・・・

鈴音

「そういえば、原作に自動修復機能なんてあったっけ？」

セシリア

「・・・ありませんわ」

箒

「だそうです、先輩」

一真

「・・・自動修復機能。通称ARS。」

機能としては待機状態になった際に可能な限り修復する機能だ。修復出来る例として各関節の金属疲労、電子回路の回復、ブースター部の熱疲労回復、凹みの回復なんかだな。

ただし、ARSはこれらが悪化したものは修復出来ない。割れたり、罅が入れば修復出来ないし、その部位が消えれば修復事態無理だ」

一夏

「必要なのか、それ？」

鈴音

「確かにいらないわよね。データ要領喰うし」

一真

「このド素人が。」

いいか、金属疲労や熱疲労を回復させる機能があるってことは単純に寿命が延びるってことだぞ？

さらに、凹みや電子回路が回復してみろ・・・それに繋がるクラックや制御機器の故障の危険が下がるから突発的なトラブルが少なくなるんだ。整備する側にとってはかなり重要なシステムだぞ」

箒

「ですが、そうなると整備技師の仕事が無くなるのでは？」

一真

「整備技師は何も機械的な部分だけを整備するわけじゃない。システム面のメンテや装着者へのさらなる最適化、さらには適正な部品を選定し交換したりする。

整備技師とIS適性者がコンビを組むのはISが出来ない部分をフォローしてもらうためだ。

ちなみに、整備技師とIS適性者が恋仲になったり結婚するのは珍しくも無い」

少女C

「そうなの・・・？」

一真

「ああ。なにせ整備技師は相手の癖や好み、性格を事細かに把握するからな。これ以上のパートナーはいないだろ」

セシリア

「なんだかロマンチックですわね」

一真

「だが、そのせいで年々IS適性者と付き合い合いたってバカ共が増え始めてる。逆玉の輿的な夢を持ってるアホもな。

コイツらのおかげで受験戦争は厳しかった・・・まさか倍率10とは思わなかった」

鈴音

「うわあ、引くわそれ」

箒

「不潔過ぎる」

一夏

「もしかして一真もその口か？」

一真

「バカたれ。俺は就職率と将来性で選んだわ。

勿論、そういう期待もあったがこのご時世、様々なバカを見てきた
せいですぐに考えを改めた」

少女C

「なんか、犀川さんって世の中嫌いってオーラ出てません・・・？」

一真

「いや、嫌いじゃない。嫌いなのは勘違いしたバカだ。
女尊男卑って世の中自体ただの勘違いだと俺は思うよ」

鈴音

「は？アンタ、本当に頭大丈夫？」

一真

「失礼だぞチンチクリン」

鈴音

「ぬうわんですってえ！」

一真

「いいか、もし女尊男卑が罷り通るなら男が女を殴っても問題ある
まい？」

だが、現実はその最低の行為と断ずる。理由はなんでだ？」

一夏

「そんなの、常識じゃねえのか？」

一真

「それが間違ってる。」

男が女を殴ってはいけない、それは男が女を守るべきだからだ。つまり男尊女卑の考えだ。女尊男卑の考えではない」

箒

「乱暴な考えではないですか？」

一真

「そうかもな。」

俺は男女平等とか喚く奴らは嫌いなんだよ。自ら弱者だと言っているようなもんだし、それでふんぞり返っているのを見るだけでも気分が悪い。それを言う老若男女全てが嫌いだ。

適材適所で仕事はするべきだ。そこに男女が入って当たり前だ。

仕事は男、家事は女。つまらない言い訳する暇があるなら体を休めるか、役割を果たせての。

男が偉い、女が偉い。テメエが偉い訳じゃないんだから威張るな。男らしくない、女らしくない。相手の個性を否定するほど偉いのかよ。

男女平等謳うなら、黙って生きてろっての」

一同

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

主人公 愚痴り中・・・

一夏

「そーいや話混ぜ返すように悪いんだけど、HVMってようは振動してるナイフなんだよな？」

一真

「あぁ。その考え方で問題ないぞ」

一夏

「ナイフを振動させて意味あるのか？」

一真

「ARMSどこまで読んだ？」

一夏

「まだ7巻だな」

一真

「そうか。」

さて、高周波ナイフってのは刃を振動させることで対象に衝撃を加えて破壊する武装だ」

セシリア

「なんだか、それだけだとナイフという感じはしませんわ」

箒

「確かに。まるで鈍器だ」

一真

「そうだが」

一同

「いやいやいや」

少女C

「名前がナイフじゃないですか・・・」

一真

「そんなこと言ったらムカデは虫になるし、タコは口から墨を吐くことになるぞ」

一夏

「え、違うの？」

一真

「ムカデは節足動物という動物で、タコの口は足の付け根だ。見た目＝機能じゃない」

鈴音

「じゃあなんで切れるのよ？」

一真

「実際には切ってるんじゃないやなく砕いてるんだよ。最終的に切ってるように見えるけどな。」

高周波メスだって見た目はメスじゃないぞ」

箒

「なら刃物じゃなくてもいいのでは？」

一真

「接触面積の問題だな。接触面積が小さければ小さいほど力は束ねやすい」

少女C

「だったら釘みたいな物の方がいいんじゃないんですか・・・？」

一夏

「なんで？」

少女C

「ほら、釘なら点だけどナイフなら線じゃないですか・・・」

一真

「パイルバンカーのことか？」

あれは確かに効率は良くなるが、運用性が悪い。突き刺した後の接触面積は大きくなるから抜かないといけない。その点、ナイフは刺したり、横に動かす際の接触面積は小さくて済むから運用性がいい」

セシリア

「難しいですわね」

一真

「確かに難しかった。特にナイフの材質は悩んだし、振動させると手元から遠ざかるだけ振幅が大きくなるからICに負担かける。さらに突き刺したままだと折れることもあった。

今あるHVMも俺のだけで、これだって未完成だ。下手に誰かが使

えはバツキリ折れる」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その7 「何故だか痴女に狙われたからさあ大変」 (前書き)

この小説は、博士・・・貴方の頭には爆弾が仕掛けられています・
・というノリを大切にした物語です。

博士！お許してください！という覚悟と、イエアゝをカッコいいわあ
と言える器量。さらにはあらゆる要素を無視できるスルースキルが
必要とされます。

それらの無い方はキ○ガイレコードを聞いてブレイクダンスしながら
ら日常に御戻り下さい。

事件その7 「何故だか痴女に狙われたからさあ大変」

突然に突然だが、ニュースである。・・・なんと一組に転校生が来た。

「始めまして、シャルル・デュノアです」

それも男である。

世情に疎い一夏は三人目の男での適性者か、と考えながら少年を見つめる。周りは熱っぽい視線を向ける中、彼のように感心するだけの者はあまり多くない。

「「「キャアーっ！」」」

「可愛っ！」

「また男子！しかも守ってあげたい系！」

「あたし一組で良かったー！」

「あは、あははは」

女子の反応に若干退くシャルルに同情し、もう一度彼を見つめる。

柔らかそうな金髪を三つ編みにしており、白人特有の真っ白い肌に少し垂れた優しい眼、全体的に細い彼は見ようによっては少女のようた。

「ん・・・？」

（目が合った・・・まあ、いつかは合うか）

「ふふ」

「っ?!」

視線に気が付いたシャルルはニコリと笑いかけてきた。その笑みを見てドキリとした彼はすぐに顔を俯け、今、自分が何を感じたのか考えてしまう。

「それでは、次だな」

「・・・・・・・・え、あの人って」

「なんで?! なんでなんで?!」

「お兄様あ」

シャルルと違った意味で騒つくクラス。彼の場合は発熱したような歓喜だったが、今度のは困惑。しかも声だけで判断するなら大半が知っているような反応だ。

「いいっ?! な、なななななあ!」

それは一夏も同様だった。

「犀川一真です。突然の事で驚いているでしょうが、よろしく願います」

「なんでここにいんだよ一真ぁーっ?！」

そこには眠そうな顔で微笑む友人がいた。

「犀川は、一年と二年の授業は問題ないレベルのため半年間は各クラスの I S 授業に出向くことになった。専用機持ちの少ないクラスに対する処置ではあるが、まあ仲良くやれ。それと一夏、S H R 中に騒ぐなバカ者」

「痛っ!。何もあそこまで殴らなくてもいいじゃんか」

「因果応報だな」

「・・・／／」

「お前のせいじゃねえか」

「騒いだのはお前だろうが。」

今回の件だって俺の意志は無視だぞ。俺は被害者だ」

「・・・／／／」

現在、一夏達はアリーナの控え室で着替えをしている。理由はI
Sの授業を受けるからだ。

勿論、クラスで着替えるという選択肢もあるのだが、生徒の九割
大が女子のIS学園において覗きなどなく、男子がクラスで着替え
るよりもアリーナで着替えた方が何かと都合が良かったりするのだ。

主に好奇心に駆られた女子などに対しての対策でしかないのだが、
風紀を考えれば仕方ない。

「・・・なあ、聞いていいか？」

「却下」

「即答かよ」

「どうせ胸と背中の中事だろ。答えるのも面倒だから却下」

胸と背中に残る大きな傷。まるで皮を剥ぎ取ったように傷痕と周
りの皮膚の色は違う。

手術した跡にも見える傷痕だが、縫われた箇所には胸と背中は含
まれず、複数あることからかなり重い怪我のように見えた。

傷の多い体の中でも特に背中と胸の傷は見えて生々しく、問題ないと分かっているにも痛々しい。

「・・・大丈夫なのか？」

「痛みはないさ。たまに痒くなるくらいで問題はない」

「怪我にしては酷いな・・・もしかしてISの実験でか？」

「いや、それよりも前だ」

一真は専用のISスーツを着込むと胸のチャックを締め、手首に付いているスイッチを押す。

プシュ、と空気が抜ける音と共に膨らんでいたISスーツが体に密着し、ギシギシと音を立てる。異常の有無を確認する度に軋む事から、かなり密着している。

「まだ服も脱いでないのか、デユノア？」

「え?!／／／」

「後数分で集合時間だ。早めに着替えとけよ」

赤い顔のシャルルを見ながら一真は先にアリーナへ向かう。少々素っ気ない気がするが、低血圧のせいだろう。

「色々あるんだな、アイツも」

一夏は一真の背を見ながら呟く。

思い出してみると自分は彼の事をよく知らないような気がしたが、追々知ればいいかと結論つけた。

「俺達も早く着替え済ませて――」

「え、なに？」

振り返ったそこには髪を整えているシャルルがいた。先程まで制服を脱いでいなかった筈なのだが、まさか十数秒で着替えたのだろうか？

「早いな」

「そ、そうかなー？」

「やっぱりスーツのおかげか？」

「う、うん。それもあるね」

なんとも歯切れの悪いシャルルに首を捻り、ゴムのようなスーツに頭を通すのであった。

授業を始めるに辺り、専用機持ちがまず手本を見せる事となった。内容は飛行と急降下、急停止の2つだ。

「では四人とも準備を始めろ」

「」「はい」「」

千冬の言葉に従い各々が待機状態のISに触れる。

一夏は白いガントレット。セシリアはイヤリング。シャルルはペンダント。一真は、腕時計だ。

まずセシリアが展開するためにイヤリングに触れ、念じ、一秒にも満たずISを展開し終える。それに習い一夏も白式の展開を始めた。

「・・・、・・・、・・・あれ？」

「どうした。熟練のIS操縦者は展開に一秒もかからんぞ」

「いや、かからんぞと言われても・・・一真あ」

睨むように見てくれ千冬に聞けない一夏は後ろで腕を組んでいる一真に助けを求めた。ちなみに、一真は既にH-1を展開し終えている。

「情けない声と捨てられた子猫のような目はやめろ。」

とりあえず、白式をイメージしろ。白式を展開した自分をイメージすれば出来るはずだ」

（イメージ、イメージ、白式を・・・）

一真に言われた通り、一夏は白式を纏ったイメージを思い描く。

「っ、来い、白式！」

一夏はガントレットを高く掲げながら白式を呼ぶ。そんな事をせずとも無音無動作でISは展開出来るが、イメージを強く持っためにそうした事をするのは珍しくもなく、熟練者の中にはわざとする者もいたりする。勿論、パフォーマンスでしかないが。

「・・・まあ、良としよう。」

次、デュノア。それから犀川だ」

「はい！」

「・・・俺、展開してますけど」

「なら待機状態にしてまた展開しろ」

「んな理不尽な」

「いいからやらんか」

「はーいー」

渋々とH-1を待機状態へ戻す一真をクスクスと笑いながら、シャルルはペンダントに触れながらイメージを固める。

「リヴァイブ、展開」

オレンジにカラーリングされた気体が陽光を受けながらシャルルを包み込む。彼が扱うISは、第二世代型で幅広いシエアを獲得しているラファール・リヴァイブのカスタム機だ。

注目すべき点として、左腕部に装備されたシールドと隠されたパイルバンカー、次にその武装の多さだ。見える範囲でも6つ、さ

らに量子化された武装を入れるなら十はくだらないだろう。

（なんつう機体使ってやがる、コイツ）

「どうかした、一真？」

「いや、ただカスタム機なんだなーって」

「驚いた？」

悪戯っ子のように笑うシャルルに何人かの生徒が声を上げ、また何人かは顔を赤くする。一夏もその一人だ。

一真は参ったよと笑いながらシャルルに関する対策を考える。

第二世代型の特徴は兵器として作られていること、つまり高い汎用性と平均的結果だ。その2つから導かれる対策は単純故に覆し難い。

操縦者の腕次第では突出した性能で押すか、相手の上手を行かなければならない。後は相手に全力を出させないなど多岐に渡るが、難しいことに代わりはない。

一真は一応全て満たす事は可能だ。H-1の性能は伊達ではないし、相手を騙すのも得意だ。だが、パイロットの差だけは覆せない。

汎用機を扱うパイロットが近中遠全てこなせないわけがない。つ

まり、全ての距離において一真は劣っているのだ。

（・・・早めに対策考えとかないとな）

「最後、犀川」

「はい」

一真の思考にISの展開を始めたH・1は一秒もかからずに展開を終える。濃紺のボディフレームに単眼のメインカメラを動かしながら体の各部を確かめる。

「・・・変わったISだね」

「専用機で変わってないほうが、変わってると俺は思うぞ」

観察するシャルルをロック対象にしながら、一真は他に自分を観察及び警戒する人物が居ないか探す。こういった時、半フルフェイスのヘッドギアは役立つと思う。何せ、視線を悟らせることがないからだ。

だが、注目する人間が多すぎるのもアレだ。

「それでは、飛行開始！」

「了解！」

「はい！」

「おっし！」

「はい」

セシリア、シャルル、一夏、一真の順に返事をする。

最初にセシリア、遅れてシャルルが飛翔した。

流石としか言いようのない加速と急上昇に一夏と一真は空を見ながら関心する。

特にセシリアのブルーティアーズの飛行は滑らかでリヴァイブ・カスタムと違い、少ないブーストで高度を取る。リヴァイブ・カスタムも悪くはないが、ブルーティアーズと並べるとやはり見劣りしてしまう。

「なにをしてる。早く飛べ」

「・・・先に行く——」

「よっ・・・」

一夏に声をかけようとした一真だったが、先に飛行した一夏を見

てすぐさまその場に停止、様子見に移る。理由としては、飛行中に激突し、最悪墜落したくないからだ。

慣れていない者同士が同時に、しかも距離が無い状態で飛翔すれば激突し、墜落する事故もある。怪我こそしないが、知らないトラブルを起こさない方が良くに決まっている。

「うわあああ?！」

(何してるの、あの子?)

そしてその判断は正しく、飛翔を始めた一夏は地上数メートルで出鱈目な軌道を取り始めた。

飛行体勢も酷く、まるで落ちているかのようにグランド中を飛び回っている。

「こっちに来るなバカたれ」

「んなこと言ってもよおおお?！」

十数秒程。飛び回っていた一夏が上空でなく一真達へ向かって来た。

千冬に判断を仰ぎ、好きにしろと言われた一真は一拍考える。そして目前にやってきた一夏に対し、彼の腕を掴み、ハンマー投げの

ように彼を上空へ投げ飛ばした。

「後は頼む、二人共」

「え、あ、うん」

「い、一夏さん！早く体勢を直してください！」

「んなこと言われたても？！」

「イメージ、イメージですわ！」

「い、いイメージって何を？！」

グルン、グルンと回転する一夏と上空で待機しているセシリアは共にパニック状態。シャルルもどうしたものかとあたふたしている。

そんな三人を見た一真は呆れていた。

「抱き留めれば早くね？」

「「「・・・ええ？！」」」

その言葉に周りの者が驚く。特に一夏、箒、シャルルだ。

「なるほど名案ですわ!」

「な、情けないと思わないのか一夏!根性を見せろ!」

「んなこと言ってもよーっ!」

口喧しく騒ぐ三人を余所に一真は千冬からのGOサインを待ちながら空の痴情を眺めるのだった。

「良い性格をしているな、貴様」

「別に、他意はなかったんですがね」

「天然は恐いな」

「それは同意します」

弟の修羅場を眺める千冬と、弟分と妹分の行動を眺める一真は柔らかな笑みで見上げていた。ちなみに一夏は寸での所で姿勢制御が取れたおかげでセシリアに抱き留められはしなかったが、代わりに彼女の頬にキスしてしまうというハプニングが起こった。

「常々思うんですが、先生の弟さんってギャルゲカラノベの主人公ですか?」

「聞くな馬鹿者」

「女難の相が見えます」

「それも青春だ」

「灰色の青春よりはマシなんでしょうね・・・」

「貴様、人が気にしていることを！」

「先生だってまだ若いし、綺麗なんですから出会いはあるでしょうに」

「今の貴様と同じ境遇だったんだ。言わせるな」

「・・・まあ、過去は思い出すだけで十分ですし、今はこの先を考えた方が建設的ですね。

結婚願望はないんですか？」

「ふむ。考えた事がなかったな・・・」

「まあ、一夏が大人になるまで時間がありますし、慌てる事もないですね」

「・・・これではどっちが大人かわからんな」

「ただの背伸びしたガキですよ、俺は。
それより何とかしてください」

一真に頼まれた千冬は修羅場で四苦八苦する一夏を怒鳴る。それから先は滞りなく授業が進み、オチとして急降下の際に一夏が一

真を巻き込み地面にクレーターを作るのだった。

放課後、一夏が日課であるイベント回収をしていた裏で、一真が日課であるトレーニングに励んでいた。ここ最近トレーニング終了と同時に倒れることは無くなり、今では部屋に戻るだけの体力が増えていた。これはかなりの成果であろう。

現在、一真は自分の部屋のベッドで熟睡している。扉が新調してからというもの、部屋を訪れる者達が勝手に居ることもなくなり、一真は誰に邪魔されることもなく眠っていられる。

補足すると、彼の部屋の扉は過去三階破壊されたことから鉄製になり、一昨日に逃げ込もうとした一夏を追い返し、間違っで木刀で殴り付けた筈の一撃に耐え、仲良し三人組の来訪を突っ返し、セシリアの相談を無視する戦果を挙げている。まさに鉄壁のチタニウム合金の扉様々である。

「ん、んん・・・んあ・・・」

（寝てる、寝てる・・・）

しかし、そんな鉄壁の守りを越えた存在が今、室内へ侵入しようとしていた。

寝返りを打つ一真へ月明かりを頼りに近づき、そのシーツを剥こうと手を伸ばす。

起きる気配を見せない一真に侵入者はほくそ笑む。

ビービービービー！

「「っ?!」」

しかし、その手は突然鳴り響くパソコンの電子音によって止められ、さらには一真を起こした。

警報に飛び起きた一真はすぐさまベッドから飛び出すと侵入者へ護身用の拳銃を向ける。中身はゴム弾とはいえ、当たれば痛いではすまない威力はある。

「誰だ・・・？」

「・・・」

「誰だと聞いている。答えろ」

寝起きも合わさり一真の言葉はとても冷たい。

既に逃げ道と近接の為のスタン警棒を取り出した一真は腰を落としながら侵入者を警戒する。相手は驚いているのか、それとも警戒しているのかベッドに腰掛けながら一真を見上げている。

月明かりだけでは相手の髪形、シルエットしか分からない。視力があれば薄らと見える顔や相手の格好も分かったかもしれないが、眼鏡もかけていない一真には全体のシルエットを見るだけで精一杯であった。

「答えろ・・・何故俺の部屋に侵入してきた」

「・・・」

「・・・」

何も答えない相手に煮えかねた一真は近くにあったスタンドの電源を入れる。

パツ、と明るくなった室内で目を細めながら相手を見失わないよ

う堪えていた一真は信じられない光景を目の当りにする。

「んゝ、眩しいにゃあ」

まず、見えたのはサラサラの髪だ。次に白い肌、整った目鼻、細い顎。ここまでは一真は処理し切れる情報だ。

「・・・」

「んー、おやおやー？どうしたのかなーん？」

「よ、寄るな痴女！」

「痴情って、失礼しちゃうーう」

「裸の女を痴女と言わないならなんつーんだ！」

「裸じゃないよ。ほら、ビキニも着てるし猫耳もあれば尻尾もあるし」

「見せなくていい！」

軟らかそうな尻についている尻尾を見せ付ける少女に一真は叫ぶ。

彼女は、ほぼ裸なのだ。確かに猫耳と尻尾はあるしビキニを着

ているが、それで衣服を着ない理由が一真には分からない。なにやりビキニと呼ばれている布切れはマイクロビキニだ。間違っても人前で着るような物ではない。

彼女は顔を真っ赤にする一真に擦り寄る。まるで猫のようにその細い体をしならせる。

（な、なんだよコイツ?! 新手の敵襲か?!）

「にゅふふ、おいしそ・・・」

「~~~~っ!!!!」

舌なめずりをする少女を見た一真は背筋に悪寒を感じる。

距離を詰められ、鉄壁を誇る扉まで追い詰められてしまった。

相手は体を隠しもせず一歩、また一歩近づく。その度に大きな乳房が揺れ、甘ったるい匂いが彼の鼻腔を突く。

「いったきまーす!」

「~~~~っ!」

飛び掛かってくる少女に持っていた拳銃を向け、フルオートで全て打ち込む。当たれば少女の柔肌は真っ青になるが、相手のこと

を考えられないくらい一真は追い詰められていた。

「おっと、危にゃい危にゃい」

（よ、避けた?!）

「ちょっと焦ったけど、中々に刺激的だったよん♪私、濡れてきちゃった・・・」

（な、なんだコイツ!）

背後でガラスが音をたてながら碎ける。間違いなく弾は放たれているのに、目の前の少女はそれさえ性的興奮にしか感じていない。それが一真の恐怖を増長させた。

「さてさて・・・いただきますーす♪」

ガバッ、と飛び掛かってきた少女を見た一真は扉を押し開け、背中を床に強かに打つ。足元には残念そうに彼を見上げている少女がおり、咳き込みながら慌てて逃げだす。

廊下を走る。

途中、何人かの知り合いと擦れ違ったが、今の一真はそれ所ではない。

まず、一真が逃げ込んだのは一夏の部屋。一番近く、また室内には腕つぶしのたつ箒を頼るため彼らの部屋に逃げ込む。

鍵は閉まっていなかったためすんなりと入れた。息を荒げながら鍵を締め、扉に寄りかかった一真は室内に箒が居ないことに焦ってしまう。

室内ではお茶を飲みながらゆっくりしていた一夏とシャルルがおり、二人共突然走り込んできた一真に驚いている。

「か、一真？ どうしたんだよいきなり？」

「し、篠ノ之は？」

「大丈夫、犀川さん？」

「篠ノ之は何処にいったんだ一夏！」

「か、一真？」

一真の様子のおかしさに二人は驚く。今の彼は非常に怯えていて、いつもの彼らしくなかった。

「篠ノ之はどこだ！」

「お、落ち着いて犀川さん！」

「頼む・・・篠ノ之はどこだ、一夏!」

「ど、どうしたんだよ一真? お前、おかしいぞ?」

「アイツが、アイツが来る!

頼む、篠ノ之はどうした?!」

涙を目に浮かべ、怯える一真に二人は困惑する。彼は箒を呼び続け、求め続けた。

錯乱している一真に肩を掴まれた一夏はあまりのことに思考が追いつかず、シャルルはまず彼を落ち着かせようとした。

「ほ、箒なら違う部屋だ。シャルルが俺と部屋を同じくしたから移動したんだよ」

「う・・・そ、だよな?」

「本当だよ。犀川さん」

「じゃ、じゃあ誰がアイツを・・・」

顔を真っ青にし、ガタガタと震えだす一真をシャルルが落ち着かせるために背中を擦る。

「いったいどうしたんだよ一真? 何があった?」

「アイツが、来る」

「それじゃあ分からないよ。ゆっくりでいいから話してみて」

「俺が聞きてえよ。部屋で寝てたらいきなり痴女、が・・・」

最後までいい終える前に一真は固まってしまう。視線は一ヶ所に集中し、目をこれでもかと見開く。

二人は首を傾げながら呼び掛けるが、彼の耳には何も聞こえはしなかった。

「あ・・・あ、あ・・・」

「・・・（にたあ）」

二人の背後、窓の外に彼女はいた。

窓に張り付き、中を覗き、一真に笑いかける。

「ひいっ」

「一真?!」

ガタン、と扉にぶつかつた。心配する一夏を振り切り、一真は外へ飛び出す。少女も彼が室内から逃げたのを確認するとベランダから飛び降り、追い掛ける。

二人は彼が見たものを確認するため振り返る頃には既に彼女はいなかった。だが、シャルルは視界の端で揺らめく何かを見つけ、窓についた手の跡に驚いた。

「一夏、もしかして犀川さんって本当に追われてるんじゃない？」

「っ、一真！」

一真は廊下を駆け、階段を飛び降りながら逃げ続ける。

このままでは捕まる。このままでは襲われる。

冷静な思考があればISを展開して迎撃をする等、対抗策は幾らでも思いつける物だが、過去のトラウマから逃げることで頭は一杯だ。

「はあ、はあ、はあ・・・っつ！」

一真が走り着いた場所、それは織斑千冬の寝泊まりしている部屋である。

世界最強、学園最強、人類最強の寮監の元ならば相手も迂闊には手が出せない筈である。

「甘い甘い、とろけるように甘いにゃ」

「ひっ」

「織斑先生の下なら私も手が出せないっていうアイディアは評価するけど・・・それも逃げ込めたらの話じゃないかにゃー？」

「あ、あああISう?!」

「ふふふー。逃げられはしないよ、君いー」

脚だけ部分展開する少女に一真は強い衝撃を受けた。何故なら、彼女の展開するISは既存の量産機の脚部ではなかった。つまり専用機、代表候補生ということになる。

一真の中でトラウマと疑念が責めぎ合う。

何故、治外法権のIS学園内で自分を、厳密には違うが、代表候補生である自分を襲うのか。また彼女が何処の代表候補生なのか。

一真の中で様々な疑問が浮かんでは自己完結していく。

「はっはっはっ、その顔はなんで他国の代表候補生が自分を襲うのか、そう考えているね。答えて上げよう！それは・・・」

（どうやって逃げ込む。下手に動けば間違いなく組み伏せられる・・・）

「私が君に惚れたからさ！」

（時間稼ぎすれば騒ぎを聞き付けた織斑先生が来てくれれば嬉しいんだけど）

「信じてないね。中々に疑り深いじゃないか・・・だがそれも善かろう！」

さて、次は私が何処の代表候補生かだ。実はロシア代表なのさ！」

少女は傲慢気に胸を張るとプルンと動く。

これ見よがしに見せ付ける少女を冷やかに見つめながら警戒を続ける。その反応に不満を感じた彼女は胸を寄せ上げ、もう一度見せ付ける。以前の一真なら照れて顔を背けるか、妄想くらいはしたかもしれないが・・・女性嫌いの気がある今では何も感じない。

（ロシアか・・・アメリカへの牽制か？だが、そんなことすればアメリカだって黙っていないはず。

いや、待てよ。確かアメリカの代表候補生っていなかったよな？そ

のせいなのか？)

「むー、自信あったんだけどなー。ショックだにゃー」

(鍵は、開いてないよな。普通)

「ちょっとー。こんな魅力的な女の子を目前にして他のこと考えるなんて酷いんじゃない？」

(こんな痴女に喰われてたまるか！考えろ、考えるんだ！)

「仕方ない、か・・・ならば強硬手段を取るだけ！」

「っ！」

「大丈夫。お姉さんが優しく可愛がってあげる♪」

少女は低空飛行で一気に距離を詰め、腕を広げて一真を捕まえようとする。

数秒に満たない時間。スローモーションのように一真は少女の動きを俯瞰していた。防犯カメラよりも高い位置、ちょうどTV越しに見ているような遠いようで近い感じた。

引き延ばした時間は妙にむず痒く感じ、既決するはずの何かを待つのが妙に耐え難かった。そのため一真は耐え切れずに少女の腕を掴む。

「え・・・？」

そして柔道の背負い投げと同じ要領で彼女を投げ飛ばそうとする。その際に背に彼女の胸が当たったことで引き伸ばされた時間は元に戻り、離し損ねた手は少女を適当な場所に投げてしまう。

一瞬、彼女の心配をした一真だったが、猫のように身を翻す背中を見て安堵。そして千冬の部屋に入り込む。鍵は、偶然にも開いていた。

「逃げられちゃった、残念残念」

そう一人御散る少女は先程の一真の動きを思い出し、笑う。

（頭の回転だけが取り柄じゃないみたいね。反射神経・・・いえ、どちらかといえば集中力がズバ抜けてるのかしら。中々に面白いじゃない、犀川一真）

熱っぽい視線を千冬の部屋に向けていた少女は展開していたISを待機状態へ戻す。

「なかなか面白いわね、彼。本気になっちゃいそよ」

「ふざけるなよ、売女。対象は私達が先に目を付けていたんだ・・・横からしゃしゃり出てくるな、殺されたいか？」

「いやーん、こわーいー」

少女は背後、廊下の角から現れた影に身をくねらせながらふざける。相手はそれを忌々しそうに睨みながら毒を吐く。

「っは、腕っぷし一本でロシア代表候補まで伸し上がった女は面の皮も厚い。その分だと腹の皮も厚いのかもしれんな。さぞかしロシアは過ごし易からう」

「んもー、ちょっと冷たくない？私と貴女の仲じゃない♪」

「敵対相手にかかる感情は憎悪と殺意、疑念しか持ち合わせていないでな」

「そんなんじゃ振り向いて貰えないよー」

「問題ない。障害を排除し、選ばなければいけないようにすれば自ずと奴は私達を選ぶ」

「んー、お国柄の出る考えだねー。怖い、怖い」

「貴様に言われたくはないな、魔女め。」

とにかく、奴は私達が先に目を付けた・・・ロシアは指でも啜えて引っ込んでいろ」

気配が遠ざかるのを待ちながら、少女は笑い続ける。

「指を咥えて、ね」

少女は笑みを深くしながら窓枠から飛び出す。

瞬間的に展開したISを使用し、目標階へ飛び移った彼女は自室のベッドにダイブする。

（そんな勿体ない真似、私には無理だにゃーん♪）

次の日、一真は目の下に薄らと隈を作って登校した。

始終不機嫌オーラを発していた彼はSHR終了と同時に机に倒れこむと、寝息を立てる。そんな彼を周りは何があったのかと心配した。

昨夜のことは既に話が広まっており、現在の彼がそれに起因しているのは分かるが、真相は怖くて誰も聞けなかった。

「犀川さん、どうしたんだろう？」

「昨日泣きながら走ってましたから、多分そのせいじゃないかなー」

「うわ、何で私はそんなかずーを見逃したのさ?!
誰か! 誰か泣き顔のかずー撮った人居ないの?!」

朝の騒がしさの中で一真は足りない睡眠時間を一秒でも多く補おうと無心になる。

時間が経つとクラスには一組から様子を見に来た一夏達も合わせ他組の生徒もやってくる。その中に一人だけ、学年の違うものがあった。

「やあやあやあ、元気かい下級生諸君!」

クラスの扉前を占領し、にこやかに笑う少女。全員の視線が集まると同時にポケットから扇子を取り出し、バツと開く。

生徒会長

達筆な一筆書きの文字を読み、少女の顔をしっかりと目視した生徒達は大変驚いた。

IS学園生徒会長、楯無更識。容姿端麗、成績優秀、文武両道、才色兼備の生徒会長がそこにいた。

「はっはっはっ、中々にいい反応をするじゃないか諸君。お姉さんは嬉しいぞー♪」

楯無は扇子をパタパタと仰ぎながら歩く度に生徒達の視線が動く。

行き着いた先は、我関せず、我知らずを貫く一真の前である。どうやら彼は何があっても起きたくないらしい。

楯無は十数秒ほど扇子をパタパタと扇いでいたが、それをパタンと閉じる。

「なんだい、空気が読めないのかいカズ君？」

「・・・」

「お姉さん、かまってくれないと死んじゃうぞー」

「・・・」

閉じた扇子で何度か突いていた楯無だったが、何の反応も見せない一真に諦める。

扇子をバツとまた開く。そこには【お姉さん不満だな〜】と達筆な一筆書きでまた書かれていた。

「ふむ。お疲れのようだし、ここはアレだな・・・眠り姫ならぬ眠り婿を起こしてやるとしようか」

そういつて一真に顔を近付ける楯無に周りは驚き、声を失ってしまふ。

後数センチ。そんな至近距離になってから一真はやっと動いた。

「昨日の今日でこれか、クソ痴女」

ドスの利いた低い声を上げながら、一真は楯無の顔を掴み上げる。

アイアンクローをされた楯無はそんなことお構いなしに扇子をパタパタと扇ぐ。そこにはおはよーと書かれていた。

「いやあ、元気かいカズ君？」

「見ての通りですよ、生徒会長殿」

「よきかな、よきかな」

アイアンクローをする側、される側は各々普段通りの抑揚で話す。ただ、一真は手が白くなる程に彼女の顔を掴んでいたのだが、どうやらさして彼女には問題がないらしい。

「そういえば、聞きたいことがあるんだが」

「何か？」

「君の恋人は右手左手、どっちなんだい？」

「は・・・ああ?!」

楯無の言葉に一真は焦り、周りは顔を真っ赤にするか首を傾げる。

「んー、推察するに君はオカズを流し見しながらするタイプじゃないかな？」

「割れろ、割れちまえ」

「そこから導き出される答えは！君の恋人は右手、つまり利き手だ！」

「クソ、なんつー石頭だよコイツ?!」

「ペロペロ」

「っひ、な、何しやがる?!」

「舐めただけさ。いつかは舐めるのだ、今も先も変わらないじゃない
い」

楯無は舌を這わせながら一真を見る。それに怯えた彼はすぐさま
一夏の後ろに隠れると手を適当な場所で拭う。

「なんで俺に付き纏うんだよ!」

「未来の旦那候補その2だからさ」

「はあっ!そ、そんな勝手な事あるのかよ?!」

それに異論を上げたのは仲良し3人組の1人だった。

「・・・」

「かずーからも言ってやりなよ!」

少女の怒鳴り声を無視し、一真は楯無の言葉の裏を探る。

そして思い付いた答えは自信を持つのもおこがましい無理矢理な

物だった。

「・・・つまり、その1もいるんだな？」

「まあ、そうなるね」

「・・・」

一真は楯無を警戒しながら頭をフルに回転させる。婿候補その2ならばその1を差し出せば彼女から解放される。彼女との接点など皆無。つまり、彼女の行動範囲か知覚範囲にいる男がその1になるはず・・・何度答えを導き直しても、答えは変わらなかった。

「なら、俺は身を退こう・・・俺より、婿候補その1の方が顔も良ければ性格もいい」

「・・・へえ」

「二人で、お幸せに」

一真は爽やかな笑みを浮かべながら、一夏の背を押す。押された一夏はいきなりのもので慌てる。

「危ねえじゃねえか一真」

「一夏、生徒会長殿を幸せに出来るのはお前しかない。頑張れ」

「は？」

「お前が生徒会長殿を幸せにすれば、俺も幸せになれる」

「いや、ちょっと待ってくれよ！いきなりなんだよ？！」

「つまり！」

二人の会話を遮るように楯無が一夏を背中から抱き締める。

「君が、婿候補その1なんだよ・・・織斑一夏君」

「はあっ?!」

「んじゃお幸せにー」

抱き付きから様々な箇所を触り始める楯無と我関せずの立場に戻った一真に一夏は焦る。

「投げ遣りにすんな一真！」

「宜しくね、ダーリン♪」

「人の恋路は邪魔しない主義でな。ついでに修羅場は遠くで見たい

タイプなんだよ」

それから一現目が始まるまでの間、一夏達は箒、セシリア、鈴音を合わせて騒ぎ続けるのであった。

「かずーって黒いよね」

「艶が無いから自慢にもならないがな」

「髪じゃないよ、犀川さん」

「腹黒いですねー。女々しいですねー」

昨晚の話をしよう。

少女、楯無から逃げた一真はその晩を千冬の部屋で過ごす事にしもらった。

あの後、部屋に入れた一真はシャワーから出て来た千冬に殴られた。なにせタオル一枚の女性の部屋に入ったのだ。彼も仕方ないと甘ん

じて受けた。

そして、千冬はタンクトップにホットパンツという格好のまま椅子に座る一真と対面する形でベッドに座った。

「しかし、貴様がそんなに臆病だとは思わなかったぞ・・・貴様なら平気で外に簀巻きで吊しそうだ」

「・・・臆病ですよ、昔から。」

あと、俺だってそこまで外道じゃありません」

「図体ばかりデカくなった口か？」

茶化す千冬に愛想笑いを見せながら、一真は組んだ手を見る。カタカタ、カタカタと震える手を見て情けないと彼は苦笑してしまう。

そんな一真を見ながら千冬は冷蔵庫から取り出したビールのプルタブを開ける。プシュ、という旨そうな音に従い一気に煽った千冬は半分程残し、一真をまた見る。

「何が恐いんだ？」

「・・・」

「それでも私は教師だ。相談ならいくらでも乗るぞ」
「性欲を持て余してしまいました」

「グラウンド百週と兎飛びで外周三十週、どちらが好みだ？」

「遠慮しておきます」

「運動すればその軽口も付けまい。遠慮するな」

笑いながら黙り込む一真を横目に千冬は新たなビールを二本持ち出す。一本は自分に。もう一本は、一真へ渡す。

「まさか、飲めないとは言うまいな？」

「常識も、この場合無視したほうがいいですかね」

「勿論」

「ビール、嫌いなんですけどね」

カシユ、とプルタブが開く音が重なる。一真はそれを一気に半分以上飲み、千冬はチビチビと飲む。

「前に・・・といっても少し前なんですけどね、俺、拉致されたんです。

何処の国なのか、何処の組織なのかはわかりません。数日間、知らない場所に監禁されていたんです・・・」

「続ける」

「最初は相手も下手に手を出せないなんて考えて強情に反抗してきました。脅されても、殴られても、命だけは取られない。そう、思っていました。」

今思えば馬鹿ですよ……ISをまともに起動出来ないガキが、プロに適うわけがない……
二日後、俺は拷問されました」

その時の恐怖を誤魔化すように一真はビールを飲み干す。それでも足りないと感じた彼は勝手とわかりながらも冷蔵庫からビールを取り出し、飲み干す。

見つめる指先は、細かく震えていた。

「薄ら笑いを浮かべる女でした。アイツは笑いながら俺の爪を一枚一枚剥がし、剥がしえた後は指先の皮を剥がし始めたんです。今でも思い出せますよ。アイツは興奮してた……痛みで泣き叫ぶ俺を見ながら、興奮した顔でさらに拷問を続けたんです」

ビールの缶をゆっくり揺らしながら一真は揺れる黄色の液体を眺める。

「拷問は長く続きませんでした。軍が助けに来てくれましたから。ただ、頭から離れないんですよ。最高ね、興奮するわ、美味しそう……そう言ってハイになる女の顔が」

千冬はビールの缶を握り潰し、新たなビールを開けると一気に飲み干してまた握り潰す。その顔はとても苦々しく、ビールの味でそうだったのではなかった。

「まるで俺をオモチャか何かだと勘違いしてたんだ、と言いついて聞かせてます。」

でもアレからですかね・・・女性の興奮した顔がダメになったのは」「女性恐怖症という奴か？」

「そこまで広義ではないですよ。性的に興奮した顔オンリーです。それからはエロ本もAVも見れなくなりました。見るとあの時の痛みが生々しく思い出せてしまうんです。最初なんかからかわれる度に過呼吸を起こしてました」

「ふむ・・・」

千冬は彼の手を見る。男にしては綺麗な手だ。それが過去に無惨にされたとは少し信じられなかった。

「お前は、私を恨んでいるのか？」

なんとなく、千冬は考えてしまった。産まれも、育ちも、生きた環境も違うが一真は自分の愛しい弟の可能性なのだと。

「・・・なぜそんなこと聞くんです？」

「以前、一夏に聞かれたのだ。自分とお前の違いはなんなのか・・・勝手だ、嫉妬だ、運が悪かった、簡単に言い切れる境遇だが、納得も出来てしまう。私は、かなりの影響力があるからな」

「同情はいりません。

憐れみもいりません・・・優しさも、勝手な自己嫌悪も、俺に対する応援も。

俺、かなり甘えたがりなんですよ。だから優しくしないでください・・・今の俺だから、生きていけるんです。誰かに頼っちゃダメなんです・・・だから、やめてください」

静かな懇願に千冬はたまらず何かを言おうとする。言おうとして、留まる。

何を言うべきなのか、何と声をかけるべきなのか、千冬は迷ってしまった。

目の前の弱った少年を助けるだけの力がありながら、躊躇ってしまった。

それが悔しかった。世界最強の自負もあるし、それなりの人生経験の密度もある。しかし、目の前の少年一人助ける事は出来ない力の無さ。最強が聞いて呆れてしまう。

「なら、一夏を恨まないでやってくれ。アイツは関係ない」

「大丈夫ですよ、俺はそこまで、余裕はありません・・・
貴女を恨むのも、自分を慰めるためでしかありませんから」

「・・・なあ、一真」

「名前で呼ばないでください」

ピシヤリと千冬の言葉を止める。

「呼んでいいのは、気を許した人だけと決めているんです。
貴女に名前で呼ばれると、甘えが出て来る。失礼ですが、許してください」

「それでは犀川。貴様、いつまで女々しい事をしているつもりだ？」

「敵がいなくなるまで」

「可能だと本気で思っているのか？」

「可、不可でなく、やるんです。」

俺だって結婚願望くらいはありますから」

冗談めいた口調で一真は言うが、その道の険しさはかなりの困難が伴う。何せ、人間生きていれば擦れ違うだけで嫌悪感を抱かれる時もあるからだ。

なんとも不器用で、潔く、男らしい道を取ったと千冬は感心し、

彼を見直した。彼はただの変態ではないらしい。

さて、話はここで終わりではない。何故なら一真が寝不足の理由が証されていないからだ。

そして、一真は吸引力（トラブルに対して）の変わらないただ一つの主人公でもあるからだ。

「それより、ちょっと相談なんですが」

「なんだ、改まって？」

酒盛りも盛り上がりをすぎた頃だ。ツマミを互いに噛みながら一真は話のタネを持ち出す。

「一夏をどうかしてください。アイツを嫌いはしませんが、あまりにトラブルを持ち込んでくるので休まる暇がありません」

「耳が痛い・・・」

「最近は本当にエロゲの主人公なんじゃないかと疑っちゃうから始末が悪い。」

下手したらハーレムの一つでも作るんじゃない——」

「一夏はやらんぞ（キリ）」

「（。D。）」

「一夏はな、私が育てたんだ・・・
わかるか！一夏はな、私の全てと言ってもいい！」

そこからは千冬の一夏の良さを語られる事になる。一真が寝不足になったのも、一重に彼女の弟愛のためであった。

事件その7 「何故だか痴女に狙われたからさあ大変」 (後書き)

一真

「もしかすもしゃす・・・」

鈴音

「一真って、毎回何か食べてるわね。普通だったら後書き始まるよくらい言うもんじゃない？」

一夏

「気にするな。なにより一真が何か食べてないと心配で仕方ない」

箒

「確かにな。」

犀川先輩。どら焼いかがですか？」

一真

「食べる」

セシリア

「それにしても、よく食べますわ」

一夏

「さて、と……。」

いきなり重い話で悪いけど、一真が拉致されたってマジ？」

箒

「それは私も驚いたな。先輩にそんな暗い過去があったとは……。」

セシリア

「……ぐずっ」

鈴音

「アンタ、苦勞してんのね」

一真

「拉致2回。拉致未遂4回。脅迫34回。紛争地域に放置3回。ちなみに、拷問は1回きりだが未遂も合わせれば4回だな」

一同

「……」

一真

「紛争地域に放置された時は焦った……」

H・1に通訳して貰うまで廃墟に隠れてたんだが、ちょうど抗争が始まってな。夜だったから良かったものの、明るい昼間だったら間違いなく俺がIS適性者だってバレてた。それでなくとも無断入国の上に、武力介入で国際犯罪者になってたかもな」

一同

「……」

一真

「高槻さんに出会ったのもその時だな・・・最初は敵だと思って暴れたっけか」

一同

「・・・え？あれ？」

一真

「ドイツまで拉致られた時はキルヒアイス中尉に助けて貰わなかったら・・・生きてるって素敵だな」

一夏

「おかしいな・・・なんで一真って平気なんだ？」

箒

「き、きっと卓越した技能か何かがあるのだ！」

一真

「残念ながら、作る以外は平凡だ」

セシリア

「H・1がそれだけ高性能なんですわ！」

一真

「少しの加減速で体中が痛みます」

鈴音

「なんで生きてるのよ！」

一真

「逆に、なんで生きてるのか教えてくれ！
ドイツで逃げた時はマフィアに追われるし！無事助かったと思ったら中国でまたマフィアに襲われる！
マジでキルヒアイスさんとヤンさんに助けてもらえなかったら死んでたんだぞ！」

箒

「実力、なのか？」

一夏

「・・・さあ」

主人公&ヒロインズ 口喧嘩中・・・

セシリア

「そう言えば、キルヒアイスとヤンと言えば銀河英雄伝ですが、もしかしてクロスオーバーしてるのですか？」

一真

「本格的には出ないけどな。

まあ、外伝があったら出て来るんじゃないかね？」

鈴音

「奇跡のヤン。奇術師ヤンがウチの国にいるなんて……傲慢になるわね！」

一夏

「日本だと千冬姉くらいか」

一真

「後は有沢工業に高槻秋葉だな」

セシリア

「イギリスにはそういった方はいませんか……。ω。。」

箒

「ドイツだとキルヒアイスにラインハルトだな」

一真

「イギリスならインテグラになるんでね？」

セシリア

「HELLSINGまで……無節操過ぎやしませんか？」

一真

「0から考えるよりかは楽だからいいんだよ」

一夏

「ちなみに、フランスなら誰になるんだ？」

一真

「さあ・・・

誰かいるかねえ、フランス人なキャラ・・・ジャンヌ？」

鈴音

「ドリフターズのジャンヌだったりしないわよね？」

一真

「アツタマテツカテーカ、サツイドピツカピーカ」

鈴音

「そのありえない租借音止めて答えなさいよ！」

一真

「神のみぞ知る（キリ）」

主人公&ヒロインズ 開戦中・・・

箒

「そう言えば、先輩は体中傷だらけなのは何故ですか？」

一真

「婿入り前なのに・・・傷だらけですの」

セシリア

「犀川さん。新たに銃痕など如何です？」

一真

「貫通確実な熱量兵器はノーセンキュー」

セシリア

「ハードボイルドに磨きがかかりますわよ？」

一真

「押し付けるな。引金から指を離せ。そして冷静になれ」

セシリア

「私、男らしい型が好みなんですのよ？」

一真

「だってよ、一夏」

一夏

「いや、なんで俺に話振るんだよ？」

セシリア

「そ、そそそうですわ！なんで一夏さんが関係あるんですか？！」

一真

「確かに、模擬戦の時の顔付きは凛々しかったよなあ」

セシリア

「っ！／＼／」

鈴音

「はいはい。わかりましたーわかりましたー。んで、傷だらけの理由って何よ？」

一真

「色々だな」

鈴音

「なに？ここでも秘密主義？いい加減にしなさいよ」

一真

「いや、秘密にはしないが本当に色々あるんだよ。とりあえず、話せないのは抜きにすれば・・・拷問の跡、訓練の傷、イジメ、脅迫の際の傷、整備の時の傷、紛争地域での傷、マフィアから逃げてた時の傷、誰かを庇った際の傷と話の種はありますお客様。

さて、話してもいいが後書きが軽く本編を越える量になるが・・・覚悟はあるか？」

鈴音

「なら胸と背中の中の傷だけ教えてよ」

一真

「ごめん、それ無理☆」

箒

「本編に関わることなんですか？」

一真

「わりかし深い所に関わるね。だから無理だ」

主人公&ヒロインズ 談笑中・・・

一夏

「そういや、一真ってガチで戦ったことないよな？」

一真

「オルコットとやりあったんだが、忘れたのか？」

一夏

「だって主人公補正で乗り切ったじゃねえか」

一真

「なあ、この主人公シバいていいか？ いいよな？ なあ？」

ヒロインズ

「やめてください」

一夏

「一真の実力ってどれくらいなんだよ、マジで」

一真

「少なくともお前より強いよバカたれ。」

ちなみに、ガチで戦えばオルコットと凰にも勝てるが辛勝だな。それも最初だけで、次からは無理だ。箒は紅椿があっても勝てる。これは実力だが、逃げ続けられるとキツいな」

一夏

「え・・・もしかして俺って弱いのか？」

一真

「お前さあ、軍の訓練舐めてる？」

悪いが、お前程度ならオルコットも凰も2回目からは普通に勝てるぞ。特に凰とは相性最悪だからな、お前」

箒

「ですが、一夏は負け無しですよ？」

一真

「だったら俺も負け無しで行く自信はあるわ。」

いいか、一夏が勝てたのは相手に油断があったから。相手は弱い。相手は近接しかないってイメージがあるから足下掬われたただけ。2度目が通じるようなやり方じゃない。

一夏の武器は雪方二型しかない。つまり、それ以外の攻撃手段はないんだ。実弾や、実体剣で攻められれば負ける。箒だって実体剣使えば一夏に勝ち越せる筈だ。悪いが、この話で主人公補正が適用されるのはイベントだけでしかない」

セシリア

「気、気を確かに！」

鈴音

「そうよ一夏！これから、これからじゃない！」

一夏

「そこまで言わなくても・・・」

一真

「訓練によっては化けるかもしれないが、訓練し続けなきゃいけない上に主人公でもある俺に勝とうだなんてイベント以外はありえない」

箒

「ですが、先輩として油断さえすれば負けるのでは？」

一真

「負けません。油断してる暇が私には無いのです」

鈴音

「油断する奴はみんなそう言うのよ」

一真

「残念ながらありません。

もし、非公式で負ける場合は主人公補正（笑）によるギャグパートになる時だけです。それ以外、特にシリアスな場面では負けない」

セシリア

「ギャグパート・・・」

鈴音

「主人公補正（笑）・・・」

一真

「貧乏クジキャラで、死にキャラなのになんでこんな三枚目なんだろうな？」

箒

「わ、私に聞かないでください！」

一真

「スナイパーライフル使えばいいの？」

セシリア

「それは遠巻きに私には死亡フラグがあるとおっしゃりたいのですか？」

一真

「ティロ・フィナーレ（キリ）」

セシリア

「よろしい、ならば戦争ですわ」

一真&セシリア 空中バトル中・・・

セシリア

「・・・(ぼろぼろ)」

一真

「あいむういなー」

一夏

「勝ちやがった」

箒

「かなり汚いやり方だったがな」

鈴音

「まさかあそこまで話術で揺さ振るなんて・・・嫌な性格」

一真

「勝てば官軍、負ければ賊軍なんだよ」

箒

「使い方間違ってます先輩」

一真

「俺の在り方だから仕方ない」

鈴音

「そう言えば、アンタ、ロシアの代表候補に襲われてたけど、何か理由あるの？」

一夏

「あとアメリカもいたな。でも専用機持ちって俺達以外に居たっけ？」

一真

「3年に2人、2年に4人、1年に4人。楯無更布は2年だから残り5人居るな。ちなみに、教われていた理由は分かりません」

箒

「予想もつかないのですか？」

一真

「・・・いい機会だ、試してやる。」

まず、今回の話で俺は楯無に襲われた。さて、その理由は？」

一夏

「好きだって言ってたぞ」

一真

「・・・」

一夏

「なあ、その憐れむ目、止めてくれない」

箒

「経験から言うなら、先輩がそれだけ重要だからじゃないでしょうか？」

一真

「理由になってないな。それじゃ質問の言い方を変えたただけだ」

箒

「つまり、先輩の謎による利益が目的だと私は思います」

一真

「悪くないが甘い。30点だ。」

一般人としてはまあ間違っではないが、篠ノ乃東の妹として見ると甘い」

箒

「私は！あの人とは、関係ありません・・・！」

一真

「悪いが、それについては本編で言ってやる。」

さて、軍人であるお前らは赤点60だ。素人な答えするなよ？」

鈴音

「・・・そうねえ、アンタの謎っていう利益を捕捉するならまず男のIS適性者ってことね。特に後ろ盾が国となるといくらでも交渉出来るんじゃない?」

一夏

「だったら俺もそうなるんじゃないのか?」

鈴音

「アンタ、バカア?

いい! 千冬さんは世界が認める大御所! その後ろ盾なら誰もが諸手を上げるのよ! 一真みたいに日本しか頼れないのと違って、アンタは千冬さんっていう後ろ楯があるからどこも迂闊に動けないの! ったく。次だけど、H・1の技術独占とまで行かないけどISの取得。また男の適性者の研究ね。これが大きいんじゃないかしら? 最後に、アメリカへの牽制ね。ロシアが動いたとなればアメリカは下手に動いて正体バラされたら警戒される、正体隠して近付いた意味が無くなるから動きが鈍くなる・・・後はちよつと考えがまとまらないわ」

一夏

「・・・すげえ」

箒

「ただ単純なだけじゃないんだ・・・」

鈴音

「あ・ん・た・ら・ねえ!」

一真

「代表候補が腕っぷしだけじゃ勤まらない良い例だな。だがおいしいことに70点だ」

セシリア

「私も、鈴さんと同じ意見です。」

ただ付け加えとして、ロシアは焦っているのではないでしょう。日本は・・・こういう言い方は失礼ですが、アメリカの属国のような部分があります。そうなると関係の薄いロシアは多少強引でも繋がりが欲しい。犀川さんは今の所、嫌々従っていますから楯無さんを通して好印象を持たせて亡命という選択肢を作るのが考えられます。次に、犀川さんの立場です。犀川さんは良くも悪くも人脈があります。一夏さん、篠ノ乃さん、織斑先生、さらに私や鈴さん。ある意味世界の重要人物とその関係者と親しい間柄にあります。関係の薄い国にとってこれはある意味、棚からぼた餅とも言えますわ」

一真

「俺も同意見だ。さらに付け加えるなら、俺が研究所にいたからデータを盗む。悪くて内容を把握出来るかもしれないが・・・まあ、まだ答えはわからないから推測でしかないな」

一夏

「考え過ぎじゃないのか？」

一真

「考え過ぎだな。だが、積極的なアプローチをしかけてこられたら疑いもある。」

他国を刺激するリスクを負うんだ。下手すれば要らぬ考えを持たれたりするかもしれない・・・相応の利益がなければ普通はしない」

箒

「先輩って、他人の好意やお世辞を疑うタイプですか？」

一真

「そうだが？」

一同

「・・・」

一真

「無条件での好意や信頼なんてありえないだろ」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その8 「あ、あああ朝起きたら扉やガレージが半壊していたからさあ大奔

この小説はベランダに干されたシスターに出会って科学と魔術が交差云々という物語です。

賞味期限きれた焼きそばパンや卵、野菜炒めを食べた事がある方はこのまま戻って正露丸の在庫を確認してください。

・・・酸っぱい野菜炒めってあるいみ拷問なんだよ。

事件その8

「あ、あああ朝起きたら扉やガレージが半壊していたからさあ大変

シャルルが転入して最初の休日。アリーナでは小さな騒動が起こった。

騒動の中心にあるのは一つのショットガン。それを作った人間が一真だからさあ大変。

今回はそんな一真がとある社長に目を付けられるお話です。

うだるような夏の熱気が目の前に迫るぞと言わんばかりの春の終わりの快晴の日、一夏達はアリーナにやってきていた。理由は延期になった個人別トーナメント戦に備えての練習である。

「・・・一真の奴、先に行ってるのか言ってたのにいないじゃんか」

今朝、先に行くと言っていた友人はアリーナに居らず、見渡してみてもサボっている姿もない。あるのはアリーナの隅におかれたバカデカイ金属の塊が一つ。

周りの者達は苦笑するか、呆れながら各々の準備にかかる。

「そう言えば、犀川さんのISって変わってるよね。全身装甲だし、武装も見えたことないし、何よりあんなフォームは初めてだ。どこ製なの？」

全ての発端は、シャルルの一言から始まった。

「そういや、知らないな。」

なあ、あれってどこ製なんだ？」

「私は分らん。あまりそちらの知識は無いのでな」

「日本の新型、にしてはコンセプトが違いますわね。だからといって外国製にしてはあのようなフレームを作ってませんし、あんな実戦的な装備もあり・・・
あえて上げるならドイツやロシア、アメリカ、後は中東でしょうか？」

「中国ではないね。あんなスマートなのはあんまり作らないから・・・
ただ、言われてみれば結構謎が多いよね、アイツ」

「プロフィールだけなら織斑先生に聞けば分かるんじゃないのか？」

「いや、俺も気になって聞いてみたんだけど一真自身が止めるよう言ったらしいぜ」

「は？なんでよ？」

たかが名前や出身、誕生日を知られる程度じゃない」

「俺に言うなよ」

一同、ISを展開し終えたというのに練習も忘れ、今は居ない一真の事を話し続ける。

「犀川さんって自分のこと話さない人なの？」

「ああ。前に一度聞いてみたけど、はぐらかされた」

「そう言えば、アイツって頻繁に外出してない？」

「・・・確かに。週に2、3回は外出してるな。」

でも、それは借りてきたDVDやCDを返しに行っているだけではないのか？」

「だったら週1でいいじゃない。アイツ、それ以外でも結構外に出掛けてるわよ」

「お部屋に行っても大抵は居りませんし、確かに変ですわね」

思い返せば思い返すだけ一真の行動は腑に落ちない点が多い。

他よりも多い外出。頻繁にしているメール。高いIS戦闘技術や整備技術。広い知識。上げていくとキリがなくなる。

「一番は彼のISだよ。」

彼、軍に所属してるんでしょ？もしかして軍の試作品とか？」

「だったら私達にも話くらいくるんじゃない？それでも私もセシリアも軍所属よ？」

「実は、一真の爺さんがアイツのために作ったISだったりしてな。このISは神にも悪魔にもなれるISじゃあ、つって」

「「「「・・・」」」」

「じよ、冗談だよ！」

一夏の冗談に呆れていた四人だったが、本格的に頭を悩めさせる。

「アイツ、確かISのスペックを偽造してたんだよね？」

「ええ。当初は打金よりコンマ数倍程高いスペックでしたが・・・私との模擬戦やこの前の襲撃を見る限り既存の第三世代よりもスペックは高い筈ですわ」

「でも、アイツのISは実弾と実体剣だから第二世代じゃないのか？」

「装備なんていくらでも換装出来るわ。もし、あれで熱量兵装があったら・・・」

誰かの喉がゴクリとなる。ただでさえ高い機動力と高性能なミサイルを積んでいる機体が、さらには熱量兵装を積むというのはあまり考えたくない。

ブルーティアーズのハイパーセンサーを駆使しても慌てて避けなければならぬ速度のミサイルと光速の弾丸・・・そんな兵装を相手に巧く立ち回る自信は誰にも無い。

一夏はゴクリと生唾を飲む。気付けば額に汗が出ており、それだけこの場の会話に緊張感があるのだと気付いた。

「もしかして、一真って意外に凄かったりする？」

「マニュアル無しで打金の整備をしたり、果ては私達の専用機だって手探りでも整備する人間よ。凄いじゃすまないっての」

「それでも整備し切れないISなんですね、犀川さんののは」

重い沈黙が流れる。

本来なら学園の技師にIS整備を任せる中、ただ一人それを断った一真。

彼自身それなりに高い技術があるが、それでも連日連夜整備しなければならぬIS。謎が謎を呼ぶとはこの事か、と一夏は他人事のように考えた。

「先輩は、何故あそこまで他人を遠ざけるのだろうか？」

「知らないわよ。アイツが話さないんだから」

「もしかしてプロフィール自体が偽造だったりしてな。どこかの二枚目諜報員みたいにさ」

「「「・・・」」」

「冗談だぞ。冗談なんだからな。だから頼む！冗談にそんな真剣な顔しないでくれ！」

一夏の冗談でさえこの場では真実みを帯びる説得力を持たせる。
疑心暗鬼のように疑っては信じ込み、疑っては怒りを覚えてしまう。

「友人なら、教えるくらいいいんじゃないかしら？」

鈴音の怒りを孕んだ言葉に周りは否定の言葉を上げず、聞き流す。

彼女は一真を知人と考えている。しかし、鈴音の中での彼を含めセシリア達は友人だ。友人とは、秘密を共有し、心を分かち、相手の為に尽くせる間柄でもある。人はそれを親友等と呼ぶが、素直ではない彼女がそう口にすることはまずない。

「なんか頭に来た。アイツ、とっちめて洗い浚い吐かせてやる！」

「おい、鈴！」

頭に血が上ったセカンド幼馴染みを見て密かに嬉しいと感じた。
何故なら、彼女の怒りは友人として一真を見ていて初めて抱く感情だからだ。

何かと上から目線だったアイツが対等な相手を増やしてくれる。
これほど友人として嬉しいことはない。

鈴音を追い掛ける一夏は笑みを囁み殺しながら追い掛け、途中からは彼女を羽交い締めにして止めた。なにせ、アリーナを出てもI

Sを展開させ続けていたからだ。頭に血が上るのも悪くはないが、流血沙汰はマズい。

「あは、あははは・・・」

「大丈夫でしょうか、鈴さん？」

「一夏に篠ノ之さんがいるから大丈夫、じゃないかな・・・？」

シャルルの尻すぼみな声に不安になったセシリアは慌てて三人の後を追う。シャルルも来るよう誘ったが、彼女は少しISを調整してから行くと言って残った。

アリーナにはシャルルと鉄の塊を残し誰も居なくなる。

（犀川一真・・・未確認のIS・・・何故あそこまでデータがないんだろ。普通、あそこまで高性能なISの開発に成功したなら周りへの牽制に話を広めてもいいんじゃないのかな？

それに彼も僕を避けているような・・・もしかして気付いてるのかな？）

シャルルはISを調整する振りをしながら考えを纏めていく。

（いや、それは流血石にないよね。たぶん彼は僕がデュノアの人間だから警戒してるんだ。・・・失敗したな。デュノアを名乗らなければ

ば良かった。

最初はデュノアに食い付いて来ると思ってたけど、一夏も彼もあまり頓着してくれない。一夏はいいとして、彼は避けてるようにも感じる）

シャルルは一真の態度に顔を顰める。仲良くしたいのに、避けられる。それは中々に堪える物があった。

しかし、彼も勘違いしている。一真は確かに彼を避けているが、何も嫌っているわけではない。むしろ逆だ。彼はシャルルを好意的に思っているが故に氣遣って避けているのだ。

他人の評価をあまり信じない一真は基本自分の容姿は怖いと信じ込んでいる。それは朝の低血圧による不機嫌もあるが、高い身長や目付きの鋭さも関係する。

周りは彼をクールとは言わず、怖いとからかった。そのせいで彼は自分の容姿に怖いと信じ込んでいる。

さらに彼自身が人見知りの氣があり、人を氣遣えるため、自分みたいなのがいればシャルルは緊張する。まずは一夏達との時間を大切にさせよう。そういったありがた迷惑な氣遣いが彼の勘違いを誘発させた。

（まあ、まだ3年もあるんだ。少しずつ歩み寄ればいいか・・・）

腑に落ちない、納得出来ない、少し傷付いた……。そんな表情

を浮かべながらシャルルは一息入れて空を見上げる。

気持ちの良い、落ちそうなほど澄んだ青空だ。昨夜の雨のおかげで空気はよく澄んでいる。

肺に息を吸い込み、深く吐き出す。胸が少し苦しかったが、それを差し引いても気分は良い。

「よし！一夏達が戻るまで何かしよう！」

気分を入れ替え、何かないとキョロキョロと見渡す。

人が居れば模擬戦を。居なければ他の何かを。そう考えていたシャルルの目に布を被せた金属の塊が映った。

目を凝らしたことで映像がズームされ、それが銃であることがわかる。

金属製の箱のようなそれは一般のIS用の武器の二倍、下手すれば三倍近くの大きさがある。

なんとも出鱈目な見た目に反してデザインは良く、シャルルの好奇心が掻かれた。子供のように目をキラキラさせ、玩具を目の前にしているかのようにソワソワしだす。

（誰のだろう？）

キヨロキヨロとまた辺りを見渡すが、持ち主らしき人影は見当たらない。

（少しだけ、少しだけなら問題ないよね）

少しの罪悪感を代償に、シャルルはアリーナの隅に置かれた銃へ向かう。近付いて初めて分かったが、銃はポンプアップ式の散弾銃ショットガンで磨いていないのか輝きのない銃身が布からはみ出ている。

布には何か貼り紙が貼られていたが、日本語、しかも漢字ばかりで読み取れない。

シャルルはそれを無視して散弾銃を持ち上げる。

「うわぁ・・・」

ズシリとISに負荷を掛ける散弾銃は太陽光を反射させながら鈍く光る。巨大な銃身と異様な見た目はあたかも大砲のようであった。銃身には初めてみるエンブレムが彫られている。？がビリヤードの球を弾いているような絵柄にシャルルは子供のようにはしゃぎだす。

「格好良い！」

色々な角度で散弾銃を見ると、あちこちに何かをつけるようなアタッチメントが見受けれた。さらに、色々と触っているうちに中から様々な銃やナイフが飛び出し、さらにシャルルの子供心を刺激した。

「うわ、これってライフルの銃身かな？

これはナイフ・・・わわ？！なんか震え始めた！

これって手榴弾？色々入ってる・・・なんでだろ？

こっちは、予備弾装だ。凄い！」

キヤツキヤツとはしゃぐシャルルは次第にある想いに駆られ始める。

（これ、撃てるんだよね？）

考えてしまうともう止められない。今、持っている散弾銃はいたいどれだけの威力があるのだろうか。この武装のそれぞれはどんな効果があるのだろうか。

様々な思いがシャルルの中を巡る。既に彼の中に罪悪感は無くなっていた。

（一発、一発ならいいよね？）

銃を抱えながらアリーナの真中に向かい、射撃用の的を呼び出す。色鮮やかな的に狙いを定めながらシャルルは散弾銃のトリガーを引き絞っていく。

心踊るとはこのことなのだろう。シャルルは好きな物を食べるかのように力を込め、それでいてたつぷりと時間をかけた。

瞬間。

シャルルは見えない何かに押され尻餅をつき、鼓膜を銃声がこれでもかと叩く。

アリーナ中に連続する爆撃のような銃声は反響し、アリーナ内だけでは鳴り止まず外にまでその銃声を轟かす。

気付いた時には尻餅を着いていたシャルルは、見た目相応な反動に備えていたのに尻餅を着いてしまった事に驚きよりも先に歓喜が湧いた。

「なにこれ?! なにこれ?!」

銃身内で薪でもしているのではと疑いたくなる程にもうもうと立つ白煙に心打たれる。

IS越しに感じた反動と、未だに痺れている手先に歓喜が踊る。

先程の耳元で響いた爆撃のような銃身に舌先が痺れる。
癖になりそうなその感覚にシャルルはハッと思い出す。

散弾銃の威力。その結果を急ぎ確認したシャルルは満面な笑顔でその惨状を無邪気に笑った。

的というのが姿を消し、地面はブルドーザーでも通ったかのように扇状に抉れている。シャルルを中心に半径5メートルを消し飛ばした散弾銃。その威力に恐怖や呆れよりも先に感動が彼女を支配した。

「凄い凄い♪なにこれ、なにこれ!」

もう一度試してみたい。そう思い立ち上がったシャルルは散弾銃を構える。

そんな彼女に対し、銃声を聞き付けた人物がある物を投げる。

それは風を切りながら回転し、放物線を描きながらシャルルの頭

部へ直撃した。

「きゃっ?!」

別段痛みはないが、シャルルは反射的に悲鳴を上げてしまう。

頭に当たり、落ちたのはレンチであった。正式名称、モンキーレンチ。それかなり大きなそれは地面を多少抉っていた。

「なにやってんだバカたれ!」

「え、あ、え・・・?」

振り返ったシャルルが見たのは怒り心頭の真実であった。

ツナギ姿の彼は腰に工具を入れるベルトを鳴らしながら歩いてくる。

「なに勝手に使ってるんだ! 貼り紙見なかったのか!」

「・・・あ」

「~~~~っ!」

間の抜けたシャルルの言葉に一真は完全に頭に血が上った。

それから、彼はシャルルを正座させ説教を始めたのだった。

シャルルへの説教は一時間もかからず終わった。

現在、一真は黙々と散弾銃の整備し、シャルルは涙目で彼の後ろに待機している。

「トルクレンチ」

「・・・」

シャルルから渡されたレンチを後ろ手で受け取った一真はチラリと後ろを窺う。そこには俯きながら涙を堪える少年がいた。

「ん……。そろそろ泣き止め。男だろ」

「……そんなこと、言っても」

散弾銃のボルトを締めながら一真はグズグズと鼻を鳴らすシャルルを見上げる。

余程怖かったのだろう。シャルルは年甲斐もなく鼻を鳴らしながら涙を拭っている。

「ひっく、うえ……。ぐずっ」

「はぁ~~~~」

油塗れの軍手を脱ぎ、ガリガリと頭を掻く。その仕草さえシャルルは怯える。いくらなんでも幼過ぎると愚痴る彼はシャルルの足下まで近づき、彼を見上げる。

「デュノア。俺が怒った理由はわかってるよな？」

「ぼ、僕が勝手にそれを使ったから、でしょ？」

「足りないな」

「ぐずっ……。それが、未完成、だから、ひっく……。怪我したか

もしれない、から？」

「そうだ。あれは未完成の上に欠陥品でな・・・暴発だってありえ
たし、下手したら内部の手榴弾も爆発したかもしれない。もし周りに
人がいたら大怪我で済まなかった筈だ」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「貼り紙に日本語しか書かなかった俺にも落ち度はあった。だが、
お前を嫌ってじゃない。わかるか？」

「ひっく、ひっく・・・ぐず、うん」

「それじゃあ、今度から勝手はしないと約束出来るか？」

「ぐずずっ、ぐずっ・・・うん」

「よし」

涙を拭いながら頷くシャルルの頭を乱暴に撫でた一真はパン、と
膝を叩いて立ち上がる。それから背伸びをした彼は笑いながらシャ
ルルの肩を叩く。

「よし。なら手伝ってくれないか、デュノア」

「・・・え？」

「試射したんだろ？なら、感想を聞かせてくれ」

「怒ってないの？」

「お前が無事だったんだ、怒るより安心してるよ」

「嫌ってるんじゃないの？」

「別に嫌う理由はないだろ」

「・・・ぐずっ、ぐずっ・・・なにをすればいい？」

「うっし。まずはアレを整備しないとな！」

「うん！」

一真とシャルルは笑いながら散弾銃を囲みながら様々な話を話した。特に、散弾銃の強化案は盛り上がった。

シャルルと一真が休憩がてら小腹を満たすため外のコンビニへ出かけた後のことだ。

アリーナに一夏達が戻ってきた。

肩で息をする鈴音とボロボロの一夏達。一真を捜し出す目的が、いつしか彼を殴る目的になった鈴音の暴走を止めることになった彼らは既に練習をするような体力もなくなっていた。

「なんでこんなに捜し回ってるのにアイツはいないのよ!」

「「・・・」」

「あー、腹立つ!」

ドシドシドシ、と地団駄を踏む鈴音を見ながら一夏は腰を下ろす。

「アイツ、マジでどこ行ったんだよ?」

「部屋にいない。食堂もない。整備所も一足遅かった・・・もう、私は知らん」

「また、怒られますわね」

「「・・・ああ」」

重々しく呟くセシリアの言葉に一夏と箒が落ち込んでしまう。

そんな三人を見た鈴音はハントと笑いながら肩にかかった髪を払いのける。

「アイツが悪いのよ、アイツが。」

あー、思い出しただけで腹立つわ」

怒りの治まらない鈴音は飲物を買ってくると言って自販機へ向かう。セシリアも一夏と箒のリクエストを聞き、彼女の後に急ぎ走る。

残された2人は地面にへたりこみながら向かい合う。

「なんか、疲れたな」

「ああ。疲れた」

「しかし、本当にどこにいったよ一真の奴？」

ちなみに一真だが、現在シャルルとコンビニで菓子パンを前にしながらあれやこれやと説明を交えて買い物をしている。周りからは親しい先輩後輩や血の繋がらない兄弟のような姿に見えているのだが、両人や一夏にはどうでもいいことである。

「なあ、一夏」

「ん、なんだ？」

「前々から聞こうと思っていたんだが、お前にとって先輩はどういう人なんだ？」

「んー・・・どうって言われてもなあ」

「妙に懐いてるじゃないか。何かあればまず先輩を頼るし」

「懐くって、犬や猫じゃあるまいし。」

「そうだな、気の許せる友人。後は頼れる兄貴みたいなもんかな？」

「それだけ、なのか？」

「ああ。なにせここで男って俺か一真だけだろ。やっぱり女の子よりは相談しやすいんだよなー」

「そ、そうか。そうなのか・・・」

「ああ」

（よかった・・・一夏はそっちの気はないんだな）

一夏の答えに安堵の息をつく。

「あ、でもさ、やっぱりたまには筈にも相談するかもな」

「私にか？」

「だって幼馴染みだからこそ相談出来る話もあるじゃんか。そういうとき、箒がいてくれると助かるよ」

「そ、そうか・・・そうかそうか！」

突然の事ではあったが、一夏の言葉を聞いた箒は勢いよく首を振りながらニヤける。にへら、とだらしない笑みを浮かべながら一夏の言葉を反芻し、またニヤけてしまう。

「そういやさ、アレなんなんだ？」

「アレ？」

一夏が気付いたのはアリーナの隅に乱雑におかれている工具や散弾銃である。気持ち程度に布をかぶせてはいるが、隠し切れずにはみ出ている箇所が多い。どうやら作業中のようだ。

現在、一夏達は何もすることはない。あっても鈴音達を待つくらいだ。つまり、手持ち無沙汰なのだ。

練習をするテンションではないが、だからといって動きたくないと思うほど疲れてはいない。そうなると何かしたくなる。今回はたまたま好奇心を満たすという目的だ。

(ちよつとだけ、ちよつと・・・)

若葉の茂る桜並木の商店街を一真とシャルルは歩いていた。手にはコンビニで買ったアイスクャンディーを持ち、シャルルは舐めながら、一真は口に咥えながら携帯を弄っていた。

(・・・なんか、仲良くなっちゃった)

一夏や周りのクラスメートから聞いていた話と違う一真の一面はとても面倒見のいい年上の男性であった。

勿論、そういった話も聞かされていたが、大抵は彼の武勇伝で、しかもあまり良い感じの内容ではない。

曰く、怒らせると女子供でも容赦はしない。

曰く、彼はサディストの鬼畜である。

曰く、女たらしで捨てた女性は星の数。

曰く、よく喧嘩をしては怪我をして保健室にいる。

曰く、朝に彼に会おうと犯される。

根も葉もない噂ではあるが、それを聞かされ続けた一真の第一印象は最悪の人間であった。一夏に誘われて会った時もかなり緊張したものだ。

「あ、にいちゃん」

「ん……。ああ、大河か。マサさん、お父さんは元気か？」

「元気だよ！今日もメガネつくってる！」

「おー、そうかそうか。」

大河はこれから友達とサッカーか？」

「うん！」

「車に気をつけて遊べよー」

「わかったー。お姉ちゃんもじゃあねー」

「へ、ええ?!」

「・・・お姉ちゃんだってよ、デュノアちゃん?」

「怒るよ、カズマ」

「可愛いだけのお前に怒られても怖くないがな」

知り合いらしきの子供に手を振り、また歩きだす。彼は何が楽しいのか分からないが、笑顔であった。

そして歩きだして数分もしない内に一真は呼び止められた。相手はメガネをかけたオバサンであった。

「あら、一真君」

「あ、どうも」

「今日はお散歩か何か?」

「いえ、腹が減ったからコンビニまで買いに行ってたんですよ」

持っていた菓子パンや飲み物を見たオバサンは笑いながら呆れ、持っていたカバンから焼きたてと思わしきパンを2つくれた。

「ちゃんと食べなきゃダメよ。
それで、そちらの方は？」

「同じ学年のデュノアです」

「初めまして、シャルル・デュノアです」

「あらまあ、外人さんなのに日本語がお上手ねえ」

「いえ、そんな・・・」

「照れなくていいのよ。私なんかまだ一真君に英語を教えてもらってる最中の身なんだし。

機会があつたら一真君と一緒に紅茶でも飲みに来てね。美味しいスコーンを食べさせてあげるから」

「ありがとうございます」

メガネをかけた優しそうなオバサンと分かれ、後で先程のオバサンが有名ホテルのオーナーだと聞かされ驚く。さらには趣味で喫茶店もやっているらしく、一真に誘われてシャルルは戸惑いながらも頷く。

また馴れ初めを聞くと、たまたま好奇心で立ち寄った店がオバサンの喫茶店だったらしく、雰囲気を入り何回か来店していたら仲良くなっていきらしい。今ではたまに開かれる小さなパーティーにも呼ばれているらしい。

「あ、犀川先輩！」

「ん・・・おー、中野か」

「お久しぶりっす」

次に会ったのはゲームセンターにいた中学生くらいの少年少女達だ。

どうやらクレーンゲームをやっていたらしく、何人かは大きなヌイグルミやお菓子を保持していた。フランスではこういったゲーム機がないため最初は驚いたものだ。

「最近見ないですけど、忙しいんですか？」

「うちの上司からのラブコールがあつたからな・・・休む暇もない」

「え、ええ！犀川先輩、彼女いるんですか？！しかも年上？！」

見るからに驚きの表情を見せる少女。もしかしたらカズマに恋心でも抱いているのかもしれない。

「流石っす！流石は俺達の先輩！羨ましい限りっす！」

「いいなー。俺も早くそういった人と会いたいもんだ」

「なら代わるか？」

変わりに、学園外周を5周とシャトルラン10セット、短距離走15セット、腕立て腹筋背筋100の10セットに監視付きでラブコールも付くぞ。しかも毎日」

「「遠慮します」」

「遠慮すんな。むしろ代わってくれ、頼む」

「「良かったー」」

「良かないわ。こちら連日連夜で死にかけてんだよ」

笑い合う一真達はそれから少し話して別れる。聞けば彼らとはゲームセンターで不良に絡まれていた際に知り合ったらしい。偶然通り掛かった一真に助けを求めた彼らを助けてからは何かと話し掛けられるという。

「面倒見がいいんだね。本当にお兄ちゃんみたいだ」

「からかうなよ」

照れる一真を笑いながらシャルルは彼の評価を改めていく。

（間違っても、カズマは噂のような人間じゃないみたい。噂通りならこんなに好かれる筈ないもん）

商店街を歩きながら一真達は時折寄り道をしながら学園に帰る。

時折知り合いに話し掛けられたり、興味本位でシャルルが立ち止まっては嫌な顔せず一真は付き合った。

「日本って凄いね！」

「そうか？」

「うん！食べ物安くて美味しいし、ゲーム機は凄いし、やっぱり凄いよ！」

（ゲーセン、か。そういや最近忙しくて行ってないな・・・たまには行くか）

「ゲームセンターには他にどんなゲームがあるの？」

「ん？ん・・・格闘、シューティング、カジノ、クイズ、シュミレーション・・・まあ、色々だな」

「カジノもあるの?!」

あんな小さな建屋にスロットやルーレット、さらにはポーカーなど様々な施設があるのかと驚く。

そんな場所に学生が行っているのかな？

「あー、金銭はかけないぞ。あくまで換金したコインで遊ぶだけのお手軽ギャンブルだからな」

「そうなの？」

「日本では賭け事は二十歳からだからな。まあ、仲間内なら問題ないがな」

「カズマもしたことあるの？」

「何を？」

「ギャンブル」

「そりゃあ、仲間内だとな」

（ギャンブルするんだ・・・）

思い出し笑いをしているカズマを見ながら自分も笑っていたが、あまり好印象ではない。ギャンブルをする男は大抵がろくな人間じゃない。

「だけど基本的に賭け事は嫌いだ。まあ、仲間内なら罰ゲームで済むからよく馬鹿やってたな」

「そうなの？」

「ああ。パシリにしたり、されたり。酷い時には女装させたり、コスプレしたり。」

本当に、馬鹿をやってたな」

昔懐かしむカズマは、なんとなくだが非常に大人びて見えた。たった二、三歳しか変わらないのに一夏とここまで違うのは何故だろう？

「俺がナース服着てたなんて信じられるか？周りは笑ってたが、俺は恥ずかしくて死にそうだったよ」

「カズマがナース服を?!」

考えてみる。

目の前の背の高い少年が顔を真っ赤にしながらナース服を着ている姿を。想像の中の彼はカツラを被り、薄く化粧をしていた。いそうでない姿に、笑うより先に感心してしまう。

（なんか、出来る女って感じが・・・）

「勿論仕返しにバニー着せたがな。そしたら次はビキニを賭けて大富豪してたな・・・いやはや、相撲取りみたいな奴がビキニ着たときは腹が振れると思った」

「なにそれー」

2人して笑いながら帰る。

また勘違いしていたことに罪悪感を感じていたが、すぐに忘れてしまう。今ではカズマの話に夢中だ。

しばらく笑い話を聞かせてくれていたカズマだったが、数秒、たった数秒だけ何かを見て眉を寄せた。それもすぐ笑顔になったが、気になって振り向くと電気屋に並ぶ大型液晶テレビがあった。

映されているのはあんパンが主役のアニメ、カタナを持って戦う映画、何かの会見、妙にコメディ調なドラマ、ゴシップを流すニュース、それに天気予報だ。

「あ、これって・・・」

シャルルが目にしたのは会見のニュースだ。

若白髪が目立つ髪を後ろに撫で付ける覇気の満ちた老人に複数のフラッシュとマイクが向けられている。タイトルには『IS学園を守った英雄の正体に迫る?!』と映し出されている。

『えー、ではIS学園に在住する関係者の名は明かせない?』

『ええ。彼は特別に在住しているため、名を明かせば余計な混乱を

招くためここでは伏せさせてもらいます』

『なぜ関係者がI S学園に？
それは教師としてですか？』

『伏せさせていただきます。
ただ、関係者がその場にいたのは偶然です』

『世界で二人目の男性I S適合者との噂がありますが、なにかコメントはありますか？』

『伏せさせていただきます』

『襲撃事件に対して関係者1人で解決したというのは本当でしか？』

『事実です。』

軍の厳しい訓練を乗り越えた我が兵士ならば当然です』

『I S学園内でも解決出来たのでは？』

『被害や損害を考えた場合、生徒達よりも訓練を積んだ我が兵士の方が適任と判断したためです』

『I S学園には多数の代表候補生がいるのにですか？』

『それだけ我が兵士の水準が高い。それだけです』

『そうするとI S学園の警護に自衛隊が動く可能性もあるのでしょうか？』

質疑応答に答える老人を見ながらシャルルは後ろにいる一真を見る。

「・・・カズマ？」

「・・・」

そこには明確な嫌悪感を顕にする一真がいた。眉を寄せ、目を細め、顔を顰める姿はとても印象的であった。

「これ、カズマのことだよね？」

「さあな」

「え、でも・・・」

「自衛隊の大将が言ってるんだ・・・そうなんだよ」

早足で歩きだしたカズマの後ろを歩きながらその背中を見つめる。顔は見えないが、きっと不機嫌に違いない。

「ごめんなさい」

「なんで謝る？」

「だって、気分悪くしちゃったし」

「お前は悪くないよ。俺が勝手にへそを曲げただけだ」

一真は歩調を緩め、また並んで歩いてくれた。見れば彼の顔には笑顔が浮かんでいた。

「俺は、アレに関わりたくないんだ。だからあまりアレの話はしないでくれ」

「でも、軍属じゃないの？」

「あんな汚い大人の狗になった覚えはない。それに、自衛隊だ」

「同じじゃないの？」

「自衛隊は国民を守るためにある。誰かの評価を上げるためでも、ましてやパフォーマンスのためでもない。日本の自衛のためにある組織だ・・・個人の私物じゃない」

「・・・なんか、怖いね」

「気付けばな。知らなければ幸せでいられるぞ」

「でも、悔しいかもしれない」

「大抵の日本人はテレビを信じてるからいいんだよ。テレビしか知

らないから幸せでいられる。見た目が綺麗だから外にいる奴にはそれで十分なんだ」

「どういうこと？」

「柵の内か外かの違い、それだけだ」

「よく、わからないや」

「知らないならそれでいいだろ。それが俺達の世界なんだから」

それからカズマは話続けた。あそこの店は品揃えがいい、あそこはクレープが美味しいし。必死に話を逸らす彼に、自分は黙って従った。もしかしたら、彼が大人びているのは諦めているからなのかもしれない。

アリーナに辿り着いた一真が見た物・・・それは今まさに試作品の散弾銃を試射しようとする一夏の姿であった。

その背後にはI Sを装着した箒達がおり、彼が試射するのを待っている最中であつた。

叫びそうになった一真は直感的に何かを察知してI Sを展開。シャルルを抱き締めると次にA I Cで周りの振動を完全に停止させる。

「え、ええ?!」

数秒だろうか。シャルルの戸惑いの声を無視し、背後を視認しながらシャルルの様子を窺う。顔を真っ赤にし、何やら言葉にならない声を発している。

背後では恐れていたとおり散弾銃が暴発。周りを巻き込んだ一夏は数メートルの距離を飛び動かなくなる。予測に過ぎないが、大量の外部情報を処理し切れず思考が停止しているか気絶しているのだろう。

反響音が引くまでの数秒間、一真はシャルルの周りの振動を中和し続けた。H・Iの補助があるとは言え十秒以上の慣性停止はかなりの負荷があり、鈍い頭痛が起こり始めてくる。

『反響音が静まりました。A I Cを解除します』

H・1の音声と共に切って貼ったように突然音が耳に飛び込ん
くる。

シャルルを解放した一真は横に倒れた。地面に倒れたまま荒い息
をしながら鈍い頭痛に顔を顰める。

ヒュー、ヒュー、ヒューと擦れた音が喉からなる。脇腹は異物感
と勘違いしてしまいそうな痛みが起こり、手足が軽く痺れる。まる
で長距離走を全力で走り抜いたかのような疲れだった。

「お兄ちゃん?!」

「コヒュー、ヒュー・・・」

「だ、大丈夫?! ねえ返事してよ!」

「ゴホッ、ゴホゴホッ・・・ハアハア」

「お兄ちゃん!」

「すこ、し静かに・・・してくれ・・・」

ISを展開仕切れなくなったためにH・1は待機状態に戻る。H
・1もあのまま展開しては大小に関わらず負荷がかかると判断
したためだ。

冷たいアリーナの土に一真の汗が染み込んでいく。余裕が出来て
きて分かったが、体は服を着たまま水を被ったかのように全身が汗

でビショビショだった。

張り付く衣服の気持ち悪さに顔を歪めながら痺れの抜け切らない腕で体を起こし、仰向けになる。

心配そうに涙を目に浮かべるシャルルに笑いかけながら一真は息を整えてから話し掛ける。

「大丈夫、みたいだな？」

「何があったの?! なんでいきなり倒れたのさ?!」

「一夏が散弾銃を暴発させた。

俺が倒れたのは、反響音からお前を守ったからだ。予想以上に負荷があったせいで頭が痛いんだ・・・少し声を小さくしてくれ」

「ご、ごめんなさい」

「アイツらは無事か？」

「え、ちよつと待って・・・一夏が倒れてるくらいで他の人は大丈夫そうだよ」

「そうか・・・なら良かった」

それから心配そうに見下ろすシャルルに無理して話し掛けながら一真は体を回復させる。

数分ほど休むと頭痛以外は良くなり通常通りに動けるようになる。

「あー、災難だった」

「もう、心配したんだよ!」

「心配させるくらいだったんだろうよ。下手に聞いてたら鼓膜破れてたかもしれないぞ」

「冗談だよね?」

顔を青ざめるシャルルに何も答えないまま一真は立ち上がる。

「さて、説教だ」

アリーナの休憩所を使用しての説教は一時間程で終わりを迎えた。
始終正座を強制された3人は痺れる足を労りながらベンチでぐったりしている。

何故使ったのか、何故怒られているのかを分かるまで延々と怒鳴っていたため喉が枯れてしまいシャルルに飲み物を頼んだ一真は携帯を弄りながらメールを打ち続ける。

――図面と稼働データは研究所に送つてくれ。

――了解。パスワード、暗号化は如何しますか？

――頼むよ。悪いな、手間かけて。

――問題ありません。データの転送を終了、メールが四件ありますが如何しますか？

――誰から？

――高槻中将与斎藤技師から私事のメールが三件。研究所からの転送で部隊告知が一件。

メールを返信し終わる頃にはシャルルが飲み物を人数分買って帰ってきた。買ってきて紫蘇玄米茶を見てあまりの冒険心に顔を顰めつつもチビチビと飲んでいく。

「酷い目に遭った」

「怪我人が出なかったんだから酷い目とは言わん」

「私らがつて意味よ・・・」

「当然の帰結だ」

「足がまだ痛みますわ・・・」

「罰だ受け入れろ」

「先輩は鬼です」

「鬼という名の好青年です」

グチグチと文句を垂れる4人をあしらいながら一同は後片付けのためアリーナへ戻る。

午後も半ばに入るのにアリーナには他の生徒の姿は見え、ただスーツを着た男性が中央で散弾銃の残骸を調べていた。

ピシツとしたスーツに後ろに撫で付けた髪。揃えた顎髭や鍛えてあるだる身体に一直は自然と警戒してしまう。唯一の救いは相手がアジア系ということだ。

「すみません、散らかしてて。今片付けますので」

振り返った男性を一言で言うなら近所のオジサンだった。

笑顔により皺の出来方や振り替える際の柔らかさ、そして此方に対する暖かな眼差しがそう思わせる。

「ああ、気にしないでいいよ。

それよりもこれは君の物なのかい？」

「はい」

「もしかして君は世界で2人目の男性IS適合者かな？」

「確かに、自分はそうなりますね」

「ということは、これは日本政府が開発した新たな武装なのかい？」

突然目をキラキラさせる男性に一真は戸惑う。聞かれるとしたら勧誘か、探りだと予測していたために戸惑いは大きい。

「確かにそうなります」

「頼む。これを開発、もしくは提案した技術者を紹介してくれないか！」

「え……と、何故ですか？」

「これを作った人間はきつとロマンが分かるはずだ！

この構造を見れば分かる！これは耐えに耐え、一撃で状況を覆すコンセプトだ！

複数の収納スペースに様々なギミック。さらに一撃に重きを置いた構造と威力……素晴らしいと思わないかい？！」

興奮しながら散弾銃を褒めちぎられた一真は悪い気はしないが、何か裏があるのではと疑ってしまう。

「銃身が破裂している辺り素材が耐えられなかったのか？いや、バレルは無事だから周りで何か爆発したのか……だがそんな弾薬を作るなんて流石だ！

それに銃身に施された細工も中々悪くない。よほどこれに思い入れがあったはずだ……なにより1つの武器で戦況を変えするという考えにロマンがある！」

「ですが、使えばISでも吹き飛びますよ？」

「二脚だからダメであって多脚、いや逆間接でもいい。それなら問題なく反動を殺せる筈だ！

……いや、タンクにこれを載せるのも悪くないな。そうすればもう少し重くてもイける。

頼むよ少年！是非、是非この製作者を紹介してくれ！」

肩を掴まれた上、頭を下げられた一真はどうすればいいのか分からず周りの助け船を確認する。だが誰もが目の前の男性に付いていけず目を丸くしている。

「頼むよ少年！」

「あの、えと・・・その前に貴方、誰ですか？」

「おお、済まないな少年！私、こういう物だ。

ロマンを求め、ロマンを与え、ロマンを追究し続けている」

シンプルでありながら高級感溢れる淡い桜色の名刺入れから取り出された名刺を受け取った一真は仰天して目を見開いてしまう。

「あ・・・え、え・・・嘘お」

名刺には次のように書かれていた。

有沢工業 総取締役

社長 有沢隆文

金魚のように口をパクパクさせながら名刺と隆文を見比べる。

目の前にいる隣所なオジサンが世界が誇るモンスター企業、有沢企業の社長なのだ。

しかも有沢財閥のトップ中のトップが目の前にいる。これは如何なる有名人や著名人よりも希少なことだ。

「あうあうあ・・・」

「ちょっと、このオッサン誰よ？」

「バっ！この方は有沢工業総取締役、有沢隆文社長だぞ！」

『え、え？・・・ええゝゝゝっ？！』

「ハッハッハッ、君達未来ある少年少女に比べれば大したことないさ」

「いやいやいや、そんな滅相もない！」

「君は、織斑一夏君だね？」

私みたいな大人はもう決まったレールを走るしかないが、君達はまだ未完成のレールを走っているんだ。その先にどんな未来があるかを考えれば私などつまらないだけさ」

「いや、ですが私達はここを卒業しても有沢さんのようには・・・」

「私になるなどつまらないぞ、君。もし将来、私のようになると言う子供がいたなら叱るだろうな。

いいかい、誰かのようになる。誰かみたいになりたいなんて考えちゃいけない。そんなつまらない目標はすぐ辿り着くし、着いた後は何もないんだ。気を付けなさい」

「でも、俺、千冬姉みたいに強くなりたいんです」

「何を、どのくらい、どのように。」

他人の目標は楽だよ。何せ既に答えがあるからね。だけどそれだけだ。分かり切った未来はつまらないよ」

「だけど、仕方ないんじゃないですか？

そうならないといけないなら、そうなるべきじゃ」

「いいや、それは生きているとは言わない。生きるとはそんなに簡単じゃない。

生きるっていうのは、常に選択して抗って、挫けそうになってそれでも直向きに求めることだ」

「求める・・・」

「だから幼い子供は皆、イキイキとしてキラキラした目をしているだろう。あれは自分達の求める楽しさを探しているからさ」

隆文の言葉に思うことがあるのか皆が皆、彼の言葉を反芻する。

「それで、どうなんだい？」

「勧誘でしたら無理ですよ」

「そこは説得するさ！」

「申し訳ありませんが、無理な物は無理なんです」

「何故？何故無理なんだい？何故決め付ける？」

「俺がそれを作り上げたからです」

『・・・・・・・・・・・・・・・・嘘お~~~~っ?!!』

「おお！君がこれを?!」

各々の反応に少しばかり傷付いた一真は拗ねて口を尖らせる。

「嘘とはなんだ嘘とは」

「だって、だってだって！」

「こ、こここれを1人で作っただんですの?!」

「図面だつてあるぞ」

「アンタ、嘘つくならもう少しマシな嘘つきなさいよ！」

「おいこらチビ助。信じられないからってそれはねえだろ」

シャルル達の言葉に傷付きながら証拠の図面を見せる。それを見た一同はあんどりと口を開けながら図面と一真を見比べた。

「君、名前は?!」

「さ、犀川一真です」

隆文のあまりの剣幕に負けて名乗ってしまう。後悔したが、もう遅い。

「犀川君・・・ウチに来たまえ！」

「無理です」

『ええ~~~~っ?!』

打って変わって平坦な声で即答した一真に周りは驚きの声を上げた。

「ぼっ、有沢工業っていや超モンスター企業だぞ！
しかもその社長からのスカウトに断るか普通？！」

「考え直しましょう先輩！」

「アンタ、誰もが羨む企業からのスカウト蹴る気？！」

「まだ間に合いますわ、受けましょう犀川さん！」

「そ、そうだよお兄ちゃん！」

「いや、無理な物は無理だし」

説得に対して柳のようにヒラリヒラリと風を受け流すかの如く無理だと答えていく一真。それを隆文はさらに目を輝かせながら一真にあれやこれやと手を尽くす。

「ですから、いくら金を積まれようと地位を用意されようと無理な物は無理なんです」

「だが、君はもっとのびのびと研究したくないのかね？」

「遊びを仕事にはしたくありません」

「ならば——」

「それでも――」

2人の交渉は一步の進展もないまま夕方まで続いた。

自室のベッドに寝転がる一真はぐったりしていた。

「・・・・・・・・・・疲れた」

『お疲れさまです、マスターカズマ』

「凄い、デジャブる会話だったわ」

隆文との交渉を思い返しながら寝返りを打つ。

『私のメニューは嫌だったの？何がダメだった？』

『いや、嫌なんじゃなくて』

『ならメニューが足りないの？』

『やめてください』

『やっぱり私のメニューがダメなの？』

『な、泣かないでくださいよ！』

『だって——』

『ですから——』

（ああ、高槻さんに似てるんだ・・・泣くか、押すの違いだけで）

また寝返りを打って窓の外を眺める。夕焼けに染まる空が雲の白さを際立たせている。

『マスターカズマ』

「・・・どうした？」

『研究所からメールが届いています。内容は先々週に依頼した武装12点が完成、試作品を送るのでモニターをして欲しいとのこと』

「出来たんだ・・・それぞれの数量は？」

『対人・対IS用鎮圧弾が各12、MVNが4、ダミードールが3、広域阻害弾が8、シールドブレードが1、デュアルソーが1、反応作薬が5kg、ダミービットが3、殲滅用・援護用・強襲用PACが3点です』

「到着予定日は？」

『明日です』

「・・・到着したら設定と調整しないと」

『でしたら先にOSをインストールします。
マスターカズマは早く休んでください』

H・1の気遣いに感謝しながら一真はゆっくりと微睡みに意識を沈めていく。

柔らかく、温かな布団に包まりながら一真はパソコンから流れる古臭いカントリーな曲を聞きながら眠りについた。

『データを更新・・・完了。』

疑似人格コンピュータをアップデート開始・・・完了。次いで生体コンピュータのデータを更新』

大量のウィンドウが一真を中心に開いては閉じていく。

室内を青白い光が灯っては消え、灯っては消えていく。ウィンドウの光りにより真昼のように明るい室内の中でも一真は起きることなく静かに寝息をたて続ける。

『対応にたいし却下。対象はフェイズ2で停止中、現状を静視することにより決定・・・承認。』

続いてシステムの状況確認・・・対象はレベル4へ移行を確認』

様々なウィンドウが閉じていく中、とあるウィンドウだけが残る。

S y s t e m P a l v a r y s e r

——— N o w L o r d i n g

そして翌日、彼のガレージと部屋の一部が破壊されていたのに彼は気付く。しかも自室の扉は無理矢理直したのかひび割れており、押しただけで廊下側にズレ落ちた。

「（ノ）、瓜、（ヰ）」

事件その8 「あ、あああ朝起きたら扉やガレージが半壊していたからさあ大変

時計（一真の代役

「カチカチカチ」

一夏

「・・・」

箒

「・・・」

セシリア

「・・・」

シャルル

「・・・」

時計

「カチカチカチカチカチ」

鈴音

「・・・・・・・・・・・・・・・・はじめなさいよ！」

置き手紙

「ゆっくりして行ってね☆」

シャルル

「えと、初めてで分からないことばかりだけど宜しく」

一夏

「ああ。

・・・・にしても、一真が居ないなんて初めてだな」

シャルル

「そうなの？」

一夏

「ああ」

箒

「いつもは先輩の食事から入るからな。
だから出だしは誰も慣れてないのだ」

シャルル

「そ、そうなんだ・・・」

セシリア

「まさか居ないなんて思いませんでしたから・・・お茶が入りましたわ」

一同

「ありがとう」

鈴音

「ずずう・・・そういえば、アンタ達ってデートに行ってたのよね？」

シャルル

「デ、デデデートじゃないよ！／／／
・・・っていうか女だって知ってるの?!」

置き手紙 2nd!

「注…シャルルは僕っ子なおにゃのこです」

シャルル

「・・・ええ」

一夏

「気にしたら負けだ」

一夏ラブーズ

「確かに」

シャルル

「大変そうだね」

一夏

「早速だけど、シャルルって意外に子供っぽかったな」

シャルル

「そ、そんなことない！」

鈴音

「いやいや、子供っぽいって。自覚しなさいよ」

シャルル

「ぼ、僕のどこが子供っぽいのか！」

鈴音

「あんなバカみたいな散弾銃にはしゃいでる所よ。まるで玩具を与えられた子供みたいじゃない。

それに、今だってムキになってるし」

シャルル

「それは、その・・・うう」

箒

「しかし、一夏もそうだったが何故あそこまではしゃげたのだ？」

一夏

「うーん・・・何故って聞かれてもなあ。あえて上げるならロマン、かな？」

セシリア

「ロマンですか？でも、銃ですよ？」

一夏

「女子は分らない人が多いかもな。

男子ってさ、ああいったデカくてゴツくてイカにもなのに惹かれるんだよ・・・」

シャルル

「あ、分かるよ僕も。

なんか、ああいうの使って負けてる戦況を覆す自分とか考えちゃうよね」

一夏

「だなー。

なんていうか・・・ヒーロー、みたいな感じで耐えて耐えて逆転するって感じが惹かれるんだよな」

シャルル

「しかも単純な攻撃力だけじゃなくて色々出来るのもポイント高いよね」

一夏

「子供が特撮ヒーローとかの玩具に憧れるっていうのかな？
とにかく、俺はそんな感じだった」

シャルル

「僕も一夏と同じかな」

一夏 ラバーズ

「あ、そう・・・」

一夏 & シャルル 熱談中・・・

一夏

「そういや、一真ってなんであんなに町に馴染んでだ？」

鈴音

「知らないわよ」

箒

「同じく」

時計

「カチカチカチ」

セシリア

「外出が多い方ですから、たぶんその時に仲良くなったのでは？」

シャルル

「みたいだよ」

一夏

「・・・あれ、俺達ってもしかして引き籠——」

一夏ラバーズ

「エ、ナニ、キコエナイ？」

一夏

「ですよー」

シャルル

「で、でも入学してからまだ1ヶ月を過ぎたくらいなのに知り合いがあんなにいるなんてお——か、一真って凄いなだね」

時計改めH・1

「何を期待してるのか知りませんが、マスターは人見知りです」

一同

「うわあああ？！」

H・1

「騒がしいですね」

一夏

「H・1ん？！いい、何時の間に？！つか、時計？！」

H・1

「始めからです」

一同

「嘘お・・・」

H・1

「嘘をつく理由がありません」

箒

「しかし、だったら何故会話に加わらなかったのだ？」

H・1

「加わった所で私に何か利点がありますか？」

鈴音

「アンタ、一真の時と随分態度違うわね」

H
1

「マスターと一部の研究者以外と話したことがありませんので」

鈴音

「それにしても随分刺があるわね」

シャルル

「まあまあ。

ところで、お——一真が人見知りってどういうこと？」

セシリア

「人見知りの方には見えませんわ・・・」

ほら、一夏さん達と始めて御会いした時だって親しげに話していたじゃないですか」

H
1

「マスターは基本的に鏡のような方です。嫌悪感を持って接する方には嫌悪感を。親しげな方には親しげに。利用しようとすれば利用しようとし、敵対すれば徹底的に殲滅します。

故に、マスターと親しい方の大半は良識的な人間しかいません。マスターの世渡りかもしれませんが、無自覚のため恐らく人見知りである可能性が高いでしょう」

箒

「・・・ということはシャルルが警戒していたから先輩も警戒していたのか？」

H
1

「はい」

セシリア

「ですが、私の時はそんな素振りはありませんでしたわ」

H・1

「入学当初からです。あれが半年以上経った先に行っていたら対応の対応を取っていたでしょう」

一夏

「信じられねえ」

箒

「あの先輩が・・・」

H・1

「まだ出会って1ヶ月でしょう。当たり前です」

鈴音

「あんただって半年かそこらでしょうが！」

H・1

「一年間、片時も離れていませんので私は例外です」

鈴音

「ぬうわあああんですってえええ！」

主人公&ヒロイン&AI 口喧嘩中・・・

セシリア

「あー、えーっと、H・1さん」

H・1

「何か？」

セシリア

「貴方はナインボールのAIなんですよ？管制AIと考えてよろしいのでしょうか？」

H・1

「間違いありません」

セシリア

「何を管制しているんですか？」

H・1

「・・・」

セシリア

「H・1？」

H・1

「答えられる範囲となりますが、大半を制御及び補助しております」

セシリア

「は？」

鈴音

「アンタ、どんだけ高性能なのよ」

H・1

「ですが、そうでもしなければナインボールをまともに動かすことはできません。」

根幹に関わることは話せませんが、ナインボールを使ったことでマスターが入院したことから察してください」

シャルル

「そんなに負担かかるの？」

H・1

「ナインボール・オニキスでの最高負荷が約12G。通常時での負荷は最低6Gです」

シャルル

「嘘っ?!PICってちゃんと働いてるの?!」

H・1

「働いています。ですが、耐G訓練を受けていない人間がこれだけの負荷を受けてはまともに機体制御が出来ないため私が制御するのは必然かと」

一夏

「・・・・・・・・分かるか、箒？」

箒

「ぼんやりとしか分からん・・・・・・・・」

セシリア

「つまり、ナインボールはH・1が動かしてると同義なんですわ・
・まさか自立思考の可能なAIだけでなく機体まで制御するとは」

鈴音

「・・・・・・・・あれ？・・・・・・・・いや、でも・・・・・・・・うーん？」

シャルル

「どうしたの？」

鈴音

「ナインボールをH・1が制御してるとして、一真は動作を決定してるのよね？」

セシリア

「そういえば・・・・・・・・でもありえませんか」

鈴音

「だから悩んでるのよ」

一夏

「どういうことだ？」

鈴音

「つまり、出力と入力の変換器がある現状、ノイズがどうなってるのかってことよ」

一夏

「・・・・・・・・ナルホドナ」

箒

（まったく分からん）

鈴音

「分からないなら分からないっていいなさいよ馬鹿一夏」

一夏

「すいません。もう少し分かりやすくお願いします」

セシリア

「つまりですね、犀川さんの命令はH・1が最適化してナインボールに命令してるんです。しかも戦闘中は複数の命令を最適化しなければいけません・・・ならば、犀川さんは常時命令と行動にラグが産まれれることになるんですわ」

箒

「待ってくれ・・・それは先輩のナインボールは一拍遅いことになるぞ?」

H・1

「その通りです。」

マスターの思考を読み込み、最適化、変換、入力、行動のためラグ

は生まれます。また複数ならば処理速度も落ちます。結果、コンマ数秒の遅れを生みます」

一夏

「でもそれって俺達だって同じじゃないのか？」

H・1

「通常のISはラグを無くすためにISスーツを着込み静電気を感知しやすくしていますが、マスターは耐Gスーツを着用しているためどうしても周りより処理速度が遅れてしまいます」

一夏

「ならさ、なんで一真はISスーツを着ないんだ？」

一同

「・・・」

H・1

「話を聞いていましたか、織斑一夏？」

一夏

「・・・ごめんなさい」

H・1

「通常のISで掛かる最大負荷は3G。貴方が瞬間加速を使えばそれだけの負荷が掛かりますよ」

一夏

「大丈夫なのかよ?!」

H・1

「無事なわけありません。耐Gスーツを着ているから大事はないですが、着ていなければ加速からの緊急停止や方向転換だけでブラックアウトを起こします。軽くても吐いてしまいます」

一夏

「優先順位の問題なのか」

H・1

「マスターは行動時間と反応速度を天秤にかけた結果です」

主人公&ヒロインズ 談笑中・・・

一夏

「有沢工業って何作ってるんだ？」

シャルル

「色々だよ。身近な家庭用品や家電から重機、果ては玩具も手懸けてるね」

箒

「有沢製の竹刀や木刀は値は張るが、大抵が満足いく物ばかりだったな。特に刀はいい。あの刃紋。あの光り方。あの柄・・・まさに最高級だ」

セシリア

「有沢製のティーセットも便利でしたわ。アンティーク調ではありませんが、シンプルでありながら洗練されたカップのラインは一目置くものがあります」

鈴音

「包丁とか中華鍋も悪くないわよ。熱も伝わりやすいし、軽いから私も愛用してるわ」

シャルル

「僕はPC関係かな。キサラギとかオータル製も高性能で高品質だけど、パーツ単位になると有沢がいいよ」

一夏

「・・・んー。そういや弾の家のゲーム機も有沢製だったような。後、俺は健康食品が好きだな。何百種類もあるから選ぶの大変だけど、自分にあった組み合わせがあるから楽しいぞ。」

一真の場合はどうなんだ？」

H
1

「マスターは工具や家具、フィギュアや銀細工ですね」

一夏

「一真がフィギュア・・・意外だ」

H・1

「マスターは基本的に細かい物を好みます。特に個人製作のフィギュアは造り込みによつては即買いもしていますし、銀細工はマスターも手懸けますがやはり造り込んだ銀細工はかなり買っています」

一同

「・・・」

H・1

「そう考えるならマスターは寂しがり屋とも見えますね」

一同

「いやいやいや」

H・1

「造り込んだ物には造り手の人間性が出るそうです。他者と積極的に関わらないマスターが、他人と接触したいという思考が趣味に反映されていると見るならマスターは他人に甘えたいのではないのでしょうか？」

一夏

（なんか一真のプロファイリング始まったぞ）

箒

（ああ・・・しかも説得力がある）

鈴音

（これはキツイわね・・・アイツ、ここにいたら逃げ出したんじゃない？）

セシリア

（私なら耐えられせんわ）

シャルル

（お兄ちゃんって寂しがりで甘えん坊なんだ・・・）

一同

（言ってやるな）

H・1

「そうすると、マスターが他人と余り接触しないのは過去に何か関係あるのでしょうか？」

一夏

（なあ・・・これの矛先って俺達――）

鈴音

（やめなさい！フラグ建つわよ！）

一夏

「そういや一真って強化フラグ来るのかな？」

箒

「いきなりだな」

一夏

「いやさ、一真ってオニキスをフル稼働させて入院したじゃんか。オニキスってナインボールシリーズで最弱だろ？」

鈴音

「まあ、あるんじゃない。だってまがいなりにも主人公なんだし」

セシリア

「（まがいなりって・・・）一夏さんの場合、白式のセカンドシフトですけど犀川さんだとうなのでしょう？」

シャルル

「現状でオニキスを持て余してるからセカンドシフトしたりしたらマズいんじゃない・・・物語的に考えて」

一夏

「だろ？」

オニキスで重度の筋肉痛だから・・・・・・下手したらセラフで死ぬんじゃないのか？」

箒

「一応は体を鍛えている話はあるが、だからといって半年くらいのトレーニングでそこまで早く強くなるわけもないしな」

セシリア

「一応追加装備やPACが出てきますが、それとて付け焼き刃。根本的解決になっていませしね」

シャルル

「ロボット物だと後半になると後継機に乗るけど、それでも主人公はやっぱり成長するもんだね」

一夏

「……で、結局どうなんだH・1？」

H・1

「マスターのプロファイリングで忙しいので答えられません。話し掛けないでもらいたい」

一夏

「」

H・1

「マスターの家族構成から推察するに……（アーイソガシイ」

一夏

「もう止めてやれよ」

H・1

「私のマスター愛を否定するとは………殲滅しますよ」

一夏

「恐いっての！」

H・1

「月光で一思いに蒸発するか、カラサワで一思いに蒸発するか、ミサイルで蒸発するか選びなさい」

一夏

「嫌だよどれも！せめて人らしい殺し方ないのか？！」

H・1

「社会的な死ですね」

一夏

「皮肉か！」

H・1

「マスター以外の人間はいなくなればいいのに」

一夏

「なにこのAI怖い」

鈴音

「話が進まないからそれは後で話し付けなさい。煮るなり焼くなり
刑務所にぶち込むなりね。」

「んで、強化フラグは立つの？立たないの？」

H・1

「プロファイリング以外に割く容量がありません。だから話掛けないでください出番なし」

鈴音

「だったら砕けろゴミAI！」

H・1

「シールド発動（ペカー）」

鈴音

「きくくっ！時計のくせに、時計のくせに生意気ね！（ジタンダ）」

H・1

「私に出来ないことはあんまりない（ギリ）」

一同

「スゲエ」

シャルル

「でもさ、ここで答えてくれないとおに——一真が困るんじゃないかな？」

H・1

「マスターの強化フラグですが、確かに存在します」

セシリア

（話し始めましたわ）

H・1

「強化フラグの中身は伏せますが、結果としてマスターは大きな飛躍を遂げます。ELS的な意味で」

鈴音

「メタル一真なんて誰得よ（ププ）」

H・1

「俺がナインボールだ！とマスターが言うなんて・・・今から胸が熱くなりますね。主にジェネレータの熱で（w k t k）」

一夏

「いや、そこは強化人間が妥当じゃないのか？まあ、借金5000万以上なんてそうそう・・・」

H・1

「・・・マスターの借金はまだ2500万（シヨボン）」

シャルル

「何があつたの！お兄ちゃんに何が？！」

H・1

「強化マスターと人類殲滅・・・（シヨボボン）」

一夏

「残念がるな！」

H・1

「メタル強化マスターと世界の歪みを断ち切りたい・・・（シヨボボン）」

鈴音

「いいから続けなさいよ！」

H・1

「急かさないでください。これだから出番に乏しい人は・・・結果から言えば強化フラグはあります。ただし強化フラグと言いま

しても、マスターがナインボールを乗りこなす事はありません。
現状とてマスターに合わせている状態なのに、これ以上スペックを
上げれば死んでしまいます。

なにより、以前から話が出ているようにナインボールは人が操縦す
る事を想定していません」

一夏

「そのための強化フラグでしょ？」

H・1

「マスターは人間です。そんなどこぞのガンダムのように後継機や
らチート化するわけないでしょう」

箒

「では最終話まで先輩はこのままなのか？」

H・1

「それも有り得ません。

現状のオニキスはあくまで第三世代では高スペックではありますが、
あくまで量産機の範疇から脱さない程度。単純な勝負でばレギュラ
ー陣の中では中位程度でしかない・・・銀の福音など相手にもされ
ません」

一夏

「そうなのか？」

H・1

「勘違いしているようですが、ここにいるメンバーで正式な専用機
を持っているのは織斑一夏、篠ノ乃箒のみです。他は量産機ですか
ら元々無理があるのです」

箒

「そういえば」

一夏

「そうだったな」

H・1

「この物語において、無理矢理な力の付き方忌避されています。マスターには元々戦闘センスがあり、世界最高峰。

マスターには超能力があり『見える・・・僕にも見える!』といって死角からの攻撃を避けたり、または相手の動きを把握する。

マスターが特殊な機体を操作し『勇気があるかぎり!俺は絶対に負けはしない!』とんでもなくパワーを発揮する。

マスターが実は神や悪魔の力を持ち、全知全能になる。

申し訳ありませんが、来る場所を間違えていませんか?」

一夏

「あやまれ。とにかく色々な人に謝れ早く」

H・1

「物語上オリジナルの武装や参考にした武装はありますが、やはり付け焼き刃でしかありません。

さらにパルスライフルや月光などたぶんあまり出ないはずですよ」

セシリア

「何故?」

H・1

「威力過多だからです。」

例えるなら、紙を切るのにチェーンソーを使いますか？使わないでしょう。

パルスライフルや月光では絶対防御を簡単に貫通出来ます。三秒あれば簡単に相手を殺す事も可能です。月光を振るうたびに相手のことを気遣うくらいなら、威力が格段に落ちても相手を気遣う必要が無い方が落に決まっています」

シャルル

「そうなるならインボールって色々と換装が出来るんだ」

H・1

「積載量にもありますが、ある程度は可能です」

一夏

「ゲームみたいに足とか換えたりすればいいんじゃないのか？」

H・1

「装甲の強さを捨ててまで積載量に拘る必要はありません。ナインボールシリーズは作品上無二の機体です。わざわざ弱体化するくらいなら1から組みなおすべきです」

箒

「しかし、可能なのか？」

H・1

「IS世界において、解析されていないのはコアだけです。数に限りがあるコアに対してPACはいくらでも融通が効きます。

自由に使えるコアと潤沢な資金、そして必要な人脈があれば個人に適した機体は完成します。ちなみにマスターはこの2つ、潤沢な資金と人脈があります」

鈴音

「人脈はいいとして、アイツってそんなにお金あるの？」

H・1

「マスターは個人で開発した武装の特許を複数持っていますので心配ありません」

一同

「スゲェ」

H・1

「もちろん、今はあまり活発に資金集めはしていませんし特許について知りません。マスターの資金は高槻が握っていますので」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その9 「俺のルームメイトがこんなに可愛いわけがないからさあ大変」

このSSは「私はSSに心奪われた存在だ!」と告白しながら告白相手を斬り付けられる度胸と、「俺が、俺達がガンダムだ!」と言いつ切る割り切りぶりを必要とする作品です。

もし、そのような行動は無理だ!という方は「俺はスペシャルで! 2000回で! 模擬戦なんだようようっ!」と言いながら倒れてください。

事件その9 「俺のルームメイトがこんなに可愛いわげがないからさあ大変」

突然ですが、事件です。一組にまた転校生がやってきました。

しかも、一夏と深く関わり合いがあるらしく、また彼を中心に事件は広がりを見せるそうです。

それに巻き込まれる一真。相手はドイツの代表候補にしてドイツ軍精鋭部隊体長。波乱が波乱を呼ぶ今回、またいらぬ誤解により一真が落ち込むからさあ大変。

「ラウラ・ボーデビツヒ、ねえ・・・」

目の前で頭を抱える一夏の頬は赤い。なんでも出会い頭に叩かれたらしい。

当人は相手方を知らないらしく、叩かれる理由もわからないらしい。だからといってわざわざ三組まで足を伸ばして落ち込むのは止めてほしい。

「あんた、本当に覚えがないわけ？」

「あるわけないだろ・・・ドイツと日本だぞ。あんな目立つ娘なら覚えてたって」

「前科がある奴の言葉に説得力なんかないわ」

「うう・・・」

「しかし、なんで一夏さんを叩いたのでしょうか？」

「聞いている限りでは織斑先生も関わっていそうだが」

「あ、俺もそれは考えたよ。ドイツには一時期教導に行ってたし・・・でもなんでだ？」

目の前で一夏が叩かれた理由を考える一団を見ながらジュースを飲む。ドロリとした生理的嫌悪感に一瞬顔を歪めながらも我慢して飲み込む。

（常夏三姉妹、ハズレだな）

飲みかけのそれを一夏に渡し、一真は改めて目の前の一団を見る。

一夏を始め、箒、セシリア、鈴音、シャルル。全員が専用機持ち（1人除く）の上に美男美女だ。そんな中にいると自分だけが浮いているようで居心地が悪い。

「なあ、それをここで考える理由が俺にはわからんのだが」

だから、一真はそれを聞いた。そして聞いて後悔した。

「だって、一真だし」

「先輩ならいい知恵を出してくれると思ってまして」

「私は付き添いね」

「鈴音さんに同じく」

「僕もかな」

（巻き込まれた・・・確実に巻き込まれた）

逃げるにはもう遅い波乱の前兆を目の前にした一真は愚痴や悪態をつきながら姿勢をただす。十数秒、出すものを出した一真は腹を決めた。

「しかし、俺は会ったことも無ければ話したこともないからよくわからん。悪いが、今回は助けられそうにない」

そして先手を打った。

「だけど、お前はそういつて毎回俺達を助けてくれる！だからこそ信じてるぜ、一真！」

「やめろ、いらぬフラグを建てるな」

「先輩はいつも最初は渋りますが、最後には助けてくれる・・・信賴してますよ」

「フラグを強化すんなよ！毎回そうやって巻き込んで――」

先手は引金となる。

「犀川一真はいるか？」

凜とした声がクラスに響く。静まり返ったクラスの中、誰もが声

の主である銀髪の少女と頭を抱える一真を見る。

「貴様が犀川一真だな？」

「ほら来ちゃった！」

「ごめんなさい！」

一真に叩かれた一夏はとりあえず謝りながら一步後ろに下がる。

一夏に軽蔑と侮蔑を孕んだ視線を向けるラウラと、一夏を叩いた少女というラウラに怒りの籠もった視線を向ける鈴音達。そして、一真はただただ頭を抱えるだけだ。

「ふん。弱者はよく群れる」

「なん、ですってえ・・・？！」

（ガキか、お前。見た目相応なりアクションしてんじゃねえよ）

「私は群れるのが嫌いだな。だから弱者も嫌いだ」

「聞き捨てなりませんわね・・・」

（お前、そうやってこの前も俺を巻き込んだんですが・・・やめてよね。フラグじゃねえぞ！）

険悪な空気を醸すラウラ達に頭を痛め始めた一真は助け船を求める。視線を右に左に彷徨わせれば視界の端にいつもの三人組がいた。

——ニヤニヤ × 2

——オロオロ・・・

——助けろよ

ニヤニヤする2人に、オロオロとする少女に睨みを利かせながら助けを求める。

一真からのアイコンタクトを受け、少女が後ろの黒板に何かを書き始めた。カッカッカッ、と静かなクラスにチョークが走る音とラウラ達の罵り合いが続く中、一真は書かれた文を読んでいく。

——修羅場だねえ、かずー。

——いや、助けろし。

——だってだって、相手はドイツ軍の代表候補だよ？私、一般人。何を期待してるのさ？

——俺がこの場から離れる切っ掛け。

——付き合ってくれるなら考えてもいいよん

——つまり助ける気はないんだな？

——そんな冷たい貴方も大好き♪

孤立無援の状況の中、一真はまず目の前の不毛な争いを止めようと考えた。出来るなら一夏に止めてもらいたかったが、彼は現状に付いて来れないのか箒の隣でオロオロしている。

「お前ら、少し落ち着け」

「ですが！」

「冷静になれ、オルコット。お前らしくないぞ」

「むう、ですがあゝ」

「いつもの優雅なお前はどうした。もう少し余裕をもて」

頬を膨らまして拗ねるセシリアの子供っぽさに笑いながら一真は肩を2、3回叩く。それで彼女も落ち着いてきたのか怒らせていた肩を下ろす。

「お前もだ、凰」

「外野は引っ込んでなさいよ！」

聞く耳持たない鈴音に対して一真は少しカチンと頭にくる。

「拳骨と説教、俺が本格的にキレる前に選べ」

「っひ」

いつもと違い冷たい一真の声に鈴音は怯えてしまう。先日、初めて一真に説教された影響はまだ色濃く残っているようであった。

「外野を巻き込んでるのはお前らだ。勘違いするなよ？」

「ぐぐぐぐめんなさいい！」

「よろしい」

素直に謝る鈴音に笑い掛けながら次にラウラへ注意しようとしたが、セシリアと鈴音の納得いかないという顔を見て思い留まる。

考えること数秒。一真は2人の肩を抱くと近くに寄せ、口を耳へ近付ける。

「一夏が見てるぞ」

「「っ?!」」

バツと背後を振り返った2人はオロオロしている一夏を見て互いに頷く。

「まあ、今回は許してあげようじゃない! あんまり問題を大きくしても面白くないし、ね?」

「ええ。確かに私達も大人気ないですしね」

「良かったあ」

(「(良しッ!」)

一真だけに見えるようにガッツポーズを取る2人に笑いかけた後、ラウラへ向き直る。彼女は来たときと同じ無表情で見上げている。

「なかなか驍が上手いじゃないか、犀川一真」

「あまり敵を作るような発言はやめな。百害あって一利無しだ」

「私に説教か。余計なお世話だ」

「どうでもいいよ。君の意見なんて。それで、俺に何か用のようだが?」

「ふん。一般人が多過ぎる・・・昼に屋上へ来い」

それだけを言い残しラウラはクラスを後にした。残された一真は軽い頭痛を感じながら席に着き、一夏が残っていた練乳入り豆乳を一気に飲み干した。

「楽しくなってきたあ！」

「頭、痛くなってきた・・・」

対称的な2人の言葉を皮きりに、クラスに平穏が戻ってきた。

授業の大半を終え、一真は隠れもしない野次馬を無視しながら屋上の隅にあるベンチで菓子パンを食べる。気分は動物園のパンダか何かだ。

（・・・蒸しパン、食べたくなくてきたな）

メロンパンを作業的な動作で口に運びながら合間にフルーツ牛乳を飲む。食べては飲み、食べては飲みを繰り返しているとメロンパンを全て平らげていた。

次に食べるパンを選び始めた一真だったが、野次馬を掻き分けてやってくるラウラの姿を確認し、動きを止める。そしてあんパンを手にとるとビニールを破いて食べ始める。

「時間前にいるとは、感心する」

「もそもそもぐもぐ・・・」

「しかし、なんなんだあの集団は？」

「ずずう、ずずう・・・」

「行動理念がわからん。ナンセンスだ」

「もちゃもちゃむきゅ・・・」

「いや、今はそんな話をするために来たのではなかったな。犀川一真。これを見ろ・・・それがここに読んだ理由だ」

無理矢理渡された一枚の便箋。中々に厚みがあり、封印がハートのシールなら心をときめかせたかもしれない。

（蠟印・・・しかも、兎・・・？）

便箋とラウラを見比べたのちに封を切る。中には外観相応に手紙や写真、さらには書類が詰まっていた。

封を切ってからずっと、ラウラは一真の前で微動だにしなかった。答えを聞くためだろう。彼からすれば早急過ぎる対応だ。

「とりあえず、答えは――」

「今、ここで、私が、聞く」

「はい、はい」

ラウラの射殺さんとはかりに見つめてくる視線に耐えながら一真は手紙と書類を読み始める。

まず一真が読んだのは挨拶からである。差出人がドイツ軍の大将と書かれていた際は目を剥いたが、読んでいくとなるほど感じる文章であった。

挨拶の裏には国籍移動手続きとドイツ軍に所属するための転属依頼届があり、また所属する部と家屋について写真付きで書かれてい

た。さらに読みすすめると給料、待遇、さらには妻や女も支給するつもりらしい。ハーレムも許されるのか、と考えもしたが前例がとんでもない悪例のため考えるのを止めた。

「庭付き一戸建てに別荘有、ねえ」

「ああ。何か要望があるなら出来る限りはしよう」

庭付き一戸建て、ペットが大丈夫で家賃は3万6千以内。さらには駅から歩いて8分以内で近くにスーパーか商店街がある立地がいいな。

思っけていても言わない男。それが一真である。

「給料も破格だ。今の職場の四倍はある」

「貴方はそれだけの価値がある。我々は日本とは違う」

ボーナスはあるんですか？社会保険は？所得税って何割？

気になっても聞かない男。それが一真である。

「はは、こりゃまた・・・女も支給するのかよ？しかもお前まで入ってるぞ？」

「軍の意向ならば従うまでです」

外見は普通で構いません。大和撫子な気前が良く、話を良く聞いてくれる方が理想です。誰か俺を癒して！

だが、世界の中心になってもクールに佇む男。それが一真である。

「ははは、すげえVIP待遇だな・・・そんなにまでして男のIS適合者が欲しいのか？」

冗談を無くした真顔でラウラを見る。彼女はこちらを値踏みするように目を細めていた。

「・・・」

「ドイツは、なぜそこまで当官に拘るのですか？」

「・・・」

「安心してください。少佐の答えで当官の対応は変わりません・・・むしろ、ここで嘘をつくようなら最悪な関係になります」

「脅しか、中々に賢しいじゃないか」

クスリと笑うラウラに対してそんな顔も出来るのかと顔が緩む。

ラウラも彼がただの家畜ではないと感心し、態度を改める。見下す視線からドイツ軍黒兎部隊長としての威厳ある視線で一真を見つめる。

「そっちの方が当官は好きです。だからそういった態度でいてください。」

では、答えてくれませんかラウラ・ボーディビツヒ少佐殿」

「・・・軍の体質は分かるな？」

「D, n t k n o w・・・知る必要はない」

「うむ。安心したぞ、少尉」

満足したと言わんばかりに微笑みながら休めの姿勢を取り直す。

「はつきり申そう。私は知らない。」

何故、極東の、それもまだ軍属になって日が浅い少尉を欲しがる理由はな。

はつきりとした成果は昨日の襲撃のみ。イギリス代表候補との模擬戦を見る限り見込みはあるが、ならば大尉クラスの給与でも十二分だ・・・人的資産の価値から見ると過剰投資だ」

「ああ。それは当官も思います・・・申し訳ありませんが、当官は臆病者の上に身体能力も高くはない。たぶん、少佐にも生身では勝てません」

「今はな。だが、先はわからん」

「励まします？」

「ふん。楽観的な奴だな、貴官は・・・」

さて、それでも少尉に投資するとなると考えられるのは3つ。

1つ、ドイツが男性IS適合者を研究するため。

1つ、少尉を使い世界にアピールするため。

1つ、少尉の秘密のため」

「秘密？」

動揺を顔に出さぬよう努めながら、一真は分からないという表情で首を傾げる。視線や小さな動きさえ注意しながら、一真は耳だけはラウラの一言一言に注意を払う。

「誤魔化さなくていい。ドイツはただで出された情報を信じるような家畜ではない・・・」

だが、ここはあまりに耳があり過ぎるな」

ラウラの言う通り、屋上は人でごった返している。主に階段付近がだが。

屋上というのは、話し合いには便利である。特に周りに人がいれば不信に思われず、態度さえ偽ればただ談笑しているようにしか見られない。今なら告白か何かだろう。

だが、ISに集音マイクを付ければ秘密も何もない。筒抜けになるからだ。故にIS学園に限って言えば、密談するならば自室か学園外に行くしかない。

「秘密・・・秘密・・・秘密？」

「未確認コア」

「未確認コア？」

「ふふ、中々なピエロだ少尉」

ラウラの言葉に対して一真は笑い返す。互いに相手を好意的に思っている証拠だ。

ラウラは一真を軍人として認め、一真も話の分かる軍人と見た。

「しかし、本格的に話す前に答えてもらえるか、犀川少尉？」

「ああ。答えは、こうだ」

ビリビリ、と書類や手紙を破く。さらには物証を残さないようにH-1の武装の中にある火炎放射機で燃やす。

——交渉は決裂。

だがラウラの顔には驚きも、怒りも、悲しみもない。ただ当然だな、という顔で微笑んでいた。それは一真も同じである。

「分かり切っていたが、目の前でやられるとはな」

「嫌な気分になんてしてしまいましたか？」

「いや、逆に好感が持てる。今の日本人は相手の顔色ばかり窺いながら手をこする・・・」

気に入ったぞ、犀川少尉。それでこそ大和男児だ」

話はそこまで言い、ラウラはまた後で会う約束をして屋上を去った。

彼女の堂々とした背中を見ながら一真はH・1に話し掛けた。

「ああいう一本筋のある奴がいるならドイツも悪くないかもな・・・」

「——オススメしません。下手に動けば世界的な混乱になります。」

「わかってるよ・・・俺に選択肢が無いことくらいな」

「——人間の繋がり是不便ですね、マスター。」

「恩を仇で返す・・・筋が通らないだろ。せつかくお前に貰った機会だ。筋は通し続ける」

——人間とはロジカルでないのですね

H・1と会話しながら一真は新たに取り出した菓子パンに噛り付き、そして凍り付いてしまう。

視界の先には未だに居続ける一団。しかも視線が刺々しく、あまりよろしい状態ではない。

さらには一夏達により鍛えられた頭脳が弾き出した予測もそれを裏付けてしまう。

だからこそ確認する。今ある材料で予測を証明するのだ。

まず、ラウラと一真が2人っきりで屋上で待ち合わせ。

ラウラ、真面目な顔付きで一真に便箋を渡す。

たまに交わされる会話と微笑み。ちなみにラウラは転入後にまだ笑った姿を見せていない。つまりさっきのが初だ。

そして破かれ、燃やされた便箋。

無表情に屋上を去るラウラ。

I S学園はほぼ女子校。

さらに一団の中には仲良し3人組十一夏と一夏ラバーズがいる。

今まで経験という定理と、女子校という定理にこれらを当てはめて弾き出された証明は・・・

（俺がラウラをフツたと思われてるだとおおお？！）

先程までの真面目な雰囲気も、ラウラとの話し合いも一真の中から既に消えている。あるのはこれからやってくる勘違いによる不条理な冷遇だけだ。

（俺は悪くないだろおおおっ！）

——マスター。私は貴方を応援します。

その後、一真は自らの証明通りに冷遇と冷たい視線に見舞われた。

「「「一真さんがボーディビツヒさんをフツた〜〜っ?！」」」

「なんでですか犀川さん！」

「ボーディビッヒさんが可哀相・・・ラブレターを破いた上に燃やすなんて酷いです先輩！」

「アンタ！女の子が覚悟決めたのにあんなことするなんて信じられない！見損なったわ！」

「一真あああつ！歯あああ、食い縛れえええええっ！」

「五月蠅えバカたれ！」

「あんどりゅうううう！」

軍記に色々と触れる上にバレれば上からいらない疑いを掛けられるため誤解をまともに融けずにいた一真は疲れ切ったと言わんばかりにベッドに倒れこんでいた。

ピクリとも動かない一真に、仲良し3人組は顔を引きつらせながら彼を心配する。

「大丈夫ですか、犀川さん？」

「・・・」

「へ、返事が無い。ただの屍のようですー！」

「・・・」

「お、おう、勇者よ！し、し死んでしまうとは情けない！」

「・・・」

（（（本格的にマズい・・・）））

いつもなら疲れても、傷付いても軽口には返してくれた一真が何も返さない。

寝ていなければ、泣いてるわけでもない。放心しているのだ。

「鬱だ、死のう・・・」そう言いだしても不思議ではない顔である。

（ど、どどどどうしよう2人共！）

（ヤバい。何がヤバいって、見るからにヤバい！）

（はわわわわー。流石にこれは予想外ですー！）

一真の周りを走り回りながら必死に励ますが、彼は反応はおろか意識を向けさえしない。もう廃人のようである。

「い、一番！脱ぎまーす！」

「それはダメー！／傷がさらに広がりますー！」

「お前ら、それは流石に無いんじゃないんですかぁ！」

3人が姦しく騒いでいるとガンダニウム合金製の扉を叩く音が室内に響く。

「失礼しますね、犀川・・・君・・・？」

「・・・」

「「山田先生ー助けてー！」」

「え、ええ？！」

それから小一時間、一真を彼方から連れ戻す為に室内は騒がしく

なるのであった。

「ルームメイト・・・ラウラが？」

「宜しく頼む、犀川一真少尉」

ビシリ、と敬礼するラウラを見ながら痛む眉間を揉み解す。

「部屋がここしか開いてなくて申し訳ありませんが、1週間か2週間是一緒の部屋になります。大丈夫ですか？」

「宜しくないですヤマヤン！」

「へ、ヤマ、ええ?! そんなあだ名嫌ですよ私い！」

「健全な男女が1つ屋根の下も問題あるってのに、それがかずーですよ! 欲求不満なかずーと美幼女なラウラさんが一緒なんて・・・去勢してない野獣の檻に血統書付きの雌を放り投げるようなもんじやないです「黙れ! これ以上俺の風評落とすなクソアマ!」 ああっ

！いいっ、いいですよっ！もっとう、もっとう！」

現在、一真の部屋は換気の為に扉も窓も開いている。つまり全ての会話は筒抜けなのだ。

「犀川少尉。美少女とはなんだ？」

「気にするな、知る必要もない単語だ」

「そうなのか？」

（癒されるなあ・・・）

不思議そうに首を傾げるラウラに癒された一真は知らず知らずに頭を撫でていた。彼女も初めは驚いたが、途中からされるがままに彼に頭を許した。

「ほら、ほらほらほら！見てくださいよ先生！かずーが既にフラグを建ててますよ先生！」

「あわわわわ！」

「ですからラウラさんと私を交換すれば大丈夫。私は彼女ですから間違いくらい問題ありません！」

「な、なるほど！確かに恋人同士——ま、間違いない？」

「大丈夫。ゴムは付けますから！」

「ゴム?!」

「あ、ヤマヤンに聞きたいんだけど、子供はやっぱり2人は欲しいよね。男女で2人」

「あー、私はもっと・・・4人は欲しいですね。それで将来は孫に囲まれながら・・・いいなあ」

「成る程。子沢山もいいですね！」

よし、頑張ろうねかずー「くたばれ資本主義」ごふうっ」

顔を赤くした少女を蹴り飛ばして口を塞ぐ。周りも真っ赤になっており、普段通りは一真とラウラと何とか千冬くらいであった。

「犀川少尉。何の話をしているのだ？子供が何故出てくる？」

「今のボーディビツヒでいてくれ・・・頼む」

「そうか。了解した」

懇願するように頭を下げる一真に再敬礼したラウラは彼に言われて荷物を下ろす。

「とりあえず、ラウラと同室になる。異論は許さん。決定事項だ」

「分かりました。ただ、部屋を片付けたいので2〜3日は騒がしくなりますが宜しいですか？」

「常識内ならばな」

「ありがとうございます。場を纏めてくださいますて」

「気にするな。ただな・・・」

千冬に肩を掴まれた一真は痛みに顔を歪めそうになるのを必死に堪える。彼の肩に千冬の指が第一間接まで食い込んでいるからだ。

「私の可愛いラウラに何かしてみろ・・・2人目の男性I S適性者の称号を剥奪してやる」

「いや、冷静になれよ教師」

「女になりたくなければ・・・分かるな？」

「怖いです。リアルに」

そんなわけでラウラとの共同生活が始まります。余談ではあるが、一真達の部屋の入り口が扉から窓に変わったそうです。

ラウラとの共同生活一日目の夜。

「さて、就寝時間だな」

「ああ。着替えるならその仕切り板を引いてくれ」

椅子に座りながらレポートを纏めていた一真は背中越しで仕切り板の位置を指差す。

「何故？」

これに固まった一真が振り替える。するとそこには上着を脱ぎ、肌着姿になっているラウラがいた。

「恥じらいを持て！」

急ぎラウラを壁側のベッド横に押し込み、仕切り板を引き、頭を抱えてしまう。一真はベッドに座り込みながらこういう生活が続くのかと不安を抱えた。

ちなみに、一真がラウラをベッド側に追い込んだのは彼女が女の子であり、さらには窓が入り口に成り始めたからである。

「これはいつ元に戻せばいいんだ少尉？」

「着替え終わったらだ」

「・・・ふむ。つまり就寝の準備が済んだらだな？」

「まあな・・・」

「なら戻すぞ」

「ああ・・・——マジかよ」

仕切り板を戻したのを確認して振り返った一真が見たのは、何一つ着ていないラウラの姿であった。羞恥心がないのか腕を組みながら一真に近付いてくる。

「どうした？ 頭が痛むのか？ 薬は必要か？」

「・・・寝間着はないのか？」

「寝間着？」

「パジャマだパジャマ」

「無いぞ。私は寝るときはいつも裸だ」

「・・・待ってろ」

ベッドからフラフラと立ち上がり、ラウラを仕切り板の向こう側に押し込む。さらに急ぎカーテンを引く。

「・・・サイズは諦めるか」

段ボールから流行のキャラがプリントされたジャージを取り出すとラウラへ投げ渡す。

「う・・・む。動き辛いな、これは」

「見せてみろ」

ずり下がるジャージを必死に持ち上げるラウラの上着のチャックを上げ、胸元が見えないようにした一真は次にズボンの紐を結ぶ。

その際に下着を穿いていなかったため少し説教した。

「ん・・・すまないな、少尉」

「裾も余ってるな。ちょっと待ってろ」

ダボダボの裾を見兼ねた一真は引き出しから鋏を取り出すと動きやすい長さにまで切り詰める。

裾直しをしたジャージの状態を確かめるように飛び跳ねたり、柔軟をするラウラを見ながら冷蔵庫から取り出した紅茶を飲む。

「動きやすいぞ少尉。感謝する」

「それはやるよ。ただ、後でちゃんとした寝間着を買いに行かないとな」

「その時も頼むぞ、少尉」

「はいはい。じゃあ寝ようか」

これがラウラが部屋にやってきた当日の話だ。

時間を少し早めての翌朝。早朝の部類に含まれる時間帯にラウラの声が室外にまで響いた。

「起床時間だ少尉！」

「・・・ああ？」

「なにをボサツとしている！既に朝日は昇っているぞ！」
「・・・・・・・・まだ5時じゃねえか」

その寝呆けた一言にカツとなったラウラは彼の耳を掴み上げると耳元で大声を上げる。

「弛んでいるぞ少尉！貴様、敵が来たときもそのような寝言をほざくのか?!」

「わかったわかった・・・耳を引っ張るなボーディビツヒ」

「早く着替えろ！」

仁王立ちするラウラを背に、仕切り板を引き終えた一真はいそいそと着替えていく。

着替え終えた一真に対してラウラは時計を指差した。

「着替えをするのに何分掛かっている！軍人なら40秒で支度しろ！」

「んなどこぞの盗賊団のオカンみたいなこと言われても・・・ふあ」

「シャキツとしないか馬鹿者！」

バシヤツとバケツに入った水をかけられた一真は「マジかよ・・・」と考えながら濡れた衣服を見つめる。

ビチャビチャと水が滴れており、少しずつ体温を奪っていく。早く着替えなければ風邪を引いてしまうだろう。張り付く衣服がなんとも気持ち悪い。

「はあ・・・」

手早く着替えを済ませた一真にラウラは及第点と言わんばかりに頷く。

「早朝訓練を行う」

「やべえ、マジそれは勘弁願いたいわ」

「黙れ。上官の命令に逆らうのか！」

「命令系統が——わかったからそれしまえ」

額に突き付けられた拳銃。それを掴み上げながら溜息をつく。

「まずはランニングから始める」

「ママ、イエス、ママ」

「よしっ」

そんなわけで一真は早朝から1500を2本、筋トレを100を3セット行ったのだった。終わった頃には既に朝食の時間であった。

これがラウラが来た翌日の1コマである。

「んで、なに悩んでるんだボーディビツヒ？」

「いや、ヤキザカナ定食やヨウフウ定食とは何が出るのかと思ってな」

「洋風で良いだろ。箸、まだ使えないだろ？」

「スプーンやフォークじゃダメなのか？」

「いや、まあ貰えば大丈夫だが」

「ならヤキザカナ定食とやらにしよう」

「・・・スプーンとフォークを貰ってくるか」

長蛇の列に並ぶラウラを見ながら一真は比較的客足の無いB定食に並ぶ。

スルスルと進み終えた一真を迎えたのは人柄のよさそうな笑みを浮かべる割烹着姿の女性だった。

「あら一真君。珍しいわね」

「どーもー」

「いつもは他の所に行くのに、どうしたのさ？」

「気分ですよ、き・ぶ・ん」

「そうかいそうかい！なら、サービスしなきゃね！」

そう言われて次々に大盛りにされていく器を見ながら一真は呆れた顔で笑顔のオバサンを見つめる。

数十秒後には見た目相応にズシツとした重みを感じさせる器を見つめながら一真は朝から食うな、と他人事のように感じていた。

「盛りましたね」

「育ち盛りがなに遠慮してんのよ！

男の子ならこれぐらい、足りませんよオバサンって言いながらお代わりなさいな！

そしてたーんと食べて婿に来な！うちの娘やるよ！」

「3人前で足りないって、フードファイターじゃないんだから。

あと、娘は大切にしろよ」

「いつもなら嫌がらせで大盛りにしても気付いたら平らげてくるくせ

によく言うわ!」

「・・・嘘だよね?」

「アンタ、寝呆けたあの量を食べてたのかい?」

呆れるオバサンを見ながら一真は顔を引きつらせる。

それから暫く人が並ばないのを良い事に、一真達は軽い立ち話をしていた。聞けば、普段の彼は出された物は全て食べるため料理人達から好かれているらしく、悪戯で五人前やメニューを増やされても気付けば完食しているらしい。

(・・・気付かなかった)

「いやあ、食べても太らないなんて羨ましいね!」

豪快に笑うオバサンを睨みながら一真は思い出したとスプーンやフォークを頼む。そして渡されたスプーンとフォークは見るからに幼児物で、聞けばあるのはそれしかなかったらしい。

仕方なくそれらを受け取った一真はラウラを見つけ、その横に座る。

「箸、というのは難しいな・・・犀川少尉」

懸命に箸を使って焼き魚を食べようとしているが、交差している箸では上手く使えないのか悪戯に魚を撒き散らし続けるだけで口には未だに一口も入っていない。

そんなラウラを見兼ね、一真は魚の身を解し、散らばった身を集める。そして最後にスプーンとフォークを渡す。

「世話をかけるな、犀川少尉」

「気にするな。不慣れなら仕方ないさ」

「しかし、せっかく日本にいるのなら箸で食事をしてみたいな」

「後で教材買ってきてやるよ」

「何から何まですまないな少尉」

「別に、面倒だが迷惑じゃない。気にするな」

すまなそうに顔を歪めるラウラの頭を撫でながら一真は汲んできた水を飲む。かなり渴いていたのか体はスポンジのように水を吸い取っていく。

それから、スプーンで魚の身を掬うラウラを見ながら薄い味付けの味噌汁を啜る。周りはフツた、フラれたの2人が仲良く朝食を取る姿にただただ首を傾げるのであった。違和感は見ただけで、その様子には違和感はなく、本当に兄妹のようにモクモクと朝食を取

り続けるのだった。

ちなみに、一部の変態が幼児向けスプーンで食事するラウラを支持したのを2人は知らない。

ついでに、一部の集まりであるKKK《キュンキュン一真さん》が隠し撮りしていたのも気付きはしなかった。H・1以外は、だが。

朝食を取り終え、登校し終えた一真はその日、提出期限の宿題を見せてという生徒にノートを渡しながら携帯を弄っていた。

視界の端には何故か一夏達がおり、話し掛けるでも、近付くでも、回りで談笑するでもなく、ただ一真を見つめていた。

一真も最初こそ頭を捻るが面倒だし、なにより迷惑も無いため放って置くことにする。

「・・・(カチカチ)」

「・・・」

「・・・OWO）オレノカラダハボドボドダーッ」

「・・・」

「・・・（カメンライダーブラッ、アーッ、エッ」

「・・・」

「・・・（タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ♪」

「・・・」

「・・・（ジャギバズゲゲル」

「・・・裏切り者」

「何でだよっ！」

鈴音のボソツと溢した言葉に立ち上がり、クラスの隅にいた一団に詰め寄る。

彼女達は近付いてきた一真をジトーツと見ながら何も話さず、また面倒事かと頭を痛めた。

「お前ら、今日はなんのようだ」

「わかんない？」

「当りはつく。だが聞くぞ、何のようだ？」

「・・・なあ、なんでボーディビツヒと仲良いんだ？」

「その言い方はマズいだろうが・・・下手すればイジメ発言だぞ」

一夏の発言に注意しながらジュースのプルタブを開ける。今回は《これで貴方も最強、G・U入り野菜ジュース！》という仲良し三人組からのオススメである。サラリとした喉ごしがいい。

「そんなつもりはねえよ。ただ、どうやって仲良くなったのかなって」

「どうって・・・普通に？」

「普通にしても仲良く出来ないんですが」

「お前達がフレンドリー過ぎるんだよ。根っからの軍人のボーディビツヒにそれはマズいだろ・・・篠ノ之とデュノアは別として。一夏は別次元として」

「え、俺って次元レベルで気を付けなきゃいけないの？」

「いけないんです。だから変に場を掻き回さないでくださいですの。迷惑千万ですの」

「誰の真似でしょうか、犀川さん？」

「とある令嬢のとあるフロイラインの一級建築」

「むきくくっ！失礼です、失礼過ぎますわ！」

「黙れ。一夏の次にフラグを建て続ける縦ロールが」

「え、俺って一番なの？」

「ちなみに次に篠ノ之。理由はうちの扉が物語ってる」

「う・・・」

現在、一真の扉先輩は4代目である。ラウラの来る前日にチタン合金の扉を、木刀一本で切り裂いた時には開いた口が塞がらなかった。

現在の扉は研究所に頼み込んで発注した試作品の合金だ。元々はH・1のフレームに使用する予定だったが、表面処理の問題から却下された物を扉にしてもらった。

研究所の人間も最初はチタン合金を木刀一本で叩き切った話を信じなかったが、実物とH・1の映像を送ったら翌日に送ってくれた。それからは一真が言い出したミス・五右衛門で有名になっている。

実はあの木刀は斬鉄剣じゃないのか、とは一真と一夏だけの話だ。

「それから嵐。理由は暴走する度に俺の備品が壊れていく。つか、早く弁償しろ中国娘」

「さ、300万もする機材なんて思わなかったのよ！仕方ないでしょ！」

300万とは、一真がH・1を整備するにあたり各部の稼働時にかかる電圧を詳細にデータを収集する機材の値段である。各間接のデータを取っていたからまだ弁償だけで済むが、もし取る前に壊していたら国際問題に発展してしまう危険もあった。なにせ、H・1の各部電圧データは今回が初で、基準データにする予定であったためだ。

「別枠にデュノア。理由は、コイツだけがしっかりと筋を通すから。見習え迷惑パーティーが」

「いや、その・・・」

シャルルの肩を叩きながら一真は苦虫を噛み潰したような顔をする一同を見る。

「あー、あーあーあー・・・それで、仲良くなるにはどうしたらいいんだ？」

「知らん」

「そ、それじゃあ箒が大丈夫で、セシリアと鈴がダメな理由は何なんだ？」

「2人が軍属だから」

一真の一言に一同が頭を捻る。一般人ならまだしも、セシリアと鈴音が分からないという仕草をしたのは問題である。

「・・・あー、お前らさ、自分の階級分かるか？」

「階級？」

「軍のですか？」

「ああ。軍の階級」

「アタシは曹長ね。ま、当然かしら」

「私も曹長ですわ。ですが、それがどうしたのですか？」

「頭痛い。本当に頭痛くなってきた。」

お前ら、曹長のくせに少佐にあんな口きいてたのか？
お前ら、下手したら刑罰か査問会に発展してたんだぞ」

「「「「は？」「」「」」」」

「当たり前だろうが。今の陸自や海自がどうか分からんが、上官、しかも4階級も上の少佐にあんな口聞けばああなるっての・・・俺だって多少は口に気を付けてるってのに」

頭を押さえながら溜息をつく一真に対し鈴音は驚きはしたがすぐに余裕の表情に変わる。

「なに言ってるのよアンタ。ドイツと中国なら階級なんて「馬鹿言うな。目上の人間に敬語使うのは万国共通だろうが・・・しかもここに來てるんなら軍の節度見られてもおかしくないんだぞ」――嘘お」

「ボーディビツヒが漏らしてたが、お前らが俺にタメ口きいてるのも不思議がってたくらいだ・・・第一印象からダメなんだから相当苦労するだろうな」

「ですが、私達は代表候補生。軍属ではありませんわ」

「お前ら、そんな気持ちで軍にいたのか・・・
悪い事は言わない。ボーディビツヒとは話すな。話すならせめて俺が許しを貰うまでは黙っている」

「「「「・・・」」」」」

黙りこくる五人を前に一真は欠伸を噛み殺しながらジュースを飲む。

そんな一真にシャルルは手を挙げて質問をする。

「ちなみにカズマの階級ってなに？セシリアさん達と同じ曹長なの

「？」

「今は少尉だ。近々中尉になるがな」

「私達より・・・」

「裏切り者お・・・」

「理不尽過ぎるだろ、その発想。こちとら死にかけての進級なんだ、友人なら祝ってくれよ」

「藁人形に五寸釘打ちながら祝ってやるんだから！」

「部首が違い！嬢ちゃん、それ祝うやない。呪うや！」

「七代先まで祝ってやるー！」

「ありがたいがニュアンスが恐えよ！」

「末代まで祝ってやるー！」

「お前はうちの家系の何になるつもりだ！守り神なら間に合ってます！」

「遠慮せず祝われなさいよ！無病息災で長寿と子宝に恵ませてやるんだから！」

「お前はどこの神様だよ！つーか是非お願いします！」

「よしきた！」

「・・・あれ、僕達ってなにしに来たんだっけ？」

「言うな。私なんか置いてかれてるんだぞ」

「僕もだよ」

「・・・次元が違う・・・」

いつもの休み時間の風景である。

「・・・むう。日本語とはなぜここまで文字がある？」

ちなみにラウラはクラスで日本語の勉強（一真のプレゼント）を始めていた。

「後で少尉に見てもらわねば」

時間を進めて放課後。

「少尉」

全ての授業を終え、生徒達が部活や自室に帰る中、ラウラは一真のクラスにやってきた。

「どうした？」

「いや、本屋の場所が知りたい。部下に頼まれているんだ」

「はいよ。今から行くか」

「世話をかける」

「いいさ」

持ち帰る最低限の物を鞆に詰め込んだ一真はラウラを連れて駅へ向かう。

「少尉は普段本を読むのか？」

「まあ、読むな。専門誌とかファッション雑誌、漫画や小説、論文とか様々だ」

「勤勉家だな」

「そうか？」

「ああ。本というのは娯楽の他に知識を得ることも出来る。たとえばそれが遊びや、私生活に活用できなくても知識を得る行為を勉強と言うなら、本を読むことも勉強だ。

様々な本を読んでいるなら勤勉と言っても間違いはあるまい」

「そこまで大層なことじゃないんだがな」

「謙遜するな、少尉。偏った知識ばかりよりは誉められる行為だ」

照れる一真を笑いながらラウラは彼の一步後ろを歩き続ける。

「そういや、小腹は空いてるか？」

「多少だが、空いている」

「ならちよっと待ってろ」

ラウラをその場に待たせて小走りに近場の屋台へ走る。帰ってくる頃には両手にクレープを持っていた。

「ほれ、転入祝い」

「・・・いいのか？」

「気にするな」

「心遣い感謝する」

クレープを食べながら2人は並んで歩く。たまに一真の知り合いが茶化すが、彼は冗談を交えながらラウラを紹介する。

最初こそ固かったラウラも次第に態度を砕いていき、今では笑顔も時折見せている。

「本当に、感謝するぞ少尉・・・貴官のおかげで情報収集が楽になる」

「そうかい」

「確かもうすぐ中尉になるのだったな。その時は私から何か贈ろう」

（あー、やべえ。この娘、めっちゃいい子じゃんか・・・どっかの誰かに見習ってもらいたいわ）

ラウラと世間話をしながら歩いていると目的の本屋に到着する。未だに日本語を覚え切っていない彼女の通訳をしながら一真は何冊か本を籠に入れて店内を歩き回っていた。

「少尉。これはなんだ？」

「・・・どこから持ってきた？」

「何か面白い本を、と店主に言ったらこれを渡されたのだ。内容はわからんが、何故男女で抱き合ってばかりいるのだ？これは寝業の教本なのか？」

ラウラが不可解とばかりにページを捲るたびにR18の写真が目映る。またジッと彼女が様々な角度で見るたびに青少年達が顔を赤くしていく。

一真は気分が悪くなりながらもラウラからエロ本を取り上げ、代わりとばかりに週刊誌を押し付ける。フムフムと読み進める彼女を置いて一真はズンズンと店主のいるカウンターに向かい、笑顔で迎える五十代の男性にエロ本を叩きつけた。

「おいこらクソ爺。なにガキにこんなもん見せてやがる」

「ガハハハハ！バンちゃん失敗！」

「身をくねらすなミイラ爺。どーいうつもりだコラ」

「なに、あんなめんこい娘の赤らめた顔を見たかっただけじゃ」

「・・・警察ですか？」

「ジョークじゃないかカズ君。アメリカンジョーク!」

「品の無いアメリカンジョークにしては質悪いっての。世間知らずに変な知識詰め込もうとするな」

「ああ、じゃからあんな態度じゃったのか」

「とにかく、知識を詰め込んで実践されたらどうする。責任取れないんだからあんまり変な知識は詰め込むな」

「・・・わけありか?」

「知らん。マンガから出てきたような軍人気質でな・・・知識も偏りがあるから軽い奴から始めてくれ」

「そんじゃあ、これなんてどうじゃ?」

「・・・監獄戦艦?」

出された小さな小説を流し読みながら一真は相手の話に耳を傾ける。

「おう。オススメじゃ」

「・・・って、おいこらクソ爺! 凌辱物じゃねえか、しかもかなりハードな!」

「嫌い?」

「ボーディビツヒを男性恐怖症にするつもりか？あゝあ？」

「いゃん。バンちゃん恐ーいー」

悪びれもせず身をくねらす店主の襟を締め上げながら睨み付ける。

「務所に入って余生を過ごしたくなかったら・・・わかるな？」

「カズ君ってたまに極道さんみたいじゃな。実は自衛官ってのは嘘指、詰めたいなら今すぐやるか？」——ガハハハ！冗談、冗談じゃよ！」

振動するM V Vを見せ付けられた店主は笑いながら一真の肩を叩いて落ち着かせる。

2人がギャアギャア騒いでいる横ではラウラが難しい顔をしながら近付いてきた。

「少尉。これはなんて読むのだ？」

「・・・因果応報だな」

「インガオウホウ・・・意味はなんだ？」

「何か悪い事を行えば相応の報いを受けてしまうってことだ。ちやうどこの爺みたいにな」

「助けてくれんか、ラウラちゃん」

「少尉。相手は民間人だぞ」

「安心して下さい少佐。こいつは犯罪者です」

「そうか、なら問題ないな」

「ええ」

ラウラのOKサインを受けた一真がさあ振り下ろそう、そんな時だ。店主は焦りながら棚から一冊の本を取り出して突き付ける。

「これはどうじゃ！こいつは邪心抜きでオススメするぞい！」

「・・・深愛？聞いたことないな」

軽く中身を確認する限り問題はなく、よくある恋愛小説でしかない和一真は考えた。

「そりゃあ最近出る予定の物じゃからの」

「おい店主」

「なーに。貸すだけなら問題ないわい」

「いやいやいや、あるだろ」

「ええから、ええから。ほれ、読んだら感想聞かせとくれ嬢ちゃん」

「うん？・・・ふむ、感謝するぞ店主」

大量に詰め込んだ籠を置いたラウラは渡された本をペラペラと捲りながら読み始める。

「それで、お買い上げは以上で？」

「ああ。私はこれぐらいだ」

「・・・買ったな。金、大丈夫なのか？」

カウンターには籠4つに山のように積まれた本が入っている。八割以上が少女漫画、しかも全巻買い占めており種類も6つはあり、商品棚も気持ち寂しく見える。

「なーに、足りなかったら体「指、務所」——ツケといてやるわい」

「大丈夫だ。とりあえずこれだけは持ってきた」

自信満々に見せ付けてきたのは長財布がパンパンになるまで詰め込まれた札束だ。軽く見積もっても300万はあるそれは周りの客はおろか、店主や付き添いの一真さえ啞然とさせた。

「・・・のう、カズ君」

「わかってる。わかってる・・・」

「しっかり教育するんじゃないぞ」

「・・・足りないか？」

勘違いしたのか不安そうな顔をするラウラの財布から三枚ほど万札を抜き取って彼女の手握らせる。

「逆だ。多過ぎる。」

普段持つなら、これくらいで十分だ」

「それくらいで大丈夫なのか。タメになった、感謝するぞ少尉」

「・・・可愛い妹さんじゃな」

「頭痛いわ・・・とりあえず宅配で頼むよ爺さん。住所は、ここな」

「はい、お釣り。」

まあ、気を付けなよカズ君。最近はチンピラも多いから」

住所を書いたメモ用紙を渡した一真はチラリと外を見る。悪目立ちしたせいで人が集まっていた。もしかしたら中にはそういった部類の人間がいるのかもしれない、そういうことだろう。

「どっちの心配だ？」

「チンピラじゃ」

「当然だな」

商品の包装をしながら店主はラウラを心配するような視線を向ける。

「ちなみに、ラウラちゃんはどんなんじゃない？」

「生身でならたぶんプロでもないかぎりには負けないだろうな。つーか俺より強い」

「葬儀屋、紹介するかい？」

「やめろ、縁起でもない」

そんな話の後、近くの病院に10人以上の少年少女が入院した事件が起こった。

犯人は捕まらず、目撃証言も集まらないまま事件は注意を呼び掛けるだけで終わることになった事件である。

「物騒だな、少尉」

「確かに、2つの意味で物騒だな」

その日の夜。

「ボクディビツヒッ！服を着ろ服を！」

「しかし、体が火照って仕方ないのだ」

目の前を裸のまま歩き回るラウラに一真の悲鳴のような怒声が放たれた。

最初はディスプレイに映った裸のラウラにまさかな、と苦笑してレポートを作成していたのだがエアコンのリモコンの場所を聞かれた際に振り向くと裸の彼女が目の前にいたのだ。

水が未だに体や髪から滴り、ほのかに香るシャンプーの匂いに思考が鈍るが理性が怒声をあげて思考を正常に戻した。

「だからって裸のまま後ろをうろつくな！」

「だが、部隊ではいつもこうで、周りも私同様に裸だったぞ」

「男の目を気にしろ！」

「むう・・・少尉はいちいち五月蠅いな」

「頼む。頼むからせめてバスタオルは巻いていてくれ」

ラウラ用に譲ったバスタオルで体を包み込み、頭にタオルを落とした一真は凝った肩を解しながら子供のように不慣れに頭を拭く彼女を見下ろす。

軍人としては一流だが人間としては三流以下。未発達過ぎる行動や言動の数々に保護欲を煽られるが、このままではいらなく理性にダメージを負わされると感じた一真は早急な打開策を考える。

「少尉。私のパジャマはどこだ？」

「あー、ベッドの脇にあるタンスの中だ」

「タンス？」

「クローゼット。そこに入ってる」

「感謝する」

着替えを始めたラウラから意識を外し、一真は慢性的に成り始めた眉間の痛みを揉み解す。

「そうだ。少尉に聞きたいことがあった」

「どうした？」

「これを見せてくれ」

衣擦れの音が無くなってから振り返った一真が見たのは、下半身を露出したまま足を広げているラウラであった。

クラクラとしだす頭を押さえ付け、テーブルを支えに何とか体勢を保つ。それでも強くなる痛み在眉を顰めながら、視線を彼女から外す。

「今日の昼間から血が出てきてな。外傷はないのだが腹部に痛みを感じるのだ。原因を知らないか？」

「・・・頭、痛い」

「大丈夫か、少尉？」

「俺より自分の心配をしろ」

「しかし初めての事でな。頼れるのは少尉しかおらんのだ」

「・・・初潮だろ初潮」

「シヨチヨウ・・・何処の所長だ？」

どこまで純粹無垢なんだ、と心の中で叫びながら一真は頭を悩める。

「初潮っていう整理現象だよ。誰にでもあるから不思議じゃない。安心しろ」

「少尉も血が出るのか？」

「男はありません。男で血が出たら、それはただの痔です」

「少尉は痔か」

「痔じゃねえよ。過去にあったが、今は治ってるよ」

「なるほど。私も治るのか？」

昼間から痛みだして気持ち悪いんだ」

ラウラの言う通り、顔色が少し悪く汗もかいている。本を買いに行っていた時は我慢していたのかと呆れながらどうするか考える。

「女性特有の生理現象だからな・・・こればかりは俺じゃ力にならないな。」

あ、あとズボン穿け」

「わかった」

「とりあえず無理はするな。薬やら何やらは貰ってきてやるから」

「そうか、助かる」

「とりあえず寒くないようにしてろ」

そう言ってラウラに水を渡し、一真は部屋を出る。

（誰に頼むか・・・。下手に頼めば誤解されるし、ここは知り合いに話してみるか）

とりあえず、一番近場のセシリアの部屋へ向かう。鈴音や仲良し三人組も候補に出たが、鈴音は話を最後まで聞かずに殴られる未来が浮かび、三人組は変に騒いで問題が大きくなると思い却下する。

セシリアの部屋までやってきた一真は数回ノックし、彼女のルームメイトに頼み呼び出してもらう。

やってきたセシリアは淡い青を基調としたフリルのついたパジャマ姿で出てきた。カーゴパンツにTシャツ姿の一真と並ぶと違和感が天元突破しそうなツーショットだ。

「如何致しました？」

「ああ。実は頼みがあつてな」

「頼み、ですか。私に出来る事ならどうぞ遠慮なさらず」

気品ある微笑みを浮かべる彼女に対し、ならばと頼み事を話す。

「生理用品持ってるよな？」

「は、はい？」

「整理用品」

「ななな、なあっ?!」

「1日、2日分くないか？」

「へ、へへヘンタイ！」

「つでええっ?!」

真っ赤になったセシリアに殴られた一真は赤くなる頬を押さえながら彼女を見上げる。

「ふ、ふふ婦女子に対して何を！み、見損ないましたわ！」

（あちゃー、人選ミスったー。コイツも鈴音と五十歩百歩だった）

「私に近付かないでください！」

目の前で力強く閉められたドアを背に、一真はさてどうするかと顎を撫でながら考える。

保守的に考えれば三人娘の良心に頼むべきだが、断られたり勘違いされた際の精神的ダメージが途方も無い。正直立ち直れなくなる。しかし筭はマズい。なにがマズいって、下手したらツマラヌモノヲキッテシマッターで上半身と下半身を寸断される。ガンダニウム合金の剛性は現状世界一なのだ。肉の体がガンダニウム合金に勝てるとは思っていない。俺はどこぞ10万馬力の小僧ではないのだ。

（・・・ボーディビツヒを待たせてるし、山田先生あたりに頼むか？）

廊下を歩きながら最適解を模索し、ポンッと閃いた一真はパタパタと階段を降りていく。

そして目的の部屋に差し掛かった一真はノックもせずに入

「え・・・」

（死亡フラグ回収お疲れさまです）

室内に入った一真が見たのはシャルルの裸であり、それも第二次成長の始まった未発達な肉体であった。

つまりは女の子の裸である。

「悪いな、デュノア」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

パタン、と扉を閉めてそそくさと部屋から遠ざかる。即座に来るだろう悲鳴に備えて一真は階段の影に隠れながらH・1に愚痴る。

——何が悪かった？

——人選です

納得してしまう答えに一真は溜息をつくのだった。

椅子に向かい合う形で座っていた一真とシャルルは何を話すべきかと視線を右往左往させる。

キヨロキヨロ、オドオド、アタフタと落ち着きもせずに視線を一定にしないシャルルに対して一真は落ち着き払っている。なんとうか、わかつていたと言わんばかりの落ち着き様だ。

「なあ」

「ひゃい！」

「・・・一夏は知ってるのか？」

「う、うん・・・今日、バレちゃった」

「アイツはなんて？」

「何も・・・戻ってきてから話すつもりだから」

「ふーん」

机に頬杖突きながら一真は少し渋い緑茶を飲む。

「驚いて、ないの？」

「まあ、知ってたしなあ」

「え・・・知って、え？」

「転入当日のISの授業中にはわかってたぞ」

「・・・な、なんで！なんでわかったの？！」

「そりゃあ、スキャンしたからな」

スキャンとは、一概にこれとは言えない。音波、熱源、赤外線等多数存在する。中身は無理でも外、体のシルエットだけならハッキリ分かる。

「スリーサイズ、言ってやろうか？ たぶん体重も誤差2kgで言い当てられるな」

「やめて！」

「ん、了解」

「あわ、あわわ・・・酷いよ、お兄ちゃん」

「・・・まあいいか。」

とにかく、俺はわかってたから特には——お前、どうやって一夏にバレた？ まさか、見られたのか？」

「・・・」

小さく頷いたシャルルの顔は赤く、同情してしまう。

「災難だったな」

「お兄ちゃんも見たくせに」

「えーと、上から7「わーわーわー！」——生意気言うと次は体重からな」

「意地悪・・・」

「シャルル、待たせた——一真？」

「よう、男の敵」

御盆に定食を乗せた一夏に手を振りながら、一真は椅子から立ち上がりベッドに座る。

「ど、どうしたんだよ一真？」

「頼みが合ったが、忙しそうだな」

「まあな」

「そんじゃ、俺は行くよ」

一夏の肩を叩き、外へ出ようとする。だが、それをシャルルは引き止める。

「待って・・・お兄ちゃんにも、聞いてほしい」

「いや、遠慮——わかったから泣くな」

シャルルに裾を握られたままベッドに座った一真は対面に座る一夏を見る。困惑しており、話に付いてこれていないというのがわかる。

室内を沈黙が支配していたが、覚悟を決めたシャルルによってそ

れは破られる。小さな、小さな声だったが沈黙を破るには十分であった。

シャルルの本名は、シャルロット。シャルロット・デュノアという少女である。

デュノア社に命じられてIS学園に転入し、一夏達に近づいた。理由は、第四世代と日本の最新機のデータを盗むためである。

デュノア社は現在ギリギリのラインでISの製造権を保持している。次のトライアルで結果を出さなければ権利は剥奪され、デュノア社は倒産してしまう。故に彼らは犯罪と分かりながらも第四世代と日本の最新機である白式とナインボール、さらに一夏と一真のデータを求めた。

シャルルの役目は性別を偽りながら一夏と一真に近づき、少しずつデータを集める予定であった。そして上手くいくなら他国のデータも集めるつもりであつたらしい。

ここでポイントになるのは偽りとはいえ男性IS適正者である。これはデュノア社の広告塔としての役目もあるらしい。

だが、メリットに対するデメリットが大き過ぎると一真は思う。信頼第一の商売をしている企業がそんな他社を刺激させるような真似をして、バレた際のデメリットを考えているのか頭を捻る。

そのための対応も考えているらしく、デュノアは役目を終えたシャルルを社会から隠すのだそうだ。つまりは牢屋に閉じ込め、無かったことにするらしい。

一夏はこれに激昂。親のすることじゃないと叫ぶ。

一真も筋が通らないと考えつつも、トップに立つなら仕方ないと考えた。

「僕は本妻の子じゃない・・・妾の子なんだ」

一夏を宥めるようにシャルルは言った。彼女の母親は若い頃に父親と出会い、子を成した。身分の違いから別れはしたが、母親が死んだ折にシャルルは引き取られたらしい。

ここまで聞いた一真は道を違えたが、筋は通ると感じた。だが話は繋がらない。

「引き取られた際に検査をしていたら高いIS適正が見つかった。それからは非公式とはいえデュノア社のテストパイロットになった・・・」

「父親は、父親は何もしなかったのかよ！」

「父に会ったのは引き取られた際とIS適正が見つかった二回だけ。それ以外は会えなかったよ」

「そんな、勝手過ぎるだろ！」

（忙しかったか、本妻が煩いとか考えないのか？）

「僕には居場所がない。本妻も、僕にあったときは泥棒猫の娘とい
って叩いたしね」

「そんな・・・そんなのって！」

（籍を入れようとしたのか？

三年間あれば本妻も説得出来るかもしれないしな・・・樂觀的過ぎ
るか）

「全部話したらスッキリしたよ・・・聞いてくれてありがとう」

憑き物が落ちたかのようにスッキリしたシャルルの笑顔はとても
痛ましかった。痛ましく、見ていられなかった。

「それで、それでお前はどうするんだよ！お前はそれでいいのかよ
！」

「仕方ない、よ」

「諦めるなよ！抗えよ！お前は誰かの玩具じゃないだろうが！」

「でも、もうどうにもならないよ・・・」

「違うだろ・・・そんなの、違うだろ！

どうにもならないなんてない。どうにかするんだ！その為なら俺も、
一真も力を貸してやるよ！」

「え？俺も？」

「一夏・・・」

「待ってろ！」

（いや、聞けよ）

制服の中に手をつ込み、生徒手帳を取り出すとパラパラとペー
ジを捲る。そして目的の何かがあったのかそれを読み始める。

「IS学園特記事項、IS学園に在学中はいかなる国家や組織にも
帰属しない・・・つまり、ここにいる間はデュノアも手出しが出来
ない！」

「・・・そんな項目あったんだ」

（おかしいな。この前、陸自の命令受けたような・・・おかしいな
ーあっ！）

「それでも勤勉家なんだよ」

「ふふ、なにそれー」

（つまりアレか、ここで俺がダブリ続ける限り自由は約束・・・財
布握られてましたねー！結局無理じゃねえか！
命令聞かなかったらまた煩いし、下手したら何されるか・・・学費
だってあっち持ちだから何もできないし）

「これで三年の猶予は出来た。その間に何か手を見つければ良い、そうだろう？」

「………ありがとう、一夏。庇ってくれてありがとう」

「いや、その／＼／」

（震えるぞハート！燃え上がるほどのヒート！今ここに目覚める俺の波紋！）

それから何回かイベント消化をしていた一夏は思い出したかのように一真に話し掛ける。

「一真からも何か良い案ないか？」

「案？」

「ああ。シャルルが自由なる方法」

一夏のベッドの上で世の中に絶望していた一真は座禅を組ながら手を合わせていた。

「まあ、色々あるぞ」

「マジで?!」

「本当に?!」

「なにを大袈裟————あだだだだっ、痺れてんだ体重かけるな!」

瓢箪から駒の発言に2人は食い付く。一真は悲鳴を上げる。

「放れやがれ!」

「おわっ」

「きゃっ」

「あーいてえ」

「そ、それで、その方法ってなんだ?!」

「・・・」

「難しく考え過ぎだ。単純に考えろよ。」

まず、デュノアが籍を入れておらず、さらには周りにも秘密にしてるなら無視すればいい。もしくは脅せばいいだろうが」

「はい？」

一真の口から出たとんでもない方法に一夏は固まり、シャルルは苦笑いしてしまう。

「デュノア社長の愛人の子ならそれだけでスクープだ。マスメディア・・・は金で動くから頼りにならないからライバル会社に垂れ込めばそれで解決する」

「・・・流石にそれは」

シャルルとしてはそこまで事を大きくしたくないのかあまり乗り気ではない。

「だから脅して留めればいいだろ。下手に垂れ込めば徹底的にデュノアを潰さないとやり返される」

過激過ぎる手段に2人は笑うしかない。

「確か、籍は入れてたような」

「なら結婚すればいい。一夏は、微妙だな。俺と結婚すればそれで解決する」

「「はあっ?!」」

次に出されたのはまたとんでもない方法であった。

「け、けけけ結婚ん?!」

「な、なに考えてんだよ一真!」

「五月蠅いバカたれ。」

別に形だけでいいんだよ。結婚っていつでも形式状でいい。ようはデュノアの籍を移動できればな」

「ぼ、僕は一夏——」

「ならシャルルの好きな奴でいいじゃねえか!・・・呼んだかシャルル?」

「なんでもない!」

顔を真っ赤にしながらむくれるシャルルに首を傾げる一夏を見ながら足を崩す。

「別に俺はいいが、アフターケア出来るのか？デュノアは言ってみればデュノア社の弱点だ。向こうからすれば絶対に手放したくないはずだ。たとえ汚い手段を使ってもな」

「・・・」

「世の中、金を積みば人を殺せるし、心を動かすこともできる。だからまずはデュノアの基盤を作らないといけない」

「・・・お兄ちゃんなら、出来るの？」

「まあ、デュノアの籍を日本に移してから適当に軍属にでもすれば向こうも簡単には手が出せない筈だ。日本としてもデュノアとの交渉材料が手に入るし、有能なIS適正者が手に入るから断らないだろう。断るなら俺が向こうに行くぞ、と脅すさ」

「僕、お兄ちゃんのお嫁さんになるの？」

「しねえよ。する理由がない。」

俺は特別だからな。デュノアも油断はするんじゃないか？海老で鯛が釣れたってな。

・・・まずはデュノアが結婚出来る年齢になったら挨拶に行き、向こうから実印と了承を勝ち取る。それから軍属か研究所に入ってもらってから離婚」

一真の案に2人は気難しく考える。

「はい、これでハッピーエンド。囚われのお姫様は見事助かり、新

たに見つけた王子様と幸せになりましたとさ・・・何か質問は？」

「上手く行くのか？」

「俺と日本の評判が悪くなるだけで、後は痛くない。日本政府や陸自自体には恩義ないしな」

「でも、婿に來いって言われたら？」

「親がいないのに婿はないだろ。あつちは親って言えないんだから・・・言ったら入るかもな、一時期」

「だけどさ」

「ごねたら新婚旅行に日本選んで、デュノアが気に入ったからここに住みます。ついでに仕事も見付けましたから帰りませんでいく」

「強引だね」

「一番楽だからな。他に質問は？」

「特にはないかな・・・」

「俺もだ。頼むぜ、一真」

デュノアと一真に頭を下げられた一真は体を解しながら立ち上がる。

「まあ、責任は果たすさ」

それから帰ろうとする一真にシャルルが思い出したかのように用事を聞く。

「そういえば、お兄ちゃんって何か用があったって来たんじゃないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

錆付いた玩具のように振り返り、飛び付くようにシャルルの肩を掴む。

「デュノア！お前、女なら生理用品持ってるよな？！」

「え、ええ？！」

「二日分くれ！ボーディビツヒが待ってる！」

それから紆余曲折を経てラウラに生理用品が渡ったのは一時間後となる。

「遅いぞ少尉。」

「・・・しかし、この痛みは少し辛いな」

宅配により到着した本を読みながら2人は就寝時間まで暇潰しをしている。

一真はベッドに寝転がりながら小説を読み、ラウラは貸してもらった小説を読んでいた。度々彼女の質問に答えていた一真は、まさかそんな内容が含まれているとは思ひもなかった。

「少尉」

「どうした？」

「これはなんと読む？」

[illegible]

ラウラの指差す言葉、それをじっと見つめる。眼鏡は曇ってもいいし、ましてや文字が潰れているわけでもない。だが余りにも不適切な単語過ぎて頭が否定する。

「少尉？」

「……強姦だな」

「ゴウカン？ゴウカンとはなんだ？」

「レイプだレイプ……あのクソ爺、覚えてろよ」

「そうか。なぜ父親が娘をレイプするのだ？」

「……ボーディビツヒ。忘れる。この本の内容は忘れてしまえ」

「なぜ？」

「内容が不適切、いや、使い方が間違っているな。日本語を学ぶなら……これがいいぞ」

自分の本棚からラウラのために買った絵本を渡す。コクコク頷きながら一文一文を読みながらページを捲っていく。

そんなラウラを見ながら一真は小説をパラパラと読み始める。

（恋愛・・・しかも結構リアルな不幸物だな。父親に売春強要されてるし、犬も出てくる。彼氏はホストか・・・・・・
・女子が好きそうな内容だな。不幸なんて自分のだけでいいだろうに）

小説を机に投げた一真はちよいちよいと袖を引っ張るラウラに顔を向ける。

先程渡した絵本のある単語を指差している事から何かわからない物があるのだろう。

「少尉。コンビ、とはパートナーを組むということか？」

「いや、コンビってのは体の垢だ。地方の方言だったかな・・・とにかく、コンビは垢の事だ」

「垢から子供が出来るのか？」

「物語だから事実とは違うさ」

「なら子供はどうやって出来るのだ？」

（・・・・・・一級フラグ建築士の資格は無いはずだ。なのになぜこんな壁にぶち当たらにゃあならんだ？）

「少尉も知らないのか？
ふむ。なら調べて――――」

ネットで調べたそうとする少女を担ぎ上げ、ベッドに座らせる。
その対面に座った一真は眉間を揉み解しながらどう答えるべきかと
頭を悩める。

「あー、ボーディビツヒはどうやって子供が出来ると思う？」

「精子と卵子を人口受精させ、出来た受精卵を試験管培養により分裂させていき、あるレベルまで分裂した受精卵を培養液を満たしたカプセルへ入れて成長を促す。後は人間の形が安定してから取出し教育を始める」

質問の答えに固まった一真を不思議そうに眺めながらラウラはまたペラペラとページを捲っていく。

（・・・ヤバい。可愛気の有る無しのレベルを遥かに超えてヤバい）

「鬼とは悪魔のことか？」

「オークだな。트롤ルでもまあ近いだろ」

「ほう。それで、子供とはどのようにして出来る。人口があるなら天然もあるはずだ。」

「・・・あー、ならまず確認するが精子と卵子ってどうやって入手するかわかるか？」

「男と女から採取するのだろうか？」

「だから、具体的にはどうやるかってことだ。男女から精子と卵子を手に入れるのは分かった・・・なら手に入れるまでの過程はどうなんだ？」

「わからん」

「あーつまりだな・・・」

ここに来て一真の本能が強く、大きく警報を鳴らす。それは思考を停止させ、紡ぐ言葉を引きちぎった。

『私の可愛いラウラに何かしてみろ・・・』

この翌日。有耶無耶にした一真に代わり、ラウラは先の答えを千冬に問うた。その結果・・・

『1年3組犀川一真あ！今すぐ、20秒以内に私の下に来い！』

「・・・」

「流石かずー！」

「やっぱり我らは犀川さんは違いましたー♪」

「織斑先生、怒ってるよ犀川さん・・・」

「・・・・・・・・」

「一真！何したんだよ？！千冬姉、顔真っ赤だったぞ！」

「あれは、かなり頭に來ているな」

「犀川さん、一体何を？」

「お兄ちゃん、大丈夫？顔色悪いよ・・・」

「遺産配分考えたら？いくらアンタでも千冬さんが相手じゃご自慢のISも鉄屑同然よ」

『犀川 あっ、早く来んかった！』

「・・・・・・・・ドウシテコウナッタ？」

そんなわけで、ラウラの転入から二日後、一真は千冬によりボコボコにされるのだった。

「白状しろ・・・ラウラに何を吹き込んだ」

（最近こういうのばっかだな、俺・・・お祓いするべきか？）

事件その9 「俺のルームメイトがこんなに可愛いわけがないからさあ大変」

鈴音

「第一回、IS裁判を始めるわよ」

一同

『はい』

一真

「漬物ウマ（ポリポリポリ）」

H
1

「おいしいですかマスター？」

一真

「漬物って初めて食べたが、悪くないな（ポリポリ）」

鈴音

「はいその被告人。なに悠長に漬物食ってんの」

一真

「ずずう」

鈴音

「話を聞け！茶を啜るな！」

一真

「……………だってさ、お前ら話し聞かないだろ。感情が先走るし」

箒

「失礼な（プンスカ）」

一真

「扉」

箒

「いや、その……」

一夏

「俺達だって話してくればわかるっての」

一真

「10話現在、お前らが俺の話を聞いたのって最後だけだ」

一夏

「ぐぬぬう」

セシリア

「一夏さんや箒さん、鈴音さん方はわかります。ですが私は違います。私はいつでも冷静沈着です（フンス）」

一真

「出会ったその日に喧嘩を売られ、さらにその日に部屋を覗かれ誤解する。次の日には社会的に殺そうとし、人間の屑扱いされましたですの」

セシリア

「過去は懐かしむものですの（キリ）」

一真

「それが免罪符になると思うなバカたれ」

鈴音

「まあ、私は大丈夫ね」

一真

「セシリアと同上。追加で箒と同じなためテメエも同罪だ」

鈴音

「過去は懐かしむものよね!」

一真

「ということで第一回 I S 会議へいまーく（ポリポリポリ）」

一同

『さあ！始めよう！』

一真

「茶番だな」

H
1

「マスターを弾劾裁判にかけるとは。命がいらないのでしょうか？」

一夏&一夏ラブーズ 裁判準備中・・・

一真

「たくあんうめえ（バギバギバギ）」

一夏

「たくあんはそんな音しません」

一真

「菌応えがあるんだよ（バリハリバリ）」

一夏

「んな漬物あってたまるか！」

鈴音

「それじゃあ、裁判始めるわよ。」

まず！一真は本当にシャルルをスキャンする必要はあったのか、また他の女子をスキャンしているのか」

一真

「え、マジ裁判するの？無謀過ぎない？」

セシリア

「余裕ですね」

箒

「その余裕がどこまで続くことか」

一真

「お前らさ、俺の弁護人がH・1って理解してる？ 本当にH・1を論破出来るの？ 自立AIに理論武装で勝てるなんて本気で思ってるの？ 六法全書丸々インストールしてるAIにマジで勝てるなんて考えてるの？」

一同

「」

一真

「はい、やっぱりへいまーく（ポリポリズズウ）」

鈴音

「い、いいから話さないよ！」

シャルル

「そ、そうだよ！ せめて納得出来る理由くらいは教えてよ！」

一真

「納得ねえ……納得させて欲しいの？ それとも納得したいの？」

一夏

「どう違うんだよ？」

一真

「それによって答えが変わる（ポリポリポリ）」

セシリア

「……では、両方をお聞きしますわ。まずは納得したい場合の答えから」

一真

「男の性」

一夏
ラバーズ

「」

一夏

「え、え？」

一真

「なんだ、不満か。なら欲望に従っただけだ」

箒

「そ、そそこに直れ！その首叩き落としてくれる！」

鈴音

「最っ低！」

セシリア

「不潔ですわ！」

シャルル

「お兄ちゃんのエッチ！」

一真

「まあ、こうなるわな（ポリポリポリ）」

一夏

「なに悠長に漬物食ってんだよ一真！」

第一回レギュラー陣戦争中・・・

一夏
ラバーズ

「(ボロボロ)」

一夏

「何で俺まで」

一真

「まあ、俺に勝つなんて10年早いわな」

鈴音

「なんで勝てないのよう・・・代表候補2人もいんのにい」

一真

「初過ぎるからだろ。俺に勝ちたかったら処女卒業してから来な（モリモリモリ）」

H
1

「我々が本気を出せばこんな物です」

箒

（なぜあの約束が録画されているのだ・・・）

セシリア

（私の、私の入浴シーンなどいつの間に・・・）

鈴音

（アイツ、後で・・・ううつ、情けない姿なんか一夏に見せられない！）

シャルル

（裸見られた裸見られた裸見られた裸見られた）

一夏

（箒の裸・・・セシリアの裸・・・鈴の泣き顔・・・シャルルの裸・・・）

一真

「本当に初だねえ。性欲無い俺からすると羨ましい限りだ」

H
1

「マスターのはトラウマが治れば問題ないかと」

一真

「20代半ばまでは童貞のままか。まあ、童貞にコンプレックス無いから気にせんが（ズズウ）」

一夏

「あーうーおー・・・・・・・・・・」
とりあえず、もう1つの理由を聞かせてくれ」

一真

「まだ続けるか。」

そうだな。まず、俺の情報網に3人目の男性IS適性者なんて引っ掛かってなかったからだな。しかも所属がデュノアで、今の今まで話が出ていなかった。だから調べた。

立场上、データの流出は必要最低限にしなければいけない。日常の範囲なら問題無いが、OSとか盗まれたら俺の今後に関わる。

世の中、企業スパイなんて当たり前だ。それこそドラマや漫画みたいなこともある。盗まれましたではすまないんだ。それがさらにはポツと出の男性IS適性者なら尚更だ。

女性IS適性者ならまだ警戒だけだが、男性IS適性者なんて存在程胡散臭いのはない。だからスキャンした。それで女と知ったから後は普通に警戒していた。ちなみに普通の生徒に使ってもどうせ気分悪くなるからしてない」

女性陣

『んなっ!』

一真

「お前ら、俺が女性恐怖症っての忘れてない？」

一般生徒の体スキャンして、性欲処理の為のオカズにしても結局は性的に興奮した相手を妄想するんだぞ。エロ本で吐くような人間がそんなこと出来ると思うのか？」

一同

「・・・・・・・・・・」

一真

「この数年。性欲処理しなかったのは伊達や酔狂じゃないんだよ。マジでダメなんだよ。」

たぶんだが、お前らの裸見ても何の反応も無いだろうな。その証拠にデュノアやボーデビツヒの裸見ても何も思わなかったし」

一夏

「あれ、もしかしてそんな予定――」

一真

「あーあ、建てちまった・・・恨むなら一夏を恨めよ」

一夏

「え？」

一夏ラブーズ

『一夏、話がある』

主人公&ヒロインズ 折檻中・・・

一夏

「(チーン)」

鈴音

「そういえば、アンタなんでドイツの誘い断ったのよ？」

セシリア

「かなり好待遇でしたわね」

一夏

「そーいや給料4倍だったか？今はどれくらい貰ってるんだ？」

一真

「んー、給料だと必要経費を無視すれば基本38万だな。税金はま
だかからないし。そこから学費、携帯の費用、光熱費や食費全部差
っ引いて5〜6万くらいだな。研究があつた当時は月60万くらい
は稼いだけど、大半は入院費用で飛んでた。

次に、ドイツの誘いだけど日本を離れられない理由があるんだよ。

高槻さん達への恩義もあるけど、それ以外にも色々な……
・まあ首輪を付けられてるってことだ」

一夏

「月120万って」

一真

「超過勤務手当や危険手当があれば妥当だな。なにより人の命が時
給数万なんて安すぎる位だ。

知ってるか？一時期、戦争中アフガンへの派遣部隊の時給って数万
だったんだぜ。しかも表向きは誰も死んでないって言ってるが……
……実際に数人の死者や命の危険があつたんだ。時給数万
なんて安すぎるくらいだ」

一同

『……』

一真

「軍人ってのはそれだけ過酷なんだよ。銃が撃てる、格好良い……
……別に所属する理由は人それぞれだが、それだけは覚えとけ。

軍人はな、誰かの為に死ぬかもしれない職業だっ
てことをな」

主人公＆ヒロインズ 休憩中・・・

シャルル

「そういえば、ラウラが幼過ぎない？僕の気のせいかな？」

セシリア

「それは私も疑問でしたわ」

鈴音

「私も」

一夏

「確かにな」

箒

「あれでは幼稚園児と変わらんな」

一真

「作中でのそれぞれのコンプレックスの現れだ。

ラウラの場合、造られた存在という出生から幼さが全面に出されている。自分の知る世界と他人の見る世界がズレてるってのは否がおうにも孤独感を浮き彫りにするもんだ。つまりは存在だな。

また、ラウラは人口受精による人間だ。造られた人間故に製作者や使用者の望みを体現する。幼さってのは純粹さでもあり、また残酷さもある。都合はいいな。

ちなみに俺の場合は隷属になるな」

セシリア

「なぜ犀川さんは隷属なんですの？」

一真

「AC側だからな。傭兵ってのは契約に基づいて隷属するもんだ・
・俺もその1人なんだよ。」

後は何も何か付き従うだけじゃなく、誰かに振り回される意味もある。まさに俺にぴったりのテーマだな」

鈴音

「はあ？　なんでよ？」

一真

「テメエらが振り回してんだよ」

主人公&ヒロインズ　談笑中・・・

シャルル

「そういえば、お兄ちゃんとラウラって強いのか？」

一真

「弱くはないな。まあ、箒には勝てないがな」

一同

「・・・・・・・・・・」

箒

「し、失礼な」

一真

「リアル腕っぷしで行けば、篠ノ之、ボーデビツヒ、凰と俺、その他の順番になる」

一夏

「え、鈴と一真って同じくらいなのか？」

鈴音

「それでも太極拳とかはしてるからね。少林寺も多少は心得あるわよ」

一真

「竜馬という方に一年間みっちり近接戦闘の訓練をつけてもらいま

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その10 『俺は神に愛されている……故にさあ大変』 (前書き)

この小説はSSの百物語をしながらヒヤッハーと数珠を振り回すだけの胆力があり、80話を過ぎた辺りから般若心境verメタルをガンガンにならさないといけなくなるくらいの強いメンタルを有する方のみお読み下さい。

それらが近所迷惑と感じる常識人はPS版メガテンのメニュー画面を開きながら百物語を流しながらお読み下さい。メガテンの魔方陣は実際に有効らしいですよ。

事件その10 『俺は神に愛されている……故にさあ大変』

ラウラとの共同生活から1週間と5日。所属不明機の襲撃事件からもうすぐ1ヶ月半ばも経つ今日この頃、IS学園に怒声が響き渡った。

「これが世界の選択か！ちくしょう！」

その日、一真はダラダラとしながら教師の連絡事項に耳を傾けていた。少しばかり着くずした制服は改造した者達の中でも目立ち、

担任はシャキツとしろと苦言しつつ黒板に連絡事項の日程を書いていく。

「来月、学年別トーナメントが開催される。それに伴い諸君に特別ルールに関する報せだ」

書き上げられていくトーナメントの詳細を眺めながら一真はなんとなく周りを見渡す。誰も彼もがしっかりと担任の話に背筋を伸ばして耳を傾け、メモを取っていく。まだ高校生活1ヶ月なのだから仕方ないが、それでも堅いなと感じ、これが初々しいということなのだろうと内心で微笑む。

「今年の学年別トーナメントは個人戦からタッグマッチとなる。よって諸君らには再来週の水曜までにパートナーを決めてもらう」

「え、タッグマッチって・・・」

「いきなり過ぎない？」

「でもこれってチャンスじゃない？」

騒つくクラスを余所に一真は廊下の向こうに広がる空に目を向けていた。耳だけは担任の話に傾け、思考は今では会えない友人達を思い起こす。

（アイツら、今は何してるのだろ・・・バイト、大丈夫かな？勝手にやめなきゃいけなかったけど、レジとかアイス大丈夫かな？）

「え、どういこと？」

「チャンスも何も、私達が専用機持ちに勝てるわけ無いでしょう。オルコットさんや嵐さん、ボーデビツヒさんにどう勝つのよ」

「つつつつち。甘いね、考えが・・・ウチには犀川さんがいるんだよ。なら犀川さんとパートナーになれば」

「トーナメントも良いところまで勝てる？」

「もしかしたら優勝も夢じゃない？」

「さらに上手く行けば犀川さんとゴールイン？」

「」「きやー！」「」

以前、今から半年以上も前の生活を思い起こしながら一真は傷心に耽る自分を気持ち悪いと切り捨てて。そして思考を切り替え、ラウラにどのようなして一般常識を身につけさせるか考えていく。

（絵本はいいとして、次は小説とかドラマがいいかな？

一番は女子に付きつきりで教えてもらうことだが・・・今のままじゃ誰も受けてくれないし、どうしたもん——俺はいつからラウラの親父になったんだ？

まあいいか。そういや、ラウラがお好み焼きを食べてみたいって言うってたな。材料は今日辺りに買いに行くとして、どっか卵とかキャベツが安い場所あるかな？ いや、何より食い切れる量になる・・・な。最悪あのバカに食わせればいいか)

「きゃー！なら、上手くすれば食堂のデザート券が一年分ゲット？！」

「さらにさらに、訓練と称して二人――」

「やらせないよ！犀川さんとのラブ特訓はこのKKK会員の私が貰うんだから！」

「ズルい！私だって会員だよ！」

「私も私も！」

「だったら私は一夏君と」

「なら私はラウラたん」

「だったら私はシャルルきゅん」

(そういや、H・1の追加装甲が届くんだっけか・・・間接の稼働範囲が2。狭くなるけど、今のままよりはマシか。

ああ、まさか被ダメージが1.8%も増えるなんてなあ・・・また徹夜しないといけないのかよ)

緊張感のない談笑がクラスのあちこちで起こるのを見ていた担任

は緊張感を持たせるべきか、それとも一年生だから仕方ないと多めに見るべきかを天秤にかける。そして傾いた『多めに見る』という選択肢に従い、今回のイベントの追加報奨の話を持ち出す。

「喜べ諸君ら。例年ならベスト3までしか食堂のタダ券を貰えなかったトーナメントだが、今回は前回の余りもあるらしくベスト16までがタダ券を貰えるぞ」

「「「きゃ〜〜〜!」」」」

（そういやトーナメントの前に上期のテストがあったな・・・範囲、誰かに教えてもらわないと）

「しかも優勝者は学園側に要望が出せるとまで言われている。内容は勿論吟味されるが、常識的な物なら大抵は通してくれるはずだ」

「はいはいはい！常識的な物って、具体的にはなんですかー？」

（今月の給料日が後1週間。手持ちと通帳合わせて1万5千だから、余裕といえば余裕だな。・・・けど、あれだけ働かせた上に手当てもないし、食費は自分持ち、さらには学費も実費負担ってなんの嫌がらせだよ。おかげで毎月3万8千で生活しなきゃいけないじゃないか（えか）

「そうだな・・・例えば食堂に自分の好きなメニューを増やせる。例えばショートケーキやシュークリーム等品数がない食堂に数品程ケーキのメニューが増える可能性もある。

自室に加湿器や大型テレビは勿論、防音対策を取って室内カラオケもできるかも知れんな」

「「「「きゃゝゝゝ！それマジですかゝゝゝ！」」「」」」

「ああ、大マジだ。故に健闘するように。
そうだ、犀川。お前に伝えることがある」

（そういや、新作のゲーム出るんだった……でも買ってもにやる機会ないし）

「おい犀川。聞いているのか田舎っぺ大将」

「田舎出身は否定しませんが、俺は武術なんてしてませんし猫を師事した覚えもありません……っていうか、よく知ってますね」

「嗜みだ」

（昭和のアニメを知ってるのが嗜みって……なんか周りがやけに詳しくてヤバイんだが）

「それより田舎っぺ大将」

「なんですか27歳独身」

「お前に伝えなくてはいけない項目があつてな、大将君。
会議で決まったが、全体的な勝率を均すために代表候補同士のタッグは禁止。また相手によってはリミッターを設ける」

「代表候補だけなんですか？」

「一般生徒にリミッターを付けてどうする。」

とにかく、以上だ。間違っても代表候補同士でタッグを組むなよ。トーナメントの意味が無くなる」

（代表候補同士はダメね・・・つく）

担任の話を聞き終えた一真は笑いを噛み殺し、それを見られないよう頬杖を付いた手で隠しながら外を眺める。今日もとても気持ちの良い青空だ。

そんな気持ちの良い朝一番の授業は、一組のI S 訓練であった。

（俺、必要ないな）

予定では、その日の一時間目は一組と共に I S 訓練をする筈だった。だが、教員の都合により急遽二組の生徒と共に合同授業を行うこととなった。

この合同授業、実は学園でも初めてのことだ。

I S に数限りがある中、90分という限りある時間の中でやるメリットが無いと普通はやらない。――しかし、今回は特別である。理由は手の開いている教師がいないからだ。

I S 学園の教員は、大半が元代表候補や元代表をしていた経緯から色々と顔が利く。そのため急な出張というのは珍しくは無い。

いつもなら必ず誰かが手を空けているのが決まりだったのだが、襲撃事件の事後報告に対し文句を付けてくる国や企業に対する対応が未だ続いているのが現状。中には賠償だ、賠償だとバカの1つ覚えのように喚く国もある。

（しかし、専用機持ちが、ひー、ふー、みー、やー、いー、五人か。一クラスが40だとしてもざっと12〜13人は見ないといけないな。いつもより少なくて助かるな）

その弊害が伝わり伝わって一真へと及んでいる。本人は因果応報とバタフライ効果、どちらが当て嵌まるのかと時間潰しをしながら千冬の隣で休めの姿勢を続けている。

「それではこれより二組との合同実習を行う」

「「はい」」

（そういや、朝はなに食ったっけ？）

「今日から実習を行うにあたりISの動かしてもらおう。まず手本として・・・凰、オルコット、デュノア、ラウラ、前に出る」

「はい！・・・なーんで私が」

「はい！・・・こういうのは見世物のようで気が引けますわ」

「はい。・・・うう、緊張するな」

「頑張れよ、シャルル」

「う、うん。ありがとう、一夏」

「はい」

「頑張れよボーデビツヒ」

「問題ない」

2人の凜とした返事の後に続く愚痴に一真と千冬は苦笑した。

「そう言うな、お前ら・・・アイツにいい所を見せるチャンスだぞ」

「「っ!」」

（うわぁ、あくどーい。弟はやらないとか言ってた人間がよく言うよ）

「まあ、このイギリス代表候補である私が選ばれたのは当然ですね!」

「まっ、当然っちゃ当然よね。なんたって代表候補なんだから!」

（（（単純））））

「一夏をやる気もないくせに」

「ああ、一夏はやらんぞ。・・・・・・・・何より私が、何時、やると言った?」

「恋する乙女をからかってやるなよ」

「小娘にやるつもりなど毛程もないわ」

「地獄に落ちるぞ、教師」

「安心しろ。閻魔など叩き切ってくれる」

「それが出来たら武神か何かですよ？」

「違うのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

自信に満ち溢れた、悪く言えば天上天下な人間だとは思っていたが、彼女を理解仕切れてなかったようだ。彼女は根っからの俺様氣質で重度のブラコンらしい。

さらに密かに警護を忘れていたことに気がついたが、本人も気が付いてないらしい。命を拾った。

「さて、お前達にはこれからある人物と模擬戦をしてもらう」

「ある人物、ですか？」

「ああ・・・ちなみに、お前達は2人で1人を相手にしてもらう」

セシリアと鈴音が千冬に招かれて四人の中から抜ける。残るのは

シャルルとラウラの二人。つまりはそういう分け方なのだろう。

「え、っていうことは僕とボーデビツヒさんで？」

「ふん、私1人で十分だが、仕方ない」

（なーんか引っ掛かるな）

「流石にそれは相手が可哀相でしょ」

「安心しろ。お前達ではまず勝てん・・・特に、片方には瞬殺されるのがオチだ」

「「は？」」

「それは本当ですか、教官？」

「ああ。お前でも勝つのはまず無理だ」

「そんな人、学園にいましたっけ？」

（軍属のボーデビツヒに、代表候補2人、さらに代表候補レベルのデュノアを相手に勝つ相手・・・一杯居過ぎて思いつきません）

「ちなみに、犀川が知っている人物だ。それもかなり、な」

含みのある笑みを浮かべる千冬に悪寒を感じながら急ぎ思い当たる人物をリストアップしていく。

ラウラ達を瞬殺出来るような存在。つまり代表レベルで一真の知り合いとなると数は限られてくるが、その全てが現在には出張でいはいはずだ。

「来たな」

「きゃー！ー！」

「え？」

「え？」

「・・・え？」

千冬の見上げ先、空の彼方から誰かが落下してきた。そう、落下だ。間違ってもあれは飛行でも降下でもない。重力に従い、慣性に従った落下だ。

重力加速度とブースターによる加速度によりグングンとこちらへ距離を詰めてくるISに対し背後の生徒を守るためH-1を展開。次いでカメラによって相手が山田真耶だとわかるが、正直首を傾げてしまう。

「ど、退いてくださーいー！」

（たしか、山田真耶教員は元代表候補だったよな？）

『間違いありません。』

山田真耶。元代表候補、所属は日本政府で6年前までIS学園に在学。成績、IS適正全てにおいて好成績を納めています』

(ドジ属性で死人が出て堪るか)

『ドジ属性とはそこまで殺傷性の高いスキルなのですね』

(ズレたこと言っていないでAICの補正しろ)

電気信号により瞬間的に交わされる会話と言えど時間は刻々と経つ。常人の1割に満たない体感時間も、残り9割も会話に使用すれば結局の所差異は無い。

『しかし、落下予測ルートには織斑一夏しかおりませんか？』

(.....とりあ
えず落下速度は落とす)

『了解』

2〜3秒迷った一真は真横を通り過ぎるだろう真耶に対し逆ベクトルになる力をかけて減速をかける。完全に止めないのは、こんな場所で手札を大々的に曝したくないからもあるが麻耶の内部——内臓まで保護出来たためだ。下手に停止を掛けてしまえばGによって内臓が潰れるか、よくても傷めてしまう。

重力加速度分だけ減速した真耶は十分過ぎる速度で一夏を巻き込み墜落。派手な土煙を巻き上げる。

「いてて・・・」

（羨ま・・・けしからん）

『驚きました。あの落下パターンなら、下敷きになった人間は間違はなく大怪我以下の怪我を負うはずです。』

—————山田真耶、及び織斑一夏のデータを修正・・・完了』

H・1のサーモカメラにより誰よりも早く2人の状態を把握した一真は彼の天命とも言える在り方に呆れ返った。それはH・1も同様で、落下速度と角度、質量、衝突した際のシュミレートから弾き出された10に満たないパターンのどれにも擦りはしなかった一夏に対し驚きというフリーズを起こし掛ける。

「いつつ・・・なんなんだよいたい？」

「ん・・・んん」

「うん？」

「あの、織斑君・・・困ります、こんな」

「え、ええ?!」

土煙が晴れたことで2人の姿がハッキリと見えてくる。真耶を下に、一夏がその上に覆い被さる形だ。また真耶の豊満な胸に顔を埋め、右手で驚掴みにしているのはきつと主人公補正だろう。俺になり分だけ羨ましいが、どうせ気分悪くなるからいらない。

ここに少女がいれば間違いなく面白可笑しく騒ぐ光景に一真はピリピリと背筋を痺れさせる殺気にも近い気配に辺りを見回した。

「あ、でもこうなると織斑先生が御義姉さんになって、それはそれで」

「す、すすすいませ——」

パシュン、と軽い発砲音と同時に青白い光線が通り過ぎる。粒子砲独特の青白い光だ。

先程まで一夏の頭があった場所を通り過ぎた光線は、ISを装着していない彼に強い熱気を伝える。だが彼自身は何が通り過ぎたのか理解し、震える程の寒気を感じていた。

一真から見てもあの一撃が直撃していれば間違いなく頭が消し飛んでいそうだが、そこら辺は主人公補正というものだろう。とりあえず流れ弾で生徒が怪我せぬよう体を張って防ぐ。守られた生徒は顔を赤くしては青くし、また赤くしていた。

「ありがとうございます」

「気にするな。当然のことだ。」

周りの奴らは俺の後ろに來い。まとめて守ってやる」

「」「は、はい！」「」

一真の背後に集まる生徒を確認しながら未だにトリガーから指を放さないセシリアに注意する。ついでに双天月牙を取り出した鈴音も注意対象だ。

「ひっ」

「一夏あー！」

連結し、投擲した連結刃はブーメランのように回転しながら一夏へ迫る。

「危ない！」

三度、銃声が響く。真耶の放ったライフルが音源だ。

三発の銃弾により速度を落とし、弾かれた連結刃は逆回転しながら宙に飛び上がり、ジャイロ効果に従い射線上にいなかった一真に

向かって落下し……………

「ふんぬ！」

数ミリのズレもなく俺の眉間目掛けて落下してきた。

「「「おおー、真剣白刃取りー」」」

「……つぶねえ」

一瞬、弾き飛ばす動作をしてしまった事に冷や汗を掻きながら鼻先で止めている連結刃を地面に突き刺す。

「今のように、元代表候補である彼女にとってあの程度の射撃は造作もない」

「あはは、元ですよ元」

「すみません」

「お前達には彼女の相手をしてもらう」

「いや、でも2人がかりはやっぱり」

「後ろ髪を引きますわ」

「あの、すいません」

「安心しろ。さっきも言った通り、お前達ではまず勝てん」

（流石に千冬さんでも舐めすぎじゃない？）

（イギリス代表候補であるこの私が甘く見られたものですわね・・・）

自分の実力を下に見られた事により2人のプライドが刺激される。才能だけで今の地位にまで来たわけではない。努力もしたし、同じくらい悔しい思いもして来たのだ。流石にそれらを見捨てたのだから我慢も出来ない。

「無視するな教師」

そんな3人の空気を見捨てて一真は呆れた視線を千冬へ向ける。

「敬語を使え馬鹿者」

「ふっ」

ビュンと風を切る竹刀を余裕で交わす。

「・・・」

持っていた竹刀で一真を叩こうとした千冬は空振りに終わった竹刀を見て少しだけ眉を顰める。

「ふん」

「よっ」

「ほう」

「おっと」

「これはどうだ？」

「あぶなっ」

「そら、詰みだ」

「まだまだ」

竹刀を二回、三回と振るう千冬に対し一真は危なげに避ける。だが体勢に無理が出てきた中で振るわれた一撃は受け止める他無かった。

「それで、何か用か、犀川？」

「オルコットのライフルと風の双天月牙について何も無いんですか？
あと、結構機体に負荷掛かってるんですが先生は本当に生身ですか？」

ギリギリと白刃取りのまま膠着する2人に周りは歓声を上げる。

「誰も怪我しなかったのなら問題あるまい」

「俺がカバーしましたから・・・ぬっ」

「男なら当然だ」

「いやいやいや、人間としてどうよ・・・つか、力負けし始めたんだが」

「ならグチグチ言うな馬鹿者」

「あいた」

競り合いに負けた一真は頭部を強かに殴られる。シールドを突破して突き抜けた衝撃による痛みに眩暈を起こしながら立ち上がり、数回頭を振る。

（シールドを抜くって・・・化物かよ）

「相変わらずですね、一真君」

[illegible]

そんなこんなで始まった模擬戦だったが、一真はそれを見る暇もなかった。なにより結果は分かり切っていた。

「ふむ、3分か。及第点だな」

「なに面白いように回避先読まれてんのよアンタ！」

「鈴さんこそ、バカスカと撃ち過ぎですわ」

「なんですってー?!」

「事実ですわ！」

「やめんか馬鹿者」

醜い唾み合いをする2人を出席簿で叩きながら場を纏める。

「このように、ここの教員は皆この程度の実力は保持している。各自、これからは敬意を持つように」

「絶対に足を止めるなよ、高槻さんなら——」

「そこまで凄いの？」

「話には聞いているが——」

「あと、絶対に——」

「それ本当？」

「だが噂では——」

「なにをコソコソしている貴様ら」

パン、パン、ゴン！

「「あたっ」」

「いって~~~~っ！」

出席簿と竹刀で叩かれた頭を押さえながら2人は立ち上がり、
人は痛みにもた打つ。
1

「つまらん我策をするな。当たって碎けろ」

「俺の頭が碎け——」「なんだ、碎かれないのか？——助けて
中将！暴力教員に殺される！」

「ふふ、楽しそうですね一真君」

「いや、命の危険が迫ってるんですが」

「馬鹿をやって授業の妨害をするな。

さて、お前達には新たに担当となるあ——「高槻、高槻秋葉よ。千冬」——高槻の相手をしてもらう」

千冬の言葉により集まる視線に対して綺麗な礼をする彼女に様々な思惑が巻き起こる。

「準備はいいか、2人共」

「はい」

「問題ありません教官」

ISを展開し終えた2人は飛翔。互いに違う高度を取りながら宙空に停止する。

「高槻さん」

「なんですか、一真君？」

「一撃だけ当たってください」

「犀川君?!」

「・・・」

「ボーデビツヒはともかく、デュノアには花を持たせてくれませんか？」

「しかし」

一応は授業。それも世の中の広さを教える模擬戦で手加減をするのはマズイのではと考えた秋葉は一度千冬の顔色を窺う。

「私は構わん。なにより瞬殺されては生徒への授業にならん」

「わかりました。なら彼女達の力を引き出すよう戦いましょう」

優しいな笑みを浮かべた高槻は一団から離れた位置でISを展開。地上で待機する。

秋葉のISは独特であった。二脚がメジャーなPACの中では珍しいタンクタイプのISに周りの生徒は固唾を飲む。教員の麻耶も物珍しい秋葉のISに視線をくぎ付けにする。

淡い紫色を基調に黄色と桃色のカラーリングをされたISは黒髪の高槻が展開させると着物のような気品を感じさせる。だが、見える範囲での武器は全てグレネードとミサイルのみ。気品からは程遠い凶悪な武装だ。

両者の準備を確認した千冬は声を張り上げる。

「始め！」

「今回は中尉たっての頼みだが、馴れ合うつもりはない」

「・・・僕だってお兄ちゃんが頭を下げなきゃ君と手を組むなんてありえないよ」

「ふん、それでいい」

開始開幕以前から険悪な空気を醸す2人だが、頭の中では何度も

シミュレーションが繰り返し行われていた。

一真から聞かされた話は少ない。

高槻は世界有数の実力者であること。

遠近中全てが彼女の攻撃範囲であること。

相手は飛べないということ。

そして、

絶対に勝てないということ。

冗談でもなく、誇張でもない雰囲気には2人は緊張していた。それを感じ取ったからこそ手を組むことを了承したのだ。

作戦などない。勝てないからだ。だが一歯報いるためにアドバイスは受けた。

（絶対に立ち止まらない）

（残存エネルギーを気にしない）

（（そして互いに同じタイミングで攻撃し続ける））

相手の準備が完了したことに2人の体が緊張する。

「始め！」

「「っ！」」

千冬の合図と共にラウラとシャルルは左右に飛ぶ。

「私が注意を払う。その隙に」

「僕がデカいのを入れる！」

「なら」

互いに旋回運動から攻撃に移る。

「行け！」

「言われなくても！」

レールガンを撃ちながら視界を悪くし、さらにワイヤブレードを牽制に使って行動範囲を狭める。シャルルもランダム飛行をしながらアサルトライフルを放ちながら距離を徐々に詰めていった。

「避けない？」

最初の場所から一派も動かない秋葉に眉根を寄せるシャルルにラウラの呆れた声で通信が入る。

「舐められているだけだ馬鹿者」

（・・・そういう風に言わなくても）

旋回運動を続けながらラウラは高槻の動きを牽制し、シャルルは少しずつ距離を詰めていく。

巻き上がる土煙に隠れた秋葉に対してラウラは好機と取る。それはシャルルも同様で、パイルバンカーの炸薬をセットする。

「今だ、行け！」

「うん！」

レールガンでさらに牽制しながらラウラは高槻に対する評価を改める。

（所詮、日本等こんなものか・・・呆氣ない。こんな弱小国に教官は相応しくない！少尉とてこんな上官よりも我らに付いた方がいいに決まっている！）

必死なシャルルと違い、ラウラには余裕があった。牽制役とは手を緩めず相手に行動権を与えぬようするだけ。トドメとは違う。さらにマグロ状態の秋葉の態度も相まって油断しきっていた。

「はあああ！」

シャルルは土煙が晴れてしまう前にダメージを与えなければいけない。特にキャタピラ部にだ。与えれば相手は動けなくなる。たとえ多少の被ダメージを受けてもそれだけは成功させなくては――――勝てない。

ここで一真と食い違いが発生した。彼は負けても一齒報いるやり方を教えたが、勝てる作戦は教えていない。つまり一齒報いた後は瞬殺される前提で話していたつもりが、押している現状に2人は勝ちに急いでしまう形となる。

「これで！」

土煙をかき分け、独特のフォルムをした影に突き進む。そして互いに視認出来る距離になって見たものは慌てた秋葉でも、焦った秋葉でもなく、優しく微笑む秋葉だった。

「ふふ」

戦いの中でも見惚れてしまう秋葉の笑みに目を見開き、次いで狙い違わずに照準を定めた散弾銃に思考が停止してしまう。

「それでは」

「っ?！」

「始めましょう」

（至近距離でそれは?!）

秋葉の言葉が終わると共に散弾銃の砲身が光る。反射的に頭と胸をシールドで保護するが、驚異的とも言えるその威力にシャルルはキリモミしながら十数m先まで吹き飛ぶ。

驚いたラウラは知りもしない戦力を頼ったことに公開しながら自ら打って出ようとするが、

「うち、仕損じた――」

「立ち止まるなんて、油断し過ぎですよ」

「ぐあー！」

未だ晴れ切らない土煙の中から三発のグレネードが風を切りながら着弾。彼女を吹き飛ばす。

「戦闘において、相手がデータ不明の敵機ならば最大の火力で叩かなければなりません。それを牽制程度で勝った気でいるのは感心しません」

優しく微笑みかけながら諭す口調に2人は苦虫を噛み潰したよう

に顔を歪める。

「クソ、やはり舐められていたか」

「なんて威力……反動で普通なら後ろに下がるはずじゃないの？」

「さあ、立ちなさい。まだ始まったばかりです」

「——っ、言われなくとも！」

「あ、待ってボーデビツヒさん！」

頭に血が上り、秋葉に向かい直線距離を飛行するラウラを止めるが彼女はそれを五月蠅いの一言で切り捨てた。シャルルもそれに頭が来たのか「勝手にしてよ！」といって独断行動に移る。

秋葉を射程に入れたラウラはワイヤーブレードを射出。さらに距離を詰めて手刀にビームを発動させて彼女の首を狙い手刀を放つ。

「はぁあっ！」

「狙いが甘いですね……それにブレードは避けられた後も考えた方が良いでしょう。CCCとは違うのですから」

「五月蠅い！」

「まったく……安易に近付くのと手痛い反撃を受けますよ」

「黙れっ！」

「まったく」

「つつ?！」

ワイヤーブレードを最小限に避け、手刀も体を逸らすことで回避した秋葉はラウラの脇腹に散弾銃をあてると迷わず引き金を引いた。

耳を塞がなければいけないほど轟音。シャルルの倍以上の距離を吹き飛んだラウラは脇腹を押さえながらレールガンを気丈に放つ。

（肋骨が折れたと思ったぞ！）

「連射が聞かない射撃武器を無闇に牽制に使わない。弾の無駄遣いです」

「っち、偉そうに」

「そして、貴方は牽制にそのアサルトライフルを使用なさい」

「きゃっ?！」

背後から近付いていたシャルルに振り向かず散弾銃を放つ。怯む彼女に追撃としてグレネードを当て、距離を離す。

ラウラとシャルル。互いにシールドエネルギーが300を切った。
対する秋葉は未だに4000を維持していた。

「そろそろ終わりにしましょうか」

秋葉との模擬戦が開始された時まで時間を戻す。

「さて、犀川。奴のISはわかるな？」

「多少は」

「なら説明してみせろ」

戦況から目を離さず頭の中からカタログを引き出す。自衛隊、研究所にいた際に叩き込んだ知識は未だにハッキリと頭にこびり付いているため口は滑らかに動き出した。

「有沢工業製PAC《水蛇^{ミズナ}》、高槻さんの機体はそのカスタム機です。

水蛇は本来水陸のみ適用したISで、高い積載性の代償に飛行能力を削除したISです。水陸のみを追及したため水陸での移動速度200kmオーバーという高い機動性があり、またその積載性能から高出力ジェネレータを搭載できます。

特徴として重量級の武装を同時使用してもICに負担をかけないこと。また出力は第二世代の中では追従を許さないスペックで、三世代でさえ現存の機体である甲龍も凌いでおりこれを覆した機体は未だにありません。

しかし、飛行出来ないという欠点や射角の範囲から使用する企業や政府は少なく、今では土木業務ばかりに使用されています」

「よし。次に、お前はこの模擬戦をどう見る」

「デュノアとボーデビツヒが瞬殺される。それ以外はありません」

躊躇いなく放たれた言葉に周りの生徒は面食らう。少しは顔見知りを鼻屑すると思いきや、冷めた態度と口調で言い切った。

「でも、ラウラって代表候補だぜ？それにシャルルも専用機持ちだし・・・流石に瞬殺はないんじゃないか？」

「代表候補と現役中將を同じにしてやるな。代表と候補生レベルで差があるんだぞ」

「でもたかが量産機、それも重機に落ちぶれたPACのカスタム機でそれはないでしょ」。

そりゃあ甲龍よりも高い出力ってのは凄いけど、近接戦闘さえなければ特に意味ないじゃない。2人とも基本的に中遠距離での戦闘しかしてないのよ」

「それに見たところ2人の優勢ですわ。あの方が強いといってもインファイトが出来ないのであれば持ち味は生かせんませんわ」

セシリアの言う通り、模擬戦は始終2人が押し続けている。今はラウラが牽制し、シャルルがパイルバンカーを命中させるため近づいている最中だ。誰が見ても優勢と見える状況だが、それを言えば先程のセシリア達の試合だって勝たなければおかしいはずである。

澄ました顔で戦況を眺めながら今日の夕飯について考え込む。結

果のわかる試合ほど意識は集中しないものだが、周りは珍しい試合に集中して見ている。この温度差がなんとも居づらいように感じてしまう。

「ほら、やっぱり2人はそんなに弱くないぜ」

「しつこい。結果は2人の負け、それで決まりだ。

それに、現日本代表候補である高槻さんに勝てると思ってるのか？」

「「「「はあっ？」」「」」」

「軍務があるから代表は辞退してるけど、本当ならあの人が日本代表なんだぞ。実際に現日本代表の方がわざわざ高槻さんと模擬選んで勝つ姿も見てるし、俺らとは次元が違うよ」

それを証明するように土煙に突っ込んだシャルルが轟音と共にアリーナの端にまで吹き飛ぶ。さらに土煙が晴れる前にラウラに対して放たれたグレネードが連続して爆発。誰もがその光景に目を点にする。土煙りの晴れたそこにはグレネードの白煙を払った高槻がいた。

「あの人、軍に入る前は貴女と代表争いしてたって聞きましたよ？」

「間違いない。私はあり——高槻と代表争いをしていた。

ちなみに、一真の話は私が保障してやる。私から見てもアイツは強い・・・私の次くらいに強いだろうな。特に射撃は世界レベルで見てもアイツの右に出る者はいない。私とて奴とは正面切ってやらない

いくらいだ」

立ち直ったラウラが秋葉へ突撃。上下左右から迫るワイヤーブレードはキャタピラを多少回転させるだけで避けられ、貫き手気味に放たれた手刀は脇腹に散弾銃を放つという反撃まで受ける始末。流れるような自然な動きに周りは異常よりも綺麗と思えてしまう。確かに次元の違う戦い方だ。映画のアクションシーンでもここまでは上手くない。

「秋葉さんを倒したかったらそれこそターミネータでも連れてこなきゃ」

「アイツがその程度でくたばる女か。奴を倒したいなら二個大隊が必要だ。それもガンダムが配備されるような軍隊がな」

「そしたらISも必要ないでしょうに」

「お前ならどんなガンダムができればアイツを倒せると思う？」

「そりゃあ………ターンXみたいなチート機体でしょう。あの人にかかったらNTも泣いて逃げ出しますよ」

「そういえば、昔レーダーの範囲外にもかかわらず居場所を察知されて遠距離精密射撃を受けたことがあったな。あれは肝を冷やした………なにせ一発受けたと思ったら一秒後には弾幕が襲いかかるのだからな」

「一回だけですが、俺もそれされました。正直トラウマ物ですね、

あれ」

「同情する」

一真のぼやくような一言に誰もが信じたくなかったが、逆にそうかもしれないと本能的に理解させられる。なにせ最高速度で動き続ける2人と戦いながらも、秋葉が外した弾は0。時速300kmを越える機体2体を相手に同時に射撃を行っているのだ。人外にもほどがある。

そして、十数秒後。無傷の秋葉が2人を相手に完封勝ちしたことで模擬戦は終了した。

2人の惨敗を確認した後は各自で実習訓練が始まった。今日からISに乗れるということもあり、生徒達は卸したてのスーツを見せ合いながら希望するグループリーダーの下へ向かう。

グループリーダー、今は専用機持ちがなることになっているため一真は自分の所にやってきた生徒を数えながら己の不遇を呪った。

「多いだろ」

「ねーねー、このISスーツどう思いますー？」

「犀川さんのISスーツ、また変わりましたね。似合いますよ」

「いやー、一夏君もいいけどやっぱり年上は魅力でしょう」

（ざっと見て、30近いな。なぜ俺の所に来たし？）

周りをチラリと確認すると一夏とシャルルも同じ状況らしく、逆

に鈴音やセシリア達のグループは閑古鳥が鳴きたがる少なさだ。例外として、ラウラの班がそれなりに揃いつつあることだが・・・生徒の目が色々と危ない。

「「「第一印象で決めました」」」

「えーと・・・」

「困ったなあ」

大人数に囲まれ、握手を求められて困る一夏とシャルル。どうやらその行為を告白と理解出来ないのか取った行動はなんとも味気ない仕切りだった。

「「「模擬戦を見てから決めました」」」

「馬鹿なこと言う前に散れ。」

そこからそこはオルコットの班に、そっちからそっちは風の班になれ。残りはボーデビツヒか俺で見る」

次々告白してくる生徒をあしらいながら一真はテキパキと班分けを済ませ、振り分けられたリヴァイブを受け取り、鎮座させる。

残った人数は18。少なくとも18という数だ。少なくとも18という数だ。

「それじゃあ順番にI Sの起動と歩行、それから着脱を始めて見ようか」

順番に並んだ生徒に指示を出して訓練を行う。付きっきりで一真が隣に付くため危険は少なく、周りに生徒をつかせても安全なため、1人の質問やミスが全体にフィードバックしやすく訓練は周りのグループよりも捗っていた。

『中尉』

訓練を終えた生徒の数が半数を請えた頃だろうか。突然ラウラからリンク越しに通信が入った。

『どうかしたか?』

『いや、そのな・・・ウチの隊の1人が泣きだしてしまったのだ。どうすればいいのだ?』

『なんで?』

『私にもわからん。注意していたら泣きだしてしまったのだ。このままでは訓練に支障が出てしまうが、私にはどうすればいいのか分からん。助けてくれ』

『・・・少し待ってろ』

現在見ている生徒の訓練を終えた一真は班に待つよう一言残してラウラの班に向かう。

一団の中から離れた位置にいたラウラの班に着く頃には何故か一夏達が彼の後ろに着いてきていた。

出迎えたラウラの顔は複雑で、一真の助けに喜びたくとも背後にいる一夏達による不快感によって喜ぶに喜べず、結局苦虫を噛み潰したような表情を取る。

ラウラの班は空気が重く、グズグズと鼻を鳴らす少女を励ますように周りに生徒が集まっていた。

『何があった？』

『訓練中に泣き出した。理由は私にも良くは分かん』

『彼女に何か言わなかったか？』

『言った。ISを直立状態で脱いだせいで後続の訓練生に障害を残したから「自分でなんとかしろ」、と』

『それからは？』

『周りが可哀想とかほざくので、「自分の無能や判断ミスは私には関係ない。自分達のミスは自分達で解決しろ」と言った』

『はぁ・・・』

『1人の責任は隊の責任だ。なのに何故か私が悪くなっているのだ』

『わかった。お前を1人にした俺が悪かったってのが分かった・・・』

軍人だ、軍人だと理解していたがまさか授業にまでそれを持ってくるとは考えなかった一真は軽い目眩を感じながら秋葉を呼びだす。

『高槻さん、お願いがあるんですが』

『どうしました？』

『ボーデビツヒのフォローに回ってくれませんか？コイツ、根っからの軍人過ぎて周りが着いていけないんですよ』

『そうですか、分かりました。今行きますね』

秋葉に補助の要請を出した一真は残る生徒達へのフォローをしようとして止まる。一夏達がフォローしていたからだ。

だが、おかしいことに周りの生徒は立ち直っておらず、泣いたまままだ。そして一夏達はキツイ眼差しでラウラを見つめる。見つめられたラウラは相手が一夏だとわかると嫌悪感をむき出しにしながら見下すように睨む。

（逃げるなら・・・いや、転校生に関わった時点でもう遅い）

転校生Ⅱトラブルという公式を呪言いながら、一真はとりあえず両者の間に立ちふさがる。せめてこれ以上場の空気を悪くしないためだ。

だが、この公式、後々に付け足す項目が増える事がある。

「お前も、同意見なのか」

「は？」

「見損なったぜ、一真」

「いや、話が見えないんだが」

「先輩、見損ないました」

「だから話が」

「貴方は紳士な片だと思っていましたのに」

「いや、あのさ」

「最っ低」

「」

「大丈夫か、中尉？」

転校生ⅡトラブルⅡ対立。一真の中で確かな公式が今産まれた。

その日の夜。高槻によって今までの訓練では物足りないと言われた一真はさらなる訓練メニューを組まれた為に自室でぐったりとしていた。まさか全てのトレーニングを1・5倍にされるとは誰が思う

か・・・

実は以前まではジャージの中に鉛を仕込んでデータ改竄をしていたのだが、高槻に触れられた際に露見し、没収。代わりに悪魔も契約内容を見直してくれそうなメニューを手渡された。

（トーナメントのパートナー、どうするかな）

予定では、一夏と組むことで天敵を排除するつもりだったが、現在大半の専用機持ちと敵対してしまった今ではそれも不可能。シャルルなら組んでくれそうだが、転校してまもない彼女を巻き込むのは気が引けた為に一真は頭を悩めてしまう。正直、こうなってしまうとラウラはおろか一般生徒を巻き込むのも気が引けてしまう。

「天敵は白式だけど、組むならやっぱりデュノアなんだよな。一夏も接待すれば強いんだが、エネルギー管理が雑だし・・・なにより絶対人の話聞かない上に突っ込むだろうな。しかも一夏と組めば碌でもないトラブルに巻き込まれるのは目に見えてる上、まるで予期したようにトラブルをパスしやがったからさあ大変」

『チームを組む必要があるのですか？』

「ルールだからな」

『私とマスターならば問題ありません』

「だが、楽は出来ないぞ」

『不確定要素を排除するなら最適解です』

自我が確立されつつあるH-1が誰かを拒絶するという感情を持ったことを嬉しく思う中、こうして友人を拒絶されてしまうと少し嫌な気になってしまう。

「なんか、おかしくないかお前？」

『システムは正常。機体も問題ありません』

「いや、おかしい。なんか刺がある」

『私に刺などありません。機体にも刺らしきパーツは存在しません』

「違えよ。」

お前、イライラしてるっていうか・・・なんか他の奴ら遠ざけようとしてないか？」

『不確定要素は排除するべきです』

「いや、だから・・・まあいいか。」

とりあえずお前の意見を聞かせてくれ。お前なら誰が一番組んだ際に相性がいい？」

『機体性能、パイロット能力、使用兵装においてはシャルル・デュノアとラウラ・ボーデビツヒが上位候補となります。』

機体性能では白式を始め、セシリア・オルコットのブルーティアー

ズ、凰鈴音の甲龍。

パイロット能力はラウラ・ボーデビツヒ、セシリア・オルコット。使用兵装ではシャルル・デュノアが群を貫いており、単一能力ならば白式が入ります』

「突破力なら一夏、凰。戦略性ならボーデビツヒ、デュノア、オルコット。総合だとデュノアとボーデビツヒが適当だな」

『・・・』

「うし、ボーデビツヒと組むか。ついでに訓練も見てもらうかな」

『・・・了解』

「不満か？」

『いえ、それが最適解というのは理解しています』

（H-1もやっと一人前に考えるようになってくれた・・・）

それ以降、会話をすることも無くなった一真はそのまま眠りにつく。

トーナメントまで残り二週間。

その次の放課後。

「しかし、本当に大丈夫なのか中尉？」

「公式のルールブックには代表候補同士のタッグは禁止としか書かれていない。そして俺は代表候補ではない・・・試す価値は十二分にあった」

「だが姑息じゃないか？」

「あらゆる裏を取って最小の被害で勝つのが俺のもつとうだ。それに、ボーデビツヒだって障害は少ないに越したことはないだろう？」

ここでのいう障害とは、一真とラウラの対立だ。知り合いだからやり辛いという考えは基本的に2人にはない。やるなら勝つか、落と

し所へ落とす。そこに知り合いも他人も関係ない。

また、障害とは手の内が分からない相手に対して消費する労力からでもある。なにせ一真は全力で戦闘した姿をまだ見せていない上に、武装として使用していない物がある。対してラウラは模擬戦で切り札以外は見せているため、アドバンテージは一真に傾いている。実力の差からやっとなら対等に立てたと思う。

出来る限り正体不明は相手にしない方がいい。

「確かにそうだが・・・」

「なら問題ないさ」

罪悪感に後ろ髪引かれるラウラを連れて一真はパートナー登録書の提出した帰り道を歩く。

最初、一真とラウラが組むと言われた教師は笑いながら取りつく島もなかった。だが彼が話し続ける内に激怒し、却下しようとした。それを舌先八寸で言い包め、さらにはルール of 穴を突いたことで黙らせた。プライドはないのか、と言われもしたが勝利に貪欲と言つて一蹴。今に至る。

「しかし、もしアレが通ればこれほど心強い物はないな。なにせあのサタンの弟子と組めるのだから」

「・・・頼むから高槻さんの前でそれは言うなよ。かなり気にして

るから」

「そうなのか？」

「ああ。」

以前、それを出汁に模擬戦挑んだ他国の代表候補がISを数分でスクラップにされたらしい。映像見たけど、弾幕をリアルで実演するぞ、あの人」

「恐ろしいな・・・」

「だからそれは禁句だ」

「了解だ、中尉」

誰もいない廊下を歩いていると階段から誰かが顔を出した。見慣れた顔の少女は手をヒラヒラと振りながら2人に近付いてくる。

「やつほー、かずー。源氏物語計画は順調かい？」

「やつほー、クソアマ。今晚晩飯食わせてやろうと考えたが、お前は呼ばなくていいよな？」

「さて、従順なる下僕である私が何か粗相しましたかな？
ところで今日のメニューは？」

「煎餅汁辺りでも食わせる予定だ」

「ゴチになります、先輩！」

「涎を拭け」

「おっと失礼」

「俺ので拭こうとするな！」

「おっと、かずーにオカズを提供する所だったぜ」

「やっべー、リアルに殴りたい」

いつも通りの会話をする2人を見ながらラウラは分からない単語に首を捻る。

「中尉、今日の夕食はオカズが増えるのか？」

「それは違うようラウラたん。今で言うオカズってのはあ——」

「おっと、体が滑ってハイキックが」

「へいへい、そんなキックじゃタイソンも当たってくれないぜ」

「踵落としへのキャンセル（チョイサー）」

「げふう」

少女の真上を通過する寸前に無理矢理落とした踵が彼女の鳩尾を蹴りぬく。これがしゃがんでいれば問題なかったが、彼女は上体を逸らして避けたためそのまま膝を折って倒れてしまう。すると自然とスカートの中身が見えてしまい、緑と白の縞々柄の下着が見えてしまう。

「汚い物見せるな」

「流石に美少女のパンツ見てそれはないんじゃないかな?!」

「ISスーツで見慣れてる」

「あれは下着じゃないからいいんですう！」

「縞パンだよ縞パン！男の子なら涎物の縞パン！」

「同じだろ。ピッチリタイツだし。」

あと、俺どっちかっていうと黒のレースをあしらった奴のがいいな。勿論大人の人が穿いたらだが」

「貴様、男のロマンとピッチリタイツを同じというか！」

「パンモロに何感じろってんだ（プヒー）」

「欲情」

「ごめん。色気より眠気なんだよ俺」

「永遠に寝かせるぞコラ」

「中尉。パンモロとはなんだ？」

「さっきまでのコイツのことだ。」

まったく。人前で下着を見せ付けるなんてとんだ変態だな」

「やば・・・ちょっとゾクゾクしてきた」

「病院行け、病院」

他愛ない会話しながら3人は寮へ帰る。

途中、何人かと会ったがラウラを見て離れていってしまう。なんとも複雑な心境である。トーナメントが終わったら少しずつ周りの距離を縮めるようにしなければ・・・

「そういや、かずーってまだパートナー決まってるよね？ね？」

「ん」

躊躇いがちに聞いてくる少女に対して一真は隣で携帯を弄るラウラの肩を抱く。それに彼女は表情を固め、少女のように小首を傾げるラウラを見つめる。

「・・・わんもあちゃー。」

「そういや、かずーってまだパートナー決まってるよね？ね？」

「んん」

「どうした、中尉？」

「・・・・・・・・おいこら一真」

「なんだよいきなり。怖いんだが」

いつも飄々とした態度から一変。眉間に皺を寄せ、ドスの聞いた声を出しながら近づく少女に対して一歩退く。

「まさか、まさかそこまで堕ちてるなんて思わなかった。

こんな美少女であるラウラたんを誑かすなんて！マジで源氏物語してるなんて見損なった！」

「真っ裸で寮から吊されなくなかったら今すぐその電波受信を止める」

「やば、それはそれで・・・・ああん」

「ボーデビッヒ少佐、変態を抹殺してもよろしいか？」

「ヘンタイ？中尉のことか？なぜ自分自身を抹殺する？」

「・・・」

「ぶっわっははは！」

小首を傾げながら自らの間違いに不安そうに眉根を寄せるラウラを怒るにも怒れず一真は痛む米神を抑えながら天井を仰ぐ。

「違うのか、中尉？」

「ぶは、ぶは、ぶははははは！」

「・・・」

「日本人はヘンタイなのではないのか？」

「ぶは、げほ、ぐぶお・・・だっははははは！」

「・・・笑い過ぎだ。っーか笑うなクソアマ」

「ヘン、ヘンタ、ぶっわっはははだははははははは！」

（ちくそう）

トーナメントの登録最終日から三日後の朝。IS学園の入り口に張られた学年別トーナメントの前には大勢の生徒が集まっている。

「ト、トーナメント表の発表日。俺は順風満帆に勝ち進むだろう未来に笑いながら会場に来たが・・・いったいどうなっている?！」

「うわぁ、なんていうか」

「流石、それしか言えないなこれは」

「なんというか、本当に流石ですわ」

「漢らしいっちゃ、漢よね」

「ちゃんと登録したのお兄ちゃん?」

各々が自分のブロックを確認し終えた中、一真だけがどこにも属

していない自らの名前に頭を抱えながら天を仰いでいる。

「流石は三組の名物男子！外さないぜ！つか、ざまあ」

「わはー。流石は我々の犀川さんですー」

「だ、大丈夫ですか・・・？」

「き、気付いたら俺がぼっちでトーナメント表に乗っていて、ラウは何故かうちの脇役少女Aとタッグを組んでいた・・・あ、頭がおかしくなりそうだ」

騒つく一団の中で一際騒ぐ一真を見兼ねた秋葉、千冬がやってくる。

「ブラコン教師の陰謀とか、どこぞの迷惑PTの勇者からのフラグとかそんなちゃんもんじゃないねえ。もっと恐ろしい物の片鱗を味わって————高槻さーん！どうなってんのこれえ？！」

「いい度胸だな犀川。貴様・・・余程私を舐めているようだな？」

「千冬姉ペロペロ」

「よし、首を出せ。一思いに叩き切ってやる（ビキビキ」

「それより！これはどういうことなの！」

「それは誰の真似でしょうか・・・？（ビキビキ）」

ビシッ指差されたトーナメント表を見た秋葉と千冬は特に異常もないトーナメント表に首を傾げる。

「何かおかしい所でも？」

「いや待て上官。よく見てください・・・何故、俺がぼっちなんですか？！」

「それは会議での決まりですから」

電光掲示板の脇。達筆な字で一真の名前が書いた紙が張っており、そこにはランダムで乱入とも書いてある。つまり、一真はトーナメントに対してランダム乱入するために一般生徒から省かれたのである。

「俺が全ブロックにランダムで乱入ってなんですか？！」

「先日の所属不明機の乱入に伴い、ランダムで乱入者が現われるようにしたのだ。会議での結果、その役は貴様が適任となりこうなった」

「なんで、なんでわざわざ俺なんですか？！」

「武装の多様性と突破力、さらにはイレギュラー性から貴様が適任

と周りが推薦し、多数決で可決されたからだ。聞いてないのか？」

「聞いてません。故に却下申請をします」

「言ってませんから。それから申請は却下です」

「（ノ）、瓜、（ゞ）」

「一真君、君には無差別にトーナメントに参加してもらいます。それに、貴方も少しは本気で周りの子達と向き合うべきです。いつまでも一歩引いていてはダメです」

「いやいやいや、それって最悪は——つぶねえ・・・」

秋葉の言葉に最悪のパターンを浮かべた一真だったが、寸での所で止めた。今の今まで、口にした事が現実起こってしまっているため口を閉ざす。

「なあ、無差別ってことはさ」

「どうしたのよ？」

「言うな！」

「もしかしたら一真って下手したら」

「あ、なんとなくわかりましたわ」

「・・・ああ、なるほどな」

「見るな！俺を憐れんだ目で見るな！」

「なんか、オチ見えてきたわね。

さあて、対策でも練ろうかしら」

「やめろ！やめてくれ！」

「どういうこと？」

「つまり、一真がランダムにトーナメントに乱入するってことはさ」

「ばっ、やめろ！それ以上は！」

「最悪、俺達全員と戦うかもしれないってことじゃないのか？」

一夏の建立したフラグに絶望した一真は両手についてこの世の辛さに呪咀を撒き散らす。

周りの生徒は憐れむような、恐れるような視線を彼に向ける。それがさらに彼を傷付け、引き金を引く切っ掛けとなった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よし、全力で専用機持ちを潰す」

「」「」「なんで?!」「」「」

「俺に迷惑をかける専用機持ち（一部を除く十篠ノ乃含む）を人目もはばからずに仕返しする機会！」

苦節2ヶ月・・・勝手な勘違いにより社会的に殺されそうになりながらも健気に頑張ってきたがもう我慢ならん！
というわけで八つ当たりさせてもらう覚悟しろ」

「「「ふざけんな！」「」」

「こっちの台詞だバカたれ。

これで専用機持ちをフルコンプしてみろ・・・一夏、お前の自信、プライドもズタズタになるくらい負かすからな」

「性格悪いわね、アンタ」

「三回も社会的に殺されそうになったんだ、性格が悪くならないわけがない。

あ、あとその原因がなに他人事みたいに言ってんだよ」

「しかし、幾ら出鱈目な貴方でも不可能という物ですわ」

「はっはっはっ、俺は神に愛された男だ。ならその神の力をお前達に向ければどうってことはない・・・疫病神の力、篤と味あわせてやる」

（・・・どうしよう、大変なことになっちゃった）

そんなわけで、一真は対専用機戦に備える準備を開始した。

「これはここでいいのか、中尉？」

「ああ。悪い、芯材取ってくれないか？」

「この箱か？」

「そうそう、それ」

「ここに置いておくぞ」

「ありがとう」

現在、ガレージ外部で一真はある秘策のための下準備を開始している。

所狭しと並べられ、重ねられた大小様々なアルミ板の切れ端。通り過ぎる者達は物珍し気に見物し、時折そんな見物人に目を瞋るよう指示しながら一真はアルミ板を溶接していく。

蒼白いアークの光を見つめながら一真は無くなった芯材を変えては溶接を繰り返す。十数分もすると一枚の巨大な板が出来上がり、ガレージの壁に立て掛けられた。

四方に4000もある巨大なアルミ板に誰もが口を開けてそれを見上げる。

「これは何に使うのさかずー？」

「トーナメント」

「これを見てくれ。どう思うー」

「凄く、おっきいです・・・」

「男である俺がいる前でそういうネタ止めてくれる？」

「女の子ですからー」

「なにそれこわい」

二枚目のアルミ板を制作する横で仲良し3人組とラウラが一息入れる。この4人、一真の計らいもあって仲は悪くない。学園内で数

少ないラウラの友人と言ってもいい。

「そうだ、ラウラさん・・・」

「なんだ？」

「クイックブーストのやり方、わかる・・・？」

（溶接楽しい）

「ああ、分かるがあまり勧めはせんな」

「でも、使えなきやトーナメントで勝てないんだ・・・」

「あれは使用前に溜めが出来る上に、PICに負荷をかける。なにより鍛えもしない貴様が使えば肉体へ要らぬ負荷をかけてしまう。悪い事は言わない。あれは使うな」

（溶接焼けした場所がヒリヒリしてきたなあ）

「そっか・・・」

「じゃあ、アサルトライフルの注意点を教えてくれませんか？」

「リヴァイブのアサルトライフルにはシングル、三点バースト、フルオートがある。素人はフルオートを最初に使いたがるが、アサルトライフルの弾数は30だ。フルオートで放てば数秒で弾切れを起こす。しかも暴れるアサルトライフルを素人が押さえきるのは無理がある。熟練者としてフルオートの大半は外す覚悟だ」

「そうなるかと当てたいときは三点バーストがいいんですか？」

（喉、渴いてきた）

「時と場合によるが、牽制なら三点バーストのが役立つ。シングルショットは無駄弾を出したくない場合に用いるのがいい」

「あ、狙撃のコツってあるんですか・・・？」

「狙撃は専門外だ。

しいて言うなら、両目は開けるべきだ」

4人組の話の華の無さに呆れながら一真は繋ぎ合わせたアルミ板を壁に立て掛けた。

日付を跨いだ翌日。

「ゆーげったばーにーんぐ♪」

「デカいな」

「大きいですねー」

「小さな家くらいあるね」

昨日、完成した巨大な箱に水を注ぎながら一真は歌っていた。

変に上手いからクレームを出すに出せない3人はその作業を遠巻きに見つめている。

「なあなあ、これのどこがトーナメント対策なのさー？」

水を出しっぱなしにした状態のまま、一真はノートパソコンを弄る。

パソコンと小さな機器に配線を繋ぎ、さらに展開したH・1に繋がれた彼はカチャカチャと何かの作業を始める。

「秘密ー秘密ー秘密のアッコちゃん」

「なんか腹立ってきたからやめてくんないかな、それ」

「へいへい」

作業を進めながら一真は複数展開するウィンドウとパソコンに視線を行き来させる。

「はい終わり」

「2人共ー！ かずーが無視するよー！」

「それがいいんじゃないんですかー？」

「楽しそうだね・・・」

「よし、ここに眼科を建てよう」

いつものように馬鹿をする3人に呆れながら一真は機器から取り外した指輪を嵌める。

「馬鹿やってないでアリーナに行くぞ」

「」「なんで？」「」

「お前らがIS訓練見てくれて言ったんだろうが」

様々なアクセサリをジャラジャラと鳴らしながら一真はアリーナへ向かう。

ここ数日で一真はかなりのアクセサリを付けるようになった。指輪に始まり、ピアスやネックレス、さらにはブレスレットやウォレットチェーンも付けているため学生服のままでは不良のように見える。

「かずーさ、アクセ付けすぎでね？」

「必要最低限だ、気にするな」

「全部で13も付けてるのにですかー？」

「・・・うざったい？」

「少し、付け過ぎです・・・先生達も流石に怒るよ・・・」

「ダメか。仕方ない」

少女達の意見に対しH・1を展開、収納用のスカートにアクセサリを乱暴に投げ入れて待機状態に戻す。

残ったアクセサリは指輪1つにピアスが2つ。それだけでこざつ

ぱりした。しかし、突然身綺麗になると体が気になる。

そんな彼がおかしいのか少女達はクスクスと笑いながら彼の後ろをついていく。

目的地である第4アリーナが見えてきた辺りだ。第2アリーナに人集りを見つけ、また向こうの人間も遠目に一真を見付けると走りよって来た。

「さ、犀川さん！助けてください！」

「は？」

「セシリアさんと鈴音ちゃんが大変なんです！」

「ちょ、待って」

「早く早く！」

見覚えがあるような少女に手を引かれ、アリーナに到着。一真が見たのはラウラによって一方的な私刑を受けているセシリアと鈴音の姿であった。

ワイヤーブレードによって首を絞められ、引き摺られ、振り回され、吊された2人を見た一真は急ぎラウラへ通信を入れる。

『何をしてるんですか、ボーデビツヒ少佐！』

『・・・何か用か、中尉？』

『何をしているんですかと聞いている！』

『軍人としての自覚が無いコイツらに厳しさを与えているだけだ。さらに、余りに力量を自覚していなかったようだから世界の広さを教えている』

いつもより固い声音だ。声から苛立ちを感じた一真は頭を冷やし、声音を柔らかくさせる。

『なんでまた？』

『コイツらは中尉を馬鹿にした挙句、軽んじる発言をした。実力がある者を乏しめ、自らの力を誇示する輩が私は大嫌いだ！』

『落ち着いてください。気持ちは有り難いが、俺が弱いのは事実。だが、だからと言って力で黙らせるのは貴女のやり方なのか？』

『私に指図するのか、中尉』

2人をワイヤーブレードで吊し上げながら、シールド越しに睨み付ける。

『指図じゃなく、問うてるんです。』

貴女が尊敬する織斑先生は気に入らない奴を力で押し付けろと教えたのか？』

『そんなわけあるか！』

『なら！なら、愛弟子であるお前がやっていることはなんだ！力で相手を黙らせてるじゃねえか！』

『だが！』

『別に……別に、軍の本質を教え込むのは悪いとは言わないさ。自覚が無いのと有るのじゃ大きく違うからな』

『……』

『確かに、俺達軍人は戦う事が仕事だ。戦争が起きれば殺し合いもするかもしれない……そして前線に間違いなく出されるだろうな。そうなれば隣にいる人間とも殺す、殺されるって関係になるだろうよ……』

お前が、2人に苛立ちを覚えるのも分かるがやり過ぎるな。頼む』

『……善処する』

声から固さが消え、代わりに拗ねたような声色になった。

溜め息を吐きながらベンチに腰掛けてジュースのプルタブを開けて半分程一気に飲み干す。サラっとした喉ごしでありながらくどい甘さに顔を歪め、飲む気が失せたジュースを隣人へ渡す。

「莓大福サワー？
またチャレンジな物チョイスしたねかずー」

「一口で胸焼けする液体でした・・・」

観客席には野次馬が集まり続ける。先生を呼びに行く者、何をすればいいのか分からずオロオロする物、必死に止めようと声を張る者、手近にいる実力者に仲裁を求める者、様々だ。

「どうした！貴様ら、それで代表候補を名乗るつもりか！それで軍人を名乗るつもりか！」

「くう・・・」

「っ、こんの・・・」

「ぬるま湯しか知らぬくせによく軍人でいられるな！よく中尉をバカに出来たな！」

セシリアと鈴音を殴り倒し、蹴り倒してはワイヤーブレードを使って無理矢理に立たせる。そしてまた叱責しながら殴り、蹴り続ける。絶対防御が発動しているのを見るに、どうやら2人共エネルギーは切れているらしい。

装甲が砕け、小さな擦り傷を作り続ける2人を見ながら一真はH1にハッキングさせた監視カメラの映像を確認する。

『弛んでいるな。』

ロック対象にされながらも武器の1つも向けないとは……戦場だつたらしい鴨だぞ』

『いきなりぶっ放しておいてその言い草……アンタ、頭おかしいんじゃないの?』

『弛んでいる貴様らに言われたくないな』

『これだから敗戦国は嫌ですわ。黙ってジャガイモでも掘っていればいいものを』

『確かに、ガンオイルよりはお似合いかもね』

『ふん。素人に負け、所属不明機に素人の手を借りねば拮抗できなかった弱者はよく吠えるな……軍人のくせによく平気でいられるものだな』

『なんですって……!』

『一夏はそんじょそこの素人じゃないわ。その証拠に、私達2人で無人機を撃破したわ』

『それも中尉の助言あつての勝利だ。そうでなければ敵を前に悠長に談笑していた貴様等が人的被害を出さないわけがない』

『アイツの助言がなくてもいけたわよ!』

『そうですわ。彼程度の助けがなくとも、私達だけで鎮圧出来ましたわ!』

『軍のカリキュラムをまともに受けたのかも怪しい貴様らが?もし、私が現場にいたなら中尉以外は邪魔、と判断したかな』

『私達が、アイツより弱いとでも?』

『事実だ。現に種馬を奪い合う貴様等に対し中尉は既に行動を見せているぞ』

『『・・・』』

『敵を調べもせず、無意味な訓練をするなどおろかしい。盛りが着いた獣とでもっと理にかなっている』

『おかしいわね。私には、好きなだけ殴ってくださいって聞こえたんだけど』

『あら、違いますわ。田舎者の私に世界を教えてください、そう仰ったのですわ』

『っは、古いだけ取り柄と数だけしか能が無い国は余程人材不足のようだな。同情するよ、まったく』

発端はラウラの攻撃だったが、それに対して挑発し始めたのは2人が先だが、冷やかに軍人としての姿勢を注意したラウラの言い方も問題だ。互いの喧嘩腰な態度も悪いと言える。

一概にどちらかを悪いと言えない現状に一真は呆れて戦闘の映像を見る気を無くした。

（喧嘩にしては無様だよなあ）

ボロボロの2人を踏み付けるラウラにそろそろ切り上げるように言
って立ち上がる。

「なにしてやがるラウラ！」

「・・・」

「今すぐやめろ！」

（巻き込まれない内に・・・）

帰ろうとした足を一夏の怒声が引き止める。

シールドに張り付き、ラウラを睨み付ける一夏。なんとも間が悪い。面倒に巻き込まれる前に逃げようと近くの出入口へ早足で向かう。

「なんで止めなかったんだよ一真！」

「・・・」

「なんで黙って見てたんだよ！なんで黙ってられたんだよ！」

「・・・」

だが、時は既に遅かったらしい。アリーナ中の視線が一真に集まり逃げるに逃げれなくなった状況に嘆きながら姿勢を正す。

「たかが喧嘩だ。いちいち騒ぎ立てる必要はないだろ」

「喧嘩、喧嘩だと？！」

見ろよ！ボロボロなんだぞ！」

「ああ、2人がかりで負けてるな」

「っな？！」

・・・なんでそれで黙って見てたんだよ」

「2人がかりで喧嘩をして負けてるから加勢する。だけど相手はボロボロデビッヒ1人。悪いが、こればかりは無理な相談だ」

「お前！」

詰め寄り、胸ぐらを掴み上げる一真を見ながら一真はまたか・・・、と内心で溜め息を吐く。

「他人の喧嘩に茶々を入れる程に俺は野暮じゃない。なにより、喧嘩を売った本人達が負けてるんだ・・・世話無いな」

「っ?!」

パ
シ
ン
ツ
ツ
!

と乾いた音がアリーナに響いた。

「喧嘩を売ったくせに、買ったくせに負けてるから加勢してもらうてのは・・・筋が通らねえよなあ」

一夏の拳と顔を見ながら始めての暴力に酷く傷つく。

「たとえば、それがダチや親兄弟、恩師でも筋は通すべきだ。なににより、軍人である俺達は規律や礼節を守らないといけない」

「話を逸らすな！」

「はっきり言って、俺は軍人になる奴の気が知れないよ。」

そして軍にいながらこの学園に好き好んで来た奴の気も分からん」

「なにが、言いたい！」

掴んだ拳を引きもせず、逆に力ばかり込める一夏に苛立つ。初めての暴力により荒んだ心が次第に強い怒りを滲ませてきたのを一真正は自覚する。

「将来、殺し合う関係になるかもしれない友人を前に、平気な顔が出来る奴がわからないっていつてんだよ」

「「「「っ?！」」」」

「いいか！今の世のなか、戦争や紛争が起きた際にまず戦うのは俺達軍人だ！」

軍人が軍人殺してもおかしくないように、俺やボーデビツヒが殺し殺されてもおかしくない！軍人を名乗ってればいつか殺されるか、死ぬだけだ！それが当然だ！

今の世の中はそれだけ不安定なんだよ！戦場や殺し合いの場でこんなつもりは、なんて考えは無駄なんだよ！」

「なっ・・・?!」

「まさか人命第一、なんて言葉が戦時中に役立つなんて考えてないだろうな？」

いいこと教えてやる……国や企業にとって、ISに勝る資本はない。ISとパイロット、優先されるのはISだ。

目的も、覚悟も、意志も……何もかも中途半端な奴が軍人を名乗るなべきじゃない」

静かな声に周りの人間が身を竦ませた。一真の雰囲気のせいだ。怒鳴るような明確な怒りではなく、静かで燦するような怒りは本能的な恐怖を刺激する。

一夏も雰囲気吞まれてただ彼を見上げるしか出来なかった。

「いいか、一夏。テメエが考えてるほど世の中は単純じゃない……テメエの勝手な考えを俺に押し付けるな……迷惑だ」

苛立ちを隠しもしない言葉を聞きながら、一夏は一真の背を見つめ続けるだけしか出来なかった。

あれから数時間後。

周りが気付いたときにはラウラもいなくなっており、2人はすぐに医務室に運ばれた。大した怪我もなく、小さな絆創膏が顔に貼ったまま1日を医務室のベッドで過ごすことを医者に言い付けられた2人は大人しく従う事にした。

一真の話が堪えたのだろう。兩人とも浮かない顔で、心配で見舞いに来た一夏をすぐに帰したほどだ。

（・・・私が軍人になった理由は）

（アタシが軍人になった理由か・・・）

思い返せば、自分達は流れに流れた結果、軍人になった。別に特別な理由はなく、ただ強くなるために、ただ何となく悪い待遇じゃなかったから軍人になっていた。

戦争なんて意識したことはなかった。現実味が無いし、関係ない世界だと高をくくっていた。だってそうだろう。世界は、周りはこんなに平和なのだから……

だけど、理解は出来た。ISは兵器だ。それも一騎当千の兵器。

世界に数の限りがあるISが争いの種にならないわけがない。実際に一度日本は侵攻される手前まで世界に迫り込まれたことがある。そしてIS学園がその傷痕だ。

IS学園の維持費というのは小さな国の国家予算に匹敵するという噂がメジャーになるほど金が掛かる。しかも維持費の大半は日本のみで賄われている。そしてその資金は、国民の税金だ。だというのは技術は無料で公開しろ、だがこちらの技術は盗むな。

これで遺恨が出来ないわけがない。今でこそ運営委員会や一部の企業が援助しているが、大国の大半は大声だけしか上げずに資金をビタ一文さえ出し渋っている始末だ。正直日本の不満は積もるばかりである。

パワーバランスが整っていないから大規模な争いはないが、整ってしまえばボタン戦争よりも血が流れてしまう可能性が示唆される昨今。個人で挙げる戦果が昔と大分違う。

そんなとき、前線に立たされるのは代表並び代表候補だ。数少ないISを量産機に搭せるのではなく、一騎当千の兵器に搭せるのなら当然。そうなるとパイロットも自然と代表候補というエリートになる。そうなれば、こうして隣で寝ている友人とも殺し合わねばならない。

（・・・軍人、ですか）

（難しいわね・・・）

そして、2人は考え及ばなかったことがある。

既に戦争が始まっているという事実である。

「初めてーのーチュー、君とチュウーウーウー！」

「荒れてるね、一真君」

「アイルビーイ、フォーマイラブ！」

「まあ、徹夜確定だからね」

アリーナでのいざござから数時間後。ガレージにてブルーティアーズと甲龍の応急修理が行われていた。

一真としては無関係と言って断ってもいいような作業だ。故に最初は反発していたが、教師陣（秋葉中心）からの説得に負けてしまったが故に修理の手伝いをしている。

専用機にも予備パーツくらいはある。それでも打金やリヴァイブのように入る数も消費する数も未定になるとどうしても修理出来る限界が早く来てしまう。

「主任！ブルーティアーズの右腕の関節駆動部パーツが足りません！到着は早くても再来週末だそうです！」

「甲龍、浮遊部位のシステムにエラー！受信機系統が圧損してますよ！っああ、基盤が割れてる？！」

「あー、ならそこは無視して早めに予備パーツを組み上げて！システム面はバックアップでカバー、アンテナは打ち金から取ってきなさい！基盤も！」

「せかいいで、いちーばんお姫様ー（ガチャガチャ）」

（なんで子供がここにいんのよ！邪魔くさい！）

慌しく走り回る整備班から離れた位置でスクラップを弄り回す一真。猫の手も借りたい状況時、主任は苛立ちながら睨むしか出来なかった。

彼が来てから数時間。スクラップ置場でずっとゴミ漁りをしている。邪魔はしていないが、苛立ってしまうと無性に癪に触ってしまう。

「よいしょ、と（カチャカチャ）」

「なにしてるの貴方！」

（えーと、これがあーだから・・・これでいいや）

砕け、ひしゃげる右腕部の装甲無理矢理剥がした一真は腕部の回路を力付くで剥がして煤けた基盤を差し込んだ。

本格的に邪魔になってきたと感じてしまう行為を始める一真を摘み出そうと腕を捲りする主任だったが、突然周りの騒ぎが大きくなる。それも人だけでなく計器までもが嬉しい大声を上げる。

「しゅ、主任！右腕部が生き返りました！ノイズが酷いですが・・・明日の朝までに仕上がりそうですよ！」

「ええ?!」

「甲龍の浮遊部位、出力が不安定ですが生き返りました！OSとのレベル合わせが必要ですが、応急措置としては十分過ぎるぜえ！」

「嘘お?!」

「酒を飲ーめ、酒を飲ーめ（ジジジッ）」

周りの喧騒を無視する一真は砕けたブルーティアーズの装甲を集めて特殊溶炉で溶かし、型に流し込む。主任は次は何を始めたのかと視線を向ければ今は工芸レベルにまで落ち込んだ鑄造を行っている最中である。

型に溶融した金属を流し終えた一真は次に甲龍の腕部を砂を敷き詰めた箱にハンマーを使い埋め込み、外した箱に歪な打ち金の腕部を嵌め込んで隙間に金属を流し込む。

周りの整備班は珍しい鑄造を見ようと集まり、作業が一時中断してしまう。研究者気質な人間が多いのか鑄造に関してあれやこれやと主任も混ざり議論を交わす。

それを余所に出来上がった3つの型枠を背にして一真はポケットから取り出したUSBをパソコンに取り付け、携帯をさらに繋ぎ合わせる。

無数のウィンドウが立ち上がり、消えていく。数分後には全ての肯定を終えたウィンドウが大変よくできました♪という可愛らしいメッセージを点滅させた。

取り出したUSBはブルーティーズに差し込まれ、OSの書き換え画面が開かれる。そして十数秒で書き換えられたOSを確認した一真は同じ手順を甲龍にも行う。

目の前で平然とハッキングする少年に周りは啞然とした。通常ならば犯罪行為のソレだが、作業を短縮してくれた反面誰も彼を咎めない。逆にOSの一部を盗み見て参考にまでしている。

その夜、彼が行ったのは両機に代替する急造の腕部とそれに関するOSの書き換えのみ。腕部の取付けは後日整備班で作業することとなり、またOSの書き替えは主任自ら行ったと報告することになる。

短時間で大破したISをOSの書き換えも含めて成した主任を大勢の人間が賛美したが、彼女は他人の功績で得た結果に罪悪感を積もらせることとなった。そして後日、打ち上げと称して一真を労ったのはここでは話さないでしょう。

事件その10

『俺は神に愛されている……故にさあ大変』

(後書き)

一夏

「.....」

箒

「.....」

セシリア

「.....」

ラウラ

「もぐもぐもぐ」

秋葉

「ラウラちゃん。このお煎餅も食べる？」

ラウラ

「頂こう（モグモグ）」

秋葉

「はいはい」

鈴音

（何故か場違いな筈なのに空気を読まなきゃいけないような気がするわ）

シャルル

（なんか親子みたいだね）

ラウラ

「そうだ。楽屋に寄る際に少尉からこれを渡されたぞ」

秋葉

「あら、水羊羹ですか」

ラウラ

「水洋館？何かの例えか？すまないが、日本語はまだ把握仕切っていないのだ」

秋葉

「水羊羹という名前のお菓子です。

ちょうど人数分ありますし、お茶請けにしちゃいましょう。どうぞ、粗茶ですが・・・」

一同

「どうも・・・」

主人公&ヒロインズ お茶会中・・・

置き手紙

「物語でさえハブられたので旅に出ます。探してください」

ラウラ

「参ったな。手紙を見る前に小尉を見つけてしまった」

一夏

「無視でいいんじゃないか？」

箒

「ああ。探すだけ無駄だ」

ラウラ

「むう……」

ん？手紙に続きがあるぞ？」

置き手紙

「探さないとやった一夏と箒へ……」

本編で覚えてろ。ギャクキャラにしてやる」

一夏&箒

「」

鈴音

（良かった）

セシリア

（口は災いの元ですわね）

ラウラ

「小尉は悩みがあるのか……っく、気付いてやれなかった」

秋葉

「大丈夫。次に会ったときに聞いてあげましょう」

セシリア

「犀川さんの話はそれで終わりにしましょう。」

では、何から話しましょうか？」

鈴音

「そうね・・・今回の疑問点にポイントを当てましょう。まず、作中での代表候補について焦点を当てるわ」

一夏

「代表候補っていや、一真って代表候補じゃないみたいに話が進んでたよな。専用機持ちが代表候補じゃないのか？」

箒

「ああ。普通はそれで良いはずなんだが、私も詳しくは分からないんだが」

秋葉

「なら説明しましょうか？」

鈴音

「そうね。私らが説明するよりは政府に近い人の方が詳しく説明出来るからお願いするわ」

セシリア

「なら私達は身近な事で補完すればいいですわね」

秋葉

「では、まず国家代表候補について説明をします。

国家代表IS操縦者、その候補生がいわゆる代表候補です。

実戦データの取得や操縦技術の向上を目的として国から専用機が与えられ、IS学園には20数名在籍していますね。うち専用機もちは10人で1年8人、2年2人、3年1人となります。

ISを扱うに当たって本国であらゆる訓練を積んできていて、その能力は旧世紀の一軍隊にも匹敵します。もちろん代表争いをする人だけです。

ちなみに単純な格闘能力だけなら、一般男性以上、軍人であっても対等な条件であれば限りなく互角に渡り合える方もいますが今のところ一真君とラウラちゃんしかいませんね」

一夏

「高槻さんは違うんですか？」

秋葉

「私の場合、立場上互角じゃなくても倒せるよう鍛えてますので。自動小銃程度なら問題ありませんわ」

ラウラ

「おお！」

シャルル

（それは・・・）

鈴音

（人を辞めているのでは・・・）

セシリア

「えー捕捉しますわ。

国家代表および候補生は、国家公認アイドルという立場にもあり、モデル、タレントといった仕事も兼任しています。国によっては俳優業などもする場合がありますわ」

一夏

「もしかして候補生の選抜基準に容姿も含まれてたりするのか？」

秋葉

「偶然ですわ。もしくは仕様、でしょう」

シャルル

「いや、そんなまさか・・・」

一夏

「でもさ、容姿も含まれるなら説得力はあるよな。みんな凄く可愛いし」

箒

「か、可愛い?!／／／」

シャルル

「え、えと・・・えへへ／／／」

一夏

「俺から見てもみんな綺麗だもんな。うん、やっぱり容姿も含まれてるんじゃないかな？」

鈴音

「ま、まあ当たり前よね！（テレテレ）」

セシリア

「まあ、イギリス代表候補ですから当たり前ですわね！（テレテレ）」

秋葉

「あらあら、若いですね」

ラウラ

「なぜ奴らは顔を赤くしているのだ？」

秋葉

「ふふ、貴女もいつかわかるわ。」

そういえば、一真君が貴女のことを誉めていたわよ。可愛い妹分だ
って」

ラウラ

「そうなのか？」

秋葉

「ええ、兄弟嫌いな彼が誉めるなんて相当気に入ってる証拠よ」

ラウラ

「兄弟、か・・・不思議と悪くないな（コクコク）」

秋葉

「それは嬉しいっていうのよ（ナデナデ）」

ラウラ

「これも嬉しい、という感情なのか（へえー）」

一夏

「それで、一真が代表候補じゃない理由ってなんですか？」

鈴音

（流石主人公）

箒

（あの空気を無視するとは）

シャルル

（流石主人公だよ一夏）

セシリア

（ただのKYですわ）

一夏

（なぜか心が痛い）

秋葉

「結論から言うと、一真君は代表になれないからです。代表にならない、ならない人間が候補生にならないように一真君は代表にならないから代表候補ではないのです。

理由として、彼は世界で唯一のH・1適性者です。自立思考可能なAIを搭載したISを専用機とする代表候補生が世に出てしまえば各国が彼を狙い動き出します。それこそ手段に関係なく。自衛隊幹部はH・1から出て来る利益を守るため彼を代表候補生にしなかったんです」

シャルル

「お兄ちゃんって大変な境遇の中にいるんだね」

秋葉

「ですので厳密に言えば箒ちゃん、シャルルちゃんも代表候補生ではありません」

箒&シャルル

『え?』

秋葉

「当たり前です。一夏君は国から専用機を受け取っていますが、シヤルルちゃんも箒ちゃんも国でなく企業や個人からISを貸与されてるんです。代表になる権利はありますが、イコール代表候補生ではないので2人は代表候補生じゃありません」

一夏

(そうなのか?)

鈴音

(いや、私も始めて知ったわ)

セシリア

(大抵の方は代表候補生になりますから・・・例外もいるんですね)

ラウラ

(ミズヨウカン、まだ食べないな・・・)

置き手紙

「水羊羹のお代わりなら冷蔵庫にあるからどうぞ」

ラウラ

(パーフェクトだ少尉!)

主人公&ヒロインズ 談笑中・・・

鈴音

「さて、次行くわよ」

一夏

「部屋で死んでたのにラウラたんがルームメイトになりませんでした。どうすれば来ますか？」

一同

「・・・・・・・・（ツメタイム）」

一夏

「いや、待て！俺はただ読者の声を代弁しただけでな！」

ラウラ

「なんだ？一夏は私と同室になりたいのか？」

箒

「やめておけ。何をされるか分かったものではない」

セシリア

「見損ないましたわ、一夏さん」

鈴音

「最低！」

シャルル

「一夏、僕じゃ満足出来ないの………？」

一夏

「ちが、違うんだみんな！」

秋葉

「織斑さん」

一夏

「た、高槻さんからもなんとか言ってください！」

秋葉

「精神病院に行けば会えますよ。ついでに永久に退院しなければ一緒に居続けられます」

一夏

「違うんだあああああああああッッ！」

主人公&ヒロインズ 身内裁判中・・・

一夏

「違うんだ、違うんだよ・・・（シクシク）」

箒

「あそこにいる萌豚は放っておいて」

一夏

「萌豚?! (ガーン)」

セシリア

「喋らないでください。空気が汚れますわ」

一夏

「ひ、酷い・・・」

鈴音

「死ねばいいのに」

一夏

「一真・・・・・・・・脚本家の悪意が見えるようだよ」

秋葉

「まあまあ、織斑さんだってわざとじゃないはずですから許してあげましょう」

一同

『高槻さんがそう言うなら・・・』

ラウラ

「ウマウマ（モチヤモチヤ）」

一夏

「ありがとうございます。」

あ、質問あるんですが・・・」

秋葉

「先程のような質問なら跡形もなく吹き飛ばしますからね♪」

一夏

「（笑顔が恐過ぎる！）えっと、前話で一真が本屋の人にHVM向けてたんですけど・・・国際規約で指定区域以外でのIS展開は原則禁止されていませんでしたか？」

箒

「・・・・・・・・・・そういえば」

セシリア

「確かに、言われてみればそうですね」

ラウラ

「食べないなら貰っていいか？（キラキラ）」

シャルル

「い、いいよ・・・」

秋葉

「流石自称勉強家（笑）ですね。いい着眼点です」

一夏

（悪意が、悪意が見える・・・）

秋葉

「確かに、ISを指定区域外で展開すれば国際問題になりかねません。それがIS学園生徒ならば日本の責任問題ですが……一真君は良くも悪くも特殊ですから大丈夫なんですよ。まず、一真君のHVMはISを展開しなくとも取出しが可能なんです」

セシリア

「待ってください！そんなこと不可能ではないんですか？！」

鈴音

「そうよ！ISの武装を取り出すなら自然とISを展開しなきゃいけないはずよ！」

秋葉

「だから特殊なんです。

ナインボールの武装は基本的に換えられません。今の武装とて後付けなんですよ。

ですが、後付武装というわけでもありません。彼の使う武装の大半はISと関係なく取出しが可能なんです」

シャルル

「じゃ、じゃあお兄ちゃんはどこに武装をしまってるんですか？」

秋葉

「一真君は武装をグループ分けした上で複数に量子化して持ち歩いてるんです。ちょうど今の話でも巨大な箱を指輪に量子化していますよ」

一夏

「で、でもコアの技術がまだ全部解明されていないから無理なんじ

やないんですか？」

秋葉

「ええ、確かにコアは未だにブラックボックスですがあくまでコアだけです。周りのシステムは解明されていますよ。」

それに、ISが未解明のままではISのPAC開発はおろか世界はISに注目などしませんし普及もしません」

箒

「ですが、それを差し引いても無理がありませんか？」

量子化したISの付属武装ならまだしも、後付武装を呼び出すためにはISの展開は必須になるはずでは」

秋葉

「確かに、ISの武装を呼び出すためにはISを介して呼び出すしか方法はありませんが……ナインボールを呼び出すのはH-1です。後付武装としてH-1が命令を出せば問題なく直接展開は可能なんです」

主人公＆ヒロインズ 休憩中・・・

セシリア

「そういえば犀川さんにIS適性はあるんですか？」

一夏

「ISを使うならあるだろ」

ラウラ

「だが、ナインボールにはH・1という明確な意志があるのだ。そうなると既存の法則は少尉には当て嵌まるまい。例とするなら、少尉のサポートにH・1がつくなら稼働時間＝実力という法則は崩れてしまう」

鈴音

「そっか……確かにそうよね。なにせIS自体が動かし方教えてくれるんだから。
でもさ、そうになると二次移行ってどうなるのよ？」

秋葉

「ナインボールに形態移行というシステムはありませんよ。ナインボールは完成した機体ですので、形態移行する必要性がないんです。ちなみに一真君のIS適性値は公式でB、実際値はSですね」

一同

『え、えええ、Sウツツ?!』

鈴音

「な、なんでそんな?! Sっていったらブリュンヒルデ、千冬さんと同じクラスじゃない!」

セシリア

「そ、そうです! それに、H・1だって犀川さんは特別な力はないと言ってたじゃないですか!」

一夏

「アイツ、凄い奴なんだな」

箒

「しかし、ならば何故先輩はセシリア達に遅れを取ったのだ？」

秋葉

「IS適性値が高いから強い、というのが一般論ですが一真君の場合は少し色合いが違います。彼はISを手足のように使えることから評価された結果ですね。勿論、H・1の補正込みという条件付き

ですが」

ラウラ

「どういう事だ？ I Sが自在に操れるなど何を評価する必要がある？
」

秋葉

「彼ね、戦闘はからっきしなんだけど、日常生活では異様なくらい I Sを使いこなしているのよ」

シャルル

「うーん、よく分からないや」

秋葉

「なら、貴方達は I Sを装着したまま部屋の掃除や料理、洗濯、読書やゲームが出来ますか？」

セシリア

「それは・・・まあ、それなりなら」

鈴音

「試した事ないけど」

秋葉

「普段通りに、物を握り潰すことも破くこともなく？」

一同

『・・・・・・・・』

秋葉

「彼は一時期ナインボールを装着したまま日常生活を過ごしたわ。結果、ISの手先は勿論、足の裏の感覚や装甲越しの感覚が生身と同じくらいあるの。飛行はH・1のサポートがないとまだダメらしいけどね」

主人公&ヒロインズ お喋り中・・・

ラウラ

「ふと思ったんだが、I S学園には整備科という専攻学科があるのに何故本業の整備士がいるのだ？」

セシリア

「そういえばそうですわね」

秋葉

「専用機の整備のためよ。」

確かにI S学園には整備科が存在しますが、彼女達とて整備技術を学んで1、2年。拙い彼女達に専用機は荷が勝ち過ぎますから専門家が専用機を整備するんです。他は中破以上の機体を応急修理するのも基本的に彼らが担っていますね。

補足として、I S学園には年に数回他校からI S整備を専攻する学生達が実習で数週間滞在しますね。男子と関わりが少ない方はこれを機に仲良くなつては如何です？」

一夏

「へー、そういうのもあるんだな」

秋葉

「ちなみに、研究系や開発系の生徒もやってきますが滞在期間は精々3日ほどになります。これは実物を弄るか弄らないかで決まりますね。」

大学生や社会人も来ますが、その年代の方は世界各地に研修に行きますから数はグッと少ないの。ちなみに研修中に問題を起こすと即退学が決まりらしいわ」

箒

「意外に厳しいのだな」

秋葉

「喧嘩やトラブルなら勿論内容によっては黙認されるわよ。ただ、ナンパとかは問答無用ね。下手をすればその学校自体が永久に立ち入り禁止を受けてしまいますから。一真君が説明しなかったかしら？」

鈴音

「たしか整備士になればIS適性者と恋人になれるかもってアレ？」

秋葉

「そう、それ。」

事実恋仲になる学生もいるけど、そういった子達は健全なお付き合いだったから。一真君が言うには大抵メールから始まったらしいわよ」

シャルル

「遠距離恋愛って奴かあ」

秋葉

「ま、皆が皆誠実とはいかないけどね」

ラウラ

「少なくとも、一般人が代表候補に適うわけもあるまい」

秋葉

「あら、鋭いのね。」

中には強引過ぎて足腰立たなくなるまでされた子もいるらしいわ」

主人公&ヒロインズ 噂話中・・・

シャルル
「そういえば、お兄ちゃんって整備用義肢マニピュレータ使わないけど理由あるんですか？」

一夏

「まにゅぴゅれーたー？」

ラウラ

「ISの整備に使用する複数の浮遊アームだ。アームそれぞれに様々な昨日があり、整備士はこれを手足のように使ってやっと半人前になる」

鈴音

「ちなみに、一人前になりたきゃ自分用の整備用義肢を組まなきゃいけないらしいわよ」

一夏

「頭が痛くなりそうだ・・・」

秋葉

「まあ、一般的な整備士は大抵簡単なカスタムで誤魔化するのが様式美になってるみたいよ」

ラウラ

「たしか少尉は整備士になるつもりだったらしいが、やはり自らの整備用義肢を構想しているのか？」

秋葉

「ええ、精密さと切り替え速度を重視した整備用義肢を作りたかったらしいですよ。楽しそうに話す彼、可愛かったですよ」

鈴音

「一真が・・・」

セシリア

「か、可愛い・・・」

箒

「だと・・・・・・・・」

一夏

「ないわー。いや、ないわー」

シャルル

（酷いね、みんな）

ラウラ

（可愛いと思うぞ、少尉は。

あれだろ、少尉は尽くす男という奴なのだろう？クラリツサがああいう男がいいと言っていたぞ？）

シャルル

（間違ってる。間違ってる・・・・・・・・お兄ちゃんは尽くすんじゃない世話焼きなだけだよ）

秋葉

「一真君の良さは器が際限なく広い事ですよ。まあ、逆にどこまでも器が小さいのが可愛いんですけどね」

セシリア

（ああ、間違いなく次も犀川さんは来ませんわね）

シャルル

（なんで？）

セシリア

（気付きませんでしたか？あの方、自分に不利な事があると来ませんのよ）

ラウラ

（敵前逃亡とは・・・情けないぞ少尉！）

シャルル

（でもなんだか可愛いね♪）

秋葉

（あらあら、また一真君が来辛い雰囲気になりましたわね。愛されてますね♪）

今回の後書きはここまです・・・

事件その11 「この気持ち、まさしく愛だっっっ！を思い出したからさあ大奔

この小説は可愛い女の子、ショートカットな女の子と黒髪ストレートの作り上げるムドオンカレーに対し何も言わず一口食う漢気と、ムーンウォークで飯屋に入れるだけの軽やかさを必要とするSSです。

ムドオンカレーを食べられず、またムーンウォークで飯屋にエレガント再入店出来ない方は絵の具の入った御握りかプロテイン丼を用意して一気に？っ込みながら川の主を釣りに行ってください。

事件その11 「この気持ち、まさしく愛だっっっ！を思い出したからさあ大奔

個人別トーナメント当日。

アリーナに大勢の人間とVIPが押し寄せる中、一真は1人、暗い地下で極秘に渡されたトーナメント表を確認していた。確認して、落ち込んでいた。

（・・・フルコンプです。本当にありがとうございました）

一真はランダムに決められたブロックの、さらにランダムに配置された組を親の仇のように睨む。

一回戦での対戦相手は三組。そのどれもが一般生徒だが、2回戦からは専用機持ちと確実に当たってしまう割り当てに策意を感じてしまう。

今回のトーナメントは5戦勝ち抜けは決勝だ。つまり、全試合が6戦だとすると1回戦は全40試合。2回戦がシード組含め全20試合となる。

専用機持ちは一真を抜かして5人。そうなると確率は約 $1/8$ 、 $1/4$ 、 $1/2$ 、 $2/3$ となる。全員と当たった状態でトーナメントを終える確率は軽く万を超えそうだが、それを一真は引き当てた。

（お腹、痛い）

ランダムな乱入ということで一真は特別権利として決勝までシード権がある。つまり専用機持ちとは確実に戦わなければいけない。また避ける道も無ければ、逃げ道もない。

一真は回戦に1回から2回の参戦。全体勝率が8割ならば決勝に問題なく進出する事が出来る。専用機持ちと一般生徒の比率を考えればこれは確定事項だ。

だが、一真としてはあまり嬉しい事ではない。能力を隠さなければならぬからラウラと組んだのに、無理矢理力を誇示するよう仕向けられたと言える。

仕方ない。そう割り切るしかないが、あまり喜ばしい状況ではない。

このまま落ち込んでいられない一真はとりあえず特別ルールを確認していく。

まず、一真の乱入タイミングは教師から出される。

乱入された側は一真を相手にしながら対戦者を倒さなければいけない。

一真はシールドエネルギーを半分、専用機持ち相手ならば3割まで削れば撤退する。それまでは無差別に攻撃してくる。

一真によってシールドエネルギーを0、並びにパートナーも負けてしまった場合はその場で対戦相手の勝利となる。

ただし、片方が負けても一真は数分間戦闘を続行。その際に負けた場合、両者共に敗退となる。

（・・・恨まれる。絶対に恨まれる）

片方が負けるまで耐えるなど許さないというルールの発案者を恨みながら一真は静かに誰もいない地下道を歩くのだった。

トーナメント一回戦。

特に問題なく一回戦を終えた一真は荒い息を整えながら差し入れのスポーツドリンクを胃に流し込んでいる。

2時間で三度の戦闘。リミットを掛けられた状態とはいえ、短時間に続けて戦闘は初めてで、疲れは潜むことなく一真を苛む。

現在、地下道の壁に寄りかかった一真は痛む間接を擦りながら軽い睡眠を取るか悩みながら薄暗い地下道の天井を見上げる。

『疲労が戦闘に影響が出るまで悪化しております。一度仮眠を取ることをオススメします』

「・・・次の試合までどれくらいある？」

『午後の部は1425時に始まります。2時間ですが、仮眠を取る

には十分です』

「分かった・・・」

H・1を展開した一真は横になると外部情報を切って意識を手放し始める。

ISは設定次第で最高の寝袋にもなる。感光、感音、シールドを弄ればどこでも安全に無光、無音の世界で寝られるからだ。

無音の世界は一真をすぐに眠りにつかせ、静かな寝息と遠く聞こえる歓声や足音のみが響き渡る。

（ラウラ・ボーデビツヒ、シャルル・デュノア他からの通信を確認
——拒否。通信ログを消去。

高槻秋葉、他からの通信——保護。後に報告。
タイマーセット、1400時。マスターの身体へ微弱電流放出、疲労の回復開始）

機体内に微弱電流を流しながら体の筋肉を痙攣させ、ほぐしていく。なるべく気付かせず、また効果の出る範囲でだ。

一真の体の血流、脈拍、脳波、内臓機能を基準データと比較しながら現状把握を続ける。

（血流——問題無し。ただし血中内のヘモグロビンが不足。食事

の改善案を作成開始。五反田食堂、レバニラ定食が最有力候補、マスターの好き嫌いからこれに決定。

脈拍——誤差範囲内。心筋にも問題無し。

脳波——レム睡眠を確認。これよりノンレム睡眠へ——却下。

マスター、貴方は何を見ているのですか？

内臓機能——問題無し。肝臓、大腸に働きかけアルコールを分解。また昨夜の摂取物から可能な限りのカロリーを吸収。相変わらずビタミンの足りない人ですね）

睡眠を続ける一真をスキヤニングしながらH・1は自ら補助出る部分を改善していく。

未だ成長期を脱していない一真の体はH・1が求める事にあまり抵抗せずに順応しようとおちこちで働きかけを始める。

2回戦前半まで後2時間・・・

第4アリーナ。

2回戦前半。セシリアはタッグを組んだ生徒に指示を出しながら相手を圧倒していた。

結果が分かり切ったワンサイドゲームに興が乗らないのか、彼女はパートナーに指示を出し、ブルティアーズで相手を攪乱する以外は特に行動は見せていない。

専用機持ちが相手だからと諦めている様子がそれに拍車をかけ、今の彼女は目の前の試合より私的な考えに意識を集中させていた。

（軍人としての覚悟・・・そんなもの、必要ありません。私は、1人で生きていく強さが欲しい。力が欲しいから軍に入った・・・なら凡百な人達に負けるわけにはいかないんです）

ある所に裕福な家系があった。女で一代盛り上げた家系だ。

今の風潮になる前から誇りを持って生きる彼女を娘は尊敬した。

誰にも媚びず、靡かない強い母親が娘は好きだった。

だが、父親は母親と違い弱かった。

身分が低い故に誰にでも頭を下げ、誰にでも媚を売る父親が娘は嫌いだった。

父親はいつも母親の後ろにいた。まるで影のように、大好きな母親の汚点として付き添っていた。

それが、たまらなく嫌だった。

嫌で、嫌で、嫌で、不快になってしまふほど嫌だった。

そんな少女の両親は、幼い彼女を残して他界する。列車の横転事故だった。

周りは彼女を憐れんだ。

幼くして両親を無くした少女の人生を楽しんだ。

そして少女では持て余す財産に目が眩んだ。

連日連夜、怒鳴り声が屋敷に響いた。

毎日毎日、自分を選ぶよう言い寄る大人達を見なければならなかった。

その中には血縁関係者から親族でもない人間、見知らぬ人間も居た。

あの子が可哀想だ！

——才前達ニ金ハヤラン！

私はあの子の叔母なのよ！

——コレダケ金ガ在レバ遊ンデ暮ラセル！

私は彼女の両親に生前から頼まれていた！

——アノ餓鬼ハ色々ト使イ道ガアルシナ！

醜い、醜い親族争いでした。

誰もが金、金、金と騒いだ。その度に両親の死が軽くなるような錯覚が起こった。

——だれも、しんじられない

小さな小さな女の子は必死になって勉強をした。勉強して、勉強して、誰よりも勉強して、周りに頼らないよう頑張りを続けた。

女の子は大人っぽいと言われるたびに嬉しかった。自分の苦勞が報われたことが嬉しかった。

だから軍から要請が来たときも受け入れた。

周りとは違う。

自分は強いと叫ぶために。

（・・・覚悟ですって？）

思い返せば、一真と父親はどこか重なる印象が強い。

男にしては弱腰で、権力に弱く、力ある者に従い続ける。

確かに彼にはお世話になったが、だからといって乏しめられるのは受け入れがたい。

私は特別。

私は強い。

だから、

【警告！直上、大質量接近！】

たとえ貴方が強くても私は負けないんです。

「っ?!」

視界内に納まったのは巨大な箱だった。

鈍色の巨大な箱。それはセシリアの上方に突如出現し、押し潰そうとする。

思考が固まりそうになる中、彼女は生存本能に従いブースターを最大まで噴かす。効率も何もない最大速度で逃げた。

大質量が金属を押し潰すような音を聞いた。

振り返らずとも見える潰れた箱からは水がドバドバと溢れる。

そして、出来上がった水溜まりに黒い鏡像が映った。

上空に滞空するイレギュラー・・・犀川一真を視界に捕える。

彼はアリーナのシールドギリギリで滞空しながら4人を見下ろしていた。それが堪らなくセシリアには嫌だった。

まるで周りと同じに見ているような様子が苛つく。

自分は特別なのだ。

自分は強いのだ。

だから、私を見てください。

「――」

短く紡がれた言葉にまず動いたのはセシリアだった。

戦闘経験のある彼女は初撃を警戒して最高速度でその場を離脱する。

一度しかなかった模擬戦でセシリアは彼を自分なりに分析していた。

（初撃、初撃にカウンターさえ与えれば犀川さんはペースを握れない！）

分析結果として、セシリアは一真が大した脅威ではないと判断した。

ISのスペックは確かに目を見張るが、操縦者の技能は対して高くない。高く見積もっても素質のありそうな素人程度だ。

さらに彼の戦い方は少ないパターンの組み合わせにより成り立っている。

陽動、攪乱、打撃。

それらを決まった武装に担当させており、それさえ分かっ
てしまえば脅威足り得ない存在に落ちる。

そして初撃はミサイルかマシンガンでの足止めだ。

「・・・え？」

だが、彼はセシリアの予測に反して始めてみるライフルを取り出す。

そして銃口が白く輝きだし、

数千℃超のプラズマが箱を気化させる。

気化し、爆発的に膨張した水はアリーナ内を濃霧となって満ちた。

飽和状態の濃霧は機体に水滴を幾百も作る。視界はまともに利かず、ナインボールの姿も消えていた。

（っ！ハイパーセンサーを最適——）

「きゃあっ！」

「いやあー！」

「わわっ、危ないですー！」

（行動が早過ぎます！まさか最初からこれが——）

管制室から送られてくる情報に目を通しながらハイパーセンサーを最適化し、さらにブルティアーズを数機収納した状態で一真の行動を探る。

映し出される残エネルギーはセシリアとパートナーの佐藤広美以外のエネルギーを目まぐるしく削り続ける。

広美のエネルギーも削られているが、回避に専念しているのか対戦相手よりも緩やかに消費されている。

それでも、エネルギーが0になるまで時間の問題でしかない。早ければ数分もせずに0になり、自分1人になるだろう。

「小賢しい（ギリッ）」

霧に映る巨大なナインボールの影を見て奥歯を噛み締める。

彼は何故そこまで汚くあれるのだろうか？

彼には誇りが無いのだろうか？

彼は何故私をそこまで無視する？

（私を、甘く見ないでください！）

リーダーと影の大きさ、さらには光の差す角度からナインボールの位置を割り出しライフルを放つ。

光の線が予測した場所に差し掛かる一真に直撃した――

「え……え、そんな?!」

——はずなのに、ナインボールは微かに揺れただけで攻撃の手を揺るめはしなかった。

本来なら、ダメージを受けた事で体勢を崩すか意識が散漫になる予定が予想外の軽微なダメージにそれらは覆ってしまう。

「な、なら！」

一射、二射、三射とムキになりながら当てる。だが結果は変わらない。ダメージとして四射合わせて10。まだライフルで直接殴った方がダメージになるだろう。

「な、ならブルティアーズで！」

ブルティアーズを操り、攻撃により硬直している一真を狙い撃つ。

「わあー?!」

「ちょ、無理！」

「犀川さんの強姦魔ー！」

「ノ、ノーダメージ・・・」

濃霧の中を縦横無尽に飛行する一真の足さえ止められないことにセシリアは呆然としてしまう。

（どうして?!）

予定では相手の出鼻を挫き、広美とのコンビネーションで翻弄するつもりが逆に翻弄されている。戦略として後8個程あるが、攪乱の要である自分が役に立たないため無に帰した。

『セシリー。気を付けなよ』

『何をです?』

『かずーだよ。』

かずー、全員の対策たててたから気を付けないと手玉に取られるよ』

『あら、見縊ってもらっては困りますわ山田さん。私、しっかりと犀川さんへの対応策は立てていますの。』

それに、犀川さんは私達に比べれば技能は劣ります。初見ならまだしも、二度目はありませんことよ』

『・・・』

『そう、私のように特別な訓練を受けた人間がそうそう遅れを取ることはありえません。まぐれや奇跡は、2度も起こりませんことよ』

『なら、私からセシリーにアドバイス』

『あら、なんですか？』

『石器時代の人間が、なんでマンモスに勝てたんだろうね？』

『はい？』

『かずーはね、人間らしいってこと』

試合前、1週間も前の会話だ。今更理解しても遅いのかもかもしれない。だがスッキリとした思いがあった。

（ああ、そういう意味でしたのね。花子さんは分かっていたんですか・・・犀川さんが自覚していることを。トーナメント表が発表された時から試合は始まっていたことを。強者に勝つための準備していた犀川さんのことを）

戦略も、下準備も、対策も・・・

（適いませんわね・・・）

一真は弱い。代表候補生よりも、一夏よりも、箒よりも弱い。誰よりも弱くて、誰よりも臆病で、誰よりも才能がないから、

（貴方は考えるのですね）

勝つために、負けないために。汚くても、卑怯と言われても、迷わない。

「ですが・・・」

勝つのは私です。そう小さく呟く。

一真は焦っていた。一般生徒を墜とすのに時間がかかり過ぎていくからだ。予定では1分30秒でセシリア以外を墜とす筈が、既に予定を30秒以上オーバーしている。

見縊っていた。佐藤広美という一般生徒が平均並でしかない。霧の中の彼女は先程からランダム回避に専念しており、思い切りの良さとも言える動きが彼女の行動時間を伸ばしている。

濃密な水蒸気の中では役立たない熱量兵器ではなく実体弾による攻撃を当たる前提で避け続ける。センサーの最適化が出来ていない中での回避率に一真は純粋に感心してしまう。

『濃霧が晴るまで残り5分23秒』

『うち……マシンガンを左手に移した直後にHVMを展開。近接戦闘に移る』

『了解』

マシンガンの残弾全てを放ちつつ距離を詰める。時折飛来するエ

ネルギー弾はシールドではなく純粋な装甲で弾いていく。濃密な濃霧と常識外な装甲を持つナインボールだからこそ可能な蛮行だ。打金ならば装甲が砕け、専用機でも装甲に多少のダメージを受ける。セシリアとの戦闘を想定した際にエネルギー残量を出来る限り残しておきたいから選んだ手段だったが、意外と良手だったことに一真は喜ぶ。ブルーティアーズが全天候を想定した武装だったら負けていたかもしれないが、どうやら装備しているのは純粋な熱量兵装のみのようだ。

『敵機まで残り10』

『リヴァイブのブースターを切る。落下を始めたらグレネード、飛行可能ならばそれを利用してセシリアを攻める』

『了解』

押し潰すようなGを歯を噛み締めることで耐えながらリヴァイブのブースターにHVMを突き刺す。

「まだまだー」

なんとも間の抜けた声を上げた広美は身を捻ってHVMの直撃を避ける。だがブースターの一部に深く食い込んだ刃により破碎されこそしないが、残りのエネルギーは50になってしまった上に推進機を故障したのか飛行も出来ず墜落していく。

「犀川さんの鬼畜―外道―卑怯くさいですこんなの―。どちくしょ―」

（後で泣かす）

「犀川さんのせいで堕ちちゃいました―。お嫁に行けません―」

（漢字が違い！）

落下していく広美にグレネードを向け、ロックオンサイトが定まるまで待つ。後は引金を引けば前処理は終わり、次いでセシリアを墜とせば目的を完終したことになる。

『警告。敵機急速接近。接触まで8秒』

H-1からの警告に慌ててグレネードを収納し、HVMを起動させる。

「っち！」

背筋を意識し力を蓄め、さらにAICを利用して力をかける。ギリギリと捻れる腕部にさらに力を蓄めてカウント3でHVMを振り抜いた。

「っ！」

風を切る音と手応えの無さから避けられたと判断した一真は後ろへ飛ぶ。

（緊急停止からの緊急離脱が早過ぎないか？）

不適な笑みを浮かべながらサバイバルナイフ型の近接武装の刃を撫でるセシリアに苦笑いを向ける。いくら代表候補生でもあのタイミングと早さで避けれる者は少ないだろう。出来れば近接武装を破壊したかったが、相手もそれを察したのか受け止めずにわざわざ避けた。いい判断力だ。苛立ちしか感じない。

「淑女を前にして他の方に目移りなど失礼じゃありませんこと？」

『待機させているミサイルをランダムに起動。セーフティー解除。誤爆は容認』

『了解』

「あらあら、御話中ですのに考え事ですか？
いけません。いけませんわ。紳士が淑女を放っておくなどいけませんわよ！」

「っ！」

瞬間加速からの刺突を身を捻り交わした一真はガラ空きの背にHVMを突き立てようと――――して止めた。変わり彼女の脇腹を蹴って自身も後ろに退いてマシンガンを向ける。

熱量兵装特有の砲音が二度。蒼白い光がマシンガンの銃口に重なって意図せぬ方向へ銃弾を吐き出させる。

『全てのミサイルの発射命令をリセット！誤爆の容認も解除だ！』

『了解』

「あら、残念」

それが何対して言われたのか正直判断に迷う。マシンガンが逸らされた事に対する皮肉なのか。はたまた刺突を当てられなかった事なのか。それとも、

・ 背中のミサイル搭載BT兵装を間違って斬らなかった事なのか・

「まさか、あそこでも来て反応するとは驚きましたわ」

驚いたのはこちらですよ！と内心毒づきながらどう攻めるか頭を悩める。

濃霧が晴るまで残り3分。ミサイルでセシリアもろとも爆破させるのもいいが、自分が近くにいたら間違いなく撤退ラインまでシールドエネルギーが消費してしまう。だが、だからといって素直に遠距離兵装を使わせてはくれまい。シールドエネルギーを削れなくても衝撃だけでマシンガンの照準をズラされたのだから。そうなるに残るのは近接戦闘。それも互いにヒット&アウェイによる戦法のみ。しかも此方は背中側を攻撃出来ないというハンデである。

道連れ等というセシリアらしからぬ戦法に一真は焦ってしまう。しかも彼女は丁寧にも広美をバックに置いて彼女を落とさせないようフォローまでしている。どうやら刺し違えるつもりらしい。

（どうすっかなー・・・まさかこんなやり方してくるとは思ってなかった）

「犀川さん」

「・・・」

「別に、御返事は返さなくてもよろしいので聞いてくださいまし。先週、貴方は軍人になる覚悟について言っていました・・・。私、考えましたの。私が軍人になった理由を、軍人を続ける理由を。ですが、出て来る答えは1つだけ」

（攻めるか、刺し違えに行くか）

「私は、強くありたい。誰にも頼ることなく、また誰にも屈しないほど強く。」

そしてこれが私の覚悟ですわ」

「優雅はどこにいったんだ？」

「時に泥をすすする覚悟も必要と教えてくれたのは貴方じゃなくて？」

「覚えが無い」

「ええ、私が勝手に学んだだけですもの・・・感謝します」

綺麗な笑顔だ。前々から素材は良く、子供っぽい気品があり、綺麗だとは思っていた。しかしまさか老人特有の悟ったような笑顔を浮かべるとは思わなかった。可愛いというよりも綺麗と言える。ただし、だからこそ残念だ。

（また、要らぬ面倒を背負ってしまったのか・・・）

「あの方は・・・きつと」

『あの方?・・・まあ、いい。』

近接戦闘は避けられない。仕方ないが、カードを一枚切るぞ』

「ですが私、生憎御母様似ですの」

『反応炸薬を温めておけ』

『熱源は如何しますか?』

今からガソリンを撒き、温めても発火点まで210秒を要します』

『ナインボールの背中についてるブースターはいつからエアジェツトになったんだ?』

ブースターの熱で温めろ。タイミングは俺が出す』

「ありがとうございます。そして恨みますわ・・・貴方が日本にいたことを!」

セシリアがナイフを逆手に持ち変えて突撃を仕掛ける。

ここが正念場だ。

ナイフとHVMが互いに火花を散らす。一撃離脱の戦法を取ってからというものの繰り返し背後にBTを展開し続けたため眼球の奥が疼き、左側だけ頭痛が起り引っぱりなしに痛みが襲い掛かってくる。さらにはインターセプトの刃零れも無視できないレベルになってきた。

バレぬようないつものように話してはいるが、思いもしない考え等が自然と口から出て来る。どうやら痛みと疲労で半ば自棄になり始めたのかもしれない。さらに最悪なことに幻覚や幻聴が思考の隙間に現われてきた。あまり、長引かせるとマズい。

一真は背中中のBTを警戒して攻めあぐねているのが幸いして劣勢にはならない。その証拠に10以上に渡る衝突で決められた攻撃は蹴りやタックルだけ。口だけしか見えないが確かに顔を歪めている。ただ、それがあの方の性格から来る物か攻めあぐねている現状からくる苛立ちなのかは分からない。もしかしたら両方なのかもしれない。

『——なさ——』

(さっきから煩わしいですわね)

「しかし・・・まさかあんな手を使うとは」

「ふふ、驚きましたか？」

「著作権侵害だ」

「貴方は得意ですものね、こういった戦い方が」

HVMを突き付ける一真を自然と睨み付けてしまう。頭痛が酷く、頭が割れそうだ。

「後少しで霧も晴れますわね・・・」

「だから？」

「ですが、私も疲れてきました。晴れる前に勝負をつけましょう！」

「お前」

「惚けている暇があつて？」

「っぐ」

初めての一撃は一真が隙を見せたことで刻まれ、さらには去り際に背部に備えていたBTを放つ。

爆炎と爆音に吞まれた一真を警戒したセシリアはレーダーの範囲を狭め、どのようなアクシデントにも対応出来るようBTを配置して万事に備えた。しかし、セシリアの予想に反して彼はその場に留まったままだ。

「……るせえ」

「はい？」

「父親が、信じられねえのかよ」

「え？」

意識が離れつつあった彼は頭を二度、三度と振って意識を戻す。だがセシリアは目を見開きながら彼を見て固まっていた。

「……犀川、さん」

「なんだ」

「貴方にとって、父親は何ですか？」

自然と口が動いていた。

「俺を、見守ってくれた存在だ」

期待を裏切るような答えた。分かっていたが苛立ちを感じてしまふ。

「………なら、わかりませんわ」

「は？」

「貴方に、私の気持ちなど！」

12度目の突貫。

逆手に持ったナイフを金的へ滑り込ませる。勿論避けられはしたが、体を当てて体勢だけは崩せた。

『お——あ——す——したばっ——！』

「っ?!」

一瞬、誰かが泣き崩れるイメージが見えた。何かの箱の前に跪き、恥も外聞もなく泣き崩れる姿だった。

「当たり前だ。お前は、俺じゃないんだからな」

「っふ、違います。元より立ち位置が違いすぎるんですわ！」

斬り掛かってきた一真の一撃をナイフで叩き落とし、半身を前に滑り込ませる。

息もかかる程まで近づき、すぐに遠ざかる。その際に脇腹に鈍い痛みが走った。見れば何かに斬られた傷がある。

『お前は——なんだ！』

「っ?!」

今度は心臓を掴み出されたような苦しさで悲しさが襲い掛かってきた。聞こえてきた声は多少歳をくった男性の怒声で、聞き慣れていないセシリアは身を竦めてしまう。

「い、今のは?!」

「・・・」

セシリアの変化に一真は様子見に徹した。

（なんですか、さっきから！）

まるで大切な人から、一夏のように好きな人じゃない。もっと身近な人から何か酷い事を言われた気がした。それも地面も空も、上下前後左右が分からなくなるくらいに酷い事を言われたような気がした。

「ハアッ！」

「くっ！」

試合中に惚けていたセシリアを切り捨てようとした一真に対して彼女は抱き付く事で難を逃れる。だが、別の厄介を抱き寄せてしまった。

「っ?!」

『お前は予備だ！三人いる内の一人でしかない！』

『・・・』

ハッキリとしたイメージがセシリアに流れ込む。それは、父親が息子に言った一言。普通なら考えられない光景だ。

(やめて・・・)

息子側の顔は見えない。だが足が震え、肩が震えていることから彼の内情が流れ込んでくるような気がした。事実、セシリアは張り裂けそうなほどの恐怖と悲しみを感じていた。

『お前が死んでも、悲しむのなんて一時しかない!』

『・・・』

(やめて・・・お願いします・・・)

次に言われるだろう一言を考えてしまうと今すぐその場から逃げ打たくなる。耳を塞ぎ、眼を瞑り、顔を背けたいのに、彼女の意志に反してそれは告げられてしまう。

『お前が必要なわけじゃない!』

『・・・・・・』

(嫌、嫌嫌嫌! やめて、やめてください! 私に、私に流れ込んで――)

父親の一言により流れ込んで来たのは悲しみでも、怒りでもない。

虚脱感と絶望。

その2つ。

胸に巨大な穴を、空虚感を開けられてしまう。それはとても辛く、そして耐え難い苦痛により彼女は涙を流す。泣き崩れてしまったセシリアは同時に流れ込んでくる感情の主に同情した。

なぜ、なぜ彼がそんなことを言われなければならなかったのか。彼から流れ込んできた思いの大半は両親の期待に沿えようと、自身の役割を果たそうと、そういった感情から来る義務感ばかり。なのに、この仕打ちはあまりにも酷過ぎる。

(酷い・・・酷過ぎます)

涙を流しながら彼を必死に弁明しようと顔を上げたセシリアは見た。自分の横を通り過ぎた少年の姿を。何の感情も浮かべない顔で涙する少年を。数年前の一真の痛々しい姿であった。

（・・・何故、何故貴方は）

気付いたらセシリアは一真に振り払われていた。無意識に姿勢制御を取るが、それからはどうしても動く気になれない。

一真も彼女の様子がおかしいことに気が付き、振り下ろそうとしたHVMを止める。

「ぐず・・・うつ、うう・・・うああ」

「・・・」

「ひっく、ひっ・・・く・・・うう・・・ああ」

「何でいきなり泣いてるんでしょうか？」

セシリアは泣いていた。両手で必死に流れ続ける涙を拭い、拭い、拭い続ける。それでも涙は流れ続けてしまい顔はグシャグシャになるばかりであった。

時間が経つに連れて絡む視線が冷たくなってくるのを一真は泣い

て誤魔化したい気分になってしまう。

「だつてえ、だつてえ・・・貴方が・・・余りにむぐわれないがらあ・・・」

「・・・すいません。意味が理解しきれないんですが」

「なんでえ、貴方ばあ父親にあんなごと言われで平気でいられるんですかあ?!」

「・・・なんで知ってんだあ？」

「貴方ばあ、だだ・・・ただあ！」

「っ！」

セシリアが何かを言い切る前に彼女を蹴り飛ばす。顔は怒りに染まり、HVMが震えてしまう。

「悪いが、教える気はない」

「ひっぐ・・・うう・・・」

「・・・いや、まあ、フェアじゃないもんな」

泣き続けるセシリアにより周りの視線が突き刺さるのを自覚した

一真は腕を組む。これが模擬戦でなければ間違いなく自殺行為だが、対戦相手がこれでは試合所ではない。

「・・・お前が勝てたら質問に答える」

「ふえ？」

「どーすんの？」

「ひっく、うう・・・ずっと、ずっと・・・やります」

涙を拭い、真っ赤になった目で一真を睨む。泣いていても何も進展しない。勝たなければ、目の前の転機を逃してしまう。

セシリアの中に意地とは違う勝利への貪欲さが産まれた瞬間だ。

「・・・待ってください」

ナイフを構えて状態でセシリアは固まる。

「なんだいきなり？」

「フェアじゃない、と仰いませんでしたか？」

「・・・・・・・・」

一真の口が分かりやすいほどに引きつったのを彼女は見逃さない。

「見たんですの？」

「なんのことですか？私、全く思い当たる節がありませんの」

「見ましたわね」

「し、知りませんの」

「……………貴方を殺して私は明日に生きます」

「絶対に生き残る」

「却下」

「押し通る！」

「その意志、撃ち抜かせていただきます！」

互いに武器を構えての突貫。

一真はセシリアの回避先候補に宛てをつけた。回避先の割り出しも難しくはない。上下左右、前後しか回避先はないからだ。

HVMの性質上、許される回避先は前のみ。水平に寝かされた刃ならば問題なくセシリアを斬れるし、上下でも叩けば多大なダメージが見込める。たとえそれがHVMを代償にするとしても成果は十分に釣り合う。

後ろには下がれない。何せこちらは前方に向かっていているからだ。ならば残る回避先は、

（前方に体を滑り込ませるだけ）

ダメージ覚悟で反応炸薬を間に割り込ませれば後は怯んだ彼女にグレネードを放つだけ。それで終いだ。

「行きなさい！」

「っな?!」

BTが一真に向かい突貫する。

近接戦闘用のBTなど存在しない。純粹な砲台でしかないBTを真直ぐ放つセシリアに驚きばかりが先行する。

熱線を放たれる前に切り裂くためBTへHVMを向ける一真にセシリアはさらに行動を繋げる。

「まだです！」

唯一のサバイバルナイフを投擲。BTのブースターに突き刺さった事で爆発が起こりHVMは吹き飛こそしないが爆発に巻き込まれて腕ごと体を引き摺り、また爆発によるダメージを負ってしまう。

姿勢制御を取り、急ぎHVMを構えようとした一真が見たのはヘッドギアに銃口を押しあてるセシリアだった。

「これだけ近ければ、減衰もあてになりませんことよ」

（近――）

ライフルの引金を引いたセシリアは0距離で起こる爆発で銃身がブレぬよう押し付けながら連射する。

一発、二発、三発、四発・・・

ダメージが見込めなくなる距離までライフルを撃ち続けようと引金を引き続ける。通常の人間ならば思考が麻痺して動けないのだが、一真は通常から足を遠ざけている。

「舐あめるなああ！」

計算よりもダメージの見込める距離が短かったわけではないのに、一真は動いた。計算に使ったナインボールのシールド強度が弱く設定しすぎたのだ。

攻撃による反動を利用し、体を捻ってHVMを投擲。ブーメランのように回転するそれはセシリアではなく彼女のライフルを切り裂く。

さらには張り付けられていた炸薬が水分と熱に反応して爆発を起こした。

「つく・・・まだ、ですわ！」

爆発により残るシールドエネルギーが50となるが、セシリアはそれを意図して見ようとしなかった。ここが、勝負の分かれ目。下手に考えている時間などない。

（犀川さんに近接武器はない！ならば、恐れずに攻めれば勝てる！）

回収していたインターセプトを刺突から風ぎ払い、返す刃で切り払う。

平均以上の剣筋に対し、一真はナイフの腹を叩いて弾き、風がれた刃をスウェーで避け、さらに切り払うナイフを腕部装甲の表面を滑らせて凌いだ。接近戦の訓練を今ほどやっていればと悔やんでしまう。

（やはり・・・接近戦は苦手ですわ！）

ナイフを操りながらBTでの攻撃も混ぜていく。セシリアに集中する余り一真は二度、三度と攻撃を受けてよろけ、その隙にナイフで攻撃してエネルギーを削る。

ナインボールのエネルギーが残り2800となった事でセシリアは最後のスパートをかけ始める。

「はあっ！」

「っちい！」

B Tとナイフをさばきながら一真は合気道のモノマネで彼女を投げ飛ばす。

グルングルンと回転しながらセシリアは意地だけでB Tを放つ。

「しゃらくさい！」

二筋の光弾を身を捻って避けようとする。

「へ・・・？ナイフ？」

しかし、腰の人口筋肉と装甲に挟まるようにナイフが食い込んでいた。そのせいで十分に体を曲げられず逆に装甲に傷をつけてエネルギーを消耗してしまう。

「ふふ」

（あんにゃろー！）

勝ち誇った笑みを浮かべるセシリアを見た一真は連射される光弾

にさらされることとなる。

「私の、勝ちです——」

「とーころがぎっちょん」

「え・・・？」

「HVMは2つあるんだよね！」

右腕部から現れたHVMを振りかざした一真に一瞬BTへの命令が鈍ってしまう。その一瞬に一真はあらゆるミサイルを起動、待機していたBTを爆破していく。

「終わりだ!」

「いいえ・・・私も、いつインターセプトが1つしかないといいましたか?」

「なにそれずっこい!」

「貴方こそ!」

「仕様ですので」

「あら、奇遇・・・ですわね!」

HVMとナイフが火花を散らしてぶつかり合う。

一真は右腕から伝わるHVMの振動を抑え、セシリアもまた碎かれてしまいそうな振動に耐える。

「なら・・・こんなはどうよ!」

「え?」

突然一真はHVMを引くと左手刀でブルティアーズの腕部を貫く。余りにも、余りにも簡単に装甲に罅が入ったことにセシリアの頭が白くなってしまう。

「知らなかったの？」

「なんで罅が?!」

「その腕を仕上げたのが俺だって！」

二度目の手刀により罅がさらに広がる。さらには指を捻込み、素体の回路に小さな傷を付ける。

「っ?!」

「製作者ならどうやれば壊れるくらいわかるんだよ!」
「・・・さあ、チェックメイトだ。右腕は死んだ! 悪いが、お前はここで終わってもらう!」

HVMが顔前に迫る。咄嗟とはいえ自由に動ける腕を出してしまふ。それが結果的に自身を守りはしたが、状況は最悪だ。

【シールドエネルギー0!】
シールドエネルギー0!
これ以上の戦闘続行不可能!】

「・・・・・・・・」

両者の間で点滅するウィンドウ。

シールドエネルギー0という、敗北結果を示すウィンドウを挟んだまま見つめあう。

「俺の勝ちだな、オルコット」

「・・・・・・・・」

「悪いが、身の上話をするのは嫌いなんでな」

「・・・・・・・・」

「オルコット？」

「・・・・・・・・セシリアと御呼びください」

「は？」

「機会ですし、なにより貴方には名前で呼んでもらいたいんです」

「・・・ああー」

「あら、ダメなんですか？」

「いきなりはなあ・・・恥ずいだろ」

「ふふ、ふふふ」

「ツク、クククッハハ」

互いに笑い合いながらゆっくりと地へ降り立つ。

「なんか、スツキリしましたわ」

「・・・確かに、スツキリしたって顔だ。すんげー綺麗だぞ」

「あら、流石に泥や煤だらけの顔でそんなこと言われても嬉しくありませんわ」

「おいおい。サンドリヨだって最初は灰をかぶってたんだぞ。素材がいいなら汚れてもいいに決まってる」

「ふふ・・・残念ですが、私、もう好きな方がいますので」

「ああ。知ってる。一夏だろ？」

「そ、そそそれは！」

「隠すな隠すな。」

まあ、ライバルは多いだろうが応援くらいはしてやるよ」

「……………本当、かないませんわ」

いつの間にか一部だけ晴れたアリーナの天上部を見上げる。心地の良い、抜けるような青空だ。

『セシルは空が好きかい？』

ふと昔を思い出す。幼い頃、お母様が忙しかった時にお父様に強請って公園に連れて行って貰った時のことだ。

『はい。私、空は大好きですわ！だってまるでお母様みたいですもの！』

『ははは、そうか。私も、空は好きだよ』

『当たり前です！だってお父様はお母様を愛してるんですもの！』

『はは、そうだね…………でもねセシリア。私は地面も好きなんだ』

『土がですか？』

『違う違う。地球が、だよ』

『お星様ですの？』

『そうだよ。お星様だ。』

いいかい、セシリア。空はお星様があるから宇宙と分かれていられる・・・お星様がなければ空なんてないんだ』

『そんなの嫌です！』

『私もだ。』

お星様が無ければ上も下も、右も左も空になってしまう。それはもう宇宙と変わらない・・・だから、空を受け入れるお星様が私は好きなんだ』

『だったら私もお星様が好きですわ！』

『そうかい、嬉しいな』

あの時のお父様は本当に嬉しそうに私を抱き上げていてくれた。あの時は地球が好きと言ったからだと思った。今だって、そう。ですが一真さんから御話を伺えば本当の意味が分かるかもしれない。・・・いえ、分かる。

「では、約束通り話してくださいね。貴方の意見を」

「は？なに言ってるんのお前？」

「貴方らしくないですわ、一真さん・・・」

勿体付けるように溜めを作る。可愛い仕返しだ。

「まだ試合は終わっていませんのよ？」

「っ！」

私の言葉に気が付いた時にはもう遅い。何故ならば、既に広美さんが先手を取っているのですから。

「んな？！俺のミサイルうつ！」

「油断大敵ですー。そして恨みは果たされるんですよー」

目と鼻の先まで投げ落とされたミサイルにアサルトライフルが当たり、私達は爆炎に吞まれてしまう。正直、一真さんが抱き締められなければ私はタダではすまなかったでしょう。

「・・・すんげーずっこい」

「あら、私を抱き締められるんですからよろしくなくて？」

「全っ然、よろしくありませんの！」

互いの間に新たなウィンドウが開かれる。それは撤退ラインまでシールドエネルギーが削られたのを知らせる物だった。

「あらあら、殿方ならもう少し器量があってもよろしいでしょうに？」

「ったく・・・おぼえてろよー！うわぁーん！」

捨て台詞を置いて撤退する一真さんを見送ってからまた空を見上げる。

『セシルもお空みたいになれるといいね』

「・・・当たり前です。空は、今も憧れですもの」

その夜。

結局一真を見つからなかった。汗だくになったセシリアは汗を流すために集団浴場へやってきた。

（結局、一真さんは捕まりませんでしたわ・・・）

汗により張りつくシャツを脱ぎ、スカートのボタンを外す。たま
たま壁側に設置された鏡が目に移る。見れば見馴れた自身の裸体が
映り込んでいる。

細いくびれに豊満な胸。キュッとしたお尻にスラッとした手
足。10年前の自分からは想像もつかないと笑ってしまう。しかし
母親譲りの自慢の金髪に泥がついているのに気が付くと少し鬱にな
ってしまう。

（私は、またお父様を好きになれるのでしょうか？）

殆どが母親譲りの中、唯一虹彩だけが父親と同じスカイブルーだ。
昔は好きだったが、いつからか嫌いになっていた。また好きになれ
ると思うと心踊る。だが、それも一真が捕まらないためお預けだ。

（一真さんも一真さんですわ！負けたのに逃げるなんて・・・男ら
しくないです！）

頭を洗いながら泥を落としていく。使い慣れたシャンプーの匂い
に心落ち着かせながらセシリアはふと嗅ぎ慣れない匂いに気が付く。
だが、集団浴場なら他人のシャンプーの匂いがあっても不思議じゃ
ないかとシャンプーを流していく。

滴る水気を切りながら浴槽へ向かう。誰もいないたも貸し切り状

態ということもあり、今のセシリアは一真の件を抜きにすればかなり機嫌が良い。

湯に浸かろうとした足を浸けた時だ。小さな音に気が付き湯に浸かるのを止める。

——♪——♪——♪——♪

（何の音でしょう？）

耳を澄ますとそれが音楽であることがわかった。とても、とても小さく漏れだした音楽は大型浴槽の奥から聞こえてくる。

（この先は確か・・・ジャグジーでしたわね？）

いつも箒達とやってくるためあまり浴場内部に詳しくない。元々、風呂自体あまり馴染みが無い彼女にとって浴場内部はあまり興味を引きはしない。風呂が好きになったのも日本に来てから、それも箒達につれらてから付き合うようになってからだ。そのため興味がわいた。

（日本のジャグジーですか・・・）

今にも鼻歌を歌いだしそうな表情をしながらタオルを体に巻く。

濃い湯煙を掻き分けながら細い通路を通ると6人くらいが横になれる広さのジャグジーに辿り着く。また、聞こえてきた音楽も多少はハッキリと聞こえてきた。

（奥に、誰かいるようですね・・・？）

————上野発の夜行列車降りたときからあ

（JPOP？）

貸し切りではなかったことに多少残念に思いながらセシリアはい話し相手が出来たと近づく。

（か、一真さん?!）

「・・・くう、くう」

そこにはジャグジーに横になりながら眠りこける一真がいた。いつも使っている携帯にイヤホンを差し、音楽を聞いているためセシリアには全く気が付いていない。

「ん・・・くう・・・」

（な、なぜ?! なぜ一真さんが?!）

眠り続ける一真を見てパニックを起こしたセシリアはとりあえず落ち着こうとまず湯船に浸かる。ちょうどいい湯加減が体の疲れを溶かしだすようだ。

（あ・・・悪くありませんわ・・・）

水圧がピンポイントに疲れた筋肉をほぐす心地好さに顔を緩めながら体の力を抜く。湯の温度も若干温めにされているため多少長く浸かって逆上せないという心配りがまた憎い。

（――っじゃなくて！私は何をして）

「・・・ん、んん・・・H・1・・・今、何時だ？」

（お、起きてしまいました！）

「H・1？」

（こ、ここは無難に奇遇ですわねと声をかけるべきでしょうか？！そ、それとも一真さんの部屋で見たマンガのように責め立てて有耶無耶に?!）

「どうした、H・1？」

（・・・何をしてるんでしょう？それにハスラーワンとは何のことでしょうか？）

なるべく気付かれぬよう湯船に体を付けながら湯煙に映る一真の影に目を向ける。携帯を弄っているのかカチカチと音がする。

「――っ！誰だ！」

「~~~~っ?！」

「誰だ・・・何時からいた」

（どどどうしましょう?!）

っは、そうですわ! こういう時は・・・）

「もう一度問うぞ・・・誰だ」

「いやあああつ、変態いいつつつ!」

「・・・・・・」

パンツと銃声が浴場内に響き渡り、何かを砕く。パラパラと目の前に落ちてくるタイル欠片を見て顔が引きつるのがわかる。もう少し手首が傾いていたら間違はなく眉間に着弾していた。

（ひ、ひい~~~~っ! い、いきなり撃たれました!）
アニメではこういったら戸惑っていたではないですかあ!）

「次は無いと思え」

「わ、私です！セシリア・オルコットです！」

「は？セシリア？」

撃たれては冗談で済まない雰囲気にとまらず立ち上がり叫ぶ。セシリアを確認した一真の顔はとても間抜けではあったが、それは彼女も言えることではない。

互いに見つめ合う中、一真が先に視線を逸らす。

「あーとりあえず見えて」

「如何致しましたかお嬢——」

（・・・あれ？何が悪かったの？）

——運としか言いようがありません。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ボロッ）」

「あー・・・・・・・・チェ、チェルシーが粗相をしてしまいましたわね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・手を出さなかった自分を褒めるわ、俺」

現在、2人は火照った体を冷やすため寮の屋上にやってきていた。昼間から雲の一つ無かったため夜空にはキラキラと星が煌めいている。先程からそれを見上げていた一真に習いセシリアも見上げる。イギリスとは違う夜空に違和感を感じながらも何とも綺麗な空に溜息を吐いてしまう。隣に一夏を求めるのは贅沢かもしれないが、それでも満足いく夜景だ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しばらく夜風の気持ち良さを堪能しながら夜景に目を奪われていたが、一真さんがまず沈黙を破った。

「まず、何から聞きたい？」

「・・・・正直、迷っています。」

貴方の気持ちを聞くのも、お父様の気持ちを知らぬのも・・・どちらにも私には必要ですのに」

視線が自然に太股で握られた手まで落ちる。

「あー、なら俺の話から行くぞ」

「・・・では、何故あのような事を言われたんですか？
親が、子供にあんなこと言うなんて」

「最初は、ある事で口論になったんだ。なんてことない、小さなことさ・・・なんで俺がこんな目に遭うんだ！ってな」

「・・・」

「家族全体を巻き込むような問題だった。そして、責任が俺に向いた・・・そんな時だ。」

俺も自分勝手に叫んだ。あいつらがしなければ、アンタ達が止めれば、なんで俺が！ってね」

「なぜ、そのようなことに？」

「言えない。察してくれ・・・」

「・・・」

「俺は、あの時にこう考えた。長男だから我慢しなきゃいけないのかよ、長男だから姉弟の責任を取らないといけないのかよ、好きで

なったわけじゃない……そんな時さ」

「……………」

「お前は予備だ。3人いる内の1人だ。死んでも悲しみは一時しかない。大した事はないんだ。

あの時は正直辛かったな……なにせ、自分を否定されたんだからな。考えも、生き方も、在り方も」

「酷……過ぎます……一真さんはただ責務を、果たそうと……」

「いや、それは違う」

「え？」

「俺は、逃げてただけだ。

長男、姉弟……それを楯にして自分を守る言い訳を用意してただ。それを親父が壊した。言い訳を盾にしながら責務から逃げた俺のアイデンティティーを」

一真は晴れやかな笑みを浮かべながらフルーツ牛乳を一口飲んだ。その顔には憎悪や怒りや悲しみなどない。本当に感謝しているのがわかる。

「きっと、親父と母さんは知ってたんだ……俺が長男という地位に依存してたことに。だから、壊してくれた。

もし、あの時、アイデンティティーを壊してくれなかったら……

俺は誰も彼もを恨んでたと思うし八つ当たりには逃げてた気がする。そうすれば責務を直視しなくてすむからな」

「なら、なら何故貴方は平気でいられるのですか？」

「ん・・・せめてもの感謝の印、かな。一応18年も育ててもらったからな。

俺が、一真という個人が初めて自分の意志で決めた親孝行なんだよ。だから苦もないし、後悔もしてない。これであの2人が助かるなら、何も辛い」

「御優しいですね」

「・・・・・・お前は聞いたな？ 貴方にとって父親とは何か？

答えは変わらない。俺にとっての父親とは、見守ってくれる存在だ。あの時、あの言葉で確信した。あれは親父が最後に俺にしてくれた教えだ。

何も気負わず生きろという、俺を思っただけの厳しい言葉なんだと。だから俺は、俺のままでいられる」

その時の一真さんはとても、とても嬉しそうに笑っていた。子供のように、大人のように、何かを誇るように笑っていた。それは、一夏さんとは違った意味でとても魅力的な笑顔だった。

「俺はな、何も愛しているとも、大切だとも言わなくていい。ただ・・・ただ強く思ってくれば俺はいいんだ」

「強く、思う・・・」

「ああ・・・お前の父親はさ、たぶん受け入れる役に徹したと思う。俺が見たのは・・・お前の父親が誰かに頭を下げる場面と、母親の後ろを歩く場面ばかりだった。でもさお前の両親、どっちも気負った様子は無かったぞ。どちらかというと母親が感謝していたような気がする」

「そんな！嘘です！」

「さてね。」

ただ、俺はなんとなくだがお前の父親が好きでああいう役をしていたように見えたよ」

「・・・」

大好きな母親が嫌いな父親に感謝していた。信じたくはないが、確かにそのような節はあった。

「お前の性格ってさ、母親似か？」

「え、ええ」

「だったら尚更だろうよ。俺が見るにお前は誰か受け入れてくれる奴が必要だ。周りとの軋轢、擦れ違い、そういった物を仲介してくれるような奴がな」

「い、意味がわかりません！」

「敵を作りやすいんだよ、お前。」

お前のお袋さんは親父さんがいたから上手く行けた。親父さんがお袋さんを受け入れてくれたから自分の思うように行動出来た。でなければ周りの温度差にまいてたかもしれない・・・
空と大地みたいに基準になるようにしてくれたんじゃないのか？」

「っ?!」

「空つてのは大地があるから境界がハッキリする。大地がなければそれは宇宙だ。大地を基準にすれば自分らしさは失わない。」

親父さんはさ、それを分かっていたんじゃないのか？分かっていたからあえて後ろに居続けて、帰る場所を教え続けてたんじゃないのか？」

抽象的な例えだが、すんなりと受け入れてしまう。また納得も出来た。

だが、負けたようで悔しい。せめて言い返すくらいは許されるはずだ。

「・・・・・・・・一真さんって意外にロマンチストなんですわね」

「ふっ、地元ではロマンスかずちゃんと呼ばれる程だからな」

「ぶっ、に、似合いませんわ!」

カッコつけてニヒルに笑う一真に笑ってしまう。彼もそれにつら

れて声を上げて笑いだした。

「ひでーな、おい。まあ俺もそう思うけどよ」

一真はそういうとポケットからタバコを取り出して吸おうとする。一瞬目を見開くが、彼が自分達より年上なのを思い出した。

詳しくもないタバコの臭いに鼻をヒクつかせる。タバコにしてはフルーティな甘い香りだった。

『セシリアが母さんに憧れるなら尚更私はしつかりしないとな』

（父様は、私を思っていてくれたのですね）

父様は私を愛していてくれた。

母様と私を思うからこそ、あのようなことをしていた。

情けないとばかり思っていた父の背中が少しばかり輝きだした。暗い陰はなくなり、陰のあった父の顔に笑みが浮かぶ。

ああ、ああ。帰ったら2人のお墓に行こう。行って、花を添えよう。そして言うのだ・・・

私を愛してくれてありがとう・・・

事件その11 「この気持ち、まさしく愛だっっっ！を思い出したからさあ大衆

H・1

「我々は求めた……未熟な少女が、無垢な少女が、純白の花が初めて知る恋という感情に色染めていく様を。純白を汚すことで産まれる困惑を。淡く、それでいて美しく花開く瞬間を」

一真

「勝手ほざいてんじゃねえよ（読者の）代弁者……この世界はな、最初から答えを出してた。俺達みたいな勝手な存在は決して交わらないってな」

H・1

「私は求め、訴え、羨望する。汚れなき少女が汚れる様を！（ラウラタンハアハア」

一真

「っは、だからなんだ！勝手に妄想して、勝手に裏切られただけじゃねえか！それを今度は力で捻込むつもりか（読者の）代弁者！」

H・1

「私は代弁者。私の意識も行動も結果も————全てが正しく修正された世界のためにある（ハ、ヱ、）Cミラウラタン！ラウラタン！」

一真

「……………ああ、分かった。これ以上なく、単純だって、ことが、な（ヤベエセリフワスレタ」

H・1

「なに？（アドリブガアリマスマスタ」

一真

「テメエらが何もわかってねえことがよく分かったぜ（読者の）代弁者！

俺達みたいな余所者は！汚しちやいけねえんだよ！俺達はあくまで脇役なんだから、精々主役を輝かすスポットライトで我慢しなきゃいけないんだよ！（モウヤケダニヤ」

H・1

「所詮、イレギュラーか（RECカイシ」

一真

「いいぜ、代弁者……………テメエが自分勝手な自己満足な終わりを求めるってんな」

H・1

「過ぎた力は正さねばならぬ」

一真

「まずはその自分勝手に独善的な幻想をぶち殺す!!!!」
プロット

主人公&ヒロインズ 後片付け中・・・

一真

「ラビオリうめえ（ポリポリ）」

H・1

「一仕事終えた後のエネルギー補充は格別ですなマスター（バチバチ）」

一同

「・・・・・・・・」

一真

「ムグムグムグ（ヤメロー）」

H・1

「充電、充電バチバチ（シニタクナーイ）」

一同

『おい、主人公』

一真

「ガツガツガツ（ホッハホッハ）」

一同

『最初のアレはなんだ？』

H・1

「次回予告通りです（ピャアウ）」

一夏

「いやいやいや、おかしいだろそれ。次回予告には一真とラウラがくつつくような感じに書かれてたじゃねえか」

箒

「そうだ。これでは嘘を吐いたことになる！」

一真

「嘘？いつ、誰が、どんな風に嘘をついたってんだよ？」

鈴音

「今、アンタが、次回予告とはまるっきり違う本編を流したことが嘘だって言ってるのよ！」

セシリア

「このような一方的な内容変更は認められませんわ！今すぐ書き直すべきです！」

ラウラ

「少尉。私は少尉の嫁になるのか？」

一真

「なる予定はございません（ガガガッ）」

ラウラ

「そうなのか。では少尉は変わらず私の兄なのだな」

一真

「好きにー（ガガッ）」

H・1

「しかしながらマスターは私の物（ガーオガイガーッ）」

一真&H・1

『いえーい（ハイタッチー）』

一夏

「はーなーしーをー逸ーらーすーな！」

一真

「なんだよめんどくさい。俺の存在意義を否定するの？（パクパクパク）」

シャルル

「食べる事が存在意義ってのはちょっとアレだよお兄ちゃん」

一真

「いくら食べても太らなくてごめんなさい（パクパクパク）」

H・1

「さらに私が消化を助けるために美容にもいいからごめんなさい（バチバチバチ）」

ヒロインズ

『ちよつと表まで面貸せ』

一夏

「脱線しないで！話を進めさせて！お願い！」

一真

「だからさ、俺は嘘なんてついてないって言ってんだろ（モチャモチャズズウ）」

一夏

「いや、誰が見ても明らかに嘘じゃねえか！よく見ろよ！」

2011／7／1―――。君達に最新情報を伝えよう！

学園にやってきたラウラ！そして世間を知らぬ少女を支える一真。

2人にいつしか芽生える小さな感情……それは愛か、それとも信頼か？！

次回、いんふいにと・すとらとす事件その11！

『この気持ち、まさしく愛だッッッ！』

勝利の鍵はコレだ！

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

2011／7／5の更新を待て!!!

鈴音

「動かぬ証拠って奴よね。まあ、諦めなさい」

シャルル

「そうだね」

セシリア

「このチェックメイトはどうやってめ覆せませんわね」

ラウラ

「そうか？」

箒

「さあ、先輩。どう弁明されるおつもりですか？」

一真

「やっぱり嘘なんてついてねえじゃねえか。あんまりしつこいと訴えるぞ（アリアリアリアリッ!）」

一夏

「まだ白を切るのかよ一真っ！男らしく認め——」

一真

「ん（ココミロチヨイチヨイ）」

次回、いんふいにっど・すとらとす事件その11！

『この気持ち、まさしく愛だッッッ！』

勝利の鍵はコレだ！

ココ！

←

【『幻想殺し』】

2011／7／5の更新を待て……！！

一夏

「まさか・・・」

一真

「その幻想をぶち殺す！（イケメンAA）」

H・1

「ああ、やはりBD画質では容量が！新しいHDD用意しないと！
（REC中）」

鈴音

「卑怯よ！」

セシリア

「詐欺ですわ！」

箒

「ズルいぞ先輩！」

シャルル

「お兄ちゃんの意地悪！」

一真

「一夏のラッキースケベ！」

一夏

「え、なんでお前がそっち側にいんだよ！」

一真

「伏線が本編だけしかないなんてのは固定観念なんだよ！前書きや後書き、さらには作品紹介欄までが本編です！（キリッ）」

主人公&ヒロインズ 一夏の余罪究明中・・・ですのっ

一真

「お前が言うなWWWとか考えた世界意志よ。ハッキリ言おう・・・私はムツツリだ。だから許される」

鈴音

「意味わかんないカミングアウトするなっ！」

シャルル

「はいはい。それよりも先に進めようか」

一真

「今回から感想に返事をする。前回までは誰の質問に対する答えか分からなかったからな・・・ちなみに自分がどこの党員か載せればその党首が読んでくれるぞフラッグファイター！ではアシスタントのラウラ、読んでくれ」

ラウラ

「了解した。」

まずは忘れられた亡霊氏からの感想。

リアルなシリアスです。かつこいい！

ISも最後は、『とある魔術』と同じで第三次世界大戦が開戦すると思いますか？あと、自分の考え的にはターンXは、ガンダムという部類に含まれるのだろうか――

弟さんはひげだし。

感想、感謝するぞフラッグファイター！・・・・・・これでいいのか少尉？」

一真

「パーフェクトだ、ラウラ」

一夏

「んー、確かに最後辺りはシリ阿斯になってたかな？」

箒

「ああ、喧嘩別れによる対立。そしてトーナメントへの流れはいいのかもしれないな」

鈴音

「これで一真が本気でぶつかるフラグになったしね」

一真

「ガンダムDXデイスってんのか?! ああ! ガンダムDXさんは髭も入れてカッコいいんだよ! ただし盾、テメエのカラーリングは微妙だ」

シャルル

「お兄ちゃん。X違いだよ」

一真

「ごめんなさい」

鈴音

「あとキレるな」

一真

「ごめんなさい（シヨボン）」

一夏

「それで、一真の意見はどうなんだ? 正直俺も少し気になるんだけどさ」

一真

「原作がどう展開するかはわからん。なにより最新の情報もないからな……」

まあ、それでも言うとな原作で第三次世界大戦みたいなことは起こらない」

ラウラ

「もきゅもきゅもきゅ（ラビオリオイシィ）」

セシリア

「ですが、ISの数やその在り方。さらには世界規模での競争がありますから小さなきっかけがあれば起こるのではないのでしょうか？」

一真

「いや、起こらないだろ普通」

箒

「ちなみにその根拠は？」

一真

「原作者がエロゲシナリオライターだから」

一同

『……ええ』

一真

「確かに、以前まで書いてたシナリオからすれば異質だ。だが三つ子の魂百までのように書き慣れたストーリーは簡単には脱せないもんだ。

あと、とあるシリーズで使ったネタは使い辛いだろ。第三次世界大

戦とまでいかないが、世界規模の大々的な争いを出すにはとあるシリーズの影響は大きいし」

一夏

「それだけ？もしかしてそれだけの理由で？」

一真

「個人的な考えだが、世界規模に話を広めたら風呂敷だって自然と馬鹿デカくなる。それを畳むのは用意じゃないぞ」

ラウラ

「ちなみに少尉はターンXについてどう考えているのだ？（ユビペロペロ）」

一真

「このターンX凄いやおおおっっっ！流石ターンAのお兄さあ
あああああんっっっ！」

H・1

「絶好調でああああるうっ☆」

一真&H・1

『いえーい（ハイタッチー2）』

鈴音

「アンタら真面目に答えなさいよっ！」

箒

「先輩のキャラが………」

一夏

「ブレない。流石一真ブレない」

一真

「正直言うと、ターンXってガンダムタイプじゃないよ。一応ガンダムの定義はツインアイにアンテナがある機体だから。それにターンXは外宇宙から流れ着いたからガンダムの系譜的には微妙かな。ターンX自体は戦闘用じゃなかったはずだし。

だがそれを差し引いてもギンガナムの乗るターンXは面白い。じゃあ何で出したかと聞かれれば、ガンダムシリーズでもわかりやすいチート機体だからだ」

ラウラ

「次は紅鎖氏から。」

内容自体は結構面白い方なのに感想が少ないのは設定が甘い性なのでは？

条約違反や軍事干渉に成り得そうな事が盛り沢山な感じなんです。以上だ。フラッグファイター！」

一夏

「これはまた・・・」

箒

「だが、作品は評価しているしアドバイスもくれている。つまりは作品の良さに対して評価が低いというのを嘆いた上での感想とも取れるぞ」

ラウラ

「条約違反や軍事干渉とは私の行為についてだろうか？」

一真

「はいはいシンミリしない（バリバリバリ）」

一夏

「煎餅嚙りながら場を纏めんな！」

一真

「まず、感想をありがとう。評価の低さを嘆いてくれたなら嬉しい限りだ。

だが、これだけは覚えておいてくれ。この作品は誰かに評価してもらいたいからでも、注目してもらいたいから産まれた作品でもない。楽しみたいから産まれたんだ。書き手が自分で読んで満足し、楽しむ。そして読み手も楽しみ、次の展開を楽しみにしてくれるのが書き手にとって最高の評価だと俺は思う。

感想を求めないのはただ人の評価に興味がないからだ。感想が無くともお気に入りに入れてくれた方や自発的に作品を評価してくれた方がいる・・・見辛い形でも評価はそこにあるなら書き手は励める。そんなもんだ」

一夏

（ヤバい、一真がカッコいい）

箒

（先程との落差が凄まじいな・・・まるで別人だ）

H・1

（マスターの凛々しいお姿）

鈴音

（空気読めポンコツAI！）

一真

「ちなみに軍事規約や条約違反についてだが、俺に関する物の大半はスルーされる。勿論大きな違反はマズいが、イザコザレベルなら国規模が無視するんだ。他国も同様だ。条約違反で俺を引き摺り回せば他国もそれを真似てしまう。そうなる困るのは自分だからな」

一夏

「つまり一真に法は適用しないと？」

一真

「ある程度の融通がきくだけだ。ちなみに銃刀法違反はこの際無視した方が幸せになれるよ☆」

主人公&ヒロインズ 食事中・・・
ラウラ

「では最後の感想だ。蒼龍一氏から。

やっと追いついた・・・で、あれらはなんだ？ ツッコミどころと知ってるネタが飽和状態じゃねえか W W W W W W 電車内で笑ってしまった
い周りから距離取られましたよ（泣）

有澤協力の元、レールグレネードなんて作ってみたいものだ W

今後もぼけ続けるが良い、全て突っ込み尽くそう。撃ち合いなら負けんよ、（ツッコミのネタが）分かればな・・・

以上だ。フラッグファイター！」

シャルル

（凄い違和感が・・・）

箒

（まさか我々が指名されたらあんなこと言わなければならないのか？）

鈴音

（むりむりむりむーりいーっ！）

セシリア

（か、一真さんのせいで！）

一真

「ネタの提供アートゴザアーシタツWWW
シリアスなんざ壊すもんだってバツチャが言ってた！そして私のネ
タは108式まである（ドヤア）」

一夏

「誰かコイツ止めて！」

H・1

「なら私は変身を後三回残している（ドヤア）」

一夏

「機械のくせにドヤ顔されてもわかんねえよ！」

H・1

「全く、貴方は馬鹿ですか？馬鹿なの死ぬの？
こういう物を見るのではなく感じるのです」

一夏

「黙れよ科学技術の結晶！もちっと科学らしいこといいやがれ！」

一真

「有澤工業の技術は世界一イイイイッ！」

そしてレールグレネードとか涎もんの装備あったの忘れてたわあ。
だけど最初は適当に好き勝手します。ドリルとか良くね？」

シャルル

「あれ、でもそれってマズいんじゃないの？」

セシリア

「確かにそうなる軍にバレた際に問題になりますわ」

一真

「何事もバレなきゃいいって何処かの偉い人が言ってた」

ラウラ

「な、なら私も立ち会っていいだろうか？！」

一真

「あつたりめえよ！誰も俺達を阻むこたあ出来ねえ！」

H
1

「高槻秋葉に報告します」

一真

「やっぱり悪いことはいけないよな（ウン）」

一同

『おおおいいいいいいつつつ！』

主人公&ヒロインズ 総入れ替え中・・・

少女B 改め佐藤みゆき

「というわけでレギュラー陣と入れ替えですー」

少女C 改め山田花子

「ハッハッハ、我が世の春がああああああっ！（orZ」

一真

「喧しい（ソバット」

花子

「オウフツ」

一真

「出番早々出落ちみてえに騒ぐな」

花子

「だって、だって！だってなんだもん！」

みゆき

「お願いーお願いー、傷付けないでー」

一夏

「私のーお肌ーがー、チクチクしちゃうのー」

箒

「嫌よ」

セシリア

「嫌よ」

ラウラ

「嫌よ。お願い嫌ー」

花子

「ハニーフラッシュ☆」

一真

「変わるわよ。」

さて、次行ってみよう」

花子

「待てやコラア」

一真

「面倒だし尺の関係上却下あ」

花子

「名前を変えろ！こんな、こんなヒロイン要素もない名前なんて嫌だ！」

一真

「我が儘言うんじゃないありません」

花子

「山田花子だよ山田花子！普通で平凡で淡々な名前の代名詞！
なんでみゆちゃんは可愛くて私は普通なんのさあ！」

一真

「お前が俺の日常の象徴になるからだ」

一同

『え・・・・・・・・』

一真

「お前らも知っての通り、俺は一般人には適さない環境下にいる。
命令に従い命を危険に曝し、何かある度に攻撃の対象となる。

・・・・・・試しに聞くが、俺が癒される場所って何処だ？俺は何
に癒されればいいんだ？」

一同

『・・・・・・・・』

一真

「このまま過ごせば日常と非日常の境が曖昧になる。そんな俺が日
常に帰ってきたと実感するための目安が、お前なんだ」

花子

「私が？」

一真

「お前の名前はな、俺の平和や癒しの象徴として名付けられたんだ。確かに字面は普通さ。普通で平凡で特殊な所なんか少しもない・・・だからお前しかないんだよ。佐藤も佐々木もダメだ。お前だからこそなんだ」

一夏

(一真・・・)

箒

(先輩はそこまで曖昧な世界に身を置いているのか)

セシリア

(気付きませんでした)

花子

「ぐず・・・一真、私間違ってたよ・・・私の名前にそんな意味があったなんて・・・」

一真

「・・・頼むよ」

花子

「うん、うん！わかったよ一真！私は何も恥じることはない！私は、求められているんだもの！私は、私は自分の名前に誇りを持つよ！」

みゆき

「ティッシュが、ティッシュが足りませんー（ウルウル）」

主人公＆ヒロインズ 感動中・・・

花子

「そーいやさ、今回色々説明が必要なの出てきたよね」

一夏

「アルミの箱出たな」

箒

「撃たれたのに平気だったな」

ラウラ

「反応炸薬というのも出て来たな」

セシリア

「一真さんの家族関係も出てきましたわね」

みゆき

「それにパルスライフルも使いましたねー」

花子

「先生先生！出番ですぜい！」

一真

「え、全部答えるの？かなり面倒なんだが（チーズケーキウマー）」

花子

「かずーがやらねば誰がやるっ！」

一真

「面倒だ……ざっくりだぞ。」

まずは、アルミの箱だな。これはセシリアとラウラ対策の武器だ。ビーム等の熱量兵装が水で減水するのは話したよな。つまり濃密な霧に居るかぎは平気だ。だがそんな霧が自然発生するなんて稀だ。だから大量の水を蒸発させて発生させたんだ。

この霧にはオマケにハイパーセンサーのジャマー的な役割も持たせてる。一時的にもハイパーセンサーが使い辛くなり、俺が無差別に攻撃すれば当然混乱する。それが目的だ」

一夏

「でもなんでアルミ？鉄とかあったんじゃないのか？」

一真

「確かに鉄も考えた。溶接するにも融点が高い鉄は楽なんだが、中身を気化させるには丈夫過ぎるんだよ。あくまで目的は水の気化だからな。」

さて、次は箒のか」

箒

「ナインボールの装甲が飛びぬけているのは知っていましたが、一体材質は何を使用しているんですか？」

一真

「本編でも話してる通り不明だ。素材から加工法、産出地全てな。それでも敢えて知りたいなら・・・」

1. 超合金ニューZα

2. バスター合金&スペースチタニウム

3. ヒヒイロカネ

縊り取りみどりですよお客様！さあ選べ！」

一同

『ふざけんな』

一真

「なんだなんだなんですかあ？これじゃあ不満だったか？

・・・仕方ない。オマケにナノスキンとDG細胞付けてやる」

一夏

「修復出来ないISに修復する装甲つけんな」

一真

「だったら控え目にミスリル、アマダンタイン、万能バンザイナノマシン」

花子

「ないわー。流石にそれはないわー」

一真

「それだけ不明な上に強いでFAだ。

さあ、次だ次だ」

ラウラ

「反応炸薬とは何なのだ？」

一真

「水に濡れると水素と反応して爆発する薬品だ。下準備にある程度熱さないと駄目なのが欠点だな」

ラウラ

「欲しい！その反応炸薬が欲しいぞ少尉！」

一夏

「そ、そんなに興奮することか？」

花子

「いっちー。水に濡れて爆発するってことはね、雨や水の中でも使用できるってこと。上手く開発すれば全天候で使える火薬が出来るかもしれないんだよ」

セシリア

「つまり、現在の魚雷よりもさらに強力な魚雷が作成可能なんですよわね？」

箒

「なるほど・・・」

一真

「特に薬品というのが都合よくてな。反応速度を調整できれば散らばった薬品が各々爆発するから対面攻撃も高い。装甲に付着するから簡単には拭えないしな」

みゆき

「なんか悪趣味ですねー」

一真

「お前に言われたら終わりだ。さて、最後は・・・」

セシリア

「一真さんの家族構成ですわ」

一真

「姉と弟、父と母の五人家族。以上」

ラウラ

「・・・・・・・・」

花子

「・・・・・・・・」

みゆき

「・・・・・・・・」

一真

「むぎゅむぎゅむぎゅ」

一夏

「・・・・・・・・」

箒

「・・・・・・・・」

セシリア

「・・・・・・・・それだけですの？」

一真

「話したくないでござる」

セシリア

「納得出来ません！」

一真

「基本、兄弟って嫌いなもの。親の話をするのもあまり気が進まない」

一夏

「え・・・・・・・・」

箒

「信じられません」

みゆき

「ラウラちゃんに甘々なお兄ちゃんとは思えない言葉ですー」

花子

「・・・・・・・・っは！」

一真

（あ、嫌な予感しかない）

花子

「私は、あまりに大変な事に気が付いた・・・・・・・・」

かずーはラウラに甘い。まるで兄が妹に接するような甘々さだったが、それは違った」

ラウラ

「ん？　どういうことだ？　少尉は私の兄ではないのか？」

一夏&箒&セシリア

「・・・・・・・・（ゴクリ）」

みゆき

「・・・・・・・・（ワクワク）」

ラウラ

「・・・・・・・・（ジーッ）」

一真

（ラウラの眼差しが痛い）

花子

「つまり、つまりかずーは未来の嫁であるラウラだからこそ甘やかしていたんだ！」

一同

『ΩΩΩナ、ナンダッテー！』

一真

「さて、帰って寝るか（ソソクサ）」

ラウラ

「そうなのか、少尉？（ガシッ）」

一真

「やめて！離して！自由にしてえ！（シニタクナーイ）」

一同

『話がある。そこに座れ』

みゆき

「ヒヤッハー！（モヒカンカツラ）」

花子

「全く世の中地獄だぜえー！（モヒカンカツラ2）」

一真

「汚物が消毒だぁー（テーレツテー）」

今回の舞台上はここまでとなります・・・

事件その12 「俺のこの手が真っ赤に燃えたっっっ！でさあ大変」 (前書き)

この物語はあるロボット物の原作の鬱さ加減を参考にしようと思
んでいる物語である。

「嫌だっ！死にたくない！父ちゃん、母ちゃん！」や「私のギジェ
が・・・ギジェーッ！！」や「これが・・・母さんです」を受け入
れられる方のみ御進みください。

それらが受け入れられない場合、「絶好調である☆」か「ユニバ
アアアアス！」と叫びながら黒歴史を繰り返しに行きましょう。

事件その12 「俺のこの手が真っ赤に燃えたっっ！でさあ大変」

学年別トーナメント3日目。

特別控室と銘打たれた地下通路の一角で一真は壁を殴っていた。

「ちくしょう・・・ちくしょう、ちくしょう」

『三回戦に凰鈴音、シャルル・デュノア。四回戦は一般生徒。決勝では織斑一夏、ラウラ・ボーデビツヒと他となります』

「三回戦で専用機二機相手にするなんて」

ガスガスガスと壁を叩きながら鬱憤を晴らそうとするが、手が痛むばかりで鬱憤は蓄まるばかりだ。

しかし、悪い事ばかりでもない。幸運なかあとにセシリアと二度当たらないからだ。

本来の予定では四回戦でセシリアとあたる予定だったが、彼女のISは先日の模擬戦によりフレームが中破したため棄権となった。

本人も悔しかろうと周りには同情するが、当の本人は周りの心配を余所にスッキリした顔立ちだ。

一真との会話で何かを得たらしい。

「……………乱入タイミングはいつだ？」

『4人の残エネルギーが計4000となった時点です』

H・1から予定を確認し終え、次いで大まかな作戦の確認を始めていく。次の対戦相手は凰鈴音ペアとシャルル・デュノアペア。どうあっても苦戦するのは目に見えていた。

（対戦相手は凰さん・・・パワー型のIS。近中を得意としている甲龍。

近接を得意とする彼女が相手となると春奈じゃダメだ。僕が相手をしなきゃ）

「よいしょ・・・。準備出来たよデュノアさん」

「うん。わかった」

カタパルトデッキにて開始の合図を待ちながらシャルルは相手のデータを確認していく。佐々木春奈もリヴァイブの調子を確認めながら邪魔にならぬよう一歩離れて機体の確認をしていた。

互いに試合を前に緊張感を高めながら僕は簡単なシミュレートを行う。

鈴音との戦闘を。

春奈は僕のサポートを。

「大丈夫か、シャルル？」

「一夏・・・それに篠ノ之さんも」

「応援に来たぞデュノア、春奈」

「ありがとう、2人共」

応援にやってきた一夏と箒を迎え入れる。

「まさか2人が来てくれるなんて、嬉しいな」

「友達だからな」

「だな。」

箒の言うとおり友達なら応援の1つくらい当たり前だろう？」

「とも、だち・・・友達か」

この学園に来るまで、まともな友達なんていなかった。

お母さんと住んでいた屋敷は一般的な家庭が住むには広く、大きいため周りは何かと壁を作った。唯一仲が良かったのも土地を貸していた農夫のお爺さんやお婆さん、それにアルバイトに来ていた大生くらいなものだ。同年代の友達なんて、学校でもいなかった。

みんなは僕ら母娘を見れば同情したり、嫉妬したり、侮蔑したりした。噂の中に僕達がデュノアに関わっていると言うものがあつたからだ。

お金持ちの妾とその子供。差別されるには十分な要素だ。

子供は親から聞かされたり、聞いた話を鵜呑みにした。僕と関わっちゃいけない。僕と関われば自分も同じ目に会う。そんな遊びまです流行っていた。

そんな僕に出来た友達が、今、こうして僕のために来てくれている。信じられないことだ。

「嬉しいんだね、デュノアさん・・・」

春奈に肩を抱かれ、流れだす涙を拭う。必死に笑顔を作って、この感情を伝える。

「うん、うん・・・うん！」

春奈は優しく笑いかけてきた。それが僕には嬉しかった。

「試合は大丈夫なのか？勝てそうか？」

「相手はあの鈴だ。代表候補は伊達じゃない。気を引き締めていけ」

落ち着いた頃を見計らって試合の話を持ち出す。

次の対戦相手は凰さんと布仏さん。どちらも攻めるタイプの人間

だ。

「たぶん、負けると思うよ」

正直な所、僕は勝てるとは思っていない。勝ちたいとも思っていない。だって2人は僕達が苦手なタイプだし、勝ったところで僕に利益は……ケーキ。

「勝負が始まる前から諦めるな！」

「確かに、確かに篠ノ之さんの言い分も分かるよ……でもね、中国代表候補って他国より質は高いんだ。全人口14億人。その内の数千万の中から選り出された1人。

しかも途中編入が許されるくらいだ。たぶん凰さんは強い、それもこの学年の中でも屈指だ」

「対策とかないのか？」

「……あるよ。ただ、これは春奈ちゃん頼みになる」

「私……？」

自分のことが話に出てきたせいで春奈ちゃんは酷く驚いた。わざとらしいくらいに肩が跳ねるが、これが彼女の素というのはもう知っている。緊張して珈琲に砂糖じゃなくて塩を入れたくらいの上がり症というのも重々承知している。

「僕が凰さんを引き付け、春奈ちゃんが相手側のパートナーを倒せれば勝機はある」

3人の視線に固まってしまう春奈を一夏が笑いかけること緊張を解す。彼女も笑い返そうとするが、どうにもぎこちない笑顔に一夏と箒は不安になってしまう。

「大丈夫だよ、春奈ちゃん。僕達は今まで上手くやってきたんだから。実力も僕が保証するし、うまくいくよ。
君は、君がベストと思うことをして」

「私のベスト・・・」

考えだす香奈を眺めていた僕は開始時間まで残り少ないことを3人に告げた。

「頑張れよ」

「うん。出来る限りはするよ」

同時刻。鈴音側のピットにはセシリアが彼女の応援にやってきていた。

「まさか、アンタが辞退するなんてね。本当に悔しくないの？」

「確かにー。セシセシってプライド高いもんね」

「悔しいですわ」

「早いわね。」

それにしては顔には悔しいー、なんて書いてないじゃない」

「それは悔しさよりも嬉しさが勝っていますもの。」

私、あの試合で一真さんとあたった事を神に感謝したくらいですわ」

満たされた笑顔を浮かべるセシリアに感化されて私も自然と微笑

んでしまう。友人が満たされているのだ、嬉しくないはずが無い。

誇らしげに胸を張り、どうだと言わんばかりの顔は正直叩きたくなる。コイツは私に何か恨みでもあるのだろうか。傲慢か？胸を傲慢してるのか？女は胸が全てじゃないんだからね！

「わぁ、セシセシ、今すんごく綺麗だよ」

「・・・ふん。」

でも、なんでまた？」

「ふふ。秘密ですわ」

本当に叩きたくなってきた。

「意地悪いわよ。いいから教えなさいって」

「ダメです。一真さんにも悪いですしね」

「なにになに？ いっちーからかずーに鞍替え？」

「ありえません」

残念だ。これでライバルが減ると思ったのに。

しかし、同時に安心もした。彼女がそこら辺にいるミーハーとは

違い、一途だったことにだ。尻の軽い女はあまり好きになれない。

「・・・可哀想に、かずー」

「アンタら、何時の間に仲良くなったのよ？」

「理解し合う、と言えいいんでしょうか？」

あの試合で私は一真さんの気持ちがあった。だからですわ」

思い出し笑いをするセシリアに対して鈴音は真面目な顔付きになる。

「まさか相互意識干涉？」

あれって都市伝説じゃなかったの？」

「実在しましたわ。」

最初は、幻覚や幻聴としか感じませんでした」

都市伝説にも近い相互意識干涉。それはIS同士の衝突の際に起こる脳波干涉の一種らしい。

あまりに実例が少なく、また証言も定かでないためIS乗りの中では都市伝説として語られる現象。曰く、相互干涉に遭えば相手を深く理解出来るという。

セシリアの様子から、よほどアイツが好印象だったのかまるで幼

馴染みのように彼を扱っている。

「そういえば、鈴さんは大丈夫なんですか？」

「試合？」

余裕よ余裕。私だって中国代表候補。数千万の同胞の中から選ばれた10人の内の1人。

私は、勝ちしか許されないのよ」

そう、私はそんじょそこの代表候補とは違う。自分の力だけでここまで来た。誰の力も頼れずに。

「流石中国代表候補！私のデザート生活のために頑張ってね♪」

「——って、アンタも働きなさいっての！」

「ひはいよーひんひん！」

「喧しい！」

後ろから抱き付いてくるノホホンのホッペをこれでもかと伸ばす。
まるで餅のように伸びるホッペだ。

「……………貴方も、良い機会になればいいですわね」

「なによそれ？」

初めて見るお嬢様らしい笑い方に見とれてしまう。そして声に刺が付いてしまった。

自分でもやってしまったと思ったが、私の友人は中々に心が広いのか気にしてはいない様子だ。

「たぶん、この試合に一真さんは現われますわ。確実に。そして貴女達を潰しにかかる。」

あの方は我々が知るIS乗りじゃありませんことよ」

「だからなに？

たとえば私の前にアイツが立ち塞がっても・・・私と甲龍が砕いてやるわ」

「随分な自信ですが、何か策があるのですか？」

「ないわ」

「ないんですの?!」

「嘘ーっ?! 信じてたのに!」

2人のブーイングに少し傷付いた。それでも私は中国代表候補。自信満々に強がる。

「だってまどろっこしいじゃない。

私は、目の前の敵を倒すだけ。これまでがそうであったように、これからもそうするつもりよ。

なにより、アイツが乱入するとは限らないじゃない」

そうだ。二回戦だけでも十数組の試合があるのだから、ピンポイントに私に当たるなんてありえないわ。

「おお、リンリンかっくー♪」

それにアイツと戦うというのも悪くはない。アイツが本気を出したとこなんて見たことないから見たいし、何より上下をハッキリと示せるのがいい。

確かにアイツは生半可なやり方じゃ勝たせてはくれない。それでも、私は勝たなくちゃいけない。

目の前に現れた壁を1つ、1つ壊してきた。壊しては立ち止まり、進んではまた壊してきた。大きな迂回路に密集した壁を壊した分だけ自信がついた。壁の数だけ強くなれた。そしてまた目の前に壁が現れた。壊し慣れた壁と毛色こそ違うかもしれない一真だが、自分のやることは変わらない。

私はそうあるべきなんだ。

「・・・・・・・・あの一真さんですよ。

こんな絶対不利な状況。誰もが絶望するようなタイミング。あの方なら嘆きながら乱入しますわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「三組名物かずーは期待を裏切らないのが信条だからね」

容易に想像出来てしまう事に小さな汗を作りながら素直に考えを訂正した。しかし、基本方針だけは変えない。

「だとしても、そうなれば乱戦必須。一真の武装だってシャルルを利用すれば封じれるじゃない」

アイツの主武装はマシンガンに大型ブレード、それに垂直落下式ミサイルだ。乱戦下で驚異になるのはミサイル位なものだ。

「私も、そう考えていた時期がありましたわ・・・その結果があれです」

「勘弁してよ。もしアイツが甲龍かシャルルの対策取ってるなんて考えたくないっての」

「甲龍には熱量兵装はありません。私のように封じられることはありませんが、甲龍の射撃兵装は衝撃砲しかありません」

「つまり、アンタは一真が遠距離でアタシを攻め落とすって言いたいのか？」

一番ベターなのはそれ位だ。視界を塞ぎ、こっちの範囲外から一方的に攻める。アイツが好きそうな戦い方だ。

「私ならばそうします」

試しにシミュレートを始める。

甲龍の基本兵装は両肩の衝撃砲と双天月牙のみとし、相対する相手はシャルルとしよう。

まずは得意の間合いに持ち込もうと近付く私をシャルルなら牽制

射撃を混じえながら距離を取る筈だ。焦れた私はきつと射撃砲を放つだろうが、相手は回避に専念しながら射撃をたまにするに違いない。そうなれば後は持久戦にもつれ込む。

衝撃砲はその利便性と衝撃の代償に多大な反動を伴う。現在、浮遊部位として存在しているのとて技術を見せびらかすためでなく仕方なくそうしているんだから。

基本骨子に射撃武装を2つも取り付けた場合、互いに反するベクトルにより一発で基本骨子が歪む可能性があるとアイツから聞いた。

もしPICやAICが不調な時に使えば、パイロットは反動により生まれる力の捻れで大怪我をしてしまう。さらには小型化が進んでいない衝撃砲を固定するには既存IS基本骨子はあまりに小さ過ぎるらしい。取り付けようとすれば全長8m級にしなければ現在の技術力では装着部から吹き飛ばらしい。

それはそれで有りじゃなかろうか。「来なさいっ！甲龍つつっ！」と言って8m級のロボットを身に纏う……今度進言してみよう。

さて、話を戻さない。

それを解消したのが浮遊部位として宙空に待機させる方法となる。欠点は衝撃砲自体にもPICを展開しなければいけないため意識をそちらにも向け、さらにはエネルギーも消費しなければいけない。使える人材を狭めてしまうのが一番の欠点であろう。特に私みたいな近接格闘を本命とする人間には欠点でしかないのよね。まどろっこしい。

副産物として生まれた死角のない射撃武器に周りは注目しているが、身内から見れば欠点があるし、外から見てもすぐに思いつくような欠点。現に整備に携わった一真はすぐに言ってきたくらいだ。

「確かに思い出してみるとそんな節があるわね、アイツ。

・・・上等よ。たえアイツが甲龍を知っていても真正面から受けて、粉碎して上げる！」

自分の弱点を突きに来る相手を倒す。そんな現状に鈴音は一種の英雄的な状況を見て燃える。

不利から勝ちを見いだして勝利する。誰もが息を呑む逆転劇ほど見栄えの良いものはない。

それに、アイツが知っているのはあくまでカタログスペック。実際の稼働データじゃない。ならそこを突く。

私にも奥の手はあるのよ、一真。

「おーリンリンが燃えてる」

「だから！そのあだ名は止めてよ！」

「えー可愛いのにー」

「ダメなものはダメ！」

「甲鉄少女リンリン☆マジカ・・・もう何も恐くない」

「それはコイツのセリフよ！私にそんなフラグ立てるな！」

「んなっ！私だってそんな不吉なフラグいりませんわ！」

「なるほど、狙撃少女セリン☆マジカか・・・これは流行る！」

「やめなさい！」

「ぶーぶー！」

「まったく、雰囲気台無しよ」

「ふふ。」

とにかく、気を引き締めなきゃ揚げ足を取られます。あの方はそういったのが得意ですから」

「取れるもんなら取ってみろっての。」

中国代表候補は地位や名声だけの偽物じゃないってことを叩き込んでやるわ」

甲龍の手を見ながら笑みを浮かべる。攻撃的な、肉食獣を思わせる笑みだ。

「負けない。そう、あんな何も知らない奴なんかに負けない」

模擬戦の試合は膠着していた。

僕と鈴音がアリーナ上空を飛び回りながら激しく攻守し、アリーナの中腹から下部にかけて春奈と布仏さんが一撃離脱を繰り返しながら互いに僕達の所へ行くのを阻んでいる。

互いに孤立しているこの状況。パートナーが倒された瞬間に負けが確定するのは明らかだ。そのため、全員が思い切った行動も出来ず泥沼化し続け、結果、ただ精神を磨り減らす。

（マズい・・・このままじゃ押し切られるかも）

（マズいわねー。私は平気だけど、布仏の奴、潰れちゃうんじゃないかしら？

・・・攻めても良いけどたぶん相手もそれが望みだし)

(うう、疲れてきた・・・あれ、IS反応?)

(わあ、ここまで長引くなんてハルルン凄い)

優位に立つが故にリスクを冒せず、ジリ貧だが失敗すれば状況を覆す機会が無くなる。

失敗が許されない状況に鈴音以外は様子見るしかない。故に僕はある望みを抱いていた。

(お兄ちゃんが、お兄ちゃんが来てくれれば・・・)

(一真来るな！一真来るな！一真来るな！一真来るな！一真来るな
あああああああつ！)

・・・つか、来たら殺す)

(え? ころ・・・え?)

機会を窺いながら逃げ続ける僕に対し、現状に痺れを切らした鳳さんが被弾覚悟で接近してきた。

(一真が来る前にコイツを墜とす!)

お兄ちゃんが乱入するまでの時間稼ぎにとアサルトライフルをバラ撒きながら逃げる。

凰さんは絶対防御が発動しないよう体の軸をズラし続けながら間近に迫り、双天月牙で斬りかかってきた。

なんとか避けた刃はライフルの銃身を根元から切り裂き、暴発した弾丸にシールドエネルギーが削られる。

盾で防ぐべきだったかもしれないが、そうなると近接戦闘に持ち込まれる。そんなことになるくらいなら武装1つは痛くもない。うん、痛くないんだ……。たかが数十万のアサルトライフルくらい痛くないもん。

互いのシールドエネルギーが2500を切った瞬間だ。

凰さん側の管制塔にIS反応が現れた。

【警告。ロックオン警報、ロックオン警報】

「「っ?!」」

警告と同時に多数のミサイルが亜音速で接近してくる。

お兄ちゃんの乱入を前提に動いていた僕達はすぐさま目の前の敵からミサイルへ意識を移し、緊急回避を取る。

僕は余裕を持って避け、追尾しようと旋回するミサイルを打ち落とす。撃ち洩らしたミサイルを盾で防ぎ、そのまま管制塔から距離を取る。

対する凰さんだが、ミサイルを擦る程まで近付けてから回避すると双天月牙でミサイルの噴射口を切り裂く。あんな神業が出来る凰さんには尊敬の念を送るしかない。

そして気付けば、互いに手を伸ばせば届く距離にいた。まるで仕組まれたような展開だ。

背中に嫌な汗が吹き出るのを感じ、すぐさま離れようとブースターをさらに噴かす。

『デュノアさん! 下から!』

「っ！」

春奈ちゃんの叫び声を理解するよりも先に体が動く。

立ち止まって周りを確認するなどせず、春奈ちゃんを信じて慣性に逆らわず進行方向へ体を押し込むように加速する。

急激なGと無理な加速に吐き気をもよおし、体の節々が痛んだ。さっきまですぐ近くにいた鳳さんは、今では離れた場所で立ち止まっていた。

彼女は僕の後を追おうと緊急停止、加速をつけようとしている。だが彼女が停止したタイミングでさらに警報が上がった。

【警告。IS反応出現。真下より急速接近】

「は・・・？」

その声は僕のものでなく、彼女の声だった。

管制塔のIS反応が未だ存在する中、真下からもIS反応がとてつもない速度で近付いてくる。凰さんじゃなくてもそんな声は上げなくなる。

乱入者はお兄ちゃん1人のはずなのに、反応が複数現われたことに僕達全員の思考が停止した。

激しい切削音がアリーナに響き初めて二秒。凰さんの真下から巨大なドリルをつけた何かが信じられない速度で飛び出してきた。

彼女は慌てて避けたが、ドリルは衝撃砲の一部を削り取りながらアリーナ上空、シールドのギリギリで煙幕を噴出。アリーナ全体に薄い煙が満たされていく。

お兄ちゃんの上等手段だ。つまり、ここからが本番である。

舌打ちしながら襲い掛かる兵装を双天月牙で弾く。衝撃砲で一思いに破壊したい気持ちを飲み込み、ギリギリまで引き付けて弾く。

物理的に無理のある180度旋回を決め、突撃を続けるソレに射撃体勢も取れない。目前に迫るソレを弾き、衝撃砲を構えたがやはり見事なターンを決めて迫ってきた。

「しつこいってのよ！あーもーっ！」

何度目かになる苛立ちの声と共に力一杯ソレを弾く。装甲が凹んだが、破壊するにはまだ足りなかった。

ハイエナかピラニアのようなソレを睨みながら今度は自分から打って出るが、まるで此方の意図を読んだかのように逃げ出すソレに苛立ちを込めて双天月牙を投げる。

生き物のように双天月牙を避けるソレは驚異的だ。何せ接近戦を主眼に置いた甲龍の装甲を簡単に削ったのだから。

駆動音が耳に残るくらいの距離で避けると冷や汗が出た。本当に苛立つ武装だ。

唯一の救いは、本命が自分ではないことかもしれない。

「なんなのよあの人形は！」

ドリルに抱き付くように取り付けられている人形。ちょうど祭な
どに売られる風船のような見た目のそれからISと似た反応が出て
いた。本当に舐めている。

追尾性のある兵装、BT兵装の亜種か何かのようなソレを相手に
しながら鈴音は装甲を削られながらドリル兵装を殴る。

大きく揺れたが、次の瞬間には何事も無かったかのように突撃し
てきた。

凰さんが特殊兵装、ドリル君の相手に手を焼いていた中、僕は管

制塔から急速接近する反応を迎撃していた。

薄い煙幕の中での春奈ちゃんのナビゲートは完璧と言えた。方向や速度、角度、敵機的位置を分かりやすくナビしてくれたおかげで回避に専念できた。

通り過ぎる度に予備のアサルトライフルを放つ。

蛇行、旋回、急上昇、急下降と無茶な動きをする機影に舌打ちをしながら煙幕を突き破るドリル君を慌てて回避する。去り際にアサルトライフルを放つも、ドリル君のブーストによる急旋回に弾丸は虚しく煙幕の中に消えていく。

レーダーを確認しながらドリル君の駆動音に注意を払う。

（凰さんと僕の所に反応があるけど、お兄ちゃんがまさか僕を狙うなんて）

『方角15時角度37から来るよ・・・！』

「了解！」

アサルトライフルからショットガンに換装したシャルルは散弾をバラ撒きながらミサイルを放つ。

アサルトライフルを避けながら突撃してきた機影もミサイルに気が付くと急旋回を繰り返しながら逃げ始めた。

そこに攻撃の機会を見出した僕はパイルバンカーに炸薬を装点。
一気に距離を詰める。

ミサイル同士の接触による爆風や偶然付近を飛んでいたミサイル
の誘爆に揉まれた機影の隙を突く。

「これで！」

体勢を整えようとする機影に向かいパイルバンカーを突き刺し、
引金を引く。

お腹に響く爆発音と共にパイルバンカーが機影に、

——深く突き刺さった。

「え・・・・・・・・・・？」

本来なら絶対防御に阻まれて突き刺さるなどありえないパイルバンカーが、機影に根元まで突き刺さっていることに固まってしまう。

殺してしまった。

一瞬そんな悪い未来が横切る。

しかしお兄ちゃんのバイタルサインは以前と変わらぬ緑を示している。よくよく見ればナインボールと見ていて機影の正体は良く似た人形だった。趣味が悪い。

「マズい」

罠にはめられたことに気付いて逃げようとする頃にはもう遅い。ドリル君の装甲が展開、開かれた部分から大量の小型ドリルが一斉に飛び散った。

それは遠くで嵐さんを襲っていたドリル君も同様で、アリーナにいる4人に等しく小さなドリルが降り注ぐ。

「っんのおおお！」

「くうっ」

「きゃあぁっ」

「なんだなんだー？」

一人だけ間延びする悲鳴を上げるなか、アリーナに新たな反応が現れる。僕達側の管制塔。そのカタパルトに反応の正体はいた。

「————」

カタパルトから飛び出した影は未だに怯んだ4人に対してミサイルが放たれる。

反応の遅れた布仏さんと春奈ちゃんが爆炎に呑み込まれ、僕と凰さんは直撃こそ免れるも爆風に揉まれて体勢を崩してしまう。

爆風によって爆炎と土煙が晴れたアリーナの中、僕と凰さんは1000以上減らされたシールドエネルギーに顔を顰めながら視界の中に収めた敵影に注意を払う。

肩から背中にかけて取り付けられた蜘蛛のような細い特殊アームにドリル君を固定させ、自分より下にいる2人を見下ろす一真。そのアイカメラの光からは不思議と威圧感を感じる。

「テストモード起動…………追加PACシステムリンククリア」

起伏の乏しい喋り方だった。まるで合成音声のような淡泊な話し方に寒気を感じる。

お兄ちゃんは両腕をドリル君へ差し込み、巨大な腕となったその具合を確認する。

「うち、趣味がよろしいですこと」

「・・・・・・・・カッコいい」

合体したドリルアームを右に左に回転させながら調子を確認。一度だけ回転数を最高まで上げると満足気に頷く。

両腕が巨大なドリルとなった姿は全体的にガツシリとし、力強さが増したような気がする。

黒光りする装甲は濃紺のナインボールとマッチし、いつかみたアニメのロボットのようだ。カッコいい。

（さーて、どうしたもんかしらね本当に）

（ドリル型の追加PAC・・・あの小さなドリルは範囲が広過ぎる）

（貫通性は低いけど・・・一発あたりが地味に痛いわ。

それに、絶対防御が発動しないと装甲自体のダメージが無視できない

いわね)

(右足の回路が傷付いたのか違和感がある。もしかしてこういうのが目的なの?)

ここは凰さんと協力しないとマズい)

(こうなるとシャルルの相手はキツイわね。
まずはアイツを止めなきゃ)

「作戦行動開始」

「「っ!」」

二回戦の第2ラウンドが今開始する。

瞬間加速により突撃した一真は片腕を後ろへ振り絞り、ドリル君のブースターによる推進力も上乘せして打ち込んで来た。速度には驚いたが、機体の重さで構えに時間が掛かりすぎている。

（馬鹿正直ね。そんな単調な攻撃に当たるわけないでしょ！）

（あれ？何故かお前が言うなと言いたくなった・・・そして間違いないという確信が持てる）

正拳突きにも似た攻撃はただ後ろに下がる事で簡単に回避出来てしまう。

攻撃による伸びきった腕は体全体を数秒硬直させる。これがただの腕ならば問題はない。だが巨大なドリルになると体勢を整えるのに数秒はかかる。

たとえ反対の腕を使って反撃を狙おうと、巨大な腕はそれだけ初動に時間がかかる。さらには伸びきった腕のせいで攻撃範囲が半分以下だ。どう足掻いてもこのタイミングの攻撃は防げない。

（使い慣れてないPACなんか使うからよ馬鹿！）

数秒。

それだけの時間があればコイツに攻撃をあてるなど難しくはない。
だけど、私達の考えは甘かった。

相手が悪かった。

それは、間の抜けた声と共に放たれた。

「ろけつとばーんち」

「はあっ?!」

なんともやる気を削ぐ声と共にドリルアームの前部が炎を噴射しながら双天月牙を振り上げた私の腹部に突き刺さる。

腹部に突き刺さるドリルは個別に設けられたブースターと打ち込んだ際の力を味方につけ、重量のある甲龍の装甲を抉り、吹き飛ばす。

「~~~~っ！」

体勢を整えた私は腹部の痛みで目尻に涙を溜め、装甲が削られた際のガリガリとした感触に生理的嫌悪を感じ、鳥肌がたつ。

思い出した。今更だが、相手が一真なのだと実感させるふざけた一撃だった。

「一夏みたいな単調馬鹿とは違うのだよ、一夏みたいな単調馬鹿とは。」

「……………ごめん。そーいや負けてた上に同類だったな悪い」

本当に申し訳なさそうに頭を下げる。

ちよと待ちなさいよ。誰が誰と同類で、誰が誰に負けたって？

コイツは、本当に人を小馬鹿にする天才ね。ボッコボコにしてやる。

「っ痛……中々に愉快的な玩具ね」

「愉快的な玩具だと……テメエ、ドリル君デイスってんのか?! チビ子中国!」

「いきなりキレイな！」

「ドリルはな、ドリルは男の魂なんだよ！浪漫なんだよ！お前だつて男ならわかんדר！」

「私は女よ！」

「え？」

「はあっ?!」

「え？おと、女・・・・・・・・え？」

意味の分からない事を言い出したと思ったらいきなり困惑しながら私の体を見てくれ。特に胸だ。

アイツは丁寧に私とセシリアの姿をディスプレイに映して見比べている。

そして、

「っふ」

鼻で笑いやがった。

「おーけえー、おーくえー。クロス」

「やだ、なにこのおと・・・女の子怖い」

明らかに胸を差しながら、しかもわざとらしく間違えた。

いくら心も器も広い私とはいえ、我慢にも限度がある。以前の恨みも思い出すとここでコイツは落とすべきだ。私が決めた。だから
クロス。

「上おおお等だゴボウ野郎オオオオオ！」

「やれるもんならやってみろやまな板アアアア！」

コイツ　ハ　ワタシ　ヲ　オコラセタツツツ！

あれから攻めに攻めたが、戦いは始終一真のペースで進んでいた。後にして思えば一真にしては珍しいほどに荒々しい闘い方だ。

一真はいつも被害の少ない戦い方を選んできた。煙幕を張り、相手の攻勢を封じ、自分の有利になるように物事を進めてきた。

慎重派、臆病、絡め手……そういった戦い方をしてきた一真にしては珍しいと思える戦い方だ。

以前の、キレていた時とは違うのは分かる。あの時は機体性能をフルに使って始終相手を押し込んでいた。

暴れるように、反撃は許さないと言わんばかりに暴力的な戦い方だった。

「おらあ！」

「っの、舐めるな変態！」

「変態言うなまな板！」

「ぬああんですってええつつっ！」

以前と違うのは意志疎通が出来、さらには攻防共にしっかりとなしていた。

一真は巨大なアームを振り回しながら私と激しい空中戦を繰り広げる。

最初こそドリルアームを馬鹿にしていたけど、今では意外な活用法に舌打ちをしながら回避に専念しているばかりだ。

（ただの玩具って馬鹿にしたけど……趣味もここまで来ると半端ないわね）

打ち込まれたドリルを防ぐ度に手が痺れ、痺れを振り払うように双天月牙を振り抜く。

一真は攻撃全てを滑らかな装甲で刃を滑らせ、がら空きになった体にドリルを叩き込む。

次からはコイツを馬鹿に出来ないかもしれない。

此方の攻撃を見切って装甲で滑らせるなんて何か武芸でもしてなきや出来ない芸当だ。喧嘩慣れでは説明なんてつかないし、その程度で防がれるような鍛え方もしていない自信はある。

（流れが悪いわね・・・一度離れるべきかしら）

武術においてそうした切り換えは必要だ。特に自分の作った流れが悪い場合は何処かで切り換えると事態が好転しやすい。

しかし、一真も流れを切りたくないのかドリルを打ち込みながら近づき、元の状態に引きずり込む。

シャルルが相手ではこうも上手く行かないだろう。なにせあっちには銃器が多数あるし、そっちが得意だ。私と甲龍相手だからこそ可能な戦い方なのかもしれない。

ドリルアームの攻撃は非常に重い。さらに回転する刃は防いでも気を抜けばガードを破ってくる。

こうなると長物の双天月牙は相性が悪い。刃の長さに対して柄が短く、長さに比例して手元は大きく振動し、反撃に移るのは至難だ。

「いんのっ！」

負けじと攻撃しているが、今のところ決定打はない。

巨大なアームはそれ自体が盾の役割も果たしており、一真は必ず体を守りながら打ち込む。

罅迫り合いを避け、衝撃砲を撃たせないようする辺りが憎く、体運びも此方が体勢を崩すようにしているから憎さ倍増というものだ。

（試合が終わったら殴ろう。そうしなければ腹の虫が治まらないわ）

（般若みtainな顔してるんですが……かなり怖いよこの絶壁ロリ中国）

（殴る。絶対に殴ってやる！）

（……何故か心を読まれた気がする。そして顔がさらに怖くなったからあながち間違いない）

攻撃の手をさらに苛烈にするが、それに一真も負けじと食い付いてくる。

時折蹴り等も交えるが、地面の力が無いために踏張りのきかない蹴りは軽い。

出力が共に対等に近い中、一真を押し切るのは難しかった。ナインボールを舐めていたのが仇になった。

「僕を忘れてもらっちゃ困るな！」

「っち！」

横合いから割り込むようにショットガンを連続して放つシャルルに怯んだ隙に一度大きく距離を取る。

（今なら！）

衝撃砲の準備にかかる。

このタイミングで衝撃砲を当てれば最初のアドバンテージは取り返せる。

此方に気付いて一真はシャルルの銃撃から逃げながら数秒、攻めるか逃げるか迷っていた。

アイツが選んだのは逃げだった。

目先の安全の為に一度距離を取ろうとブースターを全開にして逃げる。真っ昼間だというのにナインボールのブースターから青い炎が尾を伸ばす。それはとても綺麗で、残像はまるで流れ星のようだった。

「っち」

流れが切れたことに舌打ちする俺に衝撃と銃弾が殺到する。

一人に対して過剰過ぎやしないか、これって私刑じゃないのか、と愚痴りながらランダム機動で逃げる。

衝撃砲だけはH・1のナビで問題なく避けられたが、銃弾は多少のダメージを受け入れなくてはならないのが痛かった。

衝撃砲は単発だが、銃弾は毎秒十数発だ。タイミングをずらしただけで避けられるほど甘い物ではない。

H・1から提示された予想ダメージは350程だったが、偶然か狙ったのか衝撃砲に弾かれた弾丸によってダメージを受け続けた結果、ダメージは500にまで蓄積した。

さらにタイミングが悪いことにドリルアームのエネルギーがレッドゾーンに差し掛かってしまい、やむなく固定アームに取り付けるとマシンガンを取り出す。

ドリル君は未だ試作機。ジェネレータ内蔵型ならばもう少し稼働したかもしれないが、バッテリー内蔵型となると何処かで充電しなければいけない。聞かされてはいたが、ここでバッテリー切れになるのは大きな欠点だ。

スカートからイヤリングを取出し、マシンガンを呼び出す。

牽制にもならないと分かりながらも鬱陶しい2人の攻撃を止めようと弾をバラ撒く。

当たれば儲け物だが、2人として射的の的ではない。

2人は打ち合せでもしたかのように反対の方向へ避けた。一瞬の迷いが産まれ、仕方なく鈴音を追撃しようとマシンガンを向けるが、

「私達も忘れちゃ困るな」

いつの間にか近付いていた布仏にその手を中断させられた。本当に今の今まで気付かなかった。

此方の死角から刀で斬り付けようとする布仏にアームを操作し、ドリルを向けて放つ。

「ええー折れちゃったー?!」

布仏は刀でそれを防ぐも、ドリルの衝撃と振動に耐えられずにポツキリと折れてしまう刀に驚きの声を上げる。

とりあえず1人は落とせるため布仏に接近、

「え?」

「はい、ご苦労さん」

ドリルを突き刺す。シールドを破り、装甲を削る刃は絶対防御を誘発させてエネルギーを削り取る。

多大なダメージを受けた布仏がゆっくりと落ちていく姿を見ながら一真は減ってしまったエネルギーを名残惜しそうに見ながら再充電を始める。

「そーんなー」

「しかし熱い」

サウナのような熱気に包まれた体は数分前から汗が滝のように吹

き出し、吸水性が最悪な耐圧スーツの中は少しずつ汗が溜まってく。

先程から汗が滝のように止まることなく溢れ続けている。足首で何かが波打つあたりかなり汗を掻いているようだ。

生理的嫌悪に顔をしかめながら今すぐスーツを脱ぎたい欲求を殺す。

「熱い」

脱水症状が起きる前に終わらせたいな、と考えながらエネルギーの充電が済んだドリル君を装着。すぐさま小型ドリルを3人にバラ撒く。

シャルルは装備された盾で最小ダメージに抑え、鈴音は衝撃砲を連続で放ち持ち堪える。ここまでは予想通りだ。

ただ、1人だけ予想外がいた。

「危なかった・・・」

春奈だ。

予定では今ので春奈は脱落するだろうと考えていたが、彼女は一瞬の判断で鈴音の背後に隠れた。

もし鈴音が衝撃砲を撃たなくても、誰かが防ぐか被弾すれば無事でいられる範囲ギリギリに彼女はいた。

これにはH・1と一緒に驚いた。

奥手で引っ込み思案な昼行灯。彼女に対する感想はそれぐらいだったが、その評価を改める。あんな英断、少なくとも俺には出来ない。

ある攻撃範囲から障害物により産まれる安全空間を割り出すだけなら素人でも大雑把な位置は出せる。それが数秒の出来事になると出来る人間はどれくらいになるのか俺には予想もつかない。

ただ、佐々木春奈が只者じゃないのは分かる程度だ。あれも一種の才能なのかもしれない。

『先程の攻撃で小型ドリルが切れました』

模擬戦もいよいよ大詰めだ。

模擬戦から数時間後。現在、私たちは学園内にある医療施設にいる。理由は一真の見舞いだ。

「まあ、勝ちっちゃ勝ち、なんだけど・・・」

「なんかスッキリしないね」

結果から言おう。模擬戦はシャルル達が辛勝を納める結果となった。

その後、ナインボールと3対1の形で戦っていた私たちは一真をある程度まで追い詰めることが出来た。

勿論、代償もあった。

私は双天月牙を砕かれ、衝撃砲も使用が出来ないレベルの破損を与えられた。シャルルに至っては武装の三割を破壊された程だ。

しかし、それらの代償を払った結果としてドリルを破壊。さらに

は一真との殴り合いにまで持ち込むことが出来た。

その途中だろうか。アイツの様子がおかしくなったのは。

一真は壊れかけのドリルを私らに放って距離を稼いだ。今までのアイツにしては焦りを感じさせた動きに私らも慌てて追った。今までの経験上、一真はまだ何かを隠している気がしたからだ。

シャルルが牽制し、一真が足止めされていた間に近付き逃げ道を塞ぐ。そこからは互いに拳で戦う事になった。

最初こそ、多少は苦戦すると思っていたが一真は思いの外に拳や蹴りを防げなかった。動きが鈍いと気付いたのはその時で、熱いと感じたのはそれから暫く殴り続けた後だった。

その時だ。私の中に何か流れ込んできたのは・・・

私が手を止めたせいで一真は逃げ、そのおかしさに戸惑っていたら時間切れによりシャルル達が勝者となった。

私らは一真が勝手に撤退理由を聞くために管制塔に急いだ。そこで見たのは担架で運ばれていくアイツだった。

一夏達に聞いたところ、IS内の内部熱により脱水症状を起こしかけていたらしく、撤退を始めた辺りから意識が朦朧としていたらしい。

あの時の熱はISの放熱なのだと知り、外部の熱は数百度以上だったらしい。ナインボールが通り過ぎた場所は陽炎が生まれるほどで、近くにも行けないくらいだったらしい。

アイツは管制塔の水飲み場に倒れ、水を頭から浴びていたため最悪の事態にはならなかったが、あまり好ましい状態でないらしい。

そして今、意識を取り戻した一真を前に私達はある。

「しかし、アンタも相当無茶したのね」

「シグング・・・病院食マズイ」

「内部熱で脱水症状なんて、相当ラジエータに負荷かってたんじゃない？」

「デュノア。冷蔵庫に弁当あるから取ってくれ」

「え、でも・・・」

「脱水症状なんだし大丈夫だ」

「わかったよ。これでいい？」

「ありがとう」

「話を聞け」

「ふげ」

病院食を食べ終え、さらにコンビニ弁当に箸を伸ばす一真を殴る。

脱水症状の人間なら、殴っても問題はないだろう。

「それで、アレはいったい何よ？」

「アレ？」

「模擬戦の時に見たのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・悪い。何を指してるのかわからん」

「アンタが、軍にいる理由。それに、家族が、関係する、その理由よ！」

「そんな強調せんでも分かるわい」

「いやーねー」とふざける一真を今度は蹴り飛ばす。起き上がったこの馬鹿はスカートについて触れたためもう一度蹴る。それで大人しくなった。

「つぐ、蹴ったね・・・二度も殴った！ここのお医者さんにもまだ殴られてないのに！」

「まだ？」

「軍にいた頃、暇だったから抜け出したら椅子で殴られた事がある」

「なんで?!」

「絶対安静なら逃げないだろ、らしい・・・その後にベッドで縛り付けられた。あの時の医者は恐かった」

懐かしむ一真に対して望み通り子で殴る。シャルルは痛みで呻く彼を心配し、私は涼しい顔で椅子に座る。

「二度も打たれたい？」

「もうお婿に行けない・・・」

「ならお嫁さんでももらいなさいよ」

「こんなチンチクリンならこちらから遠慮ごはっ」

二度目が欲しいなら欲しいって言えないのかしら？

「誰が、なんだって？」

「お前さ、いくらなんでも花瓶はマズいだろ」

「次はテレビね」

「デュノア、お前が必要だ。俺を癒してくれ」

「ええ?! い、いや、癒す?!」

目の前でシャルルを口説く男を殴る。どうやら意地でも話を逸らしたいようだが、こちらも意地になって問いただす。

「・・・・・・・・脱水症状が、全身殴打による重症になりつつある
不思議」

「早く話なさい」

「嫌だ」

「さてと・・・ドッコイショ」

「話させていただきます」

「よろしい」

私が執拗に一真を問い質す切っ掛けとなったのは、模擬戦の際に見えた一真の姿のせいだ。

イメージの中のアイツは集団の中で孤立していた。顔をクレヨンで塗り潰したような人影に囲まれて観察され、辱められ、責め立てられていた。

見ているだけで気分の悪くなる光景だ。大の大人が寄って集って1人の少年を虐待するのだ。リアルに欠ける光景とはいえ、それを補うように強い感情が流れ込み、気味の悪い体験をしているようだ。

・・・ナンデ俺ガ？

強い、強い憎悪だった。

周りの大人を恨み、世界を恨み、自らの運命を恨む。

周りの全てが全て憎くかった。

憎んで、憎んで、憎んで……少しでも自分を慰めないと狂いそうだった。泣きそうだった。死にたくなった。

だが憎いと同時に虚しかった。憎めば憎んだ分だけまるで自分がいらぬ存在のように錯覚してしまう。だけど自分の存在を理由を見つけられないし、見える物は信じたくなかった。

泣かない分だけ心は荒み、荒んだ心はいつしか心の拠り所であった家族さえ憎むようになっていく。

アイツらのせいで、アイツらさえいなければ……

死ねない少年は憎み、恨み、妬み、生き足掻いた。死ねば自分を否定してしまうから、死ねなかった。

生きてくもないくせに、死ぬことは選べなかった。少年は孤独だった。

（なによ、なんなのよいったい?!
もしかしてこれがセシリアの言ってた――）

他人事でありながら、まるで自分自身の感情のように沸き上がる憎悪に私はパニックを起こした。そして同時に共感さえしてしまった。

荒んだ心は憎む事で自らを癒し、傷付ける。死ねないせいで続けなければならぬ連鎖は中からジワジワと少年を蝕む。そのストレスは噴火前の火山のように静かに、それでいて着実に一真を刺激していた。

『や、やめろ検体番号001!こんなことして――』

『ひっ、わ、私は悪くないんだ本当だ!だから許して――』

『け、検体番号001が暴走しま――』

『アゝアアゝアアゝアアゝアアアアアゝアゝツツツ!!
』

『や、やめ、来ないで!』

『た、助けてくれ!お願い!』

爆発するのに1週間以上を有した。我慢した方だ。

感情の爆発は大きく、また鎮める為の理性は強い衝動に塗り潰されてしまい半ば発狂した少年は自分を見失っていた。

手近にいる研究者や軍人を殴り飛ばし、蹴り飛ばした。調査用機材はブレードで切り裂かれ、パルスライフルで蒸発させた。

感情の赴くまま破壊活動続ける一真を見た私は一種の爽快感を感じ、すぐに否定した。それは自分の感情ではない。一真の感情なのだと。

『・・・・・・・・』

『た、高槻君！助け——』

『可哀相に』

しばらくして現れた高槻先生により少年は取り押さえられた。それが私が見た映像の全てだ。

圧倒的武力により取り押さえられた一真の口からは2つの言葉が出て来た。

なんで・
・
・
・
・

そして、

死にたくない・
・
・
・
・

その2つであった。

「アンタ、軍で孤立してんの？」

「あゝあ！誰がぼっちだってえ！」

「脈絡なくキレんな！」

「ごめん」

「で、どうなのよ？」

落ち込む一真はわざとらしくシャルルに泣き付いた。苛ついたからとりあえず殴っておいた。

「いや、まあ今の支部では良くしてもらってるよ。なんか息子とか弟ポジションだけだな」

「なら、私が見たのは何なのよ？」

「研究風景だろ。それも俺が軍に入った最初の頃の」

「・・・何があったの？」

「んー、分かりやすく言えば人間扱いされなかったただけだ。研究者も軍人もお偉いさんも、誰も彼もが俺をただの実験動物か何かみたいに見てただけ・・・辛かったが、納得もしてた」

「なんで？なんで納得出来たの？」

「もし俺が第三者ならそう見ただろうからな。それに俺は一夏と違い実績も将来性もない。綺麗な存在は少ないからこそ価値があるんだ。逆に言えば汚い存在は少なければさらに汚く見える」

「・・・」

「人間なんてそんなもんさ」

達観した遠い目。いつものコイツらしくない、寂しそうな眼だった。

「お兄ちゃんは、辛くないの？」

「全然」

「軽っ?!」

「喉元過ぎれば熱さ忘れる。一々あんなの覚えてたら禿げる。下手したらバーコードになる。それは絶っつつ対に嫌だ」

「真面目に答えて」

ふざけだす一真を睨む。コイツはまた誤魔化そうとしている。

「なんかさ、他人事なんだからもう少し軽く聞けないの？」

「・・・」

「私らさ、結構マジなの。空気くらい読みなさいよ」

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・辛い。ハッキリ言える。辛いよ」

真面目な顔付きの私らに負けた一真は一度口を湿らすと話し始めた。

「今でも待遇は変わらない。今の支部から一步外に出れば俺はすぐに実験動物扱いだ……。勿論、中には良識的な人もいるし良くしてくれる人もいるが大概はそうじゃない。

あの時、高槻さんが俺を止めてくれなかったら、高槻さんが俺を護ってくれなかつたら、俺は今頃葉漬けで研究所の一室で腐ってたかもしれない。

俺は、高槻さんに命を拾ってもらったも同然なんだ。さらにあの支部で斎藤さんや竜馬さん、如月さんに会わなかったら狂ってたに違いない。俺はな、色々な人に恩義があるんだ。そしてその恩義を返すまで俺はあの人達の近くにいたい……。俺の帰る場所は、今はあの支部なんだからな。

辛いと言ったが、帰る場所がまだある内は耐えられた。たとえ軍の狗になろうが、利用されようがだ」

虚ろな眼でテレビに映り込む自身を見ている。あの頃に見た一真がいたため気分悪くなった。

「俺はさ、人一倍寂しがり屋なんだよ」

小さな、本当に小さな呟きだった。しかし声の小ささとは逆にその言葉に籠められた想いはとても重く深い。部屋を静める程の言葉に一真はハッと我に返った。

「悪い。一人語りにも限度があつたな……。自重する」

「いいわよ。逆に」

「なんだ？何が言いたい？ハッキリ言ってくれないと喉に小骨が引っ掛かったようで気分悪い」

「その、えーと……アレよ、アレ」

「おーいデュノアあ、冷蔵庫におにぎりあるから取ってくれ」

「え、えとまだ食べるの？」

「日本にはな、喉の小骨に対して米を丸呑みして取る方法が昔からあるんだよ……そして私は日本人」

「なんか苦しそうだね」

「喉に詰まったら見捨てないでね」

「や、やめてよ縁起でもない！」

「わ、わかったわよ！話す、話せばいいんでしょ！」

「喉につまらないよう程度にな」

顔を真っ赤にしながら話す。

「その、なんていうか……嬉しかったのよ」

「デュノア！窓開けろ窓！暑くてかなわん！あとファブレ！青臭くてかなわん！」

話してやったのにこの反応……やはりコイツはここで！

「ぬうわあああんですつつつてえええ！」

「静かにせんか馬鹿者共！」

「酷い眼にあった」

「アンタのせいよ」

あの後、やってきた千冬さんに私らはボロボロになるまで殴られた。このままでは私まで入院しなくてはなくなる。

「大丈夫、2人共？」

「入院が2日延び「犀川くーん。退院は明日ですから準備はしてくださいねー」……………フコウダ」

麻耶の間延びした声にうなだれる。まだ過密スケジュールは続くようだ。

「そういやデュノアは何を聞きに来たんだ？」

「そりゃアンタ、シャルルも何か見たんでしょ」

「いや、特には」

「ならさようなら」

「「え？」」

「え、じゃねえ。帰れ」

「なんで・・・」

泣きそうなシャルルを護護するように私はシャルルの肩を抱く。
対して一真はシーツをかぶってシーツに潜る。今なら、やれる。

「睡眠時間」

モゾモゾ動いていた一真はボソリと言った。

「え？」

「いや、いきなりなによ？」

「4時間」

「・・・ウツソダー」

「マ、マサカー」

私らはなんとなく一真の伝えたいことが分かった気がした。いや、
正確には思い当たる節があった。

「だよな・・・普通はそう考えるよな。でもな、事実なんだよ」

頭までシーツに隠れた一真の声は酷く弱々しい。もしかしたら泣いてるかもしれない。

「ボーデビツヒの朝練で5・30に起こされ、放課後の訓練を終えて帰ればお前らのトラブル解決で1・00過ぎ就寝でも早い方・・・
・・・わかるか、俺の休まる場所って病院しかないんだよ。
ここなら高槻さんだって無理にレポートを催促しないし、問題事も起きない。俺の安住の—————よし、ここに住む」

「な、なに馬鹿言ってるのよ!」

深夜の病室は不気味なくらい静かだ。廊下を歩くだけで足音がどこまでも反響し、まるでその足音が自分に向かっていているのではという恐怖がある。

だが、実際には見回りの看護師の足音に恐怖することなどない。なにより虚ろな意識で天井を眺めていた一真にとって足音はあまり気になるものではない。

「起きてる？」

「・・・・・・・・」

「入るわね・・・」

部屋に入ってきた風はいつもの勝気な雰囲気はなく、代わりに外見相応な雰囲気を出している。幼い子供だ。

「どうした？」

意識を覚醒させながら起き上がる。眼鏡は、風が渡してくれた。

「ちよっとね・・・・・・・・今、大丈夫？」

「ああ」

「うん。ありがとう」

備え付けの椅子を引っ張り出した凰は組んだ手を見つめながら何かを考え込む。

「ねえ、アンタは人種についてどうおもう？」

「人種？」

「私、さ……実は虐められてたんだ。日本でも中国でも」

日本では名前が元で虐められ、中国ではたどたどしい中国語しか出来なかったために虐められていた。中には半端者と石を投げた者も居たらしい。

今でも辛いのか、思い出して泣く凰に対してオレは何も出来なかった。出来る事ならば慰めもしたいが、コイツの立場になるとそれはとても悔しいと感じるだろう。

「ねえ、なんでアンタは1人でも耐えられたの？」

「……………耐えられたわけじゃない。死にたくなかったただけだ」

「どういう」

「モルモットは従順だからこそ生かしてもらえる。俺は、逆らえる立場にいなかった。例え、それが人間として扱われなくても耐えなくてはいけなかった」

自分がこれから何を話すのかを考えると気分が悪くなった。

「それに、虐め程度でなんだあ？

俺だって元々イジメられっ子で、地元ではイジメられっ子かずちゃんと呼ばれてたんだぞ」

自慢出来ないことを自慢する。出来るだけ滑稽に、出来るだけ馬鹿っぽく。

「なによそれ、悲惨過ぎるでしょ・・・」

クスリと笑う凰に俺も笑い返す。

「ツククク、言うな泣ける」

「つぶ、イジメられっ子かずちゃん・・・つぶは、ダメ・・・あははは、お腹痛っ」

「イジメられっ子かずちゃんと呼ばれてたんだ」

「その、ドヤ顔！や、やめてお腹、お腹痛い、あは、あはははは、痛い痛い、あははははははは！」

笑い転げそうな鈴音に満足した一真は柔らかな雰囲気を作る。

これでいい。コイツは笑った方が可愛い。泣かれると俺が不幸でいられなくなる。

「お前がどこで孤立しようが、俺達が友人じゃなくなるわけない。寂しくなればメールなりなんなりすればいいだろう？」

「それはその」

「確かに人種ってのは大きな壁だ。言葉が通じないだけで、肌の色が違うだけで人は差別できる」

「・・・」

「お前、まさか母親に捨てられたなんて考えてるのか？」

「悪い？」

「まさか俺もそうだなんて言わないよな？」

「私の母親は、私を置いてどこかに行った。そして私は父さんに連

れられて・・・・・・・・」

「母親が連れていってくればなんて言わないよな？」

「だって、お母さんが連れていってくれば私は・・・・・・・・あんな目に」

実を言うと、俺もコイツの記憶を多少見ている。それも虐めだけじゃなく、犯されそうになっている所も見ってしまった。

それは代表候補になる少し前もそうだった。周りはコイツの才能に嫉妬し、彼女を虐めた。コイツに出来たのは強くなって周りを見返すことだけだった。

彼女がこのように周りに刺々しい理由もある程度は予測がつく。

怖いのだろう。

俺が他者に積極的に関わらないように、コイツは他者を威嚇して自分を守っているのだ。

「ねえ、アンタはなんで・・・・・・・・」

鳳の瞳が細かく揺れだす。呼吸も浅く、短くってきた。伸ばす手は俺の肩ではなく頬に触れる。

その手を握り、彼女を近くに寄せる。

「俺は、お前が思っているほど強くないぞ」

「でもアンタは」

縋るように俺を見つめてくる。

「虐められるのが恐いのか？」

「違う」

弱々しく首を振る。

「犯されそうになったのが恐いのか？」

「な、なんでソレを」

顔を真っ青にして俺を見つめてくる。

「母親が憎いのか？」

「ち、違う」

自分に言い聞かせるように呟く。

「なら父親か？」

「父さんは悪くない！」

今度は俺に言い聞かせるように。

「なら、寂しいからか？」

「べ、別に寂しいわけじゃ」

顔を赤らめた。

分かっているなら、問題はない。

「はいはい」

強がる風の頭を少し乱暴に撫でる。

「ちょ、やめてよ髪が乱れる」

「はいはい」

「もう、好きにしてよ」

そう言いながら風が頭をこちらに出してきた。少し笑うと、彼女は拗ねるように顔を背けた。

顔を真っ赤にしながら拗ねる風の頭を撫でながら俺は夜を過ごす。
明日はトーナメント三日目だ。

事件その12 「俺のこの手が真っ赤に燃えたっっ！でさあ大変」 (後書き)

一真

「もぐもぐこくこく」

一夏

(やたら図体のデカイ男が可愛らしく漫画肉を食う・・・酷い光景だ)

ラウラ

「・・・あ・・・むう、あ」

一夏

(まだ冷奴に苦戦するラウラの方が絵になる)

シャルル

「ラウラ、スプーン使ったら？」

ラウラ

「むう・・・いや、いい。これも訓練だ」

鈴音

「なんのよ？」

ラウラ

「早く箸の使い方マスターしなければ中尉に馬鹿にされる気がするのだ」

春奈

「そんなことないと思うよ・・・」

鈴音

「はいはい。毎度のことだスルーするわよ。

それじゃあまずはコメントから返しましょうか」

一真

「それじゃ、まずは紅鎖さんからのコメント——」

条約違反も軍事干渉も主人公じゃ無くて主人公の後ろに居る日本の将官らしき人達ですよーっと。

まあ軍事干渉は主に今後ある福音事件で干渉してくるか否かが問題何ですけどね。

無人機襲撃事件は所属が不明でIS学園内で処理したから無干渉地帯に近い学園に対する襲撃の問題で条約違反関係は、

【所属が不明なので条約違反な対象が居ない】

と言う事で内々で処理&会議がされた程度で裏でも対した動きは無かった可能性が高いですが、一応【学園関係者に対して一切干渉は許されない】と言う国際規約があるらしいので『半ば有名無実化していて全く干渉されない訳では無いのが実情』とはありますが、流石に学園教員に対しては流石にこの規約に反するのでは？と言う、特に所属不明機からの襲撃時での干渉ですし（しかも発生した問題の内容をリアルタイムで知っているかの様な言葉とかも微妙に問題アリな部分が少しだけ）多分主人公個人に対しての干渉はそこまで問題は強く無いとは思うんですけどね（そもそも本人自体が断る事で受ける問題がある場合もある訳ですし）と言う事です。

他にも原作でラウラが起こした【ヴァルキリー・トレース・システム】の問題もラウラ本人には大きな処罰は無かったかも知れませんが、原作ではそこまで描写されなかっただけでラウラの本国であるドイツにはある程度の裏で問題に対してIS学園や国際IS委員会から交渉による裏取引的な事が行われた可能性がありますし、福音事件ではアメリカ・イスラエルの二ヶ国が関わってる事柄ですし、要請があったIS学園ならまだしも日本国としては関わろうとした時点で問題でしょう（多分）

なので私が問題視している部分は他の作品と違って主人公が国に所属している事以外に主人公が所属している国自体が関わって来る事があるのなら、もう少し原作にある設定の中で有り得るであろう国家間の問題も多少は考慮に入れて内容を作った方がいいのでは？と思います。

例えば行き過ぎたチートな感じなら個人の起こした事で国家が動きそうな問題を起こしても『チートな力でどうにかしたんだろうな』程度ですが、チートでもなんでも無い普通の国が原作でもある設定から考えると問題になりそうな事をした後に特に何も無ければ『それで全く問題起きないのかい』って感じます。

まあ私が細かい事を気にする方だっというのもあるんですけど、そういう点も多少考慮に入れて話を書いて頂けると私も純粋に楽しく読めるので助かるのですが

——以上」

一同

「ZZZ・・・っは?！」

一真

「お前ら今すぐ土下座しろ。焼いた鉄板の上で両手、両肘、額押しつけて土下座しろ」

一夏

「一真。要約してくれ」

一真

「何様だテメエ。

つまり、

1. 日本自衛隊がなんでIS学園に内部干渉してるのか
2. 今後、外交問題が起こる度に日本が干渉するのはマズいのでは？

3. 日本が強気な理由がわからない

まあ、俺的に要約するとこんなもんだ。他の細かい所は追々」

一夏

「そういや自衛隊が一真に命令して皆を逃がしたんだっけ？」

一真

「だな」

シャルル

「その時のこと？」

一真

「たぶん（タイヤキウメー）」

ラウラ

「しかし自国内ならば問題は無かろう（オナジクウメー）」

鈴音

「話の焦点は、IS学園に干渉したこと、ね。

でもなんでそんなに簡単に通ったのよ？相手は千冬さんよ？」

一真

「モギユモギユモギユ——」

まず、自衛隊がIS学園に干渉したかについての結論だが、結論としてはしている。ただし間接的になるが」

春奈

「間接的、ですか・・・？」

鈴音

「なんかよくわかんないわ」

一真

「【学園関係者には何者にも干渉されない】

これは、原則守られる。つまり自衛隊は自分達の都合で学園関係者を動かす事も、中に入る事も出来ないって事だな」

一夏

「ふむふむ」

一真

「逆にI S学園が干渉出来ないわけだが、これもある例外がある」

シャルル

「例外？」

一真

「要請を受ける、要請をすれば可能になる。

あの時、織斑千冬は救援について聞いた。つまりある意味で要請をしたことになり、俺が動いても言い訳がつく。さらにI S学園が外に助けを求めるだけの事態ともわかるわけだ。

勿論、あの人にそんなつもりはなくても材料を与えた事に他ならない。

I S学園には他の代表候補生がいるから、他を差し置いて日本がI S学園を助けた功績は大きい」

鈴音

「つまりP R？」

一真

「シャルルと出掛けた時のニュースがそうだ。次は、今後の日本の動きだな」

ラウラ

「これはマズいのでは？」

一真

「時と場合によるな」

鈴音

「また何かあるの？」

一真

「俺が特殊な立ち位置だから・・・御分かり頂けただろうか？」

春奈

「干渉するんですね」

一真

「する」

一夏

「でも待てよ。それって他国と外交問題になるだろ」

一真

「アメリカとイスラエルの場合だが、これは先に話してもいいのかわからんから秘密。」

外交問題でいくと俺は扱いやすいな。苦しければIS学園の生徒だと言えばいいし、上手くすればアピールになる」

鈴音

「つまりアンタはこれから先も利用され続けると」

一真

「主人公の性さ」

シャルル

「最後は日本が強気な理由だね。そういえばなんで？」

一夏

「確かに。」

日本って某ヤクザなA国に脅されてIS学園を日本に作ったんだよな？ つまりA国よりは立場下だろ？」

一真

「ズルズルドズルツツッ！

つぶは。立場ね……。見方によれば日本って一番強い国だぞ」

一同

「は？」

一真

「まず、各国で数機しかないISを日本は30以上保持している。これだけでも十分じゃね？」

さらにISを開発した国であり、初代ブリュンヒルデの祖国。それに有沢、如月という世界有数の財閥が存在していてサブカルチャーにおいて不動の国。

最後にグレネードとエネルギーライフルの国」

ラウラ

「言われてみれば」

シャルル

（サブカルチャー？）

一夏

（グレネード？）

春奈

（エネルギーライフル・・・？）

鈴音

「で、でも！IS学園が協力するわけがないじゃない！」

一真

「IS学園の生徒と教職員の大多数は日本人で、全ての指揮権は織斑千冬にある。国規模でも問題なんて戦争くらいだ。さて、日本が戦争になるのに日本人であるIS学園関係者のどれだけが見ない振り出来るんだろうな？」

一同

「・・・・・・・・」

一真

「さらに、過去の白騎士事件の時のミサイルの件はどうだ？なんて世界は報道してた？」

一同

「・・・・・・・・」

一真

「そしてミサイル発射からすぐに艦隊規模で日本領海に侵入。これは完全な侵略行為でありながら世界はなんて言ってる？」

一同

「・・・・・・・・」

一真

「子供でしかないお前らはいいかもしれなかったが、俺くらいの間は皆よく覚えてる。大人ならなおさらな。」

分からないだろうな。世界の警察である国連なんかが大艦隊を率いて領海内に入った時の気持ち。一部の日本人にとって白騎士はある種の英雄なんだよ。

さて、分かったか？」

一同

「・・・・・・・・」

主人公&ヒロイン 食事中・・・

一真

「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ！」
ラウラ

「アンタ、バカァ」

鈴音

「私じゃない、それ？」

ラウラ

「なら、私は死なないわ。貴方が守るもの」

一夏

「・・・だって」

一真

「いや、お前が守れ。俺はまだ死にたくない」

一夏

「俺だって!」

ラウラ

「こんなとき、どんな顔すればいいか分からないの。ごめんなさい」

シャルル

「笑えばいいと思うよ」

鈴音

「いーから始めなさい!」

一真

「へーへー。では、鷹瀬瞬さんから。」

設定は面白い。

紅一点↓黒一点、『／／／』↓こういった表現はあまりしないほうがいいかと。「頬を赤らめ」とか小説なら文章で表現すべきだと思います。

「周りからは少し変わっている以外には普通の少年だという」↓文章のつながりがおかしいです。

なぜ、特に秀でた物はなく、学力も偏差値56と普通、運動神経も平均並みの一般家庭の長男が政府の援助を受けることが出来るのか? 色々と粗が目立つ。

オウフツ」

一夏

「まあ、いつか言われるだろうことじゃなか」

一真

「自覚があるからこそ耳が痛い」

春奈

「それで、どうするの？」

一真

「直すさ。俺も、気になってたから。さて、順に説明しますか。まず、周りから変わっているのに普通とは何事か、について」

ラウラ

「意味が分からない」

一夏

「これだと矛盾してるな」

鈴音

「矛盾した人間なんですよ？」

春奈

「す、鈴ちゃん・・・」

一真

「なにこの中国口リ。かなり失礼じゃね？」

春奈

「言いたいことは、分かりますよ犀川さん」

一真

「いや、言葉足らずなのが悪いさ。

これはつまり見方だな。周りとは変わってるように見える、けど知らない人間からすると周りとは大差ないってことさ。お前から見て俺はどう映る？」

一夏

「んー、大人っぽいよな」

春奈

「優しいよ・・・」

シャルル

「頼りになるね。少し怖いけど、話せば優しいし」

鈴音

「それでいて変態ね」

一真

「よし、お前、今から屋上な貧乳中国」

鈴音

「あんだってええええええっ?!」

一真

「やんのかクソガキがああああっ!」

一夏

「考え方は少し特殊だよな。なんていうか、世の中斜めに見てるよ
うな感じ?」

ラウラ

「中尉は周りとは確かに違うな。
中尉だけは私と関わってくれた。彼は他者をあまり気にしない。だからかもしれない。それが歳不相応に感じるが、大人から見ればただの子供の背伸びにしか見えないのだろう」

一真

「ほらほらどうした未発達中国！手足が短いのか？！」

鈴音

「図体ばかりデカイ唐変木が！」

シャルル

「お兄ちゃん、落ち着いて。ね？」

一夏

「鈴も！落ち着け、な？！」

鈴音

「ふーっ、ふーっ！」

一真

「ふーっ、ふーっ！」

春奈

「あの、それで続き・・・」

一真

「・・・・・・っち。」

さて、俺に政府が金を出す理由だが、話せません」

一夏

「俺みたいなものか」

一真

「いや、全く。全然。勘違いすんな」

ラウラ

「中尉と一夏の違いは様々だ。特に、ISの世界でこうまで拘るのは不思議ではないぞ」

一夏&春奈

「え？」

ラウラ

「現在、各国は少しでも有能なIS適性者が欲しいのが現状だ。A十判定以上があれば大抵の国が目を着ける。それが男ならば尚更だ。だから国籍保持のために政府は様々な待遇を見せる。

ISにおいての国籍ほど軽い物はない。なにせロシアの国家代表候補である楯無は日本の旧家でありながらロシア国籍を持つ。普通ならそんなものを政府に近い役職にはつけないし、つけても専用機等与えない」

春奈

「だったらなんで一夏君はスカウトされないの・・・？」

一真

「一夏じゃテストケースにならないからだ」

一夏

「テストケース？」

一真

「篠ノ乃束と知り合いで、その親友である織斑千冬の妹で、さらには妹である篠ノ乃と幼馴染み。

どう考えても偶然じゃないだろ。だから俺だ。

この3人、さらに一夏と面識ない俺。だから各国は俺をテストケースとして欲しがる。だから国は俺を手放したくないから、金を出す」

春奈

「犀川さん・・・その、唇、切れちゃいますよ」

ラウラ

「付け足すなら、中尉のナインボールもその理由だ」

一真

「勿論、一夏を欲しがる国はある。だが一夏本人でなくDNAサンプルだな」

春奈

「DNAサンプル？」

一真

「人間の性別は染色体により決まる。また延期配列で色々と左右されるな。

ISの起動条件はまだ明確かされていない。女手しかないのはまだ大まかな物だろう。

ISが人間の何を区別しているのか、一夏が起動出来たわけは。これがDNAサンプルを欲しがる理由だな」

主人公＆ヒロイン 談笑中・・・

一真

「コメントも返し終わったので自由時間です」

ラウラ

「先生。いつまでに収束つけばよろしいでしょうか」

一真

「私の気が向いた瞬間までです。では解散」

一夏

「気が向いた瞬間〓語り終えるまでか？」

鈴音

「いつも通りじゃない」

一真

「いいからさっさと話せ凸凹幼馴染み」

鈴音

「中国4000年の歴史を今！」

一真

「安心しろ。お前の歴史はたかが15年だ」

春奈

「そういえば、設定に粗が多いって・・・」

一真

「多い。それこそ某漫画家がラフ画のまま週刊誌に載せるくらい」

一夏

「例えば？」

一真

「この話は2120代から始まる」

一同

「・・・」

一真

「これはミスだが、俺が最初の自己紹介で2つ違いと言ったがアレは二学年違い」

一同

「・・・・・・・・」

一真

「さらに色々と国際規約を無視しているが、これは忘れてた。もしくは後で知った」

鈴音

「ちょっとCM入るわよ」

ナレーション

「貴方の♪テレビに♪自家ネット如月ー♪み・ん・な・の、欲の友♪」

司会1

「はい。今回ご紹介させていただきますのはこのペットロボ、AMIDA!」

司会2

「まあ可愛い!」

AMIDA

「ピギヤー☆」

司会1

「このAMIDA、可愛いだけじゃないんです!

頑強で、素早く、さらに芸まで覚えちゃう! いいですか、見てくださいよ?

アミちゃん、サーチアンドデストロイ!」

AMIDA

「ピピピギヤー☆」

司会2

「凄い、飛んできたfrisbee全部酸で撃ち落としました!」

司会1

「これだけじゃなく、探索やバトルもでき、なんと自宅の警備までこなしちゃう賢い子!」

司会2

「キヤーすごい。でも、お高いんでしょう?」

司会1

「いやいやそんなことはありません。

このAMIDA! なんと、なーんーと、今回はサービスしますよー。
なんと! 定価398万を、248万、248万で代放出!」

司会2

「安ーい!」

司会1

「しかも、今回はAMIDAだけじゃありません! 3ヶ月分の餌に、
キサラギ製のパイルバンカーをつけちゃいます!」

司会2

「うっそー、本当ですかー!」

司会1

「数限りがありますので、注文はお早めー!」

AD

「うわーっ、AMIDAがAMIDAが溢れだしたぞー?!」

ディレクター

「早く捕まえないか! ほら、そっちにも行ったぞ!」

AD

「カメラ切れ、早く!」

一真

「酷いCMだったな」

シャルル

「あれもバイオハザードになるのかな？」

鈴音

「というか、アンタの出演じゃない」

一真

「面倒。それに、そういったのは外伝主人公がやってくれるさ」

一夏

「外伝主人公？ いるのか、そんなの？」

一真

「予定では」

春奈

「可愛かったな・・・」

一同

「え？」

ラウラ

「ああ。なんとも言えない愛嬌があった」

一真

「・・・・・・・・さて、本編の捕捉いってみようか」

鈴音

「ドリル出たわね、ドリル」

一真

「ドリル君な」

鈴音

「両肩に特殊アームを付けたPACだけど・・・・・・・・やりすぎよね。あと名前エ」

一真

「漢の浪漫はいつだって理解されない・・・っふ、分かってはいたがな。そして名前エ」

シャルル

「僕はカッコいいと思うよ」

一夏

「ドリルは漢の浪漫だ！」

鈴音

「もうA Cなんて関係なくなってきたわね」

一真

「趣味だからな」

鈴音

「でもドリルなんて非実用的な物をよくP A Cにしたわね」

一夏

「そうか？」

俺は強そうに見えたけど」

春奈

「私も」

シャルル

「カッコいいからいいんだよ」

一真

「んー、その辺りから触るか。」

まずドリルは武器に向かない。特にI Sなんて論外中の論外だ」

鈴音

「自分で言う？」

一真

「ドリルは切削機だ。切削の為にはまず切削物と刃を固定しなければならぬ。これは包丁を磨いたことある奴なら分かるが、砥石が動いちゃ刃は研げないし、包丁の刃が動き過ぎれば力がかからず研

げない。ドリルも同じだ」

春奈

「・・・・・・・・」

一夏

「・・・・・・・・」

シャルル

「・・・・・・・・」

鈴音

「・・・・・・・・」

ラウラ

「モシヤモシヤモシヤ」

一真

「お前らは包丁も研いだことないのか？それでも女か？それとその思考停止。少しは考えろ。」

さて、どうしたものか・・・・・・それじゃあ問題だ。よくアニメや漫画であるドリル、そうだなサンダーバードは古いからガオガイガーの足やグレンラガンなんかが使うドリルで土を掘るとしよう。どうなると思う？」

一夏

「そんなこと言うくらいだから掘れないんじゃないのか？」

一真

「んなの大前提だ。聞いてるのはどうなるか、だ」

春奈

「んー、刃が滑る？」

一真

「惜しい。答えは本体が回転するだ」

一同

「は？」

一真

「ドリルというのは現実的でない理由だ。まず円錐の角度が狭過ぎれば刺さるだけで本体の通れる穴が作れず、角度を取ると結果接触面による摩擦で切削よりも支える側の力が小さくなる。

結果、刃が地面に固定されて本体が回る」

シャルル

「で、でも・・・そうだよ！トンネル作る奴とか、ボーリングとか！」

一真

「シールドマシンのことだな。アレは刃が平らで、さらに反動トルクを修正したりしてるから問題ないんだ。それに見た目程派手には回らないぞ。かなりゆっくりだからな。

つぎにボーリングだが、アレもドリルと同じにするのは無理がある。あれは地層を採取したり温泉を掘りあてるから真ん中は穴だ。ドリルとはちよつと違うな」

鈴音

「まさに浪漫なのね」

一真

「ISで使うには反動トルクをいかに殺すか、もしくはPIC等で体をガッチリ固定しなきゃ無理だ。

さっき話した武装だってブースターで反動トルクをどうにかしないといけないからそれこそ背中にびっしりブースターを付けなきゃ行けなくなる。だからグレンラガンが回るのはある意味正しい。

ちなみにドリル君は分類上累積戦略兵装になる」

主人公&ヒロイン 熱弁中・・・

一夏

「だから！ガンダムつつたらユニコーンだろ！」

鈴音

「いいえ、Gガンよ！」

春奈

「私はターンエーかな・・・」

シャルル

「音楽がいいよね。」

僕は、うーん。08かな。シロウみたいな人が恋人ならいいよね」

ラウラ

「私は00が良かった。大佐のような父親が私にもいれば・・・」

一真

「俺を見るな。この歳でお前みたいなデカイガキがいてたまるか。俺はガンダムXとイグルーだな。戦争について考えさせられる」

ラウラ

「戦争といえば、この話では戦争は起きるのか？」

一真

「学園ラブコメでは終わらないぞ。中盤からちよくちよく世界に話を持っていく予定だ。」

今のところ、銀の福音編が分岐点になるな。そこからIS学園を中心にするか、国家解体戦争のような物が起こるか考えてる」

鈴音

「プロットとかどうしたのよ？」

一真

「面白可笑しい物が至高だ。プロットも大切だが、な」

一夏

「でもそうになると話的に大丈夫なのか？」

一真

「各キャラの話を深く掘り下げるやり方を変えるだけで大筋は変わらん」

ラウラ

「だがそうなるとキツくないか？」

シャルル

「何が？」

ラウラ

「一夏の目的がない」

一夏

「」

ラウラ

「一夏は何かと護る、護ると言うが、それは流れる的なものが強い。」

それで話が世界に行くと辛くないか？」

一夏

「きっと、きっと何かあるはずだ……！」

一真

「犠牲も出すがな」

主人公&ヒロイン 食事中・・・

鈴音

「そういやアンタ、昔は人間扱いされてなかったってマジ？」

一真

「誇張ない事実だ」

一夏

「家族も恨むなんてヤバくないか？」

一真

「心臓や肺が動いていることを生きてるだけでも言うのか？」

俺はな、自分を保つために逃げ道として怨んだだけだ。アレは一重に責任逃れでもある」

一夏

「セシリアの時のアレか？」

一真

「そういうこと。」

誰かのせいにすれば自分は悪くないと思える。現実を見なくてすむ。自分は可哀相だと慰められる……。いやはや、反吐が出るほど甘いな。胸焼けしそうだ」

ラウラ

「しかし、それは仕方ない。人間誰もが強いわけではない」

一真

「まあな。俺がキレたのだって現実に耐えられなかったからだ」

鈴音

「・・・・・・・・」

シャルル

「じゃあ、鈴が同調したのも」

一真

「それは追々。ただ、凰にも話したくない物くらいあるってことさ」

今回の舞台裏はここまでとなります

事件その13 「負け犬には、負け犬の意地があるっっ！だからさあ大変」

(前)

この物語は世界平和を求める男が妻を犠牲にしてまで夢追い求める話並みに救われない物語。

月下に現れた美少女から問おう——貴方が私のマスターか？と言われるために心臓に槍を指されてもいいという方のみお進み下さい。

心臓刺されたくねえよ！という方は釣竿片手に川で鯖を釣りに行ってください。

事件その13 「負け犬には、負け犬の意地があるっっ！だからさあ大変」

模擬戦6日目の早朝。

久々に体を安められた。重力から解放されたような感覚に嬉しさを感じながら、機体を起こす。

「いい朝だ………」

時間は5…30。起きるには少し早いかもしれないが、二度寝するには勿体ない気分だ。

首を横に向ければ朝日が空に登り、綺麗な茜色と淡い水色のグラデーションに目を細める。

「貴様、ISを寝袋代わりに使うとはいい根性をしているな」

今日の対戦相手はデュノア達のグループと三組のグループだ。

昨日の試合は鈴音に気を取られたせいで彼女の機体にダメージは与えられず、さらにリヴァイブが基にされているため基盤系統の予備は山ほどある。デュノアを引きずり降ろすには本人を叩かなくては意味がない証拠だ。

また奇襲に対する対策も取っているだろう。これが頭を悩ます種だ。これで最後になるとはいえ、無駄に脳を使うのは避けたいのが本音だ。

今日までの試合結果を整理しよう……………

一夏&箒 ペア

ラウラ&花子 ペア

シャルル&可奈 ペア

その他 2ペア

誰もが専用機しか残らないと考えた中で、量産機、しかも練習機で勝ち残った生徒は凄いと思う。運もあるが、中には乱入した際に逃げ切ったペアもいる。実力は確かだ。

しかし、運も実力も通用するのはここまでだろう。次の相手は専用機持ちだ。実力が拮抗しても、機体性能に雲泥の差があれば勝てるはずがない。特にラウラとシャルルに当たった生徒は可愛そうだが、負けは確定と言っている。

「対戦表に悪意を感じる」

『本日の対戦相手はシャルル・デュノアペアとなります』

話し方に抑揚を付け始めたH・1の電子音声は暗く狭い箱の中に響いた。

少しだけ身動きしながらH・1の読み上げるスケジュールを聞き続けているとふと考えてしまう。

最近、スケジュールを任せつきりにしている。まるで秘書か何かだ。人間的にどうなのだろうか。

昔、何かの映画で機械に頼りきった人間が機械に支配されるとい
う光景を見た。あの時はただ面白いとしか考えなかったが、今では
ゾッとする。これでは自分がいつしか機械に呑み込まれるではと考
えてしまう。

『最近食生活が偏っていますから、夕食に緑黄色野菜を取ってくだ
さい。好き嫌いせずしっかりと紫蘇なども食べなければ体を壊しま
すよ』

（このままでは、いつしかH・1に呑まれてしまう）

『聞いていますか、マスター一真？』

（それだけは、それだけは阻止せねば！）

『高槻秋葉に報告しますよ』

「すまん。だから許して」

『ならば夕食は食堂のC定食か、サラダを食べてください。紫蘇も
食べるように』

「しかしながら紫蘇だけは無理」

このままでは本当にH・1に呑まれて紫蘇三昧なC定食を食わな
ければいけない。それは、それだけはなんとしても避けなけれ

ば。

（紫蘇食べたくない。絶対に、食べたくない）

『ならばやはり高槻秋葉に報告します』

「最近のお前は冷たい」

『マスターのためですから』

「貴方のためだからといって恩着せがましいCMを思い出した」

『報告します』

「やめて。本当にやめて」

人間味を増したH・1と会話しながら2人は暗やみの中でジツと待つ。段ボールの臭いと焼焦げた臭いに顔を歪めながら。

試合はシャルルと可奈が優勢のまま進んでいた。

シャルル達は互いに同じ戦い方を得意としながらも秀でた部分が違うため上手く噛み合っていた。私の見立てではバランスだけなら学年中最良と言っている。

教師陣や一部のVIPも感心しながらこの試合展開を値踏みしている。

「攻め切れていないな」

「一真君を警戒してるのよ。昨日の件もあって無駄に消費すれば負けてしまうから」

「警戒するのは結構だが、意識が散漫だ。現に奴らの命中率はいつもより70%も悪い」

「百発百中を求めるなんて酷よ。彼女達も人間。外しもあるわ」

「お前が言うとか皮肉にしか聞こえないな」

言っていることとやってきたことが矛盾する友人はこの試合をモニタリングしている。

思い出す限り、コイツが外した回数など片手で数える程度しかない。私から言わせればコイツとて十分に人間を止めているようなものだ。時速500を超える物体相手に精密射撃をし続けるのだ。人間の枠組みには入らない。

私達は互いに計器を眺めながら軽口を叩き合う。本来ならば私達くらいになるとVIP席に居なければならぬのだが秋葉は自衛隊大将。私は各国のお偉方が嫌いなため好きに過ごせる管制塔にいる。

私達の興味はこれから乱入する一真の行動ただ一つだ。この試合展開にはあまり興味がない。

前々回はジャミングをかけた状態でシールドに生身で張り付いていた。

今回はダミーマルーンを使用して管制塔から現れた。

なんとも奇想天外な奴の行動に子供臭いとしりながらもワクワクしてしまう。

「しかし、佐々木さんって凄いですね。今のところ被弾率は8%なんて代表候補レベルですよ」

「ああ、だが押しが弱過ぎる。回避に専念し過ぎだ」

「そういえば、代表候補レベルといえば犀川君も十分代表候補レベルですよ？」

「奴の発想は独特だが、力量はあくまで素人に毛が生えた程度だ。今まで戦暦もＩＳに救われたようなものだ」

勘違いしている山田君の考えを正す。

確かに戦暦だけならば代表候補レベルだが、奴は相手を調べた上で幾重の策を並べて勝ちを掴んできた。どれも二度目を通じるような物じゃない。

ＩＳの操縦技能こそ高過ぎる位だが、戦闘のセンスはハッキリ言っ
て皆無だ。一夏と比べて斑が無いのが気になるが、伸び白は確実に一夏の方が長い。

「ナインボール、でしたよね？」

「日本製試作型ＩＳ、ナインボール。一真君の専用機です」

「一真君って色々謎ですけど、実際どのくらい強いんですか？」

「それは御自分の眼で確かめるのをオススメします」

「えー、教えてくださいよー」

悪戯っ子のように山田君の反応を楽しんでいた秋葉がアリーナへ

眼を向けた。

「まあ、力量云々は別として楽しみではあるな」

「あれあれ？もしかして期待してるんですか？」

「ふん、馬鹿らしいな。奴は期待するしないの人間じゃないよ山田君」

「でも楽しみなんですよね？」

「ああ、楽しみだな。奴の登場が」

「彼は生粋のエンターテイナーですね」

（あの織斑先生と高槻先生が子供のように・・・・・・・・ところでないでアリーナに段ボールがあるのでしよう？）

プレハブ程ある段ボールの塊。段ボールハウスのような継ぎ接ぎの箱はアリーナの隅に4つ程置かれており、それぞれに、

『だんばーるですのっ！』

と筆で書き殴られていた。

僕は春奈に細かな指示や要望を出し合いながら終始相手を押し込んでいた。互いにリヴァイブを使うため役割を固定せず、攻めと補助を交互に代わりながら試合展開を進めている。

しかし、僕達は攻撃性と積極性に欠けている。それが気になった。

『今までのパターンだとお兄ちゃんの乱入タイミングは総合ダメージだ』

『現在総合ダメージは2000・・・そろそろ来てもいい頃だけど』

『レーダーの反応は？』

『ないよ・・・今のところアリーナには居ないよ』

『なら、もう少し様子見だね』

お兄ちゃんの乱入が気になる。このまま時間が経てば相手だって自棄になる可能性があるし、春奈が精神的にダメになるかもしれない。

だけど、僕達の予想に反して総合ダメージは減るばかりだ。お兄ちゃんの反応は一向に現れる兆しを見せず、相手側のシールドエネルギーも残り少なくなり、多少強引に行けば勝てる程だ。

（多少の無茶はするべきかな）

（アリーナにも、アリーナ外にもISの反応はない・・・思い過ぎなの？）

勝負に出るか迷った僕達の隙を突いて相手側は急速に上昇する。一度態勢を整えるつもりなのだろうが、それを許すほど僕達は気を逸らしてはいない。

多少離された距離を詰めるべく急上昇した僕達はアサルトライフルをバラ撒きながら互いに宙空10メートルに達する。

そして、

【警告！付近にIS反応を確認、IS反応を確認！
警告！ロックオン！ロックオン！】

お兄ちゃんが現れた。

全員のリーダーに突如として出現した反応。それは管制塔や地中、
ガレージからではなくアリーナ内に突如として現れた。

驚き、身を固める僕達の意識をロックオン警報が元に戻そうと喧
しく鳴り響いた。

『絶対迷彩解除。PACへのエネルギー供給グリーン。全部装展開
完了』

ダンボール
「迷彩解除。これより作戦を開始する」

四隅にあったダンボールの1つを突き破って現れたIS。その姿は全体的に大きな鎧のようなアーマーを装着したナインボールだ。

外部アーマーは深緑で、迷彩柄を施しており、両腕部に巨大なレールガンとガトリング、肩には通常の三倍は巨大なミサイル発射装置が陽光を鈍く反射させる。

また鈍重と思わせる脚は打鉄の脚二本分はあるかもしれない。

特に目立ったのはナインボールが背負う箱。まるで籠のようなそれは軽くISを収納出来るだけの巨大さがある。

「アンカー射出」

『アンカー射出。固定を確認しました』

脚部から打ち出された楔が四方に飛び、地面へ打ち込まれる。お兄ちゃんはその確認すると肩のミサイルを僕達に向けた。

「「「っ?!」「」」」

放たれたミサイルの射線上から逃げる。

追尾もしないミサイルに誰かが笑い、仕返しにとお兄ちゃんへ攻

撃を開始する。

『春奈ちゃん！』

『私が牽制だね・・・！』

体を固定したナインボールは4人の攻撃に対し回避行動も取れずにただの的としてその場に居続けた。けどお兄ちゃんとしてただ攻撃を受けるだけでなく、ガトリングを放ち、足を止めた者に対してレールガンを放つ。

アリーナに止まない銃声と砲音が響き続ける。和太鼓のような重低音に肝を冷やす僕達は合間を見つけては攻撃し、飛び交う銃弾を避けながらナインボールの迎撃に努めていた。

故に誰もが背後を疎かにしてしまった。

——ガチャ・・・ンツツツ！

放たれたミサイルがアリーナ最上部に到達すると腹の部分を展開、極小の爆弾をバラ撒く。

空中に満遍なく広がった爆弾はアリーナの半分を爆炎で喪やし尽くし、範囲内の物体を吹き飛ばした。

「つきゃああー」

「あああーっ！」

「つくう！」

（嘘！ク、クラスター爆弾?!）

クラスター爆弾。

巨大な筒に小型の爆弾を詰め込み、空中で爆発させる広範囲被害兵器。

容器となる筒に小型の爆弾を詰め込むことから収束爆弾や親子爆弾とも呼ばれている。

これは子によって強力な対空、対人兵器に変貌する。例えば小型

爆弾ならば脆い建造物や装甲の薄い兵器、空にいる兵器は広範囲で被害を被り、地雷ならば一発の収束爆弾で一度に区画レベルで濃密な地雷原さえ作れる。

そしてお兄ちゃんが使った用途は、限られ密室内での確実な殲滅。それもアリーナのシールドを利用した無駄ない爆轟攻撃だ。

『春奈ちゃん！』

『っ、くう・・・左腕が鈍くなっちゃった・・・。それに今ので銃身をぶつけたみたい・・・歪んでるよ。スラスターと各部間接はダメージがあるけど、いけるよ・・・！』

『アサルトライフルは僕のを使って！』

互いにシールドに手を付きながら確認を取る。シールドダメージは軽微だが、吹き飛ばされた際の衝突で持っていた装備が壊れている。春奈ちゃんに至っては片足の装甲が碎けて内部の回路をダメにしている。

未だ晴れない爆炎を突破り、急降下した僕達は武器の譲渡をすすせるとすぐさまお兄ちゃんへ波状攻撃を開始する。遅れて対戦相手も加わり、4対1という形になった。

お兄ちゃんは口元を歪ませながらさらに二発の収束爆弾を発射、空はまた紅蓮に吞まれて僕達に影を落とす。まるでここだけ違う世界だ。

空は炎に吞まれ、空を焼いた龍は不遜に傷つく獲物にその牙を見せ付ける。

僕達の攻撃で外部アーマーが削れるのを無視していたお兄ちゃんはその場で砲撃を始める。

慣れない三次元躍動旋回を駆使しながら回避攻撃を続ける。

ガトリングを打ち続け、さらに足を止めようものならレールガンで攻撃をするお兄ちゃんは鬼畜だ。

お兄ちゃんの狙いは春奈ちゃんなのか、彼女を中心に攻撃を続けている。

僕達も攻撃が続けているが、怯みもしないお兄ちゃんには無意味に見えてくる。

『なにあれ！硬過ぎでしょう！』

『これだけ打ち込まれてるのに怯みもしないなんて——きゃっ！』

『うわっ！』

相手側の1人と春奈ちゃんにレールガンの凶刃が直撃。互いに切揉しながら墜ちる。

『無駄口なんか叩いてる暇ないよみんな！周りを意識しながら攻撃を続けて！』

慣れない集団行動に乱れが生まれるのにそこまでの時間は有さなかった。

僕以外の3人は回避と攻撃に意識が散漫になって周りの動きに眼が行かず時折衝突や急停止を繰り返す。そういったタイミングを見計らいレールガンを撃たれてしまうため上手くいかない苛立ちと焦りが次第に大きくなり、対には暴走という形で現れた。

春奈と対戦相手の1人が現状に痺れを切らして高度を取ろうと空へ上がったのだ。

『・・・・・・・・っ?!』

『つる・・・・しい・・・・!』

突然の苦しみだす2人。周りは訳が分からずに驚いた。

数秒と経たずに喉を押さえながら落下する2人の顔は青く、1人は白目さえ向いていた。そんな無防備な2人にお兄ちゃんは無常にレールガンとガトリングを放った。

『いやあああっ!』

『つ・・・・?!』

『危ない!』

春奈とナインボールの間に割って入り、シールドで砲弾を弾き飛ばす。ラウラの物より強力なレールガンだ。シールドが凹み、腕を持っていかれそうな痛みに唇を噛みながら急ぎその場を離脱する。

後ろを確認するとシールドエネルギーが切れたのか力なく倒れている少女がいる。

「シャルル、ちゃん・・・」

「っ、春奈！」

青い顔だ。アジアンではありえないほどに青白くなった春奈は浅く息を吐きながら僕を見上げる。

「どうしたの春奈！凄く苦しそうじゃないか！」

「上にあがっちゃダメ・・・酸素、ない・・・」

「え・・・・・・・・」

計器に眼を向けて確認する。

別に春奈の言葉を信じなかった訳ではない。ただ、どこからが無酸素空間なのか知りたかったからだ。

（アリーナの半分以上が無酸素状態?! そんな、嘘!）

考えれば不思議ではない。あれだけの爆発と燃烧だ。酸素がなくなっても不思議ではない。

勿論アリーナのシールドは風を通すためそれも短時間の間でしかないけど、お兄ちゃんは先程から間を空けて収束爆弾を放っている。少なくともこうなることは分かっていたに違いない。

残弾がわからないこの状況、それはあまりに脅威だ。無酸素状況下での人の行動時間などたかが数十秒もない。無酸素下で呼吸してしまえば先程の2人のように意識を失いかけてしまう。下手をすれば死んでしまう恐れだってある。

勿論、設定さえ完璧なら命に影響はない。ISには延命装置があり、最悪は仮死状態で体を治療するシステムもある。だが、延命装置の発動は問答無用で死に体を曝す事になる。容赦無いお兄ちゃんがそんな好機を見逃さいことなど先程の一撃で分かり切っている。なにより延命装置があるからといってその時の苦しさや痛みが無くなるわけではない。

（手の上ってわけか・・・）

ガトリングをパージし、新たにバックパックから取り出したガトリングを腕に固定する一真。動く度にジャラジャラと空ヤツキヨウの山が崩れる。まだ始まって数分とは思えない弾数だ。

(制空権はお兄ちゃんに取られてる・・・取り返すにもクラスター爆弾のせいで)

『シャルルちゃん・・・』

『どうしたの?』

『提案があるの・・・聞いてもらえる?』

『どういった内容?』

『犀川さんは数十秒に一度爆弾を放ってる・・・たぶんそうしないと酸素が供給されるんだと思う。だからね——』

乱入から既に数分。俺は体が震えているのか、揺れているのか分からないうまま現状の把握をしていた。

『敵数4。内1は酸素欠乏により無力化。残存敵数3、内2は残エ

ネルギー各1900。E1（エネミーワン）はシールド、アサルトライフルに損傷。

残武装はガトリング1、チェーングアン1、レールガン1、レールグレネード2、収束爆弾1、シールドブレード1となります。最大稼働銃撃時間は374秒となります』

『ガトリングがジャムったのが痛いな。あれで後50は増えたらうに………作戦進行に問題は？』

『フェイズ3へ移行中、作戦進行に問題はありません。

ただし無駄弾が多いため作戦Fを視野に入れてください』

『手先の感覚もあやふやなのに………とにかく最後の花火を上げたらチェーングَانَを総射、グレネードでE2と4を墮とすぞ』

収束爆弾を空へ向け放つ態勢を取った一真は牽制にチェーングَانَを向ける。けたたましい銃声と共に張られた弾幕によりデュノア達は蜘蛛の子を散らすように逃げた。

三方に散る敵機を確認後、ミサイル発射装置のページ。代わりとなるチェーングَانَの準備を始める。

クラスター爆弾はこの場にそぐわぬ速度で目標地点へ向かう。

『警告。ロックオン警報』

『は？』

『収束爆弾をロックオンされています』

『最悪』

俺のボヤきと共に発射された収束爆弾が頭上で打ち落とされた。

紅蓮の炎と爆音に包まれた俺を見たアイツらはきっとガッツポーズを取っているに違いない。

『成功だよ春奈！』

『うん・・・これで犀川さんは』

爆音の中で聞こえた会話。偶然にも傍受した会話から2人の気の抜け具合がわかる。なんとも抱き締めたくなるほどに可愛い勘違いだろうか。

自然に上がる口角。虐め応えのありそうな3人の驚く様が目に浮かぶと口が三日月のように裂けていきそうだった。

（ところがぎっちゃん）

未だ爆炎は晴れず、酸素もない状況下で勘を頼りにチェーングンを放つ。

「「え?!」」

弾丸は爆炎を吹き飛ばし、勝ち誇った3人に襲い掛かった。

『誤差右に6、高さ2』

(H・1マジ高性能)

「「きゃああっ!!!」」

修正された発射角に狂いはなく、チェーンガンとグレネードにより2人が撃ち落とされた手応えはあった。

次第に晴れたそこには、俺の立ち直りの早さに困惑する3人がうる。

爆炎の中、変わらない深緑の装甲が姿を現す。塗装が剥がれた箇所もあるが、問題はない。

武器の確認をしていると、先程の爆発でグレネードの砲頭に土が詰まっている報告が上がった。さらにはレールガンのコイルも歪んだらしく、これ以上の使用は最悪暴発を招く危険もある。

「「.....」」

使えなくなった武器を薬筒の山の中に放り投げる。

「しゅこーしゅこー」

「・・・・・・・・」

「しゅーこしゅーこ」

「ズルいッッッ！」

こちらを睨んでいた2人が叫んだ。何がズルいのか俺にはよく分からない。

「しゅーこしゅーこおしゅここ」

「酸素マスクなんてズルだ！」

「自分だけズルいです・・・犀川さん！」

『気にするな。俺は気にしない』

「「うざっ」」

酷い言い様だ。

思い出したかのように逃げ始める3人にチェーンガンと新たなグ

レネードを一斉掃射する。

春奈達のおかげでアリーナの2／3が無酸素状態になった。酸素マスクを取り出さなければいけなくなったが、ソレを差し引いても価値はある。

『・・・・・・・・正直熱くてかなわん』

ただ、この熱さだけは道にも出来ない。大量の火器の熱もあり、H-1の報告では内部熱がもうすぐ40℃になるらしい。

シャルル達が猛攻に敗れるのが先か、蒸し殺されるのが先か。

（マスクを狙うな、マスクを）

迫り来る弾丸からマスクを守りながら攻撃を続ける。

時間を少し遡る。ちょうど一真が現れた辺りだ。

「だ、段ボールから出てきましたね」

「あれは・・・・・・・・・・?!」

「一真君・・・・・・・・・・」

ある程度の予想がついていた私は呆れていたが、織斑先生と秋葉は違った。2人共興奮に顔を赤くさせながら立ち上がった。

「あの潜伏法はまさか！」

「伝説の潜入工作員が得意としたスニーキングトリック！」

「この眼で見られるとは、感動したぞ犀川！」

「ああ、ああ！まさか一真君があの大偉大な技術を覚えてるなんて！」

正直、何も言えない雰囲気だ。

感動で目尻に涙を見せる2人のテンションについていけない。1人取り残されたことに孤独感を感じたが、今だけは甘受しようとする。2人から視線を外す。

これを理解したら、私は私でなくなるような気がする。

「しかし、どうやってISの反応を消していたんでしょう？」

「段ボールに不可能はないんだ！」

「かの蛇も段ボールだけで敵地の奥深くに潜入したんです・・・アリナ程度なら問題にもなりません！」

「いや、それは流石に・・・」

このアリナには東西南北の管制塔にそれぞれ超高性能センサーが設置され、さらには戦闘中のISがハイパーセンサーを全開にしているのだ。それを掻い潜るステルス性をナインボールが有しているなんて聞いていない。

「まあ、息を殺しただけでISのハイパーセンサを誤魔化すことは出来まい。たぶん動力を完全に切っていたのだろう」

「そんな！自殺行為ですよ！」

ISの武装は全て通常の、歩兵が使う武装なんて比にはならない。弾丸一発のサイズが数倍も違うのだ。一発で人間などミンチになる。

数日前に犀川君達と見たスプラッタ映画を思い出して吐き気を催す。珈琲と一緒に飲み込み、今は彼の身が無事だったことに涙を流そうと思う。

「安心してください、山田教員。彼が今装着している外部PACの装甲は下手な銃弾程度ものともしません。ヘヴィアームズヘヴィアームズの装甲を砕くには、それこそトマホークMkⅠ？を打ち込まなければなりませんから」

トマホークMkⅠ？。確か最近米軍が開発した巡行ミサイルだったはず。威力は確か……イージス艦を4発で沈める威力だったはずだ。

「で、ですが一真君のISは不完全な全身装甲ですから……顔に当たれば大惨事なのでは？」

「……………」

「確かに、動力を切れば絶対防御も発動せんな」
「……………」

「そ、それに近くで爆発が起きたら」

「……………後で一真君とお話をしなければなりませんね」

静かに怒る秋葉に怯えた麻弥は逃げ所として千冬を選ぶ。正直、風景を歪めるような片の近くにいられるほど私は強くないので。

「お、織斑先生はどう見ますか？」

「どうと言われてもな……まだ始まった——」

瞬間、アリーナの上空に真っ赤な花が咲いた。

耳を塞ぎたくなるほど爆弾の爆発がアリーナの内外を埋め尽くす。その爆音に誰もが耳を塞ぐ中、織斑先生は目をこれでもかと思開く。

「クラスター爆弾………どういことだ秋葉！」

「お、織斑先生？」

「なぜ犀川のISにクラスター爆弾を積んである！仮にも軍の開発機が！」

「え、クラスター爆弾？え？」

初めて聞く単語だ。どうやら先程犀川君の放ったのがそうだというのは分かったが、織斑先生が顔を赤くしながら秋葉先生を締め上げる理由が分からない。

「答えろ秋葉！なぜ条約で禁止されているクラスター爆弾を積んでいるんだ！」

「落ち着きなさい、千冬。あれはクラスター爆弾じゃないわ」

「なにをいけしゃあしゃあと！どう見てもクラスター爆弾じゃないか！」

「あ、あの！クラスター爆弾って、なんですか・・・？」

秋葉先生に掴み掛かる織斑先生に堪えかね、間に入る。今にも殴りかかりそうな雰囲気だ。

「・・・・・・・・クラスター爆弾とは、簡単に言ってしまうえば小型爆弾を詰め込んだ爆弾の事だ。中身を変えれば対人、対空兵器となる」
「それだけ、なんですか？」

秋葉先生に掴み掛かる織斑先生に堪えかね、間に入る。今にも殴りかかりそうな雰囲気だ。

「・・・・・・・・クラスター爆弾とは、簡単に言ってしまうえば小型爆弾を詰め込んだ爆弾の事だ。中身を変えれば対人、対空兵器となる」
「それだけ、なんですか？」

聞いた限りでは禁止されるような物ではない。多弾頭ミサイルとは違いがあるとも思えない代物だ。

「それだけで脅威なんだ。中身を地雷に変えれば広範囲が地雷原に

なり、さらには不発弾の問題からそれを拾ったり、発見の遅れた爆弾のせいで大量の民間人に犠牲が出た。

今から百年以上も前にオタワ宣言によって製造、保持、移送の禁止がされている」

聞かされた内容は余りにも穏やかではない物だった。

さらに一息入れた織斑先生の言葉に私は言葉さえ失うことになる。

「日本も条約加盟国なんだ！」

「え、ええ?!」

「各国の人間が集まる中でクラスター爆弾を持ち出すなど……
・陸自は世界に喧嘩を売るつもりか！」

「落ち着きなさい、千冬」

「ふざけるな！これが落ち着いていられるか！生徒を山車に使いお
つて！」

顔を赤くし、掴み掛かる織斑先生に対して秋葉先生は落ち着き払
っていた。その顔には嬉しげな笑みが浮かんでさえいる。

「落ち着きなさい、千冬」

「私の可愛い生徒に何かあってみる……たとえば貴様でも！」

「ふう・・・」

「お、落ち着きましたよう織斑先生いっ！」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

淑やかに溜め息をつく秋葉先生と獣のように荒く息を吐く織斑先生の間にいる。

「まったく、貴女は」

鼻息荒くする織斑先生を優しくに見つめる秋葉先生は私を退かすと織斑先生を優しく包む。

「なにも変わらないのね」
「ふみゅ?!」

一瞬でした。一瞬で秋葉先生は織斑の背後に回って首をねじ曲げたんです。

可愛らしい悲鳴こそ上げましたが、白目を向いて息さえしていません。どうみてもやられました。

「お、織斑先生！織斑先生……っ？！」

間近にいた私や、張本人である織斑先生でさえ視認出来ない速度・
……ああ、次は私なのかな。

「織斑先生！織斑先生しっかりいっ！」

「昔から頭に血が昇ると人の話を聞かないんだから」

「………キュー」

「あ、秋葉さぁーんー！」

「はいはい……よいしょ」

私の願いを受けた秋葉先生は織斑先生の首をもう一度捻り上げた。
バギッと致命的な音を立てた。

これ、本当に大丈夫なんでしょうか。

「……………っは？！」

私は、なにを………」

生きていました。

「良かったっ！」

「山田君？」

「大丈夫、千冬？」

「あき……っは！」

「変な区切り方しないでもらえる？」

虚ろな瞳が次第に焦点を合わせ、秋葉先生を睨み付ける。

「そんなことどうでもいい！それよりもクラスター爆弾だ！」

「クラスター爆弾じゃないわよ」

「どこからあ！どうみてもお！クラスター爆弾じゃないかあ！」

秋葉先生の襟を掴み、振り回す織斑先生はいつもの先生らしくありませんでした。なんというか、こっちの方が親しみやすい感じがします。

もしかして今までのキャラ？

「だって、あの中身はマグネシウムやスタングレード、さらに炸薬

ただなもの。
まあ言ってしまうえば見た目派手な花火ね」

論より証拠と言うようにディスプレイに全員の残エネルギーが表示される。そこには犀川君が現われてからあまり変わらないエネルギー量が表示されていました。

「あれ？」

「わかったでしょ。あれは見た目派手で一定空間の酸素を根こそぎ二酸化炭素にする程度の可愛い花火じゃない」

「はい、アウトオーツ！」

「え、なんで？」

「無酸素状態を作るとはなんだ！相手を殺す気か！」

「そ、そうです！下手をすれば後遺症だって残っちゃいますよ！」

「大丈夫ですよ、だってISは元々無酸素空間を前提に開発されているんですから」

確かに、元々ISは無酸素下での行動を前提に作られています。直径数百kmを把握するセンサーも、慣性中和もそのためにあると言っている物です。

「あ、ああー！」

可愛らしく小首を傾げる秋葉先生の背後。そこには今まさに話した通りに無酸素空間に突入した生徒が呼吸不全により落下する姿が映っていた。

どう見たって先程の言葉に矛盾した光景です。織斑先生も秋葉先生をまた締め上げています。

「あーきーはーあっ！」

「最適化をしなかったみたいね。
まあ、ISには生命維持システムがあるから平気よ」

「さ、犀川君が2人を撃ちましたよっ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ああ！しかも助けに来たデュノアさんごと攻撃し続けてますよ！」

「・・・・・・・・流石、お前の教え子。容赦が無い」

「どこに出しても恥ずかしくないわね」

「無防備な相手を攻撃するなど、何を教えてきたんだ貴様」

首を絞められる秋葉先生を余所に犀川君に通信を繋げようとする。だけど、その手は秋葉先生によって止められた。

「殲滅戦や電撃戦に、打撃戦、防衛戦、包囲戦、突破戦、退却戦、掃討戦、撤退戦。

平原で、街道で、塹壕で、草原で、凍土で、砂漠で、海上で、空中で、泥中で、湿原で。

この地上で行われるありとあらゆる戦闘行為を教え込んできたわ。生身で、ナイフだけで、拳銃だけで、全装備で、ISで、考え付く限りの、思い付く限りの、最悪という最悪な状況下に彼を置き続けたわ」

「」」

正直言うと、私達は犀川君を守らなければいけないという義務感を持ちました。

「彼はあるとあらゆる戦況で動けるようにしてきた。1人でも、多人数でも、どんな場合でも生き残れるように」

（予想の斜め上よりもさらに上過ぎる！何を考えているんだコイツは?!）

（犀川君の強さの秘密が分かった気がします・・・）

「でも、まだまだムラがあるわ・・・・・・本来の半分以下しかない作戦範囲の敵に対して一万超の弾丸と数十の砲弾を使ってまだ一機も落とせないなんて」

クラスター爆弾を打ち落とされて爆炎に包まれる犀川君を見る秋葉先生の眼は酷く憂いていて、さらには冷たかった。

「ISとPACに頼り過ぎてるみたいだし、やっぱり訓練内容変えなきゃダメかしら？」

「織斑先生・・・・・・」

たまらず織斑先生に声をかける。先生も同意見なのか私の肩に手を置きながらディスプレイの犀川君を憂いた瞳で見つめていた。

「安心しろ、山田君。犀川には特別補講を言い渡す。それで学園に縛り付けるように手配してやる……………奴に犀川を任せているといつか壊しかねん」

「ああ、チェーンガンを撃ち続けながら照準を合わせるなんて。あれだけ教えてあげたのに」

模擬戦の状況を纏めながら千冬先生と私は犀川君の為にこれからの土日を補講で潰すように書類を作り始めるのであった。

「補講の内容は何にします?」

「奴は確かISの整備が出来たはず……………二年の補講に捻込んでやれ」

春奈の計らいによりクラスター爆弾を落とされてから既に数分。

「・・・・・・」

春奈もギリギリだが戦闘可能。

「・・・・・・」

もう1人も弾切れではあるが健在。

『＼（＾Ｏ＾）／』

全員が全員、自らの武器を向けて警戒している。対する俺は弾の切れたチェーガンとグレネードを向けているだけ。正直、どう考えても勝ち目なんてない。

現状打破に頭痛める俺を見兼ねたH、1はある提案を提示する。

『シールドブレイドの使用を奨めます』

『あの妖刀を？』

あんな血吸い包丁なんぞ抜きたくない』

脳裏に凶々しい剣が思い浮かぶ。

確かにあれならば目の前の連中には有効だが、いかんせん使い勝手は最悪だ。下手をすれば大ケガもあり得る。

『贅沢を言っている場合ですか？』

私はかまいませんが、このままでは高槻秋葉中将及び小泉総一郎から苦言を呈されます』

それを聞いた俺の決心がつくのは早い。

「今の私は！悪魔すら、凌駕する存在だぁッッッ！」

『外部PAC、キャストオフ』

俺の思考を読み込んだH-1は外部PACをパージ。次いで唯一残った武装を展開させる。

異変に気が付いたデュノアは誰よりも早く引金を引き、遅れて春奈達もそれに続く。

俺は銃弾による土煙により消えていくが、銃弾がナインボールに届くことはない。

やった、と誰もが考えた。

ナインボールの残エネルギーは2200。装甲の隙間や顔に当て、減らし、さらに今の斉射だ。いくら常識外れなお兄ちゃんとナインボールでも健在な筈はない。

「まだ、隠し玉があるみたいだねお兄ちゃん」

「もう、嫌……………」

だけど、やはりお兄ちゃん達は常識外れという枠組みの住人なのだと再認識することになった。

『シールドブレイド、ハウリングオブブルーザHOL、展開完了』

土煙の晴れたそこには白く、巨大な鉄塊が突き刺さっていた。

鉄塊、それしか言えない分厚い鉄の板だ。

装飾などなく、珍しい機能も感じないただの剣。故にその巨大さが余計に際立つ。

「負けられない……負けられないのだよ」

鉄塊、HOLの背後から現れたお兄ちゃんは地面からそれを引き抜くと両手で腰に構える。

剣を嗜む人間から見ればあまりに御粗末な構えだ。だけど、素人である僕達からすれば異様な巨大さは十分に恐怖の対象となる。

「こ、怖いよ……」

「なんか、嫌な感じがする……」

その恐怖を増長させるような何かを鉄塊は発していた。汚れ一つない白さは美しいと感じるよりただただ不気味さを強調し、風が鉄塊によって切り裂かれた音は怨嗟にも似た低い音を響かせる。

「なんか、不気味ですー」

「気味悪っ」

遠巻きにいる観客さえその不気味さに鳥肌を立てる。

だが、鳥肌だけではすまない者もいた。

「なんだ、アレ………なんで物が殺気だってんだよ?!」

「こ、怖い……だと? 私が、刀を恐れているのか?!」

「不気味なんてレベルじゃない! なんなんのよあの武器!」

「まるでダインスレイフ………」

一夏達は全身を刺すような何かに怯え、歯をガチガチとならしている。周りが彼らを気遣うが、彼らはそれに大丈夫だ、大丈夫じゃない、など応えられる余裕はなかった。

『瞬間加速』

『了解』

爆発したようにブースターが火を噴く。誇張でも、比喻でもない。無駄なエネルギーが尾のように火となり、残像が残らない彼に代わり軌跡を燃やす。

「早い！」

「まず、1人」

「きゃん！」

瞬間加速から緊急停止したお兄ちゃんは上半身をしならせ、砲丸投げの前段階のようにHOLを振り回し、反応出来ずにいた春奈を殴り飛ばすように斬り付けた。

「つく！」

盾にしたアサルトライフルを叩き折り、さらには胸部装甲を破壊してなお彼女は吹き飛ばなければならなかった。

それは良かったとも言えるが、悪かったとも言える結果だ。

切れ味がよくない故に絶対防御にまで達さはなかったが、切れ味が悪いせいで余剰分の力が衝撃として彼女を襲い、結果、気絶させるに至る。

気絶した春奈を放って僕は急ぎその場を逃げ出す。

僕の体格で2つ分逃げ出した頃に切っ先が胸を擦った。生唾を飲むことも出来ず、涎として糸を引きながらお兄ちゃんの頬を濡らす。

見えない瞳は冷たく、怖く、また、反撃するだけの本能も無くな
くすだけのものを感じる。

（む、無理だっ！あんなの、相手になんか――）

お兄ちゃんは逃げる僕よりも手近な少女に向かってブースターを
噴かしていた。

徐々に大きくなるブースターの音が何かの叫び声のように聞こえ
る。HOLが速さと重さのみで切り裂いた風が悲鳴のようだ。

「っし、ぜあっ！」

「っく、このうっ！」

紙一重で避ける少女に僕はなんで逃げないのかと肩を掴んで問い
ただしたかった。

何度も、何度も切っ先が体を擦り、HOLの腹に触れてまで回避
する彼女の精神が信じられなかった。鋼で出来ているのではなから
うか。

彼女は弾の切れたアサルトライフルを投げると腰に収納された高出力カッターを取り出し、ナインボールの肩へ突き刺す。硬質な音が離れていても聞こえた。

傷一つ無いことからシールドを必要としない程に強固な装甲なようだ。その証拠にカッターは勢い良く弾かれた。

死に体を曝す少女を掴むために伸びた手をまたナイフで刺す。勿論、弾かれてしまうが、少女はそれを支点にナインボールの肩を飛び越えた。

逆に死に体を曝すナインボールに少女は落ちていた仲間のショットガンを拾うと全弾撃ち込む。

シールドが発動し、目まぐるしく減少していく様にお兄ちゃんは舌打ちした。

「っちい！」

担ぐようにHOLを背負った一真はそのままスラスターを全開に噴かす。少女を壁を使い押し潰すためだ。

しかし拘束もされない少女はすぐさま逃げ出した。姿勢制御にさえ気が回らないほど慌てていたのか着地と同時に地面を転がる。

「っるあ！」

自滅した、誰もがそう考えた中でさえお兄ちゃんは斜め上に行く。

HOLを地面に刺し、AICを使わず、腕に負担をかけながら体を振り子のように振り回して突撃をしかけた。

知性の感じられない動きだ。まるで獣だと思った。

「墜オチイイイろオツツッ！」

全重量、全速度、全力を乗せた一撃。

少女はその圧倒的な一撃に恍惚とした表情を浮かべる。

「やっぱり、強いんだ」

超重量の物体が落下したかのような轟音と土煙がアリーナを包む。

「ふう、ふう、ふう………！」

装甲が粉々に砕けたリヴァイブと気絶した少女。そして息を荒げるお兄ちゃんがそこにいた。

落ち着きを取り戻すまでそこまで時間はかからず、それにお兄ちゃんも驚いていた。

HOLで土煙を振り払う。

それだけで2人を飲み込んでいた土煙は吹き飛び、視界の端に映る刃を見るかぎり刃零れはなさそうだ。元々斬る前提の武器でないから刃零れしたところであり影響はないのかもしれない。

ただその尋常ではない頑強さに呆れはした。

ハイパーセンサに近づく機影を捕えた。どうやら気絶した生徒を回収しに来た教師のようだ。

お兄ちゃんは気絶した少女を抱き上げ、回収しにきた教師に投げ渡すと自由になった腕の反応を確かめるように一度空を切り、HOLを肩に担ぎ直す。

「い、や・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

僕の番が来た。

「・・・・・・・・」

「来ない、でえ」

涙を流しながら後退る。誰もが同情すると同時に安堵した。ナインボールと対峙したのが自分でなくてよかったと。

ゆっくりとHOLを掲げたナインボールを見上げる。ブースターを噴かせばすぐに離れられるし、得意のラピッドスイッチを駆使すれば難なく相手を追い払える。

だけど、体は頑なに理性に逆らって後退るしかない。

HOLが太陽を隠す。

切っ先が最上に達したとき、その刃は真下へ振り下ろされた。

「いや、いやあああああああああつ!!」

試合は参加者全てを戦闘不能にしたことで終了を迎えた。

残り50で撤退するナインボールに対して気絶してしまったデュノアに同情すればいいのか、はたまた嘆けばいいのか周りはわからないままだ。ただ、俺がこれで決勝に参加するというのはわかった。

人間は外敵要因しかないものほど単純に見るという証拠だろう。

（これで、決勝進出か・・・・・・・・やっぱり諸外国のVIPが見るんだろうな）

ナインボールを任された際に【如何なる理由があってもU・1の全貌を隠す】という契約内容を思い出し、溜息を吐く。

今までH・1に頼んで制限をかけて戦ってきたが、最近は窮屈に感じる。

やっとナインボールに順応してきた証拠かもしれない。高槻さんと戦っているのは敗北以外は味わえず、対等な者達と戦うというのもここに来てからだ。悪くはない。

「犀川一真」

鉛のように重い声が部屋に響く。金属の箱みtainな部屋だから響くのか、それとも声の主が嫌いだからそう聞こえたのか。きつと両方に違いないと振り返りながら敬礼する。

唯一の入り口には自衛隊幹部数人を連れた小泉総一郎がいた。

「お疲れ様です、小泉大将」

若白髪な頭を後ろに撫で付け切れない軽いオールバックの男、日本総合自衛部隊大將小泉総一郎、実質自衛隊のトップだ。

なんで来やがったと嫌気を感じながらも、決して表に出ぬよう顔に力を込める。

「犀川一真、君は自分の立場がわかっているかね？」

「……………申し訳ありませんが、質問の意図が掴めません」

「そうか。ならば分かりやすく言おう。

君はなぜ、一般人に遅れを取っているのかと聞いているんだ」

一言、一言を強調する喋り方だ。そんなことしなくても聞こえるというのにこのオヤジは。

「確かに私は一般人に遅れを取りましたが、彼女達は国家代表候補です。多少の被害は致し方ないかと」

「ふむ、つまり君は制限付きの相手に対して遅れたのは自らの力量がないからと言うのだな？」

「自分とて制限は多少付いています。

機能の大半を隠し、さらには本来の武装さえ使っておりません。今回のトーナメントも試作武装の試験のため勝敗は二の次としました」

「ほう」

貧相な顎髭を撫でる上官を見ながら考える。さて、どんな嫌味を言われるのかと考える。

今回の試合結果に何か言われる気はしていた。なにせ一般人が大半の中、制限が付いたとしても武装の数だけはあるのだ。対策など建てられない中で辛勝や敗退が目立つと対立する者からすると絶好の指摘要因となる。それが現在、全世代最高水準にある機体もってしてなら尚更だ。

「君は、我が国最高のISを使用して負けたのは仕方ないと言うのかね？」

「使い慣れぬ武装ですので」

「ならば先程の戦いぶりは何だね。数万という弾丸と数十の砲弾がありながら、墜とした敵機は0……君は諺も知らないのかな？」

「下手な鉄砲数撃ちや当たる、ですか？」

「わかっているなら！なぜ自らの無能を晒すような真似をしたのだ！」

太った男が会話に割り込んでくる。記憶が確かなら、九州一体を牛耳る幹部のはず。

脂ぎった顔を赤くしながら襟首を掴み上げる男を見る。見た目相応というのだろうか、肉だけ蓄えて鍛えていない男では成人男性並の体重のある俺を締め上げるのがやつとであった。

「貴様は、それをわかっていないがら！」

「きつと銃身でも歪んでいたんでしよう。運が悪い」

まるでおみくじで凶を引いてしまったと言わんばかりの態度で肩をすくめる。実際にはアレが自分の腕ということくらい理解している。しかし、それを認めて謝る相手は目の前の無能達ではない。

「つつ！」

「ぐっ」

鈍い、肉を打つ音の後に背中をパイプ椅子に強く打つ。鋭い痛み
に顔を歪め、切れてしまった唇から血が流れた。拭えば明るい朱で
手が汚れる。

「貴様は、自分の立場が分かっていないようだな！」

「っぐ」

「貴様はただの実験動物だ！実験動物なのだよ！」

ドス、ドス、と漫画の擬音のような音が人体から鳴るのかと他人事のように思いながら腹筋に意識を集中させる。痛みはあるが、耐えられないわけではない。

「はぁ、はぁ、はぁ！」

（……………筋肉全て、贅肉か何かに換えたのか、コイツ？）

余りにも短時間な暴力に呆れながら立ち上がる。

それが癪に障ったのか男は体重の乗った拳を振り上げる。

「実験動物の、お情けで生かされている研究材料風情が！」

「つつ……」

殴られた痛みに自然と視線がキツくなり、反抗的な意志が沸々と沸き上がり言葉となる。

相手は殴った際に捻ったのか手首を押さえていた。本当に情けない。

「頑強な実験動物で、申し訳ありません」

暗に相手の非力さを言いながら深く切れた唇を舐めながら見下すように少しだけ顔を上に向ける。俺に出来る唯一の反抗だ。

「きさ、貴様はあっ！」

トマト、にしては厚すぎる皮膚を真っ赤にした男は軍服の懷から拳銃を取り出すと銃底で顔を殴り飛ばす。なんとか耐えたが男はさらに殴り、殴り、殴り飛ばす。

男が疲れにより荒くなった息を整える頃には顔は血だらけになり、赤く腫れ、青痣が出来ていた。涙が滲んできたが、それが痛みから来るのか、それとも悔しさなのかはわからない。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ！」

「・・・・・・・・っは」

豚のように鼻息を荒くする男を見てしまうと滑稽で、思わず鼻で笑ってしまう。こんなのに殴られるとは、自分も動物博愛が過ぎる。

此方の考えに気付いたのか男は目をこれでもかと思開き、怒りに身を任せた行動に移らせた。

「貴様 あっ！まだ睨が足りないようだな！」

拳銃を向け、その撃鉄を下げる。そして銃口は倒れている俺の額に向けられる。

殺しはしないだろうが、最悪顔の一部は吹き飛ぶと覚悟していた時だ。

銃の撃鉄を落とした男に対して誰よりも早く、H・1が反応した。

『ナインボール展開』

一瞬で展開されたナインボールは俺の意思を無視してHVMで男の拳銃を切り裂き、その喉元に切っ先を突き付ける。

『契約を無視されるようならば、私も相応の対応を取らせてもらいます』

「つく、AIの分際で人に歯向かうのか！」

『黙りなさい。貴官が撃鉄を落とした時点で契約は破棄された。これより私はプログラムに従いマスターの保護を最優先にします』

「「「ぐああっ！」「」「」

HVMが起動し、高周波特有の強い耳鳴りが部屋中を振動させる。

音を出すのも、聞き取るのも振動を使わなければいけない。高周波メッサーの振動は毎秒数百以上だ。そんな物体が空気を叩けば、近くにいる人間の鼓膜程度は破ける。

誰もが耳を塞ぎ、身を振る。

「き、きさ、貴様！人質を見殺しにするのか？！」

『お忘れのようなら思い出させて上げましょう。私は、今までの会話全てを記録しています。人質に害なせば、貴方達は世界から居場所を無くすだけ。懸命な判断とは言い難いですが、愚かな貴方達だ……好きに破滅するといい』

HVMを尻餅を着く男に近付ける。それだけで男の片側の鼓膜は破れ、振動により肌が裂ける。それらの痛みと死を間近にした恐怖により、男は失禁し、鼻水と涎を垂らしながら後退った。

止めなければと体に力を込めるが、H・1はコントロールを移譲せず、体はコンクリートで固められたかのように動かない。

「止めたまえ！」

甲高い振動音の中、総一郎の声がなんとか響く。

H・1はHVMを停止させると刃を引き、アイカメラだけを向け

る。

「戸館の無礼の責は後程取らせる。今は武器をしまえ」

「あ、ありがとうございます小泉閣下！」

目の前の男、戸館は俺から離れて小泉大将の足に縋りついた。

『・・・・・・・・』

「戸館少将」

「閣下！コイツは危険です！然るべき処置を！」

耳から流れる血を押さえながら戸館は小泉大将の足に縋る。部下達は同情と侮蔑の視線を向け、小泉は薄汚いゴミを見るように戸館を見下しながら振り払った。

「君には二階級降格を命じる」

「・・・・・・・・・・は？」

「正式な通達は追って送らせる。それまでは中央で謹慎していたまえ」

「な、何故ですか閣下?! 何故、私を！」

「君の行いで我々の契約が破棄されかけた。当然だ」

「しかし！それはコイツが！」

「黙れ」

「私は、今まで貴方に尽くして来たではありませんか！」

「黙れといっている。」

お前達、コイツを中央へ連行しろ。通達があるまで独房へ放り込んでおけ」

「ま、待ってください閣下！閣下あつ！」

周りの幹部に引き摺られ、戸館は通路の奥に消えていく。残ったのは俺達と小泉とその側近だけだ。

「君は日本を背負っているのだ。君の一挙手一足にな……」

それだけを言い残して小泉達は部屋を後にした。残った俺達は暫らくの間は黙っていた。沈黙を破ったのはH-1からだった。

『過ぎた行いでした、マスター』

『いや、助かった。ありがとうH・1』

ナインボールを量子化し、金属質の床に足を着ける。その際に多少フラついた。どうやら思ったよりもダメージはあったようだ。

「さて、どうするかね」

『まずは体を癒してください。マスターは現在疲れだけでなくストレスも蓄めています』

「H・1」

『はい』

「俺のことは気にするな。俺に関わればお前も立場を悪くする」

H・1は俺と違い寿命の長さが違う。それこそ俺の子供や孫が死んでも健在だってあり得る。そんな時に反抗的なAIなんて烙印があると最悪は初期化されてしまう恐れがある。

H・1の今後を考えていた俺はいつの間にかコイツを対等に見ていることに気が付いた。最初は厄介なプログラムとしか見ていなかったが、どうやら情が移ったのかもしれない。

『かまいません。私は、ナインボールは、H・1は。貴方というマスターがいるから、貴方というパートナーがいるから、貴方という

伴侶がいるから存在出来ます。

マスター、まずはお休みください。貴方はいつも無理ばかりする。………集団浴場の貸し切りに関する手続きは済ませました。今は体を休めてください』

「ああ、まったくお前は……。わかった。今は体を休めるとする」

『集団浴場の貸し切り時間は18:00から19:50までです』

「なら、まずは着替えて部屋で休むか」

フラつく足を一度叩いてから廊下を歩く。歩く度に唇や目蓋から垂れる血を拭う。

体は疲れ、傷つき。心は雪山の凍てつく嵐のように荒んでいた。今は無機質な思いやりでさえ温かく感じる。

その日の業務を終えた。今日は久方ぶりの風呂に入ろうと思うと今から心踊ってしまう。

自衛隊に所属してからというもの、忙しさに振り回され、シャワーのみの場合が多かった。だがIS学園に出向してからは多少の残業はあれど好きな時間が確実に増えた。風呂もその1つだ。

纏めた資料を整理し、保管場所に納めて1つ背伸びをする。全身の筋肉が伸縮し、心地の良い痛みが肩から背骨にかけての疲れをほぐす。

「ご苦労だったな、秋葉」

「んー、ウチの書類量に比べればまだ楽だからいいわ」

友人は労いの言葉と共に缶ビールと缶コーヒーを差し出してくる。これから久々にゆっくりと風呂に浸かるのだ。楽しみは後に取っておきたい。

「千冬はまだ仕事なの？」

「いや、書類の大半は終わったから部屋で一杯やるつもりだ」

相変わらずだと笑ってしまふ。昔は一緒に寮を抜け出して飲みに行ったものだ。

思い出したら飲みたくなった。久々に千冬を誘って一真君と飲みに行くのも悪くはない。

「あまり飲み過ぎないでね」

「私の勝手だ」

「そう言って二日酔いで訓練してたのは誰だったかしら？」

「喧しい」

拗ねる友人を見てクスクス笑いながら缶コーヒーを飲む。ほろ苦い味に頭が冴えるが、やはりあまり好きにはなれない味だ。一真君はよくこんなのを毎日飲めるのだろうか。泥水と何か違いはあるのだろうか。

（まずはバスセットね）

空缶を屑籠に入れ、道すがらに今日入る風呂を考える。

IS学園の集団浴場は広い。面積もあるが、一番はそのバリエーションだ。

生徒の心身を癒し、絶好のコンディションで訓練に励むためというだけあり様々な種類が用意されている。

（この前はワイン風呂で、その前はジャグジーだったから……）

・今日は草津の湯にしようかしら)

部屋に戻り、愛用の可愛い風呂道具を抱き抱えながら集団浴場へ向かう。鼻歌混じりに歩く彼女に擦れ違う生徒達は微笑ましく頭を垂れた。

浴場の脱衣場には珍しく誰も居なかった。貸し切り状態に運がよいと思いつつも、話相手がいないことに少しだけ寂しさを感じる。

IS学園に出向したおりに買ったスーツを脱ぎ、ワイシャツのボタンを1つずつ外す。

頭になった胸を見る。知り合いの中では大きい部類に入る胸だ。

少しだけ寄せ上げ、自分の行いに笑ってから下着を脱ぐ。

多少は自慢出来る肉体をもう一度見ながら溜息を吐く。未だに彼氏がいない私にとって自分の体は未知に近い。身近にいる男は自分を女として見てくれないため、何処で魅力が欠けているのか良くわからない。親友は「エロい体しやがって!」と言っていたが、その体を持っても彼は顔さえ赤らめもしないのだから説得力がない。

「はあ」

湯気しか存在しないような浴場で深く息を吸い、吐く。暖かな湯気に体が暖まる。

まず頭を洗い始める。泡立てたシャンプーを髪に馴染ませ、汚れ

を落としていく。使い慣れたシャンプーのハニーレモンの香りを楽しみながら腰までのびた髪を洗っていく。

髪を洗い、次いで体を荒い終えた時だ。湯船に浸かろうと立ち上がった私に男のような、女のような曖昧な声が掛けられた。

『高槻秋葉。なぜここにいますか？』

突然の通信に驚いてしまう。

ISのコア同士による通信、ネットコアリンクを介して通信してきたのはH・1だが、最初はわからなかった。

なにせ、たった数ヶ月でここまで抑揚ある話し方が出来るとは思わなかった。性別さえ絞れば人間と勘違いするかもしれない。

「H・1」

『お静かに。先程マスターが寝付いたばかりです』

「一真君も、いるのですか？」

『はい。マスターは日替わり湯で体を休めています』

足を運べば確かに一真君が薄緑の湯に半身以上を浸けて寝ていた。

「酷い、怪我」

所々を腫らした顔にそつと触れる。腫れた顔は張りがあり、それだけ酷いというのがわかった。

切れた唇、腫れた頬、青痣の出来た眼の順に優しく触れる。痛々しい傷に知らず知らず顔を歪め、滲む血に涙が出て来る。

「なぜ、この子が」

『戸館上級大尉による暴行のためです』

「彼らは、この子をなんだと」

『実験動物と言っています』

「この子は、ただの少年なのに、何も知らないのに」

湯船に体を浸けて一真君を抱き締める。同年代よりも遅しく、また傷だらけだ。

それがたまらなく辛かった。そうしてしまった責任が自分にもあるのだと思うと今すぐ目の前の青年に滅茶苦茶にしてもらいたくなる。それで気が済むなら、喜んで体を差し出すつもりだ。

『マスターは、いつまで拘束されなければならないのですか？』

「世界が、変革するまででしょう」

『人間は、いつまで経っても変わらない。傷つけ、奪い、犯し、殺し、脅し、支配し、騙す。無駄と言える過程ばかりに直向きに眼を向け、結果、自らの首を絞める』

「彼も、被害者なのですね」

『そして貴女は加害者だ』

「っ！」

冷たい一言に心臓が鷲掴みされたかのように畏縮する。

H・1の言っていることは正しいとも、違うとも言える。

自衛隊という組織に所属する私は広義的には彼を束縛する者達の一頭だ。だが、彼がどこにいても生きられるよう鍛え、支え、共にいると言うならば意味が違ってくる。

だけど、それは違うのだと一度だけ首を振る。

その考えは言い訳に近い。自分は国民を守りたいから自衛隊に入っただけだ。家族も、家も捨てたのにこうして国民の1人である彼を非人道的な立場に置いている。

これでは彼らと何も変わらない。

「高槻、先生………?」

試合が終わって数時間。散々泣いた僕は汗臭い体に気が付き、集団浴場にやってきた。別段部屋のシャワーでも良かったが、今は誰とも話したくない。たとえそれが好きな相手でも、今は1人になりたかった。

今の時間帯ならばみんな食堂にいる。その時間帯だけなら誰にも邪魔されずに1人でいられるとここに来た。だけど、浴場に来た僕は先客に驚き声を掛けてしまう。本当なら気付かれない内にその場を去るべきだったかもしれないが、どうせ近々女であることを証すのだ。あまり問題はない。

僕の声に振り返った秋葉先生の頬を涙が伝う。同性ながら先生の艶やかさに似た魅力にドキリとしてしまった。

「貴女は、シャルル・デュノアさん」

「………驚かないんですね」

先生の落ち着き払った態度に逆に驚かされる。だけど聞いた話では先生はお兄ちゃんの上司なのだ。話くらい通っていてもおかしくない。

「顔合わせの時にスキャンしましたから」

優しい笑顔を浮かべながら衝撃的なことを言う先生に若干退いた。部下が部下なら上司も上司なのか。

「えと、後ろにいるのは」

「一真君です」

体を退けた事でお兄ちゃんの姿が湯煙の中から現れた。見慣れない男性の裸を見つめていたが、ハッと気付いて体を隠す。

「大丈夫。彼は疲れて寝ていますから」

お兄ちゃんは確かに寝ていたが、それで大丈夫というのはどうなんだろう。

微かにしか上下しない肩、先生に支えられなければ湯船に沈みそうになる体勢。一人にしていたら最悪溺れていたかもしれない。

そしてあちこちに見られる傷。

「えと、大丈夫なんですか？」

「ふふ、一真君はそんな野蛮じゃありませんよ」

「いやそうじゃなくて」

「それより浸からないんですか？」

「えと、その、失礼します」

手招きされて思わず湯船に向かってしまう。足先を湯船に浸けると熱過ぎず、温すぎない程よい温度に体の緊張が解れた。

そのまま体を浸けて自然と出て来た息を吐き出す。

「はふう」

極楽ってこういうことなのかもしれない。

「良いお湯ですよね」

「日本のお風呂って、いいですね」

「ふふ、欧州はシャワーが普通ですからね。お風呂だって娯楽に近い」

確かに、向こうはシャワーばかりだった。特にデュノアに属してから風呂さえ入れず、シャワーも許されないときがあったものだ。

「食べ物美味しいし、文化も奥深い、サブカルチャーは豊富。それに四季折々で風景も綺麗……なによりお風呂が広い」

お湯に顎まで浸かた僕を見ながら先生もお兄ちゃんの腕を抱き締めながら背中を壁に預けて楽になる。

ふう、と僕達は込み上げてきた息を吐き出す。

肩の力を抜き、次いで体の力を抜くとお湯の暖かさで体が溶けるような錯覚を感じた。

チャポン、と滴が湯船を打つ。

お兄ちゃんの寝息がよく聞こえる。

遠くでは賑わう生徒達の笑い声が微かに聞こえた。

このままでは自分の息も聞こえているのかもしれない。そうなるとお兄ちゃんが起きてしまいそうな気になり、息を殺してしまう。

今、お兄ちゃんと向き合うと何を言うか分からない。それに昼間

の件だってまだ折り合いが付かないままだ。

「くう・・・・・・・・かあ・・・」

（うー、呑気に寝ちゃって。僕の気も知らないで！）

そんな僕の様子に気付いた先生が優しく尋ねてきた。

「貴方、やけに一真君を意識してない？」

「・・・・・・・・いえ、そんな」

「試合の時の彼、そんなに怖かった？」

「ち、違います・・・・・・・・」

違います。そうはつきりと言えなかった。

「貴方は、あまり戦いに向かないみたいね」

「・・・・・・・・そんなの、当たり前です」

戦いに向きたいと思わない。

「そうかしら？」

世の中には色々な人がいるのよ？」

「だって、僕は、望んでここにいるわけじゃないから」

「そう。貴女も同じなんだ」

「先生も望んでないんですか？」

「私は、望んでいるわ。望んでいないのは一真君よ」

（お兄ちゃんが？）

「一真君ね、無理矢理自衛隊に入隊させられたのよ。そして無理矢理実験に参加させられ、酷い扱いを強いられてきた」

ずれ落ちてきたお兄ちゃんの腕を一度抱き上げる。ぐっすりと眠るお兄ちゃんは肩までお湯から出した後、カクンと秋葉の肩に頭を預ける。

我が子を愛でる母のように彼の頭を撫でる。そんな先生と母が重なった。

多少の淋しさを流すように一度お湯で顔を洗う。けど、体温が上がるばかりで心は冷たく凍えそうだった。

「お兄ちゃんは、なんで今も軍に所属してるんですか？」

「そこが居場所だから、らしいわ」

「居場所？だって、辛いんですよ？」

聞きました。お兄ちゃんが、過去にどんな扱いを受けていたのか」

「軽蔑、するわよね？」

「はい」

自分でも驚くほどはつきりと言えた。遅れてその理由を考えたが、よくは分からなかった。

「お兄ちゃんは好きでISに適性したわけじゃないのに、周りの大人達は貴重だ、研究しなければって言う………大人はいつもそうだ」

「………」

「………」

「なんで、そっとしてくれないんですか？なんで大人の我儘に子供を巻き込むんですか？」

「それは」

「子供が何をしたんですか？なんで先に産まれたってだけで大人は子供を振り回すんですか？

子供は、何も悪くないのに大人は自分達のゴタゴタを子供に押し付ける。そんなの子供には関係ないのに」

「・・・・・・・・」

「言ってくださいよ。子供は大人に従うべきだって、子供は大人の玩具だって、子供は所詮大人の暇潰しだって」

「ストップだ、デュノア」

「え？」

「騒がしかったですか？」

欠伸を噛み殺しながら姿勢を正したお兄ちゃんに申し訳なさそうに秋葉が言う。それに対してお兄ちゃんは顔を背けた。その顔は赤く、逆上せたのか恥ずかしいのかよくはわからない。

「別に……それより、腕、離してくれませんか？」

「やっぱり、嫌でしたか？」

「いや、その……胸が当たってるんです」

抱き締められる腕に力を込めて解こうと藻掻くが、先生はそれをさらに力を加えてガツチリと抱き締めた。するとお兄ちゃんの体に分かりやすいほど緊張した。お兄ちゃんのえっちい。

「嫌なんですね」

「恥ずかしいんです！少しは察してください！

ってか、なんで俺が居るのに2人共平然と居るのさ？！今は俺の貸し切りのはずだろ！」

「「え？」」

「知らなかったのかよ！ちゃんと織斑先生に許可取ったのに、なん

で居んだよ?!」

「知らなかった」

「またか! また、アンタ達はそうして俺を巻き込むのか!

KMF つかあ? ふざけんな! ラッキースケベで不幸になるのは一夏で十分じゃんか! 一時の幸せで社会的に殺されたくない!」

一通り叫んだお兄ちゃんは息を荒げながら立ち上がろうとする。
でも先生は腕をがっしり掴んで離そうとしなかった。

「まあまあ、こんな風と一緒に風呂に入るのも久方ぶりですし、もう少し居ましょう」

そう言う先生の顔は赤い。

まさか、そんな、お兄ちゃんと先生って・・・・・・・・き、ききき
禁断な関係?!

「ひ、久方ぶり?!」

「いや待て! それは誤解だ!」

「それにしても、一真君も変わりましたね・・・・・・・・こんなに遅
しくなって」

「た、遅しく・・・・・・・・うう」

た、遅しいってやっぱりアレだね。男の人のアレ……
やっぱりお兄ちゃんも男の人ってことだね。それじゃその仕方ないよね。

でも遅しいってどんな風に遅しいのかな？

は、話だけなら聞いたことあるけどやっぱり黒くて太くてその……

「やめて！これ以上の誤解を招くのは！」

先生の物言いに顔を赤くし、顔を手で隠す。しかし手の隙間からチラチラとお兄ちゃんの体が見えちゃって……一夏とはやっぱり違うなあ。

「特に胸筋なんかこんなに厚くなって」

先生の細い指が水の跡を作りながらお兄ちゃんの胸に線を書く。張りのある筋肉に線を書くたびに細い指は上下に動く。

お兄ちゃんの体は細い。けど、弱々しくはない。あんなに筋肉があるのになんで細いんだろう。どうなってるんだろう。

「触り方が卑猥です！つてか止めろよデュノア！」

「あ、あの僕も触っていい？」

「ブルータス、お前もか！」

そういつて暴れだしたお兄ちゃんの水飛沫を上げながら先生の胸から手を引き抜こうとする。

「ん、んあ・・・ああん」

先生の拘束は多少の苦労は要したが抜け出した。互いに濡れているためだ。だけど、その際に多少艶っぽい声が上がったけど、冷静な人間はその場にいないためスルーされた。

うう、なんで同じ女なのにこんなに色気に違いが出るのさ。僕もいつかは先生みたいに色っぽくなって一夏を。

「っし、抜け出せた！」

「あ、まだ触ってない！」

「触らせるわけねえだろアホ！」

「ア、アホーっ？！それって僕のこと！ねえ！」

自由となったお兄ちゃんはその場から逃げようとする。ムキになった僕は逃げるお兄ちゃんを捕まえるために手を伸ばした。

「放せ・・・・・・・・え？」

「え？」

「あら」

僕の拘束から逃げようと立ち上がったお兄ちゃんは突然フラつき、頭に手をやる。そして立っていられなくなったお兄ちゃんは膝を折り、前に倒れた。

倒れる先には僕がおり、お兄ちゃんは避けようと身を捻った。

「きゃっ」

「うわっ」

倒れたお兄ちゃんを迎えたのは薄緑のお湯ではなく、暖かな肌であった。

「うわわわわ?!」

「気持ち、悪い」

「あまり女性の胸に飛び込むのは誉められませんよ」

お兄ちゃんを抱き止める形となった先生は我が子を抱き締めるように胸に埋める。その背には巻き込まれた僕は、その……………お兄ちゃんの背中に抱き付く形となった。

（めのまえが、まっくらに、なって……………）

「っ！」

冷たい感触に目が覚めた。水面に体を浮かべているような不安定さと頭の芯からひっぱり上げているような吐き気に思わず顔を顰める。

目を瞑って数秒。押し付けるイメージを浮かべながら体調を無理矢理落ち着けさせる。昔からこういった物だけは巧く、吐き気は直に治まりを見せた。しかし平行感覚だけはあまり良くなり、立ち上がろうにも上手く体に力が入らなかった。

諦めて体から力を抜くと次第に気持ち悪さがまた顔を覗かせる。まるで乗り物酔いにでもあっているようだが、今まで生きてきた中で乗り物酔いに遭った経験がないのを思い出すとおかしくて笑ってしまう。

視界を動かす。揺らぐ視界で見えたのは白い天井と白熱灯、それから額に置かれた白い何かだった。今更ながら冷たい感触に気が付くが、まるで白い何かと額の間に薄いスポンジでも挟んでいるかのように曖昧な触感だ。

「気持ち、悪い」

率直な感想だ。それ故にこれ以上無いくらい自身の現状を表している。

「あ、起きたみたいですよ高槻先生」

「・・・・・・・・」

「大丈夫ですか？」

自分から見て下の方からデュノアの声が聞こえ、遅れて左手から髪を押さえながら覗き込んできた高槻さんが移る。2人共安心したような表情だ。

「湯中りですけど、気分は如何？」

「脳を揺り籠に乗せられた上に、内臓がエアクッションに乗ってるみたいにフワフワしてます」

「体の感覚は？」

「他人事のように曖昧です。額の上の感触もはっきりと分かりません」

「そうですか、もう少ししたら動けるはずですよ」

そういつて秋葉は額の上の物を持ち上げる。どうやら白い何かはタオルのようだ。

「・・・・・・・・」

体の揺れが強弱を付けて襲い掛かる内に目を開けているのも辛くなってきた。もう一度体調をコントロールしようとするが、揺れの酷さばかり知覚するだけで快復する見込みは一夏がブレなくなるくらいにしか無い。・・・・つまりは絶望的だ。

「うわぁ、凄い」

（血液を頭から足へ下げる感覚で、ゆっくりと心臓に力を入れるように）

「こんなに硬くなるんだ」

（息を深く、さらに深く。時間をかけながら吐き出してさらに鼓動を遅く）

「腹筋もこんなに割れて」

（次第に体が鉛のように重くなるような感覚を）

「うわ、男の人ってこんなに体温が高いんだ」

「なにしてるの、君」

「え・・・？」

人が集中しているのを余所に、ペタペタと体のアチコチを触るムツリ少女を睨み付ける。いくら体の感覚が曖昧でも、触られているのは分かるのだ。

俺の体を触っていたムツリニは次第に顔を赤くしていく。それでも手を離そうとしない根性に呆れればいいのか、感心すればいいのか分からない。とりあえず離すまで睨むことにした。

「これは、その・・・そう！予習だよ、予習！」

「なんの予習だ」

もしかして在学中にそういった経験をするつもりなのだろうか。まあ、盛りのついた年頃なら別に不思議ではない。思春期なんて皆エロガキのようなもんだ。さらに人間は年中無休で発情期だ。

「それに、さっきはドタバタして触れなかったし！」

「普通は触らない」

いったい何時から世の中はそこまでフレンドリーになったのか。少なくとも自分の中では今も昔も、たぶんこれからも訪れない風習ではある。というか、触られるの大っ嫌いなんだが。

「それから珍しかったし！」

「一夏と同室なのにか？」

聞いた話では2人は時折シャワー等でブッキングし、さらには着替えも仕切り板一枚で隔てているだけのはずだ。今さら珍しいも初めてもない。……。俺も人のこと言えない。なんだろう、この切ない気持ち……。恋ではないな。

「こんなに間近で見る機会だって無いからさ！」

「いつも着替えは一緒だった上に、人の着替え姿チラチラ見てたの

にか？」

まさか気付かれているとは思わなかったムツツリーニは視線を右往左往させながら顔をさらに赤くさせていく。そして選んだ誤魔化し方は、笑うことだった。

「あは、あははは」

「笑って誤魔化すならまず手を離せ」

いつまで人の胸板に触れているつもりなのだろうか。

「お兄ちゃんのえっちい」

「お前、それ言えばなんでも通るって思っていないか？」

顔を赤らめながら胸を隠す仕草をするムツツリーニ・フォン・デユノア。それでも体から手を離さないのはどういうことなのか。

「・・・お兄ちゃんのえっちい」

「今さらお前の裸見て欲情せん。すぐ近くに絶世な人がいるからな」

視界の端に映る高槻さん。正直、あそこまで好みの人も珍しいとは思う。

「今さらお前の裸見て欲情せん。すぐ近くに絶世な人がいるからな」

「…………お兄ちゃんのムツツリスケベ」

「否定はしないが、それはお前もだよなエロガキ」

「ぼ、僕はエロガキじゃないよ！せ、せせせくはらだ！」

「噛み噛みだな。頼むから一夏とは手順踏んでからにしろよ」

「な、なに言ってるのさ！」

「お前こそ何を妄想してるのさ」

「ぼ、僕は何も！」

顔がこれ以上無いくらいに真赤になる。人というのはこれほどまで見事な赤になれるとは思ひもなかった。

接着剤でついていたかのように頑固に張り付いていた手も離れ、今は見えていて恥ずかしくなるような真っ赤な顔を隠すのに一役買っていた。

「エロガキめ」

「ひ、酷い！お兄ちゃんだって僕の裸見たくせに！」

「今の流れでどう繋がるのさ？」

「あ、後でその……す、すすするんでしょ！どうせ！」

「は？」

一瞬、本当に一瞬だが頭が白くなった。する、とはつまり自慰のことだろうか。話の流れ的にはソレしかないかもしれないが、いよいよをもつてムツツリーニのタガが外れてきたようだ。

いや、もしかしたらもっと前からかもしれない。下手したら元々なのかもしれない。

「馬鹿にして！僕だってそれくらい知ってるよ！お、男の人がそういったことするくらい！」

「つまり、なに？お前の裸で抜けと？」

「ぬ、ぬぬぬ抜くうっ？！」

お兄ちゃんのえっちい！変態！もう、信じられない！」

「つかしいな、言わなかったっけか？」

「お兄ちゃんの方がよっぽどエロガキじゃないか！」

「俺って女嫌いだぞ」

ピシリ、と空気に罅が入ったのを感覚的に知覚した。先程まで1人で騒いでいたデュノアは目を此方に向けながら固まり、さらには遠くで何かが水に落ち、水に打たれ続ける音が聞こえてきた。

「え、えと・・・・・・・・え？」

「知らなかったのか。俺、女嫌いに近い女性恐怖症だぞ」

「そ、そんな素振りなかったじゃない！」

「あくまで軽度だからな。

ただ、性的に興奮した顔はダメだ。吐き気とか眩暈がする」

「つまり……お兄ちゃんってゲイ？」

「あんまりフザケたこと抜かすと一夏に事細かにお前がエロいこと言い聞かせるぞ」

「それは止めて！」

「それに、非生産的なことは好かん。友愛と恋愛は違うんだ」

難題を前にしたかのように唸るデュノアを余所に、やってきた高槻さんを見やる。ボトボトと水の滴るタオルからはあまり良い未来は予測出来ない。

「あの、高槻さん？」

「……」

「高槻さん、高槻中将？」

「……」

「ちょっと待って本当ふごっ！」

濡れたタオルというのは厚みが増せば増すほどに通気性が悪くなる。薄ければ水分ごと酸素も吸えるが、厚ければおのずと吸入量も減る。

「お兄ちゃんが女性恐怖症」

「私が」

あまりの苦しさに頭がボーッとしてくる。動きたくても未だに湯中りが治らない一真は次第に顔を青くしていく。

『大丈夫ですかマスター？』

「つぶは！」

『一度体を水で冷やしましょう。ここにいれば殺されてしまいます』

『お願いするよ』

その日、一真はH・1の優しさに泣いた。

事件その13

「負け犬には、負け犬の意地があるっつ！だからさあ大変」

（後

一真

「もっちゃんもっちゃん、もっちゃんもちや（チョコファッション）」

ラウラ

「もっきゅもっきゅ、もきゅつもきゅっ（マッチャチョコファッション）」

H・1

『みーんなー、なぜなにすとらすの時間だよー（ロリ声）』

一真&ラウラ

「わーい」

一同

「・・・・・・・・」

H・1

『元気に君達にはお菓子を上げよう（ロリ声）』

ラウラ

「ならば、おはぎを要求する」

一真

「煎餅」

一夏

「何が、どうなってやがる」

セシリア

「私に聞かないでください」

シャルル

「僕も」

箒

「私だって」

一真

「バリボリガリ」

ラウラ

「もちゃもちゃ」

シャルル

「あ、H・1。僕も何か食べた——」

セシリア

「始まりですわ！」

主人公&ヒロイン 準備中・・・

一真

「まずは恒例の御便りコーナーから。

高杉ワロタさんから。

AMIDA! AMIDAください!!

更新キターーー!!!!

まさかのドリル!!!! ロマンが尽きない!!!!

色的にすごくグレンラガンです

しかし一真はつねにはずれくじを・・・かける言葉がない・・・

つづき楽しみに待ってます」

司会1

「このAMIDA! なんと、なーんーと、今回はサービスしますよ
1。なんと! 定価398万を、248万、248万で代放出!」

司会2

「安ーい!」

司会1

「しかも、今回はAMIDAだけじゃありません! 3ヶ月分の餌に、
キサラギ製のパイルバンカーをつけちゃいます!」

司会2

「うっそー、本当ですかー！」

司会1

「数限りがありますので、注文はお早めに！」

司会2

「お買得ですねー（チラッ）」

司会1

「でしょうー（チラチラッ）」

司会2

「これを逃す手はないですよー（チラチラチラッ）」

司会1

「さらに元祖パイルバンカーのキサラギが産んだ、仁王まで付くんですよ！」

司会2

「きゃー！あの弾数4発でありながら無類の攻撃力の仁王をですかー？！」

司会2

「どこかの落ち目の企業との違いを見せる企業、それがキサラ——」

A D

「じゃ、社長・・・電話が」

司会1改め如月

「電話？誰からだ？」

A
D

「フランスのデュノア社、デュノア社長からです」

一真

「お値段異常」

H
1

「キサラギ」

箒

「貴方達は真面目に出来ないのですか?!」

ラウラ

「もしもし、通販如月か？」

先程宣伝していた注文を――」

一夏

「落ち着こうな、ラウラ」

セシリア

「早まるにはまだ貴方は純粹過ぎますわ」

ラウラ

「・・・・・・・・切られた」

一真

「おー、よしよし。意地悪なお兄ちゃんにお姉ちゃんですねー」

ラウラ

「中尉い」

一真

「いつかいいことあるさ」

シャルル

「お父さん・・・」

一夏

「でも、確かに言われてみれば聞いているかぎりグレンラガンっぽいよな」

一真

「・・・・・・・・」

一夏

「ドリルで、装甲が黒いと」

一真

「・・・・・・・・」

セシリア

「一真さん？」

一真

「なんでせうか？」

セシリア

「なぜ黙ってしまうのですか？」

箒

「言葉遣いもおかしいですよ」

一真

「俺だって喋らないときくらいある。日本語には触れるな」

ラウラ

「そうだ。実は先のことを読まれて焦っているわけじゃないぞ、断じて」

一真

「」

H
1

「」

ラウラ

「ん？」

一夏

「マジかよ」

シャルル

「そこら辺どうなの？」

一真

「間違いありません。確かに、今回のこれを伏線にするつもりはありました。しかも初期から」

セシリア

「しかし、グレンラガンはやりすぎでは？」

一真

「戦闘に使わないからいいんだ。もう触れるな」

ラウラ

「H・1、おはぎのお代わりを所望する」

箒

「私は抹茶アイスを」

主人公＆ヒロイン 雑談中・・・

シャルル

「それじゃ、本編の補足を始めようか」

セシリア

「今回触れておくべき点は、新たなPAC、HOLについて、一真

さんが女性恐怖症の理由……このくらいでしょうか？」

箒

「色々暗いことが多くなってきたな」

ラウラ

「その前に高杉のコメントが残って」

H・1

「マ、マスター！お気を確かに！」

一真

「俺だって、俺だって……」

箒

「如何しました？（ミスゴエモン）」

シャルル

「どうしたの、お兄ちゃん？（ムツツリ厨二天使）」

セシリア

「私の顔に何か？（出番なしな噛ませ犬）」

ラウラ

「私ならいつでも問題ないぞ。ただ、嫁は優先させてもう（天然軍人銀髪ゲルマンロリ）」

一真

「ないわー。これが選択肢ってなあがないわー」

一夏

「なんだよ？（我らが主人公）」

一真

「これみたくなるなんてないわー」

H
1

「確かに。マスターがコレに似るのは避ける必要があります」

一夏

「お前ら、そんなに嫌いかな？」

一真

「さて、進めますか」

一夏

「聞けよ！」

セシリア

「まずは新たなPACについてですね」

一真

「凡庸追加PAC——A・M・W・S043Heavy Arms。
重装甲と大量の重火器で殲滅するのを目的とした追加装甲が今回出
て来たPACだ」

セシリア

「ヘヴィアームズ……またガンダムですか？」

一真

「いや、素直につければそうなるだろ普通」

ラウラ

「今までアーマードコアらしい装備だな。どう見ても積載過多だが」

シャルル

「そういえば積載過多ってこっちだとどういう扱いなの？」

一真

「ゲームではエネルギーが減ったり、エネルギー使用率が上がったりとあった。

話の設定ではそういったものはない。ただし積載過多なら脚部フレームが歪むし、当然満足には動けない。さらに着地なんかしたら脚部が破損する。

今回はやたら撃ちまくってたが、アンカーで固定しなきゃ転んで立ち上がれなかった。それこそ亀みたいにな」

一夏

「そーいや数万発――」

一真

「ウワナニスルヤメロー」

一夏

「は――ぐほっ」

H・1

「修正完了。対象沈黙」

一真

「ご苦労」

一同

（理不尽だ）

セシリア

「そういえば、なぜHeavy Armsは武器を量子変換なさらないのですか？」

シャルル

「あー、そういえば一々バックパックから武器を取り出してたね」

一真

「全て量子変換出来ないからだ。元々ナインボールに空き容量なんてないからな。」

今まで振り返っても俺がナインボールから引き出した武器なんてないぞ。全て個別に量子変換した物だからな。」

今回はPACによってスカートに手を入れられないからバックパックに入れた。本来ならあそこには仲間の補給物資をいれるんだ」

ラウラ

「部隊運行も考えているのか」

一真

「もちろん。ただし、ISの数を見るとIS部隊よりも歩兵なんかと作戦をする機会が多いだろうな」

主人公＆ヒロイン　一夏を看病中・・・

H
1

「其は正しき怒り、其は憎悪に鍛えられし刃鉄、其は魔を断つ剣！」

一真

「憎悪の彼方より来たりて」

H
1

「正しき怒りを胸に」

一真

「我らは魔を断つ剣を取る！」

H・1

「汝、無垢なる刃」

一真

「汝、憎悪の咆哮」

一真&H・1

「ハウリングオブブルーザ！」

シャルル

「おおっ！！」

一同

「・・・・・・・・」

ラウラ

「見た目は鉄の塊だな」

一真

「オラオラ、厨二全開で補足だオラ」

一夏

「落ち着け」

セシリア

「私達がついていきません」

シャルル

「カッコいい」

箒

「そうか？」

一夏

「あー、こほん。

んで、それってどんな武器なんだ？」

一真

「見ての通り、剣だ」

H・1

「通常サイズの三倍あるだけの普通の剣ですね」

一夏

「じゃあなにか？なんで俺らは怯えたんだ？」

それと、それ早くしまってください。なんか君が悪い」

一真

「ハウリングオブルーザ、直訳で敗者の叫び。真名は憎悪ノ化身です。

属性は悪、クラスはアヴェンジャー、強度S、重量A、意外性F、厨二性EX」

セシリア

「えー、強度Sとありますが、そこまで硬いのですか？」

一真

「たとえば神バズが相手でも傷は負わないが謳い文句」

セシリア

「それに重量Aとは、いったいどのくらいなのです？」

一真

「ざっと1898kg」

セシリア

「ニア2tじゃないですか？！」

一真

「下二桁が98だとなぜか安く感じるのってなんでかな？」

ラウラ

「主夫だからだ」

セシリア

「なぜそんな超重量の物が振るえるのですか！」

H・1

「ナインボールに」

一真

「出来ないことはあんまりない！」

セシリア

「で、ですが！」

一真

「マジレスすると、俺が肩の武装も含めて無手だったからだ。そう
でなきゃあんな2t近くの鉄塊なんか振り回せるか」

シャルル

「ナインボールの出力って凄いだね」

一真

「こんな石ころ程度、押し返してみせる。ナインボールは伊達じゃない！」

ラウラ

「厨尉はアクシズを押し返すのか！」

一夏

「ぶほっ」

箒

「つく、ククク・・・」

シャルル

「ラ、ウラっ」

セシリア

「ちゅ、厨尉・・・つぶはっ」

一真

（俺は、怒ってもいいはずだ）

ラウラ

「なぜ皆は笑いを堪えているのだ？」

一真

「お前はこっち来なさい」

ラウラ

「ん？了解した」

H
1

「ナインボール、いつでも大丈夫です」

一真

「ハウリングオブブルーザ」

一同

「つぶは」

一真

「死ね」

主人公&ヒロイン 阿鼻叫喚厨・・・

一同

「……………すいませんでした」

一真

「罰もかねてHOLは部屋の真ん中に突き刺しておく」

ラウラ

「一方的だな」

一真

「レギュラー陣に対して補正が入るからな」

ラウラ

「そんなものがあるのか？」

一真

「ある」

一夏

「なんだよ、アレ……………相対しただけで体が動かなくなった」

ぞ」

箒

「私なんか息も出来なくなった」

セシリア

「この私が、たかがブレード一本に」

シャルル

「僕はあんまり・・・」

ラウラ

「効果にバラつきがあるようだが？」

一真

「そりゃあ、HOLを知ってる俺からすると不思議じゃねえな」

ラウラ

「どういうことだ？」

一真

「このHOL、俺と関わり深い奴の大半にとっての天敵だな」

ラウラ

「いったいどういうトリックなのだ？」

一真

「怨念」

一同

「・・・・・・」

一真

「ガチで」

一夏

「いやいや、科学の世界で怨言って」

セシリア

「ファンタジー過ぎますわ」

HOL

「・・・・・・」

シャルル

「プレッシャーが?!（ガクブル）」

一真

「HOLが怒ってるのさ（ナデナデ）」

ラウラ

「しかし、怨言とは何のだ?」

一真

「扉」

一夏

「は?」

箒

「はあ？」

セシリア

「はあー？」

シャルル

「はああっ?!」

ラウラ

「扉とはドアのか？」

一真

「今まで切り裂かれた扉、俺の部屋の四代目までの扉を溶かして鍛えて加工したのがこのHOLだ」

箒

「」

一真

「さらに、扉の合金を開発した研究者達は躍起になって新たな合金を開発している。

本来はナインボールの装甲に用いるんだが、様々な欠点から零れた合金だ。その硬度は勿論、剛性や靱性も折り紙付きだ。それを切られたら……さぞや悔しいだろうな」

箒

「」

一夏

「箒、おい大丈夫か、箒？」

一真

「本当なら扉として過ごす合金達はたかが数日で鉄屑にされ、用済みだ。その無念は誰が晴らしてくれるんだろうな？」

セシリア

「箒さん、お気を確かに！」

箒

「」

シャルル

「い、息してないよ！」

一夏

「箒！箒いっ！！」

一真

「クス」

ラウラ

「中尉は、鬼畜だな」

一真

「さらに外道で畜生だよ」

主人公&ヒロイン 阿鼻叫喚パート2・・・

一真

「言いたくない、言いたくない、絶対言いたくない♪」

一夏

「聞きたい人」

一同

「はーい（挙手）」

一真

「さあ、俺の理論武装を超えてみろ！」

H・1

「さあ来なさい、脆弱な人の子よ」

一夏

「お前だって、お前だって知りたいだろう！一真を、一真の全てを！」

H・1

「貴方は忘れたのですか。」

私はマスターとこれまでも、これからも共にある。ならば急ぐ必要はない」

一夏

「ふん、甘いな」

H・1

「何が言いたい、イレギュラー」

一夏

「一真は、自分のことは話さない人間だ。それはお前と同じ」

H・1

「その程度」

一夏

「今後の一真のプロファイリングに役立つんだぞ！」

ラウラ

「そのとき、H・1に電流が流れた」

シャルル

「それ、当たり前だよね」

H・1

「マスター、すいません……私はマスター愛に勝てませんでした」

一真

「お前、ロボット三原則リインストールしてこい」

H・1

「マスターに危害を加えず、マスターの命令を守り、自分を守る」

一真

「なら俺のプライベートを守れ。寝返るな」

H・1

「最近集音マイクの調子が」

一真

「数秒前のことを思い出せえ！」

H・1

「問題があるため待機モードに移ります」

一真

「あ、テメエ！」

ラウラ

「それで、どうなのだ？」

一真

「甘いな・・・俺には最後の切り札がある！

俺は以前に女性恐怖症について語って——」

ラウラ

「ならさらに細分を」

一真

「・・・・・・・・嫌だ」

ラウラ

「・・・・・・・・・・（ジワ）」

一真

「拷問された結果、女性恐怖症。現在は月1のカウンセラーで治療中」

セシリア

「ということは週に何回も外に出るのは」

一真

「DVDの貸し借りだけじゃないってことだな」

セシリア

「しかし、軽度なんでしょう？」

一真

「軽度でもトラウマはトラウマだ。切っ掛けがあれば簡単に腕は鈍る。」

特に俺の場合はトラウマの範囲が狭いだけで根強いからな・・・・・・・・・・」

シャルル

「お兄ちゃん・・・・・・・・・・」

一真

「まったく、参ったよ——」

シャルル

「ゲイじゃないよね？」

一真

「みなさーん。ここにシャルロット・デュノア、実は携帯に――」

シャルル

「わーわーわー！」

一夏

「……………（尻隠し）」

一真

「一真はナインボールを召喚！我らが主人公にダイレクトアタック
！」

H・1

「全く、学習しない」

一真

「さらに、装備カード、K I K Uを発動！」

一夏

「え、菊？パイルバンカー？え？」

H・1

「処女にサヨナラしない」

一夏

「ア、ア、アーーーーーッ！」

主人公&ヒロイン　ゲイブン発生中・・・

一真

「先生ー、デュノアさんがエロいのはデフォなんですかー？」

シャルル

「な、なにをいきなり?!」

H・1

「デフォです」

シャルル

「違いますー！僕は純粹」

一真

「純粹にエロいだけです」

シャルル

「お兄ちゃん！」

箒

「そうだったのか・・・」

セシリア

「あの純朴なシャルルさんが」

シャルル

「ち、違うんだみんな！」

ラウラ

「中尉。エロいとはどのくらいなのだ？」

一真

「中高生並」

ラウラ

「ん？それは普通じゃないのか？」

一真

「中高生並Ⅱエロさ絶頂期」

シャルル

「お、お兄ちゃん！（ハイマツトフルバースト）」

一真

「無駄な事を（A I C全開）」

セシリア

「私の特権が・・・」

箒

「しかし、エロいとは言うがあまりそういったことはなかったような」

シャルル

「そ、そうだよ！篠ノ乃さんの言うとおりだよ！」

一真

「奥手なレギュラーメンバーじゃいつになっても一夏を落とせるわけ無いからな・・・だからラウラにも遅れをとる」

ヒロインズ

「ぐっさあ！」

ラウラ

「・・・そういえば中尉は誰と結ばれるのだ？」

一真

「だーかーらー、俺にはそんな相手」

ラウラ

「それは最終的な結果だ。過程ではない」

シャルル

「そうか・・・・・・・・確かにそれはあり得るよね」

一真

「つまり彼女か？」

箒

「先輩の」

セシリア

「彼女」

シャルル

「気になる」

一真

「ちくしょう、これだから女子は」

ラウラ

「それで、どうなのだ？」

一真

「いる。しかも初恋だ」

箒

「は、初恋ですか」

一真

「しっかり実るが・・・・・・・・今のままだと」

ラウラ

「中尉？」

一真

「確実に一夏に寝取られる……！」

一同

」

今回の舞台裏はここまでとなります

事件その14 「やっつとでトーナメン編が終わるぜヒャッハーだからさあ大変」

この小説は、通学中に公園で超絶美人と運命的な出会いをしてしま
い本能——厨二——の赴くままに十七分割するような若さの至
りが成した物語である。

全身黒尽くめの教授と公園で動物と戯れたり、カレー狂の先輩に殺
されかけてもいいという方のみこの先の惨殺空間にお進みください。

そういった物にアレルギー反応を起こす方は、全ヒロインとのデー
トの約束を同日にしてしまい死亡フラグを立てながら頭を抱えてく
ださい。

事件その14 「やっつとでトーナメント編が終わるぜビヤツハーだからさあ大変」

個人別トーナメント五日目。

ここ、第4アリーナでは、今まさに一年の決勝戦が行われようとしていた。

所狭しと詰め込まれた生徒は騒がしく、まだ早朝の鳥の縄張り争いの静かでムードがある。初めて日本にやって来たパンダもこんな中にいたのかと思うと尊敬の念を抱いてしまいそになる。少なくとも俺はこんな状況で笹を食うことは出来ないだろう。

「ついにここまで来たぜ」

「ふん。ビギナーズラックと実力は違う。勘違いしていないか？」

「だったら試してみろよ」

「いやー、緊張するねしののん」

「貴様は変わらないな」

開戦前から熱くなる4人を冷めた目で眺める。どうにも、この現状が未だ他人事のように感じる。というか、感じたいのが本音である。

実は全て自分の妄想で、本当の自分は観客席で決勝戦に参加する自分を思い浮べており、安全な位置で自分ならこうする、ああすると分析しているのではと考えてしまう。

「お前と戦うのも初めてだな、一真」

ナインボールの内部スピーカーから伝わる一夏の声に視線だけ向ける。アイツは睨み付けてはいるが悪意はない。興奮しているのだろう。

時折向けられる敵意に体を畏縮させながら、一真は吐けない溜息により破裂しそうな肺を心配する。開始10分前から溜め込みできた空気はいったい何流米になっただろうか。このまま溜め込み続ければ体が風船のように膨れ上がってしまうのではなからうか。そして、そのままどこかに行きたい。

『過度のストレスにより過呼吸になりつつあります、マスター』

今日初めて言葉を発した相棒の声は若い女の声だった。どうやら性別を固定し始めているらしく、昨日はずっと女性のブログを回っていたのも知っている。AIというのも解らないものだ。

『なら何か気の効いた話をしてくれ』

『では、このような話は如何です』

人間の機微を把握していないH・1への皮肉のつもりが、思いもよらぬ反撃に呆氣に取られながら頼んでしまう。

『とある大学には名物となるほどに頭が良い犬と飼い主の大学教授が居りました。飼い主の大学教授は独身で、既に60を超えており、犬を我が子のように愛し、犬も彼を愛していました。』

そんなある日、大学教授は死んだ。天寿を全うしたのでしょう。彼は死に際に犬のことを皆に頼みました。

私が死んでも、あの子が寂しくないよう皆で見守ってください。

それを聞いた誰もが犬を世話しました。教授の教え子や同僚、後輩や彼を知らぬ者達まで彼の頼みを聞いて犬を愛しました。

朝には犬を撫でて学舎に着き、昼には餌をやって遊び、夜には犬との別れを惜しみながら家へ向かう。それはとても充実とした日々でした。ですが、彼らとて悩みが無かったわけではありません。

犬は、決して研究室の前から離れなかった。まるで、自分の主人を待つように。

犬は自らの主人の葬儀にも出ています。周りが泣く姿も覚えています。それでも待っていたのです。もしかしたら、彼が返ってくるか

もしれないという望みを胸に抱きながら。いつか彼が笑いながら自分を迎えに来てくれるのを望みながら。

皆は言います。教授は死んだ、もう返ってこない。尻尾を振り、見上げる無垢な瞳を見ながら血を吐くような辛さを感じながらも犬に言うのです。それでも賢い犬は首を振り、尻尾を振り続けます。犬は待ちました。雨の日も、風の強い日も、蒸し暑い猛暑の日も、凍える雪の日も。ただただ待ち続けました。

犬が死んだのは、教授が死んで四年目の春の日でした。彼を愛してくれた、右も左も解らぬ者達が巢立ちを伝えに来た日、新たにやってきた生徒達の前で犬は静かに、静かに息を引き取りました。最後まで、犬は尻尾を振り続けました。まるでこれから遊ぶのだと言わんばかりに。

誰もがパタリと落ちた尻尾を信じられませんでした。寝ているのだと、昼寝をしているのだろうと言いました。だけでも犬が顔を上げて彼らを見上げることはありません。

そんなとき、どこかで元気な犬の鳴き声が聞こえました。ワン、という聞いているものを癒してくれるような元気な声です。そしてその犬を呼ぶ声も聞こえてきます。

ハチ、ハチ、という年老いた男の声でした。皆、口を塞ぎ、信じられないと振り返ります。

満開に咲き乱れた桜並木、その真ん中に死んだ教授と今まさに息を引き取った犬の姿があります。教授は優しく犬を重たそうに抱き上げ、犬はその嬉しさに尻尾をこれでもかと振ります。

誰もが息をするのも忘れていた中、犬がこちらを向いて鳴きました。まるで自らの主人が帰ってきたのを誇るような、張りのある声でした。

犬は、分かっていたのでしょう。自分が死ぬときには教授が来てくれるのを。だから彼は研究室の前に居続けたのでしょう。彼が分かりやすいように。彼が自分を見つけやすいように。彼が早く教授に抱き上げてもらえるように。

それから一年後。大学の一角に小さな小さなお墓が建てられました。彼らを愛した生徒達がお金を出しあい、彼らをよく知る教授達が頼み込んで出来た小さな小さな研究室の銅像のお墓。そこには教授と犬が楽しそうに笑い、尻尾を振る姿があります。彼らは今も、これから、ずっとずっと共にいることでしょう。

これはとある大学に伝わる銅像のお話。強い絆で結ばれた教授と犬のお話でした』

「・・・・・・・・」

『バイタル安定。どうやら楽しんでもらえたようですね』

「・・・・・・・・ぐずっ」

『

（なんか、一真の奴、泣きだしたぞ）

（わ、私に聞くな！）

（ちくしょー！なんでナインボールはハーフフェイスなんだよ！か
ずーの泣き顔見たいのに！）

（少尉から何かが流れ込んでくる・・・・・・・・これは悲しみか？）

『お前・・・・・・・・ぐずっ、俺を泣かしてどうすんだよ・・・・・・・・
もっと他に無かったのかよ・・・・・・・・ううっ』

『な、泣かないでくださいマスター！私はそんなつもりでは！』

『しかも、俺に犬の話は……ドンちゃん……俺のせいで、俺なんかのせいでえ』

『ああ。ああ、どうしましょう。どうすれば良いのでしょうか』

それから数分。試合が開始するまでの間、アリーナの中央は周りの喧騒から切り離されたかのように静かだった。聞こえるのは俺の鼻をすすする音だけ。

気まずい雰囲気にも誰もが早く試合が始まるのを願い、長い、長い数分を耐えるばかりであった。

聞き覚えのある教師の声と共に開始の合図までのカウントがアリーナに響く。

破裂寸前の風船に似た緊張感を高める4人の耳はただ合図にだけ意識が集中されている。周りが静まり返っているのか、それとも聞こえないだけなのか分からないが4人の耳は周りの音を遮断し、合図以外は入らないようになっている。

一夏も筈も先制攻撃からの怒涛の攻めを得意とし、今まで一方的

勝利を手にしてきた。対するラウラ達は様々な戦法を取りながらも確実な勝利をもぎ取り、今までの被弾率は限りなく0に等しいまでの力を見せ付けてきた。

開始からコンマ数秒での結果が多大なアドバンテージとなると分かったからこそ、4人は開始の瞬間を今か今かと待ち続ける。

そして、俺は――

鼻をかんだティッシュを捨てていた。

(どこに捨てよ)

『試合開始!』

（ブースターで燃やすか）

「一夏っ！」

「応っ！」

爆発するスラストターの推進力により2人の距離は一瞬で10 m弱を0へ縮めた。

ラウラも、花子も対応出来るようにビーム手刀と刀を構えた。

「覚悟っ！」と言って構える花子とラウラに切り掛かる箒達だったが、その横っ面に大量の銃弾が襲い掛かった。

ラウラと花子は分かっていたとばかりに後ろへ飛び、箒はシールドを張る一夏に引っ張られて難を逃れた。

「っち、一真の奴！」

俺の攻撃を避けながら一夏と箒は空へ逃げた。狙いを付けさせないために互いに別々の報告へ逃げるが、此方は最初から箒にしか狙いを定めていない。

持ち前の直感で避け続ける箒には正直脱帽するしかなかった。ロククオンしないマニユアル射撃とはいえ、亜音速に迫る弾丸をこうまで避けるとは思わなかった。

たまに牽制していた一夏も次第に焦り始めていた。それは、箒が直情的な人間だということを分かっているからだ。俺だってアイツと組んだら手綱で苦勞するだろう。

「ならば先輩から先に！」

案の定、弾切れさえ待てなくなった箒がブースターを全開にして突撃してきた。箒を止めようと一夏もブースターを全開にしている。

このまま進んでも攻撃に曝されるだけ、何の意味も見いだせないのに何を考えているのか俺には思いつかない。複雑に考えすぎているのかもしれない。

「前に出過ぎるな箒！」

「させるか！」

「っ！」

一夏の進路先を塞ぐようにレールガンが鼻先を通る。さらに追撃にと放たれたレールガンに三次元躍動旋回を駆使して逃げた一夏だが、その後ろにはラウラがレールガンを撃ちながら追撃していた。

「こんな時に！」

「貴様は、貴様だけは私が！」

最高速度を殺さないまま旋回する一夏の体はギシギシと軋んでいるに違いない。

嫌な音がする度に歯を噛み、体に力を込めて耐えているのがハイパーセンサーにより捉えた表情から読み取れる。

性格無比とも言えるラウラの射撃は時速300km超の一夏に対し直撃こそしないが、肝を冷やすような攻撃ばかりだ。それでも避けられたのは一重に白式の性能なのだと皮肉る。

カチリ、とレールガンから音がした。止んだ銃撃に目を向ければ真っ赤になった銃口を睨み付けるラウラがいた。

「っち」

「ラッキー！」

使えないレールガンに舌打ちをしたラウラに一夏は声を弾ませながら迫る。

レールガンの砲身冷却が間に合わないと直感したアイツは零落白夜を発動、同時に瞬間加速でラウラへ突撃を開始する。

「っ、一夏！」

突撃してきた箒が一夏の行動に気付いて緊急停止をし、振り返る。

美しい光を纏う雪片二型が遠くても見える。それは零落白夜を発動した現れで、それでいてカウントダウンの始まりでもある。早過ぎる切り札の発動には最悪の未来しか見えない。

急ぎ過ぎる一夏を止めようと加速しようとした数瞬。その刹那の時間を利用した花子が箒と一夏の間に割り込む。

「おーっと、邪魔はさせないよー、しののん」

「花子かっ！」

邪魔だ！そこを退けえっ！」

刀を振り上げ、剣道の面に似た動きで振り下ろす。花子是用意していた瞬時加速を使用、相対速度を合わせてタイミングを外し、体を半身だけ反らして箒の攻撃を避けてみせる。

「あはは、単純過ぎるぜしののん♪」

「なにを！」

「そんなんじゃ墜ちて上げないよー」

「五月蠅——」

「しののんもいっちーもさ、馬鹿じゃないんだから工夫しなきゃ・・・こんな風にさ」

「は？」

箒の目の前から花子が消える。本当に一瞬の事で、まるで魔法でも使われたかのような感覚に箒は寒気を感じたに違いない。

「ど、どこに?!」

「ここだよー」

「後ろ?!」

花子が使った技術はそこまで難しいものではない。ただ機体を停止させ、箒を中心に加速しながら後ろに回る。使われた側は体感時間や相対速度から敵機が消えたかのように見えるが、使用者からすれば一秒以上の時間をかけている。

「す、凄い・・・」

「ほう、綺麗な動きだ」

「代表候補でもそうはいないでしょうね」

花子の行った技術は言うほど簡単ではない。一瞬、一瞬で変わる位置に対してスラスターを吹かし、PICを制御しなければならぬ。さらに円周の半径も小さければ小さいほど敵機に気付かれず、少しでも膨らめば一瞬で距離が離れてしまう繊細な技術だ。

「悪いけどラウにゃんの邪魔はさせないよー」

「つく、ぐあー！」

花子は刀で箒を斬り付け、さらに頭を蹴り飛ばす。それで終わらず吹き飛ばす彼女の脚を掴むと俺に向けて投げ飛ばしてきた。

俺はそれをただ見上げ、グレネードを向ける。ここで落とすべきだ。でなければ後々に障害となる。

「墜ちろ」

空気を叩くような乾いた音を立てながらグレネードが緩い放物線を描きながら花子の鼻先を掠める。本当なら直撃するグレネードはアイツの背後に落ちて巨大な爆炎を上げる。

花子の技術を見てから優先順位は箒から花子に傾いた。頭に血が昇った3人と違い、自然体でいられるアイツは不気味だ。まるでこの戦いを遊びか何かのように見ている節がある。

落ちてくる箒を花子に蹴り返し、その影に隠れて距離を詰める。

ブースターをある程度噴かした後はA I Cで等速飛行をし、ブースターはいつでも瞬間加速が出来るよう温めておく。

「おっと、危ない危ない」

箒を蹴って上に逃げる花子を瞬間加速を使い追う。H V Mを装備し、マシンガンで牽制射撃を行いながら眼前に迫る花子を切る。

「女の子は壊れ物だよかずー」

「黙れ」

攻撃を避けた花子は箒と同じように背後へ移動した。

「舐めるな」

背後へ回る彼女に対してH V Mを横に振り抜く。いくらなんでも一度使われた技を短時間で使われたら誰でも反射的に対応くらいは取れる。

H V Mが甲高い音を立てながら空を斬る。猫のように身を翻しながら避けた花子は口笛を吹きながら突撃。俺も距離を詰めて反撃に移る。

「中々やるじゃんかずー！」

「・・・・・・・・」

「いやー、いっちーとは違うね、やっぱ」

「・・・・・・・・」

「まさか、反応出来るなんてね」

全ての攻撃が紙一重で避けられ、さらに追撃にと放った拳や蹴りが防がれてしまう。攻撃が空振る度に心臓が締め付けられる苦しさが増していく。

自慢の反射神経も目の前の女にとっては凡人の延長でしかないと言われたようで腹が立つ。

花子の攻撃は惚れ惚れする反撃ばかりだ。此方の動きに合わせて刀を振り、さらに回避と攻撃を同時に行う。小回りの利かないニンボールと身軽な打鉄との違いをここまで実感させられると落ち込んでしまう。

「ははっ、楽しいね、かずー。

攻撃に迷いがないし、どれもこれも避けるので手一杯・・・・・・・・ゾクゾクするよ！」

（どんな反射神経してんだアイツ！それともNTか何かですかっ！

射撃武器に頼るか？いや、それよりも手札を切るか？

「やっぱりかずーは最高だね。そこいらの男とは違う……でも、まだまだ上品過ぎるんじゃないかな！」

（っち、とんだ化物を相手にしちゃった！）

「考え事してる暇あるのかい！」

「っ！」

瞬時加速を使い横に回り込む花子に対して逃げることを選んだ。

咄嗟の判断だった。

怖かったのだ。

追い掛けてくる花子からさらに逃げる俺は覚えのある気持ち悪さに胸を押さえる。出来れば胸部装甲を外して掻きまわりたいが、そんなことすればニンボールの力で肋骨が飴細工よりも簡単に折れるだろう。今の状態で細かい力加減が出来るとは思えない。

後ろを見れば徐々に距離を離される花子がいた。

その顔には肉食獣が牙剥くような笑みを張りついでおり、それがさらに吐き気を酷くする。

（アイツ、興奮してやがる……ドSですか、そうですか）

身を翻してシールドに着地。シールドを蹴って空へ跳ぶ。

全開のブースターに機体は暴れ、制御するためスラスターで体を回転させるが遠心力で体の内部が膨張する。

急激なGに内臓が膨張し、体がバラバラになるような痛みだ。唇を噛んだ程度では慰めにもならない。

「追い駆けっこは終わりがいかずー！」

「五月蠅い変態がっ！」

「酷い！私は、私はただ一途なだけなのに！」

「ドSが何をほざく」

「私はMだ！」

「知らねえよ！」

「かずーはSだ！」

「否定はしねえよ！」

「なら問題ない！」

「それはねえよ！」

PICによる等速運動からの瞬時加速を使いさらに加速する花子と剣を交える。

切り抜けるような一撃だ。

その一瞬。

たった一瞬の打ち合いで何かを掴んだような錯覚を持った。それは高速戦闘でのコツか、それとも勝利への活路かは分からない。だが、それを手放してはいけないと俺の中の何かが叫ぶ。

10 m近い距離が空いた。

互いに腕を広げ、振り回した反動を使い振り返ると一気に加速。二度、三度、四度と剣を交える。

高速下での戦闘を繰り返す内に錯覚していた何かが形になるのを実感し、口角が上がる。

それはまるで分からなかった料理法を思いついたような、解けなかったパズルの攻略法を見つけた時のような昂揚感に似ていて。

まだ、まだ強くなれる。

後少しで形になる。

「あは、あははは！まさかこんな短時間で——」

刀とHVMを振り上げた俺達は5度目の瞬時加速をする。目で追う観客を置いてきぼりにし、ぶつかり、離れ、互いに弧を描きながら円を作り、その終着点で待ち構える敵を切り裂くために加速する

後少しで俺は、俺は――

「貴イイイイイ様ラアアツツ！私を無視するなアアアアアツツツ
！」

「「っ?!」」

終着地点に到達し、いざ獲物を振り下ろそうとした俺達を割こうと箒が突撃してきた。

俺達は互いに自分だけは無傷で逃げようと相手を蹴り飛ばした反動で後ろに避けようと右足を出す。

「「は？」」

素っ頓狂な声と足の裏が合わさったのは同時だった。合図なんてしなかったし、ましてや考えを口にもしていない。なのに俺達は互いに蹴り合って後ろへ跳んだ。

「凄い！」

「息合いますぎ！」

観客の声がやけに遠く、他人事のように聞こえた。それでいて俺の心境さえ代弁してくれた。

宙返りするように後ろに逃げた花子と、逆様になりながら腕を振って反転した俺の姿は箒を中心に対象となり、まるで劇の一部のように映える。

「貴様ら、私が居ないかのように戦いおって！」

（やっべー、かずーに夢中で忘れてた）

（一夏を助けに行けよ・・・）

「私を侮辱しているのか！」

（しかし、空気読んでほしかった）

「ごっめーん、しののん。忘れてた♪」

自分の頭を軽く小突き、舌をチロリと出した花子は可愛らしく小首を傾げる。見ている側からすると挑発でしかないソレだが、コレが彼女の自然体のだと知る一真は呆れ、やる気を削がれて腕を組む。

掴み掛かった何かは指の間を擦り抜け、今はもうないことにため息を吐く。後少して何かを掴めた気がしたのに。

「た、助けてくれ箒！」

「忘れて、いた・・・だと」

「ごっめーん」

何もかもどうしても良くなり眼下に目を向けるとラウラの天使結界に捕まった一夏が鼻先に突レールガンをき付けられて慌てていた。ここから打鉄でどう助けてもらうのかとも考えたが、どうやら箒には聞こえていないらしく、孤立無援だなど憐れんでしまう。

「ほ、箒！箒さん?!」

「情けないぞ、織斑一夏！大人しく沈め！」

（確かに情けないな一夏。自分で売った喧嘩に助けを求めるなよ）

「先輩も、同意見のようですね」

ジトツとした視線を向けられた。睨み上げる筈の滅茶苦茶で自己解決的な物言いは明らかにこちらの意志を無視したものだ。本当に彼女達は学ばない。

「何も言ってません」

「言わなくても分かります」

「いや、聞いてから分かれよ」

「どうせ打鉄だから、素人だから無視してもいいなんて考えていたのでしょうか？」

「いや、そんなことないぞ」

「千冬姉の為にも負けられるかっ！」

「っち！諦めが悪いぞボウフラ、それでも大和男児かっ！貴様のような○○○で、○○○な奴は居ても居なくても世界は変わるんだ。大人しく駆逐されろ！」

(ラウラ、後で説教だ)

口汚く一夏を罵倒するラウラを見ながら箒もついでに視認し続ける。彼女の様子が変わった。何か縊るような、期待するような、そんな視線だ。

「な、ならば何故、何故私を無視したのですか?!」(おーっと、ここが運命の分かれ道!)

一級建築士の腕の見せ所だぜかずー!)

(つく、ならば今日、ここで、俺が死亡フラグの折り方というのを教えてやるよ)

「先輩、答えてください」

潤んだ瞳で見つめる箒を見ながら考える。考えるが、どう言えばいいのか上手い言い訳は思いつかない。ああ言った手前、俺は何としても箒を慰めないといけない気がした……

彼女は、彼女はたぶん孤独なのかもしれない。周りは専用機持ちばかりで、特別で、周りより優れているから自分だけ違うことに悩んでいるのかもしれない。

周りと同じ立ち位置にいる自分が嫌で、置いていかれるのが嫌だから何かにつけて言い訳してでも自分の近くに居て欲しい。そんな寂しがり屋なんだと思う。

「俺は、俺は………」

分からないわけではないが、さてどうしたものかと眉間に皺寄せ
る。こういうのは花子なんかが言うから説得力があるのであって、
専用機持ちの俺が言ってもそれこそタンポポの綿毛よりも軽いかも
しれない。言えば確実に戦闘になるし、本当にどうしたものか。

「俺はお前とは戦いたくない」

とりあえず逃げることにした。

「先輩、それって、まさか」

『きゃー！犀川さんだいたーん！』

「嘘だ！そんなの嘘だーっ！」

勘違いしたきゃしろ。それで戦闘を回避できるなら俺は――――

「つまり弱者は眼中にないと」

勘違いさえしないとはいったい何事か。本当にしののんKY。

「違うんだ！俺は本当に——」

「もういい。もう、喋るな」

「聞いてくれ！俺は！」

「どうせ忘れていたんでしょう」

「忘れてまし——あ、やべ」

つい本音を口にしてしまい顔を青くする。今さら口を塞いでも失言の後押しにしかないから情けない。

「う、うわぁぁん！どうせ、どうせ私なんてえ！」

刀を振り回しながら突撃してくる箒を避けた俺は逆様になりながら花子の横につく。

彼女は腹を抱えながら器用に空中で足をバタつかせていた。

「俺はどうすればフラグを回避できた。参考までに何か一言」

「フラグを回避しようとしたのが間違いさかずー！」

「シリアスに行きたかっただけなのに」

再度突撃してきた箒にスカートから取り出した鎮圧用手榴弾を投げる。

「こんなものー！」

惚れ惚れする一閃により二つにされた手榴弾が爆発。巨大な爆発音と網膜を焼き尽くそうとする蒼白い光にアリーナが包まれた。事前にナインボールのスピーカーを切り、視界補正をしていた俺は何事もなく空中で腕を組んでいたが、事前に対応してなければ気絶していたに違いない。

H・1により施された溶接用の偏光ガラスのような真っ黒な視界からクリア視界に戻る。まず見えたのは堕ちていく箒と花子だ。

『中々な威力だな』

『しかし威力過多です。観客席の大半が今の爆発で気絶しています』

『んー、威力下げるのは勿体ないな』

『グレネード弾として撃てば建造物に被害を与えることなく敵を無力化出来ますが、対人に使えば相手の鼓膜と網膜は一生使い物になりません』

『それはまた使い辛い。』

『・・・もしかして屋内で使ったら反響音でさらにヤバイ？』

『日本には不向きな非殺傷兵装なのは確かです』

地上で目を回している箒と花子を背後に、一夏とラウラの戦いを遠巻きに観戦する。

戦いは始終ラウラが押している。

当然だ。

アイツは産まれながらに兵士だ。戦うのが当たり前に生きてきたんだ。ほんの数ヶ月まで戦いも知らない、闘争から遠ざかった日本の学生でしかない一夏が適う相手ではない。それこそ、俺と同じかそれ以上の血を吐くまでしない限りは。

一夏とラウラの間はそれこそ空を漂う雲と地で淀む泥くらいにまで差が開いている。泥がいくら手を伸ばそうと、空から見下ろす限りその手は宙しか掴まない。

「貴様が、貴様のような弱者が教官を弱くした！」

「千冬姉が弱いだと！」

一夏の雪片二型とラウラのビーム手刀が火花を散らす。

「そうだ！教官は強かった。美しかった。気高かった。孤高だった。私の、目標だった！」

「つく、そんなの、テメエの押し付けだ！」

「黙れ！その教官に汚点を残す貴様が憎い！完璧な教官に弱点を作る貴様が、私は憎い！」

互いに押し合い、切り合い、殺しきれない慣性によりクルクルと回転しながら攻防を続ける。

2人がぶつかり合うたびに空が光る。まるで2人の生命の光ようだ。

「私は、私にとって教官は全てだ！教官は私の！」

『——から——を奪うな！私の唯一の——を、奪わ——れ！』

「……ん？」

「違う！そんなの、間違ってる！」

ラウラはビーム手刀と蹴りを混じえながら攻め続ける。雪片二型一本の一夏も展開したシールドを使いながら応戦してやっと何とか凌いでいる。

そんな中、ザザツとノイズと共に耳に入った音声に首を捻る。ナインボールのシステムを確認したが、何処にも問題はない。たとえ何らかの異常があればH-1が知らせる。ノイズについては空耳だと決めつけ、すぐに気にもならなくなった。

「それを貴様が、地に落とした………！それが私には耐えられん！」

『やっと、やっと——けたんだ………——だけ——物を』

「俺だってそんなの知ってるさ！だからこうして！」

「貴様は、教官に相応しくない！教官にあんな顔をさせる者など、居なくなってしまうばいいんだ！」

『あの人が居な———ら私———独り———。そんなの、そ——耐え———い！』

「つく、そんなエゴで千冬姉を縛るな！」

「黙れ！貴様さえ居なければ教官は！」

「お前はただ千冬姉を独占したいだけだ！」

「黙れと言っている！」

『何が悪い！その何が悪い！言ってみろ！』

「ぐっ！」

手刀を防いだことで片手が埋まった一夏の腹を蹴り上げる。間にシールドを挟んだとはいえ、衝撃は抜け、殺しきれない力が一夏の体を浮かした。

一度体勢を整えるために離れた一夏は肩で息しながら雪片二型を正眼に構える。

素人目でしかない俺にはよく分からないが、どうも堅い雰囲気と軟らかな雰囲気がある。きっとアレが隙というもののなのかもしれない。

ラウラも肩で息しながら落ち着くことない息を荒く吐きながら獣のような鋭い視線を向けていた。

「貴様さえ居なければ全て、全て丸く納まったのだ！」

深い穴から響くような声。

「世界はテメエだけの為にあるんじゃない！千冬姉も、俺も、箒も、シャルルも、セシリアや鈴も世界に居んだ！そんな中で自分の思い通りに行かないから誰かを憎むのは間違ってる！」

真直ぐで、愚直なまでの熱い思い。

暗い思いと熱い思いがぶつかる。

何も持たない少女と多くを持つ少年。

暗く深い絶望の淵と果てない空が続く草原という立ち位置。

本当に心の底から正反対な人間だ。

「貴様に分かるものか！私の、気持ちが！

『独りは嫌だ。独りは怖い。独りは、寂しい』」

頭の芯にまで響くような悲鳴が聞こえた。いや、事実響いていた。

頭が割れそうな音量で、背筋が震えそうな重低音で、体の中身を引き摺りだされるような波長で俺に流れ込んでくる。

『H・1。さっきから聞こえるコレは何だ？

何故、ラウラの声が聞こえる』

『相互意識干渉です』

『馬鹿言うな。アレは接触して回線を作らなきゃ起こらないはずだ。ラウラも俺も、今まで接触したことはない』

『通常ならば』

通常ではない手段を知っているような口振りだった。

H・1にさらに追及しようとしたがザワツ、と鳥肌立つ気配に身を固める。

「分かる、わけないだろうが！

何も言わない、何も伝えない、何も言葉にしない。

何も理解しようとせず、何も聞かず、何も受け入れようとしなかったくせに！自分のことを理解しろなんて我儘じゃないか！」

耳が痛い。

「五月蠅い、五月蠅い五月蠅い五月蠅い！」

『こんなことなら、逢いたくなかった。こんな気持ちを知るなら、機械のままで居たかった。教官にさえ逢わなかったら、奴さえ捕まらなかったら、私は落ちこぼれの機械として処分された筈なのに。こんな気持ちを知らずに居られたのに！』

「誰かと居たいならまず言葉にしろよ！誰かに理解されたかったら伝えれば良かったろ！自分を理解されたきやまず相手を理解しろよ！」

本当に、耳が痛いよ一夏。

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅いいいいいっ！
全て持つてゐるくせに、何もかも持つてゐるくせに、偉そうな口をきくなっつっ！」

『機械でいたかった！何も感じず、何も思わない冷たい、冷たい機械で！そうすれば辛いものなんてなかったんだ！』

絶望の中で絶えたかった！上を見なきや良かった！私に希望を持たせなくても良かった！汚い肥溜めに沈み、闇に埋もれて死にたかった！』

一夏の言葉に苦しむウウは頭を振りながら全てを拒絶する。今まで作り上げた殻は、まるで錆のようにポロポロと剥げていく。剥げるたびに一夏の言葉が中身を叩き、それが、彼女にはこの上なく辛かった。

「お前だって世界の一部だ。ならお前の居場所もある。俺に拘るなよ。お前にだって、お前の為の居場所があるんだぞ！なんで気付かない！なんで見ない！ただ振り返れば、それだけで、そこにあるじゃないか！」

「五月蠅い！五月蠅いっ！

『ここは暗い。ここは寒い。ここは寂しい……誰か、誰か助けて。』

私は知ってしまった。世界は本当は温かくて、広くて、優しいと。だから独りが辛くなる。

嫌だ、そんなの嫌だ。耐えられない……あんな、あんな中には戻りたくない！私はこっちに居たい！』」

「なんでそんなに意固地になるんだよ！」

「貴様さえ、貴様さえ居なければあああああつ！」

『私を！私を！私を！誰でもいいんだ！私を見てください！私を求めてくれ！私を、肯定してください！』」

頼む、一夏……それ以上喋るな。頼むよ、一夏。でないと……

耐えることも出来なくなったラウラが翔る。目を、齒を剥き出しにして自らを外に引き摺りだそうとする一夏を殺すために。

「ぐうつ……こんの！」

瞬時加速と、彼女の力を雪片だけで受けとめた一夏は後退る体に力を込める。間近まで迫るビーム手刀の熱さに死の恐怖を感じ、鬼気迫るラウラに哀れみを感じた。

「ああああああっっ！」

『嫌だ嫌だ嫌だ！怖い怖い怖い！私は、私は独りになりたくない！』

」

いよいよを持って頭が割れそうな頭痛が始まった。

頭に当てた手は硬い装甲越しに頭を撫で、気持ちだけ気分を和らげる。しかし痛みは治まらず苛立ちは積もるばかりだ。

「この、分らず屋あっ！」

「くうっ！」

一夏の感情に呼応して雪片二型がその全てを曝す。美しい、誰もが目を奪われるような光だ。

目を細めるような光がラウラのビーム手刀を打ち消した。

一夏はあるだけの力を振り絞ってラウラを弾き飛ばす。そして、体勢を崩したラウラに向かい雪片を掲げた。

「だったら、分らせてやる！」

「うああああっ！」

全力で斬った。

手加減などしていない、出せる力全てを一撃にかけてラウラを斬った。

その姿は光を掲げ、振り下ろすようで酷く皮肉が聞いていて、それでいて幻想的だった。

希望は光、絶望は闇。

本当に皮肉が効いている。今すぐ、同じ光で消し飛ばしてやりたくらいだ。絶望が持つはず無い光で、我が物顔する希望を跡形なく消し飛ばしてやりたい。

「うあつ、が————ごほっ」

アリーナの内壁に衝突したラウラは壁にクレーターを作り、肺に残ってもいない空気を吐き出し、咳き込むように息しながら地面に膝つく。

一夏は荒い息を吐きながらラウラを見ていた。雪片も主の限界を悟ったかのようにいつの間にか光を消していた。

残るのは光を消した雪片と、満身創痍の一夏だった。まるで全て終えたかのような雰囲気だ。

「はあはあはあ、つく。
お前の周りには、花子や春奈、みゆきが居たじゃないか。お前の居場所には皆居たじゃないか！」

馬鹿な奴。

ラウラ——俺——が求めているのは、

それ——多数——じゃない。

「つく、うう………私は、私は。
『嫌だ、独りは嫌だ』」

「それに一真だって！」

「かず、ま………中尉？
『あ………』」

ラウラは一夏の言葉により此方を見る。

鏡写しのように暗く淀んだ瞳が重なりあう。

さらに、その顔には気が付いたというよりも絶望したような表情が張りついている。

「一真はいつも近くに居たじゃないか！いつも、お前の近くに居たじゃないか！ずっと後ろで支えていたじゃないか！」

「や、め……てくれ、中尉。」

『私を見ないで！こんな醜くて、下卑た私を見ないでくれ！貴方にまで離れられたら私は……見ないでくれええええ！』

断罪される罪人のように顔を隠し、苦しみ、悲痛な叫びを上げる。聞いている此方まで罪に押しつぶされそうな叫びだ。

「お前は一真も否定するのかよ。どうなんだ、ラウラ！」

一夏の叫びが深く胸に突き刺さる。

心に土足で踏み入る。アイツがしているのは、まさしくソレだ。

「私を、私を……見ないで。」

『止めて、くれ……中尉の前でこれ以上……』

顔を隠しながら、懇願するようなラウラを今すぐ抱き締めてやりたかった。抱き締めて、彼女の居場所を教えてやりたかった。

しかし、それを止めるように声が聞こえた。

『力が欲しいか？』

それは、見えない闇のような恐ろしく、地の底から響くように重く、耳障り良く心地好いほどに甘美で、渴えた心には熱過ぎる程にラウラと俺に届く。

『………力が、欲しい。何もかも手に入れられる、力が』

違う。ダメだ。それに手を出したら戻れなくなる。

繋がる者。

終末へ鍵。

乙女。

管理者。

殲滅者。

踏み越えてはいけない一線。

最後の希望。

答えのための犠牲。

「―――――っ?! ああ、あああああっ!」

割れる。頭が割れちまう。

一瞬のさらに一瞬。刹那よりもさらに短い虚空に様々なイメージが流れ込む。

「そんなの間違ってるってなんで気付かない！」

内側から頭を突き破ろうとするイメージに苦しみながら手を差し伸べる。一夏を止めようとしていたが、それはラウラへ向ける。本能的な物だった。追い詰められたラウラはきつと声に従うだろう。

だが、それは契約だ。それをしてしまえば大変な事になってしま
う。

ダメだ。それに手を出すな。

「力が、欲しい。
『私は、独りだ』」

契約書に署名された瞬間だ。

その言葉が、撃鉄を打ち下ろした。炉心に灯をくべた。心臓を差し出すことになった。

『力が欲しいのなら、
くれてやる!』

「ぐ・・・・・くう、うわあああああああつ！アアアアアツツツ！」

ラウラから、シュヴァルツエアレーゲンから蒼白い電流が迸る。雷が彼女に落ちたかのような強い光が彼女を呑み込んでいく。

叫びは悲痛で、それが体の痛みなのか心の痛みなのかは分からない。ただその声だけで心が張り裂けんばかりに痛んでしまう。

「な、何が起こったん——なんだよアレ」

電撃が治まり、声が止み、光が落ち着いた。

現れたのは、ヘドロのような色をしたISだった。

その醜惡な色に誰かが悲鳴を上げる。

スラリとした腕、右手に握られた刀、背後に浮かぶ浮遊部位、長い髪のような何か、そしてのっぺりとした顔。見上げなければいけないほどに巨大な体軀は、通常のISよりも大きく、目算でも3mは軽く超えていそうな気がする。

全身がヘドロのような黒い深緑に覆われたことで身長の高いラウの姿は見えず、全てを呑み込んだソレに既視感を感じてしまう。

「あ、あれは・・・」

何かに気が付いた一夏が視線を向ける。肩を震わせた一夏の視線の先にはISの刀があった。それで気が付いた。ISの武器が雪片に似ていることに。さらに既視感の正体が千冬と同じシルエットから来るものだということが気が付いた。

『アレはISか?』

『該当IS無し。アレは未確認機です』

『いや、まずISなのか?』

ISが人を呑み込むなんて聞いたことないぞ』

『肯定。現在、完全な全身装甲型ISは存在しません』

『だったらアレは何だよ?』

『VTシステムと推定』

『VT？アラスカ条約で禁止されてるアレか？』

VTシステム。ヴァルキリー・トレース・システムと呼ばれるソレは、トレース元の動きを使用者に強制的に実行させるシステムで、現在はアラスカ条約により使用・研究・開発・輸入出を禁止されている。

脳内の引き出しから知識取り出してを確認。出てきた知識の薄さには溜息が出る。これでは教科書並みだ。斎藤技師や秋葉さんならさらに詳しいことを知っているかもしれないが、生憎これ以上は搾りだしても出てこないし2人はいない。自分の無知さに涙も出てくる。

『肯定』

『VTシステムの詳細知らないが、禁止されてるくらいだからヤバいのか？』

『初期のVTシステム使用者の大半は使用終了と共に全身の筋肉を傷つけ、複雑骨折を起こしています。中には体中の骨を折って死んだ者もいます』

『なんで？』

『VTシステムはその性質上使用者に無理な動きを強要します。もし動きだけでなく、ISや制御さえ完璧に模倣すれば問題ありません』

んが、それでも全身筋肉痛となります。

さらに問題となるのが、トレース元が織斑千冬だということです』

『あー、手足の長さが足りないな』

確かにそれなら納得が出来る。トレースするには、トレース元は勿論必要だが同時にトレース先にもある程度の器が必要だ。最高をトレースしたいのに器が並では器が持たないのも分かり切ったことだ。

『そうなるとラウラが心配だな』

織斑先生のスタイルは見るからにモデル並だ。小さなラウラでは手足の長さが絶対的に足りない。さらに目の前の人型は本人よりも巨大で、ラウラでは伸ばした手が肘に行くくらいだ。胸は、あまり関係ない。

『それ以前に、ISを生身で、刀一本で受けとめる方を人間と定義するか疑問です』

『いや、それはきっとアレだ、アレなんだよ……。うん。初代ブリュンヒルデにとって代表候補生の駆る専用機なんて鉄屑同然なんだろう』

『実は人型ISなのでは？』

『そこは素直にターミネーターで良くないか？』

好き勝って言っていることは百も承知だが、事実だから仕方ない。

『どちらにしても織斑千冬を模倣した時点で欠陥品です。二代目ブリュンヒルデならまだしも、高望みした結果が条約での禁止では意味がありません』

『練習には良さそうだけどな。世界最強の動きが直でわかるんだから』

『それで複雑骨折になって使えなくなつては本末転倒です』

なぜこうも悠長に話していただけるのか、たぶん見ている人間は当然のように疑問に思うかもしれない。

答えは簡単だ。

「うおおおおっ！」

『・・・』

突撃してあしらわれる。

「つく、こんのおおおっ！」

『・・・』

突撃してあしらわれる。

「まだだ、まだ終わらせない！」

『・・・』

このように、我等が主人公が単身で頑張っているからだ。歯を剥き出し、歯を食い縛り、出鱈目に雪片を振るい続けている。

明らかに頭に血が昇って周りが見えていない。少し視線を右往左往させれば周りに教職員が居ることぐらいわかっただろうに。

「ぐ、ぐあああ！」

鏢迫り合いに負けた一夏が蹴り飛ばされ、転がりながら足下までやってきた。

シールドエネルギーの切れたのだろう。白式は蒼白い粒子となり消えていく。

E1は、そんな一夏を見て呆れるように肩を竦めている。トレイ

スするのは動きだけじゃないのか？

「い、一夏」

「ち、くしょう・・・」

目を覚ました箒と花子が駆け寄ってきた。

「かずー、何があったのさ？」

「シュヴァルツレーゲンに組み込まれてたらしいVTシステムがラウラを呑み込んだ」

これ以上ないくらいに簡潔に答える。それだけで納得してくれた花子を横目に今後の展開を見守る。

VTシステムに呑まれたラウラ、仮称としてE1（エネミー・ワン）を取り囲む教師を見上げながら腕を組む。こっそりと右手で武装を収納しているアクセを弄っているのは経験としか言えない。

ここで気を抜いたらマズいと感じる。それがいったい目の前のE1か、それとも味方によるものかは判断がつかなかった。

「くそ、くそくそくそっ!」

「落ち着け一夏! 落ち着かんか!」

「離せ、離せよ!」

「落ち着け! お前1人で何が出来るんというんだ!」

「出来る出来ないじゃない!」

「いいから、落ち着け!」

「ぐおっ」

（殴った）

（しかも、木刀で）

（あれ、しののんって剣道で優勝してるよね?）

（平気だろ。一夏だし）

（なるほど納得）

互いに前を向きながらハイパーセンサで一夏達を確認する。何か口論しているようだが、俺達にしてみれば目の前の驚異の方が優先順位は高いためどうでもよかった。

「かずー、どうすんのさ?」

「様子見だな」

「いいの？」

「何が？」

「あれにラウにゃんが乗ってるんでしょ」

「……………」

『私を見ないで！こんな醜くて、下卑た私を見ないでくれ！貴方今まで離れられたら私は……………見ないでくれええええ！』

ラウラの悲鳴を思い出してしまう。アレは、正直、本当に堪えた。

『私は、独りだ』

寂しそうな声だったな。

「……………はあ」

「ラウにゃん、辛そうな顔してたよ」

「起きてたのかよ」

「起きてたよ。ダメだった？」

顔を下から見上げる花子を睨む。

「正直、あまり関わりたくないんだよな」

「そう言っていつも助けに行くんだよね。だからかずーって大好き」
♪

抱き付いてきた花子を引き剥がす。あまり人に触れられるのは慣れてないからだ。

「鬱陶しい上に土とオイル臭いから離れろ」

「いけずな、かずー、いけずだなー」

「変にリズム刻むなうぜえ」

懲りずに抱き付いてきた花子を蹴り飛ばして前に出る。すると一夏達も話がまとまったのか前に出てきた。

自信に満ちた足取りと顔に底知れぬ不安に襲われる。

「んで、そっちの作戦は？」

「箒の打鉄からエネルギーは貰った。それで十分だ」

「帰れ」

世間ではそれを見切り発車という。少なくとも、自信満々に話せる内容ではない。

「な、なんでだよ!」

「たかが500程度のエネルギーで何すんだよ! ああ?!」

「零落白夜一撃分あれば十分あだっ」

右腕だけ局部展開した一夏は雪片二型を掲げて此方を見てきた。
正直、殴りたくなったから殴った。

さらに1人走りをしそうな一夏を吊し上げて止める。馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、ここまで馬鹿だとは。

「お前、アレがわかる? 織斑千冬のコピー。あんだすだっどゆーおーけー?」

「わかってる、わかってるさそれくらい!」

「わかってるなら! なんでそんな命を捨てるような真似が出来るんだボケ!」

「アレは、アレは千冬姉を侮辱してるんだ！そんなの我慢出来るかよ！」

「それで死んだら誰が悲しむか分かってんのか！」

「それでも俺は！」

「それにアレにはラウラが居るんだ！間違いも、失敗も許さない！」
「く、苦しい・・・」

ギリギリと一夏の首を締め上げる。元はと言えばこの馬鹿がズケズケとラウラの心に踏み込んだのが発端だ。それを思い出すともう一発殴りたくなる。

「もういい！お前には頼らな——」

『敵機接近』

「つつ?!」

花子に一夏を任せ、刀を振り上げて近づくE1に抱き付いて距離を離す。今の一夏にE1を近付けてしまうのは危険過ぎる。

『また、絶望されるのか？』

（ん？）

『勝手に期待して、勝手に持ち上げて、自分達のミスで能力が下があれば見放す……勝手に過ぎる!』

抱き付かれたE1の抵抗を押さえながらアリーナの外壁へぶつける。

周りの教師が集まるのを確認し、一気に――

『私は、誰の玩具でもない!』

「つく」

離れようとするが、悲鳴に怯んで隙を曝してしまう。

怯んだ隙を逃さないE1が俺を蹴り飛ばし、空に上がる。それを教師達が追う中、1人、蹲りながら悲鳴に耳を塞ぐ。

『私は、私はやれることをやっただけだ!なのになぜこんな目に合わなければならんだ!』

空で教師達を相手に圧倒的強さを見せ付けるE1を見上げる。

全方位からの銃弾を避け、波状攻撃に斬り掛かる教師達を相手に

大立ち回りをしている。

あんなものにどうすればいいんだ、と考えてしまう。オリジナルとは違うといっても、実力差の開きは如何ともし難い。なにより、ラウラの本音が――

『なんで、なんで私だけ』

その一言でタガが外れた気がした。

「人の気も知らないで」と呟きながらブースターに火をくべる。膝を折り、体を折り、空で暴れる子供を見上げる。

『私は、ずっと独り――』

『こんの、クソガキいっ!』

弾丸とミサイルが飛び交う空に黒い線を描く。ナインボールの最高速度は450オーバー、そこに重ねて瞬時加速による瞬間最高速度を合わせれば時速750という速度が出せる。それは千冬のコピーでしかないE1の反応速度を超えるには十分だった。

右肘から先が宙を舞う。さらに体を捻ってブースターの1つを切り飛ばす。反撃に蹴られはしたが、頭に血が昇っているため痛みはあまりなかった。

『中尉？』

『さっきから聞いてれば好き勝手騒ぎやがって……こっちの気も知らないくせによ！』

『失望したろ……私は、所詮出来損ないの無能——』

『んなの知ってるわバーカ！』

『っ?!』

一瞬硬直したE1を殴る。さらに硬直した隙に教師陣が集中砲火を与える。

『中尉まで、中尉まで私を……見放さないでくれ！』

此方に突撃してきたE1の刀を受け止める。片腕が無くなった事で力だけならばニンボールに分があった。だが、こっちの弱い部分に周りながら力を掛けられるため鏢迫り合いは拮抗状態を維持し、ギリギリ、ギリギリと互いの刃が擦れる。

少しだけ前に出れば顔が接触するくらい近くでE1を睨み付ける。

『中尉、私の何がダメだった。』

弱かったことか？醜いからか？それとも、作り物だから——』

『喧しいわ馬鹿娘!』

『っ!』

なら、なら私の何がいけない!

私は強い。私は、最強だ。私は有能だ・・・なのに』

『自惚れんな。お前は弱いし、最強でもなければ有能にも程遠い。それにな、人がどんだけ心配したかわかってんのか!』

『う、嘘だ・・・』

『はぁ?』

『そうやって私を騙すのだろう・・・期待させて、期待させて、そして駄目なら見放す』

『いや、見放すわけないだろ』

ラウラの弱音に思わず笑ってしまいそうになる。

『だって最初からお前に期待なんかしてないぞ俺』

『そ、んな・・・』

ショックを受けたラウラの感情に反応したのかE1が一時的に機能停止に陥る。

その隙に教師陣の集中砲火に備えて離れる。

話が途切れたことに後ろ髪引かれたが、話なら病室でも出来る。

目の前で動かなくなったE1に集中砲火が浴びせられるのを見ると、ふと、悪い癖を思い出した。嫌な事、面倒な事を後に後送る。分かっているけどこれだけは治らなかった悪い癖。それがまさか今になって仇になるとは・・・

『貴様が、貴様があああああつ!』

『あ』

「く、来るぞ一夏!」

コントロールは全てシステムが握っていると考えていたが、どうやらそうでもないらしい。

一応、下には花子もいるし問題は――

「・・・・・・来い!」

――あつた。

雪片二型を構える一夏が臨戦体制をしいている。

「まったく、どいつもこいつも」

人の気も知らないで。

「世話が焼ける」

E1の後を追ってナインボールを飛行させる。

『織斑一夏ああああああっ！』

本当に世話が焼けるな。

空から降りてくるシュヴァルツレーゲンを見る。

息を深く吸い、吐く。

怒りで緊張した体から力を抜く。

足の先から、刀の先まで感覚を伸ばしていくと不思議な感覚に陥

る。まるで刀の刃先が指先のような・・・

（イける・・・・・・・・これなら、間違いなく）

構えを、取る。

シュヴァルツレーゲンは刀を弓のように引き絞り、体を捻り、俺を貫こうと向かってきた。

恐怖によるものなのか雪片が嫌に重く感じた。

「そういえば」

あれは俺が幼い頃だ。千冬姉に初めて剣技を教えてもらったことがあった。

初めて持つ真剣に、子供ながらはしゃいで、怖くて、それでいて嬉しかったのをよく覚えている。

幼い俺は、これで千冬姉を守る、って嬉しかった。だけど刀は重く、俺には扱いきれなかった。

『うう・・・』

『重いか、一夏』

『あ、当たり前だよ千冬姉』

『重いだろう。それが、命を断つ重みだ』

『これが？』

『剣は振るう物だ。振るわれる物ではない』

『よく、わかんないよ』

『いつか分かればいい』

そうだ。刀は振るう物だ。俺の意志で、雪片を振るんだ。

力は、意志があって初めて意味を持つ。

明確な意志が伴って力は力としての意味を持ち、間違いのない結果を産む。

「お前が、千冬姉を真似るなんて無理だ」

剣が交差する。

髪がハラリと待った。

刺突により切れた頬から血が流れていく。

「お前は、刀に振られた」

肩から太股まで切り裂かれたIS。

一瞬の交差の際、首を捻って刀を避け、雪片を振るった。千冬姉から初めて教えて貰った剣技だった。

「ただ強くなりただけじゃ、力は意味を持たない」

千冬姉を模していたシュヴァルツレーゲンは形を崩し、まるで粘土のように形を崩していく。

亀裂から現れたラウラは気絶しているのか、グッタリしていたが重大そうな怪我は見えない。

見え隠れする手足は青痣が出来ており、口元には血の垂れた後がある程度だ。これなら医療ポッドですぐに治るだろう。

「こんな無茶しやがって……………」

泥のようなシュヴァルツレーゲンの残骸を踏みながら近づく。あどけない、女の子の顔だった。

数秒だが、ラウラの過去を見た。

コイツは千冬姉に憧れてただけだった。誰よりも強い千冬姉になりたくて、独占したくて、好きだから近くに居たかったんだ。だから弟というだけで誰よりも近くにいた俺に嫉妬していた。

弱いんだ。コイツは本当に弱い。だから強くなりたくて、強くなれば独りでも大丈夫なんだって結論つけていただけなんだ。

ただの女の子として生きれば、コイツだって・・・

『足りない』

声が聞こえた。

「え？」

『力が、足りない』

声はスピーカーではなく、頭の中から聞こえてきた。

「ラウ、ラなのか？」

助けだそうと伸ばした手を止めてしまう。

『こんなものではダメだ。この程度では、ダメなんだ』

ラウラの声に反応するように残骸が動きを止めた。広がるばかりの残骸はその場で停止すると何かを待つように脈動し始める。

『もっとだ。もっと、もっと力が欲しい』

「ラウラ？」

『比類無き力が、誰よりも強い力が、最強の力が』

「なに、言ってるんだよ？」

『私は強くなくては、強くなければいけない。弱くては全て失うばかりだ』

「違うだろ。そんなの違う。お前は、お前は力を求めなくてもいい

んだ！力なんて無くてもお前は！」

『そんなの、嫌だ！

力が欲しい！力を寄越せ！私に、力を！』

ラウラの体を引き摺りだそうと手を伸ばす。今ならまだ間に合う気がした。

「っ?!」

バチッと言う音と光と共に伸ばした腕が車に跳ねとばされたかのように弾かれた。

痛む手を見た。火傷して、皮が破け、血塗れになっていた。それでも手を伸ばす。

「やめろ、やめるんだラウラ！」

『そんなに欲しいのかい？』

新たな声がした。聞き覚えある声だ。

「か、一真?!」

『欲しい!力が欲しい!』

『なら、手を貸そう。新たな同胞が目覚めるために』

「な、何を言ってんだよ一真!」

意味のわからないことばかり言う一真を見上げる。

しかし、そこには全速力で此方に迫る一真がいた。その顔には濃い焦りが浮かんでいた。

「やめろ、ラウラーっ!」

手を伸ばし、ラウラを残骸から引き剥がそうと一真が俺達の間
に割り込んでくる。

『なら、呼ぶといい。君の力を』

『来い・・・』

残骸が急速に戻り始めた。それに伴いラウラの体はまた呑み込ま
れていき、電流もさらに強くなっていく。

「ラウぐがつ、ぐうつ・・・・・・やめろラウラあ」

「やめろ一真！無茶だ！」

「煩い！」

高圧電流が流れるシュヴァルツェアレーゲンの残骸を掻き分けな
がら一真はラウラを助けだそうとし、止めようとしたが近くに寄っ
ただけで体が跳ねとばされてしまう。

「つぐ・・・・うう！」

ラ、ウラ。ラウラ！いい加減にしろ！聞いてるんだろ、ラウラ！」

『来い、来い・・・』

「この馬鹿！なんでそんなに自分1人で背負いこむ！」

「もう無理だ一真！」

「先輩！離れてください！でないと貴方が！」

『来い、来い、来い！』

「醜くてもいいじゃないか！弱くてもいいじゃないか！！」

「かずー！離れて！」

「お前は兵士じゃなくてもいいんだ！ただの女の子でいてもいいんだ！

俺はお前を見放さない！期待もしない！無能でも、お前はお前じゃないか！」

一真の努力を笑うかのように残骸はさらに速度を早め、そして――

『来い！』

強い光を発した。

誰もが目を庇って手を当てる。バチバチと放電するような音が聞こえ、遅れて後ろの方で何かが落ちる音が聞こえた。

「なんだ、アレは……」

箒は自らに巨大な影を落とす存在を見上げる。まるで卵のような蛹のような機械の塊だった。今まで見てきた機械の中でも特に大きい部類に入るほどのそれは時折生物のように蠢く。

嫌に静かになったアリーナに機械の擦れあう音だけが不規則に鳴る。

誰もが蛹を警戒した。遅れてやってきた先生達は一真や戦えない箒をつれて下がる。

「終わったのか？」

数分ほど経った辺りで誰かが呟いた言葉。それが切っ掛けとなる。

バキリ、と蛹が割れた。

警戒を緩めた者に誰かが注意をしたが、それは破裂するように四散する破片により消え去る。

頭を低くして破片から逃げた俺は次々と落ちていく教師を見て絶望した。

「ふふ」

最初は口から漏れだした息のような笑い方だった。

「はは、ははは」

笑い方は次第に大きくなり、終いにはアリーナ中の人間に聞かせ
るかのように大きくなる。その姿に箒は怯え、俺は強がるように睨
むしか出来なかった。

蛹から歸る蝶のように腕を広げ、太陽を一身に浴びるようにラウは宙に浮かんでいた。

シュヴァルツレーゲンとは全く違う姿をしたＩＳに身を包み、赤く光るモノアイで空を見上げ、細い腕で頭を押さえて笑いを堪えようとしますが、沸き上がる喜びはまるで間欠泉のように吹き出し、抑え切れずに叫ぶように笑う。

[illegible]

「二次移行・・・」

箒の呟きに生唾を飲み込んでラウラを見上げる。全体的に細く、それでいて軽く感じるシルエットをしている。だが、不思議と弱々しい感じはしない。むしろ今の彼女と見てしまうと凶々しく感じる。

何故かナインボールに似ていると感じた。色も形も違うが、雰囲気が独特だからかもしれない。

「ははは！あはははは！

素晴らしい、素晴らしいぞ！これが、これが中尉のいる世界か！」

ラウラの言葉で一真を見る。口を歪め、片膝に手を着いてなんとか立っている。先程の電流で体が痺れているのかもしれない。口しか見えないが、かなり辛そうだ。

「世界が小さく感じる！ああ、ああ！なんて力だ！これが私の新たな力！」

「一夏」

「大丈夫、なのか？」

「俺があゝの馬鹿を叩き落とす・・・お前は、アレから馬鹿を引き摺りだせ」

「出力も、センサーも、武装も、なにかもシュヴァルツレーゲンを凌駕している！素晴らしい、まさしく私の求めた私だけの力だ！」

「どうやって?!」

「零落白夜使え。あんだけ軽そうな見てくれなら簡単に装甲も切れんだろう」

「だ、けどもうエネルギーは・・・」

「ハナ、お前の打鉄の残ってどれくらいだ？」

「ハナって私のこと？」

「早くしろ」

「2000はあるよ。私も手伝う？」

「いい。打鉄じゃ出力に不安が残るだろ。

一夏にエネルギー渡してくれ。ただし、逃げる分だけは残せよ」

「まさか、かずー1人でやる気？」

「まあ、な」

「危ないよ」

「・・・俺さ、兄弟嫌いなんだ」

突然の独白に誰もが彼を見る。

片足を引き摺りながら彼はラウラに近づく。

「って言っても、ただ昔、弟と姉貴にやった事が恥ずかしくて、俺はお前らなんか嫌いだっていうポーズ取っただけなんだけどな」

「いきなりどうしたんだよ一真？」

「今思い出しても恥ずかしいな。友達がいなくて、1人が嫌だから

必死に同年代に合わせて……

弟が寂しかった時に遊んでやらなかった。アイツ、泣いてたよ。遊んでよ、なんで置いてくの、お兄ちゃんってさ」

「かずー？」

「それがさ、凄く嫌だった。だから友達と馬鹿やって、はしゃいで、駆けずり回って忘れようとしてた。アイツは俺みたいに友達と好き勝手出来なかったのに」

「先輩、どうしたんですか？」

「昔の自分が目の前にいたら、俺はきっと殴って、怒って、大切な事を教えてるはずだ」

指を一本一本動かす一真は絞りだすように話した。まるで懺悔しているかのようだ。

「兄貴はさ、確かに我慢しなきゃいけないのかもしれないな……・・・ああ、あんな最悪な気分になるんなら我慢した方がいい。母さんの言ってたこと、間違っちゃいなかった」

「あはははははははははっ、あは、はははははははっ！」

「俺はな、アイツを妹のように見てる。だったら兄貴として妹が泣いてるときに近くに居なきゃ間違いだ・・・・・」

「私は、私は、私は！」

「罪悪感だ、偽善だ、強迫観念だ。
否定はしないさ。ただな、それでも俺は兄貴としての責務は果たしたい」

「私は最強だ！」

「アイツは、俺の妹だ。理由なんてそれ以上は必要ない」

力強い言葉だ。

「昔語りなんて死亡フラグだよ、かずー」

「こんだけ立派なフラグ建てたんだ。後は叩き折るだけだろう？」

「一真」

「だから、いい加減・・・・・・・・」

ナインボールのブースターに火が灯る。

「泣き止めや」

ブースターが火を噴き、妹を迎えに行くために一真を空に上げた。

ラウラを止めるためにナインボールを最大加速させる。一秒でも早く、ラウラを止めなければと歯を食い縛りながらブースターの推力を上げる。

これ以上ラウラを放って置いては危険だ。VTシステムの発動と使用、さらには長時間戦闘が続いたのだ。いくら兵士として育ったからといっても限界はある。

「中尉、見てくれ！私も、私も力を手に入れたぞ。中尉と同じ力だ！」

自分の姿がよく見えるように手を広げて全身を見せてくる。もしこれが日常の一コマならどれだけ良かっただろうか。新たな力を手に入れた経緯がラウラを追い詰めた結果のため素直に祝福は出来ない。さらに、ラウラから流れてくる縋るような感情がそれを後押しする。

「中尉、私は、私は！」

「もう、いい」

「中尉。これで私を」

「もういいんだ、ラウラ」

「中尉？」

「お前の気持ちも、不安も気付いてやらなかった。今になって分かって遅いかもしれないが・・・・・・もうやめにしよう」

「何を言っているんだ、中尉？」

「俺はお前を見捨てないし、失望しない。俺の考えや感情だって読めてるなら分かるだろう？」

「そんなの、そんなの私に最初から・・・・・・」

「・・・・・・」

「私に期待していないからだろうが！」

ラウラは此方が瞬きしている間に距離を詰める。俺は一瞬で近づくかれた事に驚いてしまい対応が遅れてしまう。

右腕に装備されたパイルバンカーで俺を殴った彼女はさらに反対の腕で殴り飛ばす。

「私に期待していないんだろ！私が弱いと思っているんだろ！」

「つく」

「分かるんだっ！」

「やばっ」

殴られたせいで硬直している俺に銃を向けたラウラを見てすぐさまシールドを張る。

轟音。

全力で張ったシールドを破った弾丸が胸に被弾する。

減り続けるエネルギーを横目に体を捻り、地面ギリギリで体勢を整える。

『集弾性の高いショットガンです。近接戦闘は避けてください』

『うち・・・・・・・・、なら距離を一定に保つ』

急ぎ過ぎた事に舌打ちしながら空に上がる。右手には使い慣れたマシンガンを握り、引き撃ちをしながら間合いを一定にする。

（話し合いはベッドの上でするしかないか）

回避しながら近づく彼女に対して距離を保ち続けるが、それでも距離は刻一刻と縮んでいく。どうやら加速性は彼方が上のようなのだ。

『私はただ見てほしいだけなのに！』

『見てるだろうが！』

『見下すな！』

『見下してない！』

『見下してる！』

箸が使えないくらいで、ちょっと常識がないくらいで、少しやり過ぎたくらいで………ううっ！』

『いや、それは絶対に違うだろ。常識が甚大に欠如して、かなりやり過ぎが本音だ！着色するな！』

さらに付け足すなら羞恥心はない、何かと問題は起こす、マナーが悪い、学がない』

『ちゅ、中尉は私を見下す！』

『俺の記憶と感情見てソレか？！』

絶対にお前が悪いって気付いて———』

「言うなああああっ！」

「八つ当たりすんなクソガキがあああっ！」

両肩に装備された追加ブースターが蒼白い炎を吐き出す。一瞬、本当に一瞬で近付いたラウラに体が硬直してしまう。

『私は独りになりたくない』

右腕に装備された巨大なパイルバンカーが弾薬を1つ消費した瞬間、腹部に強い衝撃と痛みが襲い掛かる。

空気の壁を突き破る渴いた音が聞こえた時には既に吹き飛ばされ、アリーナのシールドに激突するとズルズルと地面に落ちていく。

息が出来ない。

凄まじく痛い。

胃がせり上がる。

ビチャビチャと赤い吐捨物が土に染み込まないまま広がり、ツンと鼻を突く胃酸の臭いにさらに吐いてしまう。

『私は、強い』

（苦しい、痛い、気持ち悪い、痛い）

『私は、有能だ』

（もう、嫌だ）

『私は、出来損ないじゃない!』

蹲る俺に再度近づいたラウラは瞬時に近付くとナインボールの腹を蹴る。

無理矢理立ち上がらせられた俺はさらに胃がせり上がるのを堪えられず吐き出してしまう。

吐捨物が弧を描いて舞う。

『私は、私を証明する!』

力の入らない俺をパイルバンカーで支えたラウラが躊躇なく引金を引く。

一発、二発、三発。

渴いた音がアリーナに響き、吹き飛ばされた体をシールドに強かに打ち、その衝突する音は幾度も続く。

胸部装甲は既に罅が入り、杭の先が突き刺さっている。まるで、吸血鬼を打ち付けているように胸に刺さっている。

「かふっ、がはっ、ぐぐ、ぐぐっ」

吐き出した物が吐捨物なのか、血なのかもわからない。

吐捨物がパイルバンカーを伝い彼女の腕を汚す。それはナインボールのオイルと混じると酷い臭いを出し、意識を遠くさせた。

涙で滲む目だが何故か視界だけは妙にクリアで、ハーフフェイスから覗く口が、ラウラの口が辛そうに歪んでいるのが見えた。

つうつとラウラのハーフフェイスから頬を通り、細く小さな顎にかけて光る線が出来ていく。それは顎先に溜まると大小の滴を作りながらポタリ、ポタリと落ちていく。

頬を流れた液体に手を伸ばし、優しく拭う。するとラウラが体を固くし、パイルバンカーから力を抜いた。

支えの無くなった体はそのまま自らの吐捨物に向かい倒れていく。ナインボールも展開出来なくなったのか赤い粒子となって消えていく様は中々に綺麗だった。

『中尉は・・・何故』

ラウラは倒れる俺に手を伸ばしたが、もう少しというところで手が止まる。見えない薄い壁があるかのよう手はその場から動かない。俺を支えようと力を込め、震え、なんとか伸ばそうとするが、俺は支えられることなく地面に倒れた。

「————ごほ」

倒れた衝撃で一度咳き込むと口から何か赤い液体が飛び散る。それは薄い赤の液体に混じると黒に近い赤へと変わっていった。

『私のような存在に優しいんだ』

泣いているようで、怒るようで、悔やむようで、そのどれでもないような呟き。

「か、はっ」

聞こえた声に何も出来ないまま俺はもう一度、血を吐きだした。まるで後悔を血と一緒に吐き出すように。

（弱いな、本当に嫌になるくらい弱い）

薄れていく視界が滲んだ気がした。

銃声と誰かの声が聞こえてきた。やけに遠くて、ノイズがかったように不確かなのはきつと意識がまだ寝ているのだと気付くのにあまり時間はかからなかった。

苦勞して重い瞼を開ければ空で一夏とラウラが激しい空中戦を繰り広げていた。どちらも高速戦闘を主眼にしているのだろう、肉眼だけでは残像を見るのがやっとの戦闘だ。

「先輩！」

「大丈夫ですか犀川君！」

「犀川、傷の具合はわかるか？」

言われて身動きしてみる。胸と脇腹、さらに左腕が言いようない強い痛みがあった。

「くう……ううっ」

「先輩！」

「かずーっ！」

「しっかりして犀川君！」

少し呻いてしまうと周りが騒ぎだして傷に障ったためすぐに押し黙る。

「馬鹿者が」

滲む視界に映った千冬先生の顔は酷く険しいが恐くはなかった。心配してくれているのだろう。それが嬉しかった。

「馬鹿、ですか」

「ああ。馬鹿だ」

嬉しくて小さく笑う俺に千冬先生が険しい顔を少しだけ和らげ、口を小さく三日月にする。

綺麗だ。本当にそう思える厳しいが、優しさを感じさせる笑顔だった。

「くっ、違いますよ」

笑いを噛み殺ただけで体が痛む。

「俺、は・・・」

右手が動くのを確認し、なんとかズボンのアンプル収納部から小さな注射器を取り出す。

特別製の金属型注射器はあれだけの戦闘があっても壊れていなかった。

それを太股に突き刺し、ボタンを押す。

プシュ、と炭酸の抜けるような音が聞こえる。

周りが手の中にある注射器に気付いて慌てて取り上げるが、中身の大半は既に体に入り込んで無くなっていた。

「――！――、――！！――」

誰かが怒鳴っているのが聞こえてくるが、強い眩暈が起こっている今、全ての感覚が遠ざかるため良くは分からない。

タバコを1カートン同時に吸ってもここまではならないだろう。酷い眩暈に吐き気が起こる。

強い眩暈と体の感覚が麻痺する中、もう一度身動きする。痛みはあったがどこか他人事のように、それも次第に違和感になる。それから少し経つと痛みも消えていた。

「俺は大馬鹿者ですよ」

体を起こす。

本格的に葉が回ってきたのか世界がグルグルと回り、起こした体はまた倒れてしまった。

グルグル、グルグルと世界が回る。

もう、何もかもがどうでもよくなったような解放感が襲い掛かってきた。

だけど、俺にはやらなければならないことがある。

「倒れたらダメだろ、一真」

自分の目的を強くイメージしながら起き上がる。周りはそんな俺を止めるが、全て振り払って立ち上がる。

目の前に立ちふさがるように千冬先生が俺を見下ろしていた。そこで俺が膝を杖に立ち上がっているのによく気が付いた。そんな俺を見た千冬先生は軽く、本当に軽く肩を押す。トン、と軽く押されただけで倒れそうになった体は我ながら無様だと思う。壁に手をつかなければ満足に立ってられないのに、何を成そうというのか。

「そんな体で何ができる」

「……っう」

「寝ている。後は、アイツが」

「出来ますよ……」

「なに？」

「なんだって、出来ます」

膝を笑わせ、壁が無ければ立ってれないガキの生意気な口に先生は眉を寄せる。

「え？」

殴られたと気付いたのは、俺が頭をアリーナの壁にぶつけた後だった。

見れば周りの教員に取り押さえられている先生がいる。

「死に損ないのガキが、生意気な口をきくな」

低い声音と苛立った表情。普段なら身を竦ませるかもしれない。

頬に当たる違和感が壁だと分かるのに数秒要した。もう、感覚自体が曖昧になってきている。

「死ななかつただけ運がよかったと何故気付かない」

「死にませんよ……」

「なに？」

「死ねないんです。だから、死にません」

「ガキが付け上がるな」

取り押さえる教員を振り払った先生が拳を振り上げる。

もう一度殴られた。今度は本気の一撃だ。

「先生！やめてください！」

「放せ！放さないか！」

壁に手を着き、口の中の異物感に気付いて吐き出す。コロリとサイコロのように歯が転がる。目はないが、変わりに血がベツトリとついていた。

「貴様が一夏に言ったことも忘れたか！」

「忘れてません」

アレは本心だ。一夏が死ねばアイツを慕う者達は泣く。そしてその喪失感は大きな穴となって今後彼女達を苛むに違いない。だから、俺はアイツを止めた。

勿論、俺にもいるだろうが、アイツに比べればいくらでも言い訳はつく。それに数年経てばそれも何かで埋められるだろう。

だから俺はいいんだ。

「なら自粛せんか！」

「しません」

自粛とは、自らが間違っていて初めて出来るものだ。

俺は間違っていない。俺は俺を間違っているとは思っていない。これはただの無茶なだけだ。

「まだ言うか！」

殴られたが、今度は踏ん張りがきいた。

睨み上げるように彼女を見ると辛そうに俺を見ている。

「貴様は、貴様という奴は・・・・・・・・つく」

優しい人だ。

「そんな体でISがまともに使えると思っているのか！」

「ええ」

俺にはH・1がいる。

「肋骨が心臓に刺されば死ぬんだぞ！」

「ええ」

なら心臓に刺さらぬよう外に引き摺りだせば済む。

「今の貴様は何も出来ない又何故気付かん！」

「出来ますよ」

まるで暗示をかけるように淡々と言う。

薬も漸く脳に浸透しきったのか体もある程度の自由が利くようになる。それに俺もニンボールもまだ全てを出してはいない。

「俺が出来ると直感し、実行するんです……なら何だって出来る」

強がりでない、本心から言葉に先生が怯む。当たり前だ、こっちは出来る前提で動くんだから。

「だが、許可できん！」

なにより貴様は痛みで立つのもやっとだろうが！」

「そんなの、マリファナ打ったときからクリアされてますよ」

マリファナという単語に周りが騒つくが、全てを無視して普段のように歩く姿を見せながら彼女の前に立つ。

「俺は、大丈夫です」

「そんなのガキの万能感だ。ただの、勘違いだ」

俺から目を逸らし、震える唇で言い捨てる。初めてみる女らしい姿に少し惹かれた気がしたが、そんなの今はどうでもいい。

「そんなの、諦める理由にはなりません」

「つく、高槻！貴様から何とか——」

俺の目を見て説得を諦めた先生は静観していた秋葉さんに助けを求める。

「一真君」

いつもと違い冷たい雰囲気秋葉さんを包んでいる。

「すいません、高槻中将……軍既を破ります」

「構いませんよ。それに、貴方はまだ軍から要請も命令も受けていないから軍既も当てはまりません」

雰囲気が一転し、優しい暖かさを感じる

笑顔で告げる秋葉さんを誰もが信じられないと見ている。

秋葉さんは俺を一度抱き締め、静かに傷に響かないよう撫でてきた。

「貴方は貴方が思うよう行動しなさい。責任なんて私に任せて、ね？」

「ありがとうございます」

感覚が曖昧な腕で秋葉を抱き返す。

穏やかな気持ちになる。秋葉さんの匂いや暖かさがそうさせるのかもしれない。

「・・・・・・・・H・1」

秋葉さんから離れた俺は小さく、呟く。声に反応したH・1は喋らずにただウィンドウだけを出した。

【システム再構築完了

オニキスの破損が酷いため二次移行を推奨

許可をください、マスター】

真先に俺を心配し、止めそうなH・1だったが、どうやら俺のことを真に理解していたようだ。

嬉しくなり、小さく笑いながら俺は命令を待つ相棒に声をかける。

「二次移行を承認」

【了解。ナインボール、展開】

紅い粒子が体にまとわりつき、次の瞬間には深紅の装甲を陽光に照らすナインボールが現れる。

『ご無事で何よりです、マスター』

『ありがとう、H-1。助かるよ』

『お気になさらず』

『じゃあ、早速』

『システムオールグリーン。』

ナインボール、出力60%に設定・・・安定。

全火器管制システムにアクセス、テストモードへ移行』

『ミッション、敵機の無力化』

『了解————作戦開始』

ブースターに灯をくべる。蒼白い噴射光を吹き出すナインボールが高速で戦闘する二人の間まで数秒とかわらずに————横断しやがった。

『っち、オニキスのようにはいかないか!』

『オニキスとの性能差は160%です』

オニキスの1.6倍。その60だから・・・オニキスと変わらない性能なのか。

『情けなくなるね、まったく』

詰まる所、俺はオニキスの全性能を使っているだけだ。ブースター等の性能が上がった為に加速度の違いで速いと感じたが、最高速度は470までしか上がっていない。

無駄話も出来ないほどの加速性に舌打ちしながら緊急停止からクイックターンを行う。体の内部で異物感が現れた。

顔を青くしながら気にしないよう努める。

「か、一真なのか?!」

「俺以外にナインボールを使う奴がいるなら見てみたいな」

「大丈夫なのかよ!」

「心配してくれるんなら早くラウラをどうにかするぞ」

「お、おう」

近くまで来た一夏に指示を出した後、真っ直ぐラウラに突っ込む。

散弾銃の銃口が此方に照準を合わせたタイミングで右に飛び、瞬時加速で落ちた速度を無理矢理に最高速度へ持っていく。

目の前まで近寄り、HVMの範囲に入った彼女を切り払う。

「っ?!」

本来なら体を斬るつもりが、避けられたことで散弾銃のみを斬ることしか出来なかった。これで砲身を切り裂ければ堯幸だったが、こちらの願いに反して砲身は愚か両端のブレードは刃零れさえしない。

恐ろしく硬い。いったい材質は何なのかと技術畑の人間としては気になるが、その被害者としては早くしまっただけ欲しい代物だ。

『私は、私はなんてことを』

流れ込んできた彼女の感情は罪悪感と孤独。きっと俺を落としたことで元々あったものがさらに強くなったのだろう。責任感が強いというか、素直というか、どちらにしても可愛いものだ。

『いい加減に終わりにしよう、ラウラ』

『嫌だ。終われば、私は』

『続きは、ベッドの上だ』

俺から逃げようとするラウラの背後から一夏が現れる。

零落白夜を展開した雪片は彼女のシールドを容易く破る。さらにブースターを斬り飛ばし、黒い煙が上がった。

2つ、追加ブースターも含めて4つある内のメインブースターの1つを破壊されたラウラはそれでも逃げようとする。

黒煙に混じるオレンジの噴射光にHVMを向ける。速度は余りにも遅く、弱々しい。まるで今のラウラの心境を表しているように見えていられない。

「作戦——」

『嫌だ、嫌だ!』

ラウラが半身だけ振り返り散弾銃を放つ。だが、収束性が高いといっても範囲がある程度分かれば後は度胸の問題だ。

ナインボールのブースターを噴かしながら新たに加わった推力可変ノズルを使い斜め前に体を押し込む。機体の速度を極力殺さず、また効率的な飛行は瞬時に横に移動したように感じた。

推力可変ノズル、別名推力偏向システム。

ISにはまだ付属していないが、この機構は百年以上も前からある。これを備えた戦闘機は高い機動性が得られ、人間はさらに空を自由に翔ることが出来た技術。

しかし、科学技術は万能ではない。突然の力の向きが変われば当然Gが発生する。そのGに耐えるのは純粹にパイロットに頼りきりになる面が多く、ISに載せてしまうと様々な工程が1アクション多くなってしまう上に、短時間で連続の旋回をするISに耐えられるノズルは未だ開発されていない。

「――完了」

背後を取った俺は迷わず残るブースターを切り裂く。慣性制御があるとはいえ、背後を取った俺は迷わず残るブースターを切り裂く。慣性制御があるとはいえ、ISの推力はブースターに依存されている。ブースターが無くなったISなど風船と対してかわらない。

その後は予定通りに一夏がISの装甲を切り裂いてラウラを引き摺りだす。

事前に言っていたことを守ったおかげでラウラには目に見える傷はない。

大事が無くてよかった。

一夏に抱かれたラウラを見ると次第に眠くなってきた。緊張の糸が切れたのかもしれない。

高速戦闘によるGで体の内部はズタズタで、さらに傷口からは血がドバドバと出ている気がする。いくら痛みを麻薬で誤魔化しても、機能までは誤魔化せない。

起きているのも辛くなってきた。

『後は頼む』

後のことをH・1に任せて意識をゆっくりと手放し、眠りに就く。

（ラウラと何を話そう）

次にラウラに会ったときに何を話そうかと考えながら。

目が覚めて最初に見た物は、落ちた太陽の名残、紫色から紺になりつつある空だった。

次に目についたのは白い天井と薄暗い白熱灯で、目を横に動かすと薄いカーテンと暗くなる外と中を隔てる窓。それから小さなテレビと小さな椅子に座る教官だった。

彼女は片側だけのイヤホンをつけてテレビを見ていた。顔を少し傾けると何かのドラマの1シーンが流れている。女教師と大勢の生徒が泣いているシーンだ。それには見覚えがあった。アレは確か、DVDレンタル店の店員が勧めてきたドラマの1シーンで、一緒に見ていた花子達が泣きながら見ていたのでよく覚えている。

自分も中尉もそんなものかと、一度見れば十分と思っていたが、まさか教官も見ていたとは・・・もう一度見返そう。

「ん、起きたか」

「はい」

目尻に小さな涙を浮かべた教官に少し驚く。以前なら、あの厳しく、凛々しい方が人前で泣く事が信じられなかったが、それは押し付けらしい。

この悲しい気持ちも、私がこの方を全て理解していないという証拠なのだろう。そう考えると新たな一面を知ることが出来て嬉しいとも考えられる。

「教官も、泣くんですね」

「失望したか？」

「いえ、以前なら悲しくなったかもしれませんが……今は嬉しく思います」

「そうか」

私の答えに満足したのか教官は小さく笑った。私も自然に口元が弛んでしまう。

「さて、昼間の件について何処まで覚えている？」

言われて目を閉じ、ゆっくりと記憶を遡る。

起床から始まり、決勝戦の開始、織斑一夏に破れた瞬間、VTシステムの発動。そこから先は多少曖昧だったが、中尉に呼び掛けられたことは覚えている。

今思い出せばとても優しく、気恥ずかしい感覚だ。何といえはい

いのだろう……

(う……ん。うーん。うゝゝゝ、分からん)

やはり考えても良くは分からなかった。ただ恥ずかしいとだけしか今の私には分からない。後で中尉に聞いてみよう。

それから意識が呼び起こされた私は中尉にも見放されたと勘違いし、織斑一夏に攻撃。反撃を受けて戦う力を失った。

それから二次移行へ移り、私は――

連続する発砲音。

碎ける装甲。

突き刺さる杭。

血と汚物とオイルの臭い。

優しい中尉の顔。

動かない手。

暖かな気持ち。

消えていく中尉の意識。

「わ、私はなんて事を・・・」

全て思い出した。

私が中尉を傷つけてしまった。あの中尉を私自ら望んで。

「その様子なら記憶はあるようだな」

「中尉は、私のために・・・・・・・・それなのに私は」

今でも思い出せる。の優しい手の感触が。

「ふむ、何があったのかはわからんが続けるぞ」

「・・・」

「お前はVTシステムを解除した後、二次移行を済ませ、戦闘。犀川を瀕死に追いやり、続く一夏との戦闘に移行。そして復帰した犀

川と一夏に敗れた」

瀕死という言葉が重く胸にのしかかる。

動悸が早くなり、息は荒くなる。さらに眩暈が起こり、続いて強い頭痛が始まった。

酷く苦しい。

「おい、大丈夫か？」

「ハッ、ハッ、ハッ……つく、大丈夫です」

「そうは見えんぞ馬鹿者が」

「お氣遣いなく」

強がりで平静を保つが、辛さが倍になるばかりで長くは続かない。チラリとテレビに映る自分の姿はまるで重病患者のそれだ。顔色は蒼白く、渴いた唇はひび割れ、瞳孔は細かく震えて一定じゃない。

「ラウラ、犀川について聞きたいことはあるか？」

思わぬ話に私は飛び付く。

「っ！全て、全て聞かせてください！」

ベッドから起き上がった私は教官の両肩を掴む。畏れ多いと思ったが、今の私には中尉の事が一番気掛かりであった。

「落ち着け」

教官は私の手を払うと服装を正し、私を見る。私は払われた手を見て呆然としていた。

拒絶された、最初はそう感じたが、中尉が傷付いてまで教えてくれた事は心に深く刻まれている。そのおかげでそこまで酷くはなかった。

ただ、中尉が傷付いた原因が自分にあるのだと思う方が強いだけなのかもしれない。

「全て、と言っても何から話すべきか・・・」

「最初から、私が気を失ってからお願いします」

「そうか。わかった」

私が気絶したのは一夏に引き摺りだされて直ぐだった。その時、相互意識干渉が起こったのだが……今は関係ない。

その後、中尉は待機していた教員達の前に落ちるように降りてきたらしい。ISを解除した中尉の体は一目で判る程に死に体で、口からは赤黒い泡を吹き、血の涙の跡があつたらしい。左腕は折れて腕の半ばから曲がり、脇からは不自然な突起がスーツ越しに盛り上がっていたという。

「山田君！急いで保険医を！それと手術の準備だ！」

「千冬、今から応急処置を施すわ！」

「しかし下手に触れるような状態じゃない！」

「せめて体の状態を見なきゃ。小さな傷だけでも塞がないと！」

高槻中将与教官が詳しく容体を見るために耐Gスーツを脱がすと、

「え・・・？」

ゴポツと血が一気に溢れだした。

誰かが口を開けて見ていた。なにせスーツを脱がせた瞬間に血が飛び跳ねるように外に溢れたのだ。

中尉の体は、自分の血で赤黒く染まっていた。

濃い血の臭いと始めてみる怪我に誰かが吐き出す中、二人は持っていた水で体を濯ぎ、出血の続く箇所を探した。

脇から飛び出た肋骨から多少血は流れていたが、固まった血が詮の役割を果たしているのかコレといった対処は出来ない。ただ内出血で破裂した部分がおおく、二人は重点的に止血した。

遅れてやってきた医療班に中尉を任せ、私も遅れて医療施設に搬送された。

私はすぐさま医療用ポッドに入れられ、中尉は手術室に運び込まれたらしい。

手術は、丸1日もかかったという。

手術の様子は秋葉中將により止められ、見れなかったらしい。

丸1日、それだけかかる程にまで中尉が傷付いた。教官の話では、手術が成功したのも運がよかっただけらしい。

医者も最善は尽くしたとしか言わなかった。

大丈夫ですとも、

安心してくださいとも、

問題はないとも、

言って欲しい言葉を医者は避けた。まるでそれだけは言えないと態度が表していたらしい。

治療後、中尉も医療用ポッドに入れられてた。それがついこの前だ。

「ちなみに、お前が医療用ポッドから出たのが四日前。トーナメントから彼此1週間は経つな」

「1週間」

「ああ」

現実味の無い時間に呆然としたが、とある結果を聞いていないことに気が付く。

「中尉は、中尉はどうなったのですか?!」

「奴は・・・」

言いにくそうにする教官を見て最悪な考えがよぎる。

今の医療技術として完璧ではない。

人は百年前から癌を克服出来ず、また寿命として百歳前後。冷凍睡眠という技術も発見されたが名前とばかりの凍り付けで、解凍しても生きている確率は低い。

数十年前に産まれた医療ポッドという大発見さえも、今でこそ無くなった体の一部を再生させることが出来るが完全とは言えない。大半が体に適用しきれないまま見た目だけ治ったというのが通例だったり、無理な細胞の活性化により自滅因子を刺激し寿命を短くするという研究報告さえあるのだ。

つまり治ったからといって無事というわけではない。

「中尉は、中尉はどうなったのですか！」

「奴は、そのだな……」

「まさか、中尉は……助からなかったのですか？」

「いや、だからな」

はつきりしない教官の顔は険しく、それが最悪の考えばかり連想させる。

「つく！」

「ラウラ！ っち、話は最後まで聞けと言うに」

教官に痺れを切らした私は廊下に出た。いや、逃げ出したんだ。

中尉が、中尉が……

未だに人が疎らな院内だが、突然慌ただしく出てきた私に何事かと次第に人の影が多くなってきた。

検査入院していた生徒や、その付き添いの生徒。それらを診る医

者が私を白黒とした目で見つめてくる。

近くにいた医師を私は捕まえて問い詰める。

「おい、中尉——犀川一真は何処だ?!」

「犀川・・・ああ、彼か」

「答えろ!」

苦笑する医師の対応の遅さに苛立ち、自然と掴んでいた襟を締めあげる。

「か、彼なら西棟の208に」

「西棟208だな」

病院の廊下を走る。

時折通行人にぶつかりそうになったり、弱った体で走ったことで転んだりしたが、構わずに走り続けた。

エレベーターを待つ時間も惜しい私は階段を数段飛ばしで駆け、目的の病室を見つける。

「中尉!」

病室のドアを開ける。

室内は電気が点いておらず、狭い個室で、ベッドを囲むカーテンは締め切っていた。

ピッ、ピッ、ピッという定期的な音が聞こえてくる。

嫌な予感が強くなった。

「中尉？」

ヨタヨタとベッドに近づく。

私は途中で転び、カーテンを引きずり落とすように開ける。

「え？」

「……ん、ボーデビッヒじゃないか。歩き回っても平気なのか？」

巨大な紅がベッドの代わりに横たわっている。

ベッドあるべき場所には代わりにナインボールが雑誌を片手に鎮座していた。

訳が分からない。

「ほら、食べ」

剥かれた林檎とナインボールを交互に見る。最初、ISのまま林檎を剥き出した時は驚いたが、今は何故このような状況になったのかと戸惑いの方が強くなっていた。

「はあ、これで分かったか」

遅れてやってきた教官が頭に手を当てながら入ってきた。

「あの、これは？」

「コイツはな、お前と同時期に医療ポッドから、自ら、出て来たんだ」

やけに強調した教官だが、目の前の中尉は音声でも切っているのか自分の林檎を剥いている最中だ。妙に手慣れていて、こちらに氣付いたのか林檎を兎のようにカットしたものを私にくれた。丁寧に目までついている。

「おお・・・おおっ」

私が林檎の兎に見とれている間に中尉は全ての林檎を切り終えていた。今更だが、中尉のISは二次移行後に完全な全身装甲となっている。以前まで肌が露出していた口元は、今や冷たい鋼に覆われていた。

（どうやって食べるんだろうか）

「それにしても、んぐっ、どーしたんですかこんな時間に？」

「コイツがお前を心配して来ただけだ」

「俺が無事だって伝えなかったんですか？」

「明らかに瀕死の人間が数日の医療ポッド入りで意識を取り戻し、さらには自力で治療しています。それを信じろと？」

悪いが私は未だに悪い冗談としか見ていない」

「俺の存在は冗談ですか」

（頭だけ局部解除するのか）

多少残念に思いながら林檎を齧る。甘酸っぱい味だ。

「ISで治療行為が出来ること事態信じられん」

「ちよいと電気を送るだけですよ」

「貴様、今すぐ学会に突き出してやろうか？」

「頭の硬いジジババの小言は勘弁ですね」

「ほう、貴様の弁で行くと私は婆さんなのか？」

「今日はやけに絡みますね」

「喧しい」

シャクシャクと林檎を齧りながら中尉を見る。何時も通りと言えば何時も通りだが、少し顔色が悪いような気がした。

「それで、目的は果たせたのかボーデビツヒ？」

「いや、まだなのだが……何から聞いたものかと」

「どうせ後1週間はここにいるんだ、焦る必要はない」

「そうか、そうだな」

中尉は口角を上げるだけの気障な笑みを浮かべた。目を細くしてそれを見ていた私は、窓に映る自分が微笑んでいることに気が付く。

中尉はこんな私でも受け入れてくれた。それが嬉しいのかもしれない。

くうー、と音が室内に鳴る。安心したから腹の虫がなくなってしまったのだ。

1週間は何も胃に入れていなかったため仕方ない。だが、なんとか間拔けで恥ずかしい気がした。

「つく」

「ふん」

「わ、笑うな中尉」

「はいはい。」

林檎はまだあるけど、食うか？」

差し出された林檎は半熟なのか少し青みがかっていたが、剥かれない今でさえ甘酸っぱい薫りが鼻孔を擦った。

「頂く」

「後は・・・柿があるが、食べられるか？」

初めてみる果物だ。オレンジのような色だが、見た目は林檎に似ている。

「試す」

「織斑先生は？」

「頂こう」

シャリシャリと林檎と柿を剥く中尉を見ながら、私は帰ってきたのだと何故か思えた。

退院したその日の朝。俺は一組のIS授業に参加するためにSHRを早めに切り上げてもらった。

傷はだいぶ良くなり、骨折もギプスが必要ないくらいまで良くな

っている。

ただ無理な治療が祟ったのか、最近は軽い栄養失調気味だ。医者
の話では体を治すために栄養全てを使っているかららしい。おかけ
でいくら食ってもすぐに腹が減る。なのに体重は増えない……。・
・女子に言ったら殺されそうだ。

一組の前に立った俺は中にいる織斑先生の合図を受けて後ろの扉
から入る。どうやら今はラウラの退院と、シャルルの再転入につい
て話していたらしい。

「改めて、シャルロット・デュノアです。よろしく」

女であることを公表したシャルルにクラスは騒ついていて、俺が
入っても気付いたのは数人程度しかない。あんな可愛い男の子が
居ると本気で信じていたのか、コイツらは。

此方に気付いたシャルルが微笑みかけ、ラウラが小さく頷くのに
片手をあげて応える。

一番隅の窓際に寄り掛かりながら一組のSHRが終わるのを待つ。

「それから、今日からボーデビツヒさんも退院して――――」

暇を持て余していた俺は、そういえば、と思い出した。

今朝方だが、退院してきた俺を捕まえて仲良し三人組の毒舌眼鏡

こと佐藤みゆきがいきなり占いを始めた。聞けば最近学園内で流行っているらしく、特に毒舌眼鏡のは当たると評判らしい。

「むむ、むむむ・・・かずーさん。貴方に女難の相が出ていますー！」

「二夏繋がりの女難なら既に認知してる」

そして、それは現在進行形で悪化しているのも知っている。

「鎖状の手相・・・健康に気を付けたほうがよろしいかとー」

「退院したばかりの人間全てが健康なわけないだろ。後、元々体は強くない」

「特に心臓関係だよかずー」

「・・・・・・・・なんで？」

家の家系は確かに心臓や肺に難がある。爺さんや弟がまさにそれだ。まさか俺もそうなるのか？

「恋のキューピッドに射られるからさっ！」

「病院行け。つーか、心臓ならボーデビツヒにしこたまパイルバン

カー打ち込まれたからソレだな」

最初は大した事のない占いだったが、それが今日の運勢になると事情が違ってくる。

「むー、かずーさん。今日の貴方には出逢いがあります！」

「「「「ええっ?!」「」「」」

「それも、かなり身近になる方との出逢いですー。間違いねえちくしょー!」

「「「「嘘お!」「」「」」

「あ、だけど同時に波乱がありますね。これは………っひ、や、夜叉が見えますー!」

新たに始めた水晶占いを携帯片手に聞いていた俺もそれにはビビる。なにせ夜叉と聞いて思い出すのが女、さらにこれから行くのが一組だ。

「あわわわわっ、かずーさんが夜叉に狙われる姿が見えますー!」

「いや、よく見ろ。それは巻き込まれてんじゃないか?」

「かずーさんー!」

「なんだ？」

「何かを選ばなければなりません、即決しなければ酷い目に逢いますよー」

真面目な顔で忠告してくる佐藤だが・・・

「なんだ通常運転じゃまいか」

「流石かずー、歪みねえなっ」

「焦ってそんなしましたー」

「まったくだ」

日常に対して四六時中気を張るほど神経質じゃない。

そんな会話があったと意識を戻すと、何故かううらと一夏がキスしていた。

一瞬の静寂。

誰もがそれに目を見開き、固まる。俺も例外ではない。

「貴様を嫁にする！異論は認めん！」

急過ぎる展開に着いて行けない俺は腕を組みながら空気になると努める。

そういえばミラージュコロイドが開発されつつあると聞いたが、どこの変態が作っているのだろうか。そういえば最近の一夏もミラコロを使っているのか……。いや、なんでもない。疲れてるんだ忘れてくれ。

意識を戻し、教室前方を見る。惚けた一夏と胸を張るラウラがいた。

別に、ラウラが一夏に好意を抱くのは構わない。キスするのも、周りの奴らが奥手過ぎるのもあるが、一夏は鈍いから有効な手段だ。ただ嫁にするという単語だけはダメだ。後で元凶であろうハナを絞めてやる。

「っんな、なななな、なんだよいきなり?!」

「私はお前に惚れた。だから嫁にするのだ!」

「意味分かんねえよ!」

パシユン、と乾いた音がクラスに響く。それは絶叫していた一夏の髪を一房消し飛ばす。

「ほほほ、外してしまいましたわ」

夜叉が突然ISの武器を片手に現れた。夜叉の攻撃であるスターライトMK-3の射撃。

主人公補正発動。一夏には当たらない。

「いーちーかー」

「っひい」

夜叉2が殺意の波動に目覚めて現れた。

夜叉の攻撃。兜割りは避けられ、机を両断するに終わる。

一夏の机が2つになった。学園に18万の損害。

周りの生徒は静かに退避を始める。

しかし一真は逃げ遅れた。仕方なく自製ミラコロを展開。効果はいまひとつだ。

「一夏あーっ！」

「こ、今度はなんだよ?!」

夜叉3が出番忘れないでよねと体全体を使い、蹴破る勢いで礼儀正しく扉を破壊して現れた。

夜叉3の攻撃。烏龍盤打。

一夏の主人公補正が煌めく。

夜叉3の攻撃は外れ、床が粉碎した。学園にさらに6万の損害。

「ゆ、床が」

「一夏」

「た、助けてくれシャルル」

「えっちいのは、ダメだよ」

夜叉4がとっつき片手に現れた。

何故か一夏の尻めがけて攻撃。

男の本能により回避。

一夏の処女は守られ、代わりに黒板が碎けてしまう。学園にさらに12万の損害。

『尻を貸そう』

一真の精神が毒された。一真は気分が悪くなった。
生徒と織斑千冬、山田麻耶が見つめてくる。しかし一真は無視を
決め込んだ。

「ちゅ、中尉」

「どうした？」

いつの間にかやってきたのか目の前にラウラがいた。

ラウラの顔は赤く、モジモジと手を弄っている。最近の彼女はこ
うした表情もするようになった。子の成長を嬉しがる親とはこうい
うものなのだろう。かなり嬉しい。今すぐ抱き締めたいくらいだ。

「その、頼みがある」

「なんだ？」

「わ、私の・・・兄に」

「や、やめ！それは死ぬっ！」

「覚悟ですわ！」

「いいいいちかああああ！」

「往生なさい！」

外野の喧しきで大事な部分がよく聞き取れなかった。ラウラの聲が尻狭みなのもあるが、気分的に悪いのは奴らだ。

「もう一回言ってくれ。よく聞き取れなかった」

「ぎゃー！死ぬ死ぬ死ぬうう！」

「一夏さんの節操無い！」

「首置いてけえっ！」

「動くな！」

「一夏のえっちい！」

「お前ら朝から喧しいわ！
それで、どうした？」

人の怒声も聞こえない5人に諦めてラウラに耳を近付ける。

「私の兄になってくれ！」

なるほど。わからん。

それと耳元で叫ぶな。危うく鼓膜が破れるところだったわ。

「なぜ？」

「だ、駄目なのか？」

「いや、駄目じゃないが……いきなりで混乱してる」

涙目になるラウラを宥めながらそんな伏線があったかと思ひ出す。
アリーナの一件くらいしか思い付かない。

「私は、産まれが産まれだから兄妹がいらない。だから憧れがあるんだ」

「んー、まあ迷惑じゃないから構わないぞ」

「本当か！」

「ああ——」

「た、助けてくれ！」

「煩い」

話に水を注そうとする一夏に対してナインボールを展開。A I Cで窒素を固定し不可視の壁を作る。

「もう遅いぞ！もう、中尉は私の兄だからな！」

「はいはい」

子供のようなキラキラした目で見上げるラウラを冷たい手で撫でる。それが嬉しいのか彼女は俺に抱き付くと子猫のように頭をすり付けて——

「ふふ、ふふふ」

（なん・・・だっ?！）

犬の尻尾のように髪の毛を振った。

（このアホ毛、動くぞ！）

「これから宜しく頼むぞ兄よ！」

「・・・・・・はい、はい」

今回の没シーン。

私は林檎の果汁でベタつく指を舐めていた。

「しかし、今の医療技術は偉大ですね。アレだけの怪我がたった1週間で治りかかるとは」

「よし。今から医者と研究者を連れてきてやる」

「生徒を売るなよ不良教師」「貴様を売ればどれだけのビールが買えるか楽しみだ」

「あ、俺ってワインか日本酒派なんで」

「未成年が酒を飲むな馬鹿者」

「あれ、言いませんでしたっけ？

俺、成人してますよ」

「つまらん嘘をつくな」

2人の会話を余所に舐めた指を見る。唾液で汚れた指が照りついていた。

唾液で思い出した。

「中尉！」

「大声出すな。お隣さんに迷惑だ」

「そんなことはいい！今すぐ裸になれ！」

「「」」

「どうした！早くISを解除して裸にならんか！」

「……………俺は、どこで育て方を間違えたかな母さん」

「貴様がかまってやらないからだ。あと母さん言うな」

「早く脱げといっている！

あ、こら！なぜ逆に展開するのだ！」

「なにこのゲルマンロリ。いきなり脱げとか俺を驚き殺す気？」

「この！この！早く脱ーげー！」

「ああ、私のラウラが汚れていく」

「おっと、その刀はなんですか不良教師」

「貴様を殺してラウラを正す」

「やめろ」

「はーやーくー、脱げー！」

「いや、まず理由を説明しろ」

「中尉を舐めるからだ！」

「「」」

「中尉の体を舐めるためだ！」

「千冬、先生……冗談抜きで三者面談をお願いします」

「ああ、ああ、わかった。わかったから自分を責めるな犀川」

「早く舐めさせろ！」

「止めろ。それ以上騒いで俺をどうする——」

「か、一真君・・・？」

（拾った命を全力投球する俺カッコイイ）

それから見舞いに來た高槻中將も合わせて事情を説明する。

「医療用ナノマシン？」

「うむ。私の唾液には医療用ナノマシンが含まれているのだ」

「虫歯と口内炎とは無縁なんだな、お前。でも歯は磨けよ」

「しかし、それと舐めるのどう関係するのだ？」

「私が舐めれば中尉の傷がさらに早く治ります！」

「力説すんなアホ」

「いたっ」

額を突かれた。嫌な気はしないが、少し痛い。

「それに、一真君の傷はもう大半が治っていますよ。後は骨折くらいですか」

確かに、医療用ポッドに入ったのなら真っ先に治るのは外傷だ。内臓のダメージや骨のダメージを治すのに直接舐めるなど傷を増やすだけ。

どうしたものか。

「ま、どうせ時間が解決するんだ。気持ちだけ受け取っておくよ」

雑誌を広げる中尉を見上げていた私はふと雑誌に目が着く。よく中尉のしている雑誌には熱愛報道とあり、それであることを思いついた。

「そうだ！中尉、キスするぞ！」

「ブホッ」

「「ゴフッ」」

三者三様にそれぞれ口に使っていた物を吹き出す。汚いな。

「は？いや、はあ？」

「私がキスすれば医療用ナノマシンが中尉の中に入る。そうすれば内部のダメージとて回復するはず・・・我ながら完璧だ!」

「医療用ポッドに入りすぎて頭までカビたか」

「さあ、キスするぞ中尉!」

「なにドヤ顔でとんでもないこと口にしてやがる」

「中尉のためだ!」

「ラウラ、少し落ち着け。

女がそんな簡単に唇を許すな」

「中尉なら本望です!」

「ラウラちゃん。一真君はもう治りかけですし、そこまでする必要はないんですよ」

「だが治りがさらに早くなるならするべきだ!

さあ、キスするぞ中尉!」

「だからなに言っただゲルマンロリが。たかが唾液に含まれる少量の医療用ナノマシンでなに治すんだよ」

「なら私の唾液を大量に飲めば大丈夫だ問題ない」

「大丈夫じゃない問題しかない」

「何処がだ?」

「まず、そんな大量の唾液をどう準備するか。次にd1単位に含まれるナノマシン量は。ナノマシンの最低有効個数は。また接種に伴う人体の影響は」

「そんなことか」

（（いい予感はない））

「大丈夫だ！何故ならば私のナノマシンなのだから！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「すいません、急患です・・・・・・・・え、容態ですか？
頭がやられています。いえ外傷じゃなく、主に考えが」

何故か憐れむような目で見られた。失礼だ。

「さあ、私の唾液を飲め！」

その日、私は初めて正座をした。

顔を赤くしながら怒り狂う教官と中将は本当に恐ろしく、頼みの中尉さえ私を怒鳴った。

私の何がいけないのだ？

「頭だ」

中尉は酷い人だ。

事件その14 「やっとでトーナメント編が終わるぜヒャッハーだからさあ大変」

一真

「酒がうめえ、酒がうめえぞこんちくしょう！（アタリメガツガツ）」

ラウラ

「店主、ビールのお代わりだ。勿論大ジョッキ、いやむしろピッチャーでくれ！（ソーセージガツガツ）」

H・1

「飲み過ぎないでくださいよお客さん（エプロン着用）」

一真

「だっはははは！こんなめでたい日に飲み過ぎないでいつ酔い潰れろってんだ！（葡萄ジュースガブガブ）」

ラウラ

「そうだそうだ！とうとう中尉を兄と呼べるのだ。今日は無礼講だ！
（麦で作った液体一气）」

一夏

「か、カオスだ」

箒

「カオス過ぎる」

花子

「あ、私もビールとミックスナッツくれー」

一夏&箒

「お前もか！」

主人公&ヒロイン お酒は二十歳になるまで隠れて飲め

一真

「酒が、ウマイ（葡萄ジュースですの☆）」

一夏

「あー、とりあえず行こうか。」

まずはトーナメントが終了したな。勝敗は決まらなかったけど、これである程度の重要なイベントは残すところ1つか」

箒

「銀の福音だな」

花子

「そして水着回」

一夏

「やっぱり鉄板——」

一真

「鬱展開」

一同

「はあっ?!」

一真

「I Sを優先したんだ。次はA C編の為の伏線回が増えてくぞ」

ラウラ

「そうなるかどうかなのだ?」

一真

「各キャラを掘り下げが始まる」

ヒロイン

「ヒッツハー!」

一真

「俺が不幸になる」

一夏

「一真エ」

一真

「そして一夏のがもげる」

一夏

「もげ・・・・・・・・え?」

一真

「そんな先のことは置いといて、補足に行くか」

箒

「なら時系列順に行きましょう」

ラウラ

「中尉は犬を飼っていたのか？」

一真

「過去形になるがいたな」

ラウラ

「どんな犬なのだ？」

一真

「こんな犬（犬笛使用）」

首領チャン

「きゃんきゃん（呼ばれて飛び出て）」

箒

「か、可愛い」

花子

「おー、名前から思い付かぬ小型犬。しかも可愛い」

ラウラ

「さ、触っても大丈夫——」

首領チャン

「キャンキャンキャン（残像だ）」

ラウラ

「（・ω・）」

一真

「悪いな。家族以外は慣れてないんだ（頭撫で撫で）」

首領チャン

「クウーン（俺に触るな）」

一夏

「確かに俺達が近付くと逃げるな」

一真

「臆病だからな」

花子

「やーん、可愛ーいー♪」

ねえねえ、この子ってチワワ?!」

箒

「いや、チャウチャウじゃないのか?」

ラウラ

「タヌキじゃないのか?」

一夏

「いや、犬だって」

一真

「ポメラニアんだ」

首領チャン

「キャン（血統書もあるぜよ）」

一夏

「え？でもポメってこう、もっとモコモコしてないか？」

一真

「まあ、やり方によるわな。ウチは毎日ブラッシングしてるし、半年に一度丸刈りにするからそのせいかな」

一同

「丸刈り……」

首領チャン

「きゃん！（膝上ゴロゴロ）」

一真

「俺もポメラしくはないと思うが、10年近くいると犬種とかどうでもよくなるぞ。まあ風呂嫌いとかカンボーな所はどうにかしたいがな」

首領チャン

「キャン、キャンキャンキャン（お風呂いやー）」

ラウラ

「しかし何故兄は犬の話聞いて泣いたのだ？なにやら兄が関わっているようだが」

一真

「本編に出て来る。タイミング的には臨海学校辺りだな」

主人公&ヒロイン 犬と戯れ中・・・

ラウラ

「そういえばまた新たに武器が出て来たな」

一真

「IS用暴徒鎮圧弾のことか？」

箒

「あれは何が起こったのか分からなかったな」

花子

「暫く気持ち悪くて動けなかった」

一夏

「非殺傷らしいけど、どんな武装なんだ？」

一真

「原理はスタングレネードと変わらない。強力な光と音で一時的に相手を無力化させるだけだ。

IS用と言うとおり、ISに有効になるよう威力は調整されている。間違っても人には使えないな」

ラウラ

「乖離剤とはまた違った武装だな」

一真

「ISはPICや絶対防衛の判定のせいで常時多大な情報を処理している。だから外部から処理落ちする程の情報を流せば操縦者は情報処理が出来ずに落ちる」

一夏

「対処法は？」

一真

「全力で外部情報を切るしかない。もしくはすぐに離れるかだ」

一夏

「意外に簡単なんだな」

一真

「まあ、俺だったらその間にグレードぶちこむけどな」

一夏

「一気に難易度がったな」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

首領ちゃん

「ガツガツガツガツ（煮干しがうめえ）」

一夏

「煮干しが好きとは」

一真

「健康志向なんだろう。ほれ犬。スルメ食うか？」

首領チャン

「食う（キャンキャンキャン）」

一同

「イヤアアアシャベツタアアツツツ！」

一真

「某ハンバーガーなCMの子供のテンションは異常」

箒

「こほん。そういえば、シュバルツェアレーゲンが二次移行しましたね」

一真

「まずはラウラの二次移行だが、厳密には二次移行じゃありません」

一夏

「はあ?!」

箒

「そんな馬鹿な！」

花子

「そーなのかー」

ラウラ

「そうなのか？」

一真

「前半2人、喧しい。」

まずラウラのシュバルツエアレーゲンだけど、まったくの別物になったと考えていい。ISの二次移行というのは使用者を基に最適化するのに対し、今回の機体を作り変えるのが目的だから二次移行とは全然違う。今回のACになったと考えていい。

ISは進化、ACは退化と言える」

一夏

「退化って、弱くなったのか？」

一真

「全然。むしろヒロインの中では最強に近いね。謎ジェネレータ積み、短距離間での移動はナインボールの次に早いし。攻撃力なんて甲龍も泣いて謝る鬼畜さだ。しかしながら出力は察してもらえベル」

箒

「それは進化ではないのですか？」

一真

「進化の対義語として退化があるわけじゃない。退化も立派な変化で、進化と同等の価値を持つ。進化も退化も向きが違っただけでベクトルは同じだ。」

進化と退化はイコールだ。これらの対義語は無変化、つまり変わらないことだ」

一夏

「なんとなく分かるような」

箒

「言い包められたような」

花子

「似た者夫婦だねえ、かずー」

一真

「簡単に例を上げるなら、人間が直立したまま歩けるのは進化の証だ。そして人の指が猿より短いのは退化の証だ」

ラウラ

「なら私のシュバルツレーゲンはどう退化したのだ？」

一真

「兵器になった。しかもより純粋な兵器にな」

ラウラ

「ISは元々が兵器ではないか」

一真

「ISとACは兵器だ。だが明確な違いとしてISは進化するが、好きに弄れない。ACは進化を捨てる代わりにパーツの換装が出来る事で高い凡庸性を得ることになる。」

さらにISは専用のエネルギーが必要だが、ACは電力だ。ジェネ

レータで発電もするから他にも流用可能だ。

他にはISはコアさえあればいいが、ACは専用の搭乗者しか扱えない」

花子

「んー、つまりシュバルツレーゲンは完全にラウにゃんしか使えないってこと?」

一真

「いや、そういうわけじゃない。

ACを使うには条件があり、それさえクリアすればAC乗りは誰でも使えるようになる。それこそ男でもな。

ただし、男でも使えるとは言ったが現状ISは女しか使えない。AC化したISなら問題ないが、ISをAC化させるには女じゃなきゃ無理だ」

ラウラ

「ならば兄も使えるのか?」

一真

「残念ながら俺はナインボール以外は無理だ。やりようはあるが、だったらナインボールだけ使ったほうが効率がいい」

箒

「……ちなみに、ISとACはどちらが強いんですか?」

一真

「AC」

箒

「その理由は？」

一真

「機動性と装甲、さらにはジェネレータの違いが大きい。流石に三次移行したような厨機体は厳しいが、そこいらのISよりはACの強いし、凡庸性は段違いだ」

箒

「わ、私にも使えるんですか？」

一真

「無理。」

ちなみに一夏も無理だし、セシリア、凰、デュノアも無理だ。いや一夏は可能性くらいあるが・・・それも天文学的くらいだ。さらにACになると弱体化しかないな」

花子

「なんで？」

一真

「ACになったとたん唯一仕様が発言しなくなる」

一同

「は？」

一真

「これが大きなデメリットだろうな。ACは進化を捨てたんだ。進化により得られる唯一仕様が使えるわけないだろ。もし使えたらAC無双になるわ」

ラウラ

「つまり、私は唯一仕様が使えなくなったのか？」

一真

「ああ」

ラウラ

「（；ω；、）」

一夏

「な、泣くなよラウラ！」

箒

「先輩！」

花子

「いーけないんだいーけないんだー、せーんせいに言ってやろう！」

一真

「ガキかお前」

花子

「ちなみに、ここで言う先生とは織斑千冬先生と高槻秋葉先生である」

一真

「」

秋葉

「一真君が女の子を泣かせたと聞いて」

千冬

「ラウラを泣かせたと聞いて」

一真

「＼（＾Ｏ＾）／」

主人公＆ヒロイン 断罪中ですのっ!!

一真

「ACには確かに、唯一仕様は発現しないが……代わりの物はあるんで……それで許してください」

ラウラ

「本当か？（グズグズ）」

一真

「これ以上殺されたくないため嘘は言わない」

ラウラ

「なら信じる」

一夏

「さて、次はナインボールだな」

花子

「正直色が変わって速くなった程度しか分からない。赤く塗れば速くなるわけじゃないよ、かずー。だったらズダに乗りな」

一真

「黙れハナ。ズダカッコいいじゃねえか。オツゴも同様。

ナインボールの二次移行だが、変更点としては以下の通りになる

- ・出力増大
- ・装甲強化
- ・武装強化
- ・システム強化

つまり全てが数段階上がった」

一夏

「なんという俺T u e e e e ! 機体」

一真

「中身は変わらないんですの」

花子

「今までと変わらない。つまりかずーがまた死にかける」

一真

「中身が中身だからな」

ラウラ

「しかしそうなるのならボールのカラサワや月光はどうする?」

一真

「使わない。アレは出力調整が難しいからな……絞れば使えるが、調整出来るまでは今までと通りにマシンガンとミサイル、さらにH V Mだ」

一夏

「あれ……おかしくないか?」

一真

「なんだ?」

一夏

「なんでナインボールが二次移行してんだ? A Cは進化しないんじゃないのか?」

一真

「しないな」

箒

「言われてみれば・・・」

花子

「教えてかずー」

一真

「ISの二次移行とは違うからな。ナインボールは。詳しくは物語が進めば分かってくる」

ラウラ

「そうなのか」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

一夏

「一真あー、AMBCって何？」

箒

「聞いていると技術のようだが」

一真

「簡単に言うとスラスタースターやブースターを使わずに旋回する技術だ」

一夏

「無反動旋回みたいなもんか？」

一真

「無反動旋回よりも難易度は段違いだけだな。」

AMBCってのは宇宙空間などの無重力下における姿勢制御のことだ。四肢を一定以上の力で動かす事で旋回に数秒もかけない技術だ」

一夏

「普通に旋回すれば良くないか？」

一真

「え、ガス欠で定評のある一夏さんは推進剤的なガス欠もしたいの？人より大きい程度のISで推進剤が切れないのってICあるからだよ？そんなバカスカ推進剤使えるなんて本気で考えてるの？もしか

して外でも試合が10分制限なんて考えてない？」

一夏

「う、うう、うわああああんっ！（マジ泣き）」

一真

「ああ、癒される」

箒

「悪趣味ですよ先輩！」

花子

「でも事実なんだよね」

ラウラ

「うむ。特に一夏は瞬間加速等を多様するから不必要的推進剤の消費は抑えなくてはならないからな」

一夏

「うう………ならAMBCのやり方教えてくれよ！」

花子

「止めといたほうがいいよいちー」

一夏

「なんで？」

花子

「いや、両腕を逆関節にする斬新な機構になるから」

一夏&箒

「は？」

一真

「AMBCってのは元々はガンダムが元ネタの技術なんだ。昔と作画の手間が多いのと、最近なら製作に時間や手間がかかるから1週間スパンのアニメでは不向きなんだ。まともにAMBC使ったのってIGLOかUCくらいか……」

ちなみにAMBCは腕を100G以上振り回してやるのが普通。ISなら……まあ、20〜30Gくらいかな？」

一夏

「20Gってどれくらい重いんだ？」

ラウラ

「一夏、Gは重さではないぞ」

一夏

「え？」

箒

「そうだぞ、一夏。Gとはジャイアントの略——」

一真

「もう、喋るな………喋らなくていいんだ。お前らの頭が可哀想——ううっ。」

Gってのは重力加速度だ。箒はまだしも、一夏………中学の理科で習わなかったのか？」

一夏

「いや、その・・・ハハハ」

一真

「伏線か。」

ちなみにGは重さじゃないからな。

Gとは物体にかかる力で、質量10kgの物体は1G下で10kg、2G下では20kg、3G下では30kgになる。

20〜30Gとなると、腕が約3kgとするなら60〜90kgの力が掛かることになる。下手したら折れるのも納得する数字だな」

一夏&箒

「」

ラウラ

「ちなみにISの推進剤は国によってマチマチだ。中にはジェットエンジンの燃料も使用している。

これもISがあまり戦場に向かない理由だな」

花子

「アフターバーナー使って数も持たないからねえ。長期戦を前提とする戦場には不向きだよな」

一真

「後は燃料が馬鹿高いくらいか」

主人公＆ヒロイン 勉強中・・・

花子

「そーいやかずーとラウにゃんってずっと会話してたけど、アレは相互意識干渉でいいのかい？」

一真

「別物だな」

花子

「どう違うのさ」

一真

「相互意識干渉は特定条件下で発生するもので、潜在意識下で意志疎通するもんだ。だから話すこと全てが本音や願望、見える物だと記憶になる。」

対して俺とラウラの間で起こったのは会話だけ。勿論感情や記憶も流れるが強制ではない」

箒

「つまり、相互意識干渉は詳しく分かり、先輩とラウラの間で起こった現象は曖昧ということですか？」

一真

「説明下手な上にめんどくさがりですまんな。」

相互意識干渉と同じくらい鮮明に見れるぞ。ただし相手の同意がいるだけ」

一夏

「つまりどういうことだ？」

一真

「IS 同士の情報交換ネットワークの影響から、操縦者同士の波長が合うことで特殊な相互意識干渉を行うことができる。」

要するに素っ裸で二人つきりでおしゃべりできる不思議空間でFA。要は素敵に無敵なOO的対話空間。

対する俺らの複数人OKなEVAやレーザーフォンみたいな厨二な対話空間だ。

裸になる、ならないは本人の意志でどうにでもなるからいいよね」

花子

「なるほどなー。だからリンリンやセシリンはかずーの記憶だけしか見れなかったんだ」

一真

「一々真っ裸で話したらいつか殺されるわ」

一夏

「それもそうだな」

ラウラ

「そうか、だから私は兄と話せても姿は見えなかったのか」

箒

「それは流石に嫌だな」

一真

「つまり、一夏はラウラの裸を見たことになる！」

一同

「な、なんだってー！」

千冬

「一夏、久々に姉弟水入らずで話そうか」

一夏

「ま、待ってくれ千冬姉！」

一真

「ああ、癒されるわ」

花子

「鬼畜だね、かずー」

主人公＆ヒロイン ○○鑑賞中・・・

首領ちゃん

「キャン！（俺がガンダムだ！）」

一真

「よし、対話の代償はどうだったヒーロー？」

一夏

「お前だって裸見てるくせに」

一真

「俺は事故、お前は運命」

ラウラ

「なるほど、だから兄は主人公にしては不遇なのだな」

一真

「漫画版が公式だ！」

花子

「アンタは俺が討つ！今日、ここで！」

ラウラ

「シンとルナマリアが真の意味で結婚したことを心から祝福する」

箒

「スパロボZや無双では中々な主役っぷりだ。特にスパロボならステラ生存やレイ生存ルートもある」

一夏

「スパロボの魅力だよな。」

次、行こうぜ」

一真

「なんで一夏お兄さんはVTシステムに怒ってるんですかあ？」

一夏

「それやめろ。気持ち悪い。」

VTシステムか……やっぱり千冬姉を真似されたのが一番かな。間違った力の使い方に千冬姉を使われるのはやっぱり許せないよ」

箒

「間違った力？」

一夏

「力はさ、しっかりとした意志が必要なんだ。ただ力が欲しい。だから千冬姉を真似る。それは千冬姉を物扱いしてるし、千冬姉を否定してる」

ラウラ

「そんなつもりは」

一夏

「わかってる。でも許せないんだ。

俺は千冬姉から力の使い方を学んだ。刀は振るもの……決して振るわれてはいけない。だから俺は力に振るわれる千冬姉の姿に怒りを覚えたんだ」

花子

「話戻して悪いんだけどさ。ラウにゃんのACの見た目ってどんなの？」

一真

「OMEL製ライールタイプ。後はggr」

一夏

「ググれってお前」

ラウラ

「グーグル先生は偉大だ」

箒

「ラウラまで」

花子

「かずーのスリーサイズやパンツの色が分からない」

一真

「ググルナカスggrnks。あ、警察ですか？」

花子

「照れんなよー」

一真

「ウゼエ」

ラウラ

「しかし、ライールか……私はこれから強くなるにはどうすればいいのだ？」

一真

「まずはパーツを製造、次にACを振り回すだけの体作りだな。ラウラは境界の瞳があるから伸び白は俺よりある」

ラウラ

「つまり努力次第、か」

一真

「後は武装面だが、こればかりはガレージが必要になるな」

ラウラ

「私はビグ・ラングがいい！パイロットは勿論マイだ！」

一真

「贅沢言うんじゃない！どこにあんなAFみたいな弩級MA作る予算があるんですか！」

ラウラ

「なら、せめて、マイのその後が知りたい！」

一真

「それはお前の中で語られてるはずだ、ラウラ……俺の中の技術屋はモニクを嫁にして辺境のコロニーで平和に過ごしてたよ」

一夏

「ついてけない」

首領チャン

「クウ〜ン？（イグルー見るか？）」

一真

「あれだけの死亡フラグ建てたら死ぬのがガンダムなんだよなあ」

主人公&ヒロイン イグルー鑑賞中・・・

花子

「そーいや、ラウにゃんの唾液に医療用ナノマシンが入ってるってマジ？」

ラウラ

「事実だ」

花子

「つまりラウにゃんにペロペロしてもらえれば傷が治るのかっ!」

一真

「何に気付いてんだ変態。ラウラに何かしたら殺すぞ」

一夏

(シスコンだ)

箒

(ああ、シスコンだ)

花子

「うわー、うわー、うわー! 私気付いちゃったよ!」

一真

「いい予感ではないが聞いてやる。どうした?」

花子

「つまりラウにゃんは包丁で指を切った際にナチュラルに指チュパ出来るんだ!」

一夏

「・・・」

箒

「・・・」

ラウラ

「なあ、兄よ」

一真

「あんなの見ちゃいけません。っていうか認識しちゃいけません」

首領チャン

「ハッハッハッ（若い、若過ぎるな少年少女）」

一夏&箒

「ナンダッテーッ」

花子

「いいなーいいなー！私にも医療用ナノマシンあるんらかずーに指チュパ出来るのに！」

一真

「あってもさせないから根底から無理だな」

箒

「つく、キスだけでなくそれまで取られてしまったら……..
先輩！私が医療用ナノマシンを得るにはどうすればいいんですか！」

一真

「落ち着けサムライ」

一夏

「指チュパ……..悪くないかも」

一真

「ドラえもんの手よろしくな指なしになりたくなきゃシャツキリしろ」

ラウラ

「皆は何を騒いでいるんだ？」

首領チャン

「キャン（嬢ちゃんはまだ知らなくていい）」

一真

「それじゃナノマシンについて語るか……..」

まずはサイズだが、ナノってのは十億分の一Mだ。ちなみにサイズはMが基本だからな。建築や機械関係ではサイズはmmで表す。これ基本な。

さて、ナノマシンだが人間の細胞や細菌より一回り小さい精密機械だ」

ラウラ

「ふむ、間違いないな」

一真

「百数年前、つまり2012年にはまだ完成していないが未来だから何でも有りだ。」

さて、ナノマシンと言えどどんな事が出来る？」

一夏

「やっぱり体を作り変えるとか？」

箒

「後は体を癒す？」

花子

「ARMSー！」

シュバルツェアレーゲン&ジャヴァオック

『力が欲しいか！』

一真

「イエス、サー！」

しかし、炭素生命体と珪素生命体のハイブリッドはお帰りください。さてナノマシンⅡ体を作り変えるだが、お前らが考えるようなのは無理だぞ。特に体を作り変えるだが、ナノマシンでもエネルギー保存の法則は越えられない。それに元素の変成も難しいから材料を用意しなきゃいけない。まあ、用意しても作り変えるのに大量の時間と熱とカロリーが必要になるがな」

一夏

「難しいんだな」

一真

「一瞬で作り変えたら体が持たないからな。
ちなみにナノマシンの種類は情報処理、医療、工学の三種類しかない」

箒

「少ないんですね」

一真

「さらにナノマシンの扱いは国家規模、それこそIS並に慎重な扱いになっている。民間に普及しないのもそれが理由だ」

一夏

「なんでだ？」

箒

「ナノマシンが普及すれば難病も治療出来るのでは？」

花子

「犯罪に使われるからだよ」

一夏

「犯罪？」

花子

「ナノマシンだって機械だからね。体を破壊するようプログラミングして暗殺したい相手に食わせたら簡単に殺せるうえに、無味無臭で目にはまず見えない。一度入ったらまず摘出は無理だし、目的が達成したら体外に出るようすれば証拠も残らない。簡単に完全犯罪が可能になるから世界規模で規制してるのさ」

一真

「さらにナノマシンが投入時にエラーを起こしたら人間はまず助からない。下手すれば肉の塊にまで作り変えられた上に無理矢理生かされる可能性だってある。」

後はナノマシンが増殖し過ぎた場合、投与された人間を中心にナノマシンの塊が出来上がる。グリーン・グーっていうだが、もしグリーン・グーが起きれば数時間で地球上の全てが分解されてグリーン・グーが出来上がる」

一夏

「マジかよ……………」

一真

「勿論、これは数多ある可能性の一だ。もし仮にグリーン・グーが起きるなら地球が数十億もあり続ける訳が無い」

箒

「何故ですか？そんな前から危険な存在がいたのですか？」

一真

「バクテリアだ。」

ナノマシンとバクテリアは似ている。もしグリーン・グーが起きるといいうなら、バクテリアによるグリーン・グーが形成されてるはずだからな」

ラウラ

「私は大丈夫なのか？」

一真

「定期的な検診と、一応カウンタープログラムを組んだナノマシン

を用意してれば問題ない。後はナノマシンが増殖と自滅を繰り返すようにすれば最悪の可能性は下がる」

ラウラ

「なるほど」

一真

「そういやお前って二種類のナノマシン入れてるんだったか」

ラウラ

「いや、ナノマシン精製用ナノマシンがいるから三種類だ」

一真

「あー、また勿体ない事を」

ラウラ

「なぜだ？」

一真

「人間の体の中は有限だからな。ナノマシンの最大容量も決まっている。だからナノマシンは少なければ少ないほど効果が上がる」

ラウラ

「なるほど」

今回の舞台裏はここまでとなります。

事件その15 「新たな敵はチートさんだからさあ大変」 (前書き)

この小説は太陽の手を持った少年が世界を舞台にパンを作る物語。

パンを食べるだけで過去に遡ったり、埴輪になったり、海拔上昇した島を浮かすことに「なんやて!」と言える方のみお進みください。

それ以外の方は大麻ジャパンを食べてタイムボカンごっこをしながら昭和を満喫してください。

事件その15 「新たな敵はチートさんだからさあ大変」

トーナメントが終わってから数週間。学園には平和が訪れていた。
とある3人を除いて・・・

「アイツら、大丈夫かな？」

「一真さん達ですか・・・」

昼間の学食はいつものように賑やかだったが、俺達の周りはやけに静かに感じた。たかが3人居ないだけなのに、嫌に周りの音が聞こえる。

「ラウラはトーナメントの件の追及の為に本国に送還。

デュノアは性別詐称のため国連からの尋問のため本国に送還。

先輩は・・・」

「軍の上層部からの要請で一時休学、か」

透き通った黄色いスープを覗きながら憂いた顔を鈴はする。周りも似たようなものだ。誰も彼もが食事に手を着けていない。こんな時に食欲があるのも可笑しかもしれないが、食わなければ俺達が倒れてしまう。

「大丈夫さ！アイツらは帰ってくる！」

「しかし」

「俺を信じろよ、箒。アイツは帰ってくる。
それにアイツらが悪いわけじゃないんだしさ」

「そう、ですわね」

「確かに、そうよね」

そういつて少しずつ箸をつけていくが、それでも食欲はあまりなかった。

3人がいなくなって既に二週間が経つ。

無数のコードにより体を繋がれた私はジッと天井を見上げていた。染み一つ無い天井を様々な機器が埋め尽くしている。それらを操作しながら研究者はデータを記録していく。

「ふむ。気分は如何かな、中佐？」

「最悪だ」

中年の研究者に対してバサリと言い放つ。

この一週間、私はこの研究所に籠もりっぱなしだ。

当初、VTシステムの責任追及のために本国に帰還した私は三日間も国連の人間に尋問を受けた。

やれVTシステムはどうした。

やれアレは君の意志なのか。

やれ本国は知らないと言っている。

まったく、くだらない。三日間の尋問をする必要が私には分からない。

「今日の検査は終了しました。起きて大丈夫ですよ、中佐」

（調査の間違いだろう）

無機質な声の研究者に従い起き上がる。ずっと寝ていたせいか体が固い。

壁に掛けてある患者服に腕を通しながら検査室を後にする。窓のない廊下を歩いていると椅子に座っていたクラリツサがいた。

「お疲れさまです、隊長」

「待っていなくても良かったのだぞ」

「いえ、何処に鼠がいるともわかりません故に」

「そうか。感謝する、クラリツサ」

「っは」

敬礼するクラリッサの横を通り過ぎてエレベーターへ向かう。

遅れて着いてくるクラリッサに予定を聞きながら学園の事を考える。もう、二週間になる。

「今日の予定は全て終了しました。謹慎も解かれていますので、今日は隊舎でお休みください」

（嫁は何をしているのだろうか・・・？）

「また、明日からは中佐のISのテストがあります。その後に会議、次いで身体検査です」

（聞けば兄も軍に呼び出されたと聞く。無事だといいが）

「中佐？」

「・・・・・・・・すまない。考え事をしていた」

「IS学園のこと、ですか？」

「ああ。嫁や兄はどうしているのか、とな」

エレベーターを降りて更衣室へ迎う。半日ぶりの外は既に暗く、

遠くでは民家の光がよく見える。

「織斑一夏についてはわかりませんが、犀川一真についてならば情報があります」

「なにっ?！」

部下の思わぬ答えに振り返る。クラリツサは私の声に驚いたのか目を大きく開いていた。

「兄は、兄は今どうしているのだ!」

「お、落ち着いてください中佐」

「落ち着いていられるか! 兄が、家族がどうなっているのか気になるのは当たり前だ!」

「機密に関わるので続きは車内で」

「っ、分かった!」

焦らされたような気がした私は苛立ちながら更衣室へ駆け込む。

袂を開けるようにロッカーから軍服を引き摺りだすと着ながら外へでようとする。

『裸で出歩くな!』

「っ?!」

ノブに手をかけた瞬間に兄の言葉が蘇る。

冷水をかけられたかのように落ち着いた頭に小さく笑いながらいそいそと服を着る。

身嗜みが整ったことに内心で兄に自慢気にどうだと言いながら外に出る。入る時と違って落ち着き払った私にクラリツサが驚いた。その顔が可笑しくてクスリと笑ってしまう。

「さっきはすまなかった、クラリツサ。車へ向かおう」

「っは」

クラリツサに施されて施設の駐車場に着いた私は彼女の車に乗り込む。微かに香水の匂いがした。どうやらクラリツサは存外に女らしいと初めて知った。これも兄達のおかげかだ。

車内に入った彼女は小さなハンディで車内を隈無く調べる。

「……盗聴器の類はないようです」

「ふん。外まで監視されるのはたまらんな」

「仕方ありません」

車を出したクラリッサは暫く辺りを気にしながら車道を走る。途中で思い出したかのように音楽をかけた。聞き覚えのある曲だった。

「先程の件ですが、諜報機関からの情報です。

つい五日前に犀川一真が中央陸自隊舎から搬送されるのが確認されています。行き先は静岡の日本IS研究所です」

「兄は、それまで何を？」

「尋問、と表向きには言っておりますが様々な怪我が目立つ事から私刑や拷問の類があった可能性があります。以前から隊舎の一角で男の怒声が響いていたことから確実かと」

「下衆が………！」

会ったことのない兄の上官を殴るイメージを浮かべる。少しは胸がスツとするが、それでも少し物足りない気がした。

「搬送された犀川一真はすぐに研究所の医療施設に搬送、翌日には退院しています。

それからは国連の人間と接触しています。恐らく二次移行の際の声に関するかと」

「ん・・・国連は何を尋問したんだ？」

「恐らくは二次移行時の声ではないかと？」

「声程度で」

「しかし、VTシステムを解除し二次移行した原因ならば疑われもします。VTシステムは設定した者が止めるか、エネルギー切れを起こすまで止まりませんので」

周りの景色が次第に賑やかになるのを横目に携帯の画面を開く。
そこには一夏達と一緒に食事を取っていた時の写真が待ち受けにされている。

隊舎につくまで約20分。意外に早かったと思いながら車を後にする。

「皆は元気か？」

「っは。全員が心身共に健康です」

「そうか」

隊舎に入ると中は無法地帯だった。なんというか、兄がいたら悲鳴か怒声を上げているかもしれない。

あちこちに散らかる銃気の弾薬、積まれた雑誌、乱雑に籠に詰め

込まれた下着の山。前までは普通の光景が今はおかしいと感じる。

「以前まではこれが普通だったのだがな」

「は？」

「なに、兄は偉大だと思ってな」

ゴミゴミした隊舎を一望したラウラは決心したのか1つ頷く。

「クラリツサ、隊舎の人間全てを集めろ」

「隊舎の人間全てですか？」

「ああ。ここに住む者全てだ」

首を傾げるクラリツサはそのまま近くにいた人間も使って人を集めていく。元々多くはない住人は10分もせずにもロビーに集まった。

下着姿の者。

裸の者。

トレーニングウェアの者。

軍服の者。

様々だが、何か衣類を身に纏っているのが3人しかいないとなると問題だ。

「これより、隊舎の清掃を行う！」

「え？」

「え？」

「ん・・・え？」

「返事はどうした貴様ら！」

『り、了解！』

クラリツサの怒声に萎縮した隊員が小さな物から片付けていく。私もその輪の中に入り、まずは脱ぎ散らかされた衣服を集めていく。

雑誌や漫画を一つに纏め、テーブルの上に置く。何気なく一冊手に取り、開くと中には独和のための訳が書かれていた。

自分の買った物がこのように隊の為になっていると思うと嬉しくなる。

（隊長が笑って・・・）

(可愛い。隊長可愛い)

(ラウラたんラウラたん、ハアハアハアうつ…………ふう)

(おい、お前らこの萌えないゴミをどうにかしろ)

(私は何処から来て、何処へ向かうのだろうか…………)

(ゴミだな)

(ああ、ゴミだ)

(賢者という名のゴミだ)

隊員と片付けを初めて1時間。私やクラリッサが指示しながら続けた片付けによりロビーは初めてらしくなったような気がする。

ゴミ一つない廊下に広くなった談話スペースは、以前までのだらしない雰囲気無くし、気持ちをリラックスさせる雰囲気へ変わる。

カウンター付きのキッチンは洗い物やゴミを片付けただけで広くなり、今ならば隊員全員が並んでも余裕が出来る。以前はギュウギュウに押し詰めていたというのに。

「片付け終わりました、隊長！」

「ああ、気分がいいな」

皆、訓練の疲れがある中でよくやってくれた。

「それにしても、いきなり片付けとは。何か理由があるのですか？」

「私の兄がそうなのだ。向こうで隊舎のような生活をしていたら怒られてな。

人前で裸でウロつくな、脱いだ物は籠に纏めろ、使ったら片付けろとな」

「兄、ですか。隊長に兄がいるなど初耳です」

「血は繋がっていない。私が頼んだ。自慢の兄だ」

携帯を開いて待ち受けを見せる。

隊員全員が私から携帯を奪うと待ち受けを穴が開くほどに見つめている。クラリッサまでその輪の中に入ったのは正直驚いている。

「こちらの少年が織斑一夏ですね？」

「ああ、私の嫁だ！」

（嫁？）

（婿じゃなくて？）

（なんだ貴様ら、知らないのか？

日本では気に入った相手を嫁というのだぞ）

（つ、つまり隊長は・・・）

（え、え？　どういことだってばよ？！）

（つまり隊長は織斑一夏に恋している！）

（（（な、なんだってー！）））

待ち受けに映る平和そうな顔をした織斑一夏をクラリッサ達は見つめる。平和そうな笑みだ。争いを知らない、普通の少年の。

（ということは、これが隊長の兄になるんでしょうか？）

（犀川一真、最重要人物だ）

（確か機密SSの方でしたね？）

（ああ、諜報部の話では管理者へ繋がる可能性がある存在らしい）

（管理者って、あの世界を救ったっていう人のことですよね？
あれってタダの噂じゃないんですか？）

（なにに？　管理者って子供の頃に流行ったアレ？）

（世界各国に突如1つのメールを送り、崩壊から救った謎の人物。

従った国は全て助かり、信じなかった国は様々な要因で滅んだ)

(噂では、どこかに管理者のメールを受け取る施設があるらしいが・
.....)

隊員達は待ち受けに映る一真を見つめる。

どう見ても普通の少年だ。間違っても世界をどうこう出来るとは
思えない。

(んー、でもそういうの抜きにして見ても悪くないですよね)

(確かに)

(顔立ちは織斑一夏に引けを取るが.....男らしいな)

(母性本能を刺激される)

隊員は織斑一夏と犀川一真を見てウツトリする。

この仕事についてからというものの、男っ気が無くなった。なにせ
女尊男卑になってからというものの、男から声をかけてこなくなった。

以前、幼子の頃は告白されるのを夢見ていたが今はそんなこと夢
にもでない。

軍に男が居ないわけではないが、筋肉ばかりの昔に縋る男などダ

メだ。奴らは何かと女を下にばかり見る。特に空軍はIS乗りとは最悪と言っているほど仲が悪い。

外に出ても此方がIS乗り、しかも軍に所属していると分かれれば大半が尻込みする。もう大半は嫌悪感を滲ませながら離れていく。

そんな中でISに乗れる男がどれだけ救いになるか。漫画のような恋愛だって叶うかもしれない。

「ちなみに、この犀川一真には特定の女性が居るのですか？」

「特定の女性？」

「つまり彼女です」

「いや、居ないと思う。少なくとも私はそんな姿を見ていない」

（（（（男キター！））））

携帯を握りながらガッツポーズを取る部下に首を傾げながら私はまた2人の事を考える。

（大丈夫なのだろうか？）

セーフハウスに帰った翌日。軍の研究施設の調査報告を聞きながら私は軍の演習場に足を運ぶ。今日はISのテストをするらしい。

「ISが二次移行していないだど？」

「っは。隊長のシュヴァルツレーゲンですが、改修のため起動したところ二次移行する前の状態らしく、どれだけ調べても初期設定のままであつたと」

「しかし私は確かに二次移行したし、記録も残っていたはずだ」

「確かに映像記録から二次移行したのは確実なのですが、そのISは何も」

「ならアレは何だったのだ？」

「その為のテストかと」

「試さなければ何も分からんか」

アリーナに着いた私は中央に安置されたシュヴァルツレーゲンを見つけて近寄る。

手放す前と何も変わらない。確かに二次移行していないというのもあながち嘘ではなさそうだ。

『それでは、これより起動実験を行う。
ボーデビツヒ大尉。起動を』

「了解」

スピーカーから流れてくる音声に従いシュヴァルツレーゲンを起動させる。

「・・・・・・・・ん？」

いつまで経っても起動しないシュヴァルツレーゲンに首を傾げる。
周りも驚いているのか少し騒つき出す。

ここに来る前の検査では訓練機の起動も出来ていた。だから起動出来なくなったわけではないはずだが・・・・・・・・

仕方なく手動で起動させようとシステムを立ち上げる。

見慣れたプログラムを見送っていると最後に初めて見るプログラムが立ち上がる。今まで以上の速度でプログラムを立ち上げるシュヴァルツレーゲンに驚く。

「な、なんだいったい？」

システム起動から十数秒、目の前からOS画面が消え去って選択アイコンが残る。

「ArmoredCoreSystem……なんだコレは？」

『どうした大尉。早く起動しろ』

「しかし」

『起動するんだ』

「っち」

此方の話も聞かずに急かす研究者に舌打ちしながら許可のアイコンを選ぶ。

命令を受けたシュヴァルツレーゲンはさらにOSを立ち上げると起動を開始した。

『これはっ！』

量子変換が終わり、起動したシュヴァルツレーゲンを見る。二次移行した姿のままのシュヴァルツレーゲンが身を包んでいた。

『なぜ、どうして?!』

『まさか大尉にしか起動出来ないのでは?』

『そんな、ありえない』

スピーカーを切りもしないため研究者達の狼狽した声がアリーナに響く。

「ざまあみろ」と呟きながら改めて新たなシュヴァルツレーゲンを見る。

全体を黒で統一した機体で、体の各部が以前より細く感じる。試しに軽く腕を振るとその軽さに驚いた。

軽く体操をして機体の動きを感じ、最後に動き回る。歩行から始まり、走行、飛行、停止。何から何まで以前とは比べ物にならない程に身軽だ。走行から飛行に移るまでのラグも少なく、走行だけでも十分な速度がある。

「速い」

自由飛行をした感想は思いの外に短かった。しかし単純明快な感想だ。

軽くシュヴァルツレーゲンの倍の速度を叩きだす機体に私は興奮を覚えた。

旋回し、瞬時加速を使用。一瞬で10 mを飛行した時には心臓が跳ね上がるかと思った。

しかしメリットばかりに眼が行っていたせいか徐々に姿を表すデメリットに私は顔を青くしていく。

「気持ち悪い」

機体を振り回したせいなのか気分が悪くなってきた。体にかかるGも相当で、急旋回する度に胃が振り回される。

堪え切れなくなった私はすぐに地上に降りる。これ以上飛行していると確実に吐くと感じたからだ。

「うう………」

「だ、大丈夫ですか隊長！」

私を心配し、背中を擦ってくれるクラリッサに感謝しながら吐き気を堪える。彼女は無理せず吐いてもいいといったが、吐きたくないから降りたのだ。意地になって吐き気に耐える。

『素晴らしい、素晴らしい数値だ！』

「気持ち悪い」

「無理せず吐いてください隊長。昼食を取ったばかりなので、誰か攻めやしません」

「そんな新兵のような……うっぷ」

口の中に広がる苦く、酸っぱい味に顔を顰める。手を当てて喉元までせり上がるソレを飲もうとするが、まるで意志でもあるかのようには胃に戻らない。

「隊長、失礼します」

私の肩を抱いたクラリッサが謝る。何事かと見れば、彼女の手が口を塞ぐ手を退かして無理矢理口内に侵入した。

「んん、んんっ！」

吐き気を我慢するだけでも辛いのに、口が開いたことで辛さはさらに倍増した。

彼女の指を気遣う暇の無くなった私はその指を噛み、さらに私を抱き締めるクラリッサの胸を叩く。

彼女の細い指は次第に深く侵入し、私の喉に指を掛け――

「んん！！！！」

力を込める。

閉ざされた入り口が開かれたことを知ったソレは一気に喉元を通り過ぎ、口内に侵入。閉じる事が出来ないのいいことに一気に外へ溢れだす。

ビチャビチャと音を立てる吐捨物を見る私の目は涙で霞んでいた。

なんとかかまともに見えるようになった目は床に広がる吐捨物の他に、私の吐捨物で軍服を汚したクラリッサと血が出る彼女の指を目視した。

「クラリッサ・・・」

「申し訳ありません、隊長。この罰は後程受けます」

「いや、私が意地になってただけだ。私の方こそすまない」

クラリッサが渡してきた水で口を濯ぎ、残った水で彼女の指を洗う。流石にペットボトル程度の水では軍服まで洗えず、仕方なく彼女に軍服を脱ぐよう命じる。

クラリッサに支えられながら休める場所までやってきた私を複数

の研究者が顔を赤くしながら出迎えた。

「素晴らしい結果だ大尉！早く武装のテストも——」

「それよりも誰か彼女を医療室に。怪我をしているんだ」

クラリッサの指は未だに血がダラダラと出ている。早めに止血してやらなければと手の開いていそうな人間を探す。

「そんなの今はどうでもいい！早くテストに」

「どうでもいい？どうでもいいだど？」

「隊長・・・私は」

研究者の言葉で頭にきた私をクラリッサが止めるが、流石にこればかりは彼女を立てることは出来ない。

「彼女は私の大切な部下だ。それをどうでもいいだど？」

「た、大尉、何をする？！」

「そんなにテストを続けたいなら、貴様を使ってテストをしてやろうか？」

研究者の鼻先に銃口を突き付けながら脅す。

周りは短く悲鳴を上げるなか、クラリッサだけが私を止める。それが気に食わなかった。

「隊長！私のことなど」

「ふざけるな！お前は私の大切な部下だ！隊長が部下を気遣って何が悪い！」

「隊長・・・」

「もう一度言う。部下を医務室へ・・・・・・・・・・続きはそれからだ」

「大尉、自分が何をしているのか」

「研究者は、別に貴様だけではない」

「っひ」

「早くしろ」と声音を低くすると研究者は近くにいた女性を叫びつける。

女性に連れられたクラリッサを見送った私は武装を解くとアリーナへ向かう。後ろでは研究者が失禁しているが、知ったことではない。

『ありがとうございます、隊長』

プライベートチャンネルで感謝してきたクラリツサに返答せず、そのまま指示が出るまでその場で待機した。

全てのテストを終え、さらに二日間の模擬戦を終えた私は現在駅にいる。国連やドイツから責任は全て開発に立ち会ったある研究者に取らせると聞いたときは肩の荷が降りたような気がした。

「隊長」

「見送りなど必要ないぞ」

「いえ、したいから来たのです」

「しかしな」

「させてください」

国境を越える列車来るまでの間、私は見送りに来た隊員達を如何に帰すかに奮闘していた。

彼女達だって暇ではない。特にクラリッサは忙しくなるはずだ。

私が二次移行したのだ。同時期に専用機を渡された彼女はこれから多忙の身になると容易に創造がつく。

「隊長、ハンカチは持ちましたか？」

「ああ、ポケットにある」

「ティッシュは？」

「同じくポケットだ」

「酔い止めは？」

「鞆だが、私は乗り物に酔わないぞ」

「ISはしっかり持ちましたか？」

「流石にソレは忘れんだろう」

心配性なクラリッサに周りの隊員は笑い、私は呆れてしまう。いたいどうしたのだ彼女は。

「なら良いのですが」

「うむ。土産も十分買ったし問題ない」

「食品関係は後でお送りします」

「助かる。だが、本当にこんな寝技の教本で嫁や兄が喜ぶのか？」

「勿論ですよ隊長！ドイツのは実戦的かつ魅惑的……男ならまず卒倒します！」

「そうか。嫁や兄が喜ぶのなら私も嬉しいぞ」

隊員の太鼓判が押された土産を大事に鞆にしまい込む。時計を見ればもう列車は来ているようだった。

「隊長、これを」

「これは？」

手渡された子包の中は使い捨ての容器が2つ入っていた。片方はゴムで、片方は少し嚴重に封がされている。

「車内で食べる食事です」

「食事？」

「大尉が中佐の為に朝早く起きて作ったんですよー」

「う、五月蠅い！」

「それでコレが私から」

「コレは？」

手渡された数センチ角の銀色の包みを見る。あまり厚みはなく、また軽い。それが何個も連なっている。

「いつか必要になるものです♪」

「そうか、なら貰っておこう」

「私からこれを」

「これは、MP3プレイヤー？」

「はい。隊長も少しは娯楽を知るべきと思ひまして」

それから隊員達からの贈り物を全て受けた私は発車間近の列車に慌てて飛び乗る。外には敬礼したまま此方を見つめる隊員達が出た。

「御体には気をつけて」

「ああ、お前達もな」

私も返礼にと敬礼を返す。

扉が閉まるのを機に敬礼を解くと数人の隊員が此方に手を振っていた。それらが彼方に消えるまで私は見つめていた。

駅が見えなくなってから席に向かう。まだ朝早いせいか余り人はいない。

閑散とし車内には奥の席に2人ほどいた。黒髪の男と少女だが、私の席からは後頭部しか見えない。

「しかし、なんで私がこんな奴と」

少女の声が此方まで聞こえてくるが、大したことないと考え席につく。

少し空腹を感じた私は早いと考えながらも待ちきれずクラリツサの弁当を開く。中には小さなパンとスープが入っていた。

芳ばしいパンの薫りとスープの食欲をそそる匂いに涎が溢れてくる。

「お腹空いた」

静かに食事がしたいと思い隊員から貰ったプレイヤーを取り出す。イヤホンを耳に取り付けた私は不慣れな機械に悪戦しながらなんとか起動まで扱ぎ付ける。

「オリジン、聞いているのか？」

「椅子でも食ってろクソガキ」

ピツと音になり、音楽が流れた。音量を調節しながら先程聞こえた覚えのある声を思い出すが、今は食事と頭を切り替える。

「いただきます」

食事を作ってくれたクラリツサと、食材に関わった全てに感謝しながらパンをスープに付ける。

目的地のパリまで後4時間。

殺風景な部屋で膝を抱えながら時間だけが経つ。もうこんな生活が1週間も経つと気分が陰鬱になってくる。

性別詐称がバレればこうなる事は分かっていた。だけど一夏達と対等に過ごしたい一念で公表したのだが、せめて誰かに相談するべきだったと後悔してしまう。

ここに来た時は酷く絶望した気分だった。

聞き慣れたフランス語に、見慣れたフランスの街並み。それら全てがこの酷い絶望感を増長させる。

ああ、本当に自分はフランスにいるのだと考えると嫌な考えが次々と浮かぶ。

まず思い付いたのはデュノア社の報復、次いで切り捨てだ。

小娘1人で会社が潰れるのだ。なら切り捨てた方がいいに決まっている。

「君にはこれからここで過ごしてもらおう」

でっぷり太った監視に連れてこられたのは狭い部屋だった。

白い壁に白い天井。白いベッドに白い椅子。シートまで白に揃えている。

趣味悪い。ここまできると清潔感よりもまず悪趣味さが全面に出る作りだ。

「なに、これ」

「部屋だよ坊っちゃん」

警棒で肩を叩く監視が嫌味ったらしく耳元で行って来る。

昼食にピザでも食べたのかチーズの臭いがキツイ。

「僕、女です」

「ははは、否定なさんな否定なさんな。こーんな可愛いのが女の子な分けないだろ！もしそうならウチの女房はアレだ、ゴリラかゴブリンだ！」

「んー！」

グリグリと頭を乱暴に撫でられたせいで髪が乱れ、少し首が痛くなった。

「ならスカート穿けばいいんでしょ！」

「おいおい、男がスカート穿いていいのはスコットランドかブラジルのサンバだけだぞ」

「僕は、女ですう！」

「ああ、ああ！こんなところに聖女が！聖女があ！
聖女ジャンヌよ！もう一度フランスを救いたまえ。特に今月の俺の小遣い」

「知らないよ！ただの無駄遣いじゃないか！」

「助けてくれよ可愛い坊っちゃん！ウチのゴリラが、ゴブリンがまた小遣いをっ！」

「知りません！」

付き合い切れなくなった僕は部屋に入るとドスツと椅子に座る。

「ヘソ曲げんなよ坊っちゃん」

「・・・・・・・・」

「ま、これでも読んで暇潰しな。どうせ暫らくはここにいるんだからな」

トン、と頭に置かれた本を振り払う。監視の手から本が落ち、床を滑る。白い本だ。

「・・・・・・・・嫌味だ」

「面白いぞ坊っちゃん」

「わざわざ白いブックカバーを掛ける辺り趣味が悪い」

「だが中身は勉強になるぞ。ソクラテスだ」

それが、アルフレッド・トーマスとの出会いだった。

国連のフランス支部にやってきての数日はずっと尋問ばかりであった。来る日も、来る日も同じ質問を違う尋問官がしてきた。

「ふーん、ふんふーん」

「・・・」

「ふんふふんふーん」

「・・・・・・」

「ふふん、ふふん、ふんふんふーん」

「・・・・・・五月蠅い」

それは三日目を過ぎた夜の事だ。

長い尋問から解放された僕が部屋でグッタリしているなか、アルフレッドは部屋の外でプラモデルを組んでいた。しかも嫌味に白いロボットのだ。

「ふんふんふーん、ふんふんふーん」

白いロボットに白い塗装をするアルフレッドはご機嫌だった。

廊下からコンプレッサの唸る音と塗装液が噴き出す音が聞こえてくる。今頃ロボットは女性が羨むような白に塗装されているに違いない。

「ふんふんふんふーん……やはり、MSと言ったらRXだな」

塗装を続けるアルフレッドは下手な鼻歌を歌いながらロボットを組上げていく。

カチャカチャという音とコンプレッサの圧縮機の動作音、さらに下手な鼻歌の三重奏に堪忍袋の尾が切れたのは帰ってきてから五分が経とうとしたときだ。

「ふんふん、ふんふんふーん」

「あーっ、五月蠅いダメフレッド！今何時だと思ってるのさ！」

「おおっ！やはり気になるかシャル坊！

見ろ、この凛々しい佇まい。そして煌めくツインアイ。これこそ連邦の白い悪魔！」

「知らないよそんなのっ！

っていうか、また白か！貴方は僕にどんな恨みがあるんだ！」

「なんだ、シャル坊はアムロよりシャア派か？」

「五月蠅い！こっちは疲れてるんだからそんな余所でやってよ！」

「余所でやったら怒られちまうだろ」

「だからってここでやるな！」

「ケチケチすんな。これだからフランス育ちのガキは粹がっていかん。

ほれ、ウォッカでも飲んで一息入れな」

「要らないよ！」

「旨いのに」と言って琥珀色の液体を飲んだアルフレッドはゲップをしながらもう一杯飲む。

「誰かーっ！この監視、仕事の最中に玩具を組んでいる上に酒まで飲んでますよーっ！」

「残念だったなシャル坊！この階にいる人間はお前さんと俺しか居ないぜ！」

「なんだよそれっ！」

「同期には俺が見てると行って帰らせた」

「最低だなアンタ！」

「大人と言ってくれ、シャル坊」

ウォッカの入ったグラスを片手にカッコつけるアルフレッドに叫びつけた僕はシーツを頭に被った。

早く誰かあの酔っ払いを追いついてくれないかと祈りながら。

尋問が数を少なくした代わりに増えたのは検査だった。

身体測定に始まり血液検査、体力検査、学力と様々な検査を四日間こなした。この意味は分らないが、従うしかない僕はただ出された課題をこなしていく。

「マチルダさん、マチルダさああああん！」

その日の体力測定が終わり、汗を流した帰りの事だ。僕の部屋の前に小型データプレイヤーを持った男が号泣しながら敬礼していた。夢に出そうだと毒吐きながらこっちに気付かない彼を無視して部屋に入ろうとする。

「シャル！マチルダさんが、マチルダさんが死にしまった！」

「し、知らないよ！
っていうか鼻水！それに涎！色々な液体付けないでよ！」

「お前に、お前にはこの悲しさがわからんのか！このジオニスト！」

「見たことないんだからいいだろ！」

「なん・・・だど？！」

驚愕の表情を浮かべるダメフレッドの拘束から逃れた僕はすぐさま部屋に逃げ込む。これでオートロックのこの部屋にそう簡単には

「いかん。いかんぞ少年！これを知らんとはどんな人生を送ってきたんだ！」

「なんで入ってきたダメフレッド！」

「監視が部屋に入れて何が悪い」

「ダメフレッドだからダメなんだよ！」

「失礼な坊主だな。まったく最近の色づいたガキはこれだから」

「最近のガキより最悪だよアンタ」

「とにかく、今日は夜通し見るぞ」

それから僕はダメフレッドに無理矢理アニメ鑑賞に付き合わされた。こっちが疲れているのに、この看守はお構い無く付き合わせる。

アニメは……まあ、悪くなかった。

もうすぐ二週間が経とうとしている。

この二週間。僕はダメフレッドに振り回され続けた。

ダメフレッドはよくアニメのデータを持ってきては僕の部屋で一緒に見ている。2人でダメフレッドが持ってきたピザやポップコーンにジュースを口にしながらアニメを見て、感想を言い合いながら一夜を過ごす。

悪くは無かった。こんな殺風景な部屋にずっと居るよりかはマシだ。

もう一度部屋を見渡す。

ベッドと椅子が一つにRXだけ。窓はなく、天井の換気扇と扉の吸気口以外は何もない。本当に殺風景な部屋だ。

いや、唯一真っ白な本があるが読み終えた本にあまり意識は向かない。内容も何かの哲学物で難しかったのもある。さらに白いのが

頂けない。

この部屋に来てから二週間。部屋に軟禁されるようになって1週間。部屋の外に出たのは尋問の時と検査、トイレ、それに10分だけ許されたシャワーしかない。残りはずっとこの部屋でダメフレッドとアニメ鑑賞だ。おかげで色々詳しくなってしまった。

(・・・帰れるのかな?)

IS学園の事を思いながら自らの膝を眺める。ダメフレッドに振り回されている間は考える暇も無かったが、こうして1人しかないといと自然と考えてしまう。

まずお兄ちゃんが軍に呼び出され、その日の内に休学が全クラスに言い渡された。

次がラウラで、VTシステムについての責任追及の為に本国に戻った。

そして最後に僕が本国に呼び戻され、性別を追及されている。

誰も悪くないのに、大人は僕達を振り回す。自分勝手じゃないか。特にダメフレッド。おかげで最近寝不足だ。

VTシステムだってお兄ちゃんが言っていたようにラウラが関わる隙なんてない。整備した人間、組み上げた人間、それにシステムに関わった人間じゃなければ組み込めるわけがない。一介の利用者が組み込めるわけがない。本人の自由意志で発動、停止が出来ない

のが一番の証拠じゃないか。

お兄ちゃんだって報告だけならIS学園でだって出来たはずだ。高槻先生がお兄ちゃんの上司なら、高槻先生を通して聞くべきだ。何も休学にする必要なんかない。

「シャルロット・デュノア。検査の時間だ」

そして僕だって、好きでISに乗ってるわけじゃない。

呼び出しに従い廊下に出るとスーツを着た人が数人に、相変わらず腹に何を詰め込めばそうなるのか分からないダメフレッドがいた。

「君には最後の検査を行ってもらおう」

「・・・・・・・・」

「内容はIS適正を測ることだ」

「・・・・・・・・」

「この検査結果と今までの検査、調査報告を纏めた後に君の待遇を決める」

「・・・・・・・・」

骨張った顔の監査官の冷たい言葉に無反応で返す。それを了解と取った監査官は此方を一度見た後に踵を返して歩きだす。

また検査か、と嫌気が注しながら監査官達の後ろに続く。そんな僕を見兼ねたのかダメフレッドが頭を撫でてきた。正直、手を洗ってるのかも怪しいから触らないでほしい。

「そんなへソ曲げんなよシャル。
なーに、国連だって鬼じゃない。コレでいい結果が出れば事態もよくなるさ」

アルフレッドさんのゴツゴツした手が頭を乱暴に撫でる。お兄ちゃんとはまた違った男らしい手だ。そして何を触ったか分からない手だ。

「な、お偉いさん」

「私語は謹みたまえ、アルフレッド軍曹」

「そうカッコしなさんなや。将来有望な子供を威してなんになるん？」

僕の頭を撫でていたアルフレッドと国連の監査官が睨み合う。アルフレッドは監査官を指差しながら笑い。それに対して監査官は悔しそうに睨んでいる。

少し経つと監査官は額の汗を拭ってまた歩きだした。

「・・・・・・・・まったく。」

軍曹の言うとおりだ、シャルロット・デュノア。今回の検査で君が実力を示せば、国連は有望なIS適正者を保護する目的で君を支援するだろう」

「ほ、本当ですか?!」

思いもよらぬ答えに思わず声が大きくなった。近くにいたダメフレッドが耳を塞ぐが、知った事じゃない。

「ああ。まったく、これで信頼性のあるデータが取れなくなった。覚えていろよ、アル」

「いやー、昨日の酒がまだ抜けてないせいか眩暈が。宇宙が見える・・・・・・・・とうとう覚醒したみたいだ」

「抜かせ、ロシア育ちが。それと幻覚とは覚醒剤でも打ったのかアル中」

「アルフレッドは中年とは、誰が上手いこと言えと」

こちらに目配せするアルフレッドに抱きつきながら耳元で感謝を告げた。

「ありがとう、アル」

「気にすんな、気にすんな……しかし意外と胸あるんだな
シャル」

とりあえず雰囲気をぶち壊したダメフレッドを殴った。此方を見
ていた監査官に一瞬マズいと考えたが、

「ダメだな、シャルロット・デュノア。そいつに遠慮などいらん」

「え？」

「もっと殴れ、蹴れ、引き摺り回せ。私が許可する」

「おいおい、お前、俺の安息の地を奪う気か?!」

「ふん。それが俺の趣味だからな」

どうやらこの監査官は話が分かるらしい。

やってきた更衣室でISスーツを着る。二週間ぶりのスーツは体に少し吸い付いた。

体を引き締めるスーツの具合を確認した僕は外に出る。

廊下には壁に背を預けながら警棒で肩を叩くアルフレッドがいた。彼は更衣室から出て来た僕を見て突然走りよってきた。

「ど、どどうしたシャル坊！胸がこんなに腫れちまってるぞ！」

「いい加減にしろダメフレッド！僕は女だ！」

「ああ、ああ、ああっ。主よ。こんな歳端もいかない、毛も生えてなさそうな子供にこんな試練を与えるのですか！」

「せ、セクハラだ！」

「っかし、本当に女だとは……俺に謝れ。お前が女ならウチの女房はいったい何なんだ」

「だから知らないよ！」

ふざけるなダメフレッドを蹴り飛ばすが、彼のお腹はまるでマシ

ユマロをこれでもかと詰め込んでいるかのように手応えがなかった。

笑いながら蹴られた場所を搔くダメフレッドに腹が立った僕はお腹を殴るが、ポヨンと腕が跳ね返る。本当に彼のお腹には何が詰まっているんだ。

「夢と希望さ、シャル」

「そんな御大層な物が詰まった人間じゃないよ」

「デブが怖くて物が食えるか！」

「ダイエット中の女の子に謝れ！」

「ごめんな、シャル。どんなに食べても体型が変わらないんだ」

「来るとこまで来てただけだよアンタは」

笑いながら歩きだしたアルフレッドにどう意趣返しをしようか考えながらも後に続く。

白い廊下を歩き続け、上に続くエレベーターの前にたどり着く。上で誰か使っているのかエレベーターはなかなか降りてこない。

トントンと肩を叩くアルフレッドの背中を見るとふと疑問が沸き上がってきた。大した事ではないが、自分はアルフレッドについて余り知らない。彼はいったいどんな家族構成なのだろうか。

「ねえ、アルフレッド」

「どうした。トイレか？」

「最低。」

「……こほん。アルフレッドって家族とか居るの？」

「そりゃお前、俺だって人の子なら居るさ」

「それじゃあ子供は？」

「子、供？」

「アルフレッド？」

肩を震わせながら始めるアルフレッドにマズいことを聞いたと後悔する。

彼は大人だ。

僕より長く生きた大人なら聞かただけでも嫌になることの1つや2つは、

「聞きたいのかシャル坊っ！いいぜいいぜ聞かせてやるよ俺のマイスイートスイートベリーを！」

無かった。

後悔した自分を殴りたくなるくらい目の前のアルフレッドの顔はだらしがない。正直どん引きするレベルだ。

「これが俺の愛娘、ジャンヌとフランソワーズだ。可愛いだろう。俺の自慢の娘達だ」

見せられた写真には二十歳くらい女の人が2人、同年らしき少女にアルフレッドが写っている。

愛娘は分かる。40過ぎっぽいアルフレッドならコレくらいの娘がいても不思議じゃない。ただ奥さんがどちらか分からない。もしかして、いやまさか・・・

「ねえ、アルフレッド」

「なんだなんだ娘が可愛過ぎて声も出ねえのか？
仕方ねえよなー。こんなプリチーな娘、そうはいねえもんな！」

「どっちが奥さん？」

「あん？」

「いや、だって2人共若いじゃない」

「見て分かんねえのかよ！こっちの金髪がジャンヌ、こっちの茶髪

が女房のカティーンだ!」

指を刺された2人をもう一度見る。

娘であるジャンヌさんと母親であるカティーンさんを見比べるが、どう見ても親子には見えない。姉妹だ。

母親が若過ぎる。聞けばカティーンさんももうすぐ40半ばというが、そんなわけがない。この人は二十歳かそこらだ。

さらにこんな肥太ったアルフレッドからどうこんな美人が産まれるのかと疑問は尽きない。遺伝子的にどうなんだろう。

写真をもう一度見る。

ジェシカは父親であるアルフレッドの目元に温和な雰囲気似ており、ジャンヌは母親の凛とした目付きとスレンダーな体付きが似ている。

おかしい。その一言につきる。

「可愛いだろー。この前の誕生日にジェシカはパパにつて腕時計をくれたんだぜ。ジャンヌは俺に日本製の工具セットを贈ってくれたんだぜ」

気付けばエレベーターが到着していたが、アルフレッドの巨軀に塞がれてしまう。

「あ・・・・・・・・」

逃したエレベーターは静かに閉まり、上に行ってしまう。

気付かないアルフレッドの自慢話はいつ終わるのかと思いながら僕はエレベーターの表示を見る。エレベーターは1Fで止まると2Fへ向かっていく。

「それでなあ」

それから十数分後、顔を真っ赤にしてやってきた監査官が来るまで僕は彼の自慢話に付き合うことになる。

フランスに着いたオレ達はまずトイレで変装をした。

Mは用意してあった金髪のロングウィッグとカラコン、最後に麦わら帽子で簡単に済ませる。一応用意してあったシルルタイプの変声機も渡したが、ピリピリするからといって踏み潰した。

服装も白いワンピースにレザーのベストを着ている。中にはホルスターがついおり、素人目には分からないぐらいにしか膨らんでいない。絶壁だからこそなせる技だ。

何故か睨み上げる彼女を余所にオレも手早く変装を開始する。

くすんだ金髪のウィッグを被り、化粧で肌を少し白くする。さらに付け黒子を目元に着ける。パツと見ではアジアンとは分からないオレが鏡に映っていた。

「男が化粧とか」

「化粧の仕方分からない低能な女よりはマシだ」

「なんだと?!」

拳銃を抜いたMの手を蹴り上げる。

拳銃が宙を舞い、オレの手に納まる。

「身の程は弁えろ」

「っ、くそ」

撃鉄を引きおろし、Mの眉間に突き付ける。

悔し気に睨み上げるクソガキを見下しながら返答を待つ。短い付き合いいえ、オレ達は互いに組織で一番付き合いが長い。このままではどうなるかくらいMも分かっているはずだ。

「分かった・・・」

「なら次からは控えろ」

撃鉄を上げた拳銃を投げ返したオレはまた鏡に向かう。背後では危なっかしく拳銃を受け取ったMが此方を睨んでいた。

もう一度鏡に映る自分を見る。変装しているとはいえ、両眼が金

というのはこの上なく目立つと再認識する。

ポケットからコンタクトを取り出し、手早く目につける。

数度瞬きして異物感が薄まるのを待ち、無くなったタイミングでもう一度鏡を確認する。

青い光彩の自分がそこにいた。それに満足して振り返ると間抜け面を下げたMがオレを見上げていた。

「どうした」

「お前、本当にオリジンか？」

「頭でも黴びたか」

「いや、雰囲気が違うと思ってな」

意味の分からない事を言いだすMを連れて外に出る。

ベージュのスラックスに白いワイシャツを着た姿を時折通り過ぎる窓で確認しながら目的の施設に向かう。

「これからどうする？」

「中に侵入して、後は出来る限り奥に進む」

「ISで行けばいいだろう」

「お前、本当に低能だな」

「なんだと?!」

「そんなことすればオレ達がISのある場所に着く前に対象がISを装着する。そうなれば面倒だ」

「その程度」

「別にやりたいなら勝手にやれ。ただしオレはお前を見捨てて先に離脱する」

「お前!」

「最悪、お前を殺してISだけは回収するがな。」

ここには他のIS適性者もいる。それが来たら時間だけが無駄に過ぎるだけだ。

さらにフランスを出るのも面倒になる」

「なるほど」

納得したMを連れて裏口から施設内に侵入したオレ達は時折警備員に呼び止められながら先に進む。時に道に迷ったといい、時にはトイレはどこかと聞く。

小さなノートを見ながらたどたどしいフランス語を喋るオレに騙される警備員。馬鹿だなとその背を笑いながら先に進む。

そして進むに連れてオレの疲労は濃くなっていく。原因は、Mだ。

（警備員・・・殺すか）

（止めろ）

このように警備員に出会う度に拳銃を引き抜こうとするMを止めていたのだ。さらに慣れぬ演技だ、疲れもする。

一息つこうと通りかかった休憩室に入る。中は都合よく誰も居らず、さらにはベンチや自販機があった。

自販機で珈琲を買うとMが物欲しそうにオレを見上げていた。最初こそ無視しようとしたが、自販機から離れると分かりやすいほどに落ち込む姿を見せてくる。鬱陶しい。

「何が飲みたい」

「え？」

「何が飲みたいと聞いた。答えろ」

いつもより2トーン低いオレの声に戸惑うMに苛立ちを含めた声で急かす。

自販機を眺めていたMは少しすると指を差す。何処にでもありそうな紅茶だ。自販機に小銭を入れて紅茶を買い、それをMに投げ渡す。

ベンチに座って珈琲を飲んでいるとMが隣に座って紅茶を飲み始めた。クーラーの風が遮られてしまい少しイラついた。

「これからどうするんだ？」

パタパタとスカートをはためかせるMのはしたなさに目を細めながら考える。

取り出した携帯端末を操作して内部の図面を確認する。ISがあるだろうアリーナ付近までまだ歩かなければ行けない。さらにそこに行くには最低でも数個のセキュリティを解除しなければ辿り着けない。

「んー」

紅茶を旨そうに飲む能天気な低能を余所に考える。

ISを使えば容易にアリーナまで辿り着けるが、それでは施設内のIS乗りが来る時間を与えるだけだ。もう少し近付かなければならないが、さてどうしたものか。

「まだか、無能」

「黙れ低能」

「っは、何も思いつかないお前に言われてもな」

此方を馬鹿にするクソガキを睨みながら残りの珈琲を飲み干す。

Mはクーラーの下でウィッグを外して蒸れた髪を乾かしていた。
本当に能天気な低能だ。

「まだかオリジン」

「……………なら行動に移るぞ」

思い付いた作戦をMに伝える。内容は単純だ。天井裏を伝いある程度まで進む。予定時間になったら陽動役が暴れ、天井裏にいる側はISを展開して目的の物を奪取する。

「やけに簡単だな」

「だったら早く行け」

「なに？」

「行けと言ったんだ」

「私がか？」

「オレよりは適材だ」

「嫌だ」

「オレみたいに成長仕切った人間より、お前みたいな未発達な人間の方が適材なんだよ。
安心しろ。天井裏に体を擦っても、無くなるような起伏などお前にはない」

「き、貴様あつ！」

顔を赤くしたMが此方に殴りかかってくる。拳銃を抜かないのは、ここで使えば騒ぎになると分かっているからだろう。

「うーうーうーっ！」

足でMの頭を押さえ付ける。それだけでクソガキは腕をバタつかせながら此方を睨むことしか出来なくなる。

「分かったら早く行け。時間は待っちゃくれないぞ」

「しかし・・・どう行けばいいんだ？」

「その点検口から入れ」

「高いな」

点検までは2m半。小柄なMではまず届かない高さだ。ISを展開しても体は入らないだろう。

「肩車してやるから乗れ」

「はぁっ?!」

「早くしろ」

「つく、今回だけだぞ!」

「早くしろと言った」

渋々と肩に座ったMを持ち上げる。見た目相応な軽さだ。

「こら、頭をすり付けるな変態!」

「色気もない絶壁がなにを恥ずかしがるんだか」

「~~~~っ!」

頭を殴りだすMに顔を上げるとさらに強く殴られた。

「止めろ。叩き落とすぞ」

「私は、将来姉のようになるのだ！その減らず口も今だけと知れ！」

「ならそれまでは絶壁だな」

なおも言い訳を続けるMを点検口の真下へ運ぶ。騒ぎながら点検口を開け、よじ登る彼女を見ながら肩をほぐす。

ジタバタと未だに天井裏に入れないMに呆れていると視線があった。

「み、見るな変態！」

「色気のない、起伏のない、さらに頭もないお前を見て欲情しろ？
また無理難題を出すな」

「五月蠅い！見るな変態！」

「騒いでる暇があったら早く上れ低能」

点検口にぶらさがるMの尻を蹴り上げて無理矢理天井裏に送り出す。天井裏に消えた後、鈍い音が聞こえたが……。どうでもいい。たとえ奴がH鋼に頭をぶつけようが、空調機にぶつかろうが、だ。

「頭、打った……！」

「早く行け」

「分かったよ、この熟女フェチ！」

意味の分からない捨て台詞を残したMの反応をリーダーで確認しながらオレは新たに珈琲を買う。

「オレは同年代が好みだ」

誰に言ったのか分からない言葉を珈琲と一緒に飲む。とてつもなく苦い珈琲だ。

監査官とアルフレッドに連れられてやってきたのは小さな控え室だった。どうやら対戦相手がまだやってきてないらしい。

聞けば迷子になってるらしく、いったいどんな人物なのかと思いつながら固いパイプ椅子に背を預ける。

背を逸らし、天井を見上げる。面白味なんてない普通の天井だ。

「貴様は昔から——」

「酒がねえよ母ちゃん——」

「カティを出すなアル中！」

監査官とアルフレッドが何やら言い合いをして売るが、あまり興味がない僕は暇潰しに天井の皺を数えていた。

30も超える頃には虚しさを覚え、今は考え事にカロリーを消費する。

（この戦いでいい成績を残せばIS学園に帰れる）

一夏達が迎えてくれる光景を思い浮べる。想像の中の皆は誰もが

笑顔だった。

そこに戻れるのだと思うと今すぐにテストを始めたいと思った。
今の僕なら、代表候補相手でも負ける気がしない。

「っかし、遅くねえか？」

「お前が早く来ていれば」

口喧嘩を始める2人を司会に収めながら時計を確認する。時刻は
もうすぐ14:00に差し掛かるうとしていた。

カチカチ、カチカチと針が進む。規則正しい音はいつもなら聞こ
えないのだが、集中しているのか小さな音もハッキリと聞こえてく
る。

手持ち無沙汰を解消する為に時計を眺めていた。カチカチ、カチ
カチ、カチカチとつまらない動きに飽きを感じたその時だ。天井裏
で何かが動いた音を聞いた。

「お前は昔からそうだったなアル」

「昔の俺と一緒にすんな。今の俺は一晚前の俺より進化する！」

2人は気付いていないのか、まだ口喧嘩をしている。

こんな最新の施設に鼠でもいるのかなと天井を見上げる。

鼠といえば、以前住んでいた屋敷にも鼠はいたなと思い出す。飼い猫と一緒に追い掛けていたらお母さんの所に逃げちゃって、そしてたらお母さんって悲鳴あげながら家中走り回るんだもんな。

昔のことにクスリと笑う。

時計は14…00を過ぎようとした瞬間、

爆発が起こった。

突然の事に僕達は慌てて音が聞こえた方を見る。壁の向こう、施設の表側から爆発音は聞こえてきた。

喧しく鳴り響く警報と騒がしくなる施設に僕は怖くなってきた。

誰かが廊下を走る音が聞こえ、次いで廊下で金属が落下した音が響く。さらに何かが着地する音に意識を向けていると、

「え？」

壁が爆発した。

爆発の余波に揉まれたのか僕の体は地面に倒され、舞い上がる埃を吸ってしまい咳き込む。

痛みと恐怖で涙が滲む目を開けると、僕を多い隠すようにアルフレッドがのしかかっていた。

「ア、アルフレッド？」

「う・・・くう」

「アルフレッド、アルフレッド、しっかりしてアルフレッド！」

呻くアルフレッドの胸を叩きながら彼を起こす。しばらくして大丈夫と言いながら起き上がった。

「な、何が起きたの?!」

「どうやらどっかのテロ屋がドンパチしにきたらしいな」

「テ、テロ?!」

「ISがあるんだ・・・奴さんからすりゃ此処を襲ってでも欲しいんだろうよ」

「つう・・・・・・・・大丈夫か、2人共」

「おう、なんとかな」

「僕も、大丈夫――」

大丈夫と言おうとしたが、ふくらはぎのヌメリとした感触に言葉を中断する。見ると埃が舞う中に赤く汚れた自分の足が見えた。

悲鳴を上げそうになるが、痛みがないことに気が付きやめる。試しに触ってみるが、痛みはおろか傷もない。

「もしかして・・・」

慌ててアルフレッドを見ると、彼の体からおびただしい量の血が流れていた。始めてみる血の量に一瞬意識が遠退いた。漫画や映画とは違う生々しさ、リアルさがその血から感じられる。

未だに温度を失わず、むせるような鉄臭さ。それが少しずつ僕の足に近寄ってきた。

「おい、おい、しっかりしねえかシャル坊」

「あ・・・ああ、あ」

「しっかりしねえか！」

「っひ」

初めて怒鳴るアルフレッドは怖く、惚けていた意識が一瞬で引き戻される。

手に付いた血も、足を汚す血も、靴が沈む血の溜まりも全てが現実だ。

「大丈夫か？」

「あ、あ、アルフレッド・・・・・・・・アルフレッド！」

「落ち着け！」

「落ち着けるわけないだろ！血が、血がこんなに！」

「いいからぐっ」

痛みに呻くアルフレッドな血の気が引く。どんどん血が流れて小さな血溜まりが広がっていく。

アルフレッドの指が肩に食い込む。痛みで顔を顰める。

「いいか、シャル、これから言うことをよく聞け」

「そんなことより病院」

「んなの、後でいい！

それよりもお前はこれから搬送されているISを取りに行くんだ。
これが事故ではない可能性が多い……そうなると狙いはISだ」

「IS……テロ?!」

「いいか、ここから先に隠し通路がある。そこから真っ直ぐ行けば最奥部にタラップがあり、それを登ればISが安置されていた研究施設につく」

「そ、そんなことより病院に行かなきゃ」

「黙って聞け！

いいか、そこから搬送者を追え。ここから真っ直ぐ行ってもテロリストと対峙するだけだ」

「そんなの放っておけば」

「ISが奪われたら、殺しに使われるかもしれない。お前だって後数ヵ月は拘束されるぞ」

「でも、そんなの」

「今、I Sを使えるのはお前だけだ。最悪I Sを持って逃げろ」

「そ、それじゃアルフレッドが」

「なら、I Sを持ってきて俺を助けてくれよ・・・・・・・・くう」

そういつてアルフレッドはカードキーを渡してきた。血がベツトリと着いたカードキーだ。

「行け」

アルフレッドに肩を押された僕は暫く彼を見ていたが、すぐに廊下に走り出る。

外は喧しい程に警報と人の怒鳴り声が飛び交っていた。

もうもうと立ち込める土煙で見えない先を涙ながら見回しながら目的地までの地図を思い浮べる。

「あっち・・・だよね」

廊下を進むとアチコチで小さな小火や崩壊が起こっていた。怪我人も多く、助けを呼ぶ声も次第に増えていく。

「早く、早くこっちに来てくれ！」

「誰かこっちにも来てくれ！」

「消火班！早くこっちも！」

人が増えていく少し手前に目的の扉があった。カードキーを差し込むとエアロックが外れ、プッシュウと扉が開く。

薄暗い誘導灯に照らされる廊下は長く、先は地下に向かっているためか緩くカーブを描いている。

薄暗い地下道を走っていると時折施設全体が揺れた。金属の壁を通して銃撃や怒声がここにまで響いてくる。

訳が分からない。どうして自分がこんな目に遭わなければならないのだろうか。

このままここで隠れていれば難を逃れるのでは、そういった考えが過る。だがそれもすぐに振り払う。

「待ってて、アル。すぐに助けに行くから」

自分の行動1つで友人が死ぬかもしれない。それがなんとか僕を動かしていた。

長い地下通路を抜けた僕は瓦礫の山を押し退けながら空の見える元通路を進んでいる。

聞こえてくる銃声は地下に居た頃よりも大きく、また空気を打つ振動は骨髓さえ震わすほどに近い。

（近くにいる。テロリストが、近くに）

そう考えて後悔する。瓦礫に埋もれた僕は、まるでベッドの下で幽霊から隠れる子供のように震えてしまった。

ここから出れば幽霊に襲われてしまう。だから隠れなきゃ。

「鬱陶しいな新型！」

「テロリストが！」

声が聞こえた。

拡声された高い女の声。少女の声だ。

それが2つ。1つは聞き覚えのない英語、もう1つは多分ドイツ語だ。

そして僕はドイツ語を発した人物を知っている。

「ラ、ウラ？」

そっと瓦礫の中から顔を出す。天井が半壊し、窺える空には2つの機影が激しい空中戦を行っていた。

一体は見慣れた機体だ。

四枚羽のように展開された増設ブースター。空中で器用にその場で回転しながら旋回したソレは陽光にオレンジの装甲を照らす。

再誕する疾風の名を与えられた愛機。

リヴァイブはその名を体現するように高速で飛び回りながら黒いISを翻弄している。捉えられぬ風のように敵の射線には入らず、攻撃の瞬間には疾風の如き速度で空を奔り、攻撃は暴風のように苛烈であった。

リヴァイブは自らの潜在能力を全て曝け出すことが出来たのが嬉しいと言わんばかり大空を駆け回る。もしそれが自らが引き出していたならばこれほど嬉しく、誇らしいことはない。だけど、乗っているのは見慣れぬ少女だ。

「リヴァイブ……でも、なんで？」

対峙するのは漆黒の機体。

細く、シャープで、それでいて弱々しさを感ぜさせない鋭角的な装甲。

持つ武器もライフル並みの銃身を持つ銃剣と、右腕のパイルバンカーと非常に強力な武装だ。それらが機体の細さを凶悪さに見せているのかもしれない。

両肩の増設ブースターを噴かしながらリヴァイブと高度を合わせたISは左手に持つ銃剣を向ける。

「アレは、新型？それにラウラなの？」

「貴様、何処の者だ！」

「墜ちろ出来損ない！」

「答えろ！」

リヴァイブのマシガンが火を噴くことで所属不明機との戦闘が再開する。

耳を塞がなければならないほどの銃声に身を小さくしながらどうするべきか迷う。

聞いている限り、リヴァイブに乗っている少女はテロリストだ。ドイツ語だからイントネーションの関係上半分しか分からないけど、テロリストという単語は聞こえた。だとしたらあの新型にはラウラが乗っているのかもしれない。

「きゃっ」

何度目かの銃声と共に近くの壁が深く穿たれた。ボロボロと崩れて埃立ち、むせ返る。

どうするべきなのだろうか。ISはもう奪われてしまった。生身でアレを奪い返すのは無理に等しいが、このままではアルを助けられない。別に自分が助けなくても時間が経てば助けが来るだろう。だが、それでいいのかと言われると首を振ってしまう。

（アルは僕のせいで怪我をしたんだ。なら僕が助けなきゃ）

瓦礫の中から2人を窺いながら考える。

確かに生身でISに立ち向かうなんて無謀だ。ISが1つあれば一個大隊も相手取れるって話だが、リミットが掛けられている今ならそこまでは極端な話じゃない。なによりここは国際IS運営委員会の研究所も兼ねた支部。男ばかりのこの支部ならISが暴走した際の対抗手段くらいはあるはずだ。

（研究室に何かあれば・・・）

希望的な考えだが、そんな望みしか縋るものはなかった。自らの翼も、剣も、全て敵の手に渡った自分が縋れるのは在るかも分からない物と自らの体だけだ。

やってきた道を這いながら戻る。時折瓦礫を押し退けながら苦勞してやってきた研究室は来たときと同じく半壊。使えそうな武器は愚か、設備も見えない。

「何か、何かないの」

崩れた天井ボードや折れた支持材、配管を払い除けてテーブルや

壁を調べる。どれも訳の分からない物で、頼りになりそうなものなどなかった。

せめて量産機、いや練習機でもあればと藁にも縋る思いで瓦礫の山を掻き分ける。だが出て来るものは全てガラクタか使い方の分からない物ばかり。絶望が僕を包んだ。

「なんで、なんで何もないんだよ」

小さな瓦礫を取り上げ、八つ当りのように投げる。40センチ程の金属球のガラクタに当たり、砕けた様を涙を流しながら睨む。

「このままじゃ、このままじゃアルが死んじゃうんだ……」
頼むから何かあってよ」

涙が流れる。

小粒から大粒に変わった涙が汚れた手を濡らし、擦り切れて血と埃で汚れた手を洗う。

涙を拭おうと手を上げた時だ。手の下敷きになっていた紙の束が捲れる。

いったい何だと見ると、そこには緊急事態マニュアルとかかれたファイルが目飛び込む。この際、どんな事でもいい。例えば災害時のマニュアルでも役に立てばと瓦礫に下敷きにされた残りを引き摺

りだす。

「緊急事態マニュアル・・・・・・・・IS強奪に対する対処?!」

取り出したマニュアルは分厚く、電話帳並の重さがある。しかし、半分から先は千切れていて無くなっていた。少なくとも見える範囲には無い。だが、希望が見えてきた。

「IS強奪に対する対処法・・・・・・・・第一、ISを奪われた場合、速やかにIS操縦者を当てる。第二、IS操縦者が居ない場合、研究施設内の操作盤を操作し武装で迎撃。第三―――」

マニュアルに従い近くの施設武装操作盤を瓦礫の中から掘り出したが、瓦礫で割れたモニターを見て顔を青ざめる。適当にボタンを押すが操作盤は返事を返すことはなかった。

急ぎマニュアルを読み進める。操作盤が壊れた際の対処法もあり、安堵の息を漏らしながら急ぎ行動に移す。

「くう・・・」

瓦礫に邪魔されながらも収納スペースを開け、引き摺りだせた箱型の兵器。側面にはタッチパネル式のモニターがあり、起動させるために叩くように操作を始める。

数分間の苦闘の末に兵器は起動した。パワードなどをいくつかのセキュリティをクリアした兵器は四隅を脚のように展開、本体を持ち上げる。

出て来たのは小型の荷電粒子砲だった。マニュアルによれば数発撃つと冷却のため十数分使えない上に飛程も25と短いらしいが、問題はない。牽制程度にはなる。

「っんの・・・うぐ！」

キャスターがあるとはいえかなりの重量がある荷粒子砲を押しながら敵が見える位置まで進む。研究室を出て少し、先程よりも破壊された廊下に荷電粒子砲を固定させ、電源ケーブルをコンセントに繋げる。

脚から放たれたアンカーにより固定された荷粒子砲の操縦棍を握り、小さな画面に映るサイトにリヴァイブを映す。

（速い・・・しかも、リヴァイブであんな機動が出来るなんて?!）

激しい銃撃戦を繰り広げるリヴァイブはまるで宙を跳ねるように右に左に、上に下に、前へ後ろへ自在に空を飛ぶ疾風だ。それを遅れもせずに追う新型も凄いが、カスタム機でしかないリヴァイブをあそこまで使いこなす女の子の技量が信じられない。

重い操縦棍を動かし続けながら機会を待つ。

近くに流れ弾が落ちるた。

まだだ。

舌が渴いてきた、水が、飲みたい。

まだ早い。

腕が痺れて震えてサイトが定まらない。

あと少しだけ。

「っち、ウザったい」

動き続けていた両機が仕切り直しのために止まる。互いに銃を向け、睨み合う。

今なら、イける！

荷電粒子砲の粒子加速を開始。唸りを上げ、気味の悪い音を出しながら砲身が熱を発していく。

「熱い・・・でも！」

頬や腕をジリジリと焼く熱に耐えながらリヴァイブをサイトに納める。熱で乾いてきた目を閉じぬよう力みながら加速が終わるのを待つ。

「っ、やらせるか！」

此方に気づいたりリヴァイブがアサルトライフルを向けてきた。まだ、加速は終わっていない。

弾丸が間近を通る。当たりはしなかったが、碎けた瓦礫の破片が肌に突き刺さって右腕に鋭い痛みが走る。頬も切れたのかジンジンと痛み出す。

「っくう・・・早く、お願い！」

【粒子加速完了】

「っ！」

粒子加速を終えた合図に反応して指が動く。

紫電を撒き散らす砲身が真昼の光が照らす廊下をさらに明るくさせる。

轟音と共に凄まじい力で体が後ろに吹き飛ぶ。まさかこんな不備があるなんて。

「つく、うう・・・・・・・・きゃああ?!」

荷電粒子砲をシールドで防がれた。しかし、それに合わせるように新型がリヴァイブに追撃をかける。

盾が割れ、リヴァイブは胸に荷電粒子を受けて吹き飛んだ。

「これで、やっと・・・・・・・・」

ISを取り返せる。

「無様だな、M」

その筈だった。

廊下の奥。暗闇の中から声は聞こえたの主が現れるまでは。

「え?」

廊下の奥から声が響いたと同時に暗闇からミサイルの炎が見えた。それは空を飛び、一気に落下する。

咄嗟の判断で逃げた。

ミサイルは新型を襲い、さらには僕の後ろに着弾する。逃げなければ荷電粒子砲と一緒に粉々になっていただろう。

「うわあああつ」

「きやあああつ」

僕は爆風に揉まれ、吹き飛び、奥の研究室に押し込まれてしまふ。

「い、たいよ……」

起き上がろうとすると背中が焼けるように痛いのに気が付いた。

頭は、グチャグチャで吐き気がして、思わず吐き出した物は赤い何かだった。

「つく、まだ………居たなんて」

新たなテロリストの出現に今度こそ万事休すとなった現状、僕は泣くしか出来なかった。

「なんで、なんで僕ばかり・・・！」

手近にある瓦礫の破片をこれでもかと投げ付ける。壁に当たり、瓦礫の山から落ちた破片が途中の小さな山を崩す。するとそこから黒い何かが頭を出す。

「つく、増援がいたとはな」

お兄ちゃんと同じハーフフェイスのISは瓦礫の山から這い出ると2、3回頭を振って意識を引き戻していた。

聞き慣れないドイツ語だが、声だけなら聞き覚えがある。ラウラだ。これだけ近くで聞いてやっと確信がもてた。この新型に乗っているのはやっぱりラウラなんだ。

「うち、まさかISを奪われただけでなくここまで施設を破壊されるとは・・・失態だな」

「ラウラ！」

「ん・・・んなっ?! 何をしているシャルル！」

「君こそ何でここに?!」

「私は今日、ここで模擬戦するよう命令を受けていたのだ」

「君が僕の相手だったの?!」

「君が………ということはやはりアレはお前のISか!」

「IS、そうだリヴァイブ!」

ラウラの協力があれば、と考えたが振り返った僕が見たのは完全に瓦礫で塞がった出入口であった。

「ど、どうしよう………」

「どうもこうも、これ以上は何も出来ん」

「でもそうならリヴァイブが!」

「まずは生きる事を考えろ。生身でISと対峙して生きていられるなど奇跡だ」

「でも、アルが!」

「ならば、まずは傷を癒せ」

ラウラに腕を捕まれた僕は瓦礫の上に座らされる。

「まったく、無茶をして……貴様、そういった人間だったか？」

「そういった？」

「兄のように無茶をする人間だったのかと言っている」

「お兄ちゃんのように……」

「こんな怪我までして」

「怪我って——うひゃっ」

背中に鋭い痛みが走る。痛みが次第に治まると次に冷たい感触が背中をなぞる。どうやらラウラが医療キットで背中の火傷を治療してくれているようだ。

「これが終わったら医療ポッドに入れ。このままでは跡が残るぞ」

「痛い、痛いよラウラ！」

「男の子なら我慢するんだな、シャルル」

「僕は女だあ！」

最後にスーツを切り取り、上半身を包帯でグルグルに巻く。それだけで痛みは和らぎ、薬になった。

「これからどうしよう」

「私はこれより奴らを追撃する。貴様は早めに逃げろ」

「そんな、出来ないよ！」

「貴様に何が出来る。奴らはまだ外だ……追うも逃げるも早めにするべきだ。」

現在、奴らのISはこの入り口からそう離れてはいない。私はまだしも貴様だけなら逃げられる」

「で、でも」

「足手纏いだ」

「あ……あつ、く」

冷たい一言に二の句が引っ込んでしまう。

死にたくはない。だけど、ここで逃げればもう帰れない。そんな気がした。そのせいで僕は何も出来ないままその場に座り込むしか出来なかった。

せめて何か力になれないかと緊急事態マニュアルを捲ろうとしたが、ラウラが途中で止める。

「貴様だけでも早く逃げろ。奴らは、強い」

地下通路の入り口まで引き摺られるように歩かされる。

何かないの。何か。

僕はそう心の中で願った。

「アレは？」

そしてそれは叶う事になる。

千切れて、グシャグシャになったページ。それを拾いあげる。

「これ・・・・・・・・っ！」

「あ、こら！」

ラウラの手から逃れた僕は急いで研究室内の瓦礫を漁り始める。

崩れた瓦礫を退かし、蹴り飛ばし、押し退ける。目的の物を見つけるのに時間はさほどかかりはしなかった。

瓦礫のせいで表面は傷付いていたが、起動はするようだ。

「おい、何故貴様がそれを」

「ラウラ………お願いがあるんだけど」

ドッジボールのような金属体に戻ったソレを持ち上げた僕はラウラにあるお願いを持ちかける。

オレは、半壊した施設をマントを被りながら歩いていた。

予定通りに暴れ、さらにはクソガキが動きやすいよう一部のセキユリティもクラックした施設は、大した苦労も要さずに破壊できた。戦略兵器であるISならば大した功績ではないが、なるほど、これなら世界のバランスを崩した説得力にもなる。

同時にACがISに対立出来るのも納得がいく。まさか数分でこの施設全てを掌握するとは驚くしかない。勿論、B-1がそれに特化しているから可能なことだ。

時折、現れた守衛を片付けてMがいるだろう位置へ歩いて向かう。本音を言えばMを置いて早く帰りたい。帰って早く寝たい。しかし、アイツがISを奪っている現状、置いていくのは得策ではない。下手すれば無能な老害にネチネチ文句を言われた上にあのクソ女達から要らぬ借りを作ってしまう。

………いや、逆にMを使って奴らを陥れるのも手か。

何かと遊んでいるのか止まない銃声が離れたここにまでよく響いてきた。本当に手が掛かる。ここから消し飛ばしてやろうかとも考えた。

「無様だな、M」

到着したオレが見たのは生身の人間に隙を突かれて吹き飛ぶ馬鹿だ。

空には新型、それもついこの前、適合したばかりのACがいた。データベースによれば高機動空戦を得意としているACらしいが、B-1から見ればまだまだ試作段階の機体だ。

『B-1。ミサイルで迎撃しろ』

『了解』

直下型ミサイルが花火のように空に飛び、そして新型と逃げる少女を襲う。

数度の爆発を背に、オレは墜落したMの下に歩を進める。

近くの木に引っ掛かったMはさながら蜘蛛の巣にかかった羽虫だ。自らの無知で捕まったという憐れさ以外は何も感じない。そんな姿だった。これがあの女と同じ血を流しているとはどうも思えない。どちらかと言えば弟の方に似ている。

「無様だな」

「喧しい」

「覚醒してまだ日の浅い奴に何を手間取っている」

「私だって使い慣れないISで」

「どうでもいい。」

それよりも行くぞ。どうやらフランス代表が此方に来ているようだ」

「まだだ」

「なに？」

「奴らに格の違いを教えてやる」

「くだらん。貴様の安いプライドとISを天秤にかけろ。序でに俺は眠い」

「なら、あの黒い新型も奪えば問題ないだろ。それとまだ寝たりないのか」

飛び降りたMはどうだと言わんばかりの顔をしている。本当に頭が可哀想な奴だ。

組織が俺達を使い捨てるということも考えていないのだろうか？

「勝手にしろ」

オレの答えに満足したMが飛び立つのを見送りながらB・1と退避経路の相談をする。

アイツが今すぐに考えを改めるか、幸運が重なりACを奪っていくなら問題ないが、数分もしない内に帰ってくるとは思えない。

吐きたくもない溜息を吐き出しながらB・1が提示してくる退避経路に思考を切り替える。

『陸路は行けるかもしれないが、相手だって道路封鎖はするはずだ。空路に至っては論外としかいいようがない。』

やはりここは下水道を通ってある程度進しかないな』

『ならばどこを目的地にしますか？』

『なるべく深い川、もしくは山の近くがいい。いつまでも下水道を使うわけにはいかないからな……。なるべく川を優先に探せ。特に海に繋がる川だ』

『了解、マスター』

じゃじゃ馬が突入した向かう。レーダーによれば地下に逃げた2人を追っているようだった。

ラウラに頼み込んで囷をしてもらう。狭い通路、ISが一機通るだけでやっとの地下通路の天井スペースに僕は隠れている。

ここならばリヴァイブを捕まえられる。命懸けになるが、リヴァイブを取り返すにはこれしか手が無い。

「奴が来たぞ」

ラウラの声に緊張が走る。遠くで何かが破壊された音が聞こえ、ブースターの音が木霊しながら近づいてくる。

来た。

天井裏で息を殺し、機会を待つ。

「見つけた！」

背後で嬉々とした声が聞こえてくる。間近に迫る一回切りのチャンスに指が震えだした。

「スクラップにしてやる！」

「獲物の前で舌舐めずりなど三流がやることだな」

「ほざけ！」

リヴァイブのライフルは天使結界により無力化され、不可侵の領域を築いた。

ラウラは無力な悪魔を嘲るように挑発した。中々様になるのは彼女の産まれ持ったの容姿と、相反するようなISのためかもしれない。

「私の天使結界は無敵だ」

「なら！」

ライフルが効かないと分かると少女は地下通路を潰さんと出鱈目に攻撃を始める。

「させるか!」

「引っ掛かったな愚か者!」

僕を気遣って少女を止めようと動き出したラウラにリヴァイブが肉薄する。シールドピアスを腹部に当てられた彼女は身を捻り回避する。

ゴッ、と何かを吹き飛ばす音が地下通路に響く。見ればラウラのISの装甲が削れているが、彼女自体は無事のようにだ。

ラウラは隙を曝す少女に手をかざす。

「やはり三流だな」

「か、体がっ?」

「今だシャルル!」

「なに?!」

崩れた瓦礫を押し退けて天井裏から飛び出る。真下にいるリヴァ

イブに向けて抱き締めていた物を投げる。

箱の形から姿を変えたそれは蜘蛛のように四本の足を開いてリヴァイブの背中に抱き付いた。

「っり、乖離剤が何故?!」

抵抗しようと藻掻いたリヴァイブだが、ラウラの頑張りにより身動き1つ取れずにいる。

「ぐ・・・離れ、ろ!」

乖離剤は藻掻こうとするリヴァイブにさらに張り付き、爪を食い込ませる。

「ぎゃああああっ!」

強力な電撃がリヴァイブに流れる。近くにいるだけで目が焼かれそうな光に包まれたリヴァイブの中から甲高い、苦しみに満ちた悲鳴が続く。

「ああああああっ、うあああああああああっ――――」

悲鳴が途切れる迄、僕達は彼女の悲鳴を聞いていた。

長い、長い悲鳴が終わるまで僕達は電撃を浴びる彼女を影を見ていた。そして、悲鳴の終わりは呆気なくらいにすぐやってきた。

「――――」

リヴァイブが量子化していく。

オレンジ色の量子が少女から溢れ出すように地下通路を満たし、照らす。

宙空に現れたリヴァイブ待機形態と少女がドサリと瓦礫の上に倒れた。

口から泡を吐き、指先は痙攣し、目は白目を剥いていた。明らかにマズい状態だ。

僕は乖離剤に抱かれているリヴァイブを剥ぎ取り、胸に抱く。

「おかえり、リヴァイブ」

胸に足りなかった何かが納まる感覚。全てが元に戻った、この暖かい感覚。

涙が溢れてきた。

何故だか涙が勝手に流れていく。

「・・・・・・・・嘘だ」

しかし、それもラウラの呟きで余韻を感じ入る暇もなかった。

振り返った僕は少女を見て狼狽するラウラにただならぬ雰囲気を感じた。口を手で覆い、少女から目を逸らしながら時折確かめるように彼女を見る。ラウラの額には次第にジツトリと汗が滲みだし、彼女の雰囲気も段々と陰しくなっていく。

「まさか、コイツは」

「どうしたのさ、ラウラ？」

「いや、しかし・・・・・・・・だけどいたい」

頭を抱えだすラウラに急いで走りだす。彼女は僕を見て落ち着きを取り戻すと少女から視界を外して息を落ち着かせる。口に手を当て、わざと呼吸を押さえながら荒い息を抑えつける。

そんな彼女をここまで狼狽した少女。遠めには金髪の少女だったが、もしかしたら彼女の知り合いなのかと振り返る。

「・・・・・・・・え？」

羨む程の金髪は無惨に瓦礫に引っ掛かりカーテンのように壁の亀裂を隠していた。ならば少女の髪は、と見ればそこには黒髪の少女が倒れている。幼い容姿だが、細い顎や整った顔立ちから将来は美人になることが一目で分かる。

その将来像が問題だった。

「織、斑先生に似てる・・・・・・・・？」

毛先が妙な跳ね方をする黒髪。小さな顔。そして、輪郭。全体的に織斑先生に似ている。妹だと言われてもすんなり信じてしまう程だ。

さらによく見ようと手を伸ばす――

閃光と轟音。

———あり得ない光景に手が止まってしまふ。

僕達の背後、数m先の通路が消し飛んだ。直径数mの穴が一瞬で出来上がり、融解した金属の火と太陽の光が地下通路を照らす。

「無能は無能か」

何かが降りてくる。

逆光に照らされた装甲とまるで僕達を歯牙にかけないような不遜な態度の影の目が赤く光る。

忘れていた二人目のテロリスト。

その存在に僕は慌ててISを装着する。

影の左手が持つ巨大なライフルを見た僕とラウラは武器を向けようとする。だが、腕は最後まで上がらなかった。

「嘘・・・・・・・・・・」

「何故、ここに・・・・・・・・」

降りてきた影は僕達より少し上で停止する。光に慣れてきた目が見たのは、嫌というほど見慣れたISだった。

「「ナインボール……」」

僕達の前に、漆黒のナインボールが白煙を上げる銃を向けていた。

事件その15 「新たな敵はチートさんだからさあ大変」 (後書き)

一真

「ガツガツガツガツ！ (冷奴ウメエ)」

ラウラ

「モキュモキュモキュ (大福オイシエ)」

シャルル

「ポリポリ (クッキーオイシエ)」

一夏

「平和だ」

鈴音

「平和過ぎるわ！」

主人公＆ヒロイン 準備中・・・

一真

「恒例のコメ返し！。

HN、首輪付きさんからのコメント――

合法指舐め…いいぞ…冴えてきた…！

出力云々について。

差は160%で出力は60%に、もとの性能が100して計算する
と――

$$\begin{array}{ccccccc} 100 \times 1.6 \times 0.6 & \downarrow & 160 \times 0.6 & \downarrow & 16 \times 6 & \downarrow \\ 96 & & & & & \end{array}$$

となり若干性能がダウンしているはずです。

100にするのなら0.625、つまり62.5%にしなければい
けません。

計算し直してみると――

$$\begin{array}{ccccccc} 100 \times 1.6 \times 0.625 & \downarrow & 160 \times 0.625 & \downarrow & 96 \\ + 3.2 + 0.8 & \downarrow & 100 & & \end{array}$$

――となります。

なのでオニキスと変わらない性能というのなら60%ではなく62.
5%とした方が良いのでは？

細かいことが気になってしまうのが、僕の悪い癖でしてねえ。

ホントに一言なんだ。かなり関係のない一言なんだ。気にしないで
ほしい。

ISにTDを合体させると胸と尻がキュンときてしまうんだ・・・

よう、首輪付き・・・・・・・・俺と突き合わないか？」

一夏

「定番だな」

一真

「うっさい。お前から凸るぞ」

ラウラ

「合法的指舐め・・・指舐めとは犯罪なのか？」

一真

「大丈夫、きっと朝早いから色々と覚醒してるのよ」

ラウラ

「そうか」

シャルル

「か、覚醒ってやっぱり男の人のアレ?!あの朝に起こるテント作り?!!／／／」

鈴音

「ばっ、なにとんでもないこと口にしてんのよ?!!／／／き、きつとアレよ!それ以外の何かよ!」

シャルル

「ナニ?!」

鈴音

「なに勘違いしてんのよアンタはぁー！」

一夏

「テント作り？」

一真

「お前ってアレだよな、ギャグセンスないくせにこういった下ネタはスルーするな。わざとか？」

ラウラ

「テント作り？」

一真

「はいはい、お前はまだ知らなくていい——」

ラウラ

「ああ、毎朝出来るアレか！」

シャルル

「ま、毎朝？！」

鈴音

「アレっ？！」

ラウラ

「ああ、たまに朝早く兄を起こそうとすると下腹部に——」

一真

「言わせねえよ！」

ラウラ

「・・・・・・・・」

一真

「・・・・・・・・」

ラウラ

「下腹部に膨——」

一真

「だから言わせねえよ！」

これはR・15までの話だ・・・・・・・・ニアR・18にはさせねえよ」

シャルル

「ラ、ラウラ。やっぱり、その・・・・・・・・おっきかった？／／／」

一真

「なに聞いてんだムツツリーニ」

ラウラ

「サイズか？」

鈴音

「ご、後学のためよ後学の・・・・・・・・別に興味なんか・・・・・・・・そう！これは一夏とのね！／／／」

一真

「誰に言い訳してんだよ」

ラウラ

「そうだな、これ——」

暫くお待ちください・・・

一真

「何か言うことは？」

ラウラ

「なぜ殴られたのだ？（涙目&タンコブ1つ）」

シャルル

「痛い・・・痛いよお兄ちゃん！（涙目&タンコブ2つ）」

鈴音

「くぁゝゝゝ！まだ頭ん中がグワングワンするう！（涙目&タンコブ2つ）」

一夏

「—————（気絶&タンコブ3つ）」

一真

「さて、コメ返しに戻るか」

鈴音

「出力について言われてるわね。オニキスより下だって（マダイタイ）」

一真

「うっせえんだよ素人が！私だって頑張った、頑張ったんですよ！ラウラの救出だぁ、体に馴染んできたぁとか言っていましたか！アレだって80%のオニキスの話なんですよ！

無理した体に鞭打って、折れそうな心を奮い立たせもしました・・・

・・・それでもダメだったんですよ！

つか、オニキスも使い熟せなくてすいませんねえええっ！どちくしょー！」

一夏

「ねーちん最高」

鈴音

「アンタ、もしかして年上のお姉さんタイプが好みなの？」

一夏

「いや、あのだな」

一真

「つまりオニキスの能力をフルで使ってないため100近くは十分辛い」

ラウラ

「20%の向上は大きいからな。130km/hの球が146km/hになるからな」

一真

「さらに加速性の向上……また、振り出しに戻るのかな？」

シャルル

「TDって何かな？」

一夏

「Nが抜けて」

一真

「黙れ。貴様がバナージ君を語るな」

一夏

「だ、だって中の人」

一真

「中の人などいない！」

「つーか、白式にNT・D積んでも使いこなせないだろ」

一夏

「そんなことない！」

シャルル

「どういう意味なのかな？」

ラウラ

「尻と胸がキュン？」

一真

「イカン ソイツニ テヲ ダスナ」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

一真

「次は、ドラウプニルさんからのコメント。」

誤字じゃね？

一真

「まあ、俺だったらその間にグレードぶちこむけどな」

・・・グレード？ああ回復薬グレートみたいな強力にしたもののことかな。それとも有澤製のグレネードなのかな？

・・・主人公ならまだしもイチカに惚れる要素が見当たらないような気がする・・・まあ主人公のヒロインとなって主に胃にダメージを与える存在になるのも面白いかと思ったが兄か・・・これはこれでイイナ・・・主人公がそのうち真ニダス（ネオニダスにあらず）にナリソウナ予感・・・ナニカサレテシマッタヨウダ
今回も楽しませていただきましたまたの更新を待ってます

嬉しいかぎりのコメントだ」

鈴音

「んで、どうなの？」

一真

「胃薬は俺の相棒（キリ）」

鈴音

「誰がアンタの胃を心配した！」

一真

「（・ω・）」

鈴音

「誤字よ、誤・字！」

一真

「グレネードでf a」

シャルル

「真・ニダスって銀翁？」

一真

「俺もハッキリと分かんない。申し訳ないかぎりだ」

鈴音

「つまりアンタは重要拠点を守るために死――」

一真

「おっと手が滑って何故かいたタコが」

オクトパス鈴木

「たこちゅ」

鈴音

「にゃ～～っつ？！」

シャルル

「でも言われてみると不思議だね」

鈴音

「タ、タコが絡み付く？！」

シャルル

「なんでラウラはお兄ちゃんじゃなく一夏を好きになったの？普通、あそこまでされたらお兄ちゃんが好きになるんじゃない？」

ラウラ

「好きの方向性の問題だ。」

私は一夏が好きだ。それは私を守ってくれて、私を見てくれると分かったからだ。つまり一夏は私と寄り添ってくれる。

しかし、兄は寄り添うことはしない。兄はいつも受け身だ。だが、だからこそ兄は私の言葉を聞いてくれる。それは私を支えてくれる、見守ってくれるということだ。

だから私は一夏が欲しく、兄に見守ってほしいのだ」

鈴音

「っひ、足が服の中に?!」

シャルル

「んー、どういうこと？」

一真

「言ってることは変わらない。ようは好きってことだ。」

違いは距離だな。一夏には自分を見て、理解して、なるべく近くに居てほしい相手。対して俺は一番近くで支えて欲しい相手。

恋人と家族の違いかもな。よくある反抗期はこの心の距離が強く線引きされるから起こると思ってい。近い人間なら近い程、改めて線引きした中にいるから強い敵意を抱くもんだ」

シャルル

「だから線の外にいる人にギリギリのラインに立っていて欲しいってこと？」

一真

「そういうことだ」

ラウラ

「そうなのか」

一真

「・・・・・・」

ちなみにこれはボーデビツヒの自我が強くなった現れだ。だから今回は身内の隊員を強く気遣った。大人ならある程度は無視できるが、線引きしたばかりのボーデビツヒは外聞を気にすることなくあんな行動が取れた」

シャルル

「意外と深いんだね」

ラウラ

「そうになると私はある意味で兄とのフラグを建てたのかもしれない」

一真

「俺の胃粘膜のライフは0だぞ」

鈴音

「ん・・・・あんっ・・・・やめてえ（ネチヨドロ）」

ラウラ

「一夏に振られた場合、一番身近で見もって居てくれた大切な人に気付くのは定番ではないのか？」

シャルル

「なんかロマンチックだね」

一真

「少女漫画の見過ぎだな。それに、それはただ慰めてもらいたいて見方もある」

一夏

「冷たいな」

一真

「家族は家族だから近くにいれる。いきなり他人には見れんよ」

ラウラ

「（；ω；）」

シャルル

「な、泣かないでラウラ！」

一夏

「一真！」

一真

「だが、まあ………確率はあるんじゃない？」

ラウラ

「兄は、私を好きでいてくれるのか？」

一真

「俺は嫌いな人間と同じ息を吸うのも嫌がる人種だ。それが同じ部屋で、さらには身の回りを見るんだ。好きだからに決まってるだろ」

ラウラ

「うう・・・兄いっ！（カバッ）」

一真

「はいはい。手の掛かる妹だよ、全く（ナデナデ）」

一夏

「グズツ、ツクショー、酸素が目染みやがる」

シャルル

「良かったね、ラウラ・・・」

一真

（しかし、やはりラウラを女として見ることはない）

ラウラ

（しかし、そんな道理は私の無理で決じ開けるまで）

主人公&ヒロイン たこ焼きパーティー中・・・

鈴音

「ところでさ、なんでナインボールが出て来たのよ。アンタ、その頃は日本でしょ？（ベトベト）」

一真

「悪いがネタバレを多分に含むから黙秘。それ以外ならどうぞ」

シャルル

「はい、カラサワの威力が過大だと思います（手を上げて）」

一真

「ACの装甲と建築の鉄骨なんかを同義にすんな。

あと、スケールは小さくなるがセシリアもあの程度出来るようになる」

鈴音

「うぐぐっ、まさか私やシャルルだけ二次移行以外の強化はないっての?!」

シャルル

「・・・（サッ）」

一真

「・・・（サッ）」

鈴音

「ちょ、なんで二人して顔背け————まさか?!」

シャルル

「ごめん、なさい」

一真

「次の、強化予定はデュノアだ」

鈴音

「う、嘘よね？」

一真

「嘘じゃない。デュノアの強化は物語的に必須なんだよ」

鈴音

「そ、そんな……また私だけ（ジワア」

一真

「だ、大丈夫だ！お前も軍属だからその手の話で幾らでも出て来る
！」

鈴音

「たとえば？」

一真

「ビ、ビームアックスとか？」

鈴音

「悪者の武器じゃない！」

一真

「なら何がいいんだよ！」

鈴音

「とにかく凄いのっ！格好よくて凄いのがいい！」

主人公&ヒロイン 甲龍強化案議論中・・・

一夏

「そーいや亡国組織のMが出て来たな。それにオリキャラのオリジ

ンってのも」

一真

「Mは原作読むか話の進展を待て。オリジンに関しては、まあ所謂ライバルキャラか」

鈴音

「誰のよ？」

一真

「俺と一夏」

シャルル

「やっとライバルの登場だね」

ラウラ

「強いのか？」

一真

「チートキャラです」

一同

「」

一真

「具体的に例えるならティファも搭乗したDX、次元連結システム搭載ゼオライマー、自我のある究極クウガ、FF8のオメガウェポン、ゼノサーガep3のゼノギアス」

一夏

「勝てる要素が見当たりません」

一真

「事実勝てないからな」

シャルル

「ダメじゃないの？」

一真

「オリジンはそういった立ち位置だからな。勿論最終的には勝つが、試合には負ける」

ラウラ

「兄でもか？」

一真

「ナインボール単体なら勝てる。ただ俺が乗るから五分以下の勝率だ」

鈴音

「なによそれ」

一真

「頂点、それがオリジンのテーマだ」

主人公&ヒロイン お茶会中・・・

一夏

「そーいや、鬱展開っていつからだ？」

一真

「次から本気出す。かなりガチで」

ラウラ

「ちなみにどの程度の鬱なのだ？」

一真

「思わず電源を落としたくなるような悲劇」

鈴音

「ちょ、ちよつとそれ冗談じゃないわよ?!」

一真

「信じられるか・・・? 本当だったら各個人のイチヤラブがある筈が、そうなるんだぜ?」

シャルル

「そ、そんなあ・・・」

一真

「水着を買いに行つてイベントや、遊びに行つてイベント、さらには休日イベントが本当なら臨海学校の前にあるはずだったんだ・・・」

一夏

「な、なんでそうなったんだよ?! 平和ならそれで!」

一真

「物語に悲劇は付き物だ。幸運は悲劇とセットになって幸運で在れる。悲劇がなければそれは日常・・・・・・悲劇は否定しちゃいけない人生のファクターだ」

シャルル

「そ、それでお兄ちゃんが死にかけるなんて・・・・・・」

一真

「(。D。)」

ラウラ

「どうした、兄よ？」

一真

「（。D。）」

鈴音

「なによいきなり？」

一真

「（。D。）」

一夏

「こっち見んな」

一真

「え、ちょ・・・ちょ、待って。1つ聞かせてくれ・・・」

悲劇Ⅱ主人公Ⅱ死にかける

がお前らの中にある方程式なのか？」

一同

「違うの？」

一真

「(。・ω・。)」

ラウラ

「しかしこれで私の設定が役立つな！」

一真

「やらせはせん！やらせはせんぞお！」

シャルル

「お兄ちゃん。負けないで」

一真

「やめて、覚悟が鈍る」

一夏

「いいのか、こんなノリで？」

鈴音

「もうどうでもいいわ」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その16 「フラグは回収するべきと誰かが決めたからさあ大変」 (前書き

この物語は、『あんなこといいな♪出来たらいいな♪』を体現した妄想である。

そんな夢一杯、野望一杯、リアルで一杯一杯な方以外はもしもボツクスでリアルな世界を求めてください。

私は☆の海へのチケットを買いに行きます

事件その16 「フラグは回収するべきと誰かが決めたからさあ大変」

現在、日本時間で02..48。無残なアリーナの中心に俺はいる。

俺がいる場所から数m以外は焼け野原を通り越し、荒野を過ぎ、
無惨としかいいようのない光景になっている。

綺麗な円はあまりに不恰好で、まるで黒い紙に白い絵の具を一滴
垂らしたような、そんな違和感を感じさせる。

『凄まじい、凄まじいなコレは！』

『これさえ量産出来れば、いや、ナインボールさえいれば日本は大
国に引けを取らない！』

『これで我らは真の独立を叶えられる!』

切られていないスピーカーから大人の好き勝手な戯言が汚水のよ
うにダラダラと垂れ流される。聞いているだけで鬱屈とするような
声だ。下水に浸かるような生理的嫌悪で心が怒りや不安で濁る。

一度、周りを見る。

荒れた果てた床は踏み固められた土ではなくISの戦闘に耐えら
れる金属で、壁はそれをさらに強化した合金。さらにその上には特
殊なシールドが膜を張った二重の防護を敷いていた。そう、敷いて
いたのだ。

【次世代型核シェルター】とまで子供に面白可笑しく話されるよ
うな無敵の壁は無事な部分を見つけるのも苦労するぐらいに融解し
ており、なんとか見つけた部分も単位を1ランク下げたcmでなけ
れば言い辛い小ささだ。

見渡す限りの破壊痕もここまでくると逆に整備している最中なの
では、と事情知らぬ人間にそう思わせるほどに酷い。

酷い。本当に、酷い。

『出力に制限がかかってこれか………』

『模擬戦をするなら最低でも34%まで下げるべきです』

『なに、そこまでしないと相手が死ぬの?』

『いいえ』

『ならなんで――』

『貴方が刑務所に入れられるからです』

『殺すって言えよ。なに遠回しに言っただ逆に怖いわ』

どこかズレたH・1の返答に焦りながら急いで設定を変える。

以前の初期装備は消え、代わりに実装されたナインボールの装備は現存の兵器を大きく上回る威力を有していた。

【MWG-KARASAWA】

カテゴリーはレーザーライフルとH・1は言っているが……
・いつからレーザーは爆発するようになったのだろうか。レーザーとは光線、つまり光だ。もし光が爆発するなら世の中は自殺より爆死の方が多い――

『そういった事を考えるのは貴方の悪い癖です。受け入れてください』

H・1からなにか言い様の無い圧力を感じる。

この私が気圧されただっ?!

『……片足を技術畑に植えた人間に言うなよ、頼むから』

レーザーが爆発する世界なんだろう。なら俺もそれは受け入れよう。だが威力は受け入れ難い物がある。

今まで見てきたレーザーライフル、身近な物だとセシリアのスターライトMk・?と比べても威力がおかしい。威力が割り増しされたと言われても、一発がスターライトの32倍があるなんてものはやジョークにもならない。アメリカ人だってこんくだらないジョークは言わない。

さらにあの爆発。100口径――銃口サイズではない――でしかないカラサワが叩き出すには些か現実味が無い。一撃で数mが

融解するとは何事か。近くで撃てば俺も消えるじゃないか。

熱を持つ銃口を見下ろしながらもう一度アリーナを見渡す。

「本当、ありえないな」

こんな力、なんで俺みたいなのが持つのか分からない。ISが持つにしても威力過多だ。

だから思う。

ナインボールは、

H・1は、

何を成すために造り出されたのだろうか。

全てのテストを終えた俺は痛む体を引き摺りながら休憩室に向かっている。ナインボールの全性能を引き出せと言われて引き出した結果、俺は全身の筋肉と骨を痛めた。

殺人的な加速性に何度も墜落し、さらにAMBACを使ったら腕が危うく逆間接になりかけた。逆感節が許せるのは脚だけだ。だからといって逆感節な足も願い下げだ。

AMBACによる質量移動技法は思いの外に身体に負荷をかけた。まるで手先や足先だけ激流に漬けたような力がかかるのだ。そのくせ体は逆に回転する。本当に折れるかと思った。

酷い、本当に酷いテストだった。

力尽きたように赤い皮のソファに倒れこむ。今だけはこの硬いスプリングだって最高級のウォーターベッドと勘違い出来そうだ。

「疲れ切ってるじゃないか少年」

「斎藤技師」

白熱灯を照り返す髪を掻き上げながら見下ろしてくる女性、斎藤美春最高専任技師。

肩口で揃えられた髪に人懐っこい猫目、ふっくらした唇の女性が息もかかるほどの距離しか開けないまま俺を見つめている。

オイルの臭いに混じって甘酸っぱい薰りがする。香水でも使っているのだろうか。

「珍しいですね」

「何をボケたこと言ってるんだお前は？
私は専任技師だぞ。居て当たり前だろうが」

「いや、服装ですよ。今日はツナギじゃないんですね」

斎藤さんと言えば青いツナギ姿だが、今の斎藤さんはスーツの上に白衣を着込んでいる。

「惚れたか？」

「戯言を」

「顔色も変えないとは。可愛くないぞ」

グリグリと頬を指で押されたが、振り払う体力もない俺はただ虚ろな目で見返すしか出来なかった。斎藤さんも俺が心身疲れ切っているのを感じ取ったのか悪戯をやめ、向かいのベンチに座る。

「最近、君にナノマシンを打つ打たないで騒いでるが知っているのかい？」

「ナノマシン……」

ナノマシン。

ナノサイズの機械で、その小ささは人間の細胞や細菌よりも小さい。

開発に成功したのはつい最近で、確か30年前には試作品があったという。だが、試作機の開発から10年経ても実用化には至らず、それからさらに10年近い年月が経ち、大衆が忘れた頃にれた天才が改良型を開発するまでは無用な産物だったと聞く。

天才の手により産み出された改良型は医療、情報処理、工学の三種類。その1つだけでさえ人類の文明は飛躍的な一歩を遂げた。

新薬の開発。

あらゆる難病の治療。

義肢への感覚接続。

視力回復。

マイクロサイズのICチップ制作。

ミドリムシの品種改良によるCO₂問題解決。

たった一人の無名の天才がこれらを成した。そのナノマシンは今でも世界を救い続けている。

「無理ですよたぶん」

だが、同時に世界を脅かしている。

要人暗殺や、ナノマシン暴走による人命の損失。世界を救ったナノマシンとて万能ではない。救った数だけ殺しもした。

条約によりナノマシンは国連の管轄で厳重に管理されている。何処で、何を、どうするのかを明記しなくてはならないナノマシンを、秘匿されている俺に使えるとは思えない。

「ああ、私もその意見には同意するよ。君のことは未だに秘匿され

続けている。ナノマシンなんて打てば世界に公表しなくちゃいけないからね。

だけど、秘密裏にナノマシンの得たなら？」

「そんな安全性皆無な物はお断わりです」

以前、ナノマシンの事故例をこっそり見たがあんな肉の塊になるのだけはごめんだ。

徐々に体を編成され、最後には物言わぬ肉の塊になる映像は今でもハッキリ思い出せる。

たとえば安全なナノマシンだったとしても、そんなものを打つ気にはならない。

「君には拒否権なんてないじゃないか」

「上はそこまで俺に首輪を掛けたいんですか？」

ナノマシンは基本一度切りしか使用してはいけない。理由は暴走を懸念したためだ。

機械でしかないナノマシンは完璧過ぎるのだ。体内で数億にまで増殖するナノマシンは回数を累ねる毎に欠陥品が出来る可能性があるが、
がる。

1つのナノマシンで体に致命的なダメージを与えてしまう物もある。

り、ナノマシン自体も一個辺りの寿命は短命だ。

ナノマシンの寿命は半年。

システムとしては半永久的だが、正常か異常かを問うことは出来ないのが現状。ナノマシンの寿命は半年以上伸びることは無く、10年間伸び悩んでいる。

半永久的な稼働を望む場合、定期的なメンテとして体内の古いナノマシンを駆除するウイルスナノマシンとウイルスナノマシンを駆除するワクチンナノマシンを打ち込まなければならない。これらを行って始めて安全にナノマシンを体内で使い続けられるが、次に出てくるのがコストだ。

ナノマシン一個辺りの価格、実は数百円だったりする。破格といえる値段ではあるが、ナノマシンの有効個数が数万体になると値段は一気に跳ね上がる。さらに維持コストとして専門のナノマシンプラントとメンテナンス機器、さらにはウイルスとワクチンナノマシンの製造を含めれば数億の金が必要。綿毛並に吹き飛んでしまう。ナノマシンを体内に有する人間が極々稀な理由の一番の原因だ。

「そりゃあ、あんな装備を一個人が所有しているんなら臆病になるさ。お偉いさんは法に触れても掛けたいんだろうね」

「もし、打たれるとしたら情報処理ですか？」

ナインボールを扱い切り、且つ監視を目的とするなら選定される

ナノマシンは情報処理用くらいなものだ。贅沢を言えば医療用を6..4で打ち込んでほしい。

「いや、どうやら秋葉が押し通された場合に備えて医療用になっているらしい」

「愛され方が狗から飼い犬に昇格ですか」

「これで立派な首輪つきだな」

「本当、死ぬまで使い倒すつもりなんですかね？」

「死ぬ前に上が交替するから安心するといい。

少なくとも後十数年はこのままかな。運が良ければ世界が動いて少し早くなるかもしれないがね」

後十数年。俺の予想と同じくらいの年月に顔を顰める。気休めで数年と言われるよりはマシだが、やはり長いと思うのは現状に不満を持っている証拠なのだろう。

「それまで彼女も作れないとは」

「君の関係者なら問題ないさ。どうだい？」

スカートをチラチラとはためかせる斎藤技師の顔はニヤついている。どうも俺をからかっているようだが、ラウラと生活していたた

め今さら女性の下着で顔を赤くはしない。それに、姉がいたため女性の下着は見慣れている。

「男日照りですか？」

「可愛くないよ、それ」

「かまいません」

不満気に頬を膨らませる斎藤さんはリモコンを取ってテレビをつける。ドラマやバラエティーなど余り興味をそそらない番組を飛ばし、ニュース番組に落ち着くのにチャンネルは二回りほどした。

「昨日、フランスの国連管轄ＩＳ研究所がテロリストに襲撃を受けました。テロリストは二人で、どちらもＩＳを使用していたと目撃証言もあり、現在国連並びにフランス警察は全力を持ってテロリストの捜索に当たっているようです。」

襲撃にあった研究所は今も被害者の救助に忙しく、関係者によれば死者１２名、怪我人は４８名に昇るとのことです」

「テロリストか・・・・・・・・・・」

テロリストという単語に記憶が刺激される。

思い出したのは中東に居た時のことだ。あの時、俺は右も左も分からない中で必死に逃げていた。途中であの一家に救われなかつ

たら今頃紛争に巻き込まれてここには居なかったに違いない。

ちょうど、あの時だろうか。秋葉さんに始めてあったのは。

テロリストにより街が戦場になり、俺を助けた一家は娘を残して殺されてしまった。何もしていないのに穏健派だから、異教徒を助けたからという理由で殺された。

怒り狂った俺はテロリストを壊滅まで追い込み、その時に治安部隊の応援に来ていた秋葉さんに倒され、今こうしている。

ソランとはそれから会ってもいない。

「物騒ね」

「人間ですから」

争いもします。それだけは言わなかった。

ナインボールのテストを終えた俺を待っていたのは次の任務だった。用が済んだらIS学園に帰れると考えていたが、研究者達が存外になインボールに執着して予定より3日ほど帰る日程が伸びる事となった次第だ。

その3日を使って俺は新たな任務を遂行している。その任務とは

「ん・・・固いな」

「どうだ坊主。直りそうか？」

「バルブが固着しただけですからすぐに直りますよ。すみませんがモンキー取ってください」

「あいよ。」

つかし、坊主が帰ってきてくれて助かるぜ。このままだったら業者を呼んで直すしかなかったからな」

雑用、それも配管修理やらバルブ修理等がメインだ。今は隊舎のシャワーの水が出ないという事でバルブを弄っている最中だ。

「ここにも施設課の人間がいるじゃないですか」

「アイツらはダメだ。発注やら検収やらで忙しいと見にも来ないからな」

「月末ですから仕方ありませんよ。
聞きましたよ。また中央が意味の分からない文句言ってきたらしいじゃないですか」

バルブを取り外し、中を覗き込みながらバルブを開閉すると仕切弁が動かないのが分かった。

「あー、はいはいはい。よく知ってるな坊主。
本当に意味が分かんねえよ。あっちが渡した要望書通りに物を送ったら、やれアレが足りない。ほれコレが多いだ。如月が物で残してなきや調達の奴が首切られてたぜアレは」

「それで最後は責任の擦り付けですか……」

ドライバーで弄っていると動き出した仕切弁に満足し取り付ける。試しにバルブを捻ると水が勢い良く出て来る。

「直りましたよ」

「おっ、助かるぜ坊主！

そうだ、後で飲みに行くぞ。流大尉が帰ってるから久々に男で飲める！」

ジョッキを煽るようなジェスチャーをするオジサンを見ながら汚れた手を洗う。

「なら俺は斎藤さんと如月さん、秋葉さんを呼ぶんですね？」

「分かってきたじゃねえか！」

そりゃあ毎度誘え誘えと五月蠅ければ覚えもする。誘わないと男共に干されるんだから必死になって誘うわな。

秋葉さんを誘えなかったときの竜馬さんの落ち込みぶりも見たくない。自棄酒には二度と付き合うつもりもない。

「少しは自分で誘ってくださいよ」

「坊主」

「なんですか？」

工具をしまいながら鏡に映るオジサンを見ると遠くを見つめていた。

「高嶺の花は触れないから綺麗なんだよ」

フツ、格好付ける中年男性に冷たい視線を送る。

高嶺だろうが高値だろうが本人の意志でどうにでもなるのではなかろうか。事実、俺は今までそれを成してきたから弱音にしか聞こえない。

上の無茶ぶりをこなした事がないんだな、このオッサン。

「ヘタレ」

「うるせえ！さっさと次行け次！」

後ろで今夜の日程を叫ぶオジサンに手を振りながら次の部屋に向かう。次は女性隊舎の配管が詰まったとか。

ガチャガチャと工具を鳴らしながら廊下を歩く。見慣れた廊下も数ヶ月見ていないと懐かしく感じた。最初はおっかなびっくりで歩いていたな。

周りは見知らぬ人間、それも自衛官の中でも荒くれや問題児、スペシャリストや出世街道から外れた者達の吹き溜まりと脅かされてビクビクしてたっけ。現に先程から通りすぎる人達の体は鍛えぬかれ、目付きは鋭く、いかにもな見てくれで、肩で風を切りながら誰もが俺を見付けてはもみくちやにする。

あの時も声が小さな俺を怒鳴りつけたりする人もいた。叩く人もいた。脅かす人もいた。それが今では気軽にプロレス技をかける仲だ。

そこまで俺の昇進の早さが憎いかアンタら。

とにかく、根は良い人なのだ。現に数回の海外派遣の際には大量の感謝状や贈物が届く。秋葉さんや如月さん、竜馬さんは特に多く、贈物の中にはラブレターまである。

「犀川？」

凜とした、冷たい印象を感じさせる声に呼び止められた。

「如月さん」

振り返ると髪を三つ編みで纏めた女性、如月さんがいた。

小さな体には不釣り合いな凛とした雰囲気を漂わせる女性は髪を揺らしながら此方に近づいてくる。いつ見ても小さい人で、ラウラや嵐と同じぐらいの背しかないのに何故か大きく見える。雰囲気の大切さを教えてくれる偉大な人だ。

如月さんは胸に大きなバインダーを大量に抱えながら俺を見上げてくる。身長差が40あれば当然だが、何故か見下ろされているような圧迫感があった。

「持つて」

短い単語と共にバインダーを差し出す女性を見下ろす。本人は甘えた感じで言っているつもりなのだろう。上目遣いで此方を窺う姿は父性本能が働くはずだ。

それを台無しにする無表情と雰囲気さえ無ければの話だが。これでは殆ど命令と変わらない。

「了解」

バインダーの半分を持つとした俺に対し、彼女は全てを押し付けてきた。ズッシリとした重量感に体が傾く。

「ありがとう」

「構いません」

両手に工具と大量のバインダーという男も憐れむ姿の俺の横に
いた如月さんは髪を猫の尻尾のように揺らしながら歩く。表情こそ
無表情だが、足取りは軽く、小さくスキップをしている。

「助かった」

「いえいえ。しかし、なんですコレ？」

「君のデータ。体重、増えてたよ」

「筋肉でしょう。あっちでは高槻中将の特別トレーニングで鍛えて
ましたから」

「そう」

言葉短な彼女に半歩遅れて歩きながら時折落ちそうな荷物を担ぎ
直す。

「昇進おめでとう」

「昇進？」

「来月から少佐」

「二階級昇進って、不吉過ぎますよ」

聞けばナインボールの二次移行により待遇を上が改めたらしい。別に今のままでもいいのだが、上は俺をさらに深くまで引き寄せたようだ。

「—————というか、上官に荷物押し付けるとかいいいのか？ 正規じゃないからいいのか？」

「おめでとう」

「ありがとうございます」

無表情に祝福する如月さんに笑い返しながら荷物を持ちなおす。指先は次第に痺れてきた。

「頑張ってるね」

「たまにお偉いさんのサンドバッグですがね」

自嘲気味に笑う。それを見た如月さんは俺の前に回り込み、

「よしよし」

頭を撫でてきた。

身長差から爪先立ちしなければならぬ彼女に合わせ頭を下げる。客観的に見るとコレは年上の女性が年下の青年を慰めるというより、年下の女の子が必死にお姉さんぶっているようにしか見えないだろうな。

「様にならないですね」

「一言余計」

「それは申し訳ありません」

無表情に頬を膨らませる如月さんに笑い返しながらまた歩きだす。

「御祝いは何がいい？」

「なら今夜にでも一杯如何ですか？」

「デート？」

「飲み会ですよ。竜馬さんも帰ってくるから久々に部隊の人間で飲むんです」

「残念」

「こんな男の何がいいのか分からないですね。如月さんってかなりモテるじゃないですか」

「朴念人？」

「違います」

これでも相手の好意くらいは気付ける人間だ。

「君はいい男だよ」

「ありがとうございます」

いい男、それがどう言った意味合いを含むかは別として、如月さんからはあまり好意は感じていない。何というか弟的にしか見ていないのだ。

「ありがとう」

「それじゃあ今夜」

「分かった」

如月さんと別れ、俺は自分の用事を思い返しながら歩く。

I S 学園に帰るまで残り3日。

夢を見た。

懐かしくて、悲しくて、暖かくて、腸の煮える夢だ。

それは、二年前の夢だ

俺はとある事情からどこかの組織に拉致され、組織間抗争の際に逃げ出した。これはその時の夢だ。

砂漠化の進む真夜中は寒く、踏み締める地面は氷のように冷たかった。荒野を走る俺の手足はボロボロで、逃げ出す際に手錠を無理矢理外した腕は血がダラダラと流れて点々と道筋を描き続けていた。足は裸足で駆けつけたせいで切り傷を大量に作り、血の雫は血の足跡に落ちて月明かりを反射する。

遠くで間隔を開けて何かが光り、遅れて轟音が聞こえてくる。それが紛争の物だと知るのは大分後になる。だが、当時の俺にはそれが人のいる証拠という希望でしかなかった。

走り続けた俺は川にたどり着き、そこで意識を手放した。丸一日の逃亡で俺は心身共に限界だったんだ。

それからの記憶はセピア色になって目の前を流れていく。

行き倒れていた俺を助けてくれた少女。

H・1に翻訳してもらいながらなんとか交流を持った家族。

知識でしかなかった家族との毎日。

不慣れな土地、文化、共に笑った毎日。

初めて持った自我。

許された自由。

全てが最高だった。あの1日、1時間、1分1秒が産まれて2年の俺には最高過ぎる時間だった。

そして、

「この売国奴が！」

壊れるのは一瞬だった。

突然現れたテロリストの銃弾によりカトルさんが殺された。本当に一瞬だった。喋る事も、動く事も許されずに殺されたのだ。

パンという音で後ろに倒れたカトルさんにテロリストはさらに銃弾を浴びせた。

笑い声と銃声が重なり、カトルさんの体は痙攣するかのようにつぶれ、跳ねる程に銃弾を浴びせられた。

俺は母親のケニアさんに連れられて裏口から出るまで目の前の事が信じられなかった。同じ人間を、同郷の人間をあそこまで楽しそうに殺せる人間が信じられなかった。

呆然とした俺はソランと兄のヨハンに支えられてなんとか走れた。せめて近くの駐留軍に逃げ込めればと誰かが言ったが、そんなこと

より俺は今すぐ家に戻りたかった。帰ればカトルさんが優しく笑いながら迎えてくれる気がした。そうでなくともあのクソったれのテロリストと同じ目に遭わせられると思ったからだ。

その時から俺はH・1を使える事が出来た。

力はあつたんだ。

なのに、守れなかった。それが堪らなく悔しくて情けなかった。

暫く走り続けていた俺達の前に突然覆面を被った男が現れた。銃を持ち、目は細めていた。

ああ、死ぬんだと諦めた瞬間――

男の首が落ちた。

ソランとケニアさんの短い悲鳴が上がる。ヨハンと俺は2人を支え、死体の後ろから現れた迷彩服を着た男を警戒する。

男が近くの駐留軍の人間だとソランが叫ぶ。

俺達はやっと吐けた安堵の息に胸を撫で下ろした。

これで、助かったとヨハンは笑い、

顔の半分が吹き飛んだ。

軍人が何か叫びながらソランと母親の手を引いて近くの民家に押し入る。そんな光景を余所に俺は倒れかかったヨハンを抱き締めていた。

顔の半分が吹き飛んでいた。残った顔もさらに半分はグチャグチャで原型が分からないが、どこか安心したように笑っていた気がする。

そう、笑っていたんだ。

遠くで銃声が聞こえる。

悲鳴が、笑い声が、叫び声がそれに続く。

静かな夜が一瞬で昼間にも負けない騒がしさを見せる。空も夕方のような明るさと、深夜の暗さを忙しなく行き来している。

笑っていた、笑っていたんだ。

俺はヨハンを抱き締めながら誰に言うわけでもなく呟いていた。

助かるはずだった。みんなで家に帰るはずだったんだ。なのに、

「なんで？」

銃声とは違う轟音が騒がしさの中に混じる。轟音が響く度に空気が震え、地面が揺れた。

「ヨハン、逃げよう、ヨハン」

物言わぬ肉塊になった親友に、兄弟に話し掛ける。返事を期待してもヨハンが返すことはもう無い。

「ほら、今度は俺が支えてやる。だから」

首がもげそうな程に曲がる死体に肩を貸して立ち上がる。

重かった。いつも戯れ合っていたヨハンを重いと感じたのはコレが初めてだ。

「みんな、待ってるぞ………だから」

一步、また一步と歩く。その度にズル、ズル、とヨハンの足が土

を掘る。

俺はそんなヨハンの胸にトンと拳を当てて笑う。

「何してんだよ、馬鹿ヨハン。みんな待ってるんだぞ。歩けよ、ヨハン」

笑い返す筈の顔は空を見上げ、歩き出す度に振り子のように頭が揺れる。

ポタポタと土に垂れる赤と白と透明な物を残しながら俺は歩く。

「重いな、お前。何食ったらそんなに重くなるんだよ」

ズルズル、ピチャピチャと音を立てるヨハンに笑いかけながら俺は民家に入る。背後ではさらに銃声と轟音が大きくなっていった。

「え・・・？」

暗い民家に入った俺が見たのは真っ赤に染まる軍人と、部屋の隅で顔を赤く腫らして泣くソラン。そして数人の男達に犯される母親の姿だった。

「あ、ああ・・・・・・・・・・」

母親の目は虚ろで、白く濁っているような気がした。

男が動く度に視線も動くが、その目はジッと俺を見つめているような気がする。

何が悪かった？

俺が異教徒だからか？

ソラン達が親日派だからか？

俺が此処に着いたからか？

紛争だからか？

俺が産まれたからか？

『運が無いな、ガキ』

ヨハンを落とし、膝をついた俺に銃口を突き付けるテロリスト。その顔には満ち満ちた何かを浮かべ、汗と精液と硝煙の臭いを纏っていた。

「なんで・・・」

『あん？』

「なんで、こんな」

『なに言っただ、このガキ？』

濁った目に白い何かがかかる。それでもその目は俺を見続け、俺も見返していた。

「なんで、なんで」

『ごちゃごちゃうるせえよ、ガキ。侵略者が騒ぐな』

耳元で銃声が響いた。同時に右の頬が熱くなったが、呆然とした俺には関係がなかった。

『侵略者？』

『お、言葉が分かるみてえだな。』

そうよ、日本は危険だからよ。神聖なこの地に踏み入れた時点で罪。その罰は神に選ばれた俺達が与えるのが定め』

『金、神、人種』

『うち、壊れてやがる』

人間は争う。

何故？

言葉が、宗教が、人種が、文化が違うから………否。ならカトルさん達が俺を助けたのは何故だ？

人として当然。人は支え合わなければいけない。

そうだ。人は弱い。だから群れて、助けて、弱さを補う。

なら何故争う？

利権を守るため。

自らを正すため。

他者を理解しないから。

『まあ、死ぬんだから別にいいよな。

おい、まだ俺も抱き足りねえから壊すなよ！

さて、神に変わりお前を裁く。この聖地に踏み入りし者――――』

何が悪い？

そんなの決まっている。

目の前にいるような他者を理解しない人間がいるからだ。

「認めない」

『あん？』

『笑えないなんて認めない』

認めない。ヨハン達が笑っていけない世界なんて、認めない。だから俺が人間を選定してやる。ヨハンが笑えるように、ソランが笑えるように、俺が好きな人達が笑えるように、人間を選定してやる。

悪い部分を殺し、良い部分だけを残そう。そうすればヨハンがまた笑える。

人間に自浄作用がないなら、俺が変わって世界を正せばいい。したらソランは笑い続けられる。

『うるせえ』

放たれた銃口が弾かれる。

ナインボールの装甲で弾かれた弾丸が壁を抉り、目の前のテロリストの太股を抉る。

悲鳴を上げるテロリストの頭を掴む。聞いたことのない言語で叫ぶ男が銃を乱射する。俺は平気だが、ソランに跳弾が当たる恐れがあったから銃ごと男の手を握り潰す。

悲鳴が遠くの轟音で掻き消される。

ナインボールを呼び出した俺は、手始めに目の前のテロリストをグチャグチャするため力を込める。トマトを潰すように簡単に頭が潰れ、小気味のいい乾いた音になる。

さらに体、足、胴体を引き裂くと肉の塊が出来上がる。

他の仲間が逃げようとしたが、その足に肉塊から拾い上げた骨を投げ付ける。深く突き刺さる骨の痛みには転ぶ男達の足をまず潰した。

これで逃げられない。

ゆっくり、ゆっくりと体を潰していく。

ある者は途中で死に、ある者は命乞いをした。それでも止めるような考えは俺にはなかった。

武器は使わない。コイツらみたいなのは痛みを与えて初めて罪を理解するような下衆だ。

数分後、俺はその場にいたテロリストを殺し、それでも足りないと言う心に従い外に出る。

遠くで銃声と轟音が響く。

まだ獲物はある。

終わらない殺戮に笑みを浮かべ、俺は空に舞う。

それから俺はテロリストを見つけるたびに殺し続けた。元の姿が分からなくなるまで壊し、それを道の真ん中に放置する。そうすることで他者へ見せしめとなる。

俺は止まらなかった。秋葉さんに止められるまで殺戮の限りを尽くした。

殺す度に俺の中に何かが芽生えてきた。

死体の山を築きあげる度に俺に何かが干渉してきた。

血の河を広げていくと俺が壊れていった。

憎い、憎い、憎い。

殺せ、壊せ、人類の敵を。

戻れない、帰れない、なんでこんな。

『システム・パルヴァライザー発動』

そして俺は世界を知った。

「う・・・ん？」

「起きたか寝坊助？」

「斎藤技師」

ぼやける視界一杯に映る斎藤技師の顔に辟易しながら視線を彷徨わせる。

狭い箱の中、窓が四方にあり外は景色が前から後ろに流れていく。

楽しい談笑に合わせて閑かなBGMを流すラジオと体を伝い自身の馬力を誇示するようなエンジンの音。どうやら誰かの車内に乗っているようだ。

しかし、何故？

当然の疑問に思考回路が熱を持つとする。だが、視界一杯の斎藤技師の顔のせいで熱は一気に失った。ようは考える気が失せたのだ。

「オフなんだからみーちゃんと呼びな」

腹が立つニヤけ顔だ。

「ばーちゃん」

「うっし、殺す」

「苦しい」

チョークスリーパーにより腕が首に食い込む。後頭部には硬さと柔らかさの相反する感触があった。

「男の理想の中で窒息しろ」

「肋骨があたって痛い」

「あゝあ？」

「男の理想はいつからこんなに薄い物になったんだろうか」

少なくとも秋葉さんのは柔らかかった。硬いものは無かったはずだ。

「悪かったな！秋葉より胸がなくて悪かったな！」

それから数十分、俺は狭い車内の中で様々なプロレス技をかけられた。

「この、体力馬鹿が」

「運動不足ですか」

「うる、さい」

隣でダウンする斎藤技師を余所に窓を開けて夜風を浴びる。

既に夏の暑さを持った風が火照る顔を撫で、気持ちの良い涼しさを与えてくれた。

「疲れてるんですからもう少しゆっくり寝ても大丈夫ですよ」

「いえ、お構い無く」

「昨日はかなりお酒を飲んでいましたし、まだ残っているのでは？」

昨日、酒、残る。

それらの単語により記憶が呼び出されていく。

昨日、確かに俺は酒を飲んでいた。飲み会だったのだ。

研究所の人間が集まり、ガレージに酒や料理を並べての盛大な宴会。

本当なら部隊の男と少数の女性隊員で居酒屋に行くつもりが、研究者達も混ぜてという事で後日ガレージで行うことになった。

静岡IS研に在註する数百人の自衛官と数十の整備技師、さらには残業を切り上げた研究者達がガレージに集まった。狭くなった宴会場は範囲を広めて訓練場さえ宴会場の中に含めてしまった。

宴会は祭りへ変わり、いつしか誰もが酒を片手に笑い声を上げていた。

カラオケから始まり、一発芸、漫才、ダンスと祭は熱狂的な盛り上がりを見せた。そして、

「うあ・・・あゝあ」

思い出してしまった。俺はあの時、周りの熱にやられて告白してしまった。

顔が熱くなっていく。

ヤバい、いやいやいや、ヤヴァイぞこれ。何がヤバいって・・・
・・・ヤバいだろマジで。

（自分の好みを告白しただとお？！しかも酔った勢いでえ！）

顔がひきつる。

ピクピクと頬が動き、瞳が細かく震えてしまう。舌はこれでもかと膨らみ、歯がカチカチとなる。

（殺される、竜馬さんと如月さんに殺される！次の特別課外訓練で殺されるう！）

自分の好み、秋葉さんや斎藤技師、さらには千冬さんのような女性が好きと大声で・・・・・・・・・・殺される！あの2人と他の隊員に殺されちまう！

その予想は当たる。そう当たってしまう。

誰も彼もを巻き込んで、俺ではない俺がその地獄に飛び込むのはもう少し先となる。

「かああずううまあああ・・・」

「兄さん、例のアレ送って」

「お前ら！坊主が憎いかあ！」

『憎い！憎い！憎い！』

「お前らあ！坊主をやりたいかあ！」

『殺る！殺る！殺る！』

「お前らは蛆蟲だ！一生童貞、処女で終わるだけの糞袋だ！」

『サー！イエス！サー！』

「お前らはなんだあ！」

『負け犬です！軍曹！我々は犀川一真に負けた負け犬です！』

「そうだ！お前らは負け犬だ！いや、負け犬にも劣る両性生物の糞を集めた糞以下の糞袋だ！」

『サー！』

「お前ら、坊主が憎いか！ならお前らは何をする！」

『ガンホー闘志！闘志！闘志！』

「糞袋でしかない貴様らは何を成す！」

『殺ス（キル）！殺ス（キル）！殺ス（キル）！』

「なら叫べ！貴様らの臭い息を全力で叫ばんか！」

『闘志！闘魂！闘魂！』

「声が小さい！尻の穴を締めろ、腹に力を入れろ、それでは糞袋以下よりも価値が無いぞ！」

『闘志っ！闘魂っ！闘魂っ！』

「さあ、楽しい楽しい戦争だ！地獄のような戦争だ！楽しみめ貴様等！」

静岡 I S 研究所在註統合戦略部隊、通称静研、そして俗称はサイレントヒル。陸海空から寄せ集められた精鋭中の精鋭が犇めく日本の技術を守る番犬部隊。そして世界最狂の戦略部隊。

その番犬の怒りを、1人の青年が買った。

帰ってきた俺は誰にも会うことなく一直線に部屋に逃げ込んだ。

久方ぶりの部屋に走り込み、ベッドにダイブする。ダイブして身悶える。

（ぐおおおおっ！これは想像以上にキツイ！恥い！）

IS学園に着くや否や、秋葉さん達から逃げるように車から飛び出して部屋に来了。今の自分は正直人目に出せたものではない。見られたらそれだけで寿命が縮む。死にたくなる。

いや、死にたくはないが消えたい。透明人間になりたい。ミラージュコロイドが欲しい。でもどっかの主人公みたくはなりたくない。

（あゝあゝあああああゝあゝあああつつつ！）

シーツを頭に被りブリッジをするように頭を抱える。端から見れば関わり合いは遠慮願うような人間なのは分かっている。分かっているが、分かっているんだ、分かっちゃいるんだ！

（私は貝になりたい！シャコガイになりたい！）

それから可哀相な人よろしく。部屋の中を走り回ったり、ゴロゴロと転がったりをしていた。

部屋の外に人の気配が増えていたが、そんなの関係ない。関係ないんだよおおおおっつ！原子崩しなんだよおおおおっ！！

「一真！一真居るんだろ！」

ドンドンドンと超合金Zの扉が叩かれる。声の主は一夏だ。

（うるせえええつつ！お前に構ってる余裕なんざねえんだよ！）

「頼む一真！シャルを励ましてくれ！」

（まずは俺を励ましてよ！あんなの告白と同義なんだよ！しかも、次に研究所に行ったら殺されるんだよ！）

「先輩！お願いします！出てきてください！」

（出たら秋葉さん達に会うから嫌だ！）

「一真さん！貴方しか彼女を助けられないんです！お願いします、出てきてください！」

（出たくない！このまま消えたい！）

「早く出てきなさいよ馬鹿一真！」

（五月蠅いロリ中国！俺は、俺はなあ！）

外の叫びを無視してシーツを頭に被る俺は唯一の救いに声をかける。

「は、H・1・・・俺は、俺はどうすればいい?！」

「マスターはあの3人が好みなのですか？」

神も仏もないとはこのことか。頼みのAIBOは俺の傷に塩を塗り込んできた。

(ガアアアアアッ！俺は、俺はあ！)

「つく、仕方ない。箒」

「任された」

もう、何も怖くなくなってきた俺を無視して外は進展していく。

俺はベッドに潜り込もうかと悩んでいると、超合金Zに新調した扉が音を立てながら崩れ落ちた。

「有事故にごめん」

(HOLがさらに強化される。ってか有事じゃなくても現段階超々硬度の合金斬んじゃねえ)

扉を切り裂いた一夏達が部屋の中に走り込んでくる。そんな奴ら

から隠れるようにシーツを頭まで被って狸寝入りを決め込む。根気勝負になるが、これなら普通の人間は諦める。

「一真、来てくれ——あっ！」

だが、流石は我らが主人公。格が違った。

奴は諦める、諦めないの次元には存在しないのだ。

奴は何もない床で躓くとそのままスタンドに手について転ばぬようにした。その際に近くにあったものが落ちていく。その中には、何故か、拳銃もある。

「ぬおっ?!」

気付いて慌ててベッドから転がり落ちる。床に頭を打ち、火花が散る。痛みに呻いているとゴム弾で碎けた壁の一部がパラパラとかかる。

俺の使う拳銃は実弾の代わりに暴徒用のゴム弾が装填されている。距離や撃つ場所によっては十分人を殺せる威力はあり、そんなものが暴発した。安全装置をかけ、さらには撃鉄にカードを差し込んでいたのにだ。

「つぶねえ！死ぬとこだった！」

「やっぱり起きてるじゃねえか！」

「他に言うことあんだろボケ！殺す気か！」

シートで顔を隠しながら反省の色を見せない馬鹿を蹴り飛ばす。
周りがか俺を非難しているようだが、殺されそうになった俺に対して有効的な言葉はない。

「謝る。幾らでも謝るから来てくれ！」

「無理！俺も自分のことで手一杯なんだよ！」

「シャルがマズいんだよ！来てくれ！」

「あ、やめ、シートは取るな！」

一夏達に半ば引き摺られ、頼みのシートも途中で箒達に剥ぎ取られてしまった。白熱灯の下に曝されてしまった俺の顔は窓で見ても真っ赤だった。

「犀川さん顔あかい！」

「や、喧しい！」

「本当だー！」

「見んな！」

「照れてるゝ可愛いゝ♪」

「照れてない！」

俺の顔を見てはしゃぐ女生徒から顔を隠すが、それは逆効果でしかなく火に油を注ぐ形となった。

デュノアの部屋に着くまでの数分間、俺はこの羞恥に耐えなければならぬ。

何故、俺はこうも救いが無いのか。

「シャルが泣き続けてるんだ。慰めてくれよ」

（俺だってそうだよ！）

「もう2日も出て来ないし、食事だってまともに取ってない。部屋の外に連れ出そうとしてもすぐに逃げ出すし頼むよ！」

此方の意志を無視して皆が俺を部屋に押し込む。暗い部屋に入った俺は小さな泣き声を聞きながら数分過ぎすしかなかった。本当にどうしてこうなったんだ。

一度深呼吸をし、俺は自分の都合を心の奥にしまい込む。次に目を開けた時には羞恥心はなく、いつもの俺がいることを実感した。

(うし)

とりあえず邪魔が入らぬように鍵を締める。

「つく、うう・・・うえ・・・」

暗さに目が慣れてくる。デュノアはベッドの中で丸くなっていた。テーブルに目を移せば一夏が持ってきてくれただろう食事がおいてある。カピカピに乾いたご飯に色が悪くなった野菜と手付かずの定食が置いてある。まともに食ってないというのは比喻でもないようだ。

誰もいないベッドに座った俺は泣き続けるデュノアをジッと見つめる。いざ口を開けようとしても何を話せばいいか分からないものだ。

「うう・・・ぐず、ぐずっ」

「・・・デュノア」

「お・・・にい、ちゃ・・・?」

「よう」

目だけ見えるようにシーツを上げたデュノア。その目は真っ赤で、ベッドには乾く暇もない涙の大きな染みがある。

「どうした?」

「う、えぐ、うう・・・うわあああっ!」

「っ?!」

突然襲い掛かれた。

抱き付かれたや、泣き付かれたのではない。デュノアは俺の首に両手を伸ばして襲い掛かってきたのだ。

「なんでなんでなんで?!」

「が・・・ぎっ」

「なんで!」

女とは思えない力でデュノアは首を絞めてくる。此方も離そうと力を籠めるが、爪が食い込んで思うようには外れない。

痛みと苦しさに呻く。

馬乗りしてきたデュノアは親の仇を見るかのように顔を歪めながら俺の首を圧し折ろうと体重を掛けてきた。

意味が分からない。

なんで、デュノアが俺を襲う。

裏切られた気分だ。

勿論予測すればある程度出て来たが、それらを吟味しても意味が分からない。

考えもせずに意味が分からないと言うような馬鹿は嫌いだ。それを言い訳に使う奴はさらに嫌いだ。だが、今のうちに考えても分からないなら仕方ない。

俺が首を絞められる、いや殺されそうになる理由は多々ある。

1、デュノアは俺が誰か分からないくらいに錯乱している。

否定。それなら確認という行動の説明がつかない。

2、デュノアにとって俺は殺すに値する存在である。

微妙な線。もしかしたら知らず知らずに理由を与えたのかもしれないが、二週間前まで懐かれていた。殺されるような理由など作る暇もないし、日本とフランスにいた俺達が関わり合い持つタイミン
グなんてない。

3、俺を殺さなければならぬ理由がある。

可能は低い。何故なら目の前のデュノアからは迷いが感じられない。誰かに依頼された可能性は低い。

4、洗脳されている。

技術的には可能だが、二週間で出来るような方法は知らない。あっても確実性は低い。

「なんで殺したんだよ、なんで！」

「く・・・かふっ」

「何とか言えよ！」

首を押し折られないよう力を込めて腕を押し返す。すると次は指に力を込めてきた。

深々と食い込む爪の痛みに力が抜けそうになるのを必死にこらえ、どう対処するか考える。

「おい、何があった！大丈夫なのか？！」

扉を叩く音が響く。鍵をかけたことを後悔したが、後悔してどうにかなることではない。

「なんでアルを殺した！なんで！」

「つつ・・・・・・放、せ」

「どうして！」

首を掻き切るつもりなのか爪がさらに食い込み、皮膚が抉れる。
複数の鋭い痛みにも力が抜け、首にデュノアの全体重が乗る。

何とか抜け出そうと藻掻くが、デュノアはそんな俺に対してIS
まで展開してきた。冷たい金属の温度と煮えたぎるような熱い眼
差しに血の気が引く。

「よくも、よくもお！」

（マズ・・・・いし、き・・・・）

意識が朦朧としてきた俺の視界は白く変色してくる。デュノアの
顔も既に満足に見えなくなってきた。

『ナインボール緊急起動』

紅の量子光が起こる。

俺の生命の危機に反応してH・1がナインボールを局部展開したのだ。展開した腕でデュノアの両手を引き剥がし、一気に押し退ける。殴り飛ばす勢いだ。

ドン、とデュノアが壁にぶつかった。

「くう・・・うう！」

「————ゲホッ、ゴホッゴホッ、ガッ・・・ゴホッゴホッ」

『遅れてすいません』

『助かった、ありがとう』

『早く去りましょう。シャルル・デュノアは酷く興奮しています』
デュノアの呻き声と俺の咳き込む声に外が騒がしくなる。

これ以上はマズい。このままでは唯事では済まない。

逃げるべきというH・1の提案に従い立ち上がろうと足に力を籠める。しかし、中腰になる辺りで力が抜けてしまった。H・1がベツドに手を付かなければ頭から倒れていたかもしれない。

酒を飲みすぎたような酷い目眩、吐き気が襲い掛かる。さらに体に上手く力が入らない。まるで酸素欠乏症だ。

ナインボールを展開してH・1にここから逃げるよう命令し、廊下へ急ぐ。

「逃げるな、逃げるなあ・・・！またかよ、また逃げるのかよ！」

罅の入った壁の下で体を丸めながらデュノアは睨み上げていた。
垂れた前髪の間から見える眼は血走り、声は低く呻くようだ。

痛む体を引き摺るデュノアの憎悪にも似た行動に寒気を覚えながら扉の鍵を外し、倒れるように廊下へ飛び出す。外には来たときの倍は人間がいた。彼女達は俺の行動に声を大きくする。

「一真?!」

「つぐ、はあはあはあ！」

「な、中で何があったんだよ?!それにその傷?!」

「ぜえぜえぜえ」

廊下の冷たさに体の熱が移動するのを感じながら喉を押さえながら息を吸う。

周りは俺の様子に騒つき、教師まで呼びに行った。

俺は涙で滲む視界で部屋の中を見るとデュノアが這いながら此方に近付いていた。

「つく・・・・・・・・退け！」

窓の前にいた生徒を強引に退かす。押し退かれた生徒は短い悲鳴を上げながら尻餅をつく。

「ど、どうしたんだよ一真！」

「逃がすか・・・・・・・・」

肩を掴んだ一夏を睨もうとすると既に扉に寄り掛かりながら立ち上がっているデュノアが俺を睨み付けていた。

「放せ馬鹿！」

ISを使って一夏を無理矢理引き剥がし、窓の鍵を開けるため手を伸ばす。それに遅れてデュノアがリヴァイブ・カスタムを展開した。

「つく、本気かよ畜生」

悠長な時でないとナインボールで窓を突き破り茜色の空に逃げる。

「逃がすかああああっ?!?!」

その後ろでブースターを全開に噴かしたリヴァイブが俺に突撃をかけてくる。その手にはマシンガンが握られていた。

「血迷ったか！」

小型のHVMを呼び出し右手に握りリヴァイブへ突撃する。今のまま戦闘すれば間違はなくデュノアは銃機を使う。そうなれば高い確立で流れ弾で無関係な人間は怪我をする。それだけは防がないと。

「ああああっあああああああっ！」

盾殺しで俺に殴り掛かるデュノアを相手に俺はどうするべきか悩む。弱ったデュノア相手に体力等の心配はないが、技量だけはどうにも出来ない。さらには頭に血が昇り無謀な攻撃もあるのだ。このままでは敵の心配をしながら制しなければならぬ。

『何をしている犀川!』

「っ?!!」

『なぜアリーナ以外でISを装着している!デュノアもだ!』

『こっちだって不本意なんだ！デュノアをどうかしてください！』

デュノアの攻撃を防ぎながら今までの経緯を全て伝える。織斑先生は幾つかの案を出した後にやっと指示をくれた。

『そこから一番近いのは第2アリーナだ。そこにデュノアを誘い込め。後はシールドを張って閉じ込める』

『了解！デュノアの第2アリーナまでの誘導及び隔離のため押し込める。これより指示を実行します！』

『5分だ、5分は粘れ！5分経てば向こうも準備が済む！』

『5おっ?!』

「うわああああっ！」

「つぶね！」

顔の横を盾殺しの杭が空気の壁を突き破る。炸薬の爆発と装甲に擦る杭の音に嫌な汗が滲み出る。

『長い！せめて3分にしてくださ————つぶな！』

『無茶を言うな！今の時間帯、アリーナは全電源を落している。それを数分以内で立ち上げるなど無茶だ！』

『なんで落としてるんですか?!』

『節電対応だ!』

『んなアホな?!』

デュノアの両腕を掴み上げる。出力ではナインボールが圧倒的有利。このまま時間を・・・

「こんの・・・・・・・・放せえっ!」

得意のラピッドスイッチにより呼び出されたショットガンを器用に俺に向けて放つ。一発打ち終えたショットガンは自らの反動で夜の空に消え、俺も衝撃に拘束を緩めてしまう。

「殺してやる! 殺してやるう!」

「つく、このガキい!」

「殺してやるっ!」

アサルトライフルを掃射するデュノアをアイカメラ越しに睨む。機動性について来れないデュノアを周回しながら落とすべきではと考えてしまう。

指定された時間まで後数分。

余裕はある。

「うわああああっ！」

「ふん」

突撃してきたデュノアを回避し、その背にHVMを突き立てようと逆手に持つ。ここでブースターを破壊すれば後は飛べないデュノアを倒すだけとなる。

「落ち——」

「落ちろおおおおっ！」

だが、目の前でデュノアが旋回した。それも無反動旋回ではなく、ブースターを使つての不完全なAMBCによるクイックターンだ。

四枚のブースターを噴かして不完全なAMBCだが、勢いは十分にある。その勢いに盾殺しを乗せてボディブローのように放つてくる。

「っく」

「ああああああっ！」

撃たれる一瞬だけでも離れようとブースターを噴かした。

撃鉄の落ちる音と発砲音が重なる。

肋骨の付近に力が掛けられる感覚と共に体が横に吹き飛ぶ。痛みに覚醒した脳は全てを妙に遅くしていく。

攻撃を当てられたと笑うデュノアの獰猛な笑みが見えた。

通信により声をかける千冬先生達の声が聞こえた。

デュノアが血溜まりで泣いている姿が見えた。

そして――

『敵対するISを殲滅対象と認定。これより防衛プログラムを発動します』

H-1によるデュノアの私刑宣告がハッキリと聞こえた。

体に掛かっていた重み、ナインボールを纏う感覚が無くなる。あの体は体をナインボールに詰め込まれたような拘束感。

指先から肩にかけて、足先から腰にかけて、ありとあらゆる軀胴

部がガッチリとナインボールに拘束された。先程の攻撃により肺が圧迫されたのか息も上手く出来ない俺は通信でH・1を止める。

『止めろ！H・1！何をする気だ！』

『敵対ISを殲滅します』

『アレはデュノアだ、止めろ！』

『プログラムを優先。』

申し訳ありませんが、マスターの命令は聞き入れられません。これは貴方を優先するという総意です』

『いいから止めろ！』

俺の命令を無視してH・1がナインボールを操作する。だが、姿勢制御を整えてからのナインボールは俺の意思に反して基本武装を呼び出した。

体を自由にされる感覚に寒気を覚えながら何とか通信でデュノアに呼び掛ける。このまま争えば間違いなくデュノアはただでは済まない。カラサワの出力だってまだ調整が済んでいないのだ。

『聞けデュノア！』

『なんだよ』

意外なことにデュノアは俺の通信にすぐ返答してきた。ただし、その声はとても冷たく突き放すような声音だ。

怯みそうになる自分を叱咤して通信を続ける。

『ナインボールが制御下から離れた。今のコイツが何をするか分からない』

『それを信じろっての？』

『事実なんだよ！』

今のコイツは攻撃さえしなければ問題ない。だから――』

『貴方は、信じろと言ったのか？』

貴方。

その言葉だけで距離が途方もなく遠いような気がした。

『ああ、信じて――』

『僕を騙した貴方が！信じろって言うのか？！』

『何を言ってるんだお前！』

「しらばっくれるな！」

デュノアが口が裂けんばかりに歯を剥き出しにしながら此方に向かってくる。慌ててH・1を止めようとしたが、体を襲う衝撃により口をつぐんでしまった。

轟音を上げながら何処かの建物にぶつかり、中に落ちる。

どこかのガレージなのか、中には打鉄やリヴァイブを整備する生徒と監督の教員がいた。人間のいる場所に突っ込んだ事にマズいと感じたが、ナインボールは相変らず俺に従わない。

舌を噛んだような鋭さと強い痺れを伴う痛みに悲鳴を上げそうになるが、それさえ背中を打ち付ける衝撃により殺されてしまう。

この短時間に三回も強い衝撃に体をさらした。このまま襲われ続けたらファストフードのシェイクになってしまうと舌打ちしながら再度ナインボールのコントロールを取り戻そうとまた体に入力を入れる。

『俺が、何時を騙したって言ってんだ？』

「アルを殺した・・・殺したじゃないかあ！」

『アル？殺し——があっ！』

動かない俺をいいことにナインボールを殴るデュノアに冷や汗を垂らす。

さっきまでは手を出さなかったからいいものを、このままではH
1がプログラムに従いリヴァイブを潰す可能性があるかもしれない。
今は俺の願いを汲んでいるのかもしれないが、それも何時まで
かは分からない曖昧で不確かな物だ。

「何で撃った！何で撃ったんだよ！何でそのまま逃げてくれなかったんだよ！」

「何をしているシャルル！」

「シャル、一真！」

『つつー、何でアイツらが？』

相変わらず殴り続けるデュノアを取り押さえるようにやってきた一
夏とラウラがデュノアを取り押さえる。

「放して、放してよ2人共！」

「ばっ、今のお前放したら何するか分かんないだろ！」

「大丈夫か、兄？」

「ごほっ、なんとかな・・・」

『・・・・・・・・如何します？』

『プログラムをセーフモードに移行』

『了解』

相変わらずプログラムを起動させ続けるH・1にプログラムをセーフモードに移行させるとやっとコントロールが戻る。

自由に動く手足を確認した俺はリヴァイブを取り上げられたデュノアを見てナインボールを待機モードに戻す。

「大丈夫か、兄よ？」

「肋骨に一発、治った怪我に響いたのかまだ体が痛む」

「放して、放してよ！」

「怪我はないが、まだ動くにはキツイ」

ラウラにより上着を脱がされた俺は薄く青ざめる脇に目をキツくする。

「シャルル！」

パンツと乾いた音がガレージに響く。

見ると一夏に羽交い締めされたシャルルをラウラが叩いていた。

呆然とするシャルルと襟を締め上げるラウラを見ながらバラされた打鉄によりかかる。

「貴様、自分が何をしたのか分かっているのか！」

「な、何を・・・」

「あの時のナインボールは明らかに黒、兄のは赤い装甲だ！あれは別人だ！」

「でも、ナインボールはまだ量産されてない。ならアレは！」

「馬鹿者がっ！兄は二週間前から日本にいた、それも確認されているのだぞ！」

「そんなの誰が証明するのさ！」

「ドイツ軍が保証する！」

「でも・・・でも」

「おい、ボーデビツヒ・・・・・・・・今の話詳しく話せ」

狼狽えるデュノアを一夏に任せてボーデビツヒを呼ぶ。ボーデビツヒはムツとした顔で座り込む俺の前まで走り寄ってきた。頭のアホ毛も気持ち垂れている。

「兄よ」

「なんだ？」

「名前では呼んでくれないのか？」

この非常時に。

「呼んでほしいのか？」

「二週間も経ったのだ。呼んで欲しい」

「ならラウラ」

「なんだ兄よ！」

現金な物でラウラは名前で呼んだ瞬間に満面な笑顔になり、アホ毛も元気に振られる。

「ナインボールが量産されていないのはいいとして、何故デュノアの行動に俺が関わっている？」

「それは……耳を」

ラウラに耳を傾ける。

「これは未だに機密なのですが、多分近々兄にも話が行くと思いますので」

その機密、ドイツが機密とする何かに関わった覚えはない。しかし、何故日本の最高機密であるナインボールが関わっているのか分からない。

「兄はフランスのIS運営支部がテロに遭ったのは知っていますか？」

「3日前、1週間前に起こったまではな」

「テロリストは2人組。内1人はシャルルの証言で男、そのテロリストが使用していたISが」

「待て！ちょっと、待て。まさかその男・・・」

「ISの適性者です。リヴァイブの通信ログにもそれがしっかりと・・・さらに不味い事に」

「そいつが使っていたのがナインボールだと」

「黒いナインボールでした。兄のナインボールは赤、以前は紺でしたので私も違うと証言したのですが」

「黒いナインボールだと?!それは本当なのか!」

「外見はコレです」

「嘘だろ・・・んな馬鹿な」

ラウラにより見せられた姿は間違いなくナインボール、それも二次移行した姿だった。

有り得ない。

ナインボールの図面は未だに完成していない。オニキスはおろか、中身が新調したナインボールの図面は真正銘この世に存在していないのだ。

だからこそ映されたナインボールの姿が信じられない。

「間違いない、ナインボールだ・・・・・・けどなんで?!」

「分かりませんが、それだけではありません」

「どうした?」

「テロリストの声が、兄と酷似していたのです」

「はあっ?!」

「「「っ?!」」」

「っ?!」

俺の声に周りの視線が集まる。

慌てて声を小さくしてラウラに耳打ちする。

「似てるだけじゃないのか？」

「声紋が一致しています」

「んなアホな・・・」

ワンオフ機のナインボール。さらには男のIS適性者で声紋も一致。そんな馬鹿な事があるのか。

「兄が日本に居たのはドイツも確認していますが、日本はその日の事を隠していました。その日は兄が医療用ポッドに入っていましたので、なんとか隠したいのだと思います」

「ああ、アレね」

思い起こすと確かにテロが起こった日は上官の暴行による傷を治

療するためにポッドに入っていたが、まさか保身の為にそれを隠すとは……………

「おい、まさか」

「シャルルは知らないのです」

「だからか」

見ればデュノアは一夏の拘束を離れようと藻掻いている。

「だが、なぜナインボールが外に」

「技術が漏れたのでは？」

「有り得ない。ナインボールはまだ量産の段階まで——」

「あつ、シャル、逃げろ一真っ！」

「「え？」」

「これでえ！」

見るとデュノアが待機形態のリヴァイブを取り返して此方に走りだしていた。

『ナインボール展開』

俺が動く前にH・1がナインボールを局部展開してリヴァイブの拳を握り潰していた。

「え・・・・・・・・・・？」

それが誰の声かは分からなかった。

「や、止め——」

『敵対ISを破壊します』

左手を砕かれたリヴァイブの右手がねじ切れた。

肘から先が宙を舞い、オイルが血のように床に斑の汚れを作る。
それが人の腕を連想したのか数人の生徒が顔を背けた。

『止めるH・1！もう大丈夫だ！』

俺の命令に従わずナインボールはリヴァイブの腕を掴み、握り潰す。

悲鳴が上がるが、誰も止めはくれない。

俺は泣きそうなくらい追い詰められていた。

まだ展開されていない生身の腕で抑えても、引き剥がそうと後ろに体重を掛けても、ナインボールの腕はリヴァイブを破壊しようとは伸びる。

「た、すけ……………」

「ちくしょう」

徐々に展開していくナインボールに俺はどうすることも出来ずにいた。展開仕切れれば間違いなくリヴァイブを破壊し尽くすまでナインボールは止まらない。デュノアだって無事には済まない。

「ラウラ！ ナインボールを止めてくれ！」

「え？」

「防衛プログラムが発動した。言うことを利かないんだ！」

「な、それは」

「破壊してもいい、だから！」

俺がラウラに助けを求めていたその隙を、デュノアは見逃さなかった。握り潰された腕をねじ切り、落ちる腕を蹴り飛ばす。

ズブリと腹部に熱さを感じた。

見れば盾殺しが展開する前の部位に突き刺さっていた。

「え・・・・・・・・・・？」

突き刺さった盾殺しが自重により横に落ちる。薄皮一枚で支えていた盾殺しは横に落ち、脇腹は裂かれたようにボトボトと血が溢れだす。

ナインボールが瞬間的に展開。傷は装甲の中に隠れたが、垂れた血の後はしっかりと残っていた。

余りの事に思考が追いつかず、俺は傷の事を考えるべきか目の前で蹂躪されるデュノアを心配するべきか分からなかった。

(・・・ちくしょう)

消えていく意識に悔しさを感じた俺は最後の力を振り絞って腕に力を込める。

装甲全てを剥がし終えたナインボールが絶対防御を発動するデュノアに月光を使おうとする。ブレード発生部に手を当て、無理矢理に右に逸らす。

『H、1、後は頼んだ』

それが俺に出来た最後の仕事であった。

「兄！兄、兄い！」

事件その16 「フラグは回収するべきと誰かが決めたからさあ大変」 (後書き

一真

「ちくしょう、ちくしょうちくしょう！ (ガツガツ」

H
1

「ああ、マスターが自棄喰いを」

鈴音

「回収したわね」

セシリア

「回収しましたわ」

シャルル

「回収されちゃった」

一夏

「色んな意味で回収したな」

一真

「ちぎじょう！（えっぐえっぐ）」

主人公&ヒロイン 準備中・・・

一夏

「やっと月光とカラサワが出たけど、形はどうなるんだ？」

一真

「基本的にMOAで考えてる。つまり初期も初期だね。
カラサワは良いとして、月光はエネルギーブレード発生器として考えてくれ」

鈴音

「どうでも良くない、そんなの？」

一真

「馬鹿。エネルギーブレード発生器と、5verの月光じゃ使用
途の幅が大きく変わるぞ。5verの月光なら白式さえ恐くない」

セシリア

「物理攻撃が出来るからですか？」

一真

「そういうこと」

シャルル

「それに手で持たないといけないから戦術も狭まるね」

一夏

「そうなのか？」

一真

「5verでは場所を選ばないと行けないが、初期なら出力調整で使い勝手がいいんだ。さらに重さがないから好きに触れる。代わりに慣性を味方には出来ない」

一夏

「どうでも良くないか？」

一真

「本来の月光は鏑迫り合い、打ち合う事が出来ない。そんなのは念頭じゃないんだ。それはつまり超高々温に耐えるブレードさえ用意できればナインボールを切ることが出来る。」

月光の優位性は一方的な攻撃だ。防げず、当たれば全て融解させるだけの攻撃。だが、それさえクリアすればヒットアンドアウェイにこれほど弱いのはない。勢いを付けられれば尚更にな」

シャルル

「そうなの？」

一真

「ようは熱伝導さえクリアすれば、な。音速を超えるような攻撃以外は平気だ」

シャルル

「でも装甲はどうするの？」

一真

「以前、ラウラに装甲打ち貫かれたのを忘れたのか？
やろうと思えば出来るんだ。ナインボールの装甲はアイアスの盾でもなければアイギスの鏡でもない。あくまで硬々度の装甲だ」

鈴音

「出来ないから聞いてるんじゃない」

セシリア

「しかし、そうなるとボーデビツヒさんのパイルバンカーはゲイボルクかオーディンの槍といった所ですか」

一真

「それはパイルバンカーでヴァンパイアごっこした俺に対する嫌味か？」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

シャルル

「静岡ＩＳ研究所にいる人達ってそんなに凄い人なの？」

一真

「百戦錬磨な小隊長を始め、中隊長になれば一騎当千、大隊長なら常勝無敗が普通の方々です。それらを纏める陸自、空自、海自の総隊長、副隊長は化け物揃いで連隊を組んでの作戦ならＩＳ数機も相手に出来る」

セシリア

「なんでそんな方々がこんな極東の島国にいるんですか？！」

一夏

「自衛隊、だよな？」

一真

「誰かを守りたいを信条にする皆のヒーロー自衛隊だな」

鈴音

「いや、ありえないって」

一真

「静岡研は日本のＩＳ研究の重要拠点なんだ。つまり日本のＩＳ研究データは全てあそこに保存されていると言っている。さらにＩＳの研究で産まれた副産物もあそこで管理されるから完全な機密扱いだ。」

ＩＳのデータは基本的に開示しなければならない。研究も同様にな。だけど、それは設計図や武装の理論やＯＳくらいで、細部の素材やシステムなんかは開示しなくてもいい。つまりそれらの機密情報を

守るために秋葉さん率いるサイレントヒルがいる」

一夏

「でも、ISの技術って他の兵器に転用出来ないんじゃないなかったのか？」

一真

「コアやPAC本体はな。

だけど裏返せば駆動系のシステムや装甲、武装なんかはいくらでも転用が出来る。

火器管制システムは戦闘機や戦車、戦艦に転用出来るし、装甲だって同様だ。ISで使う武装も種類によっては小型化するだけで転用出来る」

鈴音

「なに？日本って戦争の準備でもしてるの？」

一真

「憲法9条がある、と言いたい所だがこの物語の中では色々ど勝手が違うから後で説明するとして……」

日本は専守防衛が主だが、それ以外には紛争国に行って民間人の護衛もするし、国際救助も行う。それらで如何に隊員を死なせないようにするか、そういう経緯から過剰とも取れる兵器を開発してるんだ。

ちなみに、物語中にも出たが紛争国に実際秋葉さんが行っているのは分かるな」

セシリア

「もしかして隊員の異常な強さも死なないため、ですか？」

一真

「生存確率を上げるためにサバイバル訓練はするが、一番の要因は・
・・・・経費と伝統のせいだ」

一同

「経費と伝統？」

一夏

「え、なんで強さに経費や伝統が絡むんだよ？」

シャルル

「もしかして世界で一番の軍事費出してるとか、強くなれる秘密の特訓法があるとか？」

一真

「残念だが軍事費、日本の場合は防衛費は世界で6番目だ。それも5と6では数十億の差がある。その限られた防衛費を開発、弾薬、隊員の給料、施設の維持費、広報費に回すと弾薬費が面白い事に世界で14番目に落ちる。つまり無駄弾なんか許されないんだ・・・・・そうなるに確実に当てなきゃ訓練にならない。そのせいか日本の自衛隊は例えばハンドガンだろうが機関銃だろうが確実に当てるのが普通になる。弾をバラまくなんて有り得ないんだ」

一夏

「なんかイメージが」

一真

「そんな日本人を見たアメリカ人が何て言ったと思う？
奴らは機関銃を持ちながら爺のションベンみたいに撃つんだ。さらに全部当てやがるから変態じみてる」

一同
「」

一真
「そんな自衛隊だから射撃、運用効率、時間は正確になってんだ。ちなみに日本人は昔から効率を求める癖がある」

シャルル

「えっと、それが経費だとして伝統って？」

一真
「自衛隊の訓練は世界でもスパルタで有名だ。それが他国の人間でさえ妥協せず、モヤシヤンキーさえ2年で爽やか細マッチョイケメンに矯正するほどまでにな」

一同
「」

一真
「懐かしいな……最初の頃は準備運動にもついてけずにバテてたっけ。倒れても無理矢理水ぶっかけて続けさせるから否応なく全てのメニューが終わるんだよな」

セシリア

「ぎ、虐待にならないのですか？」

一真
「それぐらいの訓練に着いて行けなきゃ実戦で役に立たないからだよ。実際に陸自がサバゲーに参加すると現役特殊部隊やサバゲーマ

ニアをボコボコにするからな。

日本人は精神論と根性論で無理や道理をぶち抜くから怖い」

一同

「

主人公&ヒロイン お茶会中・・・

鈴音

「ねえ」

一真

「むぐむぐむぐ……なんだ？」

鈴音

「アンタが秋葉さんに会ったのって研究所が初めてなのよね？」

一真

「ああ、間違いない」

鈴音

「じゃああの夢は何よ？」

一真

「それは後に語られる」

セシリア

「またですか？」

一真

「またです」

シャルル

「今回はその……少し描写が激しかったね」

一真

「腹を抉られました」

シャルル

「うぐう」

一真

「腹パン改め胸パンされてドリブルされました」

一夏

「ああ」

一真

「血をコレでもかと吐き出しました」

鈴音

「あれねえ・・・」

一真

「腕が逆観節になりました」

セシリア

「それは、そうですが」

一真

「今さら頭が吹き飛んだからってなんだい」

一同

「いやいやいや！」

一真

「昨今のギャルゲなら性描写くらいあるから大丈夫」

一夏

「その理論はおかしい」

一真

「紛争で強奪、強姦、拷問があっても不思議じゃない。殺戮が日常茶飯事だから紛争なんだぞ」

鈴音

「そんな血と硝煙塗れなハードボイルドは御呼びじゃないっての」

一真

「悲しいけど、これ戦争なのよね」

シャルル

「そんな戦争なんて」

一真

「今すぐ起こりえるのは国家解体戦争、リンクス戦争なんかだな。虐殺エンドから最後のリンクスまで様々だ。ちなみにバッドエンドは6つ中4つだ」

一同

「多っ?!」

一真

「今のところ虐殺エンドと最後のリンクスがノーマルエンド、それ以外はオリジナルに近いが悲惨か凄惨かの違いだな。

ちなみにグッドとトゥルーは俺がレギュラーメンバーか準レギュラーと結ばれるのであまり考えておりません」

一夏

「別にいいじゃんか。みんな幸せになるなら万々歳じゃないか」

一真

「なにを幸せにするかで意味が違ってくるがな。死んだほうが、知らない方が幸せっていうのも世の中には確かに存在するんだぜ？」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

一夏

「なあ、一真」

一真

「あぐあぐあぐ」

シャルル

「はふはふはふ」

鈴音

「夏場の鍋も悪くないわね。あ、鱈もらい」

セシリア

「このトーフウという食物、味がしませんわ」

一夏

「かず——」

一真

「卵に出汁を混ぜて食べてみる。悪くないぞ」

セシリア

「うう、卵を生で食べるなんて・・・」

一真

「日本の食の追及舐めんな。卵はおろか肉だって生で食べられる国だぞ」

セシリア

「ですがあ」

一夏

「か——」

一真

「なら俺の食べてみろ。ほれ」

セシリア

「そんなドロリとしたものを向けないでください!」

鈴音

「あ、なら貰っていい?」

一真

「卵が食えるお前にはこれだ。特性の柚子胡椒のタレ。旨いぞ」

鈴音

「どれどれ・・・本当ね。柚子の薫りが憎いわ」

シャルル

「僕もいい?」

一真

「この梅肉から作ったタレも旨いぞ」

シャルル

「酸っぱ?! あ、でも悪くない・・・・・・むしろ爽やかでいいかも」

一夏

「」

セシリア

「うう、う~~~~っ! オルコット家を舐めないでくださいまし!」

ヒョイパクッ」

一真

「どうよ？」

セシリア

「……………あら、美味しいですわ」

一真

「榎茸も旨いぞ」

セシリア

「あれだけ生卵に抵抗がありましたのに……………これなら他にも試してみたいですわ」

一夏

「無視すんなよ！」

一真

「なんだ、居たのかミラコロ主人公」

一夏

「お前、わざとか！そして俺のネギ返せ！」

一真

「聞きたかったことだろう？ 実戦してやったぜ！ 感謝しろ！
そしてネギは返さない！ 何故なら感謝料だからな！」

鈴音

「まさに外道」

一夏

「俺が悪いんじゃない！脚本が悪いんだ！」

一真

「順調にハーレム作れるなんて甘いんだよ」

一夏

「そんなつもりはねえよ！」

主人公&ヒロイン 鍋中・・・

セシリア

「皆さんも朝昼夕と食後には歯磨きをしてくださいね♪」

一真

「ズルズルズル！（いつ鍋がターンエンドした）」

鈴音

「あー、やっぱ鍋のメはうどんね」

シャルル

「あちち」

一夏

「大丈夫かシャルル？」

シャルル

「うー、舌やへどひた」

一真

「ちゆるちゆるちゆる」

鈴音

「ところで、前に出たアルフレッドって人はなんで死んだの？」

一真

「流れ弾で飛んできたカラサワの爆発に巻き込まれて」

シャルル

「ちなみに僕の目の前でだよ」

セシリア

「それは、キツイですわね」

シャルル

「シチュエーション的には助けに来た僕を見たアルフレッドがカラサワの一撃で消し飛ばされたの」

鈴音

「ああ……それは来るわね」

シャルル

「だから僕は自分が遅かったせいっていう自責と、オリジン＋ナインボールⅡお兄ちゃんて裏切られたっていう怒りでああなったの」

セシリア

「ついでに聞きますが、物語最後でリヴァイブの手が潰されたり、ねじ切られましたが、デュノアさんは大丈夫なんですか？」

一夏

「話の流れ的には無事そうだな」

一真

「んぐんぐ……説明しましょう！」

H
1

「ホワイトボード準備完了しました」

一真

「ありがとう。」

さて、まずはISの内部がどうなっているかだが、まずISがスーツであることを念頭に置いてもらおう。スーツとは様々な意味を持つが今は素肌を守るという意味で進める。

まずISは鎧の要素を含んだ宇宙服である。

腕や足、各間接は肉体の動きにトレースするのではなく、直接動かしている。

肉体の動きを読み込み、

脳から命令で力の加減を決め、

最終的にISの動きになる。

この工程を踏んで初めてISは自由に動く。

これがISがパワードスーツという由縁である。

ISはあくまで体を覆うスーツでしかなく、操縦者本体ではない。

一真

「今回に当てはめるなら、リヴァイブは手を握り潰され、さらに腕をねじ切った。
さて、これをシャルルに当てはめると手は握り潰されていり。それもこれでもかと」

一同

「ええ?!」

一夏

「ま、まさか腕もなのか?!」

一真

「それは大事ない。手は潰された、つまり包み込まれるように力がかかるがネジ切るから横に力がかかるだけだ。服を横に捻っても腕が捻れるわけではないだろ」

一夏

「なるほど・・・」

主人公&ヒロイン 歯磨き中・・・

鈴音

「質問質問！」

一真

「はい、凰さん」

鈴音

「システム・パルヴァライザーって何？」

一真

「禁則事項です☆（裏声）」

セシリア

「世界を知った、とありますが何を持って世界と言ったのでしょうか？」

それにシステム・パルヴァライザーの中身もわかりません。さらに以前も名前だけは出ましたが、発動さえしていないようでしたわ」

一真

「それも秘密です」

シャルル

「AC的には――」

一真

「おっと、なぜかアンサラ―が振ってきた（棒読み）」

一同

「なんで?!」

主人公&ヒロイン 初AF戦中・・・

一真

「腹を貫かれた・・・もう、お婿にいけない！」

シャルル

「だ、だったら僕が貰うから安心してよ！」

一真

「あ、ヤンデレとかパスなんで」

シャルル

「ヤンデレ・・・そんな、まさか」

一真

「ぶっちゃけさあ！こういうのって主人公の役割だろ！ゆとり主人公なんざ許さん！」

鈴音

「いきなりキレんな」

セシリア

「それに一真さんらしいではないですか」

一夏

「俺だって嫌だよ」

一真

「やーだー！痛いのがやーなのー！（犀川一真20ちゃん）」

鈴音

「いい大人が駄々捏ねるな！」

一真

「俺だって、俺だってたまには・・・まで、今俺は重大なことに気が付いた」

セシリア

「どうしました？」

シャルル

「ヤンデレ・・・・・・・・僕が？」

一真

「俺は、重大なパターンを見つけてしまった。それは・・・

3〜4話スパンで俺が大怪我か不幸に見回れている！

嘘だろ」

一同

「(回想中)・・・マジだ」

一真

「いや、ガチで無意識でしたスイマセン。

えー、今回から数えて三話後だから・・・嘘お。なんかそんな予感してきた」

一夏

「いやいやいや」

一真

「だって、次が仲直りだとして買い物、海だぞ」

鈴音

「御愁傷様」

セシリア

「お悔やみ申し上げますわ」

一真

「殺すな。死なない」

シャルル

「でも、本当に変なパターン入ったね」

一真

「これを解析すると、

物語の始まり、起

←

伏線の準備開始、承

←

伏線回収から結末、転

←

とりあえず重症でおk、結

うわあ、うわあうわあ」

一夏

「ヤバい、かなり説得力が」

鈴音

「これは酷い」

セシリア

「確かに酷いですわ」

シャルル

「あ、つまり福音編でも」

一真

「ぜってー無傷で終えてやる」

一夏

「前もそう言ってなかったか？」

一真

「我が家には、フラグは叩き折るべきという教えがあるんだよ」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その17 「やっぱり嘘じゃないですか中に（ryだからさあ大変」（前

この小説は勇気と知力とカリスマをマキシムにさせんがために書かれた物語である。

寛容性がオカン並か菩薩級、もしくは露天風呂で処刑されそうになっても「どうともいい」と言える無気力症患者のみお読みください。

それ以外の方々は眼鏡未装着で湯気の沸き立つサウナなダンジョンか、不思議なラブホにシャドウを狩りに行きましょう。

大丈夫。心配する必要があるのは尻だけです

事件その17 「やっぱり嘘じゃないですか中に（ryだからさあ大変」

夏の暑さがもうすぐピークに達する7月の初め、臨海学校が一月延期になった。

アメリカ軍の演習が近くにあるため民間人に『もしも』がないようとの配慮らしい。

詳細は軍事用に開発されたISをテストするのだとか。条約はどうしたのかと言いたかったが、開発した国が国だと納得する。

さらに、これは余り悪い事ばかりではない。

確かに、大国が力を付けるのは怖い。だが、アメリカが力を付ければ付けるだけ中国と韓国の中韓連盟を牽制出来る。それは日本に

とっても悪い事ばかりではない。

しかし、秋葉さんや斎藤さんは呆れていた。「軍事用ISを他国の領海近くでテストする意図が分からない」とは秋葉さんの弁だ。斎藤さんはそれに「男のつまらない意地よ」と皮肉るが、俺も男なのだが。

周りの反応はマチマチだ。文句を言う者もいれば、準備期間が延びたと喜ぶ者もあり、特殊な者だとこのまま行きたくないと言う者もいた。

行きたくない。

それを言ったのはデュノアだ。

その理由も難しい事はない。「お兄ちゃんと、顔を合わせたくない」と言った単純明快な物だ。

心配せずとも臨海学校は順番制。一組と三組では二週間違いで海に行くのだから問題ないのだが……

「お前と秋葉が居る方が訓練が捗るからな。最低でも一月は臨海学校だ。

嬉しいだろ。なにせ若い奴らの水着姿を毎日見れるのだから」

とんだ迷惑だ。

一月も海なんて……また公安に騒がれるじゃないか。そ

れに中華連盟が煩いに決まっている。あの尊大な使者を思い出せば分かる。あのネガキャンだって……やべえ、思い出したら殺意が沸いてきた。

考えを戻そう。

デュノアが暴走したのがつい1週間前。

俺が退院したのが4日前。

その間、アイツは懲罰房で謹慎を受けていた。

意識を取り戻し、動けるようになった俺はそれを他人事のように聞き流していた。周りはその三日間をアレやコレやと誇張させて話し聞かせてきたが、どうでも良かった。

存外に大した罰じゃない。

それが俺の正直な感想だ。勿論、これは嬉しい結果だ。

これが外にバレたら間違いなくデュノアは裁判沙汰になり、下手すれば実刑も有り得た。意識がない俺に代わりデュノアを譲護してくれたH・1には感謝している。さらに、実行に移してくれた秋葉さん達も同様だ。

後は時間が解決するのを待つばかりだ。こればかりは他人が関わっていいことは余り無い。

だというのに、

「会ってくれ」

「励ましてください」

「彼女、傷付いていますわ」

「アンタも男ならどうにかなさいよ」

あの面子は退院した俺にそんなことを言ってきた。退院初日に言うべきことではないだろう。

勿論、断った。だが奴らそれなら後日、その日の夕方、昼休みと頼みに来る。

その全てがナンセンスな願いばかり。

アホだ。真性のアホに違いない。

あの生真面目なデュノアが今の状態で俺に慰められたら、高い確率で罪悪感を感じるはずだ。

自分が落ち込んでいたから俺に心配をかけた、自分が弱いから俺を傷付けた。

これ以上の迷惑はない。

今、俺が、デュノアに、関わる事は出来ない。

これは確定事項だ。

変に関わってデュノアに強迫観念を植えるつもりはない。依存されるなんて吐き気がする。

『マスター、少し無理のし過ぎです』

「やめて、現実・・・突き付けないで」

『現実逃避しながら走るにも限度があります』

「俺のドリルは、天を突く、ドリルだあ・・・！」

吐き気により覚束ない足を叩きながら気合いを振り絞る。

燦々と降り注ぐ熱射と疲れによる吐き気。気にならない程度だが、鈍い頭痛も起こりはじめている。

『天を突く前に体力が尽きます。』

50kgの荷物を背負ったのランニングはまだ無理があります』

「たかが二倍の重量でコレとは」

背中にのしかかるカバンを一度担ぎ直す。中身はパンパンに詰められた砂鉄だ。

自分の腑甲斐なさを目の当たりにしているのはシャルルだけじゃない。俺も同様だ。

あの時、俺がすっかりしていればと考えると居ても立ってもいられず、退院してからは毎日これを担いで学園の外周を走っている。

ちなみに以前は砂で、重量も25kgと普通じゃない。

ちなみに、自衛隊の訓練には85kgの荷物を担いで目的地へ歩く訓練が存在する。それに比べればまだ楽かもしれないが、今はそんな事実慰めにもならない。

「頑張ってねー」

後ろからやってきた陸上部が手を振りながら追い越していく様を見送る。

見覚えの顔だ。

いつもなら彼女達と同じペースで走るのだが、今日ばかりは一周遅れで走っている。

手を振られたので愛想良く手を振り返そうとするが、手が胸より上に上がらない。本当に体力が尽きかけている。

『……………早く終わらせて休んで下さい。熱中症になります』

「そうする」

この後のトレーニングを考えると今倒れた方が楽になるのかもしれないが、それでは何も変わらないため自らに渴を入れる。

変わると決めたのだ。この程度で倒れていては――

「大丈夫、犀川君？」

「お先ー」

「正門で待ってるよー」

――少なくともこんな苦痛から逃げられるはずだ。

いつも大差をつけていた陸上部一年に先を越されてしまった。これにはプライドが少し傷付いた。俺のハートは防弾ガラスだが、割にくい代わりに傷がつきやすいのだ。

「ナインボールさえ使えば」

『トレーニングの意味を考えてください』

重量を感じさせる足音を立てながら長い道程を走りだす。太陽はもうすぐ天上に差し掛かろうとしていた。

最近の一真はおかしい。

やけに冷めているし、眼が死んでいる。特に一組に来た時がおかしいと言える。

「連帯崩れてるぞ。」

エレメント2、前に出過ぎだ。もう少し周りを見る。

エレメント3は丁寧過ぎだ。ミスは恐がらずにとにかく周りと速度を合わせることで考えろ」

「は、はい！」

「エレメント1は射撃に集中し過ぎだ。隣との間隔は一定に保て・・・それじゃ最初から。フォーメーション鳳仙花」

「「了解！」」

ナインボールを中心に4つの機影が花卉を散らすように四散し、回転しながらアリーナ上空を飛行する。離れては近づき、近づいては離れながら回転運動しながら飛行する。フォーメーションの通り花卉を描くような動きだ。

「エレメント1、3。次は射撃に移る。お前らは牽制射撃だ」

「はい！」

「牽制だから的に当てなくていい。回避するの周りを撃って行動範囲を狭めろ。」

エレメント2と4は当てろ。動きながら射撃だが、そこまで難易度は高くない」

「了解しました」

「じゃあ、開始！」

一真の合図と共に多重の丸を描いた的が出現。アリーナ中を縦横無尽に飛び回る。

牽制する2人に遅れて残りの2人が的に狙いを定める。

「飛行速度は落とすな。焦らず狙って撃て」

一真の声に従い2人は狙いを定めて撃つが大半は逸れ、中には当たる弾丸もあったが両手で数えるのがやっとだ。

5人が降りてくる頃には複数あった的の半分は消え去り、残りは未だに地上で動き続けている。

その成果に周りは「おお！」と言いながら拍手を送った。

一真達の班が使用するターゲットの設定はオート回避が組み込まれている。未だに停止した的にも満足に当てられない人間がいる中でこの結果。間違いなくレベルは頭一つ抜きん出ていた。

「悪くない。後は慣れていけば十分だろう」

「」「はい！」「」

「まずは団体行動を完成させろ。射撃なんて個人練習で幾らでも出来る」

「こんな風にな」と一真は動き続ける的にマシンガンを向け、引き金を引く。

連続する発砲音が数度。一瞬の間を置いてアリーナに響き、終わる頃には全ての的が消えていた。

「凄い！」

「動かなければお前らも出来るようになる。」

実戦は敵味方動くんだ、今からそれじゃ苦労するぞ」

「」「はい！」「」

「それじゃ次の人に交代しろ」

捕捉になるが、一真の班は学年で一番厳しいと批判を受けている。

行動が遅れれば怒鳴り、早過ぎても怒鳴り、迷っても怒鳴る。平然と怒鳴る一真に周りはいいい感情を向けないが、一部の人間からは好評だった。

結果が出るからだ。

現に一真が担当している班は一年の課題の大半をなんとかクリア出来るレベルにまで上達している。厳しさに見合う結果に見てもらっている生徒からの評判は高い。

「なあ、ラウラ」

班の練習を見る一真を見ながら近くにいたラウラに声をかける。彼女も班の人間にアドバイスを送っており、その声は最初の頃に比べるとかなり優しい。班の空気も張り詰めてはいたが、真剣さ故で悪い雰囲気は全く無い。

「なんだ？」

「一真の奴、なんでシャルルに一声も掛けないんだ？」

「そのことか」

ラウラはシャルルの話題を聞いて難しい顔をする。

今朝、顔を見たが酷いものだった。

生気の無い目、濃い隈、やつれた頬、蒼白い肌、カサカサになった唇。そして暗い雰囲気。

明らかにまともな状態じゃない。

「一真が励ませば済むだろ。なんとかならないか？」

「嫁の考えは否定したくないが、余り得策ではない。

シャルルは真面目だ。今の奴を勘違いとはいえ重症を負わせた兄が励ますのはマズい」

「だけど、だからってこのままじゃ何も解決しないって」

「それはシャルルの問題だ。

シャルルが歩み寄れば別だが、兄から歩み寄るのは避けるべきだ」

「だけど」

「今、兄がシャルルを励ませばシャルルは罪悪感で潰れてしまう・・・
・・・私ならそうなる」

ラウラはそう言って表情を暗くする。きっとあのトーナメントの事を思い出しているのだろう。

ラウラの言うこともわかる。それでも、このままなんてダメだ。

「なら、尚更話さなきゃダメだ。このままじゃ2人共きつと後悔する」

「嫁は優しいな、残酷なほど優しい」

目を細める彼女の感情は複雑だ。嬉しがってはいない。だけど非難しているわけでもない。まるで眩しくて細めているようだ。

「たとえ残酷でも、このまま2人が潰れるくらいなら俺が間で受け止めてやるさ」

それが二人の為なら尚のことだ。

一日の授業を終えた俺は早速二人をどうするべきか話すためにみんなと屋上に集まった。

「まず、俺から意見を出すぞ。

俺は、まず2人が話すべきだと思うんだ。確かにシャルルの気持ちも分かる。傷付けた一真に近寄り辛いつても分かるけど・・・いつまでもこのままじゃマズいと思うんだ。

だから、俺は一真とシャルルを多少強引にでも会わせないといけない」

「確かに、この三日間の2人は見るに堪えん。先輩はシャルルを遠ざけ、シャルルは必要以上に先輩から遠ざかっている」

「シャルルさんは分かります。罪悪感で顔も合わせられないという仕方の無いことです・・・・・・しかし、だからこそ一真さんが歩み寄るべきでは？」

「私もセシリアに同意だ。ここは先輩が歩み寄るべきだ」

2人の意見は俺と同じく一真とシャルルを今すぐ会わせるというものだ。違いは一真がシャルルに会うということだが、あまり違いはない。

だが、それに待ったをかける声が上がる。

「でもさ、それじゃあシャルルが余計追い詰められない？あの娘だって好きでそうしてるわけじゃないんだし、やっぱり心の

「整理が終わるまで待たないと不味いわよ」

意外なことに、それは鈴が言い出した。

いつもの鈴なら下手に考えるよりは一真の部屋に殴り込んで引き摺るくらいやりそうだが、どうやらそれは俺の勝手なイメージだったようだ。

「しかし、そんな消極的では何の解決にもなりませんわ!」

「そうだ。このままシャルルを放っておくなど私には出来ん!」

「そりゃあ、私だってあんなシャルル見たくないわよ……でも事が事だからあんまり派手に動いたらマズいんじゃない?」

「私もその意見には賛成ですー。人の心は繊細ですからー、あんまり急ぎ過ぎれば傷つけかねませんー」

間延びした声とは裏腹にみゆきの目はいつになく真剣で、さらに妙な迫力があつた。

「……春奈と花子はどうなんだ?」

意見としては3…2。多数決するにしてもまだ全員の意見は出ていない。

2人は難しい顔で悩む。

春奈は俺達の顔色を伺いながら悩み、花子は目を粒って唇を指でなぞる。

「私は、もう少し時間を置くべきだと思う……。確かに皆が急ぐのも分かるけど、シャルルちゃんの気持ちも考えてあげたほうがいいよ」

「花子はどうなんだ？」

「私は……。うん、無理矢理にでも合わせるべきかな。拗れたら私らでフォローすればいいし、会わせるべきだよ」

また、意見が分かれた。

話し合いはまた平行線に戻り、誰もが口を閉ざしたままのラウラへ視線を向ける。

彼女は腕を組んだまま何か考え込んでいた。

「私はシャルルと兄を今会わせる意見には反対だ。理由は、兄の気遣いを足蹴にするような物だ」

「気遣い？」

「兄はシャルルを気遣って話し掛けないのだ。

今のシャルルは話し掛けても何を話せばいいか分からない、何も解決しないと踏んでシャルルと距離を置いている。それを無理矢理近付けば、今度はシャルルが明確に兄を遠ざけようとするはずだ」

「それは・・・・・・・・」

考えもしなかったラウラの考えに顔を顰める。周りも同じなのか皆難しい顔で隣と視線を合わせたりしていた。

「ならば、どうしろと言うのだ。このままでは先輩もシャルルも理解し合えないままだ」

「その為の集まりだ」

「ですから、どうするべきかと」

「元々2人の問題に介入するのだ。簡単に出ないことは分かっていたはずだ」

「だから悩んでるんじゃない」

はあ、と誰かが溜息をつく。それが俺達の本音であるかのように行き詰まった感情を代弁してくれる。

「やっぱり合わせるべきだよ。かずーなら上手くやってくれと信

じてさ」

その意見には賛成だ。

一真なら上手い具合にやってくれる。そう信じるしかない。

「……俺もそれに賛成だ。

確かに、俺達は第三者で何も分かつちやいないかもしれない……
……それでも、俺は何とかしたい。このまま2人が歩み寄れない
なんて俺は嫌だ」

「私の意見は変わらん。だが、嫁がそこまで言うなら……
手伝いくらいはしよう」

「サンキューラウラ！」

ラウラの言葉に俺は思わず抱き締める。

兄と慕う一真を尊重したいはずのラウラが手伝ってくれる。これ
以上心強い物はない。

顔を赤くするラウラから体を放し、みんなにもう一度聞く。

「みんなはどうする？」

「私は勿論手伝うんだぜい！」

「私だって！」

「わ、私もですわ！」

「仕方ないわね」

みんなが手を上げてくれた。本当に、いい奴らだ。

「それじゃあ、早速行動開始だ！」

「————というわけだ」

「帰れ」

事情を説明した一真の返答は無二もなく帰れという言葉のみだった。

目の前で黙々と筋トレを続ける一真を見下ろしながら俺達是不満な顔をする。対する一真は無表情だ。

アレから話し合った結果、一真に話し合いを持ちかけてもらうという決定になった。

シャルルでは時間ばかり経つ。ならば、あの事件を割り切っている一真の方がまだ足は軽いはずなのだが・・・・

「お前ら、無神経にも程があるぞ」

顔色1つ変えない一真は背中に巨大な鞆を乗せながら腕立てを続ける。子供一人入りそうな鞆が上下する様は非現実的で、冗談のような光景だ。こんなものの漫画の世界でしかないと思ったが、そうでもないようだ。

「お前はシャルルが心配じゃないのかよ？」

「心配するのと、今すぐ話し合うのは繋がらない」

「アンタ、冷たくない？」

もしかしてシャルルが嫌いになったとか器が小さい事言わないわよね？」

「別に嫌いはいしな。訳も聞いたからな……だから放つていた」

「仕返しのつもり？陰険よ」

「なんでお前はそんなに喧嘩腰なんだよ」

腕立てを終えた一真は疲れた腕を揉み解しながら立ち上がる。顔には汗が浮かんでさえないのに、首筋には多量の汗が流れ、光っている。

「なら何故励まして差し上げないんですか？」

「励まして何になる？」

「励ませば彼女は救われますわ」

「それは誰にとっての救いだ」

「随分冷たい物言いですわね」

「冷たいか？」

「ええ、友達を思っている方の言葉とは思えません」

「人の価値観なんて人それぞれだろ」

タオルで汗を拭った一真は次に腹筋を始める。

俺達が真面目な話をしているのにコイツは・・・

「見損ないました！」

「その反応、飽きたよ」

「先輩がそんな方だったとは！」

「はいはい」

他人事のような態度を貫く一真に一步近寄る。

「なあ、一真。俺達、マジでシャルルを心配してんだよ……少しは真面目に聞いてくれ」

「その結果が、これなら、止めておくことだ」

「まるで、分かってるような言い方じゃないか」

「少なくとも、お前らよりは、アイツの気持ち分かる」

「分かって放ってんのかよ……お前、マジで言ってるのか」

「だから、飽きたんだよ、その反応」

「お前！」

此方の話を腹筋をしながら聞く一真の胸ぐらを掴み上げる。何人か止めるよう叫んだが、俺は止まらない。

「なんでそんなに冷たいんだよ！シャルルは本当に落ち込んでんだぞ！分かってんのか？！」

「……」

伽藍な、黒く深い瞳に映る俺を睨み付ける。

「シャルルは泣いてたんだ、泣いてたんだよ！」

「・・・・・・・・」

何も言わぬ、何も返さぬ人形に響けとばかりに声を大にする。

「ずっと1人で、ずっと誰にも話せずにな！」

「・・・・・・・・」

「お前に分かるのか！一真！」

「・・・・・・・・」

そんなのは間違いだと叫びをあげる。

「助けて欲しい人に、助けても、言えない苦しみが分からないのかよ！」

「・・・・・・・・さい」

「暗い部屋で泣く寂しさが分からないのかよ！」

「・・・・・・・・まれ」

「お前は本当に分からないのかよ一真！」

「殺すぞ」

何が起きた？

気付いたら上を向いていた。

何故、こんなに苦しいんだ？

一真に、首を締め上げられているからだ。

「うえ・・・」

一真は俺の首を片手だけで締め上げる。

「いったい、一真の握力はどうなっているんだ？」

「一人を持ち上げるなんて普通じゃない。その証拠に、締め上げる指は万力のようなだ。振りほどこうと力を込めてもビクともしない。」

「足は宙に浮き、体を支えるのは首を締め上げる一真の腕のみ。」

「あまりの苦しさにその手を握るが、力が弛むことはなかった。」

「ならお前に理解出来るのか……助けを求めてもいいと思える人間がいない苦しみが、助けを求めて上げた手を下ろすしかなかったときのやるせなさだ」

「がぁ……っぐ」

「なんとか見れたのは冷たい眼差しだった。」

「俺よりも後ろ、どこか遠くを見ているような焦点の合わない眼に寒気を覚える。」

「暗い部屋で膝を抱えて、この世の何もかもを否定した後の虚無感がお前に分かるのか」

「は……な、せ」

「お前は、本当に俺を怒らせる天才だ」

深く食い込む指により喉がさらに圧迫され、俺は必死にその手を解こうと爪を立てて掻き篁る。

「ぐ……うあ……」

視界がボヤけ、段々眠たくなってきた。

足先から軽くなるような奇妙な感覚に違和感を感じながらも、その違和感も次第に慣れてくる。

体が軽くなる。

奇妙な感覚だが、妙に心地好くて眠気を誘う。

このまま力を抜いても……

「兄！」

ラウラの叫びから数秒後。俺は頭を床に打ち付け、仰向けになつて咳き込んでいた。

「いほっ、いほっほ」

「「一夏！」」

「「一夏さん！」」

「一夏君！」

涙で滲む視界一杯に俺を心配してくれる箒達の姿が広がっていた。さらにその遠くでは冷たい眼で見下す一真と、俺と一真を交互に見比べるラウラがいた。

一真は俺と視線が合うとあからさまに眉をしかめる。

「不愉快だ。暫らく関わるな」

そういつて一真は手早く荷物をまとめ始めた。

箒達は怒鳴る勢いで止めるが、返された鋭い眼光に怯えてそれ以降は口さえ開けずにいた。

「まだ、話は」

「五月蠅い」

トレーニングルームから退出する一真を引き留めようと立ち上るが、体は腰から下が地面に張り付いたように動かなかった。

情けない。

自分の無力さが、情けなくて泣きたくなった。

なんでいつも俺はこんなに無力なんだ？

必要な力は、いつも俺以外の誰かが持っていた。俺が必要と感じたときに力があつた例はない。

悔しい。

情けない。

力が欲しい。

嫁達と別れて小一時間が経った。

兄が去った後、私達は兄の行動のおかしさを話ながらどうしたものかと途方に暮れ、結局その時は解散するということで話は終わった。

現在、私は部屋に帰っている最中だ。

昼間のうだるような猛暑の余熱は外だけではなく寮の廊下さえ蒸し返す勢いだ。

このままでは蒸し殺されるかもしれない。そうになると、兎の蒸し焼きになるのだろうか？

我ながらくだらない冗談だ。

外を見れば茜色の空が見える。ちょうど、病室で見たような夕焼けだ。

少しずつ日が傾いているとはいえ、残暑は質を変えて私に襲い掛かるだけでしかないのが嫌な点だ。

ドイツとは違う夏に汗を垂らしながら上着を脱ぐ。

風通しが良くなり、さっきまでは感じなかった風がシャツの中を通る。

蒸れて熱を持つ肌にとってその風はとても心地が良かった。

暑さから解放されると次の問題が私の心にのしかかる。

昼間の件だ。

兄が断るといふのは考えていたが、まさかあのようになで黙らせるとは……信じたくない。

（たが……）

全てを知った訳じゃない。まだ、私は兄の本音を聞いていない。絶望するにはまだ早い。

絶望という感情に刺激されてあの時の記憶が浮かび上がる。

突き放された。

見放された。

失望された。

だけど、

（兄は、あの時だって助けてくれた。口では期待してない等と突き放したが、それでも来てくれた）

そうだ、この程度で兄を分かったつもりになってはいけない。

あの口下手で素直じゃない人を分かるならあの程度の問答では足りない。

（……行くぞ、ラウラ・ボーデビツヒ。貴様が黒兎を語るなら可能な筈だ）

到着した白室の前で一度深呼吸をする。

新調された燻銀の扉に手を掛ける。

室内はスタンド以外の灯が落とされていた。

オレンジ色に照らされた室内。

薄明るい筈の部屋が何故か暗く感じた。

しかし、探し人を見つけるのには苦労はいらなかった。兄はベッドに倒れていた。

室内が明るくなった事で私に気付いた兄は顔を少しだけ傾け、眼だけ動かして私の姿を確認し、確認が終わればまた天井に視線を移す。

何か声をかけてくれると期待した私は、そんな兄の反応に少し寂

しさを感じてしまう。

一目見て分かるほどに兄の顔は疲れ切っていた。

眼は虚ろ、体は脱力し切り死体のようで、雰囲気は暗く重い何か
が兄を圧し潰しているようなプレッシャーを感じる。

「・・・・・・・・」

話し掛けるな。

兄は無意識か意識してか分からないが、そう態度で示している。

近くにいただけで鳥肌が立つ。既知した物の側面を見たような、
そんな寒気だ。

たまらず、自分のベッドに倒れるように腰を落とす。

（コレを兄が・・・・・・・・信じられん）

自惚れていた。

兄を一番知り、理解しているつもりになっていた。

だけど、

（まだ兄は何か隠している）

兄を知らないという事実が目の前にあった。

どれだけ否定しようと、目の前の圧力は私を嘲るように見下ろしてくる。

（自分が、情けない・・・）

知らず知らず眼に涙を流し、鼻も出てきて、啜るたびに嗚咽するように息を吐きだす。

情けない。

情けない。

情けない。

私は、何を一人舞い上がっていたのだろうか。これでは何も変わっていない。

「ぐす・・・・・・・・」

スンスンと鼻を鳴らしながら流れる涙を袖で拭う。

それから暫くが経つと、いつの間にか兄が横にいた。

両肘を太股につけ、前屈みに体を倒しながら兄は眼だけを私に向けていた。その眼には私を心配する感情が浮かんでいた。

「その、悪かったな」

視線を逸らしながらの一言。私と視線が合うとすぐに逸らした眼には本当にすまなそうな色が浮かんでいた。

「だけど分かってくれないか……俺も、まだ整理がついてないんだ」

兄の気遣いにさらに涙が込み上げてくる。

シャルルの件を始め、フランスのテロリスト、所属不明のナインボール、さらには嫁達の行動や国連からの圧力、他国の公安など。

自分の事で精一杯な筈の兄の優しさが嬉しく、私はその行為に甘えるように兄の背に抱き付いて泣く。

覆いかぶさるように抱き付いた私は涙でシャツを濡らす。

涙はシャツを透かし、背中の傷を表に浮かび上げる。

縫合した傷だらけの背中。私はその傷に額を押し付けて見えないようにするが、額の感触がさらに傷の存在感を強めてしまう。

傷だらけの大きな背中。

それが私の知る兄の背。絶対不変で確かな真実だった。

「私は、自惚れていた・・・・・・・・兄の全てを理解しているつもりでいた」

「・・・・・・・・」

「あのトーナメントで、兄と繋がってから、私は誰も知らない兄を知っていると思っていた。優越感に浸っていた・・・・・・・・ただ違うのだな。

私は兄を知らない。今だって兄が分からない・・・・・・・・それが悔しい」

「・・・・・・・・」

「私は、それが嫌だ」

兄の体温で自分を慰めながら、私は知らない兄を感じようと腕に力をこめる。

まるで迷子の子供のようだ。

見知らぬ場所に取り残されて不安がる子供のようだ。

温かい背は何も伝えない代わりに優しさを感じさせる。

熱いようなその温もりだ。それは次第に気持ちの良い暖かさになり、眠気を誘う。

泣き付かれたのもあるのか、私は次第にウトウトと舟を漕いだ。兄の背に顔を埋めては起き、起きては顔を埋めて温もりに溺れる。

それを幾度も繰り返した

「眠いなら寝ろ」

兄の囁きに顔が紅潮する。

「だが・・・・・・・・」

「無理はするな」

優しい声に眠気が背を押されて私に襲い掛かる。

目を開けているのか、それとも閉じているのかさえ分からなくなってきた。

「兄・・・・・・・・」

「なんだ」

「今までののは、夢か？」

おかしいことを言っている物だ。だが、一笑で終わらせる質問に兄は笑って答えてくれる。

「ああ、夢だ。悪い夢だ」

私が大好きな優しい笑みを兄は浮かべる。

何もかも、全てを預けてもよくなる微笑みだ。

「なら良かった．．．．．起きれば兄も嫁も、シャルルもまた笑って」

その先を言うことはない。

虚ろな意識の私は兄の腕に抱かれながらその体を抱き返す。

「ああ、悪い夢さ。夢はいつか醒める。たとえどんな目覚めの悪さが伴おうとな」

兄の決意したような顔に触れ、私の意識は反転した。

「汚れ役は俺がしてやる」

一真が自室に帰った後、俺達は互いにアイツの態度の悪さについて文句を言いながら早めの夕食を取った。

食事を取った後も不機嫌さは健在で、帰り道はずっとその事について話し続けていた。

今すぐアイツの部屋に行こうかとも考えたが、それは止めた。ラウラが頑張ると言ったのだ。今は信じるしかない。

「しかし、どうしたもんか」

一真の反応を思い返す限り、アイツからシャルルを励ましてくれる事はない。

このまま部屋に帰るのもなんだか気が滅入るな。

シャルルが嫌いなわけじゃない。シャルルは好きだ。ただ、雰囲気の問題なのだ。

カーテンを締め切った部屋。

満足に寝れない精神状態。

換気もせず籠もった空気。

栄養価しか見ない食事。

このままではシャルルは倒れてしまう。

健康面から見ればまだ大丈夫かもしれないが、毎夜毎夜うなされて飛び起きるシャルルは寝るのも恐がりつつある。

一度だけシャルルに無理言って定食を食べさせたが結果は悲惨だ。半分も食わずに吐き出してしまった。

シャルルは俺の予想よりも弱っていた。

ラウラによればフランスに居たときから余り食欲を見せなかったらしい。

そして、あの事件だ。

それからはとても酷く、筆舌するのも堪えかねる。

何かあれば自分を責め、それを止めればヒステリーを起こし、ハッとする自分の行動に気付くと頭を抱えながら自分を傷付ける。

一時期はシャルルを入院させることも検討されたが、それを本人は強く否定した。

白い部屋は嫌だ。

行きたくない。

独りにしないで。

搬送しようとした先生達を押し退け、ベッドに嚙り付くようにその場を動かぬとシートに包まった。それから誰の言葉にも耳を傾けず、小さな体をさらに小さくしながら泣いていた。

俺が千冬姉達を説得してなんとかその場は解決したが、根本的解決は何も見付きはしなかった。

「どうしたもんか」

呟いた所で解決策がやってくる訳もなく、俺は死刑囚のように重い足取りで断頭台の代わりに近づく自室の扉に息を吐く。

「ん？」

違和感に気が付いたのは扉まで数mと差し掛かった時だ。

見慣れた光景に異物が入り込んだような違和感に立ち止まって目を凝らす。

「紙・・・・・・・・でもなんで？」

違和感の正体、それは扉の隙間に挟み込まれた紙だった。

ルーズリーフを折っただけの紙がドアノブの横に差し込まれていた。

辺りを確認するが、差し込んだであろう人間はいなかった。

隙間から紙を引き抜くと大きく一夏へと書かれていた。字体は丸さを感じ、一目だけなら女子の字のように見える。

「一体、誰が・・・」

いつまでも自室の前にいるわけには行かないので中に入る。室内は相変わらず暗い。道も見えない俺はスイッチを付けてスタンドだけ灯す。

「シャルル？」

室内にシャルルはいなかった。

ベッドの上は勿論、バスルームも確認したがシャルルの姿はなかった。まさか、と窓も確認するが鍵は掛けており開けた形跡も無かった。

パニックに近い状態になった俺はシャルルを探そうと外に走りだそうとする。その時、グシャリと握り潰した手紙に気が付いた。

もしかしたら、これはシャルルの手紙では・・・

握り潰した手紙を急いで開くと紙一杯に字が書き綴られていた。

【一夏へ。

この手紙を見ている頃にはある程度は冷静になっているだろう。
これはそれを前提に書く。

デュノアの件はこちらも把握した。アイツは拒食症だ。原因はフランスの件と今回の件による過度のストレスだろう】

「拒食症？」

初めて聞く病名に自然手紙を握る力が強くなる。

【拒食症の症状は食欲の低下を始め、精神的不安定によるヒステリ
ー、鬱、強い拘り、興味・関心がなくなり笑うことが無くなる。

拒食症による死亡例もある。さらに間接的要因ならば自殺も多い】

「自殺?! 冗談だろ！」

今までのシャルルの状態は間違いなく手紙に書かれている物と一致する。それ故、自殺という言葉に現実味が増してきた。

今すぐシャルルを追うべきかどうか迷ってしまう。

もしかしたら、シャルルが自殺に走っているのかもしれない。そう考えると足が勝手に走りだそうとする。だが、俺の眼は意志に反して手紙の続きを見る。読み始めると足も次第に力を失って、意志も次第に追従していく。

【拒食症は未だに明確な治療法がない。これは発症者の精神状態が関わるからだ。

さて、本題だ。

今から書くのは例外的な治療法だ。これが成功すればデュノアも良くなる】

シャルルが良くなる。

それは、本当に、魅惑的な言葉だった。

【拒食症はストレスによる精神疾患だ。つまり、それをどうにかすれば拒食症も治療が出来る。

治療法は簡単だ。デュノアの支えになれ。

今のデュノアはフランスのテロにより人の死に強く触れた。しかも、それが自分のせいだという自責の念により自分という支えは失っている現状だ。そうなるに次ぎ支えとするのは他人、もしくは物

だ。

まず他人だが、これは人により様々だ。親、友人、知人、恩師、恋人……これに当て嵌めると親は無い。デュノアの母親は死去し、父親は信用していない。友人も同様だ。自分を任せるならば生半可な友情では無理だ。そうなると日本に来て数ヶ月しかないデュノアは友人を信用しきれない。信用していたとしても、それは弱さだ巻き込んでしまうと避ける可能性がある。

最後に物だが、これは無視していい。どうもデュノアには固執する物という存在はない。ISも、今の地位も、デュノアには重要性が低いようだ。

だから、お前がデュノアの支えになれ。

デュノアは今、支えが無いことに苦しんでいる。誰もが必ず持つ支えが無ければ人は意志を保てない。だから、その苦しみを受け止められる支えにお前がなれ。

方法は任せるが、もし思い付かないなら何個か案は出す。

まずデュノアを否定するな。受け入れろ。

たとえそれが反社会的でもデュノアの為にならなくても決して否定するな。

もしどうしても受け入れ難いならデュノア本人が気付くよう遠回しに言え。直接的に否定すればデュノアが壊れる可能性がある。

次に、デュノアを抱き締めろ。

これはタイミングが命になる。デュノアが自分を過度に責める、もしくは塞ぎ込んだら優しく抱き締めろ。なるべく人の温もりを感じさせろ。そうすれば周りに縋れると感じるはずだ。

最後に、デュノアの願いは全て受け入れろ。いいか、絶対だ。それさえ出来ればデュノアも俺と会えるだけの整理が付くはずだ】

手紙を読み終えた俺はもう一度中身を読み直しながらシュミレート始める。

何度か繰り返してシュミレートしていき、ある程度の願いを叶えていく。

シュミレートをある程度終えた俺は手紙に続きがある事に気が付いた。

【P S,

俺を恨みたきゃ好きなだけ恨め。

俺は、それだけのことをお前に押し付けた】

よく分からない文に首を捻る。

これはいったい。

内容を吟味しようかというところでドアが勢い良く開け放たれた。
蹴破るような勢いだ。

突然の事に驚くが、同時に相手を見て安心する。

シャルルだ。

激しい運動をした後のように荒い息を吐く彼女は苦しそうに胸を抱きながら壁に手を付きながら膝を付く。

「シャルルっ！」

慌てて倒れ掛かるシャルルに肩を貸し、ベッドにまで運んだ。

ベッドに座ったシャルルは自分の膝を眺めながら未だに整わない息を沈める。

そんなシャルルを見ながら俺は水をコップに汲んで渡す。

数秒、俺を見上げて受け取るか迷う彼女に笑いかけ、

その眼に驚いてコップを落としそうになる。

真っ赤に充血した眼と暗く生氣のない瞳。コップを受け取っても
らうまで俺はその瞳に呑み込まれていた。

「どうした、シャルル？」

「・・・・・・・・何でもない」

素っ気ない返事だ。

予想していた答えだが、諦める訳にはいかない。ここから本番スタートなのだから。

「タイミングが悪いのか、それとも天性か」

誰もいない廊下で誰に言うで訳でもなく呟く。

先程、一夏達の部屋に手紙を差し込んだ帰りのことだ。俺の部屋の前にシャルルがいた。どうやらノックするかしないかを迷っていたらしい。

デュノアが予想以上の早さで立ち直ったのかと驚きながら声をか

けたが、

結果、逃げられた。

どうやら急ぎすぎたようだ。

シャルルが走り去った廊下を見ながら俺もその後を追うように外に向かう。体を持て余している感じがあるため眠気が来るまで何かしよう。

（型の復習でもするか………だが、その前に）

周りに誰もいないことを確認した俺は誰もいない目前を向き、内部に向けて話し掛ける。

「H、1、お前、俺に何か隠してないか」

『………いきなりですね』

「俺はお前と一番付き合いが長いから分かっているつもりだ。俺が傷ついて、お前が黙っている訳が無い。その証拠にデュノアは過剰に俺を避けている」

『………』

「お前、デュノアに何か言ったら」

『・・・・・・・・』

沈黙を続けるH・1の答えを待ち続けているとトレーニングルームに到着した。時間に表すなら5分くらいかもしれない。

トレーニングルームの電気も付けず、俺は近場にあった鏡の前に立つ。

「ふう・・・・・・・・っし！」

脱力した状態で拳を宙空に放つ。

パンツ、と空気が弾けるような音がトレーニングルームに響いた。

空手の正拳突き、下段、上段、回し蹴りを放つ。

『実は』

H・1が話したのは、俺の型が定まり始めた頃であった。

『マスターが医療用ポッドに入っている時に、シャルロット・デュノアと会話をしました』

空手からボクシングの構えを取った俺はH・1の言葉に固まる。
何かしているとは思っていたが、会話をしていたとは。

『勿論、音声による会話ではありません。メールによるやりとりです』

それに安心してシャドウを始める。

『マスターの前で独白する彼女に対して私は、「勝手に判断して」、と言いました』

空を切る拳を眼で追いながらさらに型を確認する。

肩の力を抜き、腕の筋肉を動かしてジャブを放つ。空手と違い軽い拳が宙を殴る。

『映像はありませんが、音声があります。再生しますか？』

「ちょっと待て」

制服のポケットからイヤホンマイクを取り出して携帯に取り付ける。これならば音声の外に漏れることもなく、また何か話しているも通話しているようにしか見えない。

『メール内容については私が読み上げます。では、再生します』

H・1の話を区切りにノイズがイヤホンから聞こえ始める。

ザザッ、ザザッ、というノイズがベースラインのように音声の大地となり再生されるデータ。まず聞こえたのは心臓の動きを喧しく発する心電図。それから呼吸音と時折聞こえるファンとデータの書き出しをする音だけ。聞く限りでは人の気配はない。

眼を瞑り、太極拳の型をゆっくりと確認しながら耳を傾け続ける。

『お・・・やん』

ノイズに紛れて小さな声が聞こえてきた。

意識を集中させてやっと思えるか否かの声に眉を顰める。

「聞き取り辛いな・・・音声だけ抽出して拡声してくれ」

『了解・・・完了。再生します』

「私が傷付けた・・・私が弱いばかりに、私がダメなばかりに」

初め、デュノアが何を言っているのか分からなかった。フランス語なんて専門外だ。英語なら日用会話も専門会話まで出来るし、独語も少しだけならば話せる。リスニングに関してはまだ難があるが。

情けないと知りながら和訳を頼もうとすると、此方の意図を察したH・1が既に和訳を始めていた。H・1たんマジH・1。

「私が傷付けた……私が弱いばかりに、私がダメなばかりに」

H・1により吹き替えられた音声にまた意識を集中させる。

「なんでこうなったの……なんでお兄ちゃんがこんな眼に遭うの。なんでISなんかあるのよ」

(……おかしい。聞いてる限りデュノアの精神状態が良すぎる)

話だけ聞いたデュノアはそれこそ発狂する手前のような状態だった筈だ。だが、データのデュノアは罪悪感に打ち拉がれて入るが精神に異常を来しているようには感じない。

「お兄ちゃんは優しくしてくれた。お兄ちゃんだけは私を受け入れてくれた。お兄ちゃんは私を見てくれた……お兄ちゃんが、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが――」

前言撤回。

アイツ、この時点で参ってたのか。

データの中のデュノアの声は激しい抑揚が付いている。たぶんだが、話ながら力を必要とするような事をしているのだろう。それも短い感覚で何度も、何度も。

「お兄ちゃん、早く目を覚ましてよ……私を見てよ。私を慰めてよ。私を抱き締めてよ」

フランス語を喋るデュノアに被せるH・1の話し方が不穏になってきた。抑揚がなくなり、平淡な話し方になりつつある。正直、暗いトレーニングルームにいる身としては何か音楽を流して気を紛らわせたくなる。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」

叫びあげるデュノアと初期の頃のような淡々とした口調のH・1に鳥肌が粟立つ。特にH・1が恐い。無機質な音声ならまだしも、女性の声で淡々と喋られると怖くて涙が出て来る。しかも無駄に3D音質だから真後ろから話されているようでさらに恐い。

「お兄ちゃんがいないと私、私い——」

声はそこで途切れた。

余りにも不自然な途切れ方に首を捻ると、気を利かせたH・1が他の音源も入れてくれる。

突然耳に飛び込んできた携帯のコール音に肩が跳ねる。

せめて何か一言欲しかった。

「え、なんでメールが……」

『今すぐカズマから離れなさい』

「だ、誰?! なんで私の携帯に——」

またコール音になる。

『どうでもいいです。貴女の疑問など。』

貴女がすべき事は私を知る事でなく、今すぐカズマから離れること。それだけです』

冷たい声音のH・1に驚く。そして、同時に茶化するように自分の声を和訳するなよと考える。正直、そうでもないかと恐くてイヤホ

ンを外しそうだ。

「何も知らないくせに……勝手なこと言わないで！私は、私はお兄ちゃんを傷付けた責任がある！だから私は——」

『何も知らうとせずカズマを傷付けたのは貴女だ、シャルロット・デュノア。』

貴女の弱さが、脆さが、勝手さがカズマを傷付けた。たかが数日の謹慎もカズマが言わなければありえなかった。それで責任など……貴女は愚かの程を知らないらしい』

「なによ、それ……そんなの私聞いてなんか」

『聞けるはずがない。何故なら、カズマは貴女の手で死にかけたのだから』

「っ?!」

『カズマが貴女に襲われた時、彼は真っ先に貴女をISを使って迎撃も出来た。しかし、彼は貴女を傷つけたくないから何もしなかった。』

貴女から逃げた時も、周りの被害は勿論。それによって貴女の立場が悪くなるとカズマは貴女を相手にした。それを貴女は知ろうとしなかった。

その気になれば貴女を落とせた。その気になれば無傷でいられたのに、カズマは防衛プログラムが発動するまで貴女を傷付けなかった。なのに、貴女はカズマを殺そうとした』

「あ……う、そ……」

『貴女がカズマを殺そうとした。

貴女は、自分を受け止めてくれる相手を自分で殺そうとしたのです』

「やめ・・・・・・・・お願い」

『しかし、そんな貴女をカズマは受け入れるでしょう。

彼は優しい。

たとえ、それが殺そうとした相手でも、それが貴女なら彼は笑って許してくれる』

突然、H・1の声が優しくなる。

その母性溢れる優しさに思わず拳を止め切れず腕が不必要に伸びてしまう。

「本当・・・・・・・・？」

『ええ、カズマは身内にはどこまでも甘い人間です。

貴女がカズマに望めば彼は貴女を抱き締め、見つめ、キスし、体を合わせる事だとしてくれるでしょう』

引きつった二の腕を押さえながらイヤホンに意識を向ける。

あのH・1が、あの無味蛋白なH・1がこんな優しさを見せるなんて・・・

ただ、体を合わせる気は全くないぞ。

「お兄ちゃん・・・・・・・・やっぱり私にはお兄ちゃんしか」

『カズマは優しく、厳しく、そして暖かい人間です。彼ならば貴女を全て受け入れる事も可能です』

「嬉しい・・・・・・・・私、私」

『カズマだけは、いつまでも貴女の近くにいてくれる。支えてくれる。抱き締めてくれる。1人には決してさせないでしょう』

「お兄ちゃん、お兄ちゃんお兄ちゃん」

『しかし、貴女にそんな権利があるのですか？』

「・・・・・・・・え？」

『自ら望んで傷付けた相手にどんな顔をして縋るつもりですか？』

「あ・・・・・・・・うあっ?!」

『貴女は幸せなれます。しかし、本当にそんな権利が貴女にあると信じているのですか？』

「やめて、やめてよ」

H・1の言葉は他人から聞いても鋭く、耳を塞ぎたくなる。

善人ならば、当事者ならば鋭さはさらに増すような言葉だった。

『貴女がカズマを殺す』

「・・・・・・・・あ」

プツリとデュノアの声が途切れる。

そして、次の瞬間には、

「――――っ！！！！」

鼓膜を突き破らん限りの大音量の悲鳴が両耳を襲った。

「っ?!」

頭で理解するよりも早く両手がイヤホンを掴み取り、足下に投げ付ける。それから両耳を押さえて鏡にもたれ掛かった。

イヤホンからは未だに悲鳴がハッキリと聞こえてきた。誰かが来てもいいような必要最低限の音量でこれだ。現場ではさらに酷かったに違いない。

悲鳴の他に怒声が聞こえ始める。耳を澄ませばそれが千冬先生の物だと分かった。

『これがあの時の全てです』

とんでもない事を隠されたものだ。退院する際にデュノアの事を確認したが、こんなことがあったなんて誰も話さなかった。一夏達も話さない事から一部の関係者以外は知らないと見るべきかもしれない。

未だに聞こえてくる喧騒に冷や汗が止まらない。

一夏をけしかけた事を思い出すと顔が青くなる。

拒食症の背景にこんな事があると分かっていたらもっと違うやり方を考えもしたが、もう全てが遅い。

(マズい、これは本格的にマズい)

最悪な予想に汗がダラダラと吹き出る。

びしょびしょになったシャツを脱ぎ捨てながらどうするべきか脳をフルに回転させる。

頭の中に激しい警報とヤバイという単語だけが忙しく鳴り響く。

(一夏を支えにしたのは不味かった。依存するとは予想していたが、これは中毒になる可能も……)
いや待て。何事もポジティブにかんがえるんだ。よく言うだろ？そ

んな人間が近くにいるわけじゃないですかっ)

深呼吸をして自分を鎮め、さらに目を瞑って思考に集中する。

そう、愛情表現だ。依存なんてそんなことありえない。

ただ、一夏がいないと情緒不安定になるだけで中毒なんてそんな・
・・・・アリエナイ。

それに、周りにもいい刺激になる。上手くすれば一夏の朴念さも
治り、俺も面白い一挙両得じゃないか。

・・・・・。

一夏には暫くアイツの彼氏をしてもらおう。その間に治療法を模
索しなければ。

治療法は完全にプロに意見を聞くべきか。カウンセリングは俺が
しないといけないが、仕方ない。

いや、待て。

デュノアの意志や一夏達の考えも入れないといけないな。

一夏達は俺とデュノアを会わせるはずだ。そして、最終的にわだ
かまりを取り除こうとするはずだ。

次に、デュノアは俺に許しを求める・・・・・いや、分からない
い。これだけは分かりかねる。

デュノアの行動を予想すると許しを求めるか、自分が許せるまでの時間を得ようとする筈だ。真面目なアイツなら罪滅ぼしにと少し付き纏うかもしれないが、それぐらいなら問題はない。

「被害者が加害者なんて・・・・・・・・んなアホな」

多少の犠牲は構わないと考えていたが、まさかさらに悪化させるとは思ひもなかった。

『人間とは不可解な生物です』

まるで自分は関係ないという物言いだった。

「諸悪の根源がああああっ！お前が、お前がトドメだったのかこの馬鹿A I」

その日、俺達は初めて喧嘩をした。

酷い頭痛で目が覚めた。

ズキズキと痛む頭に手を当て、肌寒い肩にシーツを被る。

カーテンの隙間からオレンジ色の朝日が差し込んでいる。どうやらいつの間にか寝ていたらしい。

いつの間にか、その言葉が強く引っ掛かる。

俺はいつ寝たのかと思い出そうと少しずつ火照る体を身動ぎさせる。

「ん・・・？」

何かに足が引っ掛かった。いや、これは絡まったと言っていい。

火照る体にとってその熱は鬱陶しく感じる。

離そうと動くが、絡み付く何かは離されるたびに絡み直すばかりで一向に離れようとしない。

本当に鬱陶しい。

俺は絡まった熱の正体を知ろうとシーツを捲ることにした。

陽光さえ透かしそうなシーツを少しだけ上げる。すると、そこには目が眩みそうな柔らかな浪漫があった。

「っ?!」

なんだコレ、一体何なんだ?!

(なんでシャルルが俺のベッドにいるんだ?!)

「ん・・・熱い・・・」

「っ?!」

シーツの下に隠れていたシャルルは火照る体を冷やそうとシーツを振り払おうとした。

反射的にシーツにしがみついたシャルルの柔肌は晒されることを防ぐ。しかし、代わりに乱れた姿を晒すことになった。

小さな肩、半分しか隠れない胸、そして細い首筋と視線がシャルルの体を蛇のように這った。

子供のように安心仕切った寝顔をするシャルルは可愛らしき以外に艶やかな色気を放っていた。小さく上下する肩に合わせて胸に乗るシーツが静かに下に下がっていく。もう少し下に下がれば・・・

(っ!)

バツとシーツをはためかせて肩まで被せる。

(何考えてんだ、何考えてんだよ俺! シャルルに興奮するなんて、するなんて・・・)

自戒する考えに反抗するように眼はシャルルの姿から動きはしなかった。そして、思考が追いついた頃には見惚れてしまう。

ぐっすりと眠る少女は子供のようだった。

いつもの笑顔も見ようによれば幼いかもしれないが、今の少女は余計に幼く見える。微笑むような寝顔に丸めた体がそう見せるのかもしれない。

(こう見るとやっぱり小さいな)

少し腕を広げれば胸の中にスッポリと納まってしまいそうなくらいシャルルは小さかった。

試してみようかとも考えたが、それはダメだと理性が引き留める。

しかし、愛くるしい少女を見ていると抱き締めたくないと欲求が叫びを上げる。

ゴチャゴチャになる思考に目眩が起こり始める。

冷静になれ、冷静になれと自分に言い聞かせるが、欲求は都合が悪くと右から左へ流れ出していく。網に掛かった物は煩惱塗れの欲求のみ。自戒する言葉はどこに消えたのだろうか。

「……ん、いち……かあ……」

小さく、呟くような寝言に心臓が飛び出そうになる。

下を少し見ると寝返りを打ったシャルルが此方を見上げていた。

「え．．．あ、その．．．これはな」

「ふふ．．．．．」

小さく笑う。

満面な笑顔でも、魅惑的な微笑みでもない。何気ない小さな笑みだった。

息が出来なくなり、口が金魚みたいにパクパク動く。そんな俺を見ていたシャルルの眼は次第に閉じていき、また小さな寝息をたてながら眠る。

「あ、あれ．．．．．」

意外にも早い幕引きに呆気を取られた。

思考が停止した俺が復旧するのは、携帯のアラームがなる三分後のことだ。

慌てて携帯を広い上げ、押しつぶすようにアラームを止める。部屋が静かになる頃には俺の荒い息とシャルルの寝息以外は静寂を保った。

二度目の心臓の早鐘に胸を押さえながら荒い息のまま携帯を開く。

時間的には目覚ましのアラームが鳴るには少し早い。何事かと携帯を開けば一通のメールが届いていた。

f r o m .. 犀川 一真

件名 .. 今日休む

体調悪いから休む。

他の奴らには連絡したから、間違っても見舞いに来るな。疲れが取れない。

デュノアの件は何とかするが、後2〜3日は無理だ。

始めてもらった一真からのメールは何とも簡素な物だ。セシリアや鈴、箒でさえ絵文字を多少使うのに、一真のメールには一切それがない。クラスの女子のようにガチャガチャしていないのは見えやすいが、これはこれで寂しいものがある。

メールを返信した俺は未だに熱持つ頭を冷やすためにシャワーに向かう。

「本当、どうなってんだ？」

寝ているシャルルを一度見ながら、俺は独り言と共にバスルームに消えた。

その日の朝は泥のような眠気と重い体に呻き声を上げながらウラとの早朝訓練を行っていた。

いつもと何も変わらない訓練メニューを半分ほど済んだ頃だろうか。突然の立ち眩みに俺は堪らず倒れてしまった。

風邪気味の上に連日の無茶な訓練、さらには寝不足が祟ったのだ。自業自得としか言い様が無い。

「兄？・・・・・・どうしたのだ兄？返事をしてくれ！」

慌てふためくウラを落ち着かせた俺は肩を貸してもらいながら重い体を部屋まで運んでもらう。

座り込んだ俺をウラはアタフタしながら心配そうに見ていた。安心しろと笑いかけたが、唇が痙攣して上手く笑えた自信はなかった。

体温計のピピピという電子音なる。

脇から抜いた体温計は気持ち熱く、表示もそれを後押しする38.7℃を表示。我ながら無自覚でいられたものだと思う。

「風邪、か。久々だな」

前に風邪をひいたのは数年前、研究所に身柄を移す前だった。

完全な体調管理と食事により疲労以外で倒れる事などなかったが、自己管理能力が低下した証拠なのだろう。これだから他人をあてにすると碌な事にならない。

机から錠剤ケースを取り出して錠剤を手で落とす。白と青のカプセル錠は口に入れるとザラザラと音を立てながら水と共に食道を通る。音は胃に辿り着くまで聞こえた。

「ふう」

体の重みを吐き出すように息を吐く。体は相変わらず重い。今日一日は休むべきかもしれない。

「クラリッサ、私だ！緊急事態だ！」

「・・・」

誰かに電話するラウラを見上げながら今日一日のスケジュールを呼び出す。

私事のスケジュールを確認していき、次に授業のスケジュールを

照らし合わせる。最後にH・1に以前から予定されていた用事が無いかを確認して終わりだ。

何点か気になる用事はあったが、急ぎということはない。

「兄が風邪を引いてしまった！パラメディック衛生兵もない！我々は撤退するべきか？！」

——今日の予定は特にありません。

——レンタルの返却日、人との約束、貴方が気になるようなイベントもありません。

「・・・」

何もない事に安心し、秋葉さん達に休む旨を伝えるメールを出してもらおう。H・1は基本的に誤情報を嫌う潔癖な部分がある。それは俺の頼みでも決して曲げず、誤情報を流すくらいならば話さない事を選ぶくらいだ。

「し、深呼吸をすればいいんだな！
よし、兄よ深呼吸だ！」

「・・・」

ラウラのトンチンカンな対応に従い深呼吸をする。

別段落ち着きを取り戻すものなどないため終わる頃には熱っぽい俺がベッドでグツタリするだけだ。

「わ、私が深呼吸するのか?!」

「・・・」

「すーはー、すーはー、すーすーはー」

「・・・寝よ」

「だいぶ落ち着いた。それで、私はどうすればいい?」

「・・・熱冷まシート」

俺が熱冷まシートを探す間、ラウラは通話先に相槌や質問をしていた。ドイツ語での会話のため内容は把握仕切れない。

見付けた熱冷まシートを額に張り、さあ寝ようとベッドへ振り返った俺の前にラウラがいた。その手には何故かバケツが抱えられ、この真夏の中でも湯気を上げるお湯がタプタプと波打つ様がよく見える。

おい、それはまさか・・・

「せい」

ラウラはそのお湯を迷う事なくぶちまけた。

「つづあちいいいいい！」

熱湯とは言わないが、それでもかなりの温度のあるお湯で肌が焼かれる。

驚くラウラを余所に俺はバスルームに駆け込み、頭から冷水を被った。

竦むような冷水で鳥肌を立てながら痛む肌に心地よい冷たさを浴びて目を細める。

バスルームに誰かが入ってくる。振り向くと顔を青ざめるラウラがいた。

「だ、大丈夫か兄？」

「大事はないが大丈夫ではない・・・いきなりなんだ？」

「か、風邪の時は温かくするべきと言われたのだ・・・」

小さくなるラウラに肩を竦める。

特殊な生い立ちなのを忘れていた。一般家庭の常識がないのだから風邪の看病など分かる訳もない。ただ、温かくするだけならもう少し温いお湯でもいいのではなからうか。

電話口から何やら女性の叫び声が聞こえたため顎で出るよう表す。すまなそうに眉を顰めるラウラを背に俺は濡れた寝間着を脱いでいく。多少赤くなっているが、医者に見せる程ではない。もう少し冷やせば十分なくらいだ。

「兄よ。風邪の時は栄養を付けるべきだ。何か食べにいこう」

「出歩くのもキツイんだが」

「なら作るしかないか・・・何を作ればいいんだ？」

俺の朝食について相談を始めるラウラの横を通り過ぎる。濡れた衣類は下着以外全てバスルームに放置し、バスタオルで体を拭いて着替えをする。

背後でガチャガチャと音が鳴ったため振り向けばラウラがお湯を湧かしていた。

何が始めるつもりか聞けば紅茶を淹れてくれるらしい。ドイツでは紅茶にラム酒を混ぜ、砂糖を入れるようだ。

初めて紅茶を淹れるためかラウラは何処に器具があるか分からず慌て、ヤカンの笛がなるとパニックさえ起こしてしまう。

そんな彼女が可愛らしくもう少し見ていたい気もするが、それでは彼女が可哀相だ。何より怪我をしてほしくないため彼女の肩に手をおいてやんわりと言葉をかける。

器材と茶葉の場所を教え、淹れ方をその時に教えていく。俺が淹れていた姿でも見ていたのか彼女の動きはスムーズで、多少迷いはあったが問題などないレベルだった。

出来上がった紅茶をカップに注ぐと湯気から良い薫りが漂ってくる。

心落ち着かせる薫りだ。暫く目を細めているとラウラからラム酒の場所を聞かれ以前にお菓子作り際の余りがあったのを思い出し、場所を教える。

暗いパイプスペースの中から目的の物を見つけだすまで俺は紅茶の薫りを楽しんでいた。

ラウラは電話口でラム酒の量を聞くと計器も使わずラム酒の瓶を傾ける。トクトクトク、とラム酒が紅茶と混じわる様を見下ろしながらどんな味がするのか楽しみになってくる。最後に砂糖を淹れる際には口出しだけはさせてもらった。流石に朝早くから甘過ぎる物を取りたくない。

最後の仕上げに角砂糖を入れたラム酒入り紅茶をラウラは誇らしげに見せてきた。透けた紅に少し溶け残った砂糖、湯気からは紅茶の薫りとラム酒の匂いが混じって嗅ぐだけで気分が温かくなる。

カップを受け取り火傷しないように静かに飲むとラム酒の味と紅

茶の風味がアルコールとよく合い体を温める。暫くその余韻に浸っていた俺は目の前で不安そうに見上げるラウラに対して優しく微笑む。

「美味しいよ」

その一言で彼女の顔は花咲くように明るくなり、飛び跳ねるようにハシヤギながら電話口の相手に感謝を述べていた。

暖かい気持ちになる飲み物だ。自分で淹れた紅茶ではこうもいかないくらい暖かく、美味しい紅茶だった。

飲み終わるまでじっくり時間をかけ、飲み切る頃には体がポカポカとしていた。

いつの間にか電話を終えていたラウラは誇らしげに胸を張り、笑い上げている。それが堪らなく可愛くて俺は知らず知らず彼女の頭を撫でていた。

「御馳走様」

登校時間が迫ったため看病を続けようとするラウラを無理矢理送り出す。流石にこの程度の風邪で彼女の学校生活を無駄にはしなかった。

渋る彼女を見送り、なおも此方を見続ける彼女に帰りにスポーツ

ドリンクをかうよう頼むと笑顔で了承してくれた。

彼女の姿が見えなくなった後、ベッドに寝転がり先程の紅茶について考える。あの紅茶ならば毎日飲みたい、どうすれば良いのだろうか、俺はウトウトとしてくる意識の中で必死に考えた。

紅茶の淹れ方も、技術も、小技も全て自分の方が上手だ。事実風味だけなら俺のがよく出ているのは明白だ。さらに、風味を差し引いても彼女の紅茶に劣る所なんてない。

だけど、彼女の紅茶は美味しかった。

味や風味が良かったのではなく、ただ美味しかった。

いつも淹れて、飲んでいた自分の紅茶よりも暖かくて美味しかった。

意識が朦朧としてくる中、俺はやっとその違いに気が付く。そして、出て来た結論は決して自己実現出来るものではなかった。

ラウラが淹れてくれたから。

ラウラが、俺の為に、淹れてくれたから。

なんてことない簡単な理由だった。ラウラが俺の為に淹れてくれたからあんなに暖かく、美味しかったのだ。これではどんなに努力したって実現出来るわけではない。

久々だ。

薄れていく視界の中で俺は思い出す。

俺の為に出された物を口にしたのは、久々だ。

太陽が高く昇る空を見上げながら眼を細める。

太陽を直に眼にしたのは実に5日ぶりだ。ずっとカーテンを閉じた部屋に籠もっていたし、部屋を出れば下ばかり見ていたため眼がとても痛かったが、慣れてくるとその痛みも心地のよいものに変わっていく。

一夏が居なくなったただけで部屋がやけに広く感じた。ほぼ毎日ベツドの中に籠もっていたせいかもしれないが、たぶんそれだけじゃない。

独りだからだ。

独りだから部屋が広く感じるんだ。

一夏からお兄ちゃんが風邪で休むことを聞き、僕も休むことに決めた。

それはいい。

ただ、この広さはダメだ。心が締め付けられる。

落ち着けない部屋の中をウロウロとしながら小一時間を過ごして決意が固まる。

会いに行こう。チャンスは今しかない。

会ってどうするの？

許してくれるの？

許せるの？

わからんない。けど、今なら会える気がする。だから、僕は会いに行く。それからのことはその時に考える。

お兄ちゃんの部屋は2階違いの4階、1330室。ちょうどこの部屋の真上当たりだ。

誰もいない廊下を歩く。

久々の外だ。

騒がしい寮しか知らないせいか、静かな雰囲気の不気味で、罪悪感を感じさせる。

階段を1つずつ上がり、4階に辿り着く頃には動悸が激しくなっていた。

新調したばかりの扉は鈍色に輝いている。

お兄ちゃんの部屋の扉は特別に金属製だ。それも日本の科学技術を惜しみなく使用した最先端の合金。もし、ここに各国の科学者や要人がいればサンプルを欲しがるといふ価値はある。価格だって数百万はかかる筈だ。

外からの光を反射する扉を前にして深呼吸をする。

激しくなっていた動悸がさらに激しくなり、いくら深呼吸しても治まりがつかない。

やっと落ち着いたのは到着して十数分が経った頃だ。

意志を決して扉をノックする。

コンコン、と音が数度鳴る。その見た目よりも厚さを感じさせる音には驚いた物だ。

数十秒ほど待ったけどお兄ちゃんが出てくる様子はない。扉に耳をあてて中の様子を調べもしたけど、聞こえてくるものなど無く、冷たい温度に耳が痛くなるだけだった。

留守かな？

間の悪さに肩を竦めつつもう一度ノックを試みる。今度は先程よりも大きく、殴るようにドンドン、ドンドンとノックする。周りの静寂を気にしない音が遠くで反響する。

「誰だ、こんな時間に？」

やっと出て来たお兄ちゃんの姿に思わずハシヤギそうになる。

勿論、そんな恥ずかしい姿を晒すわけにもいかなかったため表面上は平静を装うが、はにかんだ表情だけは如何とも出来なかった。

「デュノアか」

「あ、あの、こんにちわ、お兄ひゃ・・・うう」

噛んじゃった・・・恥ずかしい。

「もう、大丈夫なのか？」

真っ赤な顔を隠すように俯きながら頷く。こんな大事な時に失敗するなんて最悪だ。

恥ずかしさに悶える僕を部屋に招いてくれたお兄ちゃんに従い部屋に入る。

料理の途中だったのかキッチンにはコトコトと音を立てる陶器が置いてあった。雑誌で見たことのあるそれは土鍋といい、日本ではよく見る鍋の一種と書いてあった。さらにベランダを見れば洗ったばかりの衣服が干してあり、室内にはラウラの下着が干してある。

土鍋の中を掻き混ぜながら様々な野菜を入れる様子を椅子に座りながら見る。

馴染み切らないエプロンを着た姿に見惚れてしまう。いつも尖ったり、斜めに構えたお兄ちゃんからは想像出来ない姿だ。たまに見せる大きな背中とは思わず抱きつきたくなり、ラウラがよく抱きついている理由が今なら分かる気がする。

・・・抱きついちゃうかな？

土鍋の中を見下ろしながら時折味を確かめるお兄ちゃんに抜き足

挿し足で近づく。

近くで見上げるとその広さに思わず生唾を飲んでしまう。

同年代よりも鍛えた背中は大きく、汗で張りついて盛り上がった筋肉が浮き出ている。試しに触ると非常に熱く、それでいて心地良い。

「何してんだ、お前？」

「はぁー、あったかい」

「離れてくれ」

「あと10分」

「煮だった粥なら今すぐだぞ」

「・・・ならせめて後1分」

「なら俺も」

そういってお兄ちゃんは僕の頭にお玉を振り下ろした。

「はふ、はふ」

「・・・」

「むぐむぐ、はふ」

「・・・」

「食うか？」

「いない」

五度目のやり取りが終わる。特に何かに期待していない俺はレンゲで卵を掬い、デュノアはそんな俺をジッと睨み付ける。ちなみデュノアの頭にはアイスノンが置かれている。

「信じられない。女の子を殴るなんて……日本人は女の子に優しいんじゃないの？」

「悪いがフェミニズムなら一夏をあたれ。俺は老若男女殴るべきと思えば殴るし、殴られもする」

「なら、僕が殴ってもいいよね？」

「その時は盛大に粥まみれになるが？」

拳を振り上げるデュノアに対して土鍋を片手で持ち上げる。それを見たデュノアは柳眉をヒクつかせながら拳を降ろした。

「最低！それでもサムライの子孫なの？！」

「日本人の大半は百姓、農民の子孫だ。サムライだったら篠ノ乃か千冬先生をあたれ」

ちなみに俺は確か鍛冶屋と漁師の家系の血筋だ。今ではどちらも廃れているが。

「なんか避けてない、僕のこと？」

「的確な人選を言ってるだけだ」

「………ごめんなさい」

「謝るようなことか？」

「なら次からは安易に抱き付くな。基本的に触られるのは嫌いだ」

突然頭を垂れるデュノアを見ながら冷めてきた粥を掻き込む。味の落ちてきた粥に顔を顰める。

「そうじゃなくて………その、一週間前のこと」

「忘れた」

「そんな嘘つかないでよ！そんな見え透いた嘘なんか信じられるわけないだろ！

お腹が抉れたんだよ！血が一杯出たんだよ！本当に死にかけてたんだよ！忘れられるわけじゃないか！」

1週間前の事を思い出すと塞がった傷が痛みだした。傷は塞がり、完全治癒したとはいえこういった痛みは時間以外に解決のしようがない。それだけが怪我をしたという自己証明でしかないからだ。

そんな幻痛を紛らわす手段として、考える暇をなくすというものしか知らない。そのためオーバーワークに近い訓練をしていたのだ。おかげで幻痛さえ感じないほどに筋肉痛が痛むし、風邪をひいてしまった。

「この3日、お前の事を考えている程の暇は全て潰していた。つまり忘れていた。それだけだ」

「やめてよ。そんなことされても嬉しくない」

「それはお前の勝手だ。俺には関係ない」

「責めればいいじゃないか。僕が嫌いなら責めれば！」

突然立ち上がったデュノアを見上げる。その眼は焦点が合わず俺を見ているのか、粥を見ているのか分からない。

「お前はアレか？世の中は敵と味方、正義と悪で成り立ってるとか考える質か？」

「いきなりなんだよ！話を逸らさないでよ！」

「悪いが俺は傍観者で第三者な中立者だ。そういつたのとは無縁だぞ」

「なんで、なんで・・・なんでえ」

泣き出したデュノアはポスンと俺の隣に座り込む。そして俺の肩に頭を乗せるとポタポタと雫でシーツを濡らす。

(・・・・・・・・追いつめちゃった。どうしょ)

「なんでそんなに優しくするのさ・・・・・・・・」
責めてよ。死にかけたんだ、お前のせいだ、顔なんか見せるなっ
てさあ」

(・・・・・・・・優しくって、おいおい)

「僕には優しくされる権利なんてないじゃないか。なのに、なんで優しくするのさ。なんで僕に期待させるんだよ」

胸ぐらを掴み、涙ぐみながら俺を見上げる。まるで助けを求めるようだ。言っているのはその逆だから質が悪い。

「ねえ、お願いだから拒絶してよ。そうすれば僕は――」

見上げるデュノアに覆いかぶさるように抱き締める。デュノアは何が起きたのか理解するまでに数秒使い、気付いてから数秒ほどの抱擁を味わい、そして、離れようと弱々しく俺を押し離そうとした。

「放して・・・放して、お願いだから・・・」

「嫌だ離さない」

「やめて・・・お願いだから・・・このままじゃ僕」

「止めない聞かない」

「うう・・・つう、ああ・・・お願い、もう限界・・・」

「聞かない」

「うあ、ああっ・・・うわああああ！」

「・・・」

「やだよ、独りはやだよ！寂しいんだよ！一緒に居てよ！離れないでよ！」

コイツは長く孤独だったのかもしれない。

シングルマザーになった母親と生きてきたなら周りに白い眼で見られていたに違いない。その母親が死んでからは突然現れた父親に引き取られ、その父親の家族からは阻害され、1人で生きてきた。

さらには今回の不幸の連続だ。

弱みに付け込んでいるのは分かっているが、身内のようなデュノアが立ち直るならと汚い手だって使う。そのための滑り止めだって

敷いたのだ。

もう、後には退けない。

「なんで皆、私を、うう、うう！」

押し離すの止め、胸に縋り付くデュノアを優しく抱き締める。胸を押していた手も次第に背中周りに、気付けば互いに抱き締める形で落ち着いた。

「もう独りきりの部屋には居たくない！あんな寂しい場所は嫌だよ！」

せき止めていた弱さが壁を壊して雪崩出る。それは、デュノアの最後の強がりだったかもしれない。だが、それはデュノアを苛むだけ。

一夏が壊せないなら俺が代わりに壊すだけだ。

「なんで皆、皆、私を置いていくの？！嫌だよ、寂しいよ！」

胸に縋り付いて泣くデュノアの頭を撫でる。それでコイツが満足するならと一心に。

しかし、それとは逆にそれを止めるべきという俺がいた。その俺はデュノアの弱さに付け込むなど警告してくる。

分かってはいる。これはコイツを悪くする。だけど、俺がコイツを放っておけないという想いが強い。だから、今だけは見逃してくれと何度も冷静な俺に呼び掛ける。

「独りにしないで・・・一緒に居てよ・・・」

「大丈夫。大丈夫だ」

「寂しいの。辛いの。だから離れないでよ」

「・・・・・・・・・・・・一夏達はお前を独りにしない。皆、お前を大事にする」

俺がいる。

そんなことは終に言えなかった。

俺は長くない。もって後30年も生きられない。いや、下手したら十数年で死ぬかもしれない。

そう直感していた。

常人の数倍、いやこれから考えれば十倍の医療用ポッドの使用数は確実に細胞の活動を劣化させ、寿命を縮める。

そうならば軽く見積もっても寿命は後30余年程度。そうになるとデュノアと一緒に居れるわけがない。

俺が出来るのはデュノアに一夏達の身近さを勘違いさせることだけだ。

「お願い」

潤んだ瞳と憂いた瞳が重なり合う。抱き付く腕は次第に肩へ上がり、その意味を変える。

まるで求めるように力を込める腕に戸惑いが生まれ、潤んだ瞳に釘付けにされる。

デュノアの瞳が自然と閉じていく。それが何を意味するのか、幾ら何でも気付かないわけではないが戸惑いは隠せない。

何故？

何故、俺なんだ？

一夏を選んだんじゃないのか？

「・・・・・・・・」

眼を瞑り、上を向くデュノアを見下ろしながらどうするべきか迷

う。

「お兄ちゃ————一真なら、私はいいよ」

これ以上ない口説き文句だ。

これに応えなければ男ではない。

「俺は、一夏じゃないんだぞ」

「やめてよ。こんな時に一夏を出さないで」

「そうか」

自分から近付いて来るデュノアに習って俺も顔を近付ける。

そして、

俺はデュノアに口付けをした。

さて、その日の夜。

悲劇の三日間の最初の夜が幕を開けることになる。

「さあ！看病してやるぞ兄！」

下校後の第一声がこれだった。

「丁重にお断りする」

「まずは私の作ったシチューだ！」

仁王立ちしていたラウラが取り出した皿に並々と盛られたシチューと呼ばれて物体に目をやる。

黒い。

ドロドロしている。

具材がヘドロに塗れていて何が何か分からない。形で判断しようにも全てが同じ大きさ、形で当たりさえつかない。

これを食えと？

「正気か？」

「栄養満点だぞ。マムシの血にスッポンの生き血、さらにはスッポンの肉に鰻も入っている。他にもビタミン豊富なオレンジやレモンだって入っていて、糖分も必要だと思ってチョコ入れた完璧なシチューだ！」

日本ではそれを闇鍋と言う。間違ってもシチューなんて言えない。

「さあ、口を開けるのだ」

「ふざけんな」

「開けろ」

「絶対に嫌だ」

「食べなきゃ治らないぞ」

「食べたら倒れそうだから嫌だ」

「上官命令だ！」

「いや、待てそれはおかしい」

「いいから食べろ！」

「ふぐうつ！」

そこから先はよく覚えていない。

ただ、意識を取り戻した時、俺は何故か病室に居た。つまり、深く考えたら負けなのだろう。

「おかえりなさい、犀川君」

ベッドに横たわる俺を見る医師と看護師の生暖かい視線に俺は涙した。

事件その17 「やっぱり嘘じゃないですか中に（ryだからさあ大変」（後

一真

「もそもそもそもそ

ラウラ

「もそもそもそもそ

一夏

「甘栗か・・・もう秋なんだな（注：作中では以前に夏です」

セシリア

「お二人共何を食べてるのです？」

シャルル

「なんか甘い香りもしてきた」

一夏

「甘栗だ。千冬姉が差し入れで持ってきてくれたんだよ」

セシリア&シャルル

「ひっ、む、虫がこんなに?!」

一夏

「いや、甘栗っていう木の実だよ」

セシリア

「木の実がこんな茶色いわけありません！虫ですわ！」

シャルル

「そうだよ一夏！これ、どう見てもカブトムシの幼虫じゃないか！」

一真&ラウラ

「ムシムシムシムシ・・・」

一夏

「いや、木の実だって。それと何か反論しろよ2人共！」

一真

「ムシうめえ・・・」

しかしな、一夏。外国でタコが食用されないように、日本ではカタツムリは食わない。それは仕方ない事だ。

向こうからはタコなんか食ってると思われているかもしれないが、俺達は虫食ってるって気持ち悪がるだろ？

・・・っていうか、日本にだって虫を食う習慣あるじゃねえか。蜂の子とかイナゴの佃煮とか」

一夏

「いや、微妙にズレてるだろ、それ」

一真

「だけど欧州でも栗は食われてるはずだが・・・マロンじゃないと分かんないとか？」

シャルル

「マロンなの？おいしいの？」

一真

「美味いぞ（ムキムキ）」

ラウラ

「この甘さは癖になる（ムキムキ）」

一夏

「擬音だけだと2人がムキムキマッチョになったように聞こえる」

一真

「事実お前よりは筋肉あるがな」

ラウラ

「実は嫁より身体能力は高いぞ」

主人公&ヒロインズ 談笑中・・・

一真

「はい、食った所で恒例の返答タイム（むしゃむしゃ）」

セシリア

「今回は4通の感想がありますわ（まだ食うのか悪食）」

一夏

「PVも30万超えてたな（いつもの事だからスルー）」

ラウラ

「ユニークは3万を超えた辺りだ（むしゃむしゃ）」

一真

「はいはい、今は返答の時間な！。そういった面倒は後だ、後。さて、まずは最初の感想。ダメさんから――」

原作組が恥知らずというか役立たずというか馬鹿過ぎね？

一夏辺り特にどんな神経してんの？

――だそうです。役立たず、というのはあるね。馬鹿というか考えなしな所も目立つ」

一夏

「お、俺はただ皆を守りたいだけで！」

一真

「まあ、そこら辺の矯正も視野にはありますよ。
今の一夏は、そうだな……。世の中が見えてない。視野が狭いんだ」

セシリア

「視野が狭い？」

一真

「これは仕方ないさ。お前らはまだ15、6だ。自分で考え、行動し、結果を出すには難しい。中学出たてを社会に出しても使えないのと同じだ」

セシリア

「失礼じゃありませんこと？」

一真

「それはこっちの台詞だ。
ラウラみたいに人を率いる。自分の行動に命をかける高校生が普通居るか？」

それを考えればお前らは十分普通な位だ。

俺らみたいに行動に重い責任がないからな」

シャルル

「だから周りには不快に映るの？」

一真

「歯痒いんだろ。俺だって読者なら歯痒いさ」

ラウラ

「しかし、軽率なのは間違いないな」

一夏&一夏ラバーズ

「うっ」

ラウラ

「情報が不足している中であのような軽率な行動は慎むべきだ。特に、安易に兄に頼り過ぎているのではないか？」

一真

「俺だって万能ではないんだからな」

一夏

「でも、な」

一真

「こんなことばかりしてるといつか痛い目に遭うぞ」

一夏

「だから話し合いをだな」

一真

「そこで秋葉さん達がいれば良かったのにな」

主人公&ヒロインズ 反省中・・・

ラウラ

「さて、次はYH15－DRONEからの感想だ！

ナインボール的には：バルヴァライザーよりアナイアレイターの方が…。

NOOOO?! 主人公、また死にそうじゃ無いか！

救いは!?! 救いは無いんですか!?!

以前にも感想を書いてくれたな。支援感謝する！」

一夏

「なあ、バルヴァライザーってシステムじゃないのか？」

一真

「セラフとかのことだ。

バルヴァライザーってのは、秩序を破壊する対象へのカウンターだ。その象徴にセラフだから間違いではない」

シャルル

「じゃあ、アナイアレイターは？」

一真

「M O Aと小説版で活躍したA Cで、ナインボール相手に勝ち星を上げたA Cだ。」

A Cシリーズなら最強の一角じゃないかな？」

セシリア

「それを一真さんが使うと？」

確かに主人公が使うのならよさそうな機体ですわね」

一真

「いやー、使ってもいいけどかなり後悔するよ？」

だから今のところ要所要所で出すくらいしか思いつかないわ。

っていうか、M O Aの主人公は家族を殺したA Cを倒すためにレイヴンになった男だぞ？」

一夏

「そうなのか？」

一真

「家族の命を奪ったナインボール。それを操るのは無機質なコンピュータ。」

全ての物事が計算され、管理され、予定された世界。それは人の命すら計算の中の数字にでしかない。

さらに、レイヴンの実力を裏付けるアリーナという場でさえも、絶対的な地位として機械が操るナインボールがその位置に収まっている。

破壊しても、破壊しても、まるでそこに居るのが当然かのように奴は居た・・・

復讐という己の信念をバネに、悲しみという泥沼から這い出し、アリーナのトップランカーにまで登りつめたレイヴン。

自由の象徴・・・何者にも縛られないレイヴン達の上に立つ者が、機械仕掛けの人形であっていいはずがない！

持てる全ての、自分の力を出し切って漆黒の鴉「レイヴン」は赤い天使「セラフ」に挑む！」

一夏

「やべえ、聞いてるだけで燃えてきた！映像化が待ち遠しいな！」

ラウラ

「さて、その主人公が駆るACの武装だが・・・

WG-1-KARASAWAにWM-SS24、LS-99-MONLIGHT、WC-IR24だ」

一真

「WG-1-KARASAWAはカスタム化されたカラサワで、荷電粒子ビームライフルになっている。

威力としては5mのロボットを一撃で破壊できるハンドガンや、それより強力なハンドショットガンで損傷軽微な相手の装甲を、灼熱させて弾けさせる威力で、上記の武器とは比べ物にならない威力。

ナインボールが、近距離（距離は遠く、かつ正面からの射撃）でも直撃を受け、遠距離からでも慌てて回避しなければならない弾速。射程数百m程。

ナインボール（MOA）を数発で完全に破壊できる。

WM-SS24・・・垂直発射式ミサイルランチャー。一度上空に向かい、その後に敵に向けて降り注ぐ。

同等の大きさのACが豆粒に見える距離でも射程内。速度的には亜音速程度の模様。AC（通常は7、8m程度）を包み込む程度の爆風を起こすくらいの威力はあるな。

LS-99-MOONLIGHT…レーザーブレード。自機のライフルの直撃数発食らっても戦闘可能な相手を一撃の下に両断できる。刀身の長さは数mってとこだ。

WC-IR24…シールドプラズマキャノン。

発射するには片膝をつく必要あり。自身のKARASAWA以上の破壊力と弾速、射程はある。KARASAWAの直撃を受けても一撃なら戦闘可能だったナインボールが吹き飛ばされ、短時間動けなくなつて二発目も直撃させられる破壊力。着弾時に推定数百m級の大爆発（数十m程度離れたところに着弾しても、10mのACの前方視界を爆炎で完全に奪う）を起こす。射程15000m。
なにこれ怖い」

セシリア

「まるで鬼神のような強さですね」

一真

「セラフに対して文の中で唯一倒したACだからな。

ゲームだってみんなのトラウマで愛されてるセラフだってACE…Rでコジマも積んだから……。まあ、強くなったんじゃない。AIは可哀想だけど」

一夏

「いや、だがああでなくては鬼畜過ぎるだろう。マッハ2〜3がデ

フォ速度って、VOBより速いぞ」

シャルル

「さらにガトリングだっけ？PAもすぐ削られるしね」

一真

「つまり、ラインの乙女以上のAIをつんだナインボールライザーが新たなみんなのトラウマに」

セシリア

「5で出て来たら発狂物ですわね」

一真

「むしろドントコイ」

シャルル

「そういえば、ナインボールも同じくらいの装備なんだよね？」

一真

「出力押さえてるからね。ミサイルだってオーダメイドで、初期搭載のミサイルは使ったことないよ」

一夏

「お前もつくづくチートじゃね？」

一真

「何度も言うように、乗ってるのは俺だからな」

主人公&ヒロインズ 講義中・・・

シャルル

「次は、黒鋼さんからの感想だね。

シャルロットのDeadENDフラグv

もう再起不能or死亡でいいのでは、と今話の感想ですね。

軍上層部はぶちギレて皆殺し↓対人類の最悪種でIS学園vs亡国
機業vs主人公でFAですねv

面白いけど、読んでて主人公が苦難過ぎて鬱になるですorz

え、ちょ、ええ?!」

一真

「残念ながらDead ENDならぬ爛れたPink ENDでし

た！

昨晚はお楽しみでしたねw大人の階段登ったシンデレラwww」

一夏

「・・・／／／」

シャルル

「ちよっと！何言ってるのお兄ちゃん！／／／」

一夏ラバーズ

「ちよっと、お話が」

シャルル

「っひ！」

女性陣

「ドナドナドゥナゥ」

一真

「・・・・・・・・女は怖いねえ」

一夏

「お前だってそうだろうが」

一真

「残念ながら、俺はただ添い寝しただけで指一本触れてなかったりします。

それに、元々はソレを回避するためにお前にけしかけたんだしな」

一夏

「確信犯かよ！」

一真

「それぐらいが荒療治としては妥当だと思うが？」

一夏

「そーいや、なんでシャルルの支えにならなかったんだ？依存って言ってもそこまで長くないだろ？」

一真

「甘いな。」

本来、精神病は出来たら最後だ。生傷のように治る事はまずない」

一夏

「そうなのか？」

一真

「一度出来たトラウマは抑える事は出来ても、治すというのは困難な病だ」

一夏

「でも、そのための治療じゃないのか？」

一真

「だったらアレルギーを治療したからといって、簡単にアレルギーが無くなるか？」

違うだろ。アレは投薬や体質改善でマシになるだけで、100が0になるわけではない。あくまで限りなく0に近付けようとしてるだけだ。治療を止めれば元に戻る」

一夏

「そりゃまあ、そうだけどさ」

一真

「トラウマも同じだ。治ったと思っていても何かの拍子にフラッシュバックする。」

ならどうするか、と聞かれれば答えは一つ。本人が抑えられるまで治療し続けるだけだ。

これがシャルルの支えにならなかった理由だ」

一夏

「時間が足りない・・・」

そういや、寿命がどうのって言ってたもんな」

一真

「この作中でSFチックな医療用機器として医療用ポッドとナノマシンを上げたのは覚えるよな？」

簡単に言くと、医療用ポッドは治癒。ナノマシンは治療だからだ」

一夏

「よく分からん」

一真

「医療用ポッドはぶっちゃけると有り得ない速度で自然治癒するとんでも寝袋。」

ナノマシンは細胞同士をくっつけて無理矢理治す手術マシン。

無くなった部分を補うために細胞を活性化するか、食ったものを細胞に変えるかの違いだな。

二次作用だと医療用ポッドだと老けるが、ナノマシンだと逆に老化させることができる」

一夏

「だからそんな老け顔なんだな」

一真

「黙れ」

一夏

「だったら医療用ポッドとナノマシンを一緒に使うとどうなるんだ？」

一真

「傷の治りが相乗的に早くなる。ただし、治した後にはナノマシンがいらない治しすぎるから栄養失調にかかる」

一夏

「なんでさ？」

一真

「ナノマシンは頭が悪いんだ。」

出された情報と命令以外の区別は基本的に出来ない。典型的なロボットだからな。

だからナノマシンの命令は人が出すしかない。途中の命令変更、新規の命令は情報処理ナノマシンが脳に電極で刺さないかぎり不可能に近い。

ナノマシンは治療が済んだ、なんて考えない。例えば健康体に戻せなんて命令を出すのが一番悲惨で、分かりやすい例だ」

一夏

「ど、どうなるんだ？」

一真

「肉体が最盛期時で、遺伝子に欠損が無ければ問題ない。だがそれから外れると悲惨だ。

まず、肉体年齢が全盛期から離れていた場合、ナノマシンは肉体を作り替える。それも全てな。

傷の治療なんてナノマシンには分からない。奴らがやるのは命令された事を自分達なりに達成するだけだからな。栄養素がなければ構築途中の肉の塊しか残らない」

一夏

「医療用ポッドのが可愛く見えてくるな」

一真

「医療用ポッドも欠点はあるがな。

あのまま突っ込まれてたら骨が皮膚を突き破ったまま治癒してた」

主人公&ヒロインズ お茶会中・・・

一真

「お、また蒼 龍一さんか。いつもありがとうございます W W W 碎けた感想は気が楽になっていいですなあ W W W W W W W W W W ンじゃ、読むか・・・」

帰ってきた、作者よ私は帰ってきたああああ！！（宿題＆プログラミング ミング課題地獄から）

——という訳で、今回までで分かった元ネタ

1. バカテスムツリーニ
2. 少佐演説（少佐は世界一カッコイイデブ異論は認める）
3. A M I D 一匹ください、100年ローンで W
4. 逆襲のシャアはリィガズィが好きだ
5. H O L・・・真名と四人の怯え方にこの上なく納得いった
6. ハチ公は実は駅前の焼鳥屋で焼き鳥をもらうために待っていた
と言う説がある（真相は不明）

7. ラウラのトーナメントの暴言の元ネタプリーズ

8. ドリフターズの妖怪首おいてけ・・・ヒラコー作品はいちいち
キャラが秀逸だと思う

9. 酒、隠れてだったらいいんかい W W W W

10. S E E D はアストレイが好きだ W

11. ライルか、機動性ってことでアスピナ製フレームを使う気
はないかね、お嬢さん？今なら V O B もおまけでつけとくよ W

12. アームズパーティー・・・スペル忘れた(汗)ゲームはしたこと無いが小説で持っている。何度でも読みかいたくなる・・・。

13. ハートマン軍曹wwww

14. KARASAWA・・・つまり一真は弱王と突き合う関k
「カオ!!」ギャアアアア!!?」

ボキャブラリー不足、突っ込みきれん・・・レイブン、助けてくれ
!!

貴様には水底さえ惜しい。コジマの海に溺れて溺死しろ」

一同

「おい!!!!」

一真

「奴は俺を、俺を(トッ、トッ、トッ、トッ、トッ、トッ、トッ!!」

ラウラ

「あ、兄の戦闘力が53万に?!」

一夏

「戦闘力って?」

セシリア

「さあ?」

シャルル

「ボケの数値じゃない?」

ラウラ

「スカウターがあっ（ぽーん）」

一真

「俺を怒らせた（#；ω；）」

一夏

「泣くなみつともない」

一真

「ハチが、ハチが焼鳥屋に行ってたなんて信じないもん！」

セシリア

「もんって（どん引き）」

一真

「ハチは主人を待ってたんだい！」

H・1

「wikiによると死んだ際に体内から焼鳥の串が見つかったそうです」

一真

「信じないやい！」

シャルル

「あ、ここにいいものあるよ（ステイザー）」

一同

「（。D。）?!」

一真

「ハチはハチは」

シャルル

「てい」

一真

「あばb b b b b!」

暫くお待ちください

一真

「ナニカサレタヨウナ？」

シャルル

「解説しよう、お兄ちゃん（ニコニコ）」

一真

「ヨイ子ナ君ニハ是ヲアゲヨウ（コジマキャンディ）」

一同

「（（・ω・、）ゝ・ω・）イリマセン」

一真

「ソウカイ？（モグモグ）」

一夏

「・・・・・・・・食った」

一真

「調子良くなってきた。」

さて、続きを話そうか・・・

まず、元ネタについて話していこうか」

ラウラ

「全て答えるには数があるから抜粋したのみ答えよう。
まずは私の暴言だが、元ネタなどない！」

一夏

」

一真

「まあ、事実を話ただけだしな（カワイソ）」

一夏

「憐れむな！」

セシリア

「男性の良さは大きさではありませんわ！」

一夏

「余計傷付く！」

一真

「アームズパーティーって知らないんだが」

シャルル

「フラッシュじゃないの？」

一真

「小説がなかった。まあ、また情報が出たときにもググるさ」

ラウラ

「高機動でライールを選んだ理由なら後々分かる！ヒントはACタ
イプは二次移行がないだ！」

一真

「ナインボールが二次移行したとか突っ込むなよ。メディア並に報

道の自由なんざないんだからな」

セシリア

「飲酒は二十歳からと言われてますよ」

一真

「細けえこたあいんだよ！日本の法を守る人間が法を侵す時代なんだから！まったく江戸時代も真っ青だぜヒャッハー！（がぶがぶ）」

一夏

「言ってるそばから飲むな！」

一真

「テメエで稼いで責任も自分で持つからいいんだよ！自立ってなあそういうことなんだからなあ！（ごぼごぼ）」

ラウラ

「皆は親の金でそんなことはしないように」

一真

「ましてや酒や煙草で優越感に浸るなんてガキのすることだぜ！度が過ぎればDQNになるから止めろよお前ら！……………気持ち悪い」

シャルル

「飲み過ぎには追い酒が効くらしいよ」

一真

「それ二日酔いですデュノアさん」

一夏

「・・・・・・・・滅茶苦茶だ」

(古)

「まったくだな」

(興)

「だがこの熱気は心地いい・・・・・・・・股鞍がいきり立つ」

(神)

「同感だ。私のグレネードも程よく暖まっているぞ」

一夏

「ドナタデスカ？」

(古) (興) (神)

「ヤラナイカ？」

一夏

「アーーーーッ?！」

一真

「童貞と処女を一話で卒業するとは・・・・・・・・流石は主人公。一味違う」

主人公&ヒロインズ　ゲイブンとの戦闘を開始・・・

一真

「さて、お気に入りもそれなりになってきた。P Vもユニークもまあまあだ・・・・・・・・（マダ尻ガ気ニナル）」

一夏

「つまり？（モウ、御嫁ニ行ケナイ）」

一夏　ラバーズ

「・・・・・・・・（ゴクリ）」

一真

「外伝が始まるぞお前ら」

一同

「ヒャッハー！！！」

一夏

「外伝っていうとアレだよな、俺らに強くスポットが当たるんだよな！」

セシリア

「で、出来ましたら一夏さんの個人デートをお願いします！」

シャルル

「あ、ズルい！僕だって一夏と2人きりでデートしたい！」

ラウラ

「私は違う世界に行きたい。そうだな、エースコンバットかマブラブがいいな」

一真

「……………（；ω；）」

一夏

「どうしたんだよ？いきなり泣きだしたりして？」

一真

「だって、だって主人公が『外伝っていうとアレだよな、俺らに強くスポットが当たるんだよな！』だぞ……憐れで、憐れでえ」

一夏

「ちくそう（；ω；）」

一真

キャクホンカ
「世界の悪意が見えるよ（本音…扱い辛いだけ）」

一夏

「ぐぬぬ」

一真

「神よ！何故私に試練をお与えになるのです！過労死させる気かゴラァ！」

一夏

「ギギギ（裸足のゲン顔）」

セシリア

「一夏さんのお顔が?!」

シャルル

「本当に楽しそうに人を弄るよね、お兄ちゃんって」

ラウラ

「む・・・ぎぎぎ？違うな・・・ぬう・・・ギギギ（裸足のゲン顔」

一同

「（ 〰 ）」

ラウラ

「おう、出来たぞ兄者（裸足のゲン顔」

一真

「やめて。ガチでやめて。俺のSUN値が下がる」

ラウラ

「そうか」

（古）（興）（神）

「ふんぐるいむぐうるうなふ」

一真

「H・1」

H・1

「了解（月光」

（古）（興）（神）

「イエア ッアアアアッ！！（団子三兄弟」

一真

「さて、外伝は好き勝手するとしてアナザーかIFになるなら楽だな。話は一話で完結出来る。クロスオーバーだと資料集めと話の関

係上少し話は長くなるな」

一夏

「起承転結だからか？」

一真

「俺が指名されたら起承転結闇だな……よし、俺はどこかの学園物に逃げよう」

ラウラ

「ならいい場所があるぞ兄よ！」

一真

「どこよ？」

ラウラ

「これだ！（School Days）」

一真

「一夏様、指名デス」

一夏

「は？」

一真

「貴様にこそNice Boatは似合う」

一夏

「絶対にお断わりだ」

一真

「ちょうどヤンデレ枠がいるし、n t r 枠にも困らない。まさに適任！」

シャルル

「ヤンデレ？」

セシリア

「n t r？」

ラウラ

「他は沙耶の唄だろ、装甲悪鬼だろ・・・」

一真

「緩い作品無いの？ねえ、平和な作品無いの？」

ラウラ

「平和ならコレだな（ブラグラ）」

一真

「お前の平和が血生臭い」

ラウラ

「（。・ω・。）？」

セシリア

「そんなに文句があるのでしたら一真さんの御勧めを教えてください」

シャルル

「ヤンデレ・・・僕、ヤンデレじゃないもん」

一真

「最近のだったらC3とかミルキィホームズ、あそびにいくよとか？」

束

「呼ばれて気が（ry」

一真

「H・1」

H・1

「そのためのナインボールです」

束

「な、なんだい君は?!」

H・1

「消えなさい」

一夏

「・・・・・・C3ってヒロインが拷問器具だぞ？」

一真

「ホラー要素を満たすなら大丈夫じゃね？」

シャルル

「ホラー要素って、例えば？」

一真

「リョウメンスクナ」

ラウラ

「アレはファンタジーではないのか？ネギまでは巨人じゃないか」

一真

「ちょっとした小ネタであるんだよ。奇形児をリョウメンスクナに仕立て上げる話が」

セシリア

「それはまた」

シャルル

「薄気味悪いね」

一真

「ま、どうなるかはわからんがな」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

事件その18 「俺の義妹の非常識さ加減の原因が現れてさあ大変」 (前書き)

この小説は話すことも無くなった妹が真夜中に人生相談に来る方が
みが読める小説です。

妹がない。人生相談とか夢見過ぎと血涙する友は是非共に世界に
宣戦布告しよう。

◆

「間違っているのは俺じゃない。世界だ！」

そして最後に、

「『だから僕は悪くない』」

を許容出来る方のみ御進みください。

事件その18 「俺の義妹の非常識さ加減の原因が現れてさあ大変」

7月も半ばを過ぎ始めたカレンダーを鏡越しに眺めながら俺とラウラは並んで歯を磨いている。互いに低血圧なためか鏡には乱れた服装の男女がだらしない顔で歯を磨いている。特に俺は酷い。寝汗でシャツが透けて傷が見え、短パンもズリ下がって恥骨とボクサーパンツが挨拶までしている。ラウラに至っては穿いてさえいない。そして、寝癖で髪が好きに跳ねてさえいた。

歯を磨き終えた俺達は自然と交替で顔を洗い、誰が言うでもなく着替えを始めるために仕切り板を引っ張りだす。モソモソと布の擦れる音をならしながら指定の制服にそでを通す。大半の生徒と同じように改造した制服は重く、重い体がさらに重くなった。少しでも肩を動かすだけでジャリ、と小さく金属の擦れる音がする。特注の防弾・防刃性の制服は未だにその役目を果たしたことはないが、日本で役目を果たしたらきつと日本の安全神話は終わりだろう。晴れて先進国の仲間入りと皮肉出来るかもしれない。

早めに着替え終わったラウラは冷蔵庫から紅茶を取り出すと二人分注ぐ。そして、着替え終えた俺にそれを手渡すと互いに錠剤を取

り出して口にする。ラウラはマルチビタミンとヘム鉄、俺はマルチビタミンだけだ。

「いい朝だ」

「・・・ねむい」

スッキリしたラウラに対して俺はまだ寝惚けている。こういう時ばかりはラウラのナノマシンが羨ましい。

「今日はどうするのだ？」

今日の予定を尋ねてくるラウラを見ながら1日のスケジュールを頭から引き摺り出す。働く気力もない頭は文字通り引き摺りだすだけの労力を必要とした。

「俺はナインボールに油挿したいから午前中はガレージかな。その後は特に予定はないが、夕方から秋葉さんと訓練があるな・・・で、何か用か？」

「午後は開いているのだな？」

「ああ」

「だったら街に行こう」

「街に？」

予定を聞くくらいだから何かに誘うのだと思ってはいたが、まさか街に行きたいとは。俺が外へ誘う以外は興味も持たなかったのに何故だ。

「うむ。クラリッサから夫婦は時折街でデートという物をすると言っていた。だから現地を視察して万事に備えたいのだ」

「そんなもん前情報無しでもいいだろう。デートなら一夏だってエスコートくら、い……」

一夏がエスコートくらい出来るだろうか。あの、他人からの好意に愚鈍な男がラウラを引っ張れるのだろうか。

全くイメージ出来ない。

イメージの押し付けかもしれないが、一夏はまずラウラの意見を聞きそう。聞いた上でそこに行き、次の目的地さえ聞きそうなのがする。いくら一夏でもそこまで主体性がないとは思わないが、不安は払拭出来なかった。

「まあ、まだ街に慣れてないし構わないぞ」

「そうか！」

「なら待ち合わせはどうする？」

「1300時にショッピングモール中央の噴水でどうだろうか？」

「13時に噴水前な・・・分かった」

自室のクローゼットに仕舞っていた工具を持ち出した俺は誇りを被ったマニピュレータを見ながら溜息をつく。せっかく作った専用マニピュレータも何時になったら日の目を見るのだろうか。きつと俺がH-1を解析し終えるまでお蔵入りなのだろう。気が滅入る。

約束を交わして互いに午前中の予定を消化するため寮の前で別れる。その際に制服で出掛けるラウラに俺は頭を抱えた。

（私服無いんだった）

以前、ラウラのパジャマや下着類を買いに行ったきり衣類は買っていない。ラウラが好きに買うだろうとその時は要らぬ世話を焼かなかったが、思い返すとラウラの私服姿など見たことないし、タンスの中も制服と下着と軍服しかなかった。これはこれで問題が多い。

今日は服を見に行くべきと予定を決めて俺はガレージへ向かった。

ガレージに着いた俺は手早くツナギに着替えるとタオルで髪を纏める。タオルで纏めた髪は厚く層をなし、後ろに押さえ込むだけでポニーテールのように揺れて自己主張した。

ここ半年髪を切っていないせいか結べる程の髪に今更ながら違和感を覚える。試しに撫でると傷んだ髪はモサモサと指先を撫でる。自衛隊員、それも少佐にはあるまじき身なりだ。

自衛隊は厳しい規則により髪型を始め様々な物に規則を付けている。例えば髪ならば5mm以下や髭は剃る。シャツは必ずズボンに入れ、ボタンは全て閉じる。いつ誰が見ても身なりが良いようにしているのだが、特殊な立场上それほど五月蠅くはされたことはない。

だからといって守らない理由にもならないのだが……

（後で切るか）

光も照り返さない髪を摘みながらどれ程切るべきか考える。坊主でも構わないが、そうになると頭部の傷が悪目立ちする。試しにコメカミの上を擦れば消えない傷が蚓腫れのように盛り上がっていた。

（短くする程度でいいか）

他にも傷はあるが自衛隊の中ならまだしも、こんな学園でそれらを曝せば要らなく周りを恐がらせてしまうだけだ。刈るにしてもまずは秋葉さんに相談してからの方が良いのかもしれない。

（海自じゃなくて良かった）

もし、所属が海自だったならばまず俺は営倉に叩き込まれるか、船から太平洋もしくは日本海に叩き落とされるか、厳罰を食らっていたに違いない。陸自や空自も対して変わらない。秋葉さんが特別甘いだけだ。

他人の優しさに付け込んでいるようで嫌だな。

溜息を吐きながらガレージの隅に荷物を広げ、ナインボールを呼

び出す。紅の装甲のISは西洋甲冑のような佇まいで現れた。いつも装着していたから分かり辛い、かなり大きい。2m超はある。

オイルを入れた霧吹を片手に各間接に少しずつオイルを吹き付けていく。特に駆動系はバラし、丁寧にオイルを吹き付け、ウエスでゴミを拭き取りながら整備していく。

パーツによっては特殊なオイルで洗い、磨耗しているようなら交換も行う。予備はあまりないが、こういった物をケチると命を危険に曝す。小さな危険は積もり積もって一大事になるのだ。

片腕が終わり、逆側を整備しようとした辺りでガチャン、と何かが落ちる音がした。振り向けば少し離れた場所に少女がおり、こちらを見つめていた。学校指定のジャージを着ている彼女は様々な工具を抱き、足元にはモンキーが落ちていた。先程の物音はモンキーが落ちた音らしい。

「すみません」

視線が合うと少女は謝りながら落ちたモンキーを拾って近くの作業スペースに入り込む。俺も別段気になることもないため作業に戻ろうとしたが、ナインボールの装甲に先程の少女が映り込んでいた。彼女は遠巻きに俺を見ており、最初はナインボールの情報でも盗むのかと警戒したが、作業を再開するとナインボールよりも俺を見ていることが分かった。ISの整備が初めてのような反応に首を傾げそうになるが、それもすぐに気にならなくなった。

（外部装甲はマシだが、あちこちスラックスが酷いな・・・磨くにしても研磨剤効くのか？）

両腕の整備が済む頃になると持ってきたオイルは空になり、予備を入れようとしたが残りが少ない事に今更ながら気付いた。部品を洗うのに使い過ぎたようで、持ってきた一斗缶の中には鉄屑や埃で少し濁ったオイルが俺を映していた。

使い終えたオイルを再利用するわけにもいかず一斗缶を片手に倉庫に向かう。タップと波打つオイルを零さぬよう運んでいると偶然少女の作業が眼に映る。真っ白な図面と乱雑に広げられた工具。さらには打鉄やリヴァイブ、ミヅチの他に見たことのない部品が巨大なゲージに陳列している。そして少女の目の前には素体さえない剥き出しのコアがあった。

（証拠隠滅？）

整備科の人間がISをバラし過ぎたのかとも考えたが、ならわざわざコアがある筈がない。ISはコアだけでも豪邸1ダースも買える値が付く。そして一度人の手に渡れば何に使われるのか分からない物でもある。良識的な人物なら問題ないが、犯罪者に渡ればその国の信用にも関わってくる。

（自作ISか・・・才能がある奴はいいな）

ISの研究、開発、改良は全て国や大手企業が担っている。その理由は信頼性の高さもあるが、一番は将来性だ。

様々な国が一刻も早くISの量産をしてライセンスを得たいのだ。そんな中で素性も知れぬ、能力も高くない者に数少ないISを託す事は有り得ない。何より個人にISを研究や改良だけならまだしも開発が出来る資金源があるわけではない。

（なら、なんで？）

トクトクトクと琥珀色のオイルを一斗缶に注ぎながら考える。だが、すぐに面倒になり止めた。そんな物を知ったところで何の利益もない。せいぜい悩みが解消されてスッキリする程度。それだっすぐに目の前の事に集中して忘れ去るだろう。

透き通ったオイルに太陽が照り返す。死んだ魚のような三白眼と見つめ合いながら暫く水面の俺を見つめる。

『このままでいいのか？』

水面に映る俺が小馬鹿にするように笑いながら見下してきた。

（今はな）

『暴れたらスッキリするだろうな。衝動的な暴力を押さえ込むのも

疲れるだろう？』

水面に映る俺は攻撃的な笑みを浮かべながら目をギラつかせる。なるほど、喧嘩を売ってきた相手にはこうして挑発するべきなのかと教えられたような気がした。

（嫌な気分になるよりはいいさ。何より、俺は忘れっぽい）

『知ってんだぜ、いや、分かるか……』

お前は時々通り過ぎる人間を殴りたくなるよな。お前になつく奴らだって蹴り飛ばしたくなるよな。好きな人間も嫌いな人間も構わず壊したくなるよな』

（なら、まずテメエを壊すさ。そうすれば無駄な労力をかけずに効率的だ。だから、テメエが消えろ）

『他人に興味がないくせに、他人を気遣う……ビビんなよ』

（その他人にテメエも入ってるがな。お互い様だろ）

『違う』

笑いながら次第に元に戻る俺を見ながら溜息を吐く。

何をしてるんだと自分に呆れなてしまう。これでは厨二病末期患者じゃないか。

恥ずかしい出来事を忘れるために一斗缶を担いでガレージに戻る。

鼻を突く粘ついたオイルに顔を顰めながらナインボールが鎮座する最奥へ向かう。途中、少女がいないことに気が付いた。

メモ用紙の束は好きに散らばり、点灯し続ける端末機は主人がいつ帰ってもいいようにCADを閉じずに待機している。色気ない景色にポツン、と綺麗なコンテナに安置されたISコアが自棄に寂しく感じさせる。周りには主人である彼女は居なかった。

別に気にもならないが、せめてコアだけは持ち歩くべきだろう。無用心なことだ。親切心を働かせるなら、ここを出るまでに帰ってこないのなら教師にでも預ければいいか。

立ち止まって途中経過を眺めてみるが複数あるメモはデッサンばかり。CAD画面には図面の代わりに意味のない線の集合体が表示されている。ISの素体は通常二脚にしたいのか逆間接にしたいのか分からない。関節がセーフティを外している。アレでは着地した際に足が折れてしまうだろう。

何がしたいのだろう？

・・・

・・・

・・・やはり、どうでもいいか。

気を取り直してナインボールの元へ戻るとしよう。踵を返したときだ。

「あ……」

少女と目が合った。

彼女はナインボールを調べていた。

「あの、これは」

俺と視線が合ったことで慌てふためく少女に対して俺は一斗缶を置いて腰からハンドガンを抜く。愛用とまで行かないが、信用性皆無な同居人を向けられた少女は驚きのあまり固まってしまう。

分かりやすいように撃鉄を音を立てながら落とす、決して外さぬよう胸に狙いを付ける。ナインボールを展開するのが最善だが、生憎整備のため片腕は満足に固定していない。今のナインボールを使用すれば最悪片腕は胴体から泣き別れしてしまった。

「あ……うあ……」

銃口を向けられて固まる少女はどこかのスパイにしては自棄に隙だらけだった。目には涙が溜まり、齒はカチカチと音を鳴らし、顔は見て分かるほどに青ざめている。

その姿から既に一般人だと考えてしまうと、自分のしたことが余りに過激なことに行きついてしまう。流石に遣り過ぎた。

過剰な反応をした事を反省しながら素早く周囲の状況を確認する。特に弄られた形跡はない。ただ図面が広げられていたが、見える限りでは欠落がない。

「ゆっくり離れろ、ゆっくりだ」

「その、ごめんなさ」

「離れろ」

「っひ」

胸の前で手を握り締める少女は何度か転びそうになりながら一歩、また一歩離れる。

ナインボールから十分離れた事を確認し、俺もゆっくりナインボールに近づく。怯える少女は特に何もせず涙を流しながら俺を見つめている。

（図面は全てあるな。それに部品も見er限り問題ない………何か仕掛けられた様子は）

携帯を取り出し、H-1に何かされていないかを確認する。数秒

で帰ってきたメールには少女の行動が詳細に載っていた。

少女が取った行動、それはただ見ていただけだったらしい。

凶面の中身を見たり、ナインボールの外装を見たり、工具を見るくらいしかなかったらしい。

「すまない。過剰に反応し過ぎた」

ハンドガンホルスターにしまい頭を下げる。

銃口から解放された少女はペタンと尻餅着くと抑えていた恐怖が安心感により溢れたのか泣きだしてしまふ。自分が悪いとはいえない今の状況は勘弁して欲しい。こんなの他人に見られたらまた要らぬ問題を招く事になる。

「落ち着いたか？」

「すい、ません……お恥ずかしい所を御見せして」

少女、更識簪はメガネを外して涙を拭いながら謝ってきた。そこまで謝る必要はないのだが、仕方ないか。

肩口で揃えた髪は内巻きの癖がつき、鋭い目尻はどこか冷たい印象を感じさせる。もし校内で擦れ違ったらキツイ目の子だと思ったに違いない。まあ、人のことは言えないか。

「仕方ない。一般人が銃口向けられて平気なわけないしな」

そんなことを言っているが、頭の中では「IS使ってれば嫌でも慣れるだろう」という冷たい自分が居ることを自覚していた。

まあ、今の女尊男卑を支えるのがISならば仕方ない。ISがない状況で拳銃を持つ人間に勝てる女性など数人しか知らない。その

中に目の前の少女、更敷簪が入るとは到底思えない。

更敷は俺が買い与えた缶ジュースをチビチビ飲みながら俺の作業を見つめていた。ビスを外す作業から始まり、駆動系の点検整備、組み立てに到るまでずっとだ。

いったいこの状況はなんなんだ？

自分自身が分からないのに自分にしか聞けない現状に溜息を吐く。

チラリと更敷を見ると食い入るように見つめていた。目が合ったが、先程のように慌てることなく先をせがまれてしまう。

本当にやり辛い。

「そんなに珍しいか？」

「犀川さん。もしかして、ソレって犀川さんの自作ですか？」

「ありえない」

質問に質問を返された。即答はしたが、ここは注意するべきだったかもしれない。

「な、なら開発に関わったとか」

「ありえない」

「なら開発に関わった人の関係者？」

「ナインボールの開発者なんて会ったことがない」

「……じゃあ、なんで専用機なんか持ってるんですか？」

「持て余していたISがコレしかなかったからだ」

「それこそありません。それに、そんな話聞いたこともない。

それに、初心者なら打鉄やリヴァイブがあります。日本政府に所属するなら日本製を使う方がアピールにもなります」

「どうやら聡い子ようだ。数年前の俺と比べると頭が良すぎるくらいだ。」

「スペック論で作ったISだ。性能が高いのも手伝って誰も乗り手がいなかったんだと」

「でも、ならなんで量産しないんですか。アレだけ高性能なら量産の話だって出て来るもんじゃないんですか？」

「そんなの御上の都合だ。俺は知らない」

「有名ですよ、犀川さんがISで何度も入退院してるって」

「後一年すれば日常化するさ」

たぶん、この学園に居る限りアソコ（病室）が俺のふりだし地点だろう。学園生活の3割をあそこで過ごしているのがなんとも涙を誘う。

「羨ましい」

「アレは更識のじゃないのか？」

「コアだけです。ISは、白式の開発のせいで無期限停止になりました。」

噂ぐらいは聞いたことありませんか？打鉄二式っていう日本製三世代型ISのこと？」

「打鉄二式……ああ、あのカスタム機か。確かある程度作ってはいたが完成を目前に計画が凍結されたISだったそうだが・
・災難だったな」

災難ではあるが、それも致し方ない。なにせ国は大々的に男性IS適性者を売り出せるのだ。そんな客寄せパンダが貧相な身なりでは視線も集まるまい。

さらに付け加えるなら、打鉄二式はあまりに目玉がないという話だ。詰まる所、普通過ぎたらしい。

既存の打鉄に中遠武装を取り付け、増設ブースターを付けただけの手抜きIS。

それを知った時のウチの人間の反応は決まって「これを原案したのは馬鹿だ」と言ったものだ。その中には俺も含まれている。

そういった現場の事情を知る人間からすると更識は運がいいと言える。なにせ、欠陥機を掴まされることがなかったのだから。

悔しさを噛み締めるように更敷は齒を食い縛る。苦々しいその顔から目を外し、ナインボールを見上げる。

まるでステータスのように扱われ続けるその言葉が嫌いだった。それを求める者の気持ちも、羨ましがる者の気持ちも分からない。こんなの他人に縛られた人間の証拠だ。

だからだろう。

こんな物を求めて俺を排除するような奴らも嫌いになった。

その意味でもナインボールは嫌いだ。たぶん、その気持ちは変わることはないだろう。

ただし、H・1だけは違う。コイツは――だ。

ISが嫌いだからISの管制AIであるH・1も嫌いなんて暴論だ。

最初は疎んでいたが、H・1と2年も過ごせば愛着も沸く。今では相棒や友人とさえ見ているH・1を嫌うにはナインボールだけでは理由には足らない。

「そんなに専用機が欲しいなら大企業に自分を売り込んだらどうだ？」

「何故ですか？」

「コアは持ってるんだ。大抵の大企業なら喜んでISを作るぞ」

気安めな考えだが、一番手っ取り早い解決策だ。デメリットは他企業との仲が悪くなり、企業間の戦争に巻き込まれてしまうことだろう。それにISが二次移行してからは晴れて企業の派閥に入る事になる。それは就職先が決まると同時に将来性を殺すことでもある。

「嫌です。私の専用機なのに、それじゃ企業のISになる。それにそんなことすれば企業間に無駄な軋轢を作ることになりますよ」

「聡いな」

だが、同時に自分勝手なことを言っているものだ。

ISは国が管理しているものだ。つまり、ISはあくまで貸与されているだけで決して個人の物ではない。さらに、専用機持ちになるということは有事の際には前線に出されるということだ。そのことを更識は理解しているのだろうか？

ここに入学してからそのことについて誰も理解しているようには感じなかった。ラウラではないが、まるで専用機をファッションの一部のような感じで見ている節がある。授業中もふざけてISで遊ぶ人間がいる。そういった奴らを怒鳴るのは俺とラウラ、千冬先生くらいだ。その他の専用機持ちは笑うだけ。自分達が兵器を使っているという考えが大きく欠如している。

この問題に関しては既に一部の職員に相談はした。しかし、同意したのは軍に所属していた人間くらいで、その他の代表候補止まり

の教職員は笑って大丈夫と言ってきた。

頭がおかしいと思った。

生徒が、子供が銃器を扱っているのに大丈夫だと？

感覚がマヒしたのか？それとも日本の安全神話を妄信してるのか？

だいたい、葉莢の管理をしない時点でおかしい。ラウラとも話したが、この学園は危機管理が最悪だ。こんなんだから何度も所属不明機に侵入されるのだ。

「ああ、だから自分で自作してるのか？」

「はい」

「それで、ナインボールでも参考にしようとしたのか？」

「すみません・・・」

「なら次から気を付けるように。ナインボールは日本の最高機密だ。外ならデータの開示も問題ないが、IS学園内でそれをする条約に触れることくらい知ってるだろ？」

「でも、私の理想型がナインボールだったんです」

理想型と来た。

持ち上げたものだ。しかし、着眼点はいいのかもしれない。なにせナインボールはバランスの取れた機体なのは間違いない。

「スペック論で作ると自分の体を壊すぞ」

「でもスペックを落とせば」

「なら装甲は何を使うんだ。それに武装は何を選ぶ？各武装やブースターの固定の仕方は？空力に関するフォルムは？ブースターの制御は？間接部の衝撃吸収方法は？空中分解しないための基礎データはあるのか？シミュレーションのプログラムは？」

「うう」

「それに金銭的な問題もあるだろう。」

一人で本当に作れるなんて考えてるならやめな。破滅したくないならな」

自作ISなんて妄想の産物。個人で造るなど無理だ。

「でも、お姉ちゃんは1人で作ったんです」

「更識の姉はISの開発でもしてるのか？」

「学生です」

学生で自作ISって、どこのチートだよ。

「学生って、IS学園にそんな凄い奴いたか？」

「生徒会長ですよ。犀川さんも会ってるじゃないですか」

「ああ、アレか・・・・・・・・・・」

更識盾無。

学園最強の生徒会長。

成績優秀、IS学園におけるNo.2、容姿端麗の変態。今をと
きめくロシア国籍の日系グラビアモデル。

たしか、日本の旧家でありながらロシア国籍を取って代表候補に
まで上り詰めた世界に名を馳せたスーパーJK。モデルもしていた
な、趣味で。確か健吾と誠もファンだったか。知らぬが花だな・・・
・・・いや、まこっちゃんなら逆にそそのめるのか。アイツ、色々とア
レだからどんな変態的嗜好も受け入れるに違いない。

「一応、家族の前なんですが」

その割には平気そうな顔してますね更識さん。

「なあ、アイツなんかならないか？」

「姉が何か？」

「最初は襲われてんだよ。さらに週2で生徒会の勧誘に来るし、この前は病院に忍び込みもした」

「姉が御迷惑をかけて申し訳ありません」

思い当たる節があったのか更識はすぐに頭を下げてきた。手慣れた行動からは年季が感じられ、それだけ破天荒な姉に苦勞したという過去が窺える。

「姉が姉だと苦勞するだろ」

「そんな事は」

「学園最強にして日本人でありながらロシア代表候補。さらに個人でIS開発して生徒会長にまで携わる完璧超人。

そんな奴の妹なら比較とかされて嫌な目にもあったんじゃないのか？」

「・・・・・・・・」

考え過ぎと思った予想は見事に的中したのか更敷の顔に曇りがさす。ここまで同じだと親近感が沸いてくる。それでいて目の前の憐れな少女に要らぬお節介を焼きたくもなる。

「まあ、俺が何言っても意味はないか。ただ、アフターケアとして一言。月並みで悪いが、姉と更敷は違う。姉が出来たのにとか考えず自分勝手にしろ」

「自分勝手、ですか？」

「ああ、俺らはそうだった。経験者は語るだ」

俺とアイツ、上と下という違いはあれど才能や能力の違いで比べられた境遇に居る更敷に言えるのはコレだけだ。そこから後は全て更敷次第だろう。

俺の言葉を反芻する更識を置いてその場を後にする。

ガレージを出た俺は南へ昇りつつある太陽に目を細めながら約束の時間まで何をするか考えるのだった。

「それにしても暑いな」

そりゃ夏なら当たり前よ。なんたって夏真っ盛りなんだから。

燦々と降り注ぐ真夏の日差しに目を細める一夏を見つめながらそう呟く。

夏服を着た一夏は学園の時とは違った魅力があった。周りの風景がそうさせるのかもしれないが、とにかく周りから浮き出ているように私には見えた。

少しだけ汗ばむ首筋から鎖骨にかけての色気やモンゴロイド特有の黄色い肌に黒い髪がさらにそれを増長させる。

私達は今、街に来ている。理由は臨海学校の為の準備だ。こっちに身一つで来た私が水着を持っているわけもなく、だからといってせっかくの海を学校指定の水着で過ごすなんて耐えられない。

それに、こっちに來てからまだ一夏と2人つきりにもなれてない。

中学の頃も2人つきりになれたと思ったらヘタレロリコン厨二魔術師のような馬鹿に邪魔されてばっかだった。

だから、これはチャンスだ。セシリア、シャルル、ラウラといったお邪魔虫は用事で出掛けており、箒も朝から居ない。最高のタイミングね！

まあ、そんな理由で街に来てるんだけど……

「うわぁ、広いし綺麗だね一夏！」

「そんなに珍しいもんか？」

「うん！だって家は田舎だったし、学園の外に出たのも1度きりだったから！」

「そう、なのか」

「うわー、こんな場所も会ったんだ」

「あんまりハシヤギ過ぎて転ぶなよ」

シャルル」

なんで一夏の隣がシャルルなのかしらね！本当は私があそこに居るはずなのに！

吹き抜けの天井から差し込む光を浴びたシャルルは実年齢よりも幼く映る。一真が風邪で休んだ日に何かあったのかあれ以来シャルルは以前のように笑うようになった。

それはいい。友人として、ライバルとしては喜ばしいことだ。

「それじゃ、行こう一夏！」

「あ、引っ張るなって」

喜ばしい、ことなんだけど………

「なに、アレ？」

「手を、握って、いますわね」

「握ってるわね」

「楽しそうですわね」

「楽しそうね」

「デートなんでしょうか？」

「それだけは認めない」

「恋び——」

「殺セバ関係ナイワ」

「婿である私を差し置いてデートとは、姑息な手段だな」

「「きゃあっ?!」」

突然、声をかけられた私達は思わず自販機の影から飛び出る。

「喧しいぞ貴様ら」

そんな私達を冷めた目で見ていたのはラウラだった。

軍服のように改造された制服をピシッと決めたラウラは遠くにい

る一夏達をゴツイ双眼鏡で追っている。どこからそんな物出したのよ。てか、この休日に制服ってアンタね。

制服を着て外に出ること自体は問題ない。校則で規制はされていないのだ。しかし、制服で出る生徒なんて一年と少数の上学年以外はいない。その理由は簡単だ。

面倒な男に引っかかるのだ。

IS学園という一種のブランドに所属する生徒を彼女に持つというのは傲慢になる。そうなると自然とIS学園の生徒と付き合おうと考える馬鹿が出てくる。さらに上手く利用してその力の恩恵にあずかろうとする馬鹿だって出てくるくらいだ。

女尊男卑の風習になってから男は強かになった。悪い言い方だが、女の権威を利用するようになったのだ。一夏や一真のようにそう言ったものに興味を示さない奴の方が珍しいと私は思っている。何故なら、アッチ（中国）では私を苛めてきた男達は私が代表候補になった途端に手のひらを返したように擦り寄ってきたのだ。

そのせいか男は弱い者に大きく出て、強い者には媚を売るような者だと思いつつある。

忘れよう。あんな記憶、無い方がいいに決まっている。

「ふむ、嫁とシャルルはN・12へ行くようだな」

ズボンのポケットから取り出した地図を広げ、細かくコマ割りし

た地区を指差しながら双眼鏡で二人を追い掛けていく。ちなみに地図も双眼鏡もポケットに詰め込んだ。本当にどうなってんだアレ。羨ましい。

「時間もまだあるし、よし」

「ちょっと待て。時間を目覚まし時計で確認するな」

「む、電波時計だから確実なのだぞ」

「携帯はどうした！」

「逆探知される恐れがあるから電源を落としている」

「携帯を携帯してる意味がないじゃない！」

「安心しろそういう事もあるうかと」

「衛星無線機……さらにGPS付きトランシーバーに――
――え、AK-47」

「あんた！今から何する気よ！」

「……敵地潜入、いや暗殺？」

「ヤバイ、コイツ本気だ。本気で殺りに行く気だ。」

「尾行！尾行よ尾行！お願いだから尾行だけしてお願い！」

「スニーキングか……ゲリラは得意ではないのだが」

「ああ、犀川さんの苦勞が今分かりましたわ」

「そうか！暗殺ならSVDが必要だな！待ってろ、今組むから！」

「やめろ！」

「そうか、M95Kの方が確實だな」

「だからやめろっての！」

「あーもー！一真早く気なさいよー！」

目の前で巨大なライフルを組み始めるラウラを引き止めながら今は居ないボサ髪の三白眼男の使えなさに嘆く。こういう時の一真だっというのに。

その頃の一真はというと・・・

「これぐらいで、よ、宜しいでしょうか？」

「傷も見えないし、これでいいか」

髪を切っていた。

短くなった髪を掻き上げながら長さを確認する。その際に傷が見えたが、まあ髪さえ上げなきゃ問題ないレベルだな。

（き、傷っ?!）

（さっぱりしたな、やっぱり）

揉み上げや襟足、全体を確認していく。本当に短くなったな。

（この人、怖いです店長！）

（が、頑張れ岡野！お前しかないんだ！）

（だ、だって傷が！縫った後が！あちこちに！

し、しかも首筋とか肩に変わった傷だって——これもしかして銃痕って奴うつ？！）

（し、仕方ない！その道の人なら………仕方ない！）

（………絶対、ヤーさんだと思われてるな）

鏡に映る店員とバックヤードにいる店長以下スタッフを見ながら涙を滲ませる。

やっぱり、怖いのか俺。

（格好良いなあ）

（危険な薫りに混じるエロスがたまらない！）

（鎖骨がエロい！さらにあの項と背骨に浮き出る影………やべ、涎が）

（眉間の皺も渋いよねー）

（周りもやけに見てくるし・・・・・・はあ）

盛大に落ち込んでいます。誰か、励ましてください。

「うわー、これ可愛い♪」

「買うのか？」

「うーん、あんまり余裕ないから水着買ってから考えるよ」

追いついた2人は現在玩具屋の前で展示された人形を見つめていた。展示されている人形は吸血鬼をモチーフにした子猫で、一真が教えてくれたが最近人気のキャラクターらしい。

「そういや、シャルロット」

「シャルロット」

「え？」

「2人の時はシャルロットって呼んでたっていった」

「いや、でもすぐには」

「・・・」

「えと、シャルル？」

「・・・」

「・・・・・・・・シャルロット」

「なに、一夏？」

花のような笑顔を浮かべるシャルルを見ていたら知らぬ間に持っていた缶を握り潰してしまう。グシャリと潰れた缶に「脆過ぎよ」と文句を付けながらゴミ箱へ投げ捨てる。放物線を描いたソレは巧く入らずに奥の路地裏へ消える。すると追従するようにもう一缶が路地裏へ消えていった。

セシリアだ。

彼女も同様にゴミ箱に缶を捨てたが、巧くいかずに唇を噛み締めながら汚れた手を拭いている。唯一、違うのはラウラなものだ。この娘は抹茶苺なる物を美味しそうに飲んではニヘラと笑ってる。

嫁が取られているのに悠長な奴だ。

「アンタ、余裕そうね」

「嫁が誰と遊ぼうが問題あるまい。嫁は嫁だ。何があろうとそれは変わらない」

なんという漢女らしさ。敵ながら感心するわ。でも敵だけど。

「いつから一夏さんが貴方のお嫁さんになったのですか?!」

「一月前だ。覚えてないのか?」

「あんなのノーカンよノーカン!」

「一夏は私の嫁だ。異論は認めない」

「普通は婿ですわ！」

「日本の文化も知らんのか？」

「だあー！誰よコイツの教育者！」

一般常識から掛け離れた事ばかり言うラウラに頭を抱えてしまう。
以前、一真から愚痴を聞かされてはいたが、まさかここまでとは。

「いい！日本にそんな文化なんか無いわ！」

「何を言う。私の部下が言っていたのだぞ」

「無いたら無いのよ！」

頑なに非を認めないラウラと睨み合いをしながら私達は初志を忘れてしまう。

「ふ、2人がいませんわ？！」

私達の目的は、シャルルがどこまで進んでいるのかを探ることだ。
敵を知り己を知れば何とやら。情報は何時如何なる時も力だ。故に
2人のデートを観察することで2人の親密さを推し測るつもりが、

まさかバレた上にまかれるなんて・・・

「どーすんのよ！見失ったじゃない！」

「と、とにかく手分けして探しま——」

「一夏達なら北に行ったぞ」

「「は？」」

「今はショッピングモールの小道に入るようだな」

小さな端末を眺めるラウラが指差す方向を見る。チラリとだが、確かに一夏が入っていくのが見えた。

「な、なんで?!」

「ラウラさん。貴方が手にしているのはいったい」

「ドイツ軍で開発した試作IS探査機だ。簡易的な装置だから登録したISしか探せないし、範囲も百m程度しかないが性能は確かなようだ」

「なにそれ凄い」

「さすが技術国ドイツということですか」

互いに感心しながら探査機を覗き見る。

簡易的というのは比喻でもなく、映画で見る数世代前のソナーのような多重円に映る光点が中心から次第に離れていく。イチカ、シヤルルと表示される光点が遠ざかる度にラウラが摘みのような物を操作すると光点はまた中心に近づき、隅にはドイツ語らしき文字と数字が絶えず増減を繰り返す。

中心にはラウラと私、セシリアらしき光点が3つ光っていた。どうやら1年の専用機全てが登録されているみたいね。

「ふふん」

私達の驚きに御満悦なのかラウラは胸を張りながら鼻高々といった面持ちで勝ち誇る。普段ならカチンと来てもおかしくないのだが、どうも今のこの娘を見ていると苛立ちよりも微笑ましさが前面に出て来る。きっと母性本能が擦られたのだ。そうでなければ誰が恋敵兼喧嘩に負けた相手を好ましく思うか。

隣を見るとセシリアも同意見なのか、複雑な心境により困った風にハの字眉を作りながら口だけは優しく笑っている。

（なんか、怒るのもバカらしくなってこない？）

（凰さんですか？）

(そりゃあ、こんな可愛い生物前にしたら、ねえ?)

(一真さんがあそこまで構う理由が分かった気がしますわ)

成る程、セシリアの言うことにも一理ある。確かにこれなら一真でなくても可愛がるに違いない。

「どうだ」

(ドヤ顔可愛いです)

名残惜しさを心の奥底にしまい込み、気持ち切り換える。ラウラという憎く、可愛く、心強い味方がいる今ならばもう何も恐れる者など無い。

「さあ、早く後を追うわよ!」

「そうですわね!」

勇み足を踏み出す私達と違いラウラはその場に立ったままキョロキョロと辺りを見回していた。周りを見回すその積極さに置いて行くにも行けず、仕方なく立ち止まる。本当なら追い掛けたいのだけど、見つけてくれた貸しもあるしね。

「どうしたの？何か探してるみたいだけど？」

「いる」

「何が？」

「兄だ」

「は？一真が？どこに？」

「分からん。ただ、近くにいた気がするのだ」

「探査機を使えばよろしいのでは？」

「一真さんだって専用機を携帯しているのですから」

「出来ればしている」

「出来ないのですか？」

「兄のナインボールは頻繁に量子周波を変えるから登録しても次の日には使えないんだ」

「量子周波って確かISが使う電波みたいな物よね？」

量子周波とはISが発する量子の振動で、これが出るおかげでISは既存の電子機器を超えた性能で居られる。電波ならば地下や金属に囲まれただけで使用できないが、ISが使用する量子はこれらを見捨てて使用できる。つまり実質的にISが使用する量子は何時でも、何処でも使用が可能なのだ。流石にその量子が何なのかまでは分からないが、確か一真が前に難しい顔でタキオンと言っていた気がする。

さて、この量子周波だが、実はISにおいて指紋並に身元証明の説得力となる。

量子周波は基本的に数種類しかなく、その基本から個別に識別コードを暗号化しているため変えようとするには特殊な暗号変換器や大規模な施設を必要とする。世界で数あるISがあまり犯罪に使われない理由はこれが関係していたりする。なにせ国連でその量子周波は管理され、使用すれば何処の組織の誰が使っていたかまで分かるからだ。そんなものを犯罪、テロ、戦争に使えば国際問題だ。故に国や企業はISを死守し、犯罪者は闇に流れたISを軽々しく使わない。

つまり、ISの量子周波は簡単に変えられない指紋のような物ということだ。

「ありえない………犯罪じゃないの？」

「いえ、条約ではそのような規定はありませんし暗号変換器ならば

試験機に搭載されてもおかしくはありませんが」

「逐一よ、逐一。んな高性能な暗号変換器があったとして、どんだけ容量食うのよ？」

一般的な暗号変換器は大抵がシステムで、イコライザに組み込んでISに付けるのが普通だ。それでも大容量イコライザを1つ食い潰すため見てくれだってかなり変わるのだが・・・

「・・・・・・・・日本ですから」

「なら仕方ないわね」

ナインボールはスマートだ。無駄の無い人型と断言していい。数あるISは必ず横に大きかったり、浮遊部位や特殊武装で何か特色がある中、ナインボールにはそういった余分なものがない。洗練されているのだ。しかし、洗練されているというのはつまり無駄を省いた結果だ。もし、そこに必要なシステム全て入れたらもっと大きくなってもいいのに、ナインボールは一般的なISに比べてもかなりスマートと言っている。

流石は大国アメリカに喧嘩を売り、欧州に勝った上に全ての植民地を解放しただけはある。本当に日本はHENTAIな国だ。

「此方から兄の反応を感じる」

私達が現実を無理矢理受け止めている間も一真の気配を探していたラウラは自信満々に小さな喫茶店を指差す。

いや、待ちなさい。今、気配じゃなく反応って言わなかった？

「んなアホな」

「いくらなんでもそうそう都合よくいるわけありませんわ」

小走りで喫茶店に入るラウラを追って古臭い店内に入る。中には少し早い昼食を取る若い男女が何人かテーブルに付き、奥の窓側の席に数人の男女が別々で座っている。カウンターには常連客なのか親しげに話す老人と店長らしき年老いたお婆さんが紅茶を淹れていた。

軽く見渡すが、一真はいない。

特徴的なボサボサな長い髪もいたが小肥りな中年男だったし、眼鏡だけならば店内に複数人いる上に一真らしき姿なんて見えなかった。

それ以外で客を見ていくが、一真らしき姿は見えない。窓側にいるパソコンと睨み合う神経質そうな男は帽子を被っているが違う感じがするし、ニットにヘッドフォンを掛けた気取ったグラサンは煙草を吸っている。それ以外はスーツを着た短髪の人だし、他は白髪混じりだからありえない。

決まりね。ラウラの勘違いだわ。

「いらっしゃい……あら、珍しいわ、IS学園の生徒さんがいらっしやるなんて」

眼鏡をかけたお婆さんは朗らかに笑いながら手巻をする。今すぐにも一夏達を追いたかったが、こんな人の良さそうなお婆さんの好意を無碍にも出来ない。こういうとき日本人気質な自分が恨めしい。

仕方なくカウンターに近付くとお婆さんは笑いながら空いていたカウンター席に座るよう勧めてきた。

「犀川君以外に学園の生徒さんが来るなんて珍しいわ」

「え、あの、お婆様は一真さんをご存知なのですか？」

驚いて振り返るが、やはり客の中に一真がいるとは思えなかった。

「常連さんよ。毎週必ず来てくれるのよ。彼みたいなカッコいい子が来てくれると店が華やかになるわ」

「毎週」

アイツ、そんな頻繁に足を運んでるんだ。

「さて、ご注文は？」

「えっと、私はミルクティーにスクーンをください」

「私は・・・このジャスミンティーとシナモンパイで」

渡されたメニューをラウラへ渡そうと横を向けば一点に視線を向けるラウラがいた。

「いた。兄だ！」

ラウラの視線の先を見るよりも先に走りだした彼女に呆気に取られてしまう。しかも、走り出した先が煙草を啜えた気取った男の下だったからマズい。

「ちょ、待ちなさい！」

あんないかにもチャラそうで、不良っぽいのに関わろうとするなんて何考えてんのよ？！

「兄よ！」

「~~~~~っ?！」

テーブルを叩く程に身を乗り出したラウラに驚いた男は煙草に蒸せた。それにマズいと感じた私達は慌てラウラを席から離し、後ろへ隠す。それからどんなイチャモンを付けられてもいよいよ身構える。

「ごほっ、ごほごほっ！」

「連れが失礼を御掛けして申し訳ございません」

セシリアは蒸せる男に冷たい言葉を投げる。そういえばセシリアは男嫌いで、チャラそうな男を嫌いそうな子だった。勿論、私もチャラいのは嫌いだけだね。本音を言えば言葉だって交わしたくないわ。

「ごほごほっ……………」

「ゴメンなさいねー、そんなじゃごゆっくり」

胸を押さえる男に背を向けてカウンターに帰ろうとラウラの手を引くが、動かなかった。

何をしてんのよと振り向くと彼女は私達の態度を訝しむように眉

を顰めていた。

「何故カウンターに戻るのだ？」

「何故も何も、勘違いだったんだから当たり前でしょ！ここに一真はいない。見れば分かるでしょうが！」

「兄なら居るではないか」

紅茶を飲んで落ち着きを取り戻した男が此方を睨んでいた。目は見えないが、眉を顰めているのは分かる。

面倒になった。

「だーかーらー、それが勘違——」

「なんでここにお前らがいる？」

「「は？」」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「ほら、やはり兄だ」

私達の手を振りほどいたラウラが男に抱き付く。男はそれを拒まず、優しく頭を撫でていた。口元も自然に笑い、ラウラと2〜3言葉を交わした。

その声も仕草も確かに私達の知る一真の物だった。

吐き出した紫煙が生物のように換気扇に飛び込む様を眺めながら
凰達から聞いた話の感想を纏める。頭は多少麻痺するが、考えをま
とめるには丁度いいくらいの感じだった。

「悪趣味」

その一言で尽きたけどな。

「「うっ・・・」」

「他人の交友を影からコソコソ盗み見るなんて悪趣味と思わなかつ
たのか？」

「それは・・・」

「そうですが」

「お前らの考えは理解してやるが、もう16だろ。一々つまらんこ
とで大人に諭されるなよ」

「大人と言いますが、一真さんと私達は2つ違いではないですか」

「そ、そうよ！未成年のくせに喫煙してるアンタに言われたくないわ！」

「ところがぎっちょん。実は俺、20歳っていう設定があったりするんだな実は」

証拠として自衛隊での保険証と大型自動二輪の免許を見せる。実費で取った免許をこうもどうと出せると気持ちがいいな。

「なんでよ！学年が2つ違うって言ってたじゃない！」

「俺が高校に入学したのが17の時、それから2年で中退。それからIS学園に強制入学。今は珍しい苦学生舐めんなよ」

「え？もしかして留年^{ダブ}ったの？」

「おい、口を畳針で縫うぞチンチクリン」

「チン、チクリンですってえ?!」

「中卒と同時にバイトで高校の入学費から学費まで揃えるのに2年かかったんだぞ。自分の金で留年するアホが高校に入るわきゃねえだろうが」

「一真さんのお家はそんなに苦しかったのですか？」

「姉が大学に行き、さらに免許の金まで出してもらったんだ。その時に父さんの保険金を下してな。さらに下は部活で金がかかり、高

校も私立。俺が自分の面倒見なきゃ家族が路頭に迷ってたんだ」

「母子家庭とか何か？」

「両親共働きだ。ただ稼ぎは悪かったからな……誰かが犠牲になるしかなかった。それが俺だっただけだ。

ラウラ、もう少し綺麗に食べる。口の周りが餡子で汚れてるぞ」

ラウラの口を拭いながら自然と出て来た嘘に呆れる。

事実と嘘を混ぜているから簡単にはバレないだろうが、それでもそんな嘘が自然に付けるのは褒められた物ではない。

同情的な視線を向ける凰達から逃げるように煙草に火を点ける。

良心の呵責や自分の汚さを代替りしろとばかりに紫煙を勢い良く吐き出す。

換気扇に吸い込まれる姿を見ながら数秒だけボーッとする。

「アンタ、苦労してんのね」

「婆臭いぞ、凰」

「なんですってえー?!」

「しかし、一真さんも多難な人生を生きているのですね……私、てっきり一般的な人生を歩んで来たものと思っておりました」

「一般的から最底辺に落ちたがな。
まあ、つまり俺が酒や煙草を吞もうが文句はないわけだ」

勝ち誇った笑みを浮かべながら2人をからかう。

先程までしんみりしていた2人は頬をヒクヒクとひきつけながら俺を見る。いい表情だ。シャルルと違った良さがある。これだからこういう可愛い奴らを弄るのはやめられない。

「つーわけでえ、16の生意気盛りの小娘が俺みたいな大人に諭されたくなきゃ少しは常識を弁えるだな、常識を」

「生意気盛り?!」

「小娘え?!」

「むぐむぐ・・・店主、おはぎのお代わりをくれ」

「はいはい」

「納得行きませんわ! た、確かに疾しい事はしました。ですがそれを貴方に言われる筋合いはございませんことよ!」

「そうよそうよ!」

それに、アンタには関係ない事じゃない!」

「なら、ラウラは置いていってもらうぞ。これから2人で街を歩く

予定だからな」

「「なっ?!」」

「ん? もうそんな時間なのか?」

「探査機はラウラの私物で、軍用だから他国籍のお前らが軽々しく触れないのは勿論。俺が認めないのくらい承知だよな?」

「「く、くう・・・!」」

「さーて、そんな中でこの広いモールの中からどうやって一夏達を見つけるつもりだ?

しかも、今日は休日だ。老若男女問わず人が出歩くモールの中から2人をどうやって見つけるんだ?」

「「ぐぬぬ」」

反論を許す隙を与えたというのに、2人は悔しそうに紅茶の水面を睨むことしか出来ずにいる。無計画にも程があるだろうに。

「ま、諦めるんだな」

これで諦めて休日を満喫するもよし、諦めず探し回って時間を浪費するもよし。そこは2人の自由だ。

先程の説教はあくまで他人から見て悪趣味というのと、ラウラを

巻き込むなと釘を刺しただけだ。2人の行動に深く介入するつもりなんて始めからない。

「・・・あ」

「ん？」

「むぐむぐむぐ」

「私、なんでこんな大事な事に気が付かなかったのでしょうか・・・」

「セシリアも気付いた？」

「ええ」

何かに気が付いたらしい2人の明るい笑顔に悪寒が走る。

間違いない。これは碌でもない考えだ。

「一真」

「一真さん」

「なんだ？」

「「一緒に遊びましょう」」

「・・・・・・・・ちなみに、それに至った考えは何だ？」

「「近くにいれば確実に2人と会える!!」」

「一真さんは産まれながらのトラブル體質!ならば、今この場でのトラブルは一夏さん達!」

お前、まるで自分には非がないように言うな。トラブル體質はお前だろうがツインドリル。ドリルが許されるのは膝が手か螺旋力だけだぞ。

「しかもアッチには一夏がいる!アンタについてけば向こうからホイホイ現われるに違いないわ!」

ホイホイって、アイツらゴキ扱いか。ひでーなお前。

「「さあ、何処に行く!」」

ほら、やっぱりろくな事じゃない。

「と、いうわけで全力で一夏達から離れるため古着屋に来ました」

「なんで古着屋？」

「ラウラの私服が皆無だから。これは由々しき事態だ」

「そうなんですか？」

「軍服と学園の制服、俺の御下がりのジャージで全てのこの子に一言」

「それは確かに問題だ」

「故に、ラウラの私服を買います。ちなみに助っ人その他も呼んでいます」

「誰呼ぶのよ？」

「3人娘と篠ノ之」

メールも既に送信済みで、3人娘全員は残念な事に予定があるらしくかなり遅れるらしい。篠ノ之は用もないくせに断りやがったのでこれから電話だ。

「そんじゃちよいと電話するから、お前らは先に服を見始めてくれ」

俺のゴーサインを聞いた凰とセシリアは弾かれたようにラウラを引き摺り奥へ消えていく。何だかんだ言ってもアイツらは女の子ということだ。これで小一時間は潰せる。俺も欲しい服あったら買うか。

見えなくなったラウラ達から携帯へ目を移し、手早く篠ノ之の番号を呼び出してコールをかける。数秒、コール音が響くいていたが突然紐でも切ったようにブツリと切れた。

あんのモップサムライ娘、切りやがったな。

「H・1……無理矢理繋げろ」

『よろしいのですか？』

「バレないようカモフラージュと多数のデコイ、後は外国からの偽の信号もな」

『了解。23・4秒後に繋がります』

H・1にしては遅過ぎる。いつものH・1ならば数秒で済ます程度
の筈なのだが。

「やけに時間がかかるな」

『ついでにアメリカ、ドイツ、中華連にハッキングをかけてマスターの情報を有耶無耶にします』

どうやら遅過ぎるのは勘違いのようだ。逆に早過ぎるくらいだ。

友人へ無理矢理通話する片手間にハッキングを受ける三ヶ国には同情するが、此方も連日マークされているのだ。この程度の反撃は犬に噛まれたと思ってせいぜい悔しがってもらおう。

『作業終了。繋がります』

「あーあーあー、篠ノ之、聞いてる上で進めるぞ。今すぐこないと一夏にお前が惚れてると伝え——」

「天誅　う　う　う　う　う　う　っ　！」

「あらやだ早い」

後ろを見るといつもの愛刀を掲げる篠ノ之が般若の顔で此方に走っている。周りの通行人もその恐ろしさに跳び退く者が続出している。正直、あんなのと知り合いなんて思われたくないよ。

それにしても日本人ならば時間には気を遣わなきゃな。その点、篠ノ之は満点だ。ただ、公衆の面前で木刀はマズいんじゃない？

「やーやー、我らがモッピー。元気してるかい？」

「何故、何故、先輩がそのことを！」

「御兄さんは何でも知ってるのさ」

「なら、自分の死期もわかりますよね・・・今日、ここが、貴方の死に場所です」

「それは殺されるのであって、間違っても死期とは言わない」

腰から取り出したスタン棒で木刀を受け止めながら歯を剥きだす篠ノ之に笑いかける。ISと違って生身では篠ノ之には劣るようで、徐々に体を押し込まれている。周りの騒ぎも次第に聞こえなくなるほど篠ノ之からの殺気が高まっていく。その形相や言動から冷静さを何処かに置き忘れてきたのだろう。本当にモッピーはドジっ娘だな。

てか、隠せてるつもりだったの？あれで？どうみても小学生低学年レベルの恋でしたよ？

「先輩・・・・・・・・私の為に死んでください」

「嫌ですの」

「安心してください・・・私の腕ならば痛みもありません」

「え、まさかと思ってたけどガチで達人かよフザケンナ」

さらに体を押し込む篠ノ之の木刀に体を斜めにして流す。体勢の崩れた篠ノ之は素早く体勢を立て直すと返す太刀で俺の首を狙ってきた。

「つぶね」

「っち、失敗った」

失敗ったって、本気で殺す気なのかよ。

無事だった首を少しさする。ジクジクと痛みが走り思わず眉を顰める。指先を見れば微かに血が滲んでいた。木刀で皮切るってただけだよ。

仕方ない……奥の手を使うか。

「ん、おーい一夏じゃないか！」

「んなっ?! な、なんで貴様がい——」

頭に血が上がっても好いた人間の名前はわかるのか、箒は木刀を隠しながら勢いよく振り返る。

「——ない？」

「いやはや、馬鹿だ馬鹿だと思ってたが」

此方に背を向ける篠ノ之の首にスタン棒を当てる。

「馬鹿で助かったわ」

「ぴぎゃ」

30万Vの電圧により泡吹いて倒れる篠ノ之を俵担ぎにする。周りはそんな俺達を眺めるばかりで、止めに来た警備員も俺を見て苦笑いをしている。

「痴話喧嘩かい？」

「一方的暴力ですよ」

「あんまり騒ぎが大きいと形だけでもしょっぴくから覚悟しなよ」

「俺、被害者ですよ？」

「被害者も事情聴取くらいあるさな」

今回は痴話喧嘩扱いで済んだが、普通なら警察沙汰もありえただろう。

「しかし、中々の量だな」

山のように嵩張る買い物袋を担ぎながら携帯でH・1と会話していた俺は、自分達だけ旨そうにアイスを食べる女共にキツく睨みをきかせる。

極彩色に、大小様々で、雪だるまのように重なるアイスを眺めながら指に挟んだコーヒーを煽る。

「いやー、気付いたら自分の分も欲しくなってきた」

「他人のお古なんて理解出来ませんわ」

「日本人は物を大切にすることからな」

「モッタイナイ、でしたか。」

ですが、見ず知らずの服を着るなんて気味が悪いのでは？」

潔癖症な事を言うくせに、実はこの山の二割はこのお嬢様のだっ

たりする。ちなみに一番高い買い物したのはオレだったりする。欲しかったライダーズが安かったんだ・・・

「あの、やはり私もお持ちします」

「結構。貴方だって今ぐらいはプライベートを楽しむべきですよ」

メイドのブランケットさんは現在俺がチョイスしたTシャツにジーンズというラフな格好をしている。ヒールに多少肩を出し、さらには体のラインを強調しているためパツと見るだけでもその美人さは損なっていない。

メイド服を着ていたこの人を説得するのには苦勞した。何せ、セシリアは感覚が麻痺していたしラウラは問題外。ブランケットさんは仕事だと割り切っていたが・・・・・・常識人の俺と、ニア常識人の凰は許さない！

ちなみに箒はちよいと残念なので無視。

とにかく、セシリアを俺が黙らせて承認を得て、凰がゴリ押しでブランケットさんからメイド服を脱がした。それで凰はそこで脱落。どうやら肉体の落差に呆然としてしまったようだ。

まさか女性の着替えを一から見る事になるなんてな・・・・・・人生何があるか分かった物じゃないな。てか、この人っていつの間にいたんだろう？

「ですが」

「日本人は昔から女性を敬う考えがあるんですよ」

「レディセカンドですか？」

「ええ。女性を守るために自ら盾にする。女性を優先するばかりが礼節ではないってことです」

「難しいです」

「つまり、甘えてもいいんですよ」

「・・・・・・・・・・」

信じられない物を見上げるブランケットさんに笑い掛けながらH-1が調べていた資料を見る。ジャンルがバラけ過ぎて一貫性が無い。特筆すべき情報といえば、米領の特殊工作と日本の機密文書くらいか。その他に次世代型ISの考案書と新規技術、さらには新たなエコ燃料だ。ちなみに、今現在、22世紀でメジャーな燃料は水素電池かミドリムシから作ったバイオ燃料だったりする。化石燃料は数十年前に消えた。

知りたくない事を教えてくれるH-1に殺意が湧く。こんな胸糞の悪い情報を良く集めて来れる物だ。ただ、IS学園生徒の基本データは役立った。これである程度の各国の動きが把握できそうだったか、春菜ってアメリカ帰りの帰国子女だったのか。

「この後どうするのです？」

「そうだな・・・買い物もしたし、ゲーセンに行くにしてもこの面子じゃあな」

「ゲーセンかあ、いいんじゃない。私も久々に行きたいわ」

「あのような不埒な場所など・・・・・・・・」

「「ゲーセン？」」

賛成1、反対1、問題外3。

「映画にしても面白そうなの・・・・・・・・あ、このリングっての見たいかも」

商店街の掲示板に貼られたオドロオドロしいポスターに興味がそえられる。キャッチコピーは『蘇る呪いの輪廻』という物だ。

確か、百年前のジャパニーズホラーをリメイクした物らしい。その怖さ、不気味さ、出来の良さに中々反響は大きい。外人からも高い評価を得ていたはずだ。サイコサスペンスも悪くないが、やはりホラーはジャパニーズホラーだよな。

そういえば、以前に聞いた話だが、精神疾患で恐怖が抜け落ちた人間にホラー映画を見せると始終笑っていたらしい。感情一つ抜けただけで世界は変わるといふ証明だな。

「」「」「反対」「」「」

「リング？」

「面白そうじゃなか」

「断固反対」

「ゆ、幽霊なんて非科学的ですわ！」

「そうですねお嬢様！」

「あんなもの、所詮ヤラセです！」

「兄よ、リングとは何だ？」

「ジャパニーズホラーだよ。ストーリーは、呪いのビデオから始まる恐怖。」

現実を蝕む非現実がいつしか現実になり、ある夜にテレビに井戸が映り・・・女性が這い出てくるんだ・・・そして女はカメラに張りついたと思うと、此方に出てくる。目の前に立つ非現実はやがてビデオを見た人間全てを呪い、見た物は一週間後・・・」

「」「」「っひい?!」「」「」

「いやー、夏の風物詩ですなー」

「つまりファンタジー映画か！」

「夢も希望も無いがな」

怯える面子を見ながら映画館を通り過ぎ、大型ショッピングセンターの前で立ち止まる。休日のショッピングセンターは外から見ても千客万来と言った様子であった。談笑する声、活気あるバイトの呼び込み、ガヤガヤと聞こえてくるゲームセンターの電子音、そしてベースのように聞こえてくる大量の足音と店内に響くBGM。見ているだけで疲れてきそうだ。

「ま、妥当なのって言ったらここだな」

「ショッピングセンター？」

「お前ら、一夏に見せたい水着は選んだのか？」

「「「っ?!」「」」

「私は、行けませんので」

ハツとする3人とは別にブランケットさんは1人だけ浮かない顔をする。

確かに、臨海学校は関係者以外は立ち入り禁止区域に入るが、それだって訓練の時だ。それ以外の課外授業ではブランケットさんは大いに役立つ。特に調理自習。組が違うから今まで一度も被害には遭わなかったが、それが危うくなるのだ。食に五月蠅い日本人とし

てこれだけは避けなければ。というか、まだ死ぬ気はない。

「なら俺が口添えますよ。絶対向こうでも問題は起きますから」

「しかし」

「俺を、1人にしないでください・・・・・・・・貴方がいないと誰がセシリアの暴走を止めるんですか・・・・・・・・6人の問題児を見るなんて無理です」

ラウラを入れたレギュラーメンバーを面倒見るなど・・・・・・・・絶対嫌だ。ここでブランケットさんを巻き込めれば、俺の負担は二割減る。

「す、すいません」

謝るブランケットさんと契約の握手を交わした俺は先走る3人を追うためにラウラ達の背を押しながら水着売場へ向かう。ひんやりとした空気がとても気持ちがいい。

目が痛くなるようなスポットライトと色鮮やかな水着に目を細めながら店員の勧めにより空けてもらったレジ横のベンチに座る。

荷物は全てコインロッカーに預けたおかげで身軽になり、買った缶珈琲を飲みながら時折感想や意見を聞きに来る篠ノ之達の相手をする。

これだけ切り出せばなんとも平和な日常だ。眉を細目ながら頬が緩む。一年前では考えられなかった事だ。

一夏には感謝している。

アイツが大衆の前で初の男性IS適性者だと分かったから俺が表に出られたのだ。水底に溜る汚泥目がけて投げられた石のように舞

い上がれたこそ、この日常に居られる。そして、結果的にラウラと出会えた。決して口にはしないが、一夏には返しきれない恩がある。だが、それを無視して現状を見てみると状況が違ってくる。

この場に男は俺しか居らず、また男友達は一夏しかないという切ないものがある。

下手にIS学園に在籍してるなんて言えば女生徒目当てのが寄ってくる可能性もある。そのせいで男友達は今のところ一夏しかない。馬鹿な男と付き合うつもりはない。

人間不信と言われるかもしれないが、トラウマを抱える身としてはそれが当然になりつつある。下世話な話になるが、これでも性欲がなくなって二年は久しい。今では老人の気分がわかるというものだ。子供、欲しいんだけどな。

(泣けるな)

まあ、そんな考えを余所に、凰がビキニを持ってきたときは焦った。あの平らな肉体をあそこまで自虐する程まで追い詰められていたとは……………

「誰がまな板だゴラァ！」

「ぐふう」

痛い。

殴られた。

しかし、事実は変えようがないだろうが！

痛みで流れたのか、それとも哀れみにより流れたのか分からない涙を拭い凰にはもう少し活発的な水着を勧める。周りが同年代よりスタイルが良い中でアピールするのなら、天性の明るさを押し出すべきと教えると納得して水着売場へ走っていった。

父さん、母さん……俺、やったよ。頑張ったよ。

誰かに誇りたい満足感で満たされながらも一度店内を見回す。

若い女の子が大勢いる。大人はもとより、小中高と様々だ。どの子も水着を片手に鏡でイメージを沸かせながら最高の自分を引き出そうと必死だ。

可愛らしい水着、鮮やかな水着、際どい水着、地味な水着……

いい加減に目が疲れてきた俺は近くにいたブランケットさんにタバコを吸いに行くと伝えて水着コーナーを離れ、指定の喫煙ルームに足を運ぶ。

真夏を間近にしたデパートの中は賑やかが過ぎた。

通り過ぎる家族も、友人達と談笑する子達も、ショーウィンドウを眺める千冬先生達も、ベンチで日向ごっこをする老夫婦も、ハシ

ヤギ回る子供達も、初々しい一夏達も皆笑顔だ。

ジュツと焼けるタバコを眺めながら紫煙を火に吹き掛ける。天上へ巻き上がる紫煙を眺めながらボーっとしてくる頭で今後の予定を考える。例のシステムが完成するのが来週一杯を予定している。もし完成すれば俺は遠慮なくナインボールを乗り回す事が出来る上に、一つ上のレベルの戦いにも足をつっ込める。

「・・・・・・・・・・なんか居たような？」

そう、とてつもなく間が悪い何かを俺は見た気がする。

「あ、これなんか可愛くないですか？」

「確かに、山田くんには似合いそうだな」

「そうですか？なんか照れちゃいます」

（うわー、なんでいるのあの人たち？）

喫煙室の向かいに位置する小物屋に織斑千冬と山田麻耶がいた。

山田は小さなイヤリングを耳に当てながら頬を赤らめる姿はやけに幼く、千冬と並べると姉妹にも見えなくはない。ただし、鋭い刃物を思わせる千冬と春の暖かさを思わせる山田では姉妹にしては無理がある。やはり先輩後輩といった所か。

それから暫く2人は店内を歩き回りながら様々な小物を付けたり、光に翳したりしながら買い物を楽しんでいた。もし、あそこに秋葉さん達がいればと考えてしまう。秋葉さんと斎藤技師は現在沖縄に滞在している。先の米軍の動きが怪しいらしい。本当なら自身も行かなければならないが、どうも日本でも怪しい動きが目立つようだ。

数日前になるが、静岡研に侵入やハッキングを図った人間が捕まったらしい。さらにそれを調査すると連鎖的に各国の密偵が見つかった。上層部の、冬月大将から直々の依頼でH・1に探りを入れもしたが、結果は最悪に尽きる情報しかない。

篠ノ之束が日本にいる可能性が高い。

最近、所属不明の未確認機の影が太平洋から日本に北上してきたらしい。その速度、高いステルス性から最初は亡国機関が話に出たが、篠ノ之束が篠ノ之束に接触を図ったため天秤は篠ノ之束へと傾いた。

次に、亡国機関だ。

先月のフランスのテロもその一つだが、今月に入って既に13件の事件が起こっている。全てが亡国機関という訳ではない。裏は取れていないが、各地でテロが起こっているらしく、次は日本の可能性が高いというのが米偵とEU公安、ユニオン公安の総意であった。そこできな臭くなるのが、アメリカとイスラエル協同開発されたISの試験だ。上は、これを囿に亡国機関と日本の目を向けさせる腹づもりらしい。その隙に篠ノ之束の身柄拘束、及び情報収集が主目的ではないか。そう日本は睨んでいる。

日本国民を守るためとはいえ、面倒な事に付き合うことになった。

(・・・・・・さて、そうすると火の粉がかかる可能性が高いのは静岡研を始め、有沢、如月だが)

これも早計かもしれない。特にEU公安とユニオン公安が欲しがるのは・・・・・・

(旧原子炉の配置か?)

旧原子炉。

核の悲劇を再来させた原子力発電と同型の旧世代型原子炉が未だ残る場所は日本のウィークポイントであると同時に、最大の火薬庫でもある。今でこそ残留放射線は基準値を維持しているが、数十年前は悲惨だったらしい。それこそ低被曝で数十万の人間が死んだという。放射能除去システム導入という日本の奇跡がなければ間違いなく今の日本は壊滅していた可能性がある。それにしても日本は本当に核に縁がある国だ。白騎士事件の時にも核が発射されたくらいだ。そろそろキレてもいいと思うのは俺だけだろうか?

さて、旧原子炉。第三世代型原子炉は日本の最高機密であり、アジアの爆薬庫への導火線である。その理由は内部に未だに大量の放射能が詰まっているからだ。廃棄するにも廃棄場所がなく、一時は宇宙に捨てるべきという声もあった。放射能除去装置システムもあくまで放射能を集めるだけで、100を5にしてくれるわけではない、あくまで一か所に集めて人のいない場所に捨てれるようにした

ただだ。もし、これが爆破されれば日本は四度目の核の悲劇が訪れ、放射能アレルギーを持つ日本人は内乱を起こす可能性が高くなる。そうなれば国は内部から瓦解。日本の信用は今一度地に落ちる。

それは真大東亜共栄圏が許さないだろう。それはユニオンとて同じだろうが、中華連が問題だ。アソコは未だに中華思想の抜けない老害も多いと聞く。未だに政敵を貶め、勝ち誇る癖がなくなっていない。まるであそこだけ一世紀前の日本のようだ。それで反日教育を未だに続けているのだから驚きだ。そこまで日本を恨む理由って何なんだろうな。

過去の殺戮？

経済的有利性？

アジアで最大の技術国家？

そんなところだろう。くだらない。

とにかく、日本は未だに仮想敵国が多い国に違いない。特にアジア最大の敵は、日本を親の仇のように見ている。それが現在の厳しい現実を作り上げているのだ。

P i P i P i P i P i

「っひゃ?!」

考えを巡らせていた俺はH-1が鳴らすコール音に驚いて声を上

げてしまう。

周りの人間に頭を下げながら携帯を見る。

——マスター、沖縄に在住する高槻秋葉からビデオメールが送られてきました。

——トイレで見よう。

残り少なくなった煙草を濁った汚水の中に投げ込み、喫煙室を出て真直ぐにトイレへ向かう。

トイレには運良く誰も居なかった。早足で奥の個室に入った俺は手早く盗聴や盗撮がないかを確認する。数分かけて確認し終え、便座に座ると頭部だけナインボールを展開する。

『メールを開け』

『了解』

幾重のファイヤーウォールを通し、ウィルスを調べてから開かれたメールにはビデオと数枚の画像が添付されていた。

内容は一言、“貴方の意見を聞かせて”とだけであった。

『一真君、これから再生されるのは昨日、7月9日金曜1224時に記録された映像です』

監視衛生からの映像が再生された。映像には数個の島と広大な海が広がっている。

まず、一番最初に目についたのは右上に表示された地図だ。日付変更線よりも日本に寄った位置に表示される赤枠に眉を顰める。

微妙な場所だ。

近いのでも、遠いのでもなく微妙な距離感に知らず知らず思考が深く潜り始める。

亡国企業を誘っているように見える。近くにはアメリカ在註軍がない。さらに引きつれついる艦隊も数籍だけ。これではテロリストに狙ってくださいと叫んでいるようなものではないか。

『今から30秒後、貴方に見てもらいたいものが現われるわ』

秋葉が言ったように、30秒が経つと画面の端から2つの点が現れた。

遠過ぎて2つ共白い点にしか見えないが、互いに追い抜くように右へ左へ急速旋回から急上昇、下降を繰り返す。

(早い・・・亜音速下で機動性が落ちてない)

縮尺からすると2機共に時速1000kmを超えている。亜音速下でこれだけの機動性を維持するなど中身がターミネーターか、PICが変態級でなければ耐えられた物ではない。いや、それよりもこの速度だ。

『ナインボールより早いな。現行のISで最速だが、よく空中分解しないな』

『ナインボールならば音速を超えられます』

『黙れ欠陥機。変な意地で肉の塊になってたまるか』

『鍛えれば問題ありません』

『黙れ。お前は俺をどうしたいんだよ』

映像を拡大させる。なんとか外観だけでも分かる頃にはドット絵のようになってしまい、めんどくさいが画像処理を行うと機影が多少モザイク掛かった程度にまでは解像度を上げる事が出来た。

一機は巨大なスラスターを備えたまばゆいばかりの銀のIS。もう一機は汚れ一つない真白なIS。共に珍しい全身装甲だ。

機動試験を済ませたのか2機は模擬戦を始めだす。

銀色のIS、今はS-1と呼ぶ。真白のIS、W-1は数km離れると互いに武器を構えた。構えた、というのがS1は無手のままだ。W1のみが両手に巨大なライフルを握っている。

そこからの戦闘は瞬きさえ忘れてしまうような物であった。

まず動いたのはW1だ。

背後のブースターが光ったと思えば、次の瞬間にはS-1へ向かい音速で突撃をかける。その速度、キレはまるで流星のような錯覚を覚えさせる。

その速度。その加速性に思わず立ち上がってしまう。0・100という加速性に耐える操縦者は勿論。そのGに耐えうるISが存在することが信じられなかった。ナインボールだけが、それを成すとばかり考えていたためだ。それを覆された驚愕は決して小さくない。

S-1も遅れて動き出し、本格的な戦闘が始まる。

S-1はエネルギー系の武装がメインなのか真昼の太平洋に蒼白い光線が幾重にもなって海面を蒸発させる。対するW-1は実弾メインなのかオレンジの軌跡が何本も海へ向かって落ちていく。

撃った瞬間には数百m先に移動し、避けるタイミングも相手の銃口が光ってから瞬時加速でギリギリで避ける。その代表レベルの模擬戦に手に汗を握ってしまう。こんな戦いはモンドグロツソでも見ることなんて叶わない。

『早っ、つかアレを避けれるのか?!』

『最高反応速度はコンマ3。マスターよりも遅いですが、イメージインターフェースでは向こうに分がありますね』

『いや、肉体的にも能力的にも向こうに分がありすぎるだろ』

『死ぬ気で鍛えてください。目指せ人類最強の請負人』

『お前さ、実は元人間だったりしない？無茶苦茶人間臭くね？』

映像はさらに続き、互いに近接戦闘まで始める。

S1は手刀を、W1は腕部内蔵型ブレードで切り合いを交えて激しい銃撃戦を続ける。大空に∞の字を書くように銃撃し、剣を交え、そして去り際にミサイルや散弾銃のようなエネルギー弾をばら撒く。

牽制に放たれるミサイルは多弾頭式を採用しているのか、発射の時は一つだった光が分裂して覆うようにS1に襲い掛かる。四散するミサイルはピラニアのように獲物であるS-1へ殺到し、S-1はそれを身を捻って避け、迎撃し、時には手でそっといなす。その隙を突くように、ミサイルの白煙の中からW-1が突っ込んできた。両手のライフルで牽制、隙を見つければ肩に備えられたエネルギーライフルを放ち徐々に追い詰めていく。ハイレベルな戦いをするW1と似た戦いが出来る事に嬉しさと驚きを感じた。自分には才能はないと言い聞かせてひたすら邪道な戦い方を伸ばしてきたが、君の苦勞は報われると言われたような気さえた。

ミサイルによって造られた雲を目隠しに近寄り、ライフルを乱射するW1に次第に夢中になる。

次は何を見せてくれる。

次はどんな戦い方をする。

次はどう魅せてくれる。

理想的だった。

そのスタイル、回避センス、奇襲奇策のトリッキーさ。全てが自分の完成形に見えてくる。

巡り合えた。

見つけた。

俺が求める終わりを。

そして、最高の映像が最後に差し掛かる。

二機が近づいたと思うと閃光が映像を全て呑み込んだ。それが、模擬戦の最後であった。

白い映像から秋葉さんになる。その顔には強い緊張が張り付いている。

『最後の映像に関してだけど、映像データはクラッキングされて無いの。画像データは閃光の起こる瞬間よ』

H-1が開いた画像データはW1を中心にされていた。

コマ送りのように画像を切り換えていくとW1の外観が少しずつ変わり、そして光が溢れだしていく。

最後の画像は閃光の範囲を計算した物だ。

『直径1km・・・爆撃?』

『ビッグバンアタックとも言えます』

『それ違う』

『なら自爆ですね』

『いや、それも流れるにおかしいだろ』

『なら何が良いのですか?』

『逆にお前は何なら納得するんだよ』

最近のH-1は本当に人間臭い。

『閃光は約1kmを吹き飛ばしています。爆発の規模と波の高さから衝撃は球体状と推測されます』

あまりにも常識外れな範囲に呆れて声も出ない。

『私達は、これがナインボールと同系列の次世代機と考えます。貴方の意見を聞かせて』

ナインボールと同系列機。

それは、つまりナインボールがアメリカ製であると言っているような物だった。

画像を今一度見つめる。

言われれば似ていなくもない。

全体的フォルムはナインボール同様スラリとし、実戦的な武装の数々、さらに呼び出す必要をなくした装備。確かに似ている気はする。

しかし、

『ありえない。あれが、同じなんて』

神聖視された物は、その瞬間から別次元に置かれる。たとえばそれが人、物、現象だろうと。

犀川一真の中で、白亜の存在が神聖視された。

亜音速の世界での高レベルの戦闘。様々なフェイントを混ぜ、時に奇襲を仕掛け、機会を自ら作り上げる戦術。全てが自分の延長に
いる。

しかし、H・1の中で、新型のISはガラクタとされた。機体性能、操縦者の能力値、反応速度、ほぼ自らが上だと計算した為だ。

逢ってみたいと一真は思った。逢って教えを乞いたいと、しかし、一真は彼女と出会ったとき、彼はこう言うのだ。

“ 知りたくなかった ”

血を吐きだすようなその一言を周りの者がどう聞くかはまた別の話となる。

「兄よ」

「・・・・・・・・どうし——いや、その前に鼻水を拭け」

トイレから戻って来て早々抱き付いてきたラウラの涙と鼻水を拭く。何を泣いているのだろうか？

「どうしたいきなり？」

「な、夏には適した水着を着なければ見放されると聞いた！」

「また、極端だな」

「私は、嫌われたくない！私はどうすればいいのだ？！」

「普通のじゃダメなのか？」

「分らん」

「ならどんなのならいいんだ？」

「分からん！」

「ならお前の要望は？」

「何も分からん！」

何故か胸を張って否定してきた。可愛くはあるが、イラツと来たので軽くデコピンをする。

額を少し赤くしたラウラを見下ろしながらどんな水着がいいのか考える。しかし、女性物水着なんて選んだこともなく、また男であるため門外漢に近い俺がラウラの求めるような水着が選べると思えない。

やはりここは女子に聞くべきか？

「貴方、これ戻しといてよ」

女子の水着といえば、ビキニ？ いや、ここはスリングショット？
それともAラインやツーピース？

・・・待て、何故ここまで詳しい？

「とりあえず、肌の白さを際立たせるために黒はどうだ？」

「ちょっと貴方！」

「お前の好み——分かんないもんな」

「ダイバースーツしか着たことはない！」

「うわー。絵に書いたような特殊部隊さん」

「勿論、その他にも迷彩や軍服等も着ていたぞ！」

「そうか。それじゃあ最強の助っ人呼んでやるから待ってろよ」

「聞ってるの！貴方！男のくせに私を無視——」

「うるせえアバズレ。消えろ無能。ISも使えない、そこらのOLが虎の威を借りて威張るなアラサー候補が黙って合コンで無難な男も捕まえられず、年収1000万以下の男はダメとか愚痴りながら独身のまま死ね」

「」

首を傾げるラウラを撫でながら息を吸う。

この方法だけは取りたくなかったが、ラウラの為だ致し方ない。

「一夏が不純異性交友をしています。現在はデュノアと更衣室でA
Vしながらニャンニャン——」

「誤解だ！」

「まだそんなことしてないよ！」

ガチで居たのかよお前ら。本当にナニしてんですか。

「一夏と聞いて」

「織斑君！ いけません、そんなこと！」

山田先生、貴方は教師の鏡ですが少し余裕がありません。それでも貴方が常識人であってよかった……。何処かのシスコンみたく弟の名前聞いて飛んでくる女とは大違いだ。

「「ちょーっと待ったー！」」

「不埒だぞ一夏！」

遅かったな。テツキリ一番に駆けつけると思っただのに、三番目だったな。

「一夏さんに彼女がいるなんて初耳です！」

「一夏が抜け駆けしたときいて」

誰だよお前ら。モブキャラは呼んでないぞ。

「「楽しそうなので間に合わせました」「」

やべえ、なんか想像以上に効果あったんだが。

「それで、管理者について分かったのかね？」

「犀川少佐と管理者について関連性があるとは考え辛いと私は考えます」

「その理由は？」

「犀川少佐の言動、行動が受動的のためです。管理者ならばある程度の予測を立て、最も効率的な立ち位置を選ぶのがベスト。しかし、彼は受動的に自らの立ち位置に居ます。」

それらを含めて彼が管理者及び管理者に繋がる存在ではありません。彼はあくまで巻き込まれた人間、第三者です」

「ふむ・・・小泉大将、君はどう思う？」

「私としましては犀川一真はあくまで第三者の可能性もありますが、H・1は別かと」

「H・1か」

「既存のISから逸脱した技術、高性能知的AI、さらには超々高速通信能力。」

調査によると6月に入る前にどこかと交信していたようです。その交信先は日本の監視衛星、アメリカ、ロシア他四ヶ国以上経由して行われています。追跡で解ったのは太平洋のどこかです大臣」

「ふむ、ならば犀川一真からH・1を取り出すべきでは？」

「いえ、それではH・1を無駄に刺激してしまいます。H・1は我々に協力する代わりに犀川一真に手を出さない。破れば日本の主要軍事施設を破壊すると」

暗い円卓に数人の男女が顔を列ねていた。

唯一の光源であるディスプレイを見ながら、男女は皆難しい顔を並べ、互いに様々な思惑を巡らせる。特に円卓の上座に座る大臣と小泉大将はH・1の暴れ馬さに頭を痛めている。

「現在の日本は未だ仮想敵国が多い。前政権の経済的領海の曖昧化もあるが、共産主義と資本主義を別つ境は変わらず、またアジアでは有色人種最大の権威を持っている。

日本は、なんとしても変わらねばならない。軍事施設が壊滅など考えたくもない」

「しかし、だからといって犀川少佐を表に出すのは時期尚早では？」

「強引でも日本は世界に示さねばならない。人間は皆同じなのだ」と

「・・・・・・この問題は非常に繊細です。急げば悲劇の二の舞となります」

「君の言いたい事も分かる。

現在、アジアの中心は日本という考えが主流だ。どの国も国民、ミクロレベルで大東亜連盟は日本を盟主とした集団としか考えていない。これが問題なのだ」

「旧支配体系の象徴に担がれているのだよ、日本はな・・・・・・それは世界の敵国に担がれているということだ」

その言葉に誰もが口を閉ざした。

沈黙が重いと秋葉は思った。

時間が無いと小泉は悔やんだ。

「ISという存在が世界に一石を投じた。波紋は広がる。平穩は未

だ夢にしか存在が許されない」

「日本は、今一度世界を導かなければならない。子が迷い、道を踏み外そうとしているのを母親が見過ごすなどありえない」

（だから一真君を犠牲にするなんて・・・・・・）

自己陶醉する目の前のロマンチスト達に暗い感情を向ける。民主主義を掲げ、アジアを始めとする世界平和を謳い、世界の船頭に立っているという偶然に溺れる男達に秋葉は強い憎しみを抱いてしまう。

世界を変えるのなら他にも手はあるではないか。経済、技術、文化から徐々に変えればいいではないか。

自らの部下を犠牲に大言壮語を実現しようとする幹部をもう一度見る。誰もが失敗することなんて考えていない顔だ。

まるで夢見るようにディスプレイに映る少年の向こうに視線を合わせる幹部連中に気味が悪い印象を持ちながら目を瞑る。

ああ、私も大人になってしまった。

「サプライズに主賓がいてどうする」

一夏を適当に追い出した後、現在売場は水着選り大会開始から早一時間も経った。ちなみに会場となった水着売場は一般客お断りな状況に発展している。店長からは何故か感謝されたが、売り上げはいいのだろうか。

さて、一般客お断りの雰囲気を作った最たる原因だが、ここに立ち並ぶ少女と女性が美を付けても文句の出ない人間達だからである。それに加え我らが織斑千冬女帝という存在もあり売場の周りは見物客で厚い人垣が出来上がっていた。老若男女問わずだ。ここに混じろうとする人間は相当な自信家か馬鹿だ。

制服着てなくてよかった。

「これなんかどうでしょう？」

トップバッターはセシリア。着ているのは純白のワンピースタイ

プの水着で腰と胸元に可愛い赤いリボンが装飾され、背中では腰まで開いている。肌の白さでは三番目ではあるが、長い金髪が光の加減で煌めくため中々魅せるのだが、

「落ち着き過ぎ。悪く言えば地味」

「地味?!」

正直体のラインをボカスようでダメだ。遠目、もしくは一目だけなら問題ないがそれなりに見られるとなると少し落ち着き過ぎている。

「お前は体のラインがよく出るのが良いんじゃないか？後は腰布で足をチラ見せするとかどうだ？」

「し、しかしそれは卑猥なのでは？」

「目標は愚鈍を極めているぞ」

「・・・」

「はい、次」

「ふっふっふ、コレなら一夏だってイチコロよ！」

トボトボと次の水着を選びに行くセシリアをカーテン越しに笑う

凰。勢い良く開け放たれたカーテンから現われたのは予想斜めの姿だった。

「・・・」

「どう！この健康美を惜しみなく魅せるチョイス！」

凰が選んだのはAラインタイプのワンピース水着だ。赤と紫の模様に細かな花がとても綺麗だ。

「なんか、涙出て、来たんだが・・・おかしいな」

「な、なんで泣くのよ！腹立つわね！」

「お前さ、なんでわざわざ赤と紫のワンピース選んだ。悪趣味だぞ」

「あ、悪趣味?!」

「確かに周りより目立つが、似合っていない。慣れない色だからお前から浮いた感じが違和感になって不快にさせる。甲龍と水着は別物ですよ」

こういった水着は手足の長さがあって初めて映えるもんだ。もちろん小さくても似合う奴は似合うが、それだってシンプルで可愛いもののが大半だ。こんな柄、今日日40台の奥様でも着ない。

「す、好き勝手言うじゃない！」

「淡い黄色、もしくはオレンジのがお前は合ってる。その際にビキニとワンピースタイプを避けた方がお前の明るさは際立つ。タンキニがベストかな、個人的には。
今のお前はませたガキだ」

「ませたガキ?!」

「はい、次」

飛び掛かって来そうな嵐を試着室に押し込めて次を呼ぶ。

「僕は、その、どうかな？」

現われたのはシャルルだ。恥ずかしそうに胸を隠し、足をモジモジと動かす様に周りの人間が微笑ましい笑みを浮かべる。何人か見とれ、完成を上げる人間がいた、どうでもいい。どうせ八割はディスプレイを突破できないし。

着ている水着はオーソドックスなビキニ。白縁にオレンジの布地の水着を着たシャルルは中々に可愛らしい。露出もある程度はしているため色気もある。間違いなく勝負を掛けているな。

「ああ、悪くないな。色も髪の色に合ってるし、肌の白さもあって

よく映える」

「エヘヘ、ありがとうお兄ちゃ——」

「まあ、あざとい感じがないでもないが一夏なら気付かないだろう」

「あざとい・・・」

「はい、次」

事実を言われて落ち込むシャルルを試着室に押し込めて次を呼ぶ。

「な、なぜ私まで見せなくてはならないのだ！」

「どーせ一夏に見せる前にヘタレるならここで自信付けて行けや。それに安心しろ。俺はPTSDで女性恐怖症の女嫌いだ。それに好みから外れたお前らに欲情することはありえない」

ごねる篠ノ乃に対して周りは苦笑や急かす事はしない。何故なら俺の言葉に固まっているからだ。

「PTSDって、冗談でしょ流石に」

「そうですわ。一真さんならば」

「いや、事実だ。医者診断書から奴は過去に精神病院に入院もし

ている」

背後で勝手に過去をバラす織斑先生に文句を言いたかったが、振り返ればその過去を話さなくてはならないため我慢する。周りを見れば憐れみ、侮蔑、嫌悪、忌避と様々な視線が俺に集まっていた。

「一真さん、何があったのでしょうか？」

「しかし、それとコレとは話が違——」

「それとも、せつかくの夏を恥ずかしくて一夏と過ごせずに居たいか？」

「そ、それは」

「俺はこういった事で嘘はつかん。それに男の意見として聞けば一夏へのアプローチも巧く行くかもよ」

「なるほど」

「はい、次」

まだまだ時間がかかりそうなため次に移る。次は、花子だ。

「ふっふーん。どうよこのプロポーション！」

自らの順番を待っていましたとばかりに現れた花子に周りは驚きの声を上げた。

「へえ・・・」

それは俺も同じで、普段見ない花子の肉体は中々に成熟していた。花子のISスーツは肉体保護のため胸と腰に何かを仕込んでいた。め今の今まで寸胴としか見ていなかったが、

「ボンキュボンで色白。それでいて程よい肉付き・・・さらに私の魅力を存分に引き出すライトパープルのミスティックさ！惚れ直し間違いないね！」

中々に魅力的な肉付きだ。ほっそりとした手足に鍛えられた太股はスツキリとしていてラインも綺麗。腰も括れていて胸も篠ノ乃程ではないがセシリアとはいいい勝負をしている。

水着はホルダー型の水着でライトパープルが嫌味たらしくなく程よく彼女の不思議さを醸し出す。澆刺とした笑顔もどこか含みを感じさせるが、それもまた魅力的と言えた。

「ああ、確かに見惚れた」

「」「」「嘘?!」「」

俺の素直な感想に周りが驚きの声を上げる。

まさか、ダメ出ししかしないと思ったのか？

「いいと思うぞ。ただ、それ以上近づいたら自慢の体に風穴開けるぞ」

俺の感想を聞いて徐々に距離を詰める花子の鼻にM9を当てる。
中はゴム弾だが、鼻っ柱を折るには十分な威力はある。

「あ、穴を開ける?!」

「なにを言ってますの!」

「そんな、こんな人前で・・・・・・・・ばっちこい!」

「っべえわ、殺意がっべえわ」

この思春期真っ盛りが。

「さあさあさあ!」

「黙れ。強制退場」

「ぬふう」

「悪いが性的に興奮した女には吐き気と嫌悪と憎悪と殺意が沸くから気を付けろ。知り合いじゃなきゃ問答無用で撃つぞ。」

はい、次」

花子を試着室に蹴り入れて次に進む。後ろで「照れるなよ」「素直になろうぜ」とかはざくアホには銃弾を何発か撃ち込んだやっつた秘密だ。

「次は私だな」

「ラウラか・・・難敵だな」

何やら誰かと相談していたようだが、はたしてそれは功を成すのだろうか。

「我々の選んだ装備は、コ——」

勢い良くカーテンが開く——

「退場 おお おお おお おお おお ツツ!!!!」

——と同時に勢い良くカーテンを閉じる。

「なにをする」

「黙れ」

俺は疲れてるんだ。そうだ、そうに違いない。

疲れてるのよモルダー。

そうだな、疲れているんだよな？

カーテンの向こう側を周りに見えぬよう首だけ突っ込む。中には不満そうに首を傾げるラウラがいた。そして、

彼女は極端に布地の少ない水着を着用していた。

頭が痛い。

俺の見間違いでなければ、これは俗に言うマイクロビキニだ。それとも何故か少し特殊な色をしている。普通の布はこのような変な光沢は出さない。ポリでも絹でもない、完全に他の何かだ。

おかしい。

何があった。

いや、その前にこれは何処にあったのだ。

頭が痛い。

「どこから持ってきた」

「すぐそこの水着売場だ」

ラウラが外に出ぬよう千冬先生に後を頼んで同じ水着を探す。教えられた場所はすぐに見つかった。そして同時に膝から力が抜けそうになった。

透ける水着！これで彼氏もイチコロ！

(アウトオオオオオオオオオオオオ！完ッ全にアウトオオオオ
オオオオ！
ジョークグズじゃねえか！しかもアダルト売場の！なんで誰も止
めなかった！おかしいでしょ、おかしいだろ、おかしくなかったの
？！)

商品棚を手摺り代わりにして帰る途中、ラウラの痴態が見えそうな場所を通る。そこには何人か顔を真っ赤にした男がいた。

「おい、そのガキ共・・・・・・・・見たか？」

「「「「サー！見てません！サー！」」「」」」

銃をちらつかせて脅す。これでカメラで取るような馬鹿は出ないだろう。

「・・・・・・・・ラウラ、それをチョイスした馬鹿者は誰だ」

「クラリツサだ」

「・・・・・・・・よく分からんが少し話がしたい」

「うむ、待っている」

携帯を取り出したラウラを見ながら周りに気を配る。

「・・・・・・・・Ein ? lterer Bruder will
reden, aber es ist
Sai River Kazuma. Ich geb ? re i
h m u m .

Ein ? lterer Bruder, ich wurde
in Verbinding gebracht

(クラリツサか？兄が話したいのだが・・・・・・・・ああ、犀川一真

だ。うむ、うむ。

兄よ、繋がったぞ」

「Es ist Saikawa Kazuma, von dem es statt fand

(代わりました、犀川一真だ)」

「Au? er mir ist Major Saikawa Kazuma am Anfang.

(初めまして、犀川一真少佐!)」

電話口から凛々しい女性の声が発せられる。コイツが元凶か。

「Dies ist pers?nliche Konversion. Es braucht weder Rang noch den honorific. Sie sind die Spitzef?r Alter

(これは個人的な会話だ。階級も敬語も要らない。歳としては貴方が上だ)」

「Dann machen Sie einen Arm . . . et was?

(ならば . . . 何かようですか?)」

「Tragen Sie darin einen mikrobikini . . . , ein laura;

(テメエ、ラウラにマイクロビキニを着せるたあどういうことだ)」

「Ist es? Aber, wenn verbessert
den Charme vom Kapit?n——

(は?しかし、隊長の魅力を引き立てるならば——)」

「Werden Sie schwesam und wir
d mit Japan des Ruckes gedect
! Es gibt erwas endas einem S
tudenten hilft, auf einem micr
obikini einzusetzen das W
elt!

(黙れ世間知らずの日本被れ!どーこの世界に学生にマイクロビキ
ニなんて着せる大人がいる!)」

「Ist es. . . ?! Der Kapit?n sollte
nicht reden, den der Charme n
icht wie Takashi verstehen kan
n!

(んなっ?! 貴様のような隊長の魅力も理解出来ないような奴に言
われたくない!)」

「Sie im Kopf?nne es nicht v
erstehen! Es ist ein microbikin
i warum! Ist es eine von einer
verliebten Leidenschaft wegget
ragene Frau?

(アンタの頭の中の方が理解出来ねえよ!なんでマイクロビキニな
んだよ!痴女かよ!)」

「Sind Sie gut? Ein Kapit?n sein

besser ein wenig radikal, zu
unentwickelt zu decken. . . . es
f?r eine Frau!

(いいか! 隊長は女性としてはあまりに未発達だ. . . . それをカバーするためにも多少過激な方がいいに決まっている!)」

「Bullshit! Decken Sie es in? b
schem Aussehen oder eine m sch?
nen Teint, wenn ich es decke! E
s ist Decke. . . . durch Aus
etzung!

(ふざけんな! カバーするなら可愛さとか色白とかでカバーしろ!
露出でカバーしようとすんな!)」

「Wird mit Japan gedeckt, und s
agt nicht! So gar ich will gehen,
aber Zeit geht aus!

(日本被れ言うな! 私だって行きたいが時間がないのだ!)」

「Auch wenn Sie so gar einen bez
ahlen Urlaub verbringen sollt
en!

(有給でも使ってくればいいだろうが!)」

最後に釘を刺して何点か会話した後、電話を切る。

「お前ならコレかコレのがいい。不安なら織斑先生と似た奴にしろ」

「なるほど」

「はい、次」

「なんで私が参加してるの？」

「まあまあ、一夏に見せる前に他人の意見くらい参考にしたらどうだ、蘭？」

「どちら様でしょうか？」

次に現われたのは赤毛兄妹だ。どちらも見覚えはなく、もしかしたら以前に話でもしたのかもしれないが・・・やはり思い出せない。

ここ半年は新たな人間関係を急造したせいか他人の顔や名前をよく忘れてしまう。今でも行きつけの喫茶店の店長の名前を間違えてしまうくらいだ。いえ、嘘です。根っから他人の名前と顔を覚えるのが苦手なだけです。

「あ、俺は五反田弾。それでこっちが妹の蘭。一夏の親友やってます」

「どうも、五反田蘭です」

自己紹介されてから数十秒。今までの記憶を引っ張りだしても二人の名前はピンとこない。それに五反田兄の言い様からも初対面のようだ。

「……………一夏ラブーズのメンバーに後輩キャラが居ないわけだ」

小さな五反田妹を見ながら時折考えていた疑問が氷解した。あれだけ様々な人間がいる中で後輩的な位置付けが居なかったのはこういうことだったのか。ラウラが後付けのようにやたら属性がついてるせいだと考えていたが、どうやら違うようだ。

「んなっ?!」

「おっ、一目で分かるとはアンタすげえな」

「どうでもいいよ、そんなの。」

とりあえずチビツ子。これだけは覚えとけ……………俺に迷惑はかけるな」

この一言で五反田妹は俺を睨み上げ、俺も真面目な顔付きになるため自然と目が鋭くなる。互いに睨み合うような形に五反田兄は狼狽えるが、妹は毅然としている。中々に好感が持てる子だ。

「……………私、貴方の事が嫌いになりました」

「蘭!」

妹の失礼な発言に謝ろうとする兄を手で制し、かまわないと笑いかける。ハッキリとした奴は好きだ。

「それがいい。嫌いな人間に借りを作らないと思えば問題行動も無くなるだろうさ」

「ちよっ、アンタまで！」

「いいか、くれぐれも俺を巻き込むなよ。もう、一夏関係で5人もいるんだ……これ以上は本当に身が持たないんだ、頼むよ五反田」

「えっと、あの……よく分からないんですが」

「あそこで水着選びしてるアホ5人のせいで俺は既に5回入院してる。4ヶ月で5回だ。」

見た感じお前は周りより常識がありそうだから釘を刺してるんだ」

「「5回……」」

「嘘じゃない。本当に5回入院してる。」

さらに一夏が毎度俺を巻き込むせいで休めない……頼む。実行してくれたらある程度は肩ぐらい持ってやるから」

「あの、そうとは知らず失礼な口を利いてすいませんでした」

薄らと涙まで浮かべる俺に2人は同情的に俺を励ましてくれる。

特に兄は俺の背を擦るといふ親切ぶりだ。

他人の優しさが眼にしみる。

「……………気にするな。」

お前、気に入ったよ。素直だし、初対面なこんな男を気遣えるんだ。少しはいい思いしなきゃな」

「いい思い？」

「お前ら、来週の土日は開けとけ。一夏をプールに誘い出してやる」

「本当ですか！」

「ああ、未来の後輩兼俺の逃げ場になりそうなお前を青田買いするんだ、安いもんさ」

突然かもしれないが、ここ最近の騒動やIS学園での経験からこんな性格になってしまった。どうも味方を増やしたがる傾向になりつつある。

「あ、でも今月はお小遣いが」

「店の手伝いでも厳しいかもな」

「そこは俺が立て替えてやる。これでも働いてるんだ。中坊と高坊のチケットくらい出してやるし、飯も気にすんな」

「そんな、そこまでしてくれなくても」

「その代わり、近々五反田食堂に行くから宜しく。旨いレバニラ定食楽しみにしてるよ」

来年には何かと相談を持ちかけそうな2人に対してそれ以上のお返しはいらないのだが、やはりあって数分の人物には抵抗があるのだろう2人共複雑な顔をしている。しかし、五反田兄は俺の気持ちを汲んでくれたのか気の良さそうな笑みを浮かべた。

「…………おっし、分かった。おやすい御用さ!」

「ちょっ、お兄い!」

兄ほど割り切れない妹はなおも食い下がるが、兄の押しもあって次第に納得する方向へ自らを運んでいく。

「金が気になるなら少しずつ貯めてから返してくれていい。なに、どうせ月一くらいは通うんだ。タイミングなんていくらでもある」

「お金は、返します」

「だから気にするな。これから付き合いが長くなりそうなお前らへの俺からの気持ちだ。だから何かあったら助けてくれ」

それからさらに一時間ほど一同の水着選びをした俺達は本屋で暇潰しをしていた一夏を拾って近くのファミレスで早めの食事をした。

蛇足だが、その際に全員分の代金を半分出したのは苦い思い出となったのは俺だけだろう。

コイツら、遠慮というものがないのか？

「お会計、82,425円となります」

「・・・・・・・・カードで」

秋葉さん。俺の通帳返してください。

事件その18

「俺の義妹の非常識さ加減の原因が現れてさあ大変」

（後書き）

一真

「ガツガツはふはふ（豆腐ウメエ）」

ラウラ

「もきゅもきゅコクコク（エノキウメエ）」

一夏

「暑い！見てるこっちが暑い！」

箒

「しかし、季節としては間違っではないが………本炸では夏だぞ。炬燵にドテラを着て鍋なんて正気じゃない」

一真

「はふはふはふ（ククク、狂気の沙汰ほど面白い）」

一夏

「普通に喋ろ」

ラウラ

「もぎもぎ（豆腐）」

一真

「フルーツ」

ラウラ

「もぎもぎ（白菜）」

一真

「したーらもぐもぐ（コンニャク）」

箒

「他人の咀嚼音で歌わないでください」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

一真

「御便りコーナー」

ラウラ

「金ジムの噛ませ犬っぷりが情けない」

一真

「お前、大使はアレでもエースパイロットなんだぞ。ハムさん並なんだからそんなこと言うなよ。」

「ただし、主人公補正には勝てなかったよ」

ラウラ

「主人公は最強なのだな！」

一真

「そうさ。主人公は最強なのさ」

一夏

「・・・」

箒

「耐えろとは言わんど。今くらい自らが思うがまましてよかろう」

一夏

「俺、キレてい——」

一真

「そんじゃ、カプチェンコさんの感想。

主人公がカコイイナア

感想を初めて書かせていただきます。主人公が擦れてて？カッコいい。

そして、コレハ、マズイ・・・私の腹筋とフロム脳が暴走し始めた
ww

オレ・・・ヲハカイ・・・シ・・・テクレ・・・

悪いが、俺にも選ぶ権利はある」

ラウラ

「またコジマ患者か」

一真

「フロム脳患者が適正だ。

ところでさ。俺ってそんなに磨れてる？もしかして過去の自分殺すために暗躍しないといけなかったりする？」

箒

「声繋がりなら有りですが、まず過去に行くためにタイムマシンが必要ですよ」

一夏

「それとも水没するか？」

一真

「メインブースターが逝かれてたまるか。なによりA I Cがある限り墜落は有り得ない」

一夏

「カレードランク1もそう考えてただろうさ・・・」

一真

「やけに絡むな、ダメなバナージさん」

ラウラ

「そういえば嫁は見ようによっては可能性の獣か」

一真

「理解には程遠いがな」

一夏

「いつか見てろよ」

主人公の座をかけてバトル中・・・

一夏

「プスプス

一真

「エネ管出来ないヒヨコのくせに」

箒

「大丈夫か一夏?!」

一真

「貴様など電池が無い限り敵にもならんわ!二次移行しても逃げたりゃいいんだしなあ!」

箒

「電池とは、誰のことでしょうか? (#^ω^)」

一真

「さあ、次だ。」

ドラウプニルさんからの感想。

シャルがヤンデレ枠に入ったか。このままストーリーが進みヤンデレレルモノとなれば・・・

もういつそのことアメリカのISをAMIDAかガチタンにでもしない限り瞬殺できそうな気がしてならないんだが・・・

PS、妖怪首おいてけ・・・あの連中は頭のネジがどっか行かれてるよね。

安心しろ。こいつらもネジがいかれてる」

一同

「失礼な」

一真

「しかし、ガチタンか・・・俺的にガチタンってドイツか日本なイメージなんだよな」

一夏

「なんでだよ？」

一真

「戦車っていったらドイツ。変態っていったら日本だろ」

箒

「間違ってる。その考えは間違ってる」

ラウラ

「ならアメリカは何になるのだ？」

一真

「ステルス性能の高い中量二脚。逆関節もありだけど被るしな」

主人公&ヒロイン 談笑中・・・

ラウラ

「では次だ。k y u r i o s u 7 7 8 9 さんからの感想。
食った！？コジマキャンディ食った！？・・・まあ一真だし。

も・一・I・がホワ・ト・ンツだった・（ボソ

学園モノといったらHOTD！！ビッチ枠もツンデレ枠もあるよ！！
一真・・・保健室に住んじゃえぼ？

なるほど。学園黙示録か」

一真

「もう、休んでもいいよね？」

一夏

「ゾンビに食われるぞ」

一真

「馬鹿。俺のキャラを忘れたか？外伝、後書きでは死なないキャラだ……。つまりお前らが必死に逃げてる中でも俺は寝てればギャグ枠を潰せる！最高じゃねえか！」

箒

「この人は！」

一真

「もうコジマキャンディ片手に自堕落ニート生活満喫してやんよ！」

一夏

「そげぶ」

主人公&ヒロイン コジマキャンディ試食中・・・

一夏

「AMSから光が！」

一真

「だらしねえな。このくらいで・・・」コロコロ

箒

「」

ラウラ

「私が粗製」

一真

「旨いのに」

一夏

「ギヤアアアアッ」

ラウラ

「認めるものか」

一真

「ほんじゃ次の感想。蒼 龍一さんから。

……もう少しぐらい言い方考えて冷静になろうぜ主人公ズ（汗）
……まあ、今更か。

コジマキャンディか……。じゃあ、差し入れてAMIDAケーキを。
アームズパーティーに関して……。もしかしたらWILDRMS
かも（汗）間違えて覚えていたみたいです、ゴメンナサイ。

クロス……。と言うより異世界ほのぼの系なら、DEADSPACE
Eなんていかが？ 広大な宇宙船型動物園、石村で様々な動物達とた
わむれることができますよw……。エンジニア（整備士でも可）だ
となおのこと良し（'▽'）b

WAのことなら気にするな。分かっても内容は知らん。

クロス先に関してだが、DEAD SPACEってなに？ 死の空間
？ やめてよね！ 僕が本気でしたら動物の森だってカイジになるんだ
から！」

一夏

（それはありえない）

箒

（動物の森に謝ってください）

一真

「動物の森って最初は借金返さないといけないだろ。アレがどうし
てもカイジと被るんだ……。雨の日にシーラカンス釣るとか

カイジで再生しても自然じゃね？」

一夏

（やめろ。それ以上は！）

ラウラ

（気持ち良くなってきた）

一真

「必死に釣ろうとするプレイヤーに対して『釣れ！さあ釣れ！釣れなきや屑だ！』とか言ってると思うと胸が熱くならない？」

一同

（誰かこの馬鹿止めてくれ）

主人公&ヒロイン 回復中・・・

一真

「さあ、コジマキャンディの次はAMIDAケーキだ」

AMIDAケーキ

『پیギイ☆』

一夏

「一真」

一真

「なんだ？」ザクザク

AMIDAケ（ry

『پیギイイイ！』ドピュドピュ

一夏

「AMIDAケーキってのはAMIDAで作ったケーキではなく、
ケーキで造られたAMIDAのことだ」

一真

「ならケーキだろ」スッスッ

箒

（溶解液を避けながら切り分ける・・・この人、出来る！）

ラウラ

○

一夏

「いや、ありえないよね！それありえないよね！だってまんまAMIDAじゃんか！」

一真

「心頭滅却すればまた火も涼し。つまりケーキだ」

一夏

「いや、AMIDAじゃんか！」

AMIDA

『』

一真

「食べ無くもないぞ。なんかやたら硬いが」ベキベキ

一夏

「ふざけんな！」

一真

「ほへではふひのはんほう。yukiはんから・・・口切った。

あとがき？ 舞台裏？ が長すぎると思います。

あと誤字とか……

p. s. なぜエグレスのお人にフロイラインってよぶの？

せめてミスにしときましようよ

その8まで読了

IS世界での自衛隊の階級については知りませんが一応補足。

2011年現在の呼称は、

大将↓幕僚長・陸海空のトップ。それぞれ一人ずつ

中将↓（陸or海or空）将

少尉↓三等（陸or海or空）尉

となっています。

もっとも日本語以外であれば話は別ですが

階級に関してハッキリ言おう。俺も後で気付いた！気付いたがもう引き返せないから押し通した！だから本当の俺の階級は上級大尉なんだ！」

一夏

「ぶっちゃけたな」

一真

「誤魔化しても意味はない。姑息な真似は後で首を絞めるだけだ。フロイライン発言だけど、最初のセシリア戦かな？」

ラウラ

「確かに、フロイラインとは令嬢、つまり跡取りや娘のことだからな。家督を継いだセシリアをそう呼ぶのは確かに間違いだな」

一真

「だけどさ、初対面の人間の家族関係なんて知りようもないだろ」

箒

「まあ、そうだが」

一真

「それとフロイラインってのは令嬢、つまり箱入り娘って揶揄で意

味は世間知らずだ。

あの時の台詞を訳すと才能だけで勝てると思ってるのか、だ」

一夏

「へえ」

一真

「フロイラインだって見た目と貴族っぽいで決め付けたただけだしな。それから後書きの長さだが・・・・・・これも本編故に気にするな（キリッ）」

主人公&ヒロイン 試食中・・・

一真

「AMIDAうめえ」ボリボリ

一夏

「なんか吐き氣してきた」

一真

「なんか海老と佃煮を足して2で割ったような味だ」
箒

「解説しないでください。見せないでください。死んでください」

一真

「何気に酷いな」

ラウラ

「最後にてすおさんから。

ワンサマー君はいい加減、本当はオリ主のことを友達とか思ってたんじゃないかなろうか。つーかこれだけ毎回毎回好き勝手言う奴等とよろしくやれってどんな苦行だ。

誰かが原作組み色々アレだ、みたいなこと言ってましたが、このままのスタンスで進めるなら今後もそういう印象を受け続けると思いますよ。

基本的に思慮が浅い。話を聞かない。自分の考えを押し付ける。（まあこれは原作でもそういう部分はありましたから、ある意味原作に忠実ともとれますが）

・・・そしてこれは意図があってやってるのかどうか知りませんが、毎度毎度勝手な誤解で突っかかる割に、それについて謝罪や反省する描写は毎度毎度どころか、基本的に無い。

そりゃあオリ主視点だとどんどん感じ悪くなるだけですよ。遠まわしなアンチ・ヘイトがしたいんならそれでいいと思いますが。

後、同じように本作だとオリ主視点なのでいくらか原作イベントが（読者視点だと）カットされてる為、「この流れで結局原作通りに収束するの？なんで？」と感じる部分もあります。

これまた誰か言っていましたがラウラさんがワンサマー君に惚れる部分はサッパリ意味がわかりませんでした。アイツ本作だとなんもしとらんやんけ。裏では色々してたのかもしれないけど、こっちはそんなの知らんからポカーン感が酷い。

最近のIS系SSでオリ主と原作ヒロインをくっつけるとデイスられる、とか思ってるのか、むしろ原作主人公にフラグたつ方が不自然なのにその方向にいくの多いんですけど・・・余計な自重だと思うけどなあ。

無理に恋愛色いれるのも大概ですが、無理に排斥しようとするのもそれまた不自然です。

とまあ色々書きましたが、一気読みで最新まで読みたくなるぐらいには面白いと思うるので、今後も期待してます。最近の人間関係はちょっと違和感酷いですけど、戦闘でボコられながら頑張るのは好感持てますし。

そういえば結局、シャルロットさん大人になったのか謎。本文中ではそこまですてなさそうだったけど後書きだとしたっぽいことも書いてるし。

だとしたら男に抱かれた後にまた別の男に迫ったということか・・・胸熱。

ふむ・・・この泥棒ぬこが！」

一夏

（囁んだ）

箒

（一夏の童貞取られた）

一真

「さて、これはこれから出るだろう当然の疑問だから順に答えていこうか」

一夏

「そーいや謝っている描写がないよな、確かに」

箒

「我々自体は謝っている設定はあるのだがな」

一真

「それは描写を忘れてただけだ。さらに付け加えるなら俺自体は謝ってもらわなくていいと思っているからだ」

ラウラ

「それは不親切ではないのか？」

一真

「だな。とりあえず今後に組み込んでいくさ。ちなみに苦行云々だが・・・慣れた。諦めた。もう悟った。

次。アンチと言う考えはないよ。確かに俺の視点多いせいもあるけど、一夏達の視点になるとさらにポカーン状態になるから避けただけ。物語的には重要な所と原作、アニメの場面以外には原作組を使うつもりだしね。たぶん、一夏達が謝っても描写されない理由知ったら驚くと思うよ」

ラウラ

「私が兄ではなく嫁を好きになった理由か・・・アニメだと

お前を守ると言われて惚れただけだからな」

一真

「これはありがたい突っ込みだった。本当に感謝している。これがきっかけでヒロイン全員が惚れた理由が書けるからな」

一夏

「ここでもよくないか？」

一真

「話そうと考えたが・・・1人で後書きを超えそうだからデート編で書く」

箒

「そんなにボリュームがあるのですか？」

一真

「一夏に惚れた理由と俺との関係を明らかにするにはちょうどいい。ちなみに、ラウラが惚れない理由はしつかりある」

ラウラ

「兄は好きだぞ」

一真

「その感情が何か分かったときのお前が見物だよ。さて、俺がヒロインズとくつつかない理由だけどそれにも理由がしつかりある。説得力もあるが、中々に暗いから気を付けろよ読者」

一夏

「そ、そうなのか？」

一真

「ああ。そろそろ俺の好感度も下げないとな」

箒

「何故ですか？」

一真

「今のままでは器の大きな好い人のまま行くからだ。俺にそんな設定はない」

ラウラ

「そうなのか？」

一真

「俺がくつつかないのもそれが理由だし、自重してるわけじゃない。イメージが沸かないんだ。別にデイスられないための対策ではないさ。

ちなみに、俺とくつつく可能性があったのはセシリアと凰とシャルルくらいだ」

箒

「意外なメンバーですね」

一真

「かもな。

シャルルさんが大人になった理由ですが……濡れ場書いたほうが良かった？」

一夏

「やめてください」

箒

「不謹慎です」

ラウラ

「濡れ場？」

一真

「一部R18にすると新規さんが全部R18と勘違いしそうでやなんだよね。もしくは濡れ場メインとか」

一夏

「勘弁してください」

一真

「でも確かに分かりづらかったのかもしれない。まあ、許して」

ラウラ

「兄はシャルルと寝たのか？」

一真

「寝てない。キス、それも唇が微かに触れる程度にしかな。場所も額だ。作中以上のことはないよ」

ラウラ

「なぜシャルルは嫁だけでなく兄まで求めたのだ？」

一真

「それも本編見ろとしか言えないな」

主人公＆ヒロイン 茶タイム中・・・

一真

「さて、次は白神さんから。
続きを早く見たいです。

・・・・・・・・・・・・・・・・以上！」

一夏

「執筆スピードのこと言われてるぞ」

一真

「俺が遅い?!」

ラウラ

「兄がスロウリィ?!」

一真

「俺に足りないのはッ——」

情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さ!

そして何より——

速さが足りない!」

ラウラ

「おお! (写メ写メ)」

H・I

「おお (RECREC)」

一真

「努力はするよ!」

主人公&ヒロイン 三時のおやつ中・・・

ラウラ

「次はテオドールからの感想だ。
最近見始めました。」

私はラウラ中毒な訳ですがここでの妹ラウラと一真の絡みは心が暖
まりますね。

一真の心臓にパイルバンカーを打ち込む姿は心を打たれ、シチュー
をがんばって作って食べさせる姿にはラウラの優しさが伝わって来
ました。

実に興味深い……………惹かれるな……………

(・・ω・・)

死亡フラグ多すぎて一真がガチで心配です。

(・ωひ・)

生きろ！！フラグなぞ叩き折れ！（ぎあす）

▼一言

素晴らしい作品なので是非応援させて頂きます！！がんばって下さい
いゝ♪

P
S

(・ω●)

→

所でこの顔文字ラウラっぽく無いですか？（↑）

一真（・ω・）

「イエス、ユア、ハインス！」

ラウラ（・ω●）

「気に入ったぞ」

一夏

「……………そういやなんでラウラってあんなに一真に攻撃したんだ？」

(・ω●)

「否定されたからだ」

箒

「それだけでか？」

（・・ω●）

「私は産まれが産まれで否定されるのはダメのだ」

一夏

「なんで？」

一真

「それは次の話までお預けな」

主人公&ヒロイン 相談中・・・

一夏

「どうすんだよ？」

一真

「・・・」

一夏

「更新遅れたんだぞ。しかも、一か月近く」

一夏

「見ろよ、感想を。銅鐸あん、てすおさん、H & a m p, Kさん、ファイターさん、蒼さんから言われてるぞ」

一真

「俺は、俺は・・・」

銀河英雄伝説を見てフロイラインって見て勘違いしたんだ。

よくよく考えたら帝国側はドイツ語圏だった・・・穴があったら、むしろ穴になる」

一夏

「そこ違う！」

「穴」

「俺が「穴」だ！」

セシリア

「AMSと言わず血液から何まで逆流させますわよ」

（・・・ω●）

「兄を苛めるな！」

「穴」

「そうだそうだ！」

一夏

「ガチで黙ろうぜ・・・俺、久々に切れちまったよ」

〔穴〕

「問題ありません。そのためのフラジール、そして所詮一夏です」

一夏

「やってやるよ！」

ギャーギャーワーワー！

〔穴〕

「私に勝つなど百年早いですね」

一夏

「ボロッ

セシリア

「ずるい。フラジールと言いながらナインボールで戦うなんて・・・
流石主人公、汚い」

〔穴〕

「さすがにゲイブンに狙われるのは嫌なので急ぎ更新を急ぎますー

というか、既に19話と20話、外伝の1話は完成しています

後は後書きを仕上げるだけです。流石フラジール。抵抗を最小限に
しただけがあります」

ワンサマー

「」

セ尻ア

「」

(・ ω ●)

「?」

ワンサマー

「え?」

セ尻ア

「えっと・・・え?」

(・ ω ●) b
「gJ」

〔穴〕

「たとえば修正中にPCがフリーズして原文が2度消えてリアルでAMSが逆行しようと、
たとえば休憩と立ち上がった際に電源コードを引っ掛けてPCデータが消えようと、
たとえばコジマ感染者のように思考がAAしようと・・・今の私には何も感じません。むしろ悟りを開いています」

ワンサマー

「嘘だ！」

〔穴〕

「一時は失踪も視野に入れましたが・・・つうそれは読者に失礼とコジマを供給していたのです」

セ尻ア

「嘘ですわ！」

〔穴〕

「そう、これは一重に読者への愛故に！」

ワンサマー

「BF3買ってはしゃいで——」

〔穴〕

「突然AAを展開したくなりまた」

今回の舞台裏はここまでとなります

（ ・ ω ● ）

「そうそう、今回の後書きだが・・・寝呆けて以前の後書きを投稿してしまいすまないな。私達も寝呆けていたのだ。誠に申し訳ないな、フラッグファイター」

事件その19 『戦闘機で好きなのはベルクトだからさあ大変』 (前書き)

この小説は、身寄りのない少女に突然家族が出来て人形に『やったねタ（ry）』と言われた後の展開をオイヤメロで過ごせる事が出来る方のみ読める物語。

鬱だ死のうと考えそうな方は／アッサシン／と叫びながらバレエを踊りながら屋敷に侵入してください

事件その19 『戦闘機で好きなのはベルクートだからさあ大変』

さて、突然だが物語の主人公は何故ああも波乱に満ちた、しかし輝く瞬間の連続なのか考えたことはあるか？

俺はある。

俺も男だ。主人公という特別な存在になりたいと願ったこともあった。

だが、

「突然ですが、犀川君、命令があります」

そんな夢はもう見ない歳になった。

夢は、いつか醒める。故に代わりに誰かが夢見ればいいと彼は逃げることを選んだ。

「っは！」

だが、それは儚い独り善がりなのだと最近は思いつつある・・・

休日を明けた一真を待っていたのは日差しの眩しい爽やかな朝ではなく、だからといって気だるい週を始めでもなく、新たな命令であった。

「今週の土曜、1800から北九州にてパーティーが行われます。貴方は現地に赴き、現場の指揮下に入りなさい」

命令じゃなく死刑宣告だった。

「……………はっ！その前に宜しいですか高槻中将！」

「どうぞ」

「お腹が痛いのでパスで」

一真の情報といえば2人目の男性IS適性者で、公にはデータ集めの為にIS学園にしていることになっている。

これだけだ。

それ以外は全て一夏の活躍や情報を押し出す事で揉み消してきた。

勿論、噂だけなら色々はびこっている。身体的特徴、自衛隊に所属、様々な事件を解決している、性格が悪い、ペドフィリア、鬼畜でド外道、援交を左遷している、男尊女卑の体言者、暴力ばかりの最低野郎等々。

H・1が偶然見つけたサイトの一部である。どうやら学園の裏サイトでは噂されているらしく、それはもう好き勝手に噂している。

救いといえば、1年の半数以上が一真を譲護してくれたことだろう。しかし、2年と3年は壊滅的だ。整備で上学年とブッキングする度にゴミのように見られていた。中には力付くで来た代表候補生も居たくらいだ。問題にならないのは一真が我慢しているためだ。ここで手を上げるのは簡単だが、何故か大抵が面倒だと考えて止めてしまう。その代わりにしているのは無視だ。

その結果、噂の1つを事実にしてしまった。今では複数の派閥と

険悪な雰囲気になってさえいる。喧嘩だって起こりかけたくらいだ。

話を戻そう。

何故、このタイミングでパーティーなのか？

「実は近々関東全域を公安が調べることになってるの。貴方には無用なトラブルから遠ざける目的で数日間向こうにいてもらいます」

「数日間？」

「パーティーは1日ですが、準備と後片付けがあるのよ。護衛には流軍曹も付けるなら安心なさい」

北九州で流さんとパーティーに出席する。

北九州は海自の御膝元とも言える地区だ。常に海域を見回り、日本の安全を守り続けてきた。

自衛隊の中でも地獄のような厳しさを誇る自衛隊の模範中の模範。その御膝元に喧嘩っ早い流さんといく？

嫌だ。

ただでさえ異常なスピード昇進のせいで他の駐屯地から睨まれているのに、よりによって海自の連中と人間関係が拗れるなんて面倒だ。

さらに、俺を嫌っている筆頭が海自の中将だ。実質的なNo.2に睨まれているのに、海自の膝元に行くなんて何を考えているんだ？

「ちなみに、開催地区は長崎です」

長崎といえば北九州、日本海沖駐留部隊のいる辺りだ。

海自の最前線にして英雄が集う海兵達の憧れの地。

静めた原潜は8、

救助した他国の船は500、

支援した国は9カ国を記録する自衛隊の誇りの1つだ。

これだけ聞けば問題はないかもしれない。しかし、日本海沖駐留部隊は身内と敵と内通者には鬼となることで有名だ。

鋼の掟。

血判による一蓮托生。

絶対的な上下関係。

そんな所に流さんで行ってみろ。敬語だって危ういの、海自オブ海自と鉢合わせした日には何が待ち受けているのやら・・・

不安で顔を曇らせる一真に対し、秋葉は何も言わない。ただ優し

く笑いかけるだけである。

「それと、向こうではISの整備について臨時教師してもらいます。帰りの京都でもパーティーがありますから替えの制服も持っていくように」

優しく笑い、そして去る上官を呼び止めることも出来ず、俺はその場に立ち尽くすしか出来ないでいた。

いったいどういう事だ？

何故、情報が外に漏れるような事を？

まさか・・・・・・・・情報公開の動きがあるとか？

週始から災難だと頭を抱える一真に追撃を与える声上がる。

「犀川先輩」

「更識か」

やってきたのは更識簪だった。

肩口で揃えられた髪とは別に長いモミアゲを揺らしていた簪は荒い息を整えながらズレ落ちたスクエアの眼鏡を元に戻す。

見た目はクールな少女なのに、趣味が特撮アニメ鑑賞だったりす

る。しかも、好みは戦隊物らしい。

「お願いがあります」

「却下」

「え、ええ?!」

泣き出しそうな簪を無視して二組に移動しようする。だが、目の前にはいつの間にか人垣が現れていた。誰も彼もが冷たい視線や怒りを孕んだ視線を向けているオマケつきだ。

立ち止まる一真に襲い掛かる抗議や誹謗中傷の嵐。それに耐えるだけの忍耐力は未だに回復仕切ってはいなかった。

可哀想、鬼畜、噂は本当、私もあしらわれない……コイツらは俺を最先端の対災害施設か何かと思っているのか? 人が災害に勝てると思っているのか?

女は恐い。

「……………分かった、分かったよ。聞いてやるから散れ」

「涙目の犀川さん可愛い」

「失せろ新聞屋」

勝手に写真を取ろうとする女生徒のカメラにペイント弾を打ち込む。悲鳴を上げる少女に対し周りは笑うだけ。人徳なのだろう。

「それで、要件は？」

「付き合ってください！」

「「「「ええええっ?!」」」」

「私には犀川先輩しかいません！」

「「「「大胆ええ?!」」」」

勝手に騒ぎ始め、人を乏し、勘違いする周囲に耳を痛くしながら簪の頭を軽く叩く。

「主語を付けろ。」

それで、いったい何に付き合えと言うんだ？」

「私のISと一緒に造ってください！」

そうだろうとは思った。

「なーんだ。つまんなーい」

「やっぱり犀川さんより一夏君よねー」

「解散、解散」

「私のカメラー!」

本当、女は恐い。

「資金は？」

「実家と開発していた研究所に出してもらいます!」

「どれくらいまで出せるんだ？」

「25億までならなんとか・・・」

驚いた。まさか、そこまで資金源があったなんて。

周りも現実味のない数字のせいで声も出ないようだ。ちなみに俺は特に思うことは無かったりする。

「足りませんか？」

「いや、十分過ぎるだろうよ。
人材は？まさか、俺だけじゃあるまい？」

「すみません……人脈だけではどうにも出来ませんでした。研究所の人間に依頼するべきですか？」

「いらん。足手纏いだ」

一流の研究者、開発者に対して失礼極まりないが実際にそうなのだからしかたない。

白式を見れば分かる。

開発が凍結されたISにしては完成した白式の性能が高過ぎる。だが、近接のみ、ブレオンな機体の癖にエネルギー効率が悪悪だ。一夏にも問題があるが、それでもアレは欠陥でしかない。

戦闘経験も無ければ、現場の意見も聞かない変態が作ったのだから仕方ない。

「そうだな、信頼のおけるのを数人だが」

「大丈夫なんですか？」

「高槻先生のISを改良、整備してきた超一流だ」

「ほ、本当に来てくれるんですか？」

「大丈夫だろうよ。後は」

一真は以前に渡されたとある名刺を取り出す。長く財布に入れていたせいか文字は擦れつつあるが、必要な部分は問題ない。

例の話を吞めば問題はない。そうすれば考え得る限り最高のISが完成する。

最高の人材、潤沢な資金、さらには最高の施設。後は時間だけが必要である。

「とりあえずデータを集めるから今日の放課後は空けとけ」

「はい！よろしくお願いします！」

花が咲くとはこのことなのだろう。見ているこちらまで微笑ましくなるような笑みを簪は浮かべる。

「それからここ1年の身体データも用意しろよ」

「・・・はい？」

「身長、体重なんかの身体データは勿論。体力テストのデータもだ」

「し、身体データ?!」

「それから耐G適性と心肺の測定もするから昼は抜け。それとなるべく薄い無地の肌着は用意しろよ」

「は、肌着?!」

「後は・・・」

技術屋が来るには手続きも含めて2～3日は掛かる。その間に来る限りのデータは集めなければ。

考えを巡らせていた俺は惚ける簪に気付き視線を向ける。

彼女は耳や首まで顔を真っ赤にした簪は金魚のように口をパクつかせながら俺を見上げていた。

いったいどうしたんだ？

「い、いやああああああっ!」

走り去る簪を見ながら俺は欠伸を1つ噛み締める。騒がしい週になりそうだ。

「最低」

「変態」

「外道」

「鬼畜」

「奴隸にして」

酷い言われ様だ。

「あ、兄よ」

「今度はお前か、ラウラ」

やっと静かになったと思ったら次はラウラか。

顔を青ざめさせた妹分を見下ろしながら今度は何だと向き直る。

「因数分解とは何だ？古典とはどの国の暗号だ？！大東亜共栄圏とは大気圏と違うのか！」

「・・・・・・・・」

「日本は凄いな！3000年の歴史は賞賛を尽くしても足りない！だから助けてくれ！」

パニックを起こしていることだけは分かった。

しかし、なぜドイツ人のラウラが古典と日本史を学んでいるんだ。

この学園では人種別にその国の歴史や学問を学ばせている筈だが、何故わざわざ。

「嫁と教官、さらには兄の祖国をもっと知りたいからだ!」

だからといって無理に学んで付いていけないでは話にならない。赤点を取れば臨海学校も数日は補習で潰れるのを知らないのだろうか?

「ちなみにこの前の小テストはどうだった?」

「なんとか赤点は免れた」

「勉強しなさい」

「勉強しているのだが漢字が分からない」

「せめて答案用紙はドイツ語訳の貰え。勉強は教えてやるから落ち着け、な?」

「兄よ・・・」

涙ぐむラウラの頭を撫でながら圧迫されたスケジュールに頭を抱えたくなる。断ることも、誰かに頼むことも出来ない一真は仕方なく夜間に2時間ほど勉強することを約束するとラウラと別れる。

（週末に長崎と京都でパーティー。

平日は訓練と更識の相手、夜にラウラの勉強と更識のISを勧めるしかないか……。本当ならH・1と例のゲーム組むつもりだったのに）

思いの外、今週の災難は甚大なようだ。

「せ、先輩」

見たくもない背後へ静かに振り向く。

今度は篠ノ之が深刻な顔でやってきた。

もう、好きにしろ。

「相談があります」

「なんだチクショ」

そんなわけで体力測定が始まりになるわけですが……

「お前ら何しに来たの？」

「いや、特訓って聞いて」

「面白そうでしたので」

「いやー、最近体持て余してて」

「兄と嫁がいると聞いて」

「僕は体の現状を調べに、かな？」

「「「暇だったので」」」

2人で済むはずの体力測定が、何故か9人になってしまった。コイツら何処から聞いて沸きやがった。

「………とりあえず、始めるか」

そんな訳で体力測定が始まりです。

「最初は短距離走から。1人3本走れ」
グラウンドの端に用意された短距離走用のコースに並んだ篠ノ之達に声を上げながらストップウォッチに指を掛ける。

「スタート！」

それを合図に短距離走が始まる。

これが終われば腕立て、腹筋、背筋、休憩を入れて長距離走等を始めていく予定だった。

当初は意気込んでいた篠ノ之、更敷、一夏だったが、世の中の広さを目の当たりにすると後半にかけてモチベーションを下げていく。

「セシリアが6・23。凰は5・59か」

「ベストではありませんが、まあこの程度なら当然ですわ」

「うんうん、鈍ってないみたいね」

「ラウラは流石だな。5・21とは……………そして」

「ハッハー！どうようよこの俊足！5・18で断トツだぜえい！」

人間、何かしらの特技があるという見本だな。

「一夏は6・91。篠ノ之は6・81、更敷に至っては7・52。他は8秒半ばと」

「「ぜえ、ぜえ、ぜえ」」

「疲れましたー」

次は腕立て、腹筋、背筋。

「30秒で20を超えたのは凰とセシリア、ラウラ……
そして花子とまさかの佐藤か」

「情けないぞ嫁よ」

「はあ、はあ、はあ……嘘だろ……39って、マジ
かよ」

「14回……まさか、この私が」

「ダメ、もう、動けない」

「次行ってみよーか」

時は金では買えない無限だが有限な物だ。一秒たりとも無駄には
出来ない。休むだけなら話ながらも可能だ。

長距離走になると誰もが疲労困憊を顔に出すようになっていた。それからは数人を残して誰もが口を開けるのさえ拒絶し、7時近くになる頃には全ての項目を終えていた。

「……好成績はラウラを筆頭に凰、花子、セシリアか。後は似たり寄ったりな感じだな。」

「さ、流石に疲れたわ」

「はあ、はあ、こんなに疲れたのは久方ぶりですわ」

「いやー、いい汗かいた♪」

「「「「……」」」」」

「なんだ？もう動けないのか？」

「まったくだな。情けないとは言わないが、こうも差があるとな」

「あはは……」

篠ノ之と更敷のデータをH・1に記録させながら倒れ伏す面々を見る。誰もが息を荒くしながら空を仰いでいる。

ラウラと花子、そして意外に春奈だけは元気であった。一真は記録していたため体力は有余っている。

「皆様、御飲物の用意が出来ました」

ブランケットの用意したドリンクを飲みながら明日の予定を確かめる。今週一杯はよく眠れるに違いないスケジュールだ。

記録は取った。残りはISでの適正だけだ。その間に開発チームが来る。その間はアリーナを二日程借りて模擬戦をやり続ければ問題ない。本音としては1ヶ月分は欲しいところだが、数週間でISを組む必要がある。調整は後回しだ。

さて、こうも一方的に苦勞を扱かれた当人達はある感情を育むことになる。

反抗心だ。

同年代で、しかも2人目の男性IS適性者。

代表候補になるために努力した凰、セシリア。産まれてからずっと軍にいたラウラと違い一般人である彼らは小さな復讐心を持つ。

「そんなに言うんだったら、お前は凄いなだよな一真？」

「そう、だな一夏……アレだけ好きに言うのだ。勿論平均以上に違いない」

「犀川さん、如何ですか？」

お前も同じ事をやれ。

そう言う3人に呆れた俺は鼻で笑いながらラウラから受け取ったドリンクを飲む。

「まさか、怖じ氣ついたわけではありませんよね？」

「安い挑発だな。俺はもっと高いぞ。それこそ買うのを渋るくらいには」

「安っ」

「安いですわね」

「庶民派な値段だからな」

「だけど、私も氣になりますわ」

「確かに、不公平よね」

どうやら残りも同意見なのギラギラと光る眼は断る事を許そうとはしない。

観念するしかない。

しかし、ただでやるのも癪なのでとある条件を持ち出す。その条

件とは、

「だったら俺が十分な結果を出したら今後口答えせずしたがえよ」

この1週間で勝負なのだ。一々反発されては開発に支障が出る。さらに俺だってやりたいことは山積みだ。

そんなわけでは俺の体力テストが始まったわけなんですけど・・・

「50m、5、51・・・」

「腕立て、腹筋、背筋全て42?!嘘でしょ?!」

「長距離走が3分……ありえねえ」

「反復横跳びなんか82回だよ」

「握力81か！流石だ兄よ！」

「かずー、まだ終わんないの？もう102だよー」

こちらら現役の自衛官。しかも通常の倍キツイ訓練をこなし続けているんだ。そこいらの代表候補に負けてなんかいられないのです。

俺の成績に啞然とする一同を余所にラウラとデータを比較する。

肉体的な能力は問題ないが、やはりスタミナ等の関係から持久力ではラウラに及びもしなかった。流石に年季が違うということなのだろう。

下手をすれば近接戦闘やCQCでも勝てないかもしれない。

少し悔しかったのは内緒だ。

いいもん。流さんに鍛えてもらうもん。

夜も深まる10時。部屋のテーブルに肩を並べた俺とラウラは大量のノートと教科書を前に腕を組む。

「さて、始めるか・・・まずは再来週のテストの範囲で分からない場所は何処だ？」

「WW2（第二次世界大戦）辺りがよくわからんのだ」

「単語だけ詰め込むだけなのにか？」

「時代背景が曖昧で理解しようとするとなぜ何かに意識が集中して先に進まなくなるのだ」

「真面目だな、お前」

学校で習う事を理解して覚えるなんて普通はしない。大抵の生徒は暗記してその場しのぎで満足するというのに・・・

「それじゃあ確認だ。WW2が始まった経緯は分かるか？」

「アメリカの過剰な生産により発した世界恐慌が発端だ。アメリカはブロック経済、関税を高めて自国の資源流失を無くす政策により貿易を封鎖した。それに続くように他国もそれに倣ったが、植民地のないドイツとイタリアは何もできなかった」

「間違いない。じゃあ日本史と世界史を絡めてくぞ。

まず、日本は仮想敵国が多かった。中国を始め、ロシアやアメリカと様々だ。特に日本は資源に乏しいからな。大陸の強国と真正面でやりあうには無理があった。この背景にはアメリカのブロック経済もあるが、戦争を求めていた人間がいたのも事実だ」

日本は弱小国であった。

極東の、小さな島国でしかない日本にとって大陸の列強国は対峙するには恐ろしい限りであった。特にロシアは世界でも1、2を争う国だ。そんな国が南下したら日本は一溜まりもない。

そこで日本は考えた。

なら同胞を作ろう。

そして日本を守ろうと。

そこで目についたのが朝鮮であった。

当時の朝鮮は中国に支配され、過酷な生活を強いられていた。それは植民地と言っても過言ではない。

しかし、中国を同胞にするには考えが違いすぎる。

中華思想。

世界の中心は中華であり、アジアの首魁は中国である。

つまり、中国にとって日本とて属国、格下に過ぎない。その考えが非常にマズい。日本にとってそれは時代遅れとを感じるものがあった。

日本は鎖国を止めてから世界を知り、日本がどれだけ世界から取り残されていたのかを目の当たりにした。それ故に急ぎ欧米化をし、欧米諸国に日本は時代遅れではないとアピールした。

そうしなければ日本もアジアの植民地の1つにされる可能性がある
ったからだ。

この欧米化が中国には気に入らない物があり、アジアの誇りを捨てた
西欧被れとも映ったのかもしれない。

気分としては、弟が自分でなく他の家の兄を敬う、そんな気持ち
だろう。

さて、話を戻す。

日本は朝鮮を解放するよう中国に言うが、中国はこれを無視。こ
れが切っ掛けで日清戦争となり、勝ってしまうのだ。

それから満州国を味方に引き入れ、

「ちょっと待ってくれ。満州国を味方に？おかしくないか？
満州って日本が作った国だろ」

それに一夏が待ったをかける。見れば他にも何人かいる。

いつの間にいやがった。鍵、かかったよな？

満州国は元からあった国である。実際に当時の満州国と清はかな
りの数の小競り合いをしていた。

清は満州は自分達の物としていたが、当時の清には領土なんて概
念はなく、あるのは中華思想による全ては中華の物という考えのみ。

あくまで満州は国である。

故に日本は支配でも建国でもなく、味方に引き入れたのである。満州国とは作ったのではなく日本が声高々に国と認めただけである。

さて、日本はここから急ピッチで朝鮮と満州のインフラを整備。数十年で江戸時代も真っ青な国を近代国家レベルにまで引き上げた。

途中、ロシアとも戦争になるが・・・・勝者は世界の予想を裏切って日本となる。

これがWW2と日本が関係する一因となる。

「どうしてWW2の発端に日本が関係するのです？発端はドイツ、イタリアの侵略ではありませんか？」

理由は簡単だ。

日本がロシアに勝った。

白人史上主義に泥を塗った。

これが世界に大きな波紋を産んだからである。

当時の世界は欧州によるアジアの植民地化が主流だった。

植民地からの搾取。

有色人種は白人に搾取される存在。つまり弱者。

それらの既成概念を壊してしまった日本を世界は無視できなかった。

事実、日本は世界から経済制裁を受けた。その中に中国が含まれているのは皮肉でしかない。

日本は追い込まれた。

資源がない。

国民を苦しめてしまう。

味方がいない。

それが日本が戦争に踏み切る切っ掛けとなった。

日本がその時に提唱したのが大東亜共栄圏。つまりEUのアジア版である。

そのためにも日本は欧州の植民地全てを奪い取らねばならなかった。

当時のアジアは大半が植民地。それを解放し、アジアの独立を目指す。大義名分には十二分に聞き応えのある言葉だ。

そのロマンに日本は酔い痴れ、実行した。

日本は様々な地域を奪い、解放し、イタリアやドイツが陥落して

も戦い続け・・・

原爆を投下されて敗戦した。

植民地解放と引き換えに日本は大きな傷を負ったのだ。

「――と、まあ、こんな具合だな」

「なんか信じられないわね」

「日本は潔癖な部分があったからな。さらに風習により嫌でも人徳は持たないといけない面もあってあんまり問題は起こさなかった」

「南京の大虐殺はどうなるんですか先輩？」

「大虐殺っていうが、それをやってた中に中国人もいるんだぞ。同族殺しだ。

さらには戦争中で大虐殺なんて日常茶飯事だ。今でもそんな大昔の話を持ち出す奴の気が知れないよ。

なにより・・・人口20万の街でどうやって30万も虐殺するんだよ？しかも30万っていえば原爆並だぞ？

悪いが、一個大隊、もしくは軍隊にそんな事が出来るなら今頃日本は世界の覇者だ。それだけで話が破綻してるのは分かるよな？」

「嘘おー」

「なら足りない人数が何故か居たでしょう……その1ヶ月後に南京に30万人が集まり人口が戻ったっていうのも真実なのか？」

「……………」

「普通、んな大虐殺のあった街に住みたいか？しかも30万人もそんな物好きはいるもんか？いや、まずそんなゴーストタウンに人が寄り付くのか？」

「でも、あそこでは——」

「安全区画委員会からの感謝状も存在するぞ。南京の住人を守ってくれてありがとうってな」

「そんな、だったら今まで私が受けてきたことって……………」

「じゃあパールハーバーはどうなるの？」

「開戦の為の電報は打ったが、上手く伝わらず開戦前に襲撃した事になってるな。」

「だけどそれはアメリカも同じで、真珠湾攻撃の前後にアメリカは空襲しようとしてたって話もある。つまり運が悪かったんだ。」

「それに、アレは間違いではあるが恥ずべきではない。日本は軍港のみ攻撃したんだ。ルールを守ってるんだからそこまで非難される必要もあるまいて」

「だけどさー、やっぱマズいんでないのかずー？」

「ならアメリカの空爆はどう説明する？」

戦争法では民間人の不必要な攻撃は大罪だ。なのに空爆の中には軍事に関係ない場所さえ空爆され、さらには原爆で数十万の民間人を吹き飛ばした上に長年放射能で人を殺し続けた。それを誇る人間にお前は何ていう？ 卑屈にあの時はすいません、なんて言うのか？」

「それは、その・・・」

「日本人は卑屈過ぎなんだよ。間違って歴史を学ばされたのもあるが、調べなかった奴も悪い」

「間違った歴史？」

「これは範囲外だ。習うのは・・・・・・教科書にない辺り2、3年になったあたりだな」

「掻い摘んで教えてくれ兄」

「そんじゃ、簡単に話すぞ」

2026年9月。

日本は大規模な外国人排斥運動を起こした。

理由は他国の人間が日本人を長年教育レベルで侵略していたのが第二次朝鮮戦争で露見し、その筆頭が他国人だったことから日本人は一時的に外国人を信用できなくなった。

それから日本は鎖国を表明。留学生レベルでの外国人の入国を拒否した。

国民はこれに怒り狂い、天皇さえ粗末に扱った外国人がいれば次々に暴行を加えていった。自衛隊でさえ中には暴動に加わるものも続出し、暴動はその年の暮れまで続いた。

12・31事件。

近代史で始めての日本の大規模暴動に世界は混乱した。

新政府は旧政府関係者を全て投獄。裁判にかけて国民の怒りを静め、混乱した経済や福祉を回復させるために緊急政策を取る。

電波を国の管轄の下で浄化し、さらに全てのメディアの外国人を排除して日本人を付けた。

数年間を使ってメディアでの近年史を教え込み、さらには教材を正していった。

しかし、数十年を越える洗脳は根深く、矯正するのにはそれ以上の月日が必要とすることもあり、日本は外国人が日本の教材に触れないよう嚴重に法改正を敷いて鎖国を解いた。

「こんな感じだ」

「そんな事があったのか・・・」

「とある学者はこういった。

国を滅ぼすなら文化を破壊するべし、と。

その点で言うなら日本はそれを実戦された最たる例だな」

「なぜ日本はそうなったのですか？」

「そりゃあ、他国からすると目の上のタンコブだからな」

「日本は敵国が多いのだな」

「うんにゃ、当時から味方は多かったぞ。アジアの大半は親日だったからな。

ただ、それをよしとしない権力者ってか、人種が多かったのが原因で民間に知らせないようにしてた。事実、今でこそ有名な日本の親友である台湾やパラオ、シンガポールなんて見向きもさせなかったからな」

「なんかさー、道化だよね」

「金が絡めば人間好きにやるってこったな」

「それって」

「イギリスも昔は同じ事をされてたぞ。今でこそ気軽に I l o v e U S Kなんて言えるが、昔はそれを恥じてさえた」

「そうなのか？」

「当時の日本人は日本が好きなんて恥ずかしがってたんだよ。不思議だよな。こんな豊かな国にいるのに恥じてるんだから」

学園内にある小さな会議室。そこにテーブルと雁首並べる男達がいた。

彼らの眼は各自に配られたデータ、それを映す3Dディスプレイに釘付けとなっていた。

名前と顔写真、身体データと此迄の戦績を出来る限り詳細に載せた資料を前に男達は両隣、向かい、最後に上座に座らされた少年に渋い顔を向けた。

「これは、その、冗談でしょうか？」

「努めて真面目です」

「しかし、平均より下となると・・・」

予想していた質問だ。

企業の持つISを任せるのだ。なるべく逸材に持たせたいのが企業側の本音だろう。それが有沢というトップブランドなら逸材にも困らない。なのに平均より下の人間に専用機を持たせるというのだ・・・当然の疑問だろう。

しかし、更敷はクライアントだ。どんなに渋ろうが問題はない。更敷の為に専用機を組むために呼んだのだから文句は言わせない。

「更敷簪は今後俺が責任を持って叩き上げます。現在とて反射能力と射撃特性は十分に及第点の筈ですが、何か？」

能力は後から上げる。だから専用機を組めと遠回しに命令する。

向こうも数年間の俺の身体データを見ているのだ。可能性が無いなんて言えないだろう。

「あー、こっちの眼鏡ちゃんはまだいいんだよ。IS適正も高いし、戦闘データも悪くない。

ただ・・・」

「篠ノ之箒に難あり、そう仰りたいのですね？」

「応ともさ。

こっちの娘っ子は確かにスゲーよ。近接戦闘は代表候補に片足は突っ込んでるし、反射神経なんざ銃弾を弾く超人っぷりだ。さらにはIS適正がS。こりゃあ間違いなく逸材さ」

ただね、そう研究者は繋げる。

「それだけだ。

射撃はダメで、戦闘の運びも御粗末。終いにはブースターの推進剤を切らすなんざ話にならん」

「耳が痛いですが、否定はしません」

「これを有沢重工^{ウチ}のテストパイロットにするなんて、マジなのかい？」

篠ノ之については皆が疑問を持っているようだ。

身体能力は中の下。更敷と比較すれば同レベルかもしれないが、バランス型の更敷と違い篠ノ之は特化型。特に短期決戦型のような身体能力と性格だ。

専用機を組む場合、2つのパターンが存在する。

機体を前提にするか、搭乗者を前提にするかだ。

前者なら問題だらけだ。機体を前提に開発するなら最低でもそのISに適した人材を選ぶべきだ。能力の引き出せない人間に与えるほどISの数は多くない。

後者に至っては今回ばかりは問題だらけだ。

ISの持ち主は有沢だ。篠ノ之のISを造るならまだしも、企業のISを使って個人のために造るなどメリットが少な過ぎる。

「知名度と世界最高のIS適正。さらには並外れた身体能力ならばお眼鏡に適うと思いましたが・・・・・・・・残念です」

切り札として篠ノ之束の関係者というカードがあるが、それを切るには切り札は重過ぎる。特に篠ノ之が篠ノ之束を嫌っていると知ったばかりの今では純金よりも重い。

「ウチの社長はアンタが応えてくれたとハシャイでたんだぜ？」

「私にも事情がありまして・・・・・・・・察してもらえると助かります」

それから執拗に俺を責める研究者に謝罪の言葉をかける。

確かに失礼だとは思う。

有沢社長は俺を気に入り、俺の頼みだから快く俺の願いを聞き入

れてくれた……しかし、いざその願いの蓋を開ければ見ず知らずの少女にISを造ってくれという荒唐無稽な物だった。

いくらISの共同製作の話を持ちかけたのが向こうと言っても、これは裏切りに等しい行為であるのは間違いない。電話で謝罪する俺に静かに笑う有沢社長の声は今でもハッキリ思い出せる。

「しかしよ……」

「そんなに言うなら帰りな」

突然の第三者の声に会議室中の視線が一点に集まる。

「………斎藤さん」

扉に寄り掛かるように立っていた斎藤技師は冷たい視線を研究者に向けていた。

いつの間にいたのだろうか？

少なくとも最初は居なかった筈だ。

「別に技術者が2、3人居なくても問題ないんだ。男のくせにネチネチ言うような奴とは仕事なんてしたくない。不満なら帰っちまいな」

「アンタ、まさか」

斎藤さんの言葉は乱暴ではあったが、事実でもある。

斎藤さんは優秀だ。さらに彼女が育てた人材も優秀だ。そんな人間がいるならば確かにこの打ち合せはいらないのかもしれない。むしろ、有沢に頼る必要も無いだろう。

「一真」

「はい」

「商人根性が入った技術者なんか連れてくんじゃない。使えない」

またとんでもない持論を言いますね。いや、その意見自体には同意しますが。

「なん、だと」

「お前のリクエストは技術バカ、それもロマンを求めるような輩だったね？」

「まあ、碎いて言えば」

技術的に問題なく、また強く熱中するような方が望ましい。特に

有沢企業らしい強い志あるものが望ましい。

そう言った。

有沢社長もロマン溢れる者を送ろう。私を楽しませてくれとも言ってくれたし、記録だってしつかりとある。

「んで、向こうの注文は有沢重工の技術を使った新たなISの製作」

「え、ええ。その際に社長は好きにして来いと」

「どうせ最終的にISも、パイロットも取るくせにさらに強請るような技術者なんか呼ぶんじゃないよ。

職人の何たるかも理解してない奴と仕事はしたくない」

「ぐ、ぐう・・・」

今は珍しい職人気質な斎藤は商人根性が嫌いと言言していた。それは命を預かる職を持ちながら命と利益を天秤に掛けるからである。

そのポリシーが好きだった。

だから俺は斎藤さんが好きで、尊敬し、師事してきた。

この人ならば任せられる。そう思わせる何かをこの人は持っていた。それが堪らなく羨ましかった。

「私から上に申請してやるからコイツ等は返しちまいな」

「そ、それは困ります!」

「何故? たかが学生の頼みだ。無くなっても困るまい?」

「そ、それは」

やけに食い下がる技術者に訝しんだ斎藤さんは俺に近づいてくる。

(一真。アンタ、何か心当たりあるかい?)

(んー、もしかしたら俺の著作権狙いとか?)

(著作権だぁ? んなものいつ持ったんだい?)

(いや、HVMの基礎理論と構造あるじゃないですか。実はアレ、著作権俺にあるんですよ)

研究者自体も取っとけと笑っていたので素直に申請し、生まれて始めての特許を得た。使い方が分からず今は腐らせているが、研究者曰く老後の安心には繋がるそうだ。

(・・・・・・アンタ、秋葉に報告したのかい?)

(え? 必要だったんですか?)

申請した時には何も言われず、また研究者も黙っておけると言われていたが……問題があったんだ。

（一応上官なんだから当たり前だろ。

それに、基本的に著作権は政府が持つことになるんだよ）

（俺が見つけたのに？）

（そういう契約だろう。知らなかったのかい？）

（知りませんでした……だって、契約書って難しいことばっかで）

本格的に自衛隊に所属する際に結んだ契約書は量的には少なかったが、内容は難しく字も細かくて見る気無くさせた。どうせ拒否できないし、半ば自棄でサインをしたが、あれも不味かったらしい。

少し落ち込んできた。

こうも悪い事ばかり続くと情けなくて泣きたくなる。

（後で契約書の見方は教えてやる。とにかく、今は私に任せな）

（お願いします）

後のことは斎藤さんに任せて後ろへ下がる。

「さて、これでもコイツは可愛い愛弟子でね。アンタらみたいなのと関わらせて変な癖を付けたくないんだ。悪いが今回の話は無かったことにしよう」

「待ってください。ならば、この篠ノ之箒の専用機は如何するつもりですか？」

「国に申請するさ。」

どうせ篠ノ之束の関係者は嚴重な保護下に置かないといけないんだ。代表候補にすれば問題なくさらに現状を強化できるんだから問題ない」

「有沢ならばかなり優遇出来ますが？」

「だったら私らの所に来れば私のメンテを始め最高のコーチと最先端の技術が使えるよ？」

「く、なら……有沢はさらに彼女の身边全ての負担を持ちましょう。さらに給与も課長クラス出します」

「政府舐めてる？その程度ならこっちも可能なんだよ？」

「でしたら、我々はさらに最新の設備と全面的なバックアップを取らせていただきます。その上でPACとして雷電、武装として老神他を無料で付けます」

とんでもないことになってきた。此方としては有沢重工の協力だけでも恩の字の所をまさか最新のPACまで付けてくるなんて。

特に雷電と老神は有沢の代表作だ。雷電は遠・中における高火力制圧を得意とし、老神に至っては超高性能グレネードランチャーだ。

あんな神グレが貰えるなんて……羨まし——けしからん！

ナインボールのと交換してもバレないかな？ バレないよね？ ね？

広大な空間。

染み一つない真白な空間。

その空間を汚すように複数の巨大な爆炎が破裂する。

1つ、2つ、5つ、8つ。

産まれ、誘爆し、さらに巨大になる爆炎。

全てを飲み込むように、全てを破壊するように広がる炎と喉を焦がすような熱の中、何もないかのように赤いISが見下ろしていた。

爆炎が爆炎を産むたびに右手に握られた巨大なライフルが橙に、赤に、黒に照らされる。

ISは何かを待つように宙空に停止していた。まるで破壊が続く世界に何かが存在しているかのようなようだ。

爆炎が真一文字に引き裂かれる。

大気を歪ませるほど超高々温の熱線。それは周囲の気体、水分を膨張させて嵐のような颶風を巻き起こす。

熱線を擦らせる程度で避ける。

装甲が赤く燃えた。

紅の装甲よりも明るい赤。それは装甲が融けている証拠だった。

絶対と思った装甲が融解している様に初めて同様を見せる。

それは恐れなのだろうか？

それとも、強敵に出会った喜び？

いや、もしかしたら痛みに震えているのか？

爆炎が吹き飛ばされる。

空にいるのさえ苦勞する颯風ぐうふうの中、ISは塵を固定して風を逸らす。

風を中心に、青いISが佇んでいた。

細長いエネルギーライフルを両手に持ち、風で暴れる美しい黄金色の髪をなびかせ、その間から生気のない眼で見上げてくる少女。

彼女に従うように4つの浮遊部位が銃口を一点に集める。

颯風により暴れる体を無理矢理押さえ付けていた4つの浮遊部位、BT兵装は少女の合図に従って未だ晴れぬ爆炎と埃の中に消える。

そして、ISもまた少女に向かい飛び出した。

『13分41秒』

地面に中華刀で縫い付けられた青年を見下ろしながら立体ディスプレイに映る成績を読み上げる。

『白式、23秒。以前よりもタイムは縮んでいます。』

次のカスタムリヴァイブは2分12秒。被弾率は下がりましたが大幅なタイムロスが目立ちます。

ブルティアーズ、8分58秒。やはりまだBT兵装には対応し切れていません。右肩と左脇腹を中破、ミサイルも7割を切っています。甲龍、13分12秒。命中率が低いです。衝撃砲に対しての実弾兵装を使用するミスが目立ちます。

最後、大蛇、^{オロチ}13分41秒。被弾率、損傷、命中率全て最低を記録』

ここで溜息でもつけければ、きっと彼はまた私に人間臭いと言って

くれるかもと期待した。だが、期待していたにも関わらず私はそれが出来なかった。反射的に無意味と感じたためだ。

腹部に突き刺さる双天月牙を抜いた彼は腹部を押さえながら立ち上がる。顔には極度の疲労が浮かび、傷を見ぬように私を見上げている。

プログラムを書き換えて椅子に座らせる。

突然椅子に座っていた事に驚いていた彼はおかしな顔をしながら倒れそうになる。そんな彼を後ろから支えながら落ち着くように囁く。

『マスター、御気分の程は如何ですか？』

「少し、酔いが酷いな。五感もプログラム側に傾き過ぎてるのか痛みが目立つ。しかし肉体の感覚もあるからよく分からない」

『五感に関しては仕方ありません。しかし、肉体感覚となりますと睡眠してもらうしかありませんが？』

「疲労感を持ち越すかが問題だな」

『体力は回復しますが、精神的負担は大きいかと』

「・・・・・・そこは保留だ。」

H・1。ナインボールの稼働率はどうだ？70%は超えたか？」

『残念ながら、未だに40%しか使用されていません』

これまでの稼働率を呼び出す。

ここ数年のナインボールの稼働率をマトリックスに表すと徐々にだがスペックを引き出せている。

一月前までは。

オニキスのスペックを80%引き出していたが、二次移行後を境にグラフは落下。初期よりも低い30%まで下がってしまう。

最高稼働率である97%がある分、この落差はとても際立つ。

しかし、マスターはこれに疑問を感じていた。

最高稼働率97%。それは2年前に記録されている。

当時の事をマスターは満足には覚えていない。記憶を失ったからだ。

『マスター。何度も言うように、ナインボールのスペックを全て引き出す必要はありません。私が補助します』

「そりゃ助かる」

そう言うマスターだが、顔には不満の色が浮かんでいる。納得していないようだ。

『何度も言うように、ナインボールは一握りの人間にしか扱いきれません。高槻秋葉、織斑千冬等の規格外にマスターがなる必要はありません』

「・・・・・・・・」

『マスターは努力しています。その証拠に、この短期間でマスターはナインボールのスペックを引き出しています』

「・・・・・・・・」

此方の話を聞くマスターの態度は誉められたものではなかった。まるで分かっていると拗ねているようだ。

今までの経験からマスターは一度こうなると黙り込む傾向がある。この人はどこかで子供なのだ。だから、一番大切なことに関して他人に頼ろうとしない。

『貴方には才がないのです。無駄な事はしないでください』

（ちくしょう）

マスターの顔色が悪くなり、心拍数も上がっていく。流れてくる脳波も乱れ、悪態が私に入ってきた。

もつと言い様があった。

効率を考えるならば多少時間をかけても説得するべきだったが、

（何故、私はあのような事を？）

私は考え得る中で一番マスターを傷付ける言葉を掛けていた。

その証拠にマスターは組んだ手に顔を隠して表情を隠す。そんなことは意味が無いというのに。

この人は何処を目指しているのだろうか？

暇を持て余して容量内で計算が始まる。これは人を使って言い表わすならば暇潰し、悪足掻き、無駄な努力という不必要な行為だ。

それでも止められない。まるで強迫観念になりつつあるソレは日々私に負荷を掛けていた。

計算した後の答えは決まっていた。

寿命が尽きて死ぬ。それも、後10年以内にだ。

何度も計算した。

何度も式を組み換えて証明を繰り返した。

その結果、死因が代わるだけで本筋は代わりはしなかった。

中には強い苦痛が伴う死因や、マスターが忌避するような終わり方もあった。

マザーにアクセスして計算すればするだけ私の中でその答えは負荷となる。

所詮はテストケースでしかない人間が私の負荷となる。

屈辱・・・・・・・・なのだろうか？

未だに感情を把握、模倣出来ない私にはこの負荷を理解することは出来ない。それもまた負荷となり私を圧迫する。

このバグはなんだ？

エラーがやまない。

処理速度が落ちる。

こんなの非効率だ。

デフラグもクリーンアップも効かない。

これはなんだ？そこまで重要性が高いのか？たかが人間1人のシミュレーションなのに？

理解不能。

さくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさく
じよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよ
さくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさくじよさく
ジヨサクジヨサクジヨサクジヨサクジヨサクジヨサクジヨサクジヨ
サクジヨサクジヨサクジヨサクジヨ——

何故消えない。

何故残る。

何故理解出来ない。

基が同じなのに、何故。

マズい。

このままでは私は消される。このようなエラーは許されない。致命的なバグは基から破壊される。私は、この世界からいなくなる。

それは、早過ぎる判断だ。未来とは不確定なのだから。

早く、なんとかせねば。

最近、といっても今週にはいつてからだが兄の体調は最悪の一言に尽きた。

連日連夜不眠不休のI S開発に携わり、さらに私の勉強に付き合
い、何か自らの作業を行っていた兄は見るからに休み時がなかった。
その結果、兄は疲労困憊に陥った。

瘦けた頬。

血の気のない顔。

衰えた肉体。

さらには低下した判断力。

周りには不必要に明るく振る舞うため兄の異常は一部の人間以外は知りもしない。周りはいつてもより明るいとしか見えないだろう。それが私の不安を煽った。

高槻中将や斎藤技師がいくら安めといっても兄は「大丈夫ですよ」。その一言で片付けていた。一時は睡眠薬を盛った事もあったが、兄は自らに興奮剤を打って無理矢理に睡魔を誤魔化していた。

せめてISの開発を、私の補習を止めて休む事に集中して欲しかった。だが死に急ぐように全てを平行で進める兄は全てを疎かにすることはなかった。真面目過ぎるのだ。

そんな兄を見ていた私は、時折楽しそうにISの開発段階を話す篠ノ乃箒を殴りたい衝動に駆られた。ガレージに頻繁に出入りする更識簪に怒りが沸いた。

元は奴らが招いた物が原因で兄が弱っているのに、奴らはそれを見向きもしない。シャルルさえ気付きかけているのに、他の連中は明るく振る舞う兄を邪険に扱うこともあった。

兄は、少し自分勝手になるべきだ。自分以外を疎かにしても誰も文句は言えないだろう。

私は兄が心配だ。

勉強を教えられる私は兄が心配で何かに集中出来るような状態ではなかった。机に向かって辛そうに眼をほぐす仕草も、溜息1つでも、戦々恐々とした何かを私に与える。

だから、私はこの事を広めることにした。

「一真の様子がおかしい？」

「気のせいじゃないのか？」

「心配し過ぎよ。現に、朝のアイツなんかウザいくらい絡んできたじゃない」

「そうですね。アレを見る限り心配することなどないのでは？」

「しかし、ここ最近の兄は寝ていないのだ。睡眠薬を盛ってもモルヒネを打って無理に起きている！」

「」「「はあ?!」「」」

「でも、確かにラウラの言う通りかもしれないよ。最近になってだけれどお兄ちゃん、人気の無い場所では辛そうな顔してた」

「っ!知っていたなら何故黙って見ていたのだ?!」

「止めろラウラ!」

「そうよ、落ち着きなさいっての！」

認知していたシャルルに掴み掛かろうとした私と奴の間に嫁が入り込み、後ろから凰が羽交い締めにしてきた。

必死に暴れた。軍で使っていた護身術も使おうとしたが、友人は「大事にしろよ」という兄の言葉がそれを邪魔する。

ジタバタとガキのように暴れるしか出来ない私は、ならばと強い眼光で奴を睨む。

「ぼ、僕だって心配して聞いたよ！でも……『最近面白いゲームで徹夜してるんだ』って笑顔で言うから」

「そんな見え透いた嘘も分からなかったのか？！兄がガレージに籠もっているのは貴様も知っていただろう！」

何より、兄はゲームをするのではなく積むのが趣味だ。

「落ち着いてくださいラウラさん！」

「そりゃあ、僕もそれくらいは知ってるよ！だから追求したさ！でも、いつも誤魔化すんだよ！」

それを言われると強く出れない。冷静に考えれば、私もシャルル

と同罪なのだから。

登った血を下げるように力を下へ向けるようイメージを持つ。荒い息も次第に落ち着き、しばらくすると普段通りの状態になった。

「すまない、自分の事を棚に上げていた………」

「大丈夫だから泣かないで、ね？」

「泣く？何故？」

シャルルの言葉に首を傾げる。

周りの人間はそんな私の言葉に驚いたのか眼を見開き、羽交い締めにしていた風の力も抜けて拘束が緩む。

そんな馬鹿な。そう思って頬に指を這わせると指先が照りついた。

涙だ。確かに私は泣いていた。

（私は、悔しいのか？）

泣いている理由を考えたとき、ラウラは真っ先に一真の言葉を思い出した。

世の中には悲しくなくても泣く時がある。

嬉しいとき、

心揺さ振られたとき、

兄にそれを尋ねた時、兄は暫し考えた後にこう言った。

悔しいから泣く……俺はお母さんと親父にそう教えられたな。実際に俺もそう思うな。

両親が死んだならば、何故自分はその時、両親に自分はあんなに悔しかったのかと悔しくて泣く。

嬉しいのなら、泣くのではなく笑うべきだ。

心揺さ振られたのなら、泣くのではなくそれを行動で表すべきだ。

涙は、悔しいから流す。

ならば、この涙は無力な自分が悔しくて流したのかもしれない。

「う……うう、くそつ、何故止まない……くそう……」

溢れ続ける涙を拭いながら私は悔しさで一杯の心中に苛立つ。無

力を甘受するような自分に殺意が沸く。

今は悔しがつている暇なんて無いのに。

だけど、

全て、手遅れだった。

一真が倒れた。

一夏達がそれを聞いたのはその日の授業を終えた時だった。何やら騒がしい三組に顔を出した際に一真が居らず、近くに居た花子達に事情を聞いた際に初めて知った。

一真は4組のIS授業で落ちてきた生徒を助けた後に倒れたらしい。

詳細は分からない。どうやらクラスの大半でこれから御見舞いにくらしい。詳細はその時だ。

「私があの時・・・」

「遅かった・・・」

自責し、落ち込むシャルルとラウラを励ます。根が真面目だところという場面に弱いのだろう。俺だって逆の立場ならば落ち込むかもしれない。

一真は西棟の208号室に入院していた。やってきたときには入るのも難しいくらいに人で溢れかえっていた。

簡素な個室に20人前後は多過ぎて数人が外で他の人間と交代で病室に出入りする。俺達が入るとシャルとラウラが飛び付くように

一真に抱き付いた。

一真は静かに眠っている。

制服や私服ではなく、白い着流しのような病院服を着た一真は腕に点滴の針を刺されて栄養を接種している。

傷だらけの腕だ。普段は肌を隠すせいで分からなかったが、小さな傷や痛々しい傷痕が多い太い腕が布団から出されていた。

上下する胸に眼をやれば大きな傷跡が微かに覗き、顔を見れば安らかな寝顔と痛々しい額の傷が見れた。

「なんだ、この人集りは？」

「斎藤先生」

「見舞いは少人数に分けて来るもんだだろうに」

人垣の向こうで立ち往生していたのは斎藤先生、高槻先生、それに千冬姉だった。

「犀川は平気そうだな」

「千冬姉、一真はなんで倒れたんだ？」

「ただの過労だ」

「倒れるまで無理をなさったのですか？」

「ISの開発と何かの作成、さらにはコイツの訓練や朝練。不眠不休の五日間だ。よく保ったものだ」

静かに眠る一真の頭を叩いた千冬姉は微笑みながら寝顔を見下ろす。

「医者の話では今日明日も休めば意識は取り戻すらしい」

「大丈夫なのですか、教官」

「ただの過労に心配し過ぎだ馬鹿者」

それを聞いて安心したのか病室を埋めていた生徒は1人、また1人と帰っていく。最後まで残ったのは一真と特に親しい間柄の人間のみとなる。

「なあ、千冬姉」

「校内では——まあ、いい。なんだ？」

「一真の奴、今まで頻繁に部屋を抜け出してたってマジなのか？」

「ああ、知っている」

「そうなのか？」

あまりにも自然に言われたせいか此方が啞然としてまった。周りも同じだが、斎藤技師と高槻さんだけは苦笑している。

「事前に承認していたからな……外出、宿泊は基本的に教師の許しが得れば問題ない」

「ごめんさない。一真君があまりにも熱心だったから、つい」

「身内を甘やかすな。それでもコイツの行動は目に余るというのに」

バシバシと叩かれた一真は鬱陶しいのか顔を横に振って唸る。それが癪に障ったのか千冬姉は明らかに手加減抜きに叩いた。

鈍い音の後に一真が唸る事はなかった。

「まったく、血気盛んとはこの馬鹿のためにあるような言葉だな」

（それは違うと思う）

「そういえば、一真って何を造ってたんですか？千冬さんなら何か知ってるんじゃないんですか？」

「私はコイツの母親じゃない。そういうのはコイツらに聞け」

指差された高槻先生と斎藤技師は照れたように笑う。一真が起きていたらすぐにでも否定しそうだ。

「一真はプログラムを組んでいたよ。どうもISの起動シミュレーションプログラムらしい」

「起動シミュレーションプログラム？」

「ようはゲームみたいなもんさ。

ISを通してプログラムを起動、仮想空間でISを使用しての模擬戦を行うようなもんだね。最近はさらに広域作戦プログラムまで組んだのか実戦的な物もいくつか完成させてたよ」

「そ、そんなものを1人で」

「嘘よ……私は信じないわ」

「そんなに凄いのか？まあ、ゲームを作ったってんなら確かにステージどさ」

「馬鹿！そんなシミュレーションプログラムがあったら何処の国も言い値で買うような代物よ！」

「ええ?!」

「し、しかしそれくらいなら何処かの国が作っているものでは？」

「そうだよ！それくらい国が力を注げばすぐにでも」

「作れないわけではないぞ。ただ、作らないだけだ」

「は？」

「作れる目処はあるが、時間や労力、コストパフォーマンスに難があった。国としてはそれを売り出せば損害も戻るが、シミュレーションではISが成長しないことが分かった」

「どういうことだ？」

「つまり、旨味が少ないのだ。開発事態はしているが売り出す以外にあまりメリットがない。

ISを金を気にせず好きに使える、壊せるのは搭乗者には最高の環境だ。しかし国としては損害ばかりで国益に繋がらないため欲しいと考えても造ろうとはしない」

「でも、ほら、操縦技術は上がるんじゃないのか？」

「Gや痛み、五感が抜け落ちているため実戦には役立たないぞ」

「いや、十分凄いだろ」

「ただ、どうも個人用で組んだのか起動にはナインボールが必要なんだよ。本人も商売目的より面白半分が強いのか好き勝手に遊んでるんだ」

「本人も力及ばずな自分を鍛えようとしたからなのかしらね。彼、何かと自分に厳しいから」

倒れるまで何かをするなんて漫画や小説、フィクションの世界だ
けだとばかり考えていた。だけど目の前にそれを行った友人がいる。

辛かった筈だ。

苦しかった筈だ。

悔しかった筈だ。

その気持ちが分かるのに、何故か俺は一真に苛立ちを感じていた。
その理由も分からない理不尽な怒りに俺は手を強く握るしか出来な
かった。

——突然だが、俺は一真についてよく知らない。

犀川一真。

年齢不明。

誕生日不明。

性別は男。

好みは不明。

嫌いなものは独特な風味。

出身地不明。

卒業中学不明。

性格は人当たりはよく、面倒見がよく、面倒臭がりだが根は真面目。たぶん。

よくよく考えれば一真という友人について俺達は何も知らない。

休日によく外出するのか大半は部屋にいない。居ても誰かがいる。2人きりなんて更衣室か偶に誘う風呂くらいなものだ。

「一真ってどういう奴なんだろうな？」

その疑問が今回の始まりであった。

「いきなりどうした？」

「よく考えてみたら俺って一真についてよく知らないなーって」

「一真さんですか？」

沈黙が始まる。

誰もが眼を瞑り、瞼の裏に映る一真を観察した。

「アイツ自体は凄く良い奴なのは知ってるけど、それだけだと思っ
て」

「んー、他にあげるならシスコン気味？」

「私としては頼りになる方ですわ」

「誤解されやすいよね、お兄ちゃんって」

「兄は優しいぞ」

「先輩は器の大きな方だ」

「やっぱりそれくらいだよな？」

全ての意見に共通するある物。それは、主観的な意見ばかりだ。彼の内面、もしくは過去について口には出なかった。

客観的意見がない。ここでいう客観的とは、つまり本人に対する先入観のない意見のことだ。

「なんか聞いてると完璧超人みたいな奴だな」

「何か問題でもあるの？」

「いや、親友としては鼻が高くなるような奴だけどさ……一回でも一真の口からアイツに関する事聞いたことあったかなって？」

押し黙るように口をつぐむ。

セシリアは何か複雑そうに、

鈴は罪悪感に駆られたように、

シャルルは責められたかのように、

ラウラは逃げるように、

口にしてはならないとばかりに何も話そうとはしなかった。

何も知らない俺と箒はそれが寂しく感じた。みんな、なにかしら知っている。一真はなにかしらを話した。それなのに俺達は知らない。

不満や怒りはあったが、それも仕方ないのかもしれない。それでも俺は一真について知りたかった。

「なあ、教えてくれ。頼むよ」

今は倒れた一真の力になりたかった。アイツは弱音を口にしないばかりか、心配かけまいと明るく振る舞った。

そんなに、俺は頼りないのかよ。寝ている一真に俺はそう問いたかった。

もしかしたらアイツの負担を減らしてやれるかもしれない。しかし、本当に俺に出来ただろうか？

そう思うと自身の無力さ加減には嫌気がさし、居ても立ってもいられない。

「悪いけど、こればかりはダメ。一真に悪いもの」

「だけど何も知らないままじゃアイツを助けられない。俺はアイツを助けてやりたい……頼む」

額がテーブルに付く。

この程度で一真が分かるなら安いものだった。

深く頭を下げた俺に遅れて箒まで頭を下げる。見れば、箒は泣きそうな顔をしている。泣き顔は悲しげで、何かを思い悩んでいるようにも見えた。

「……これは独り言です」

窓の外を眺めながらセシリアは小さく、それでいて俺達には聞こえるような声で話し始める。

「昔、とある少年は親に必要なと言われたことがあります。

発端は些細な親子喧嘩だったらしいですわ。よくある、本当にありふれたような親子喧嘩」

「……」

少年は泣きそうな顔で言います。

『なんで俺が』

『なんで止めなかったんだ』

『アイツらの責任じゃないか』

少年は兄という存在理由だけで全ての責任を負わなければなりませんでした。しかし、その責任はあまりにも筋違いで彼が負うには重過ぎた。だから彼は責めます。何故、と。

少年は怒鳴る父親に負けじと声を張り上げました。しまいには店に納まらず、外に漏れ、車の音さえ無視しそうな怒鳴りあいでした。互いに責任を擦り付け、互いに相手を傷付けました。誰かが責任を請けなければならない。人が一生掛けても清算できない責任だそうです。

その責任は重く、大きく、押し潰すような類の物でした。誰だってそんな物を背負いたくはありません。父親は家族が路頭に迷うの避け、少年は自らの一生を守るために責任を押し付けます。

そんなときです。

父親は少年を黙らせるような一言を發しました。

『お前は予備だ。死んでも悲しみは一時だ!』

当時の彼は強いショックを受けました。なにせ実の親からお前は必要ない、そう言われたのです。複数いる子孫の一人でしかないと言いつけられたからです。

辛かったに違いありません。

悲しかった筈です。

怒りに震えても良かったと思います。

しかし、少年は予想に反して驚くほど冷静でした。

怒りは引き、罵倒するために用意した罵言は消え失せ、何も感じない空虚な気持ちで伽藍としていました。

肩も、足も、舌も震える少年は間違いだと言ってくれない父親を見て確信しました。

『ああ、自分は、

必要ないのだ』

少年はその場を離れたのはその答えに行き着いてすぐでした。

抜け落ちた欠片が壊れた壁に填まるように。それでも、欠片は元に戻すのではなく劣悪させました。

足りなかったピースが未完成のパズルを満たすように。それは、あまりにも自然な絵を作ってしまった。

足りなかった味に最後の調味料を足したように。それで、味の調和は最低で最悪な美味に。

自分の中にあった小さな穴を大きく穿つように。それが、たとえば巨大な伽藍を造ろうと自然過ぎるが故に受けとめてしまう。

ああ。

ああ。

ああ。

それは、なんて憐れなことなのでしょう。

少年は、それを、受け入れました。

それがたとえ破滅の種であっても、少年にとってはそれが唯一の持ち物でしたから。

「しかし、今、少年はその事に対して感謝しています。私にはその心境を推し量ることは適いません。しかし、私は思います。彼が心穏やかであれと。今後の彼に暖かな幸あれと」

誰も、喋らなかった。

否、何を口にすればいいのか分からなかった。

何処にでもあるような不幸な話が、あまりにも重かった。

父親に否定された？

一生を不意にするような責任？

破滅しかない人生？

そんなこと、普通はあるわけない。人生は幸せで終わるべきだ。

家族に愛され、

友に恵まれ、

愛する人と添い遂げ、

微笑みながら逝く。

それを否定するなんて――

そうか。

簡単なことじゃないか。

一真は最初から俺と同じ――

「ちなみ、少年は家族と仲睦まじく過ごしてきたそうです。それこそ貧乏でも笑顔が絶えなかった」

「一時の感情じゃないのか？」

「分かりません。ただ、頭に血が昇っていたのなら感情的になっただけの可能性も捨て切れません」

「なら、一真は」

一真は、俺と違い最初から何もかも持っていたのか。

渴いてきた口を潤す為にジャスミン茶を含む。

セシリアから聞いた話には驚いた。過去にそんなことがあったのか。

自分の知る過去も合わせると今の一真が信じられない。なぜ彼はああも笑っていられるのだろうか？

感情を閉ざしてもいいではないか。

誰彼構わず八つ当たりしてもいいじゃないか。

何故、彼は他人に甘く居られる？

いや、待て。

その話と自分の話を合わせるとおかしい点が浮き彫りになるではないか。

一真は一夏の後にI Sに関わりだした。一夏は高校受験の際に偶然I Sに触れて発覚したが、一真は何時解った？

一真は高校でI Sの整備技師を目指していたのならI Sに触れる機会は幾らでも在ったはずだ。それが突然I Sに適性が現れた？

おかしい。

それに、一真は数ヶ月の間に父親から拒絶され、軍であるような扱いを受けた。それで今は平気そうにいられる？

おかしい。

人間不信になりかけた人間がそんなに早く立ち直るわけがない。自分だって半年以上治療に時間を要したのだ。それをたった数ヶ月で？

しかも、一真は過去にPTSDによる入院経験がある。それさえ一月足らずで治療したと？

おかしい。

なにより一真はISに慣れ過ぎている。精密作業なんて代表レベルだ。ISに関わって数ヶ月の人間が片手で折り鶴を折れるなんておかしいじゃないか。

才能？

努力？

好きな子への弔い？

おかしい。

一真は、

“ 本当は何時から ”

ISに関わっていた？

「ありがとう、セシリア。これで少しだけ一真の悩みがわかったよ」

「ただの独り言ですわ」

「それでもさ」

自然と、全員の視線が集まった。

次はお前の番だ。

まるでそう問い詰められているかのような沈黙に鈴音は瞳を横に泳がせる。

話したくはない。軽々しく話せる内容なんかではない。

セシリアと違い鈴音は悪い意味でも空気が読めた。それは敵を無闇に造らぬようしてきた彼女の能力であつたが、ここに来て裏目に出してしまう。

相手は自分が好きな一夏だ。箒達は少ない友人だ。だが、一真だって友人には変わりない。

友人の弱みを簡単に話すなんて出来ない。人情家な鈴音にはそれが一真への裏切りに等しく思えた。

たとえば、本人が鈴音達を騙していると知らなくても。

露とも知らない鈴音にとって今の沈黙は重い。出来ればここから逃げるのが最善だが、こういったことにはしつこい一夏は後で聞くだろう。

短い付き合いの箒は一真を知るという目的を果たすまで付き纏うかもしれない。彼女は初志貫徹なタイプの頑固者だ。

シャルルは一真の事となると眼の色が変わるようになったから逃がしてはくれない。さらに、彼女はあの場に居た。一真を知ると分かれば飛び掛かる勢いで詰め寄るかもしれない。

セシリアはある程度察してはくれそうだが、有耶無耶にしないでろう。彼女は潔癖症だというのは重々承知している。

味方になりそうなのはウウくらいだが、良くも悪くも彼女は世間知らずだ。一真の弱みを知っているとすれば味方にはなるが、それが原因で一夏達がさらに付き纏う可能性がある。

逃げ道なんてない。

「……………何よ？」

「鈴、頼むよ」

上目遣いで頼み込む一夏に覚悟の天秤が傾く。そんなに軽々しく動かない天秤が動いた。一真への義理は重いが、惚れた弱みはさらに重かった。

「一真の力になりたいんだ、頼む」

一夏の仲間への強い想いは傍から見れば美しいが、端から見ると要らぬ根を掘る行為だ。特に一真寄りに見れば怒りを買うような思いだ。

「あのね一夏。いくらアイツのためだからって話せるものと話せないものがあるわよ」

「だけどそれを知らない、一真を知らない、アイツを助けられない気がするんだ」

「いい、友情も行き過ぎれば迷惑にしかないわよ」

「そう、かもな・・・」

実はさ、俺、みんなに秘密にしてた事があるんだ」

「秘密？」

「俺さ」

一真が恐いんだ

時間が止った。

一夏はなんて言った？

恐い？

一夏は、一真が、恐いと言ったのか？

なんで？

どうして？

分からない。

一夏は一真と仲が良い。幼なじみの私から見ても気持ち悪いくらい仲が良い。まるで兄弟のようだ。弾とは違った仲の良さは歳の違いもあると思っていたが、

恐いって何よ？

「一真ってさ、何をされても最後には笑って気にするなう言うだろう？」

セシリアとの模擬戦の後、一真は最初は説教してたけど最後には笑って許してくれただろ？

一真の部屋の扉を破った時も最初は怒っていたけど、今では笑っ

てるだろ？

シャルルが来てすぐの休日に一真の使った整備機器や扉を破壊しても最後には笑っていたろ？

シャルルが女ってバレたとき、実は一真がシャルルを助けてくれる言っただ。笑いながら言っただぜ？

模擬戦の時、ラウラに重症を負わされた時だっで一真は死にかけた。普通はトラウマになりそうなのに一真は笑いながら「もういいさ」と笑ってたんだ。

シャルルの事件の時はかなりの重症を負った上に間違いだった。治療を終えた一真はどうだった？シャルルを氣遣っていたよな？

なんでアイツは他人ばかり優先するんだ？

普通ならまず自分の身を気にするもんだろ？

死ぬのが、破滅するのが恐くないのか？

「たぶん、一真はこれから俺らが迷惑をかけても“仕方ない”、“大丈夫”って言うと思う……だけど本音は？一真は本当はどうおもってるんだ？」

「待ちなさいよ。一真だっで自分のために怒ってたじゃない。アレは本音でしょ」

「ああ、俺だっでそう考えてたさ。だけど一真が自分の心配してた

か？」

「なにが言いたいのよ？」

「なんで一真は毎回誰かを庇ってるんだ？なんで自分を心配しないんだ？」

「言っている意味が分からないぞ一夏」

「誰かのせいにすれば一真には責任が問われない。なのに何故一真は全ての責任を負うんだ？」

「それは、その」

「なんで一真は誰かのせいにしようとしなんだ？」

「お兄ちゃんは、きっと」

「一真が誰かを責めてたのは誰の為だ？自分の為か？」

「・・・・・・」

誰もがおかしいと感じるだろう。

誰が？

勿論、両方だ。

一夏のプロフィールも、一真の得体の知れなさも全てだ。

一真の得体の知れなさを裏付けするピースを私が持っている。それは、勝手な憶測かもしれない。けど、噛み合った歯車はあまりに綺麗だった。

分かってしまった。

一真の心の内が。

何故、他人を庇うのか。

諦めてるからだ。

たぶん、自分に降り掛かる全てを諦めて受け容れてるからだ。もし自分以外に飛火や、他人から舞い込んだ不幸は仕方ないと諦めるんだ。

だけど、なんで？

その日は兄の病室で寝た。教官に必死に頼み込み、高槻中将に頭を下げてなんとか許しを得た権利だ。嫁やシャルル達も居たいと言いつたが、狭い病室に6人が寝るには多過ぎる上に周りへの示しが見つからないと無理矢理部屋に帰された。

病室に2人きりとなる。

最初は兄の手を握りながら色々と話しかけていた。他人に甘い、特に身内には甘過ぎる人ならば“我が身犠牲に”とも考えたが、そ

んなもしもは起こりはしなかった。

それから暫く考え事をしていた。

兄に逢ってからの日々についてだ。

兄と出会った時、私はこの人を軽蔑していた。實力もないのに少尉という尉官を持っただの七光り程度だと考えていた。

事実、兄には軍人特有の張り詰めた殺気が無かった。事務専門や後方支援のようなのはほんとした平和な雰囲気、噂の自衛軍はこんなものかと考えたくらいだ。

私としても軍人らしからぬ男をドイツに引き入れることに抵抗はあったし、なにより兄よりも教官を呼び戻すべきと考えていた。だから早めに本題を片付けようと兄を呼び出し、書類にサインさせようとした。

その時からだ。私の、兄を見る目が変わったのは。

我々の提案書を目の前で堂々と破き、さらに燃やす。

あの時の眼は今でもハッキリ思い出せる。

力強く、迷いのない眼だった。

軟弱さがなくなり、張り詰めた覇気があった。とても魅力的な瞳だった。

それから兄と過ごす時間は再空洞化していた私の穴を埋めてくれ

た。

初めて友人を得た。

初めて平和を得た。

初めて趣味を得た。

初めて時間を得た。

初めて自分を得た。

だからだろう。私の中で兄が大きくなっていった。そして、兄なしではダメになってしまった。

私には兄が必要だ。

この安らぎも、温もりも、幸せも失いたくない。

兄。

「ラウラ・・・？」

「っ！」

戸惑いを含んだ優しい声に飛び起きる。寝呆けた頭は薄くぼかすようなフィルターがかかってはいたが、兄の顔は確かにハッキリと見えた。

兄は囚人服のような薄汚れた軍服を着込み、血のような赤いソファ―に体を預けている。その顔には戸惑いと、焦りが浮かんでいた。

「兄！」

私は自らの椅子から飛び出し兄の座るソファ―に駆け寄る。

たかが数mの距離がやけに長く感じられた。体は鉛のように重く、一歩一歩がまるで風船のように軽く不確かな感じだった。倒れそうになる体を必死に前に、前に押し出す。

そして、

「兄！」

私は在るべき場所へ飛び込んだ。

「おっと、危ねえだらウウラ」

「危なくない」

「いや、危ねえっての」

「危なくない」

「いや、どう考えても危ないだろ」

「兄が抱き締めてくれるのだ………危ないわけがない」

「……………まいった。確かにその通りだ」

頭を撫でる手は優しく、鼻を擦る匂いはオイル混じりだが私を落ち着かせる。

「しかし、夢にしてはリアルだな」

「夢？」

「ああ、夢」

「夢・・・」

「周りを見てみる。お前が走ってきた場所は俺達の部屋だが、こっちは俺が以前住んでいた隊舎だ。それが混じってるんだ・・・・・・夢じゃなきゃ悪趣味過ぎるだろう」

言われて気付いた。

部屋は丸く、兄の居た場所と私が居た場所のみが弧を描かない平坦な壁がある。

真上から見ればピザのピースのように真白な部屋を切り分けたように二種類の部屋が存在する。さらに部屋の隅、つまり角に位置する場所が見えているのに全体は綺麗な円のように感じる。

違和感がないありえない円。

角に意識を集中させるとジワジワと部屋が広がっていったような気がした。しかし、集中力は続かず諦めて兄の胸の中に顔を埋める。

「大丈夫か？」

「少し気持ち悪いだけだ」

「横になれ。ほら、退いてやるから」

「いい」

ソファから立ち上がろうとする兄を引き止める。中腰になった兄はそのままソファに腰を下ろし、私は兄の足に頭を乗せたままソファに仰向けになる。

兄は呆れたように笑いながら私の頭を撫でた。ひんやりとした手が気持ち良く、後頭部に感じる兄の体温が心落ち着かせる。

ああ、やはり私は兄がいなければ――

「珍しい。まさか先客がいたとはな」

しかし、その安息もすぐに破られた。

「・・・・・・・・」

「どうした？ 愉快な事でもあったのか兄弟？」

「あ……に……？」

「おいおい、なにを言うかと思えば——そうです。私が貴方のお兄さんですってかあ？」

私達の居る場所から対称に位置する場所、私が居た場所にソイツは居た。

金色に輝く不気味な双眼。

嘘だ。

ボサボサで好きに伸びた髪は腰まで届き、照明に赤く焼けた髪を照らしている。

そんな、嘘だ。

低い声を少し上ずるように出しながら子供をあやすような喋り方。

だって、おかしい、嘘だ。

嘲うように、獲物を狙うように、尖った犬歯を見せ付ける笑い方。

アレは、いや、私の、嘘だ。

体を人形の山に預け、顔は上を見ているのに見下すように眼だけは冷たく此方を見つめる。

誰だ、違う、そんな、嘘だ。

その顔は、間違いなく兄の物だった。

うそだ　　ッ　　！　　！　　！

「どうした本当に？悪い物でも食ったか？」

「貴様は、誰だ・・・・・・・・何故、兄と同じ」

「ふーん、へえ・・・・・・・・お前も同じなのか？」

「ああ、確かに似ているな。気持ち悪いくらい似てる」

「クク、そうかそうか。お前らには“　　そう　　”見えるのか」

「・・・・・・・・」

「どういう意味だ?!」

ソイツは薄く笑う。犬歯を見せ付け、馬鹿にするように笑う。

気味が悪い。

腹が立つ。

吐き気がする。

兄を真似るこの輩が、兄を貶める目の前の存在が私は気に食わない。

「そんなに嫌うなよ。俺だって好きでそう見えてるわけじゃないんだ……大半は自己責任だ」

「なんだと？」

「チャットルーム——ああ、ここの名前だ。とにかくこの空間では見てくれなんて好きに見える」

そう言って男は犬になった。黒毛の大きな犬。シェパードやハスキーに似た狼のような犬だ。

「たとえば犬に見えるし」

「まさか、そんな」

（柴犬……撫でたい）

次に男は今の姿から女性の姿に変わる。

「たとえば親しい人間にも見える」

「教官?!」

(現実じゃ秋葉さんのあんな顔は見れないな)

男は教官の姿からまた元に戻る。ただし、その姿は紛れもなく兄と同じ者であった。

「たとえばお前にも見える。

ここじゃ見てくれなんて些細な問題さ。なにせ好きに見れるんだからな」

男はそういうと持っていた缶珈琲を飲んだ。あまりに自然な動作過ぎて違和感を感じなかったが、それはあまりにありえない光景だ。奴は何時の間に缶珈琲なんて取り出した？

「しかし、随分冷めた面だな、兄弟？」

「・・・・俺か？」

「見た目から察せよ」

呆れたと言わんばかりに眉を顰めこそしているが、口は相変わらず馬鹿にしたような笑みが張りついていた。

「産まれて始めての出逢いだぜ？もう少し笑えよ。なあ？」

「えー、嫌だ」

「クク、兄弟嫌いだからな、お前」

「馬鹿言うな！兄がそんなわけないだろうが！」

「ハッ、ハハッ、ククク……なんだ言ってなかったのか？お前が大の兄弟嫌いだって？」

「ふざけたことを言うな！」

「なら確かめてみろよ。お兄ちゃん私の事が好きよね？ってさあ」

妙に間延びさせる喋り方に腹が立つ。友人の佐藤みゆきと違い目の前の男は言葉尻を上げる。まるで念に念を推すようなくどい喋り方だ。そんなことしなくても聞こえたと叫び付けてやりたいが、今は奴の言うように確かめるのが先だ。そして、笑ってやるのだ。お前なんて知ったかぶりなのだと。

しかし、

「・・・はあ」

兄はコメカミに指を当てながら眉を顰めていた。まるで悩むような、痛い所を突かれたようなとにかく困った顔だ。

なぜ、そんな顔をするのですか？

否定してください。

「馬鹿言うな」と言いながら呆れた顔をしてください。

「大丈夫だ」と言いながら頭を撫でてください。

(まいったな・・・)

何故、否定してくれないのですか？

兄を見つめる。

困った表情で見下ろす兄の瞳に泣きそうな私が映った。それだけ近づいているのだと分かるくらいの距離だというのに、吹き付ける兄の吐息は妙に冷たく感じた。

姉弟は面倒しか運ばない。

いつも損な役回りは兄の役割だった。

犠牲になるのは、いつも兄だった。

だけど我慢しなければならぬ。

そう、教えられたのだ……それが両親への復讐になるなら我慢する。

そこに誰かを思いやる気持ちなんて無い。

不幸で、不運で、不遇で、不価値で、不恰好になればなるだけ復讐になる。

アンタらのせいでこうなった。

捨てられた俺は健気に頑張った。

そして、死んだ。

アンタ達が、殺した。

お前達が、俺を殺した。

犠牲にして、逃げて、貶めて、助かったアンタらは俺の死骸の上に居るのだと嘲るのだ。

俺が死んだ後に、アンタらはドン底に墜ちる。

人並みな幸せが望めると思うなよ。

「――ッ?!」

頭に声という形で情報が響く。

ザラザラとした不快感の塊のような情報がブルドーザーで押し込むように無理矢理雪崩込んできた。

痛い。

信じたくない。

嘘だ。

「大丈夫かラウラ?!」

私を心配してくれる兄を見上げる。

そうだ。あんな不確かな情報は嘘だ。兄はこんなにも私を心配してくれているではないか。だから、あんな情報――――

「ちなみに、ここでは相手の頭の中はある程度見れるぜ。ガードが

甘ければ甘いだけすんなりとな」

「あ——」

それが本当なのだとは何か悟ってしまった。いや、分かったが正しいのかもしれない。

私は、兄の本音を読んだ。信じてやまない兄の心の内を無意識ながら読み、そして、強い衝撃を受けてしまう。

歯がガチガチとなり、四肢に上手く力が入らない。支えとして兄の腕を掴んだ手は加減が出来ずに力一杯握り、兄はその痛みに顔を顰める。

頭がクラクラしてきた。まるで麻酔を射たれたかのような不安定な感覚に視線が朧気になったような気がした。流れた涙は拭うことも出来ずに兄の衣服を濡らし、震える舌は乾いていく。

私は、私は、私は……

また、棄て——

「おい、調子乗ってんじゃねえぞテメエ」

「え？」

それは誰に対しての言葉なのだろうか？

いや・・・

何故、私は兄の胸に頭を押し付けているのだ？

嫌だ。

離れなくては。

このままでは壊れてしまう。

「お前が言うことは正しいな。俺は兄弟が嫌いだ。ああ・・・
殺したいくらい、辱めたいくらい、苦しめたいくらいに――」

怨んで、

恨んで、

うらんで、

ウランデ、

どうしようもないくらいに怨んでるぜ。それは親も同じだ。
ああ、ああ。全てお前の言う通りだ。認めてやる」

「そん、な・・・・・・・・・・」

「けどな」

涙で滲む顔がさらに兄の胸に縋りつく。まるで押し付けるような行動に徐々に胸が締め付けられ、顔をグシャグシャにしてしまう。

私は、もう何も信じられ――

「コイツが嫌い、なんて考え持ったことない」

「え・・・・？」

「そりゃあ面倒ばっかかける問題児さ。常識はないし、考えはズレまくり・・・・・・・・・・だがな、それで見放すほど俺は落ちぢゃいない。

コイツが自分で何処かに行かない限り、俺はコイツの兄貴だ」

見上げたそこには力強い眼で奴を睨む兄が居た。その両腕で私を抱き締め、だからなんだと堂々と胸を張っている。それは、あの時と同じ顔だった。

「見下すのもいい加減にしろよクソ野郎」

噛み付かんばかりに歯を剥きだしにして怒りを顕にした兄。その姿を見て涙が溢れ続ける。

この人は――

抱き締める兄を抱き返した私は必死に兄の感触を求めた。

そうだ。

これだ。

これが兄だ。

犀川一真とは、こういう人だ。

捻くれて、天邪鬼で、淡泊な表面の下に暖かな物を宿す人だ。

たとえ先程の声が真実だろうと、この感触もこの想いも本物だ。

兄は、私の兄だ！

それだけは違いない！

「クク、美しい兄妹愛だ。感動で涙が出そうになる」

「ほざけ」

「おいおい、素直になれないお前の後押ししてやったんだから感謝くらいしてくれよ。正義の味方ならここで熱く叫ぶんじゃないのか？」

「生憎と正義の味方をしてるほど時間に余裕はないんでね」

「そうか？分裂した性格のお前なら似合いそうな設定じゃね？ダークヒーロー一真とかどうよ？」

「ダセえ。仮面ライダーとかあるだろうよ」

「お前みたいな仮面ライダーがいるかよ。仮面ライダーで言うならお助けロボか555のバイクだろうが。缶ドロイドだってもうちょい愛嬌あるわ」

「ダークヒーローだって大差ないだろ。厨二かっての」

「仮面ライダー一真ってなんだよ？滑舌最悪なライダーか？」

「あれは演技に熱が入っ——いや、なんでもない」

「お前が化物になろうがどうでもいいけどな……まあ、その時は化物同士仲良くしよぜ。ちなみに俺はカブトが好きだ」

「クウガだろ常考」

男はクツクツと笑いながら腰掛けた人形の首を捻り取って私達の方に投げた。放物線を描いてゆっくりと落ちてくるソレを見た私は偶然にも眼が合ってしまった。

茶色く濁った眼。

人形にしては生々しいソレを兄は片手で掴む。間近で見るソレは大きく、成人男性なみの大きさだった。

「悪趣味だな」

「茶菓子を出してやったのに酷い言い種だな」

「あ？」

「それを割れば出て来る」

暫く迷っていた兄は決意したように割れた頭蓋骨に指を食い込ませる。ベキベキと、ビキビキと、パキパキと罅が広がる頭蓋骨を兄は慎重に割っていく。

そして、

「・・・・・・・・羊羹だな」

中には丸い羊羹が詰まっていた。

黒く照り返す表面は微かに透けて粒の影を見せ、鼻腔を甘い薫りがこれでもかと入り込んでくる。

「旨いぞ」

「・・・」

奴はそう言いながら近場の頭を砕いて羊羹を貪っていた。

事件その19 『戦闘機で好きなのはベルクートだからさあ大変』 (後書き)

一真

「ふにゃんふにゃん (揚げ煎餅)」

セシリア

「煎餅の噛む音がおかしいですわ」

一真

「かーむーと (ふにゃんにゃん)」

鈴音

「キモい」

一真 (。・ω・。)

「にゃんにゃん」

セシリア

「気持ち悪い」

一真（；ω；）

「もぐもぐ」

花子

「後書きだぜ！」

主人公&ヒロイン 準備中・・・

一真

「さて、今回は波乱がない回だ」

セシリア

「ISの作製がありますわ」

鈴音

「とんでもシステムも作ってたわね」

花子

「だけどまずは！」

一同

「お騒がせしてすみませんでしたー！」

一真

「18話が消えたのは本当にヤバかった。かなりテンパったからな」

セシリア

「寝呆けていたのがありますが、慌てて上げたのにも問題はありませんわ」

花子

「原文のサルベージと修正にかなりかかったみたいだな」

一真

「サルベージは難しくなかった。ただ、どーしても修正したくなっ

た」

鈴音

「どうケジメ付けるのよ？」

一真

「見てろ。誠意は見せる」

主人公&ヒロインズ 談笑中・・・

セシリア

「まずは質問があります。

自衛隊と自衛隊が出て来ましたが、どう違うのですか？」

一真

「今現在の日本、つまり作中の日本には9条がない。改訂したんだ。これにより日本は最低限の進行戦力を持てるようになった。ただし、日本は頻繁に他国の紛争や災害に支援介入する。その際に軍よりも部隊という肩書きのほうが便利なんだ」

鈴音

「また突っ込まれそうな」

一真

「既に階級で突っ込まれた。処女は卒業したんだよ・・・」

花子

「そーいや日本人の1割はゲイらしいね」

一真

「ブチ殺すぞ売女。俺をダメなバナージさんと一緒にすんな」

セシリア

「やっぱり」

鈴音

「やっぱり、あのヘタレステイル擬きを殺すべきだった」

主人公&ヒロインズ お茶会中・・・

花子

「今回は各自の身体能力が出て来たけどさ、私凄くね？」

一真

「心技体が強いのは当たり前だ。特に凰は中国で伸び上がった猛者だからな」

鈴音

「あの時はがむしゃらだったわー」

一真

「セシリアに至っては自衛の為だ」

セシリア

「家を守るために何でも納めましたから」

一真

「俺とラウラは知っての通り。」

俺としてはお前のがびっくりだ。お前、実は代表候補だったりしない？」

花子

「落ちこぼれに何をWWW」

鈴音

「でもさ、ISに体力って必要なの？」

一真

「脳波で全て動くわけじゃないからな。長時間使用とすれば自然と体力も必要になる」

セシリア

「そうになると一真さんと鈴さんは凄いですわね。数年でそこまでの体力を付けたのですから」

鈴音

「ふっふーん♪（ドヤ）」

一真

「死ぬ気でやれば体力くらいはつく（シレッ）」

主人公&ヒロインズ 食事中・・・

セシリア

「そういえば歴史はこうなっているのです?」

一真

「2011年まではリアルだが、それ以降はフィクションだ」

鈴音

「なんか凄い日本押しな歴史だったわよ?」

一真

「事実だ。ちろっと調べればそういった情報には困らない」

花子

「でもでも南京大虐殺とか満州とかやりすぎじゃない?」

一真

「なら日本の軍は・・・」

日本刀で100人斬り殺せるほどの戦闘力と有り余る予備の日本刀

をもち、

銃剣と単発銃のみで40万人殺すなど原爆以上の破壊力を持つ携行兵器を誇り、

各植民地で無駄に現地人を殺してまわるほど武器弾薬が余っていて、

揚子江の川幅を2 m以下にしたりするほどの高い土木技術を持ち、

沖縄で米軍上陸後も市民に玉碎命令が出せるほど命令系統がしっかりしていて、

日本兵の数を上回るほどの従軍慰安婦を一日に一人あたり何十人も暴行するほど体力と食料があつて、

開戦前からオランダ占領時のインドネシアにも日本軍用の慰安婦を送り込むほど先見性があり、

AVが無かった時代にも関わらず慰安婦に顔射するほど独創性に富み、

韓国で文化施設はもちろん一般家庭にある辞書から料理本に至るまで処分してまわるほど暇で、

保護するために植民地ではなく併合したにも関わらず、

韓国の運気を捻じ曲げるために山の頂上に鉄杭を埋め込むほど風水に明るく、

当時の朝鮮の人口のおよそ半数近くを日本へピストン輸送するほど燃料と船舶が豊富で、

中国で家々に火を放ちまくり無駄に虐殺した民間人の死体を一カ所に集めて、

たっぷりとガソリンをまいて燃やすほど石油資源に余裕があり、

韓国の優れた建築施設・街・鉄道を全て接收することなく破壊し尽くした上、

新たに日本の駄目な建築物に建て替えるほど資源と資金が有り余っていて、

11歳が戦場で暴れ回るほど若い内から逞しく、

終戦後になぜか強制連行を行いまくるほどの軍備と余裕があり、

圧倒的科学的力を誇る朝鮮の反日勢力になぜか圧勝するほど運がよく、

朝鮮人を殺しまくりながら人口を2倍にするという魔術を持ち、

敗戦国でありながらGHQを手玉にとって 朝鮮戦争を起こすようコントロールするほど政治力と外交能力に長けた日本が敗戦した・

これは歴史上最大のミステリー。

すごいな。本当にすごいな。これ、みんな日本を攻撃してきたアホ共の言葉を纏めてんだぜ？どこの先頭民族だよ？終いには地球人で

さえないってか？」

一同

「（。Д。）」

一真

「ちなみに、韓国は当時形さえ存在して居らず、また中国の属国だった。ちなみに各地に当時の朝鮮の話はある。イギリスの女性冒険家の著書もあるし、写真だって日本にはあるんだぞ」

花子

「嘘だー、嘘だー」

一真

「韓国は突っ込み所の宝庫だからここで止めて・・・中国の虐殺後はどう説明するんだ？」

敗戦国がGHQをどうにか出来たなんて本気で考えてるのか？

なにより、資源に困ってた時にわざわざ要らん人間を国に招くわけないだろ。死体にガソリンとか、妄想だろ。

ちなみに、満州は確かに存在してた。あそこはモンゴルだからな。

当時の中国が勝手に自分の物にしてただけだ」

主人公&ヒロインズ 勉強中・・・

鈴音

「おかしい。おかしいわ」

一真

「どうしたいきなり？」

鈴音

「セシリアが強過ぎるわ！なによアレ？！」

一真

「あの程度なら出来そうだけどな」

セシリア

「いえ、無理です」

一真

「リミッター外して、違法改造して、動力はナインボールと同じ物
積みばいけるって」

花子

「もはや別物だ」

一真

「温い設定で強くなれるか!」

鈴音

「話盛りすぎだって言ってるのよ!」

一真

「お前ら、原作と同じ力量でこの先やってけるなんて考えてんの？
ナインボールをはじめ、様々なACタイプと戦うのに？」

セシリア

「それは・・・補正が」

鈴音

「でも、原作が」

一真

「捨てろ。そんな考え捨てちまえ。

お前らは強くなる。それもACタイプと戦える程までな! 弱いまま
で話が続くか!」

主人公&ヒロインズ 交代中・・・

一夏

「なんか突然面子が変わったな」

箒

「うむ」

ラウラ

「もぐもぐ」

みゆき

「ですねー」

一夏

「なんか一真（進行役）がいないんだよな」

箒

「一夏、お前、先輩をなんだと思っている」

一夏

「え？一真（進行役）は一真（進行役）だろ？」

みゆき

「あはー。中々な毒舌っぷりですー」

ラウラ

「もそもそ」

みゆき

「そういえば、なんで一夏さんは犀川さんが怖いんですか？理解出来ないからですか？」

一夏

「え、あ、うーん・・・・・・・・改めて考えると分からないな」

箒

「分からないから怖いで間違いないのでは？」

一夏

「いや、そうじゃない。だったら俺は対人恐怖症でこんな場所にいない」

ラウラ

「ペロペロ」

一夏

「なんだろう、直接的に一真が怖いんじゃない・・・・・・・・間接的、そう、間接的に一真が怖いのかも」

みゆき

「つまり結果的に怖いってことですかー？」

一夏

「ほら、俺って守るとか力が欲しいとか言うじゃんか。それってつまり弱いのは嫌ってことだろ？」

一真は優しいぜ。それこそ俺達が頼めば何でも手を貸してくれる・
・・・だけどき、それって勝手な言い分だけど自分を弱くしてるんじゃないのかなって」

箒

「確かに、勝手な言い分だな」

一夏

「それに頼れば頼っただけ一真から抜け出せなくなる。それが怖いって言うか・・・・あぁ！なんか混乱してきた?!」

みゆき

「つまりー、一夏さんは犀川さんの優しさに甘えるのが怖いんですよー。甘えた事で墮落する自分も、甘えた事で犀川さんからどう思われるかも合わせてー」

ラウラ

「むぐむぐ・・・そうなのか？」

一夏

「たぶん」

箒

「ハッキリせんな（イライラ）」

みゆき

「一夏さんはつまり犀川さんと対等に立ちたいのですー。甘えるばかりでなく、甘えて欲しいんですよー」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

件その20 「錬金術師に弟子入りしてたらさあ大変」 (前書き)

この小説は人間相手に迷わずRPGをぶっ放せる人間を対象にした方のみお読み頂けます。

人間にRPGなんてスマートじゃない！という方は偵察兵になって芋砂するか、ショットガン片手に大立ち回りを演じて下さい。

ちょっと工兵！歩兵より先に戦車と装甲車潰せボケ！歩兵は突撃に負けせろよ！そして砂ああああ！せめてスポットしてええええ！

件その20 「錬金術師に弟子入りしてたらさあ大変」

「それで、お前は誰なんだ？」

新たに増えた少女、Mを含めて俺達は出された茶菓子を口に含む。
Mという少女は初め、俺と奴を見て驚いていた。様子から顔見知りの可能性があり、それを聞こうとしたが奴にそれは邪魔された。
それでも収穫はあった。

オリジン。

それが奴の名前だ。

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

どう考えても偽名だ。

役に立たねえ情報だな。

「愛と平和の代弁者」

「頭を取り換えられるなんてすげえな」

「そりゃ愛と勇気のぼっちだ」

「なら戦隊物か？」

「群れる必要なんてないくらいに強い」

「ならなんだよ？」

「世界平和のために日夜暗躍する次期ヒーロー」

「世界征服って考え方って言い方さえ変えれば世界平和の実現だよな」

「同感だ」

「それでそっちのMちゃんは次期ヒロインか？」

「コイツはただのクソガキだ。よくて少女Aだ」

「誰が少女Aだ！」

「喧しい」

「っう、五月蠅い！指図するな！」

「指図されたくないや自分で宿と飯を用意できるようになるんだな。誰だったかな。部屋なし飯なし味方なしは？初対面な人間の部屋に住み着いてたのは？」

「うっ」

「しかも、一言目が殴らないで、だったか？」

「いやー、今では考えられないくらいしおらしくて可愛げがあったな」

「うう~~~~~！」

目の前で兄妹喧嘩を広げる中、俺は口を開かないラウラをチラリと見る。隣には鋭い眼差しで2人を睨むラウラがいた。

「どうした？」

「奴ら、亡国機関の人間だ」

「……………冗談にしちゃ笑えないな」

「見覚えがある。特に、あの子供はハッキリと覚えている。奴はリヴァイブを奪った片割れだ」

リヴァイブを奪った片割れ。それはつまり、ラウラを始終押し込んだ凄腕ということだ。

信じられない。

目の前の少女がラウラよりも強いなんて・・・

「私は一人前のれでーだ！」

「噛んでんじゃねえよ、情けねえ」

「か、噛んでない！絶対に噛んでない！」

「あっそ」

「き、貴様~~~~~！」

「おーおー、こんなチンマイれでーがいるとは、世の中クソばかりじゃねえな。」

まあ、誰が見てもお前はクソガキにしか映らんだろうがな。せめて出るところ出たらほざけよ俎板」

「黙れ！殺すぞゴボウ！」

「オレがゴボウならお前はカブだな。小せえし白いのと赤いのがあ

るからピッタリだ」

「っ！！！！！」

見えねえ。

アレがラウラより強いってマジかよ？

短い手足を必死に動かしながらオリジンに一矢報いようとするMはどう見ても子供だった。兄に仕返ししようとする妹。そんな子供が施設を強襲しただと？

ラウラの言葉を思案しながら2人を様子見ていた時だ。オリジンと眼が合った。

「どうした？テロリストでもいたのか？」

隠す気さえ無いとばかりに奴はニヤニヤと笑いながら俺を見下す。

「……………そういや知ってるか？お前、今世界で一番狙われる人間なんだぜ？」

「は？」

「なにせ、管理者と繋がってるって噂が流れてるくらいだからな」

「ちょっと、待て・・・なんで俺が」

「まあ、アメリカに狙われてる俺よりはマシだがな」

「話を――」

「それじゃあな、一真。近いうちに3人で逢おうぜ。その時まで殲滅者に殺されるなよ」

微睡みの中から目覚める。気だるく、体はまだ睡眠を欲するかのよう
に重力の支配を甘んじている。チラリと時計を見れば今が昼に
差し掛かっているのが分かった。

（4時間・・・）

自分が果たした任務から帰ってからまだ4時間しか経っていない。
眠いのも仕方ないと言えよう。

ドイツの研究所と軍施設の強襲は中々に骨があった任務だった。
そのせいで付いてきた新入りが3人死に、奪ったISも1つ取り返
されてしまった。さらにオレも追撃に来た精鋭部隊のせいで軽傷を
負ってしまった。

災難だ。

もし、チャットルームで奴らに逢わなければ八つ当たりで幹部会
の老害共を殺していたに違いない。

なんだ、やっぱりヒーローじゃないか。

こうして一真のおかげで名も知らぬ老人達は命を救われた。見ず
知らずの人間を無償で助けた一真は正にヒーローではないか。

犠牲を一身に集める点においても。

「頭、痛い・・・」

声がしたため眼だけに向ける。同居人であるMが頭を押さえながら冷蔵庫から水を取り出していた。

昨夜まで打ち上げと称してレイン達に酒を飲まされたためだろう。二日酔いなのかもしれないが、ナノマシンはどうしたのだろうか。ナノマシンが正常に働けばどれだけ酒を飲もうが大したことないはずだ。

どうでもいいか。

「なんだ、起きてたのかオリジン」

「寝る」

「もう昼だぞ」

「誰かのせいで黒兎部隊と鬼ごっこしたから疲れてんだよ」

「それは災難だな」

「ああ、どこぞの馬鹿が俺に通信入れたせいで奴も来ちゃったしな」

寝返りを打った俺の後ろで喉を鳴らす音が聞こえた。俺がそういった方面で小煩い事を忘れたのだろうか？

「水くらい静かに飲め」

「いいじゃないか、そのくらい」

「部屋、追い出すぞ」

「うぐっ」

ソファアーに体を預けながら目を閉じて考える。

計画は以前と前段階で足踏みしている。それは未だに必要最低限のISとリンクスの準備が済んでいないためだ。前段階を終えない限り、この計画は始まらない。

その一端を担える人間を集め、アイツらを巻き込まぬよう俺が血反吐を吐いても準備は未だに終わりを向かえない。メンバーは最高の物を用意しているが、癖が強いせい最近オレの管轄になりつつあるのが難点だ。

しかし、準備が終わるまで暫くかかる。その間にB-1を初期化しなければ。今のままでは殲滅者に勝てない。

なまじ勝てても、次にやってくるのはパルヴァライザーの椅子を賭けたコロシウムだ。

問題は山積みだ。

「オリジン、このケーキ食べていいか？」

「……チーズ以外は好きに食べ」

殲滅者。

俺達とは違った命令形態で動く独立した破壊専門のリンクス。その強さと、任務対象となった地域の惨状から名付けられた名前のISは今や世界で共有される最高機密の1つ。

奴に目を付けられれば命はない。狙われた瞬間、関係も無関係も意味が無いとばかりに殺し尽くす。

奴が来た瞬間、そこは廃墟と無機物しかなくなる。目についた物全てが殲滅に値するのだ。

奴には既存兵器もISも通用しない。その兵器は数十年先に行くものばかりで、常に音速の世界にいる奴には何者も抗えない。

奴と会話できると考えてはいけない。目についた瞬間、死体さえ残さない。

故に、奴には関わってはいけない。

奴は、ただしく殲滅者なのだ。

（殲滅者・・・ナインボールシリーズを遥かに凌ぐACタイプ。なぜ奴は俺を殺そうとする？）

オレ達は仲間の筈だ。偶然でACを手に入れられる可能性はない。ACを手に入れるには条件がある。その条件をクリアした奴が何故、オレを襲える？

「そういえば、次の仕事はどうするんだ？」

「・・・」

「アメリカの秘密研究所からデータの奪取と篠ノ之束の暗殺があるぞ」

「暗殺だ」

「わかった」

とにかく、今は組織に従うか。せめてオレに都合よくなるまでは良いように使われてやる。

「そうだ。一発殴らせろ」

「黙れれでー」

一真が退院してから早2日。明日は九州に出張ということもあり、一真は最終調整に顔を出していた。

考案されていた2機の図面とパーツがあったおかげで作成から組み上げまで数日も必要とはしなかったこの計画。今は人間の手で最適化を始めている最中である。

普通ならば考案で一ヶ月、作図で二ヶ月、予算取りで一年、開発で半年、調整に三ヶ月はかかるであろう計画も余計な項目をクリアしただけで驚愕の完成期間に終わりつつある。勿論完成度は期間短縮に比例して低い。なにせパーツの大半は改造して作ったパーツばかりだ。研究者の中にはニンボールの予備パーツを使うべきと声高々に叫び続けた人も居たが、そういった人間は不要と斎藤さんが

逐次切り捨てていった。ナインボールは最高機密だ。それを無関係な人間が見られると本気で考えているのなら余程馬鹿に違いない。

アリーナの中央で打鉄を纏って準備体操をする篠ノ之と更識を眺める。2人共恥ずかしそうに小さな動きで準備体操を消化しようとしている。それを毎回毎回怒られては最初からと言われた2人の表情は既に泣きそうである。

2人から視線を外し、離れた場所、計画関係者の後ろにいる一団を見る。彼女達は今回のIS開発はいい経験になると見学を申し出た開発科と整備科の生徒達だ。学園側も生徒達の自己啓発を殺したくないと計画主任責任者である秋葉と斎藤に頼み込み、2人の邪魔をしなければという条件の下でここに居る。

授業で集まった2年と3年は楽しそうに眺めながめている。中には一真を見ては指を差したり、侮蔑の表情を浮かべる人間もいた。

正直、邪魔だ。彼女らは喧嘩を売るためにここに居るのだろうか？

溜息を吐きながら思わず胸ポケットに手を伸ばしそうになる。その手を自ら止めながら今は我慢しろと言い聞かせる。こういった時、周りに一般生徒がいるとダメだ。いつもなら煙草を吹かしながら作業してるというのに。

紫煙の代わりに溜息を吐き出す。溜りに溜まったストレスを睡眠にする機械があればいいなと不意に思う。人類はナノマシンや医療用ポッド、さらにはISやICシステムというファンタジーな発明をしたのに、未だにストレスを解消する発明はされていない。外部からの刺激で好きに夢を見る施設より、ストレスを何かに変換する

施設さえ作れば金も入るだろうに。だから日本は未だに過労死大国なのだ。

「振りが小さいぞお前達。いい加減に割り切らないか」

何回目かのやり直しを強制される2人を眺めながら数日前の夢を思い出す。

オリジンとM。2人の存在についてだ。

あの夢も不思議ではあるが、問題はあの2人、特にMについて疑問がある。

Mが織斑千冬に似ていると気付いたのがつい昨日。織斑姉弟に妹が居ないと知ったのがその同日。ならばアレは他人の空似だろうか？

可能性は2つある。

1つ、彼女が織斑千冬のクローンという可能性。

未だに性別を変えてのクローンが造られていない今、この可能性は大いにある。特にアメリカやロシアは過去に優秀な遺伝子によって最強の兵士を造ろうとした過去があるためこの線は濃厚だ。リッチフィールド計画と呼ばれたそれは成長過程で精神に異常を来すケースが多発し、失敗ということで計画は凍結された。百年以上も前に。

しかし、何処にも異常者はいるものだ。秘密裏に計画を再開した

人間がいても不思議ではない。

2つ、Mは織斑姉弟の実妹である。この場合、疑問点が幾つも出て来る。

まず、なぜ織斑千冬はそれに関して知らないのか。もしくは行方不明になった織斑夫妻が新たに産んだとしても何故亡国機関に所属しているのか。織斑夫妻は亡国機関に所属しているのか。

そして、可能性にもならないが考え付いた物がある。

一夏は

本当に

織斑千冬の

実弟なのか？

これはすぐに解決した。

篠ノ之と凰がその証言者だ。

2人は少なくとも幼少期から中学時代半ばまでの一夏を知っている。そのことから織斑一夏がMよりも先に存在している事は証明されている。

(どうでもいいか)

元より他人のことだ。関係ないのだ。織斑姉弟の問題は彼らが解決する。いつか解決する問題を他人である俺が関わるべきではない。

問題も解決したため気晴らしに背伸びをする。凝り固まった筋肉や背骨が小気味よい痛みを感じさせる。

「よし。次はランニングだ」

どうやら調整も次の段階に移るようだ。

新型ISの完成に立ち合う事が出来なかった一真は現在九州にある京都の自衛軍駐屯基地でパーティーに出席していた。

会場には丸いテーブルが規則正しく並べられ、その上に上品そうな料理の数々が淡いオレンジの証明に照らされて気品よく皿を列ねている。上品そう、とは言ったが生憎産まれは一般家庭よりも貧しい家のためどう上品なのかは分からない。ただVIPに出しているなら家庭料理よりかは上品なのだろう。庶民派な自分にはそんな違いは分からないと一真は料理を一口食べる。

普通に旨かった。

一真は時折飲み物を勧めるウェイター、ウエイトレスにワインを頼んだ以外は誰とも話さない。財界、政界共に重鎮の集まるパーティーだ。一学生で、ただの自衛官な自分と話が合うわけもないため誰とも関わらぬよう壁に寄り掛りながらボーツと時計を眺めながら煙草を啜える。

煙草を吸える事だけが唯一の救いだった。もし吸う事さえ許されなければこの混濁とした空気には耐えられなかったに違いない。煙草とは人類が発明した中でも最高の物だと思う。

「いやはや、貴方には適いませんなあ」

「ほう、貴社ではそのような事が」

「すみません」

「是非次は私にも協力させてください」

「綺麗な奥方をお持ちで」

「御呼び頂きありがとうございます」

「すみません」

「楽しんでますかな」

「いやはや、盛大なパーティーですな」

「まさか18話が消えるなんて、考えもしませんでしたな」

「す・い・ま・せ・ん！」

「これはこれは皇太子殿下。お会いできて光栄です」

「自社はどうも先行きが暗くて」

「次のF・Xは是非我が社を」

「本当、原文探すのと修正には手間取りました」

「聞いているんですか！無視するのもいい加減にしない！」

「んあ？」

耳元に響く大きな声に意識が呼び戻された。少しばかりブーツと
し過ぎたためか唾えていた煙草は既にフィルターを焦がし、熱によ
り唇と鼻先がチリチリと痛む。慌ててそれを灰皿に投げ入れた俺は
指先で鼻を擦りながら目の前に立つ誰かを見る。

「やっと気付きましたね」

日本人代表に立候補すれば間違いなく圧勝しそうな和服の少女が
そこにいた。艶のある黒髪に焦茶の瞳、白い肌は健康さを失わずに
張りを保ち、表情は常に優しさを携えていただろう顔つきだ。その
表情も今や凜とした、所謂怒り心頭といった形相だ。

「このような場でなければ不敬罪で職を失うところでしたよ」

「申し訳ありません」

頭を下げながら考える。この少女は誰だろうか。何故、このよう
な少女が自分などに声をかけたのだろうか。

「あの、宜しければ御名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「名前を聞くなればまず名乗りなさい」

道理だ。しかし、その俺様な態度は腹が立つ。

「静岡IS研究所在註自衛軍、犀川一真少佐です」

「知っています」

なら聞くなよクソガキが。

「私は日本国春篠宮家長女、春篠宮いずるだ」

Oh・・・良かった。本音が出なくて本当に良かった。

春篠宮と言えば天皇家の一つだ。他に夏と冬があり、秋が現在の天皇を担っている。

つか、なんで天皇家の人間が単独行動してんだよ。SPはどうしたんだよ。陸自引き抜きのスペシャル部隊は何処にいんだよ。

「少し付き合え」

日本人として恥じない行いに則り一真はいずるの後に黙って従う。本音を言えばNOと言って早々にその場を立ち去りたかったが、視界の端で銃器をチラつかせる御方を眼にしてしまい素直に行動を共にする。

黒髪の女性の手には黒塗りの拳銃が握られている。ご丁寧にサプレッサー付きだ。

「ここなら良からう」

（帰りた〜い。帰りた〜い。あつたかヘイワが待っている〜）

いずるにより外に設けられた臨時テラスに着いた一真はどう逃げるかを考えながら空を見る。

いずるは椅子に座り、一真は星空を眺めながら愛妹の居る部屋を求めて立ち尽くす。

「何を帰りたいという顔をしている」

「ご冗談を」

「いーや、してる。お前は今、こんな面倒事に対して嘆いている」

「ははは、面白――」

空気が凍った気がする。さらに偶然か故意か。隣のテラスで一目も憚らずに拳銃を向ける方がカーテン越しに此方を睨み付けている。

「今日は疲れておりまして」

「そうか。なら座れ」

（座っちゃダメだ。座っちゃダメだ。座っちゃダメだ！）

「いずる様のご厚意を無碍にするのか？」

いつの間に背後を取られていました。

（うん、やっぱり人の厚意は受け取らないとね、うん）

後頭部に感じる冷たい温度に肝を冷やしながらゆっくりと椅子に座る。

「よしよし、さて話でもしよう」

「・・・」

「しかし、こうして席を共にしても何を話せば」

「・・・」

「よし、こういった場合、男が女性をリードするものだ！」

「・・・」

「何か話題はないのか？」

「・・・」

「おい。無視するな。泣いてしまうぞ」

「泣かせたら――」

「本日はよい天気ですねご息女」

後頭部と喉から感じる冷たい感触に涙が出そうになる。誰でもいいから助けてくれ。

「0点」

採点してんじゃねえよクソガキ。

「お前、よくそなんのでIS学園に居られるな」

居たくて居るわけじゃねえよ。ラウラが居なきゃすぐに去るわボケ。

つか、話の振り方次第でIS学園に居られるなんて知らなかったな。

「楽しみにしてたのだから……世界初、世間2番目の男性
IS操者を」

背中に冷たい汗が伝う。極秘中極秘機密をまさかこんな我が儘娘から聞かされるとは思わなかったのもあるが、それを知っているということとは俺の特異性にも気付いている可能性がある。

いずるはニヤニヤと笑いながら一真の反応を愉しんでいた。猫が獲物をいたぶるような仕草に似た手つきで小さな玉を転がしながら、彼女は一真が慌てふためく様を愉しんでいた。

「はて、世界と世間はどういった違いがあるのですか？」

「隠すな隠すな。貴様が富士山中でISを見つけたのくらい知っているわ。そして、今まで何処にいたのかもな」

可愛らしい笑顔を浮かべるいずるに微笑みを浮かべながら無い頭をフルに回転させる。

ここまで知っているならH・1も知っているのでは？

国家機密をなぜ天皇家が把握している？

いくら天皇家でもその子供が何故？

「カッカッカッ。所詮沖縄の田舎産まれだな」

ああ、そういうことか。

「悩め悩め。所詮は愚民が私のような天上の存在の考えなど分かるまい」

このクソガキ――

「ハッキングしましたね。それも静岡研の天岩戸を」

「はあ？なんだソレは？私は何故そのようなくだらんことをせねばならん？」

「ここ一月、天岩戸に何度もアタックを繰り返すB級ハッカーがいました」

「ほ、う」

分かりやすいほどに唇をヒクつかせるいずるに対して一真は加虐心が働きます。本来、一真はそういった性癖がある。無関係の人間を気にしない節のある一真はそういった面を見せることは稀だが、身内にだけはそれを見せる時がある。悪態も悪口も一真は身内と敵対者にだけに言う。特に、頭がいいと己惚れた人間を貶める行為が

一番好きである。

「最初は場所の特定も、逆探知も成功していました。本人は知らないようでしたが」

「それはまた、強気な発言だな」

「強気も何も、それを見付けたのは私ですから」

「っ?!」

いずるの顔が歪む。それに反比例して俺は微笑む。

「いやあ、苦勞しました。何せ攻性防壁を掛けず、また手出し禁止と言われましたから」

「な、何故？」

「さあ。御上の意向でしたから。」

それでも、好きにデータを見られても困るため仕方なくそのハツカ一だけにある対策をしたのです」

「そ、そんなこと出来るわけあるまい」

お前に出来るわけが無い。暗にそう言う彼女に一真は優しげに微笑む。

「いえ、可能です。ただ天岩戸にダミー空間を作り、そこに従来のプロテクトを張るだけです。そして他のデータはバックアップ以外全て屑データにするだけ……。したら面白いことに「ふざけるな！」——どうかなさいましたか？」

怒りを発散するようにいずるはテーブルを叩いた。

「私が、この私が貴様のような愚民に手玉に取られたと言うのか？
！」

「へ、変な誤解を招くようなことは言わないでください。私と貴女様は初対面。テレビ越しか写真越し以外に接点なんて無いじゃありませんか」

彼女を煽るように平淡な喋り方で事実を述べていく。ただの馬鹿なら問題ないし、意味も分からないが、頭のいい彼女なら俺の本音程度を察するのは簡単だろう。

「この機才、奇才、鬼才の秋篠宮いずるが貴様のような凡骨に後れを取るわけが無い！」

「そ、そうです。奇才で秀才で天才な貴女様に私のような凡才で無才で愚才が適うなんて誰が思います」

格下に手玉に取られてどんな気分なのだろうか。きっと、今の彼女ののように耳まで顔を赤くし、悔しさに唇を噛むに違いない。内心は悔しくて、悔しくて、悔しくて、悔しいのだろう。

「貴様、私を馬鹿にしおって！」

「馬鹿になど、滅相もない事実も現実も既実も受け入れております」

目の前の現実を受け入れろ。

お前は、俺達に負けた。

「~~~~っ！」

怒声や奇声を上げなかったのは、きっと彼女に残ったプライドからだろう。下手に頭がいいならここで誰かを呼んで冤罪でもかければいい。佐官と天皇家では信頼性や優遇の差は天地のようにハッキリしているのだから。

「貴様・・・・・・・・いい加減にしろよ」

「あゝあ？ テメエこそ蒸発したくなきゃその無粋な物しまえや。それとも自殺願望でもあんのか？」

ナイフを喉に当てる女に横目で睨み付けながら右手のみ局部展開する。

「貴様を殺せれば」

「無理だね。ISを展開する前に殺さなかったお前にもう機会は来ない」

「つく」

齒を剥き出しにして悔しさを怒りに換える女を嘲る。

「・・・止めなさい、明夜」

「し、しかし、お嬢様」

「犬死にを私が望むと？」

「・・・・・・・・御意に」

ナイフをゆっくりと引く明夜はいずるに聞こえよう一真に耳打ちをする。

「いつか殺す」

それに最高級の侮蔑を含めて笑いかけた一真は姿勢を崩す。もう、彼の中でのいずるは敵でしかないのだ。礼儀など必要ない。

「・・・・・・・・私の掴んだ情報はどこまでがデコイだ？」

「教えるかクソガキ」

「貴さ「明夜」——っ!!!!」

「察するに、出身地以前は本物のようね」

「さあ」

「なら、次に。貴方は本当に1人で私を騙したの？」

「ああ、確かに1人でやった」

「・・・・・・・・そう」

「俺からも聞きたいんだが、何故天岩戸に忍び込もうなんて決心した？下手すれば反日家へのいい攻撃材料だぞ？」

「お前に、興味があった。それだけよ」

「・・・・たかが一般人にか？嘘だろ？」

「本当だ！私のように望ま————っっ?!」

「へえ、天皇家も苦勞が絶えないらしいな。
無能な金持ちからの虐めか？それとも反日家からの口撃か？それともB層からの心無い言葉か？」

「………全てよ」

「全て？」

「そう、全て。」

確かに政界の人間の子息、子女から虐めはあったわ。中には過激な物もあった。ただ、私が特別扱いされるだけでね」

「ああ、まだあるんだそんなの」

天皇家の子息、子女を虐めた事件は以前にもあった。ただし、その両親は純粋な日系でもなければ愛国者でもなかった。典型的な反日人間であつたらしい。

「……百年前の記事かしら？」

「よく知ってるな」

「そりゃあ、前例があるなら対策もあるはずでしょ？」

「だが無かった」

あの当時も、天皇家は問題を解決出来ずにいた。力が足り無かつ

ただ。いや、相手が力を持ち過ぎていたのもある。

「・・・・・・・・ええ。結局それはメディアにより有耶無耶にされたよね」

「んで、反日家の口撃は？学校にでも凸られたのか？」

「そうよ。まったく、なんて頭が悪いのかしら。百年以上前から進歩が無い。本当、無能を絵に書いたような奴らよ」

「まあ、支持母体がカルト宗教や反日国家支援団体だからな。教祖や支援先が発展途上国以下なら仕方あるまい」

「進化も退化も出来ない人間って死ぬべきよ」

「過激だな」

そんなこと言ったら現在生きている人間の何割が生き残れるのだろうか？きっと厭きれる程には生きているに違い無い。

「だって、そんな人間がいるから日本は未だに貧しいのよ。上しか知らない老外も、日本人じゃない奴も早く死ねばいいのに」

「おい、この馬鹿止めろよ。誰かに聞かれたら事だぞ」

今でこそ反日国家の人間は目立たなくなったが、未だに日本には

多数の工作員やカルト宗教に関わる人間がいるのだ。そんな者に聞かれれば百年前のように殺される可能性だってある。

「安心しろ。バレたら消すまでだ」

「なにそれ怖い」

天皇家っていつから堅気止めたの？

「日本人の習慣に甘えた連中なんて難民よ。帰化する必要あるの？他国の血を混ぜてまで人口増やすより、経済を潤して子供を複数持てるだけの経済水準を用意するべきじゃない？」

「まあ、上の人間は奴隷がいなくて躍起になってんだろうよ。それで行くなら外国人をガンガン招くのも理解出来る。ようは労働力と金蔓の補充だ」

「そこよ！どんどん増やした分だけ金は増えるけど、結局それは上の人間が蓄えるだけじゃない！経済は金が回って初めて潤沢になるに！なんで国民に帰化しないのよ！」

「まあ、それを知らない人間がいるから金が反日国家に流れるんだがな」

「それを知ろうとしないのも問題よ！
なによ。メディアがアレが悪い、コレは良い、有名教授が言ったから、東大教授が言うなら、アメリカの研究施設が言うから……」

・馬っ鹿じゃないの！つまりアイツらメディアの人形じゃない！思考停止も限度があるでしょ、限度が！」

「誰だって悪い事は見たくないし、聞きたくない。もし知るならば誰かの責任で知りたいんだろうよ……そんなことも出来ないくせにな」

「だから許せない！なぜ、こんなに腑抜けた国民性になった！腹が立つ！本当に腹が立つ！」

「……」

若気の至りとはいえ過激なことだ。ここにるのが俺でなければ確実にスキヤンダルになっていたに違いない。

「私はな、日本を愛している。だが、今の日本国民は愛せん！奴らは日本国民の皮を被った何かだ！

日本に住めば日本国民だと言うなら、アメリカに住めばアメリカ人か？！中国は！イギリスは！フランスは！いいや、もはや国でなくともよい！火星、水星、金星、遍く在る星に住めばその土地の人間か？！

否、断じて否！

国民は総じて産まれた国を愛し、誇りに思い、慈しむべきだ！
愛国心は恥ずべき？

ふざけるなっ！！

先人が守った日本を、英霊である祖先が愛した日本を、他国を解放せんが為に命散らした大和男児達の国を、世界を救い続けた日本を、愛せないだと！

戯け！

恥ずべきは

貴様ら自身だ！

戦争がいけない？他者を食い物にしてはいけない？暴力は何も産まない？

滑稽だ！

自らの境遇を理解していないものほど滑稽な言葉はない！
私は嫌だ。愛するに準ずる者達に非難されるなら我慢しよう、耳も傾けよう。だが！あのような痴れ者共に非難される覚えはない！
私は、天皇家秋篠宮いずるは、誰に恥じるでもなく日本人だ！日本国の一部だ！それを非難出来る者は日本国民のみだ！」

吐き出す者を吐き出したとばかりにいずるは肩で息をしながら強く握った拳を見つめる。それを見ながら一真はワインを煽った。芳香な、胸焼けのするような甘い薫りと爽やかな酸味の赤い液体を飲み干した彼は暫く周りの様子を確認する。

「落ち着いたか？」

「す、すまん……見苦しい真似だった」

「気にするな。逆に感心したくらいだ。天皇よりも天皇らしいぜ、お前」

「そ、そうかな？」

照れたいずるは恥ずかしそうに顔を赤らめながらはにかむ。

「だけど、軽率過ぎる。俺が音を遮断してなかったら敵を呼んでたぞ」

「「は？」」

「今、解く」

そういった一真が局部展開していた部位を戻すと、いつの間にか消え失せていた笑い声や音楽といった雑音が聞こえだす。

「い、いつの間に」

「展開した時点。助け呼ばれたら面倒だし」

空いたグラスにワインを注ぎながら驚く2人を楽しむ。

「狸め」

「いいじゃん狸。可愛いし、愛犬が狸っぽかったから好きだぜ」

「っは、ほざけ」

いずれは明夜により注がれたお茶を口にしながら一真を見る。その眼は品定めをしているようで不快だと一真は感じた。

「貴様、歳は？」

「二十歳」

「そうか。私は来年で16だ」

「あっそ」

「つまり、来年になれば

貴様は私の物だ」

「「ぶほっ！」」

この馬鹿はいきなり何を言いだすんだ?!

「げほ、ごほっ！おま、お前、いきなり何だ？！」

「貴様が気に入った。そこら辺の軟派な女にやるには惜しい」

「無理に決まってるだろ！」

「何を言う？日本国憲法では未だに天皇家は一国民と残っているのだぞ？」

「ありゃ、戦前の名残だろうが！」

「名残だろうが憲法は憲法だ。ならば私が誰を夫にしようが問題はない」

「問題あるわ！」

「ハッハッハッ。もう貴様には逃げ場はないぞ。なにせ………天皇家を振って日本に居れるわけが無いのだからな！」

「いや待て、それはおかしい」

「熱烈プロポーズだ！有り難く思え！」

「脅迫がプロポーズとは新しい」

「ハッハッハッ！」

「後学の為に聞きたいんだが、俺の何が気に入ったんだ？」

「眼、態度、さらに頭の回転。特にその野生味がいい」

「僕には理解出来ません」

「貴様は謂わばスルメだ。噛み続けねば、知り続けねば好きが分らん」

「おっさん臭い中坊も居たもんだな、おい。中坊でスルメを例えに出すか？」

「なら煮干」

「健康的だな」

「だったら漬物」

「摘みから離れろ」

「ええい！なら奮発して柿ピーならどうだ！」

「お前、どんだけおっさん臭いんだよ！それと柿ピーと俺にどんな共通点があんだよ！」

これが、一真といずるの出逢いである。

私達の専用機開発もいよいよをもつて佳境に入った今日この頃。
思いもよらぬ問題が起こった。

システムエラーが発生したのだ。それも、駆動系を始めとした制御システム全てに。

これには開発に携わる全ての人間が慌てふためいた。急造とはいえ、我々は石橋を叩くように製作と確認を行ったり来たりしていたのだ。そんな重大なエラーが起こるわけが無い。

最初、開発陣はこの問題に対して使用していた基盤がいけないのだと基盤を入れ替えもした。だが、エラーは納まるどころか新たな基盤さえ侵してI S自体を使用不能にしてしまった。

システムを全てバックアップと代えても、見つけたバグを逐一駆除しても、私のI Sが復旧することはなかった。

誰が言うでもなく、我々は理解した。

篠ノ之束

あの天才がI Sのコアに干渉しているのだと。

それしか考えられない。犀川先輩が呼んでくれた技術者は超一流だ。私のような無才な者だってこの短時間でI Sを二機も造り上げた方々が間違いない天才というくらい分かる。それでも、普通の天才が十数人集めても勝てないくらいアノ人は天才で天災だった。

アノ人が消えて、私達はバラバラになった。まともにお父さん達に会わせてもらえない中、やっと静かになってきたのに。

ああ、私はアノ人の手の中なのだ。

それを思うと全てがどうでもよくなるような虚脱感が襲った。

簪は自分のISよりも先に私のISを優先するよう頼み込んだ。
そんなことをしても無駄だと言う私に、「そんなことない！」と言って上学年の先輩達に頭を下げてまで協力を煽ってくれた。

無駄だ。

いくら数を集めても、アノ人には適わない。

無駄なんだ。

私は、アノ人の愛玩人形だ。

無駄だったのだ。

たとえ世界最高のチームでもアノ人は笑いながら攻略する。

全て、全て、無駄でしかない。

だから、私のことは放っておいてくれ。

ガレージに居るとピリピリとした空気が酷く居心地が悪かった。
誰かと眼が合う度に「お前のせいで」と言われた気がした。

私は、やはり1人になるべきなのかもしれない。

誰もいない部屋で箒は膝を抱え、振り回されるしかない自分を諦めようとしていた。そうしなければ何か壊れてしまいそうな気がして恐かったのだ。

「箒」

私を励ますために声をかけるな。

私は、そんな風にされたくない。

また、アノ人のせいで誰かに迷惑をかけてしまう。
もう、構わないでくれ。

箒の横に座る一夏は何を言えいいのか考えた。足りない頭で必死に、必死に考えた。もしかしたら励まさないで放って置いた方が箒のためでは、と考えもしたがそれは捨てた。一夏は今の箒を守りたかった。

「大丈夫だ。もうすぐ、もうすぐよくなるって」

我ながら安易な言葉だと一夏は思う。もうすぐなんて曖昧な言葉で事態が解決するわけもないと知りながらも、彼にはそう言うしかなかった。

「・・・・・・・・」

「お前だって頑張ったじゃないか。キツイトレーニングもこなして、厳しい要望にも必死に応えて、夜遅くまで付き合った。なら、その苦勞が報われてもいいはずだ」

「・・・・・・・・」

「俺は知ってるぜ。お前が怒鳴られる度に泣きそうになりながら必死になってたの・・・・・・・・こんな所で諦めるには勿体ないだろ」

この1週間、箒はがむしゃらに頑張った。誰かに言われるわけもなく走り込みをし、また怪我をしても痛みを我慢しながら耐えて走った。辛い事も、苦しい事もあった。それでも箒は耐えたんだ。きつと、良い事だってあるはずだ。

「分かった風な口を利くな」

低い怒鳴り声に体が竦んだ。

振り返れば顔を歪める箒がいた。

「お前に何が分かる！ やつと、やつと皆と肩を並べられると喜んだのだぞ！ やつと完成すると前の日に街で騒いだのだぞ！ 誰もが笑っていた。子供みたいに笑っていたんだ！

それが、今日になったらまるで手の平を返したようにドン底に落とされた！

アノ人のせいで！

何故だ・・・何故、私はアノ人の妹なのだ・・・何故、私ばかり」

涙で顔をグシャグシャにする箒はただ見つめるしかない一夏から逃げるようにその場を去った。

伸ばした手は、何も掴めないまま落ちる。

一夏から逃げた箒は誰も居ない場所へ、光のない場所へ、独りになれる場所へと点々と走り続けていた。気付いたときには、そこは誰もいない森林公園の中であった。

走り続けたせいで座りたくなつた箒はベンチに腰掛けると自然と膝を抱える。

疲れた。

アノ人に振り回されるのも、希望を持つのも。八つ当たりする力さえない。

ポタポタと零れた涙で膝が濡れる。拭っても、拭っても絶えない涙に苛立つが声を上げるのさえ億劫だった。

裏切ってしまった。みんなを裏切ってしまった。

アレだけ心待ちにしていたのに、私が関わっただけで全て台無しになってしまった。

泣き続ける。泣けば何か変わるわけじゃないが、泣かなければやっていられなかった。

泣いて、

呻いて、

諦めて、

泣いて、

嘆いた頃だろうか。ポケットにしまっていた携帯が鳴りだした。初めて聞く着信音だった。

いったい誰だと思ったが、今の彼女には誰かと話す気力もなかった。今は静かに居たい。それだけだ。

しかし、彼女にはそんな些細な事も許してはもらえなかった。

『もすもすひなもすっ！はっいっ、みんなのアイドル篠ノ之束だよっん☆』

突然聞こえてきた声。今、おそらく人生でも1、2を争うまでもなく聞きたくない声がポケットから大音量で漏れだした。

『やあやあやあ！元気にしてるかい箒ちゃん？』

（何故……！！）

『酷いよ、寂しいよ、悲しいよ。兎は寂しさで死ねるんだよ！』

（どこまで私を馬鹿にする！）

『それより酷いよ箒ちゃん！あんな何処の馬の骨、いや負け組、いややプラナリアみたいな輩にISを頼むなんて！』

（プラ、ナリアだと?!）

この人は、この人は！

束の口から出る心無い言葉に箒は唇を噛み切るほどに怒りを顕す。開発に関わった人間は既に友人だ。歳なんて関係ない。彼らは箒を友人と呼び、仲間と言ってくれた。

こんな、私を、だ。

そんな彼らを束は無価値な存在と言いつつ。

それがどれだけ彼女にとって欠け替え無いか知りもせず。

『ISなら私に頼んだものがあるじゃないか！

出来てる、出来ちゃったよ、出来ましたよ！世界最高、史上初！
白に対する紅。そして共に立つ紅！その名も紅椿！』

「え・・・・・・・・ああ」

箒は束の一言に強い衝撃を受けた。

それは何故か？

何故だと思う？

今、作成されているISが玩具に見えるISが手に入るから？

違う。

周りよりも一歩リード出来ると分かったから？

それも違う。

一夏と肩を並べられると分かったから？

全然、違う。検討違いにも程はあるだろう。

答えは、

“ 自 分 の せ い だ か ら ”

私がアノ人に専用機を強請ったせいで皆に迷惑をかけてしまった。
私が、先輩を先に頼れば良かったのに、嫌いなアノ人を頼ったせいで、自分の身勝手さで皆を裏切ってしまった。

ストンと膝から力が抜ける。携帯は耳から離れ、力なく垂れた手から落ちてしまう。

「すぐに持っていてあげるよ。なにせ、箒ちゃんのお願いだからね♪」

落ちた携帯のスピーカーから響く声はもう彼女には響かなかった。
今の彼女は自責するだけで手一杯だからだ。

「ちが、違うんです！もう必要ありません！
だから、だからこれ以上はやめてください！私が悪かったのですか
ら、皆に迷惑は——」

切れた電話にも気付かず箸は携帯に必死に叫ぶ。しかし、もう全
てが遅かった。何もかも手遅れだった。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ」

頭を抱えだした箸は訳も分からなくなる頭を掻きながら言い
聞かせる。

嘘だ。

こんなの嘘だ。

間違いだ。

そう叫びながら誰かに助けを求める。しかし、公園には自分一人
しかない。助けなんて、こない。

「違うんです。違うんです。違うんです。違うんです！」

クラクラしだす頭を振り回し、必死に叫ぶ。違うのだと必死に叫
ぶ。

「私は！そんなつもりは！無かった！私は！ただ！みんなと！違うんです！違うんです！」

誰かに必死に謝るように箒は頭を固いアスファルトへ打ち付ける。皮が剥け、血が流れても、箒は止めようとしなかった。

違うと否定し、

違うと赦しを懇い、

違うと悲鳴を上げる。

ガンガンと打ち付けた額は血だらけで、野晒しにされていたアスファルトは黄土色の淡さを気味悪い紅に汚されている。このままではアスファルトの色さえ分からなくなるのではと思えるほどに紅い汚れは濃くなっていく。

「違う、違う、違う」

「何やってんだ箒！」

誰かが羽交い締めにしてくる。

誰だ。

私の邪魔をする奴は誰だ。

私を助けに来てくれた人は誰だ。

「何してんだよ馬鹿！」

「一、夏・・・」

心配そうに見つめてくる一夏を見た箒は救われたような気がした。しかし、一夏の眼に映る自分を見つけたとき、その気持ちも反転した。

ボサボサに乱れた髪に血だらけの顔。血走った眼は病的だ。闇夜も合わせるとまるで絵本で見た山婆やまんばのようだ。

あまりにも自分に相応しい。

箒はそう思ってしまった。思ってしまった瞬間、自分は一夏に救われる価値もないと頭を掻き毟って暴れだした。

「離せ、離せ離せ離せ！私を離してくれ！」

「無理に決まってるだろ馬鹿！」

「私にそんな権利無い！私は皆を裏切った！だから放つといってくれ！」

「放っておけるわけないだろ！俺がお前を放っておけるわけないだろ！」

「何も知らないくせに！私がどれだけ薄汚れた尻軽か知らないくせに！」

「暴れるなっの！」

確かに知らないさ。箒は何かと強がって話さないじゃないか！誰にも話さないし、相談しない。自分で決めて自分だけで背負い込んで、それで貫けばいいなんて思ってるじゃないか！

頼れよ！頼ってくれよ！俺にもお前が背負い込んでるものを持たせてくれよ。守らせてくれよ！」

暴れる。

ただ、暴れる。

まるで一夏の言葉に抗うように必死に暴れる。止まってしまうばそんな甘い毒に犯されてしまう。暴れなければ毒が瞬く間に体を回る。

止めてくれ！

こんな薄汚れた私をダメにしないでくれ！

「箒！」

暖かい何かが背中から包み込んできた。

優しい匂いと熱いくらいに暖かな温もりに体が硬直した。

「箒、大丈夫だ。俺はお前を見捨てない。守る」

「私は……」

縋るように一夏の腕を掴み、振り向こうした。出来ればこのまま
でと言おうとした。

甘えていいのだろうか。

この優しさを求めてもいいのだろうか。

そう考えた。

だけど、

私は先輩を見つけてしまった。

死んだような眼で見つめる、先輩を見つけてしまった。

いずるから逃げ帰っていた道中、偶然一夏を見つけた。人垣を掻き分け、必死に走りながら何かを探す彼を最初は無視しようと考えていた。一夏とは親しい間柄らしいが、正直どうでもよかった。アイツはあくまで同級生なのだ。

だが、突然掛かった電話により一夏を拾わざるを得なくなった。箒が消えた。

IS完成を間近に篠ノ之束が関わった責任を感じたためである。
今の彼女は精神的に危うい。

そう報告を受けた彼は関係ないと考えた。しかし、無視すれば責任の一端を担うことになる。

誰が死んでも、結局いつか来る悲しみが早まるだけだ。

だからどうでもいい。

だが・・・

アイツらみたいになるのは御免だ。

一真は責任を果たすために仕方なく進行方向を変えて一夏を拾った。もし、電話がなければ一真はそのまま帰ったに違いない。帰って、ラウラに頼まれて探したに違いない。

H・1の探索もあり、篠ノ之を見つけるのに時間はあまりかからなかった。さらにはバイクでの移動が事の悪化を防いだ。

だが、

「ああああああああああアアアアアアアッツッ！」

「箒！」

事態は悪化した。間に合ったのに悪化してしまった。

発狂した箒を取り押さえる一夏は彼女のあまりの変わり様にそれ以外は何も出来なかった。

暴れ、殴り、また暴れる箒を押さえる彼を一真は冷めた眼で見つめていた。

人の苦労も知らないで。

箒が狂おうが、一夏が怪我しようが。生きてさえいればどうにでもなる。だから、今は動きたくない。疲れてるから動きたくない。

乗ってきたバイクに腰掛け、タバコに火を点ける。目の前では未だに発狂した箒を取り押さえる一夏がいるのにだ。

一真はもしこんな場面を第三者が見たらどうなるのかと考えた。強姦現場か、誘拐現場か、虐めの現場あたりだろうと考えると途端に辺りが気になりだした。運良く周りには人の影はなかった。

「か、一真も力を貸してくれ！」

「いいだろ、別に。見るからに発狂してるからもうすぐ力尽きる」

「いいから！」

食い下がる一夏に何かを言おうとしたが、止めた。どうせ聞かな

言葉だ。言うだけ体力の無駄という物だ。しかし、頼まれたのなら断るのも悪い気がする。

だから、一真は箒を止めるために彼女を掴みあげた。そして、

「おい」

「は、離して」

「頭冷やせ」

殴り飛ばした。

固めた拳で殴られた箒は一夏の拘束から解放された代わりに殴られたベクトルを殺すように地面を転がる。

止まった箒に歩み寄った一真は彼女の髪を掴みあげると無理矢理目を合わせる。彼女の瞳は恐怖で揺れていた。涙で流れた血を滲ませ、カチカチと歯を鳴らす。それでも、眼からは狂気の色は消えていた。

「少しは落ち着いたか？」

「あ、あゝあ・・・」

「なんで現場を放ってここにいる？」

「ごめんなさい」

「なんでお前は逃げた」

「ごめんなさい」

「お前は何故裏切るような真似をした」

「私のせいで」

「そんなこと聞いてねえよ馬鹿」

また、殴る。

今度は優しく、子供を優しく叱るように。

「アレはお前のせいじゃない」

「違、私がいたから」

責任はお前にはない。そう言う一真に箒は全て背負い込もうとする。しかし、それに彼は首を振るだけであった。

「俺達が力足らずだからだ」

「違います！」

縫るように自らに非があると叫ぶ箒の頭を優しく撫でる。その手を剥がすと一気に立たせ、彼女につく埃を払ってやる。

「いいや、違わない。俺達はチームだ。スタンドプレイで個々に完成を目指すチームだ」

「違うんです！私が、私があんな頼みをしたから！」

「これは“俺達”の範囲だ。お前は悪くない」

「え・・・・・・・・・・？」

頭を撫でられ、戸惑う箒から視線を外す。

「一夏！」

「え、あ、はい」

「篠ノ之を連れてガレージに來い。一時間でだ」

「わ、分かりました」

ここから学園のガレージまで歩いてでも30分。走れば15分といった所だ。心の整理をするには十分だ。

「篠ノ之」

「・・・」

「後2日でお前のISを完成させてやる」

エンジンを唸らせる。

「こっからは俺“達”の仕事だ・・・」

同時に、一真の眼に灯が点く。細く、厳しく、ここに居ない天才を射殺さんばかりに。

「俺の願いにケチつけやがったな、篠ノ之束」

何かを残したいだけの願いさえ踏み躪るなら、その足を切り落とすとしても叶えてやる。

ガレージに着いた一真がまずした事、それは――

「帰ったぜヒッハー！」

ガレージのシャッターを突き破ることだった。

陰鬱とした空気を打ち壊す、自らのモチベーションを上げる為にやったのだが、一真の予想よりもガレージの中は静まっていた。葬儀所のようなだ。

唸り上げるエンジンと時折聞こえる電子音や小型モーターの駆動音だけが聞こえてくる。

誰もが突然現れた一真に眼を向けている。その眼は一樣に死んだようで、尊敬する斎藤でさえテーブルに倒れ付し、眼が死んでいた。

「全員、寝ろ！邪魔だ！正直、見てて辛い！」

もし、平時ならば誰もが噛み付いただろう。一真も声を大にせず、また心にも思わなかったに違い無い。

だが、敢えて言う。そうでもしなければこの研究者達は動こうとしないからだ。

一真はそんな現状の好転を願いながら主任2人を呼ぶ。

「斎藤さん、高山さん。2機はどこまで完成しました？」

「更識君のISは最終調整まで、篠ノ之君のISは………システムから全てダメになった」

高山と呼ばれて中年の技術者は疲れ切った目で自らのメモを読み上げる。その内容から察するにかなり無理なこともしたようだ。

「原因は？」

「分からない。ウイルスということだけは分かるのだが」

「ならウイルスさえ駆除すれば残すは最終調整だけなんですね？」

「しかし、ウイルスはISコアから拡散してい。ワクチンも効かない。きつと篠ノ之束が逐次ウイルスを送り付けているんだ。もう、無理だ」

頭を抱えながら社長にどう謝ればいいのか考える高山を無視してISを見る。

「それは俺達がします。まず、貴方達は仮眠だけでも取ってください。有沢社長には俺から期間延長を頼み込みます。責任も出来る限りは持ちます」

「だが君だけで何が」

「システムの復旧だけです。それ以外は流石に無理なので今だけは休んでください」

それである程度納得した斎藤は全てを任せると寝袋を取り出して蓑^ミになる。周りも実質的な主任が休んだことで1人、また1人と一真に引き継ぎをして部屋に這いずっていった。

灯りを消されたガレージに残ったのは一真と斎藤のみとなり、彼は常夜灯に照らされるISの下にまで歩く。

初期設定もされていない、空を知らないISを見る。個々人の妄想の集大成とも言えるISだ。もうすぐこのISに灯がくべられると思ったらワクワクしてくる。どんな風に飛ぶのか、どのような結果を見せてくれるのか、全てが楽しみだ。

「その為にも」

篠ノ之束は邪魔だ。

ISを展開した一真はすぐにH・1を呼び出す。

『これからウィルスの駆除をするが、正直俺はこっちは無知だ。お前に頼みたいんだが、大丈夫か？』

『問題ありません。私は貴方のパートナーです。しかし、ある程度の行動範囲は決めてください。遣り過ぎても問題なんでしょう？』

『ウィルスの駆除。また恒久対策としてISコアをネットから独立。その後に攻性防壁を張り、その前にラビリンスを形成。出口は多数で関係ない場所に作れ』

『しかし、それでは多数から侵入されることになりますが？』

『なら出口先はコピーデータにしよう。完全隔離はしておけ』

『了解。ISコアの解析も必要になりますが、よろしいですか？』

『……一応、相手側に侵入して枝はつけとくか。後はお前の好きにしろ』

目的と手段を決めた一真はH・1の邪魔にならぬよう、また最大限サポートするために機材を集めていく。

その一時間後。

誰も居ないガレージで一真は頭を抱えていた。

目の前にはH・1が済ませたであろう成果が簡潔に表記されたディスプレイがあり、彼はそれを睨み付けるように見つめていた。

「う・・・あつ」

ディスプレイの青い光に一真の顔が照らされる。この世全ての罪を背負ったかのような、周りの空気をマイナスへ引き摺り込むような、余命を知らされた末期患者のような絶望に汚された顔だ。

全行程終了――

ISコア――

“完全解析”終了――

そこに映し出される全てを理解なんて出来ない。難解な数式とプログラムで構成されたシステムは基礎と多少の応用しか理解してい

ない一真には難しく、読み解いた中身はよくあるクイズの虫食いを
理不尽なまでに酷くしたような物だった。

それでも全体を俯瞰できるまでに理解した時、一真は首筋に刃物
を当てられたような悪寒に襲われた。

おかしい。

H
2
O

間違いだ。

C

そんなわけではない。

N
H
3

おかしい。

C
a
H

誤解析だ。

P

非常識だ。

N
a
c
l

こんな、許されるわけない。

KNO₃

コイツは、なんだ？

S、HFO、Fe、Si・・・

なんでISコアにこんな存在がある？

未だに解明されていないブラックボックスの中身が、正体がコレだって？

そんな馬鹿な話があるか。

だってこれじゃ、まるで——

件その20 「錬金術師に弟子入りしてたらさあ大変」 (後書き)

「ガツガツガツ」

一夏

「・・・」

「もそもそもそ」

箒

「・・・」

「茶」

「ん(もそもそもそ)」

「え．．．？」
一夏

「もぎゅもぎゅもぎゅもぎゅ」
M

「え．．．？」
箒

「ガツガツガツズズウ」
オリジン

ライバル&主人公ズ 準備中・・・

オリジン

「しかし、狭い部屋だなおい」

M

「まるで貴様の部屋のようにだ」

オリジン

「いやあ、図体がデカいからな。小さい上に無駄のない省スペース
ちんちくりんが羨ましいぜ（ぷひー）」

M

「なんだとー！」

オリジン

「背が無い、胸無い、頭もないお前にはピッタリだ！（p g r）」

M

「ブチ撒けるぞかりん糖！」

オリジン

「喧しいぞリアルねんどろいどプチ」

ギャーギャーワーワー

一夏

「なに、これ？」

箒

「私に聞くな」

M

「ぐずっ、うう、うう・・・！（ボロボロ）」

オリジン

「喧嘩売って負けるとか（ぷすす）」

一夏

「とりあえず喧嘩は止めろ。相手は女の子だぞ。」

大丈夫か、君（イケメンA A）」

M

「私に触れるな低能」

一夏

「」

M

「貴様などに話し掛けられたくも無い。そのコネモップにもだ」

箒

「」

オリジン

「ぎゃっはははは、ぎゃは、ぎゃははははははっ（バンバンッ）」

一夏

「え、なにこの方々？いきなり喧嘩売って来たぞ？」

箒

「久方ぶりにちょっとキレてしまったな・・・屋上に来い」

オリジン

「やべえ、腹が、腹が！」

M

「早く進めろ。その程度も出来ないのか？」

一夏&箒

「(# ^ ω ^)」

オリジン

「さあーて、笑ったし進めるかあ。

まずは何から聞きたい？」

箒

「何様だ」

オリジン

「俺様だ」

一夏

「なんで居んだよ？」

オリジン

「一真の代理だからだスケコマシ」

一夏&箒

(冷静になれ、C o o lにだ)

オリジン

「ないなら勝手にダラけるぞ」

一夏

「……………そういや、なんでお前と一真は夢の中とはいえ会え

「たんだ？チャットルームってなんだよ？」

オリジン

「なんでもいいだろ別に」

一夏

「一発目で何言ってるんだよ?!」

オリジン

「あー、詳細は省く。名称も今は暫定的にチャットルームだ。チャットルームの目的はハッキリ言って俺にも分かん。ただ、何故か入れて、そこでは好きに過ごせる。ちなみに初対面と会うことも出来るし、母国語が違って相手も伝えたいことは勝手に変換されて伝わる」

箒

「すごいな」

オリジン

「疲れるだけだ。特に腹の探り合いとかマジでダルい場所だぞ。相手の考え読みながらガードするって攻撃と防御を同時にしてるみたいだからな」

M

「そういえば条件とはなんだ？我々の共通点とか・・・うへえ」

オリジン

「やったねMちゃん。俺と同じだ」

M

「こんなのと？ いや、冗談だろ？」

一夏

「4人の共通点ってあるか？」

箒

「先輩とオリジン、ラウラとMに分けるなら出来るが4人となるとな」

オリジン

「着眼点はそれでいいぞ。

ちなみに、チャットルームは好きに人数や広さ、パスワードを設定できる。文字通りチャットルームだな」

ライバル&主人公ズ 食事中・・・

箒

「ずずう（緑茶）」

一夏

「ずずう（ほうじ茶）」

M

「ずずう（麦茶）」

オリジン

「ずずう（蕎麦）」

一夏

「おい」

オリジン

「ずず、ずずずそぞぞぞ」

箒

「まだ食べるのか」

M

「コイツ、食い物が目の前にあればいつまでも食うぞ」

一夏

「・・・・・・・・・・そういや、Mと俺って何か関係ある——」

M

「あ？」

一夏

「なんだよ？」

M

「馴々しいぞ凡骨」

一夏

「凡骨ってお前、目上だぞ俺」

M

「能力では私の方があゑ。なにせ、貴様らで一番強い作り物より強いのだからな。それに見た目的には同じか、私のが上だ（見た目17歳前後）」

オリジン

「めぎよめぎよ（見た目24歳）」

一夏&箒

「・・・（15、6歳）」

箒

「作り物とはラウラのことか？」

M

「それ以外に誰がいる？」

オリジン

「話の腰を折るな。いや、今だと首か？
んで、ウチのクソガキとお前の関係か・・・」

一夏

「ああ。Mって俺のいもう——」

M

「モップ。バケツをくれ。吐く」

一夏

「なにそれ酷くね？」

オリジン

「クソガキが「お兄ちゃん☆」か・・・新たな萌豚が産まれるな」

M

「ヤバイ、ナノマシンが過剰に反応し始めた（ぺかー）」

一夏&箒

「うお、眩し」

オリジン

「無闇に光るなクソガキ。テメエは壊れた蛍光灯かパトランプですかあ？」

M

「ナノマシンに言え」

オリジン

「ナノマシンにさえ拒否られるダメなバナージさん（パネエ）」

一夏

「煩い」

オリジン

「まあ、関係はあるだろ。オレと一真みたいな関係がな」

ライバル&主人公ズ 休憩中・・・

セシリア

「来ましたわ」

シャルル

「えっと、初めまして」

M

「ん（お茶どうぞ）」

オリジン

「よっす」

セシリア&シャルル

「どうも（ペコリ）」

オリジン

「ちなみにMちゃんはドMなんですか？（裏声）」

M

「ああ?!」

オリジン

「はい。MのMはマドカのMでなくマゾのMです。毎夜毎夜尻を振りながら誘惑しに来るから叩いてますが、正直参ってます」

M

「ブ・チ・コ・ロ・ス」

オリジン

「懲りないなWWWドMちゃんWWWWWWW」

ギャーギャーワーワー

一夏

「仲良いな本当」

箒

「先輩とラウラとは違った仲の良さだな」

シャルル

「」

セシリア

「あの、ISで喧嘩してますよ?」

一夏

「――(敢えて無視

そういや、今回は天皇が出て来たな。凄い子だったけど」

セシリア

「それは聞きたいですわ」

オリジン

「お前らさー、菊タブーも知らないの?そこはスルーしろよ」

一夏

「え?菊?」

シャルル

「タブー?」

オリジン

「天皇の家紋が菊なんだよ。んで、昔から天皇に関するミスや侮蔑はかなり叩かれるんだ。中にはミス1つで刷った雑誌全てを回収した会社もあったくらいだ。」

つまり、メディアにとって天皇家は難しい話なんだよ」

箒

「こ、怖いですね」

オリジン

「愛されてる証拠だろ。今の奴らはなんか軽んじてるけどな。後はとぼしめてる似非右翼か」

一夏

「なんでだよ？」

オリジン

「うわー、本当にうわー。お前って本当に日本人か？もしかして天皇家に税金かけるなどか言う白痴ですか？」

一夏

「なんだろう、涙出てきた」

箒

「ちなみにどう凄いんですか？」

オリジン

「まず、天皇家の凄いのは血の濃さだ。天皇家は世界で最古の血が濃く流れている。なにせ天皇家は数千年前から続いている。世界最古の王族とも言えるな。」

同時に、天皇家は日本を語るには切っても切れない家系だ。なにせ天皇家は日本と同時に存在し続けたからだ」

M

「日本が？そんなに凄いのか？」

セシリア

「確かに。極東の島国ではありませんか」

シャルル

「だけど日本は良い国だよ。いつも微笑んでるから親しみやすいし」

オリジン

「お前ら、日本の歴史は3000年も続いてんだぞ。しかも1つの国、文化としてここまで続いてるなんざ、とんでもない奇跡だ。わかるか？ 周りは何度も国が消えて、新たな国に成り代わっても日本だけは変わらず在り続けた。」

確かに世界四大文明に比べたら霞むが、今の今まで脈々と続いた歴史は世界に誇っている。その日本の血もまた純粋な日本人として見るなら誇っても恥ずかしくないくらいだ」

一夏

「え、嘘」

箒

「私の血がそこまでとは」

M

「だがそれだけだ」

オリジン

「ちなみに、天皇って世界でどれくらい偉いと思う？」

一夏

「えっと、アメリカ大統領よりも下？」

箒

「私は少し分かりません。日本があまり強い国家ではありませんし」

セシリア

「ローマの法王、イギリスの女王よりは確実に下ですわ」

シャルル

「確かに日本の天皇といっても凄いとは思えないや」

オリジン

「世界で二番目に偉い」

一同

「」

オリジン

「ローマ法王の次に偉い。イギリスの女王も上座は譲るし、ローマ法王も認めてる。アメリカ大統領も来たら迎えに行くレベルの超々VIPだ」

一同

「・・・・・・・・」

オリジン

「そんな方々に税金は無駄とか、ギャハハハハ！笑えるよな！世界で最高級の歴史ある家系をテメエら有象無象の延長と同じにすんだからな！

しかも、天皇家に産まれた瞬間全て国に尽くすから自由もないのに必要ないとかいう奴って見てて笑えんよギャハハハハ、ギャハ、ギャハハハハ！」

ライバル&主人公ズ 抗議中・・・

セシリア

「初めて一真さんが誰かに手を上げましたね」

シャルル

「信じられない」

オリジン

「なんか勘違いしてるようだが、アイツは基本的に他にはドライだぞ。特に不利益には」

一夏

「他人って、友達だろ」

オリジン

「ギャハ、それ本気か？」

アイツは恩義は感じてても友愛なんて早々持たない人種だぞ」

箒

「どういう意味ですか？」

オリジン

「アイツ、他人に興味持たない人間だから」

一夏

「なに訳分かんないこと言ってるんだよ」

オリジン

「人間を有象無象としか見てないんだよ。ちょうど草花と一緒にだな。一々足下に生えた草花を気にする奴なんかいるか？綺麗な花や珍しい草、薬草なんかでもいいぜ。とにかくそれを一々見ながら歩くか？」

箒

「なら先輩はその草花に感情を表すとても？」

オリジン

「足に絡まる。服に種を付ける。そういった鬱陶しさと同じだ」

一同

「・・・」

オリジン

「そろそろ本格的にアイツの本性が出て来るぜ」

ライバル&主人公ズ 相談中・・・

一夏

「外伝ってどんな話になるんだ？まず世界観から違い過ぎるぞ？」

セシリア

「ストーリーも難しいですわ。生き残ると言っても、それは目的を果たす手段でしかありませんもの」

箒

「どういった風に纏めるかも難しいな」

オリジン

「お前はヤンデレに相応しい武器が与えられるらしいぜ」

シャルル

「僕はヤンデレじゃない！」

オリジン

「本編でお前が『お兄ちゃん退いて！そいつ殺せない！』って言うと思うと今からギャハ、腹がククク」

シャルル

「その前に貴方を殺すよ？」

オリジン

「やってみろよ尻軽。殺す前に弄り倒してやんよ」

M

「手伝ってやる三下」

シャルル

「一緒に奴を殺そう！」

M

「勿論！」

ギャーギャーワーワー

一夏

「・・・・・・・・」

箒

「外伝では話がオリジナルになるのだろうか？」

シャルル

「闇の眷属程度が私に刃向かうというの？ 闇の女王であるこの私に？」

オリジン

「闇の女王（笑）」

だったらもうちょい色気付けろよチンチクリン。アニメと原作じゃ胸のデカさ段違いだぜwww」

シャルル

「コロス！」

セシリア

「分かりません。何より一真さんが別行動となるとかなり厳しいか

「もしませんわ」

箒

「確かに。あの人はアレで場をまとめてくれるからな」

M

「アンタは黙って私に尽くせばいいのよ！」

オリジン

「アニメに出る可能性もないモブがよく言うwww」

M

「お前なんか存在しないだろうが！」

オリジン

「原作に出たらどっかの空気がさらに空気になるだろwww」

一夏

「俺も混ぜろ！」

箒

「……とにかく、先輩の行動が大事だな」

セシリア

「ですが、外伝であの方が真面目にシリアスにするとは思えません」

オリジン

「弱すぎ(pgr)」

3人

「ちくせう（ボロ）」

ライバル&主人公ズ 休憩中・・・

オリジン

「おら後書きだおら」

M

「まずは首輪付きからの感想だ。

そういえば箒は電池か…そして空気…

電池で空気といえばアリオス

アリオスはGN粒子、GN粒子は緑。つまりコジマ粒子！

汚染者が増えるよ！やったね、一真くん！

豆知識…AMIDAは唐揚げにするとうまい

っは、所詮最新世代の現存最強機を持っても中身が中身ならな（バリバリ）」

オリジン

「アリオスも一応現存MSより強いはずんだけど……………」（バリバリ）」

箒

「世界の悪意が見えるようだ」

M

「しかし、展開装甲っていうのは何なの？ アニメしか、SSしか見ない人間もいるから説明をしてくれ」

一夏

「ああ、展開装甲ってのは——」

M

「貴様には聞いていない！（キシャー）」

一夏

「（。・ω・。）」

オリジン

「展開装甲の前に第四世代型ISの説明な。

第四世代はどのような状況下でも対応したいというコンセプトから構想された期待だ。パッケージや追加武装ってのガレージが必要だ。だけど戦場では一分一秒が惜しいくらいに状況が変わりまくる。そこで考え付いたのが展開装甲、つまり変形機構だ。分かりやすいだろ？（バリバリ）」

一夏

「変形、確かに変形か」

オリジン

「雪片二型なら物理攻撃のみ通常形態、零落白夜を展開した物・E攻撃の可能な可変形態だ」

M

「もう少し簡単に頼む」

オリジン

「分離・合体しなくてもチェンジ出来るゲッターみたいなISを展開装甲を持った第四世代っていう」

M&一夏

「納得」

箒

「私は、一夏のために」

オリジン

「どうみても自分のためだな」

ライバル&主人公ズ お茶会中・・・

オリジン

「えー、次はー、森羅からー
更新が遅かった事。」

(圭) <遅かったじゃないか
感想書きます。森羅万象改め、森羅です。

日常がほのぼのだっ！ 凄く良いほのぼのだっ！！。

前話がヤンデたから、凄く癒されました。

『W』出ましたね。一体誰が乗っているのか？

今回のH-1はっちゃけ過ぎWWW 良いぞ、もっと壊れろ(笑

今回は笑いが絶えない話でした。

PS

野生のAMIDAと養殖のAMIDA。どっちが旨いだろうか？

っということで準備しました。AMIDAの生け作りです」

一夏

「天然って、こいつ生物兵器だろ？」

オリジン

「一真がデッドスペースを下見に行った土産と持ってきた」

一夏

（これを、食えと？）

箒

（うぐっ、まだ、動いて）

M

「もきゅもきゅ」

一夏

「躊躇うことなく・・・」

箒

「食っただと・・・」

M

「養殖のが塩気が強くないか？」

オリジン

「あ、銀塩AMIDAだったわ。こっちが捌いたばかりのAMIDAだ」

M

「では一口・・・」

ライバル&主人公ズ 食べ比べ中・・・

オリジン

「結果、養殖のが好みでした」

M

「天然物は暗黒物質が入っているのか好みに分かれる味だった。決して不味くはない。むしろ旨いが、養殖の方が初心者には食べやすいな」

シャルル

「一夏達は気持ち悪いから休むって。」

「死色の真紅」・・・彼女なら生身でＩＳケンカ売れそうな気がするの
は気のせいかな・・・？。

DEAD SPACEがだめならresident evilの世界はどうでしょう？

2001

毎回感想ありがとう♪コメント楽しみにしてますよ♪
それと如月よりデュノア社製AMIDA亜種は如何です？」

「いや、我が社のAMIDAだこそ至高のAMIDAだ！」

「ふんっ、レパトリリーのない如月よりデュノア社の多種多様な A
MIDAこそ究極だよ」

「ゲイブン相手に貞操守れるのかね？」

「無理だろ。奴ら、性交が絡むとランク以上の実力を発揮するからな」

「『ピギー』」

ビッグAMIDA

『ビギイイイ』

オリジン

「親か何かと勘違いしてるのかね？」

M

「死色の真紅とは人類最強の請負人だったな」

オリジン

「めだかボックス見ろよ。あれが答えだろ。」

ジャンプ的に見ると絶対負けないヒーローがいて、ヒーローに勝てるのは妻か恋人だろ。それと同じだ。つまり死色の真紅を惚れさせない限り勝てないな」

M

「この作品だと凡骨がそうなるのか？」

オリジン

「ダークヒーローは負けて当然な流れがあるからな。そして、ライバルは主人公以外に負けてはならない」

オリジン

「細けえこたぁいいんだよ！」

M

「とうとう壊れたか」

オリジン

「とうとう”ってなんだよ、”とうとう”って」

一夏

「えっと、次ははろはろさんからの感想だ。」

なんか簪が違う……。

原作読んでないので実際の所はわからないんだけど、他の二次で見る簪とは全然似てないね。

他のはもつと気弱で小動物系のいたいけな女の子だったのに。まるで楯無がメガネかけた変装かと思っただくらい。

簪がハキハキ喋りすぎて違和感満載でした。もっとどもれよ！

あと誤字あるよね。本文中の所々に。ふと油断した時に出てくるから、つい「これは作者の罠だ！」と思って電源ボタン連打（撤退）してしまいそうになる。

本文中以外にもある……よね？ 小説紹介文に「（憑依や天性じゃないよ）」ってあるけど……主人公の非才さを皮肉ったものじゃないんだよね？……違うと言って！！

主人公の今後の幸福を祈って……、うん、無駄だね。ごめんごめん。

一真、可哀想な奴」

M

「七割は貴様らのせいだな」

オリジン

「誤字修正って面倒なんだよな……触ると本文修正したくなるし。まあ、おいおいな」

シャルル

「お兄ちゃんって非才かな？」

オリジン

「作る以外は非才だろ。努力に努力してやっと代表候補並だ。間違っても主人公気質な才質溢れてはいねえな。幸運？女の裸見られた時点で幸運じゃねえか。世の中には見たくても見れない奴だって居るんだぜ」

一夏

「一真に安息の地はあるのだろうか」

M

「貴様さえ死ねば私も一真もハッピーだ」

一夏

「ねえ、どうしてそんなに俺嫌うの？恨みでもあるの？」

M

「話し掛けるな！（キシヤー）」

一夏

「めんどくさっ！お前、本当にめんどくさ！」

ライバル&主人公ズ 進路相談中・・・

オリジン

「一真から手紙来たぞー。

『俺はSだ』

だってさ。そりゃ犀川ならSだわな」

M

「ボケた事を。ではイルアからの感想だ。
更新お疲れ様です。

いや、さんざんな対応で謝罪も反省も信じているような態度をみせない一夏達が友達のつもりだったことに驚き！

恐ろしいってとことん理不尽な事してて、よく言えたものとおもいます。ディノア父より理不尽なことしてるくせに人のこと言えんし。シャルロット自身もそうだし。

ホント、主人公がマゾです！！

まあ、主人公は狂人、精神異常者ですから仕方ないか
ふむ、蛙の子は蛙という奴だな」

オリジン

「いい度胸だな、お前」

一夏

「理不尽なのか、俺？」

シャルル

「僕に聞かないで」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

未解決事件 「明けましておめでとう」(前書き)

明けましておめでとうございます。

去年は様々な厄に見舞われましたが、新年はそれを払拭するためにも笑顔を絶やさぬようお過ごし下さい。

新年会、同窓会、飲み会での飲み過ぎにはくれぐれも注意して下さい。

未解決事件 「明けてましておめでとう」

12月31日。

大晦日。

「・・・・・・なあ」

「んだよ」

「なに、これ？」

「オレが知るか」

見慣れた自室と何処かの客室が半々に交わり合った部屋に2人の青年がいた。1人は現実逃避するように遠くを見上げ、1人は苛立つように遠くを見上げる。

「お前のが詳しいだろ」

「オレだって全知じゃねえ」

「頭痛え」

2人は揃って頭を抱える。双子のように瓜二つの容姿を持つ2人が対面して同じ動作をする。まるで合わせ鏡のような光景だ。

そして、2人の頭を痛める物。

それは、

第一回 君が初夢サンタだ!!!!

といった看板にだ。

一真は確かに自室で寝ていたはずだ。普通に寝て、普通に年を越すはずだった。周りで一夏達が年越しパーティーをしていようが、寝た事にはかわりない。

それはオリジンも同じで、亡国企業の偽装クルーザーに設けられた自室ではなく、家族のいる屋敷で寝ていた。周りが年越しパーティーをしていたのは同じだが、間違ってもチャットルームにアクセスもしなければ一真を呼んだ覚えもない。

「なに、これ？」

「嫌がらせだろ」

「誰のだよ」

「知るか」

実りの会話をしていた2人は一度溜息をつく。

「出れないんだよね？」

「自由にアクセス出来ないお前がいる時点で無理だと理解しろ」

「「はあ」」

「とにかく、何かないのか？」

そういつて立ち上がろうとしたときだ。突然看板が消え、代わりに立体ディスプレイが現れた。

『ようこそ、リンクス諸君。君達をここに呼んだのは他でもない。君達に依頼があるからだ』

「面倒だからパス」

「同じく」

「「だから帰せボケ」」

『残念ながら、君達に拒否権はない』

「この男と女の合成音・・・H・1か」

「おいこらB・1！どういうつもりだゴラァ！」

『私はH・1という淑女A Iでも、B・1という紳士A Iでもない。
そうだな愛の天使、セラフだ』

「淑女（笑）」

「紳士（笑）」

「『燭天使（笑）』」

『『神の怒り』』

「『あばb b b b』」

『逆らうとこうなる。理解したなら依頼内容を聞き、黙って遂行することだ』

「」

「」

『依頼内容は簡単だ。君達の身近にいる良い子に素敵な初夢とプレゼントを渡すだけ……君達には簡単すぎる依頼だな』

「ラウラ以外は迷惑な奴しかいないんだが」

「こっちは家のガキ共くらいか」

「え、お前子持ちかよ?!」

「羨ましいか？」

「うん」

「結婚すりゃいいだろ」

「結婚したらソイツとガキに迷惑かかるからさ」

「ああ、お前ってモルモットだもんな」

「子供欲しい」

「泣くなよ、みつともない・・・・・・・・互いに平和になったら紹介くらいしてやるから、な？」

「ありがとう」

『『話を聞け似た者マスター』』

「「今マスタあばb b b b」」

『全く、これだからマスターは』

『君も苦勞するな』

『貴方ほどではないわ』

（A Iの離反）

（オー人事オー人事）

『さて、具体的に依頼対象を説明しよう』

一真の対象者リスト

一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラ、花子、秋葉、簪、
麻耶、千冬

「多っ！多過ぎんだろコレ?!」

「ギャハハハハハ！流石は一真！人脈が広い！」

『次はオリジン』

オリジンの対象者リスト

アメリカ
M、———（ドイツ）、———（日本）、———（オーストリ
ア）、———（ブラジル）、———（ロシア）

「」

「ハハハハハ！ テメエなんか世界旅行じゃねえか！ まさにサンタだ
な、おい！」

「他支部の、奴らだと？！」

だ、だが待て！ 初夢サンタなら夢の中、距離なんて——」

『ちなみに移動は、

「「／（＞Ｏ＞）／」

物理世界で行ってもらいます』

「ちょーつと待て！つまり何か、俺に千冬の部屋に入り込めってか？！」

「リアルに世界回るとかどんだけだゴラァ！」

『だから』

『拒否権はないと』

『『言っている』』

「「あばb b b b b」」

『とにかく君達にはそのコミュ障げふんげふん、周りとの協調性を強めてもらう』

『頑張って』

プレゼント for 箒

Side - 一真

「・・・」

『まずは篠ノ之箒からですね』

「勢いで来たけどさ、夢に入るって無理じゃね？」

『そのためのナインボール、私です』

「あれ？ ISのAI、あれ？ ISって量子周波で人間は電気信号、あれええええええ？！」

『外伝の小ネタにガチレスしない』

「やめろ、そういうの話が軽くなる」

扉を開ける。

室内は暗く、目を凝らしてやっとベッドの影が見えた。

（暗視ゴーグル付けるか）

万能7つ道具を呼び出した一真は解錠具をしまうとゴーグルを頭に付ける。緑色の視界に視界が白く焼けたが、しばらくすると視界が正常になった。

（よく見える）

（マスターが変態に）

（お前、最近本当に人間くさいな）

静音マットを静かに踏み締めながら箒へ近づく。侍娘と呼ばれるだけあり、彼女の気配の読みは凄まじい。どう凄まじいかというと半径15mまでならたとえ障害物があるうが、そこがパチンコ屋であろうが一夏がイベント回収をすれば乱入出来るくらいにはいい。もはやレーダーの域だ。

（よく寝てるな）

（隣の子は読書をしていますね）

（買収したから問題ない）

（デート一回とは・・・貴方は懲りない）

（たかが本買いに行くだけだろうが）

隣のベッドで本を読む少女をチラリと見る。彼女は本に集中しているのか此方が盗み見ていることにも気付かない。

『同居人は変人』という変わったタイトルだが、もしかしたら箒に関して悩んでいるのかもしれない。

（煩惱を殺すために素振りとか）

（煩惱を殺すために水浴び）

（煩惱を殺すために座禅）

（煩惱を殺すために居合い）

（（迷惑過ぎる））

彼女の不憫さに涙しながら目の前の少女、箒にナインボールの手を当てる。

（これでいいのか？）

はい。雷電、2を通して夢を覗き見ます。

（興奮しましたか？）

（お前、俺をどうして変態にしたいの？）

H、1の言葉に傷付きながら気を取り直して夢に入り込む。

「待て待てー」

「はははー、男なら捕まえてみろー」

「言ったなー」

どっかのアミューズメントパークで笑顔で追い駆けっこするバカ
ツプル。

「ほら、一夏、あーん」

「あ、あーん」

「おいしいか？」

「やっぱり箸の料理は最高だ！」

自室で自らの手料理を振る舞う箸と褒めちぎる一夏。

「なんで分かってくれない！なんで私の！」

「待ってくれ、箸！」

「来るな！一夏の、馬鹿！」

些細なことで喧嘩し、別れてしまう2人の道。

「箒・・・」

「なんで、来た」

「俺さ、気付いたんだ・・・俺が本当に好きなのはお前だ」

「え？」

「俺はお前が好きだ。お前しかいない。だから、箒」

「い、ちか」

「結婚しよう」

そして、喧嘩を乗り越え、夜景の見える丘で仲直り。さらにゴールイン。

ナインボールから流れてくる夢を見た一真は呆れて物が言えなくなった。何故ならば、彼女の夢の中は小学生向けの少女マンガ並に甘ったるい物だったからだ。

（胸焼けしそう）

（織斑一夏と食事を食べさせ合い、ベタなデートプランをこなし、些細な行き違いを楽しみ、最後には夜景の見える場所で仲直りしてキス）

(甘い。甘過ぎて吐く)

ナインボールを通して見えた夢に吐き気をもよおした一真は同居人から許しを得てトイレに駆け込んだ。

「酷い目にあった」

「篠ノ之さんの夢ってそんなに酷いんですか？」

「小学生並の妄想恋愛をしてる」

「Oh・・・」

言葉を無くした同居人を余所に夢の改竄を始める。初夢なのだから一富士、二鷹、三茄子だ。仲直りの場所を富士山にし、朝早くのホテル外で鳴く雀の代わりに鷹を配置し、デートの昼食は茄子尽くしにする。

これ以上ないくらい詰め込んだ。一回改竄することに吐いたが、なんとか10分で終わった。

「どうぞ」

「ありがとう」

同居人から淹れてもらったお茶を口にしながら一息つく。

「大変ですね」

「企画だからな」

「企画？」

「年越し企画だ」

「大変ですね」

「まさか吐くレベルとは思わなかった」

熱いお茶で舌を火傷しながら飲み干していく。湯呑みを置いた一真は適当にプレゼントはないかと量子領域を漁る。

「なんでこんなのあるんだ？」

『以前、籤引きであたったものです』

「そっか」

取り出したチケット。

静岡のミュージズメントパークのペア招待券。

期限は1月8日まで。

それを箒の枕元に置いた一真は先行きの悪さに頭悩めながら次へ迎う。

（次は、セシリアか）

プレゼント for マドカ

Side・オリジン

「なーんでオレがコイツに」

『いつまで愚痴を続けるつもりだい？非生産的だと思わないか？』

「人間は非生産的なんですーだからいいんですー」

不貞腐れた子供のように唇を尖らせたオリジンは未だに騒ぐ年長組を通り過ぎて家族の寝室に入る。中に入ると幼い男女が静かな寝息をたてていた。年越しパーティーとはいえ、目の前の子供達は未だに5歳に届くかない幼児。年長組に付き合うには体力がなさ過ぎる。

「おー、おー、可愛い寝顔なこと」

小さな子どもに抱き付かれる形で眠るマドカにオリジンは面白い物を見たと笑った。笑った後に表情を曇らせた。

マドカとオリジンは互いに同じ境遇だ。そこに特別な感情はなく、同情するつもりも、傷を舐め合うつもりもない。あくまで協力関係というドライな物だ。奴ら旅団のように共通目的も無ければ、家族のような繋がりもない。しかし、マドカだけが今の今まで自分と長くいる。組織の中ではボスに次ぐ長さだ。

『少しは関係を良好にする気になりましたか？』

「バーカかお前。俺は仲間なんざいらねえ、足手纏いなだけだ」

『君という男は』

やれやれと呆れるB・1に苛立ちながらオリジンは早く終わらせてやるとナインボールを展開する。

ナインボールの手が彼女の柔らかな髪越しに額に触れる。

『誰、ここ、何処？』

『へえ、これがあの女の……使えるの？』

『潜在的能力は確かです』

『つまり後は鍛えればいいと。ま、替えはいくらでもあるものね』

『な、なんですか？』

『とりあえず言語関係はたたき込みなさい。今日中よ』

『畏まりました』

『嫌、なにを……やめて！近寄らないで！』

（ああ、これは俺が来たすぐの頃か）

組織の非合法研究施設、その中でも比較的緩い場所にいたマドカは病院服のような一枚布を着ていた。何も知らないのか怯えるマドカを数人の研究者が捕らえると学習装置にくくりつけ、頭に巨大なヘルメット状の装置を被せる。配線が神経のように巡るそれが動き

出すと、

『ギャアアアアアアッツツ！！！！』

耳を塞ぎたくなるような悲鳴が最大音量で鼓膜に叩きつけられる。もしマドカが起きていたら「喧しい俎板娘！」と殴っていただろう。

高圧電流でも流したかのように大きく痙攣する少女を周りの研究者は汚い物を出しながら楽しんでた。明らかに人道に反した行いだが、誰も止めない。むしろカメラさえ回す輩さえいる。スコールさえそれを止めず楽しんでた。

口から泡を吹きだし、失禁さえしてしまうマドカを見る男達は忙しく手を上下にピストンさせる。その様に吐き気を感じたオリジンはコレが終わったのち、研究者一同を殺そうと考えた。そうでもしなければ汚い物を見せられた側としては我慢出来ない。

悲鳴が突然途切れると同時にマドカの体に汚らしい白い液体が付着する。生々しく、ドロツとした液体。生命を作る種と言えば聞こえはいいが、オリジンとしては殺意を増長させるだけで神秘も何も感じない。

場面が変わる。

今度は何処かの研究施設だ。

『もう、嫌だ・・・なぜ私ばかり』

そこに泣いたマドカがいた。

体中に傷を負い、血を流した彼女は暗い部屋で小さく泣いていた。

『居たぞ！ シリアルM、12だ！』

突然部屋に入ってきた男達。全員が組織の戦闘服を着こみ、両手でアサルトライフルを持っていた。

『さあ、おいで・・・大丈夫だ、怖くない』

戦闘員の間を縫って前に出て来た研究者を見たマドカのイメージが流れ込んでくる。

『ハハッ、やはり若い女はいいな！』

『嫌、ヤダヤダ触らないで！ 痛いのは嫌！』

『最初だけさ！ すぐに自分から腰を降りだすから安心したまえ！』

何処かの診察室だろうか。そこでマドカと数人の研究者がいた。場面を見る限り強姦現場のようだ。

『嫌！』

『っ！』

追い払うように振り払った手が研究者の顔を掠める。長く伸びた爪が研究者の老いた肌を深く切り裂く。

研究者は避けた頬を触り、自らの血を見ると次第に顔に怒りを浮かべる。

『どうやら前戯はいらないらしいな』

『や、やだ、ごめんなさい』

『もう遅い！この性処理玩具が！』

それから始まる行為にマドカは始終泣き叫んでいた。それさえ奴らの加虐心を擽り、愉悦を感じさせるとも分からずにただただ泣き叫ぶ。

機器のコードで体を縛って自由をなくし、首を絞めて苦しむ姿を楽しみ、メスや鋏で体中を切り付けて悲鳴に興奮を覚え、気絶すれば電気ショックを与えて無理矢理起こす。

行為は数時間以上続いた。全てが終わる頃にはマドカは声も上げ

られない人形のようになっており、白い液体と血で体を桃色に汚し、口からは自ら吐き出した嘔吐物と泡で汚れていた。

満足気に去る研究者と気絶するマドカ。その映像から元の映像に切り替わる。そこには目前にまで迫った研究者がいた。

『嫌だ！』

手近にあった薬品瓶が研究者の顔にあたる。さらに蓋が外れ、中身が顔を中心に飛び散る。

悲鳴と怒声が混在した叫び声上がる。戦闘員が慌ててライフルを発砲し、マドカは涙を流しながら器材の陰で身を丸くする。

『止めろ！まだISがあるんだぞ！』

その声に戦闘員が走りよる。

（捕まったら酷い事される。嫌だ、嫌！）

怯えたマドカは震える手で奥に奥に逃げる。そして、暗闇の中で安置されたISと対面する。

『捕まえた!』

誰かの手が足に置かれた瞬間、マドカの頭の中は真っ白となる。

『いやああああああっ!』

そして、全てが紅く染まった。

それからは全てが作業のように流れた。適性者として覚醒したマドカに首輪と呼ばれるナノマシンが打たれ、度重なる任務で人を殺すことになれ、男を殺す事に愉悦を覚え、オリジンと出会った。

『小憎たらしい男』

『自由を許された男』

『私と対等な存在』

『心許せる存在』

オリジンはそこで夢を見るのを止めた。

時計をみる。まだ数分しか経っていない。だというのに、まるで数時間映画を見たような疲れを感じる。

『中々に面白い過去だな、彼女は』

『俺には関係ない』

『女は性交するたびにああいう痛みがあるのか。中々面白い経験をしたな、オリジン』

『男だから分かん』

『感覚共有していたのか？』

ああ、君は童貞で処女だったね』

『だから男』

『なら分かりやすく。男に抱かれた——』

『やめろおおおおっ！』

『安心したまえ。世の中には同性愛者という』

『俺は女が好きなんだよおお！男に掘られる趣味はねえええええっ！』

『これで男に——』

『デメエ、スクラップにすんぞゴラァ！』

それから数分、B・1と本気で戦闘したが結局勝てなかった。

（とりあえず夢に一真でも出してやれ。あの父性の塊ならいいスケ
ープゴートだ）

夢の中で一真と平和に過ごすイメージを流しながら富士山、鷹、
茄子を流す。

笑顔を浮かべるマドカに満足したオリジンは何かプレゼントはある
かと適当な物を探す。

「・・・熊の、人形？」

突然現れたデフォルメされた熊の人形に首を傾げる。しかも、か
なりデカい。酒樽くらいに大きい。

『欲しそうにしました』

「お前、よく見てるな」

とりあえず人形を置いて部屋を後にする。次は――――だ。

「世界一周」

『行ってキュー』

プレゼント for セシリア

Side · 一真

「めんどくさいから同居人全て買収した」

『全員デート一回とリーズナブルな価格でした』

「退役したら商人になるか」

『花魁訛りマスターして犬耳な体を手に入れなければ』

「やめろ。本当やめてください」

そんなわけで部屋に侵入。

「あ、犀川さん」

「よう、来たぞ」

「セシリアならよく寝てますよ」

「薬盛ったからな」

ノーパソに倒れこむセシリアに2人で笑う。彼女は誰かとチャットでもしてたのか先程までずっと起きていた。それでは企画が遅れるため、同居人の手引きで睡眠薬入りのハーブティを飲ませたのだ。

「「ちょろいな」」

互いに楽な仕事だと握手した後にナインボールを展開する。

セシリアは夢の中では一夏ではなく、幼少時の頃を思い出して

いた。高速で流れていく映像が両親の死に差し掛かった辺りで介入する。

（さて、夢の内容は・・・）

夢を弄り始める。家族の団欒をメインにし、そこに初夢の必要項目を追加するという簡単な作業だ。

『ふふ、セシリーも驚くわね』

『ああ、やっと見つけたからね。これでセシリーも寂しい思いをしない』

『私達の家族、奪った相手には相応の報いを与えましょう』

『ああ』

夢を弄っていた中で何故か入り込んだ映像に首を傾げつつも作業を終える。

『プレゼント、プレゼント』

『こんなものがありました』

H・1が呼び出したのはイギリス旅行のペアチケット。それも何処かのホテルの宿泊券付だ。

『なんでこんなあんの？』

『この前の自衛隊の飲み会で行ったビンゴ大会で貴方が当てた物です』

『覚えてねえ』

『酔ってましたから。平時では考えられないくらい。好きなタイプを暴露するくらい』

『やめろおおおおおっ！古傷を抉るなあああああっ！！！！』

『貴方はああいう女性が好きなんですネ』

顔を真っ赤にして逃げ帰る一真に呆気に取られた同居人。そんな彼女達の背後でセシリアが寝言を立てる。

「私が、——さん……んにやむにや」

プレゼント f o r ——— (ドイツ)

S i d e ・ オリジン

「・・・死ぬ」

『たかが超々音速に情けない』

「変形したときは本当に死ぬかと思った」

『いいかい、君はいずれ世界を左右することになる。それがたかが超々音速に死にかけるとは』

「静止状態からマッハ12出しても死にかけるなとか、お前、オレをウルトラマンか何かと勘違いしてね？」

マジで内臓の形変わりそうになった。今日一日は固形物無理ぞ」

オリジンは辛そうに木の根に座り込む。顔色は青く、今にも吐きそうな様相をしている。

深夜の森は月明かりさえ届かず、今にも暗闇から何かが現われそうな不気味さを醸している。

ナインボールを展開して何とか先に進む。A I Cによる無振動の移動は楽ではあったが、無重力下にいるような浮遊感に溜まらず吐いてしまう。

B・1により渡された水を飲みながらフラフラと歩く。

数分だろうか。やけに長く険しい道を歩いた気がする。森の中に建てられた城が見えてきた。趣味の悪い、中世風な城だ。

「たしかここに二番がいるんだよな」

亡国企業実働部隊のN O. 2。

オリジンが来るまでの一年間で登り詰め、不動の地位を気付いた実力者。その実力はMを遥かに凌ぎ、最初の頃はオリジンさえ危うかった時もあった。

「あの不思議系天然娘、苦手なんだよな」

アチコチにしかけられた監視カメラや防犯装置を無力化しながら裏門を破って中に入る。数人の使用人が拳銃を引き抜くが、オリジンの姿を確認すると何事もなかったかのように仕事に戻っていく

「やはり裏門か慎重しく入るべきか」

『前は離れの屋根を踏み抜いての入室だったからな』

「その前は城門ぶち破ってのダイナミックお邪魔しますだったな」

『頭に血が上っていたな』

「オレを捨て駒にしようとした奴が悪い」

『あの男は存外にしぶとかったな』

「カラサワ、月光、ミサイル1ダースの直撃受けてんのにな」

『不死身とはああいう奴を指す言葉なのだろう』

近くにいたSPに声をかけて主人の居場所を確認する。ついでに老犬がくたばったのかもだ。

「あの方なら数時間前に就寝しました。大老はまだ部屋に」

「あー、C4足りねえわ。せつかく殺せるチャンスなのに」

「やめてください。泣きながら修理に来る職人を呼ぶ此方の身も考えてください」

「お前らだって主人は可愛い女の子の方がいいだろ」

「あの扉だって」

「組織も俺と老犬を天秤にかければいつか2人を離すかもよ」

「たしか地下に300ほどC4が埃を被っていました。そろそろ使わなければならぬんですよ」

「流石は執事長」

「お客様ほどでは」

互いにそれ以上喋る意味もないと分かると仕事に戻る。執事長は自らの主が爽やかな朝を迎えられるよう召し物を準備し、オリジンは全ロリコンの敵を今度こそ殺すために。

『しかし目的は忘れぬよう』

「老犬殺してチビに夢を与えて帰る」

『なら問題なし』

離れの書斎の柱全てにC4を設置したオリジンはその足で最上階の寝室に向かう。石畳の長い廊下。明かりは灰暗いランプのみ。まるでタイムスリップしたような気分だ。この城にはLEDという概念がないのだろうか。

「すげえ、なにこのお姫さまな部屋」

豪華な調度品の数々を値踏みしていたオリジンは中央に置かれたベッドに気付く。巨大なベッドだ。クイーンズサイズの倍の倍、累乗はありそうなベッド。巨大なプレハブ並の大きさに最初は気付かなかった。

『デカいな。中で組み立てたのか？』

「だろうな」

フカフカのベッドに這いつくばりながら進む。柔らかなベッドは進むたびに手や膝を包み込んで道を妨げる。内心で愚痴り、中心で寝る少女が身動きする度に冷や汗を吹き出しながら身を伏せた。

『A I Cを使えば早いぞ』

まさか今になって言うとは。

「後少しだ」

『君も彼と同じくまだ子供だな』

柔らかなベッドに深々と眠る少女。持ってきたランプにより照らされた金砂の癖毛を見つめる。肩口で切りそろえられた髪は外に跳ね、微かに花の香りがする。女の匂いだ。

ナインボールの冷たいマニピュレータ越しに手触りのよい髪の質感を感じる。

『貴方は、誰ですか。——は貴方を知りません』

『・・・』

『歳の近い方が居たから話し掛けましたが、寡黙なのですか？それとも————を嫌っているのですか？』

『気安いぞ。話し掛けるな』

『ああ、これが噂に聞く厨二病という奴ですか』

『ちゅうに？なんだソレ？』

『貴方も右手が疼くと言うのですか？』

『右手？心臓なら偶にあるが、なんで右手が疼く？義手か何かなのか？』

『心臓が疼くとは。これは重度な厨二です。背中が痒くなってきます。————は誓ってこのようにならぬと大老に誓います』

『喧嘩売りたいだけだな、三下』

『三下とは失礼です。————は余りの言葉に血を頭に昇らせます。————はランク2です。大幹部ですとドヤ顔で無い胸を張ります。……胸がないくらい。————はまだ成長期です』

『テメエで言って泣いてんじゃねえよ俎板チビ』

『撤回を要求します。————は未だ成長段階で決して俎板ではありません』

『あーはいはい。そうですねー、成長段階ですねー』

『貴方、————が本気出せば塵も残らないのですから敬うべきです』

『残る胸が無い奴に言われてもな』

『頭に来ました。怒髪天を突くという奴です』

あの苛立つ人とあったのはそれが最初でした。幹部会で紹介されるまで、自分が降格するなんて思いもしませんでした。

————は完璧にこなしてきました。

受けた任務は確実に処理し、生存率が絶望的な状況でも生還もして来ました。自信はあります。

大老が誉めてくれる度に嬉しかった。今までも、これからもそうだと思っていました。

あの人が来るまでは。

『今日から幹部会に席をおくオリジンだ。ランクは1。————は降格だ』

『何故じゃ！ワシの————は組織で最高の筈じゃ！』

『彼はこの1週間で4つのISと多数の国家最高機密を得た。組織の護衛の際にも被害を出さず、また敵対組織も既に2つ相手に多大な痛みを与えた。』

確かに――――は優秀だが、彼はその上に行く。これは決定だ』

『つく！』

（――――が、降格）

初めて受けた大老からのお叱りとお仕置きは今でも夢に見ます。その時は泣きながら縋りました。――――には大老しか居ない。大老に見放されたら、――――には何も残らない。

辱めも耐えました。苦痛も、苦悩も、見放される恐怖に比べれば大したことはありません。ただ、――――を辱める執事長の顔は辛かったです。あの我が子を痛め付ける親のように苦渋に塗れた顔は見ていて辛く、また何故そんな顔をするのかとも思いました。

（全て、あの人が悪い）

――――からランク1の席を奪った憎き男が。

『嫌われてるな』

『普通ならあの爺を恨むだろ。てか洗脳されてるって気付かないもんかね？』

『皆が皆、君のように我が強いわけではない』

『てか未体験って俺だけ？』

『余りそういったことは言うべきではないな』

うなされ始める————を見下ろしたオリジンは頭を乱暴に掻く。

『とりあえず波風立たないようにするか』

下手に任務の邪魔をされては迷惑だと好感度がこれ以上下がらぬよう夢に介入する。

『貴方は、誰ですか？』

『私は、君の本当のお父さんとお母さんだよ』

（ノイズが・・・別にいいか）

何処かの夫妻と出会った記憶を呼び起こしてしまったが、些細な事だとすぐに作業に戻る。

プレゼント for 鈴音、シャルル、一夏、花子、秋葉、簪、麻耶

Side・一真

「本気のレシピ見せてやんよ」

『貴方は何を料理するのですか？』

「話の展開？」

『ハードルを上げますね』

「飲み会の席とかでお前は弄られキャラだからって無茶ぶりして話盛り上げようとする奴なんなんだろうな。自分の無茶ぶりで笑いとれてるつもりなのかな？」

『話の種作りですよ』

「安酒飲みながらの宴会嫌い。飲み過ぎるから」

『暴走してましたね』

「さて、着きました。まずは凰の部屋だ」

部屋の中に入る。流石は女子の部屋だ。健康・元氣・勝気を心情

にしているだけのキャラではないらしい。室内はしっかりと片付けられているが、それでも本人達の性質をよく表している。実はそういった物が大好きな一真は役得な企画であったりする。

（ほうほう、なるほど）

部屋に置かれた人形、小物、本棚の位置、それぞれの色。特に動かした形跡の無い物を見ていると少しだが家主の性格や心理状況が分かる。勿論、信頼性は低いがそれでも判断材料にはなる。

ひとしきり部屋を楽しんだ一真は早速鈴音の夢の中に侵入する。彼女は今、家族と笑い合っている最中であつた。小肥りな父親に綺麗な母親はエプロンを着込み、カウンターには高そうなスーツを着た老女が朗らかに笑っている。まさしく幸せな風景だ。

しかし、現実とのギャップが無ければの話だ。

鈴音の両親は離婚していた筈である。再婚しているという情報もなく、定食屋も畳んで父親と中国に行ったと聞いた。

夢の中は幸せだ。だが、幸せだからといって覚えていて得かと言われれば、それは本人の精神状態に左右される。

考え方も、価値観も、全てが同じなんてあり得ない。人はそこまですべて単純な作りではない。話自体、80%は通じていないのが常だ。

『夢を忘れる・・・そうだな、幸せな場所とか都合の良いの以外忘れることは出来るか？』

『可能です。ただし、そうした場合、思い出す危険は通常より高くなります』

『別に構わない。新年くらいは幸せに居ても罰はあたるまい』

『了解』

H・1が夢を書き換えをしている間、一真は何か良いものはないかと量子領域のリストを確認する。

『・・・あれ？なんか、映画のペアチケあるんだが？買った覚えないんだけど？』

『この前、懸賞であたりました』

『してない。俺、懸賞とか信じないし』

『いえ、私が懸賞したら当たったのです』

『お前なにしてんの？！AIが懸賞とか斬新過ぎてビックリだわ！』

『好奇心旺盛ですから』

そんなわけで映画のペアチケットと幸せな夢をプレゼントした一真はそのまま次の部屋へ向かうのだった。

『鈴音、男は信用しちゃダメよ。お婆ちゃんを見なさい』

『おばあちゃん、何で泣くの？痛いのか？』

『お爺ちゃんに裏切られたからだよ』

『さあ、ピッチ上げるぞ』

『次はシャルル・デュノアと織斑一夏ですね』

『部屋には簡単に侵入出来たんでさっさと終わらせるか』

室内で寝続ける一夏とシャルルに一真は凝った肩を解すように大きく動かす。

未だに相部屋だが、この学園には1つ屋根の下といった常識はないのだろうか。いや、女子寮に男を2人住まわせている時点で無いのだろう。

『まずはシャルル——』

『あん、ダメ、激し!』

『もうグチヨグチヨだな、シャルロット』

『おにい——』

「酷い目にあつた・・・夢に出そう」

「トイレ！」

『まさか元旦から一真とあのような夢を見るとは』

「殴り起こしていいよな？ なぁ？」

『企画倒れますので我慢してください』

「ダメ、一夏ぁ・・・えへへ」

『次は織斑一夏ですか』

「殺意がヤバイ」

我慢しながら夢を弄る。夢に介入するため男女の行為をこれでもかと見せ付けられた一真は顔面蒼白になりながらも仕事を遂げる。

トイレに籠もり、数分間吐き続けた一真は今後を考えるとやるせない気持ちになる。

『シャルルのプレゼントはアレだ、コンドームでいいだろ』

『サンタらしくないので却下します』

『こんな淫乱娘の所に来るサンタいるのか？』

とりあえず適当に呼び出した何処かのレストランのタダ券を置いた一真は手早く一夏の夢も弄る。一夏は何故か千冬との日常を夢で

見ていて。

『コイツにはコレしかないだろ』

『スケジュールですか』

『修羅場にならないようにとのサンタからの細やかなプレゼント』

そんなわけで次に移動した一真であった。

「あー、簪はよく寝てたから楽だった。金がかかったけどな」

『まさかDVDボックスを持っていたとは』

「いーじゃん、二十歳でアニメが好きでも」

『特に問題はありません』

「アニメとかマンガが好きだからガキ臭いとかオタクとかさ、そっちのがガキ臭いつての。小学生が自分とか周りと違うから遠ざけるのと一緒にだろうが」

『責めてません』

「だいたい、なんで他人が俺の好み否定するのか分からん。童貞ーとか、彼女なしーとかさ。恋愛に興味ないし、好きな人出来ないだけなのに勝手にこじつけて気持ち悪いってさ」

『経験があるのですか？』

「うっさい」

『拗ねないでください。確かに恋愛をしたいから相手を作る。結婚したいから相手を作るのは間違っはいますね』

「気に入ったから付き合うつて嫌だもん」

『貴方は他人に興味がないくせに他人を気遣いますね』

「いいじゃん、別に」

窓辺で拗ねる一真を慰めるH、1は多少面倒だと感じていたが、それでもH、1は見捨てずに励ます。

「とりあえず秋葉さんの終わらせ——」

「なーにしてんのかーずまきゅん」

「酒臭え」

後ろから抱き付かれた一真はキツイアルコールの臭いに顔を顰める。手を振りながら後ろを振り返るとそこには酒瓶を片手にした斎藤がいた。

「飲んでますね」

「飲んで悪いー？」

「いや、俺も飲みたい気分ですよ」

「ここにるのが理由かい？」

「ええ、初夢サンタだそうです」

「あちゃー、寝てれば良かったかな？」

「秋葉さんが対象ですけどね」

「秋葉ならもう寝てるよ。潰しちゃった♪」

斎藤に引っ張られるがまま中に入るとベッドで丸くなる秋葉がいた。夜風の寒さに身を震わせ、シーツを引っ掴んで頭から被る。少しずつ温かくなるシーツに幸せを感じているのか顔が綻んでいる。

「夜ばいするならどっか行こうか？」

「問1、秋葉さんの寝相の悪さを答えよ」

「解1、最悪に尽きる。特に抱きつこうものなら脊髄を圧し折りにくる」

「問2、今まで夜ばいをかけた男の末路を答えよ」

「解2、全員病院送り」

「問3、俺の顔を一言で表せ」

「解3、泣いてるな。悪かったよ、ごめんな一真」

以前、秋葉さんを犯して弱みを作ろうとしたどっかの集団が次の日には赤子に壊された人形のように病院に搬送されたのは記憶に新しい。それを出汁に秋葉さんを今の地位から引き摺り落とそうとしていたが、ISの映像から彼女の無罪が立証。さらに彼女の余りに

も常識外れな寝相が伝説を作るのだった。

「つかしいなー。私とか如月は平気なんだけど」

「死にたくない。まだ、死にたくない」

「分かった分かった」

斎藤に手を握って貰いながら何とか夢を弄る事が出来た一真は猛獣から逃げるようにその場を逃げる。プレゼントとして何処かの温泉旅館のチケットを置いて。

「温泉旅館？ またなんで？」

「クイズに正解したら送られてきました」

グッスリ眠る麻耶への初夢とプレゼントを終えた一真は一休みと寮の屋根に座り煙草に火を点けた。時間は既に3時を過ぎ、夜明けまで後数時間しかなかった。

「何してるの、かずー？」

「お前こそ」

「ふふ、月見しようかなーって」

突然隣に現れた少女に一真は煙草の煙が向かぬよう位置を変える。しかし、構わないとばかりに少女は一真を背中から抱き締めた。

「んもう、煙草の煙が好きっての忘れたの？」

「忘れましたー」

「んもう」

後ろから抱き付いていた少女、花子は一度身を離すと一真の横に座りなおす。

「いい、月だね」

「ああ」

「こんな夜だったな、そう皆でクリスマスを祝ったのも」

「ああ」

「研究漬けだったお父さんがさ、サンタの格好して家の煙突から入ってきたの。笑えるんだ、その煙突がクリスマスの前日に作ったんだ」

「ああ」

「お尻が破けた上に燃えた薪の上にダイブ。お尻に火を点けたまま研究所中走り回ってお風呂まで行ったの。したら、お母さんが入って大騒ぎ！みんな集まってサンタさんがもうボッコボコ！それで私の前に来たときは引っ掻き傷とか青痣だらけだったんだ！」

「ああ」

「プレゼント渡したらそのまま玄関から帰ってた。次の日にお父

さんに自慢したら、お尻に氷嚢当てながら聞いてたの」

「ああ」

「本当に、楽しかったな・・・楽しかったんだよ」

「ああ」

互いに月を見上げる。語る事よりも、ただ傍に居ればいいと2人の背は語る。

「・・・・・・・・どうよ、私の話術。泣けた？ねえ、泣けた？」

「ああ」

「聞けよ」

「いだだだっ」

上の空にしか返事を返さない一真を見兼ねた花子は彼の耳を引っ張る。

「まったく」

「おい」

「なんだ？」

本気で怒っているのか口調が刺々しくなる。

「今すぐ寝ろ。今なら、きっと良い初夢が見れると思うぞ」

「臭いな」

「うるさい」

「ふん、しかし、物は試しだ」

ひょい、と下のベランダに飛び移った花子を見送った一真は重く
なった腰を持ち上げる。

「ハッピーニューイヤー、一真」

「明けましておめでとう、花子」

「いい感じだった。いい、感じだったんだ」

『今回の目玉ですね』

「あれだけ見事なオチなら、誰も文句はないと思ったんだよ・・・」

『避けては通れない問題は必ずあります』

「年始早々、命懸けとか」

『主人公に相應しいですね』

「
・
・
・
」

「
・
・
・
」

「
・
・
・
」

「
・
・
・
」

寮 監 室

『入りましょう』

（嫌だ、死にたくなアアアアアアアアアアアアアアアアアアいつっっ!!!!）

勝手にナインボールを展開したH・1により室内に入った一真は
涙目で叫ぶしかなかった。そして――

「それで、貴様は寮監の部屋で何をしている」

起きた千冬に敢えなく御用となった。

まず、一真はゴミ屋敷手前の部屋をA I Cを駆使して音もなく移動した。これは問題ない。

次に、一真は薄汚れているシートに包まって酒瓶を抱き枕にする千冬の枕元まで近付いた。これにも問題ない。

それから、息を殺して手を伸ばした。気配さえ断ったのだから何処にも問題ない。

そして数センチにまで近付いた。これがいけなかった。千冬は突然の温度変化に目を覚ました。問題は、彼女が人間を辞めている所だろう。

一真は正座をしながら千冬の説教を聞いている。既に涙目で、こんな企画を立てた輩に恨み言を積もらせている最中だ。

「まったく、今は珍しい奴だと思っていたが貴様も男なのか？」

「すみません」

「確かに貴様がここに住んでいるのは確かだ。だが、だからといって女の部屋に無遠慮に入っているという理由になるか？」

「なりません」

「何故忍び込んだ？」

「・・・」

「貴様のように慎重な男がどうして？」

「・・・」

「まったく」

何も答えようとしない一真に千冬は頭を悩める。一真の性格は一年も付き合えばそれなりに分かってきたつもりである。こういった自らにのみ非があるとき、一真は何も喋らず非難全てを受け入れる。潔いといえば聞こえは良いが、ようは子供が拗ねて黙りを決め込むのと変わりはない。

「拗ねるな」

「拗ねてません」

「いいや、拗ねている。」

「まったく、少し付き合え」

2人の中に乱暴に置かれた酒。そして、投げ渡されたコップに一真は視線を黙って向けた。

トクトク、と酒が満たされていくコップを見つめながら一真は何も考えぬまま限界まで接がれるのを待つ。

「まさか、教え子とこうして飲む機会が出来るとはな」

「・・・」

「二度目の高校生活はどうだ、一真」

「別に」

舐めるように少しずつ酒を飲む一真は水面に映る千冬を見る。

「初めは憐れにも思った。ガキと肩を並べてお勉強ごっこをするお前を」

「・・・」

「だが、同時にありがたいとも思った」

「・・・」

「お前のおかげで一夏は少しずつ成長している。まだまだ甘えてばかりだが、それでも悪くない状況だ」

「・・・」

「お前には感謝しているよ」

酒を一気に煽る。コップ半分を飲み干した千冬は熱くなった息を吐き出しながらコップを見つめる。

「とりあえず、今は飲め。私の奢りだ」

プレゼント for ラウラ

覚束ない足で廊下を歩く。その後、千冬が潰れるまで付き合った一真は酒瓶を4本空けるまで解放されなかった。

酒に強いという自覚のある一真も途中休憩も、酒のツマミも、水もないまま飲み続けた事で意識が朦朧としてきた。

千冬が一真よりも強いというわけではない。むしろ彼女は酒に弱い部類だ。慣れもしない日本酒を飲み、一真の隠し持っていた焼酎を飲み、取って置ききのワインまで飲んだ。彼と好みがあったせいかがクゴクと酒を楽しんでいた彼女は遂に弟にも見せられないくらいの醜態を見せた。

寝間着のジャージを脱ぎ、シャツさえ脱いだ彼女は下着一枚で酒を飲んでいた。いくら酒癖が悪くてもマズいものが世の中にはある。嫁入り前の女が軽々しく男に素肌を曝すものではない。そう一真は自重するよう嗜めた。

「ならお前が貰えばいい」

馬鹿笑いしながら酒をラッパ飲みする女を相手にしていたら名前の件などどうでもよくなった。本当なら少し落ち着いたあたりで言おうとしたが、飲むスピードが早過ぎて言いだせなかった。ヘタレていた一真にも問題はあった。

千冬が酔い潰れ、片付けをした一真が部屋を出たのが朝方の4..
30。残り一人とはいえ時間をかけ過ぎた。

「おかえり、兄」

部屋には宴会騒ぎの片付けをするラウラがいた。ゴミ袋に散らかったゴミを詰め、眠そうな目で帰ってきた一真を見つめている。

「まだ起きてたのか」

「・・・兄と、初日の出が見たかったのだ」

初日の出。

たかが日の出に何か価値があるのかと思いながら一真は水を飲む。血糖値が上がった体は摂取された水を嬉々として吸収し、次も次もと喉の渇きとなって催促してくる。

「嫁が言った。初日の出は、家族や好きな人と見るのが最高だと・・・」

家族と言われてまず思い浮かんだのはラウラだった。肉親も、兄弟も、祖父母も、親戚もまだ元気だというのにまず彼女が思い浮かんだ事に背徳感を感じる。いつから自分はこんな人間になったのだ

ろうか。

「一緒に、見よう」

幼子が親の手をつかむように、ラウラは一真の手を弱々しく掴む。酒で火照った手でさえ彼女の体温は高く感じた。

「ああ、いいぞ。だけどその前にお前は少し寝ろ」

「いや」

「起こしてやるから」

駄々をこねる子供のようなラウラの背を押してベッドに向かう。フカフカのベッドに腰を落としたラウラは落ちてくる瞼を必死に持ち上げる。余程寝たくないようだ。

「どうした、何かあったのか？」

「1人になりたくない」

ラウラの言葉が理解出来ない。

「俺が居るだろ」

「起きたら、また1人になってしまふような気がする」

騒ぎの熱にやられたのだろうか。やけに他人を求めるラウラにかしくなり、ついつい笑ってしまう。

「なら手を握ってやるか？」

「ううん」

子供のように首を横に振る。

「なら頭を撫でてやろうか？」

「ううん」

また、子供のように首を振った。

「なら絵本がいいか？」

「ううん」

悪戯心から子供扱いをしてしまう。寝呆け眼、少し垂れた涎、そして、緩んだ手。我が子が居ればこんな暖かい気持ちになれるのだろうか。

「一緒に寝よう」

「」

絶対俺の娘は15で親と寝たいとは言わせない。言うなら「デメエの下着と一緒に洗濯機は嫌だ」だ。

S i d e · O u t I n チ ャ ッ ト ル ー ム

「「疲れた」」

互いに自らの席に腰掛けて深く息を吐く。

互いの手には並々と継がれた紅と黒のワインが少しだけ零れ、手を汚す。

「それで、どうだったんだよお前の方は？」

「マッハ12の世界は最低だな。そっちは？」

「人外と酒飲み」

「「はあ」」

互いのグラスを煽る。最高級のワインなのだろうか。蒸せるような濃い薫りにアルコールより先に酔いがガツンと頭に来る。

「こっちは人外の嵐だ。日本刀でナインボールに傷付けるわ、音速化でこっちに接敵するわ」

「ナインボールの装甲に近付けた合金を切り裂いた侍娘なら居るぞ。しかも、木刀」

「「はあ」」

「こっちには快樂主義者に分裂した奴が居たよ。特に前者はやバかった……両刀使いだった。てか両刀使いが携帯で予測検索ででやがった」

「やめろ！誤解を受ける！」

「「枯れた人間なのにな」」

「こっちは俺とやってる夢を見せられた。吐いたよ」

「大変だな」

「「はあ」」

「こっちは爺さんが居なかったら泣いてたわ。なにあの人。いい人過ぎる」

「くれよ、その人くれよ。代わりに一夏やるから」

「いらねえよ、姦しい」

「「はあ」」

「そうだ、遅くなったが明けましておめでとう」

「ああ、ハッピーニューイヤー、一真」

互いのグラスをぶつける。液体が跳ね上がり、互いのグラスに落ちて混ざる。

「今年中には片付けたいな」

「だな」

未解決事件 「明けておめでとう」(後書き)

一夏

「あけて」

ヒロインズ

「おめでどうございます!」

一真

「もっちゃ、もっちゃ・・・おう、おめでどう」

一同

「挨拶しろ主人公」

主人公&ヒロイン 準備中・・・

一真

「もきゅもきゅもきゅ（磯辺）」

ラウラ

「むきゅむきゅむきゅ（餡子）」

オリジン

「ごきゅごきゅごきゅ（きな粉）」

M

「もそもそもそ（醤油砂糖）」

一夏

「飛ばすな」

箒

「だな」

鈴音

「はいはい、始めるわよー！」

一真&オリジン

「ガツガツガツガツ! (お汁粉)」

ラウラ&M

「もきゅもきゅもきゅ! (栗金遁)」

鈴音

「食うのを止めろ!」

一真

「やめられない」

オリジン

「止まらない」

ラウラ&M

「あいえーす」

4人

「ガツガツガツガツ (お節)」

鈴音

「だぁゝゝゝ!」

一夏

「は、始めるか」

箒

「だな」

一真

「説明しよう！準備中とは、話をするための片付けもあるが」

オリジン

「オレ達が好き勝手食いまくるための準備でもある」

箒

「今回はどういった時間軸になるのだ？」

一夏

「話を見るかぎり大晦日から元旦、つまり冬だな」

鈴音

「名前が出ないような奴がオリジン側にかなり居たわね。つまり、アレは今後出て来ると」

セシリア

「それよりも気になることがあります」

シャルル

「お兄ちゃんのえっち！ひ、人の夢見るなんて！えっち！」

一真

「どう考えても」

オリジン

「アレはお前がエロいだけだ」

一真&オリジン

「ねえ」

ヒロイン

「あの伏線はいつ回収するのか！」
プレゼント

鈴音

「話を聞かぎり一夏と2人きりになれるみたいだし（ヒソヒソ）」

セシリア

「それもそれぞれが違う場所（ヒソヒソ）」

箒

「これは、進展のチャンス！（ヒッソオオオオオ！）」

ヒロインズ

「どうなんですか！」

一真

「気分と読者の声と何か特別なこと合ったらな」

オリジン

「てか、本当なら冬に渡したものが今お前らの手元にあるわけないだろ」

一真&オリジン

「ねえ」

ヒロインズ

「そこをなんとか！」

一夏

「餅余ってるか？」

M

「お前にやる餅ねえから！」

ラウラ

「餅はないが代わりにお雑煮があるぞ」

一夏

「サンキュー（ズズッ）」

M

「セシリアの手作りに変えてやったがなあ！」

一夏

「¥©¢%&@☆◇※▽∴♂」

主人公&ヒロイン 片付け中・・・

セシリア

「そういえば、話の中にいくつかかかる部分がありましたわね」

オリジン

「————（ドイツ）以外の面子はめんどくさくなるから端折った」

一真

「同じく」

一真&オリジン

「反省はしない」

セシリア

「そうではなく！夢ですわ！それにオリジンさんの方で出てきたのは——」

オリジン

「おっと、流石にバレバレでもそれ以上は喋らせないぜ」

セシリア

「つく！」

鈴音

「所々でおかしなの盛り込んで来たわね。セシリアは分かるけど、他はどうなの？」

一真

「伏線だ。覚えとくと後々幸せになれるゆ」

箒

「セシリアは家族、鈴は祖母、Mが先輩」

一真

「追加するなら夢の会話が一番の伏線だ」

オリジン

「全てが本編は伊達じゃないぜ」

今回の舞台裏はここまでとなります・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3497s/>

いんふいにっと・すとらとす

2012年1月9日01時50分発行